
遊戯王GX～ノーバディ・レコード～

ネイビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GXノバディ・レコード

【Nコード】

N8336Q

【作者名】

ネイビー

【あらすじ】

デュエルモンスターの精霊が見えるユウは家族のイナと共にアカデミアに入学した。そこで出会った精霊の見えるルームメイトで親友の「シゲル」、記憶喪失の少女「ツバキ」の2人。そして迫りくる敵 時空管理局と新たな仲間とライバルたち 始まった戦いの先で見る『世界の矛盾』の正体とは!?

キャラ紹介

せいがゆう
聖牙夕

愛称：ユウ

デッキ：【スピリット】

フェイバリットカード：【八岐大蛇】
ヤマタノドラゴン

容姿：短い焦げ茶の髪に青い目。背は翔より低い
幼いころに両親を亡くし、一人で生きていた。その為か差別、いじめ、孤独を嫌う。一人称はボク。誰とでも平等に接する。

だが、キレル（通称『処刑モード』になる）と一人称はオレになり
気性が荒く、デッキも普段使わない【異次元デッキ】になる。
精霊は因幡之白兔いなはのしろうさぎの『イナ』。

イナ

ユウの精霊。因幡之白兔だが杵は持ってない。よくユウの肩や頭の上にいる。一人称はオイラ。

つめのしばき
姫野椿

愛称：ツバキ

デッキ：【マジシャン】

フェイバリットカード：【闇紅の魔導師】
ダークレッド・エンチャンター

容姿：翔より少し高い身長で長い白髪。

人見知りか激しい少女。大抵オドオドしているがデュエルする時だけ別人になる。何かの目的の為にデュエルアカデミアに入学するが、その真意は不明。

精霊は闇紅の魔導師の『ダーク』。
ダークレッド・エンチャンター

ダーク

ツバキの精霊。闇紅の魔導師。ダークレッド・エンチャンター 人見知りのツバキのサポートなどを

する。精霊界にも詳しい。

獣斬繁じゅうせんむら

愛称：シゲル

デッキ：【剣闘獣】グラディアルビースト

フェイバリットカード：【剣闘獣ガイザレス】グラディアルビースト

容姿：三沢ぐらいの身長で黒髪に黒いバンダナをしている。

基本的に冷静で周囲をよく見るタイプ。あまり笑顔を見せることもなく、相手を圧倒するため冷酷と呼ばれる。だが人当たりも良く面倒見などもいい。何か過去にあったらしい。ユウと相部屋で、初日で意気投合した。

精霊は剣闘獣ベストロウリーのウリイグラディアルビースト

ウリイ

シゲルの精霊。グラディアルビースト 剣闘獣ベストロウリイ。あまり喋らず、一人称も『

我』と古い風貌をしている。唯一シゲルの過去を知っている。

キャラ紹介（後書き）

どうも、ネイビーと申します。

他サイトでは銀猫という名前で活動していますが、このサイトにはもう銀猫という方がいるので以前使っていたネイビーという名前でいきます。

第一話は出来次第投稿します。

プロローグ（前書き）

どうも、ネイビーです。

思いのほかプロローグが長くなりました。グダグダ感が漂いますがどうかよろしくお願いします。

ではどうも〜

プロローグ

???? side

ここはデュエルアカデミアの受験生準備室。
そこにいるのは焦げ茶色の髪の少年 聖^{せい}牙^が夕^{ゆう}だ。彼はこの会場で
実技試験を受けることになっているのだが 目の前の状況をどう
しようかと考えている。

「離して!!!」

「そういふなよ嬢ちゃんよ」

ガラの悪い3人組に絡まれている少女がいた。しかも4人ともデュエルディスクを腕に着けていた。するとユウの方にウサギがちょこんと座った。

『どつするの?ユウ』

「見捨てるわけにはいかないよ、イナ」

ウサギの言葉にユウはそういふと4人の元へ向かった。

side Out

??? side

私は今日この会場でデュエルアカデミアの実技試験を受けに来ていた。だが目の前には明らかに不良の3人組が自分をナンパしてきた。

「わ、私もう順番なので！」

「いいじゃねえか」

「ひっひっひ…まあ、答えは聞かないけどな」

人見知りの自分はこの3人が悪魔の様に見えた。そして

「はい、そこまで」

その後に見えた少年が英雄に見えた。

??? side Out

3人称 side

不良の3人組の元に見えたユウを見た不良はユウを見ると少し青筋が浮かんだ。

「ああ？何だ…ガキか…邪魔だ」

「あ、そう。じゃあ行こう」

ユウはそう言って少女の手を掴んで立ち去ろうとした。が、その前に残りの2人の不良が立ち塞がった。

「おいガキ。そいつを置いて行け」

「嫌だ。それに僕もこの子ももうすぐ順番なんだ」

《受験番号91番聖牙 夕、92番神谷 龍、93番姫野 椿はデュエルリングへ来なさい》

ユウの名前が呼ばれた、が不良の3人組が邪魔で行けない。そこでユウは

「先に行つといて」

そう言って少女をデュエルリングへ行くように促すとデュエルディスクを構えた。

「で、でも」

「ガキが…調子乗るんじゃないよ!!!」

3人組の内、気性の荒らそうな一人が構えるのを見て少女は慌ててその場を後にした。

「じゃあ、時間が無いから行くよ」

三人称 side Out

少女 side

「私が君の実技を担当します」

デュエルリングへ着いた私はそこにいた試験官と戦うことに

「よ、よろしくお願いします!!」

「よろしく、では……」

「「^{デュエル}決闘!!!!」」

少女LP4000 / 試験官LP4000

お互いにディスクを起動させ、5枚引いた。そして試験ルールとして受験者が先行だ。

少女のターン

「私のターン！ドロー！！」

少女はカードを引くと手札を確認した。そして

「手札からマジシャンズ・ヴァルキュリアを守備表示で召喚！カードを3枚伏せてターン終了！！」

マジシャンズ・ヴァルキュリア

効果モンスター

星4 / 光属性 / 魔法使い族 / ATK1600 / DEF1800

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

相手は表側表示で存在する他の魔法使い族モンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

少女 手札2枚。場マジシャンズ・ヴァルキュリア 伏せ3枚

試験官のターン

「私のターン、ドロー！ 私は手札から二重召喚デュアルサモンを発動。効果によりこのターン2回通常召喚が行える。効果によりソイツ、そしてド
イツを召喚してユニオン！！」

デュアルサモン 二重召喚

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

場に現れた2体の顔の無いデフォルメのモンスターは合わさるが、何も変わらない様に見える。

ドイツ

ユニオンモンスター

星4 / 地属性 / 天使族 / ATK 1000 / DEF 200

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「ソイツ」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、

装備モンスターの攻撃力は2500ポイントアップする。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。)

ソイツ (+ドイツ) ATK2500 / DEF0

「ソイツでヴァルキュリアに「威嚇する咆哮を発動！」クッ…この

ままターンを終了する（雰囲気が変わった…？）

威嚇する咆哮

通常罷

このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

試験官は先程の始める前と今の少女の雰囲気が違うことが気になっていた。始める前はオドオドしていたが今はハッキリとしつかりした手つきでカードを使用している。

少女のターン

「私のターン…ドロー！」

少女が引いたのは自らのフェイバリットカードであるアレだった。

「私はマジシャンズ・ヴァルキュリアを生贄に、ダークレッド・エンチャンター闇紅の魔導師を攻撃表示で召喚！！」

『やっと出番か…』

そうダークレッド・エンチャンター闇紅の魔導師は呟きながらフィールドに現れた。だが試験官も周りにいた人たちも闇紅の魔導師が喋ったのに気付かなかった。

ダークレッド・エンチャンター
闇紅の魔導師

星6 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK1700 / DEF2200

このカードが召喚に成功した時、

このカードに魔力カウンターを2つ置く。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。
1ターンに1度、このカードに乗っている魔力カウンターを2つ取り除く事で、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

「更に召喚成功時、魔力カウンターを二つ乗せる。そして魔法カードデュアルサモン二重召喚を発動！そして魔法カードを発動したことにより闇紅の魔導師エンチャンターに魔力カウンターを一つ乗せる！そして見習い魔術師を召喚！！！」

見習い魔術師

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK 400 / DEF 800

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。

このカードが戦闘によって破壊された場合、自分のデッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター1体を自分フィールド上にセットする事ができる。

「召喚成功時魔力カウンターを闇紅の魔導師ダークレッド・エンチャンターに乗せる！そして手札から魔法カードサイクロンを発動！！このカードの効果により装備カードとなっているドイツを破壊！！！」

「なんだと!？」

装備カードとなっているドイツが消えたことによりソイツが元々の攻撃力である0に戻った。

「さらに魔法カード発動により闇紅の魔導師に魔力カウンターを一つ乗せる！ダイクレッド・エンチャンター闇紅の魔導師は魔力カウンターにより攻撃力が上がる！よって攻撃力は――」

ダイクレッド・エンチャンター
闇紅の魔導師 / ATK 3200

「攻撃力3200だと!?!」

「バトル！見習い魔術師でソイツに攻撃！その時伏せカードマジシヤンズ・サークルを発動!！」

マジシヤンズ・サークル

通常罫

魔法使い族モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

お互いのプレイヤーは、それぞれ自分のデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚する。

「クッ…私のデッキに魔法使い族はいない…」

「私は効果によりデッキからブラックマジシヤンガールを特殊召喚!！」

「……え!?!」「」「」「」

「うわあああああ!!!!!!!!!」

試験官 / 16000

「ありがとうございました」

「いつつ……所で最後に残ったカードはなんですか？」

試験官がそう言いながら立ちあがると少女は、デュエルディスクから最後の伏せカードを取り出した試験官に見せた。

「聖なるバリア・ミラーフォースですか……どの道私は負けていますか。いいでしょう……実技、そして筆記の点数は……十分合格点に届いてます」

「ホ、ホントですか!」

少女は試験官の言葉に喜んでいた。だが試験官は少女はまた少しオドオドしているように見えるが、気にしないでいた。すると他の受験生が騒いでいた。

おい! クロノス教諭がデュエルするらしいぞ!!

なに!?! 相手は誰だ!?!

知らない！茶髪の男子らしいぜ

少女はそれを聞いた時、先程の少年　ユウを思い出した。決闘^{デュエル}に夢中で忘れていたが、ユウは確か受験番号は自分より前だったはずだ。だが不良たちを引き付けるために残っていたはずだった。間に合ったのはいいが、教諭とデュエル？試験官じゃなくて？

色々なことを考えているが、見に行った方が早いと感じた少女はそのデュエルリングへむかことにした。

プロローグ（後書き）

ネイビー「はい、プロローグ終了です。そしてユウに来てもらいました」

ユウ「…ねえ、ボクの出番少くない？」

ネイビー「タブにもついていますけど、『予定は未定』…つまり何も考えていません」

ユウ「…まあいいや。次はボクの出番？」

ネイビー「そう、ユウと少女をメインに行くつもり。それとユウの試験と原作キャラの絡み…」

ユウ「ふん…」

ネイビー「さて…もし誤字、脱字、指摘があるのなら教えてください。また乾燥をもらえると非常にうれしいです。まだまだこれからですが、よろしく願います」

「次回もお楽しみに〜」 . . . ノシ

第一話 精霊（スピリット）VS古代の機械（アンティークギア）（前書き）

どうも、ネイビーです

さて…ようやく主人公のデュエルが始まった…

まあ温かい目で見てください。

あ、そうそう…今回オリジナルカードが出ます。そこに注意してください。

ではどうぞ

第一話 精霊（スピリット）VS古代の機械（アンティークギア）

ユウside

「ば、馬鹿な…」

「あ、ありえねえ…」

ユウの目の前には先程まで粹がっていた不良が両膝をついていた。一方のユウはため息をついていた。思いのほか不良たちが弱かったからだ。

「あ…そういうえば実技ボクの番もう過ぎてるな…まあ行ってみるかな…」

ユウside Out

少女side

少女がデュエルリングに行くところ確かに茶髪の男子が教諭らしき人と戦っていた。だけどそれはユウでは無かった。

「フレイムウイングマンで古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムに攻撃！！スカイスクレ
ーパーシュート！！」

「マンマミーヤ！！ワタシの古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムがあ！！！！」

そこにいたのは遊城十代ゆうきじゅうだいという電車が遅れたので受験に間に合わなかった少年だった。ユウでは無かったので少女はユウを探しに行こうとしたが、すぐに発見した。

「ええと……あの……」

「ん？あ、さっきの…大丈夫だった？試験」

「あ、はい……」

人見知りの所為か少女の反応は何処かオドオドしてしまっている。するとユウは笑顔で少女の頭を撫でた。ユウの方が背が低いためか少しばかり少女が屈む形になっているが、少女は少しばかりリラックスできた。

「そつえば名前まだ言っただけ無かったね…ボクは聖牙せいが。ユウって呼んで」

「あ、私は姫野椿ひめのつばき。皆からはツバキって呼ばれてる」

ここで自己紹介をしたためか完全に少女　ツバキはすっかりユウと仲良くなっていた。ふとツバキが気になった事を聞いた。

「ユウは試験官に勝ったの？」

「ううん。まだ戦って無いけど…多分ボクの順番終わってるから受けられないと思う」

「え…でも理由を言ったら受けれるんじゃない？」

若干ツバキは自分の所為だと感じていた。明らかにユウが遅れた理由はツバキに絡んできた不良だった。

「ううん…とりあはずあの先生に言ってみるよ」

そう言ってユウはクロノスの元へ向かった。

ツバキ side Out

クロノス side

「（ワタシがあんなドロップアウトボーイに負けるなんて…!!）
これで実技試験は 「すみません」ナンナノーネ？」

クロノスが試験終了を宣言しようとする目の前にいた少年 ユウが声をかけた。全員がユウに注目するとユウは受験票を取り出した。

「受験番号91の聖牙タです。訳があつて遅れてしまいました」

「（ぬぬぬ…先程のドロップアウトボーイに似たこの少年を叩き潰せば、ワタシの面目も保たれるハーズ…）いいでしょう。私が相手をしマース」

「よろしくお願いします」

再びクロノスが決闘^{デュエル}するとなつて再びギャラリーがざわついた。

「デュエル!!!」

クロノス side Out

ユウのターン

「ボクのターン、ドロ―！裏守備モンスターを一体召喚し、カードを伏せてターン終了！」

ユウ 手札4枚。伏せモンスター 伏せ1枚

クロノスのターン

「ワタクシのターン、ドロ―」

デュエルディスクから飛び出したカードを掴んだクロノスは手札を見て嫌な笑みを浮かべた。

「ワタクシは『デュアルサモン二重召喚』を発動するノーネ！効果によりこのターン、ワタクシは2回通常召喚が行えるノーネ。一回目はトロイホースを召喚！！」

クロノスの場に木で出来た馬の様なモンスターが現れた。だが明らかにアタッカーではないので生贄召喚用のモンスターだろう。

「『デュアルサモン二重召喚』でもう一回召喚ができノーネ。ワタシは、トロイホースを生贄に古代の機械巨人を召喚！！」

「っ！？レベル8のモンスターを生贄一体で召喚した！？」

「トロイホースの効果、地属性モンスターの生贄召喚にするトーキ、トロイホースは一体で2体分の生贄になるノーネ」

トロイホース

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣族 / ATK1600 / DEF1200

地属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

アンティーク・ギアゴレム
古代の機械巨人

効果モンスター

星8 / 地属性 / 機械族 / ATK3000 / DEF3000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

「バトルフェイズ！！古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムで裏側守備モンスターを攻撃！！！」

「クッ…！！！」

ユウの裏守備モンスターが古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムによって破壊された。古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムの効果で貫通ダメージがあるはずだが……

ユウ / LP 4000

「ありゃ？どうしてライフが減らないノーネ？」

「攻撃宣言前にトラップカード『スピリットバリア』を発動しました。効果によりボクはモンスターで受ける戦闘ダメージは0になります」

スピリットバリア

永続罫

自分フィールド上にモンスターが存在する限り、
このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

「フン、余計な時間稼ぎなノーネ。ワタシはターン終了!!」

クロノス 手札3枚

アンティーク・ギア
ゴレム
古代の機械巨人

ユウのターン

この会場にいたほぼ全員がユウの敗北を確信した。だがツバキだけは信じていた。ユウがクロノスに勝つことを。

「…フン、これでは時間の無駄なノーネ」

「え?」

そう言うとクロノスはデュエルリングを降りて何処かに行こうとする。それを見たツバキは急いでクロノスを引きとめた。

「ま、待ってください!!まだ勝負は終わってませんよ!!」

「黙らっしやーい!この状況を逆転するなんて不可能、それが分か

らないノーネ!？」

「おい先生!!！」

ナミネの言葉にクロノスがそう返すとカチンと来たのか、何処からか十代がやってきた。後ろには青髪の少年　丸藤翔まるふじしょうもいた。

「この状況でも、まだあいつが諦めない限り逆転できる可能性があるはずだ!!！」

「うるさいノーネ!この状況で逆転できるはずなんて「怖いんですか」なっ!？」

クロノスの言葉を遮ってツバキが予想外の言葉を言った。その時会場がざわつき始めた。「クロノスが怖がってる?」「逃げるのかまさか」などと声がる。

「この状況…先程の十代さんの逆転したのと同じ状況だから、負けるのが怖いんですか?」

「ぐぬぬぬ…!!うるさいノーネ!!いいでしょう…デュエルを続けるのはいいでスーガ、シニョールツバキは私を侮辱したノーデ、もしも彼が負けたのなら合格取り消しにするノーネ」

「なんだと!!！」

「そりゃあんまりっすよ!!！」

クロノスの出した条件、もしもユウが負けるのであればツバキの合
格も取り消すというのだ。その理不尽な条件に十代と翔は声を荒げ
た。だがツバキは

「分かりました」

それを受け入れた。それに3人は驚いた顔をした。まさかこの条件を受け入れるとは思いもなかったからだ。

「…分かったノーネ」

そうめんどくさそうにクロノスが言うと再びデュエルリングへ上がった。すると十代と翔はツバキに驚いた様に声をかけた。

「お前根性あるな!」

「どうして自分の合格の危機になってまでユウ君を助けようとするの?」

「わ、わからない…けど…ユウを助けたいって…私を助けてくれた…からかな…?」

少しばかりモジモジしながらツバキが言うのを見て2人はツバキが

人見知りだと分かった。

「ツバキ…ありがとう」

「分からないノーネ…どうしてシニョールツバキは自分の立場を危険に晒してまでアナタを守ルノ？」

クロノスはそう言ってユウを見るが、ユウは嬉しそうにしているだけだった。がすぐに目つきが変わった。

「ボクのターンドロー…！」

引いたカード、手札のカード、場の状況、その中で今自分が勝つ為の方法。その歯車が頭の中で合わさった。

「魔法カード『マジック・プランター』を発動！効果によりスピリットバリアを墓地に送って2枚ドローする…！」

マジック・プランター

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する

永続罫カード1枚を墓地へ送って発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「魔法カード『ダブルマジック二重魔法』を発動…！手札の『死者転生』を墓地に

送って相手の墓地のカード一枚を自分のカードとして扱う!」

「ワタシの墓地には『デュアルサモン二重召喚』しかないノーネ」

クロノスがそう言うとユウの場の^{ダブルマジック}二重魔法が^{デュアルサモン}二重召喚へと変化した。

「魔法カード『テラ・フォーミング』を発動!デッキから『死皇帝の陵墓』を手札に加え発動!」

テラ・フォーミング

通常魔法

自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える。

「そして『死皇帝の陵墓』の効果発動!!生贄召喚をする時、その必要なモンスターの数×1000払うことでその通常召喚ができる!」

死皇帝の陵墓

フィールド魔法

お互いのプレイヤーは、アドバンス召喚に必要なモンスターの数×1000ライフポイントを払う事で、リリースなしでそのモンスターを通常召喚する事ができる。

「ライフを2000払い、スピリットモンスター^{ヒノカゲツチ}火之迦具土を攻撃表示で召喚!」

コウの体から出た赤い光ライフポイントが炎を纏った男性へと変わった。その光景を見たギャラリーが再びざわついた。

「スピリットモンスター!?!」

「なんであんなガキが!?!」

「冗談だろ!?!」

だがデュエルリング横にいた十代は翔とツバキに聞いていた。

「なあ、スピリットモンスターってなんだ?」

「え...?あのスピリットモンスターっすよ!?!」

「知らないぜ、そんなの」

十代の言葉に翔は驚いていたが、ツバキは説明を始めた。

「ス、スピリットモンスターは『マジック&ウィザーズ』の創設者のペガサスさんが作った幻のシリーズです...」

「召喚するとターンの終りに手札に戻ったり特殊召喚できなかったり、デメリットが多いっすけど、結構強力な効果を備えているんすよ」

ツバキと翔の説明を聞いた十代は「ワクワク」という擬音が聞こえるような表情をしていた。

「スピリットモンスター…でも、ワタシの古代の機械巨人の攻撃力には及ばないノーネ！」

「ボクは更に『スピリットドロー』を発動！！墓地のスピリットモンスター『不死之炎鳥』をゲームから除外して2枚ドロー！！」

スピリットドロー

通常魔法

墓地のスピリットモンスターを一体ゲームから除外して2枚ドローする。

「そして二重召喚デュアルサモンの効果でもう一度召喚ができる！！雷帝神スサノオを召喚
！！！」

雷帝神スサノオ

スピリットモンスター

星4/地属性/雷族/ATK2000/DEF1600

このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが相手プレイヤーに与える戦闘ダメージは半分になる。

「フン：攻撃力2800と2000のモンスターを並べたところで
どうする事も出来ないノーネー！」

「まだボクのメインフェイズは終わって無い！『受け継がれる力』
を発動！！雷帝神スサノオを生贄に捧げて火之迦具土ヒノカグツチの攻撃力を雷帝神スサノオの攻
撃力分上げる！！」

受け継がれる力

通常魔法

自分フィールド上のモンスター1体を墓地に送る。

自分フィールド上のモンスター1体を選択する。

選択したモンスター1体の攻撃力は、

発動ターンのエンドフェイズまで墓地に送った

モンスターカードの攻撃力分アップする。

火之迦具土ヒノカグツチ / 2800 4800

「こ、攻撃力4800でストー！！」

「そして墓地に存在する雷帝神スサノオをゲームから除外して伊弉册イザナギを特殊
召喚！！」

伊弉册イザナギ

効果モンスター

星6 / 風属性 / 天使族 / ATK2200 / DEF1000

このカードは手札のスピリットモンスター1体をゲームから除外し、
手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在するスピリットモンスターはエンドフェイズ時に手札に戻る効果を発動しなくてもよい。

「バトル！！火之迦具土ヒノカグツチで古代の機械巨人アンティーク・ギアゴーレムを伊弉册イザナギでクロノス先生を攻撃！！」

「マンマミーヤ！！」

クロノス / LP 4000 2200 0

ユウの攻撃でクロノスが吹き飛んでしまった。が、そんな事を気にしないユウは無邪気に喜んでいた。

「勝った！！」

「ユウ！！」

喜んでユウの元へツバキと、十代に翔が駆け寄った。するとユウはツバキに頭を下げた。

「ごめんツバキ…ボクの所為で迷惑かけちゃって…」

「ユ、ユウ…もとはと言えば私の所為だし…頭上げてよね…ね？」

「そつだぜユウ。もう気にすることも無いだろっしな」

「そつっすよ！」

ツバキに続くように十代と翔がそつ言つとふとユウが気になった事を聞いた。

「所で君達は？」

「あ、そつか…ツバキちゃんと自己紹介したけどユウ君はまだでし
たっすね」

「俺は遊城十代だ。よろしくなユウ！」

「僕は丸藤翔。よろしくっす！」

「ボクは聖牙夕。よろしく十代、翔！」

「俺は三沢大地だ」

……………ん？いま何かいたような…

「……………おい、お前ら俺に気付かなかっただろ…」

「あ、この人は三沢君っす。受験番号1番なんすよ〜！」

「そつなんですか…よろしくお願いします」

三沢は翔の説明（既にしたのに）を聞いて落ち込んでいたが、ユウの言葉で立ち直った。

そして実技試験終了のあいさつを終えた後

会場の外

「さて…帰るかな…」

『そうだね』

「ユウ!!」

荷物を持ったユウと肩に乗ったウサギが外に出ると待っていたのかツバキが走ってきた。

「ツバキ? どうしたの?」

「少し聞きたいことがあって…」

「あ、ボクもツバキに聞きたいことがあって…」

ツバキはそこで言葉を止めると肩に乗ったウサギを見た。それと同時にユウはツバキの背後にいた闇紅の魔導師ダイクレッド・エンチャンターを見てこう言った。

「…ツバキ/ユウって…精霊が見える?」

第一話 精霊（スピリット）VS古代の機械（アンティークギア）（後書き）

ネイビー「さて…これで受験が終わる」

ユウ「…予想通りというか…やっぱり少女はツバキだったね」

ネイビー「今回からあとがきにも出ます」

ツバキ「よ、よろしく」

ユウ「どうしてツバキはボクにあそこまでしてくれたの？」

ネイビー「そのことも含めて次回あたりにします」

ツバキ「次は…デュエルアカデミアに行つてからの話だね」

ネイビー「そして万丈目とのデュエルだよ。そうそう今回から下にその話で出したオリジナルカードを出すから。」

オリジナルカード

スピリットドロ―

第二話 獣の魂 現れる魔法少女（前書き）

……なぜだ…なぜ第二話が消えた…

すぐに修正しましたが、原因は不明です。

ちなみに諸理由でガールの設定は消しました。

第二話 獣の魂 現れる魔法少女

ユウside

試験から数日後

海上を進む大型船、デュエルアカデミアへ向かう船だ。デュエルアカデミアへ向かう船の甲板に一人の少年がいた。

「驚いたね…まさかツバキも精霊が見えるなんてね」

『そうか？ユウがあのような不良の所に行った時、ツバキがおいらを見るの気付かなかったか？』

少年の言葉に返す者は居ないはずだ。だがユウには声が聞こえた。肩に乗っているウサギ 因幡之白兔いんぱんのしらかぎのイナだ。

ユウ、そしてツバキは精霊が見えるのだ。ユウはイナだけだが、ツバキには赤闇の魔導師ダークレッド・エンチャンターのタークがいる。

「それに十代も精霊のカードを持ってるし…もしかして見えてるのかな？」

『どうだろう？ハネクリボーは十代の横を飛んでるだけだから分からないけど…』

「まあいいや、十代もボクもオシリスレッドだからその内会うだろうし」

そう言ってユウは船内へ戻ろうとしたが、ユウが行こうとした通路とは別の通路に誰かがいた気がした。

「？」

『どうかしたか？』

「…ううん、なんでもない」

ユウ s i d e O u t

誰もいないと思ったからユウはそのまま船室へ向かった。だが本当はそこに栗色の髪の少女と焦げ茶色の髪の少女がいた。だが、その3人の少女に誰も気づかなかった。何故なら姿が見えないからだ

デュエルアカデミア港 ツバキ s i d e

「ううん…長かったね…」

『そうだな』

ツバキの言葉にダークがそう返した。ちなみに今2人？の周りにい

る人々はツバキの言葉を聞いていないのでそのまま通り過ぎている
一人を除いて。

「あの〜」

「ひゃ！？え！？な、なんですか！？」

いきなり見知らぬ少女に声をかけられたのでツバキは驚いてしまった。一方声をかけた少女は驚かすつもりは無かったので少し顔を引きつっている。

「え、え〜と…一人でいたから…そ、んなに怖がらなくても…」

少女の言うとおりツバキはものすごく怖がっている。どのぐらいかという怖がって新入生と共に運ばれた木箱の裏に隠れるほどだ。

「あ、ご、ごめんなさい！」

「ううん、気にしないで。私はフェイト・T・ハラオン。あなたは？」

「わ、私は姫野椿。よろしくねハラオンさん」

「よろしく。それと私はフェイトって呼んでねツバキ」

ツバキ side Out

レッド寮・ユウの部屋 ユウ side

「ふう…荷物の整理はこんなもんかな」

部屋に着いたユウはすぐに荷物の整理を始めた。ちなみにユウの部屋は2人部屋でもう一人はまだ来てはいない。

「あとは…この『カード』をどうしよう…」

「……そのカード、まだ持ってたんだ」

「うん…まあいつも通り融合デッキに入れとこう」

そう言つて『カード』をデッキホルダーの中の融合デッキの中に入れた、と同時に誰かが中に入ってきた。黒いバンドナに試験会場で会った三沢ぐらいの身長の子生徒、荷物を持っている所を見ると新生でルームメイトみたいだ。

「ん？お前と相部屋か？」

「あ、うん。ボクは「聖牙タ」知ってるの？」

そう言うと男子生徒は持っていた荷物からデュエルディスクとデッキを取り出した。それに驚きながらユウが聞き返すと生徒はデッキを取り出した。それと同時に鳥の様な精霊が現れた。

「俺も精霊が見えるんだよ。で、お前の肩に乗ってるの…因幡之白兔だろ」

「うん。名前はイナ」

「で、因幡之白兔はスピリットだ。今回の受験でスピリットを使っただけだ。聖牙タだけだ。っと俺は獣斬じゅうざん 繁しげだ、シゲルでいい。こいつは相棒のウリイ」

『よろしく頼む。では我は此処で…』

止めてください!!

ウリイはそういうと消えた。と、同時に外から悲鳴の様な声が聞こえた。明らかにその声は

『あの声はツバキだよ』

「ツバキ？」

「ボクの友達。何かあったのかな…？」

そう言い合いながらユウとシゲルは外へ出た。

ユウsideOut

レッド寮前

「止めてください!!」

「おいおい…なんでこんなレッドの屑寮に来てんだよ」

ユウが部屋を出るとツバキと少女^{フェイト}がブルーの生徒2人に絡まれていた。それを見たシゲルはだるそうに2階から手摺から飛び降りた。

「おい、何してるんだ?」

「あん?何だ屑か…邪魔だ。今この2人を「誘拐でもしようとしたのか?」違う!!」

「テメエ…ブルーに楯突くのか?」

「いやあ…ただ俺の友達の友達がそこでいやそうな声を上げたからな…ただ忠告に来た」

そう言うとシゲルのデュエルディスクを起動した。そしてデッキをセツトし

「ふざけた真似してんじゃねえよ、雑魚が」

「「っ！！！！」」

「2人でかかってこい…いいハンデだ」

シゲルの言葉にカチンと来たのか2人も構えた。

「「「デュエル！！！！」」」

ユウsideOut

ブルー生徒A シゲル B シゲルという順番です。

「ツバキ、大丈夫？」

「うん、大丈夫…ねえユウ、あの人は？」

ツバキはそう言いながら自分達に背を向けているシゲルを見た。それにユウは笑顔で答えた。

「ボクのルームメイトで友達の獣ざ「シゲルだ」あ、シゲルくら」
呼び捨てでいい」だって。そっちの子は？」

「私はフェイト。あなたがユウね」

「え？どうして僕名前をしつて「俺のターン！」」

「始つたよ」

ツバキの言葉通りAはカードを引こうとした。

シゲル side

勢いよくカードを一枚引いたAはそれを手札に加えると嫌な笑みを浮かべて俺を見た。

「俺達に楯突いたの後悔す」「御託はいい、さつさとかかつてこい雑魚」(ブチ)おれはグランド・ドラゴンを攻撃表示で召喚!!そして未来融合 フューチャーフージョン を発動!!デッキからドラゴン族モンスター5体を墓地に送る!!」

グランド・ドラゴン

効果モンスター

星4/風属性/ドラゴン族/ATK2000/DEF 100

このカードは自分フィールド上に他のモンスターが1体でも存在する限り召喚できない。

また、自分フィールド上にこのカードを除く他のドラゴン族モンスターが存在しなければ、このカードは攻撃宣言を行えない。

未来融合

永続魔法(制限カード)

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、

決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を

融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「選択はF・G・Dだ!!」

「FGD!?!」

「って何?」

ツバキは驚いた声を上げた、が横の2人はどういうモンスターなのか知らないらしい。その反応にイナはずっこけている。

「F・G・Dは5体のドラゴンを融合するモンスターなの。その攻撃力は、5000」

「5000!!?!」

そう騒いでいるのを見てAはまた嫌な笑みを浮かべた。そして眼鏡をクイクイと上げる仕草をして

「俺のターン!!」

俺は無視をした。それにAの額に青筋が浮かんだ気がしたが気にしないでおいた。

A / 手札4枚 グランド・ドラゴン 未来融合

「俺はグラティアルビースト剣闘獣 ラクエルを攻撃表示で召喚。カードを3枚伏せてターン終了」

シゲルの場に炎を纏った獣人?が現れた。どうやらシゲルのデッキの下級アタッカーらしい。

ラクエル

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 獣战士族 / ATK1800 / DEF 400

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、このカードの元々の攻撃力は2100になる。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ラクエル」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

シゲル / 手札2枚 ラクエル 伏せ3枚

「私のターン！ドロー！！」

Bもカードを引くとカードを2枚伏せた。というか何か言ってくれ、無言はどうしても説明しにくい。

「此処のままターンを終えます」

B / 手札4枚 伏せ2枚

シゲルのターン

「俺のターン、ドロー」

シゲルは引いたカードを確認するとそのままカードをセットした。これであるモンスターを召喚するチャンスができた。

「俺はこれでターン終了だ」

シゲル / 手札2枚 ラクエル 伏せ4枚

Aのターン

ルールとしてはもうこれで攻撃は可能になった。そして未来融合のカウンターも一つ進む。

「俺のターン！ちつ……屑カードが……このままターン終了だ！！」

引いたカードを見てAは舌打ちをした。どうやら望んでいたカードとは違うようだった。

そしてグランド・ドラゴンは他にドラゴンがいなければ攻撃はできない。

A / 手札5枚 グランド・ドラゴン 未来癒合

シゲルのターン

「俺のターン、ドロー」

引いたカードを見たシゲルはそれを手札に加え、手札のカードを發動した。

「休息する剣闘獣きゅうとうじゆうを發動！手札の剣闘獣グラディアルビーストの戦車グラディアルビーストと剣闘獣グラディアルビースト ムルミロをデッキに戻し、3枚ドローする！」

きゅうとうじゆう 休息する剣闘獣
グラディアルビースト

通常魔法

自分の手札から「剣闘獣」と名のついたカード2枚をデッキに戻す。その後、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

ムルミロは『あの効果』を使わなければ攻撃力は1000も無いモンスターだ。そして伏せカードで戦車も手に余っていたところだった。

「俺は剣闘獣ラクエルでお前に攻撃だ!!」
グラディアルビースト

俺はラクエルでBに攻撃をした。伏せカードは少し怖いが、手札には壁にできるモンスターもいたから、破壊されても「ぐう!!」喰らった。何もせずに

B / LP 4000 2200

「よくも…よくも私に傷を…!!ゆるさ」ラクエルの効果を発動「無視をするな!!」

Bが何かを言っているが、俺はとりあはず無視をすることにした。聞いていたらキリがないし聞く理由も無い。

「戦闘を行ったラクエルをデッキに戻すことでデッキの剣闘獣と名のついたモンスターを一体特殊召喚することができる。来い、剣闘獣セクトル!!」
グラディアルビースト

グラディアルビースト
剣闘獣セクトル

効果モンスター

星4 / 風属性 / 爬虫類族 / ATK 400 / DEF 300

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に、デッキから「剣闘獣セクトル」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。

……明らかにあの2人は攻撃力の低いセクトルを馬鹿にしている顔だ。まあ、セクトルの効果は反則だからな。
セットカード

セクトル / ATK 400

「俺はターンを終了する」

シゲル / 手札3枚 セクトル 伏せ4枚

Bのターン

「私のターン！私は、ゴブリン突撃部隊を攻撃表示で召喚！！」

ゴブリン突撃部隊

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / ATK 2300 / DEF 0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、

次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

「バトル！ゴブリン突撃部隊でその雑魚モンスターを攻撃イ！！」

「俺のデッキに雑魚はいない。トラップ発動『ディフェンシブ・タクティクス』」

セクトルの周りにバリアーみたいなのが現れ、ゴブリンを弾き飛ばした。そして自身の効果でゴブリンは守備表示になった。

「ディフェンシブ・タクティクスは場に剣闘獣グラディアルビーストが存在する場合、剣闘獣は戦闘では破壊されず、ダメージも0になる」

ディフェンシブ・タクティクス
通常罫

自分フィールド上に「剣闘獣グラディアルビースト」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

このターン自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘では破壊されず、自分への戦闘ダメージは0になる。
発動後、このカードをデッキの一番下に戻す。

「くっ…私はこのまま「バトルフェイズ終了時、セクトルの効果発動！」なに！？」

「セクトルが戦闘を行った場合、デッキから剣闘獣を2体特殊召喚する、来いサムニテ、ホプロムス」

グラディアルビースト
剣闘獣サムニテ

効果モンスター

星3 / 地属性 / 獣族 / ATK1600 / DEF1200

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、このカードが戦闘によって

相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキから「剣闘獣」と名のついた

カード1枚を手札に加える事ができる。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードをデッキに戻す事で、デッキから

「剣闘獣サムニテ」以外の「剣闘獣」

と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

グラディアルビースト

剣闘獣ホプロムス

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / ATK 700 / DEF2100

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって

特殊召喚に成功した場合、このカードの元々の守備力は2400になる。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ホプロムス」

以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

俺の場にサーベルタイガーの様なモンスター

グラディアルビースト

剣闘獣サムニテと

ゴツゴツしたモンスター

グラディアルビースト

剣闘獣ホプロムスが現れる。それを見

てBがものすごくイライラしている。

まあ、一気に3体のモンスターが出たら苛つくだろう。

「トランプカード『ハンディキャップマッチ!』を発動。剣闘獣とグラディアルビースト名のついたモンスターを特殊召喚に成功した時、デッキ、手札から剣闘獣を一体特殊召喚する。現れる、剣闘獣ベストロウリィグラディアルビースト」

俺の手札にいた相棒ウリィ ベストロウリィがフィールドに現れた。今となつては制限カードだが、俺の相棒はウリィしかない!

ハンディキャップマッチ!

通常罨

自分が「剣闘獣」と名のついたモンスターの特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「剣闘獣」と名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

グラディアルビースト

剣闘獣ベストロウリィ

効果モンスター（制限カード）

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / ATK1500 / DEF 800

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法または罨カード1枚を破壊する。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから

「剣闘獣ベストロウリィ」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

B / 手札4枚 ゴブリン突撃部隊 伏せ2枚

「俺のターンドロー！」

俺は引いたカードを確認して少し考えた。Bの伏せカード：ゴブリ
ン突撃部隊…明らかにあれだ。

「俺は再びラクエルを召喚！そして融合デッキの剣闘獣ヘラクレイ
ノスの効果を発動！」

「融合デッキだと！？」

シゲルの宣言と同時にラクエル、サムニテ、ホプロムスが消えた。
その光景にブルーは呆然としてみるとモンスターゾーンの一か所に
巨大な炎が上がった。

「このモンスターはラクエルを含む剣闘獣を3体デッキに戻すこと
で融合デッキから特殊召喚することができる。来い！剣闘獣ヘラク
レイノス！！」

そこには巨大な剣と楯を持った炎を纏った巨大な剣闘獣が現れた。

グラディアルビースト
剣闘獣ヘラクレイノス

融合・効果モンスター

星8 / 炎属性 / 獣戦士族 / ATK3000 / DEF2800

「剣闘獣ラクエル」+「剣闘獣」と名のついたモンスター×2

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合の
み、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、手札を1枚捨てる事で魔法または罠カードの発動を無効にし、それを破壊する。

「ここ、攻撃力3000だと!?!」

「バトル…セクトルでゴブリンに攻撃」

「ひ、引つ掛かったな!トラップカード『最終突撃命令』効果により
「ヘラクレイノスの効果発動。手札のカードを一枚墓地の送り魔法・
罠の発動を無効にし破壊する」なに!?!」

「貴様の言う雑魚でやられる気分はどうだ?」

「クッ…クソ…!!!クソ!!!」

これで手札は一枚だが、このターンでBは倒せる。

「ヘラクレイノスで攻撃!!!バーストブレイカー!!!」

「うわあああああ!!!」

B / 2200 0

吹き飛ばされたBを無視して俺はバトルフェイズを終了した。

「セクトルの効果発動。デッキから再びラクエルとサムニテを特殊召喚し、ターンエンド」

シゲル/手札1枚　ヘラクノイノス　ラクエル　サムニテ　セクトル
ベストロウリイ　伏せ2枚

Aのターン

明らかに俺の方が優勢だが、このターンで…

「残念だったな…俺は未来融合の効果でF・G・Dを特殊召喚する
!!!」

Aの場に5つの首を持つ巨大な龍が現れた。攻撃力5000　それは全てのモンスターの攻撃力・守備力を凌駕する攻撃力を誇っている。

F・G・D

融合・効果モンスター

星12/闇属性/ドラゴン族/ATK5000/DEF5000

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

ドラゴン族モンスター5体を融合素材として融合召喚する。

このカードは地・水・炎・風・闇属性モンスターとの戦闘によっては破壊されない。

(ダメージ計算は適用する)

「カードを一枚伏せてバトルだ！！F・G・Dでヘラクノイノスに攻撃！！」

「クツ…悪リイ…ヘラクノイノス…」

F・G・Dの5つの首で発生した様々な攻撃によってヘラクレイノスが破壊された。

シゲル / LP 4000 2000

「更にグラウンド・ドラゴンでセクトルに攻撃！！」

「クツ…」

シゲル / LP 2000 400

これで場にはサムニテとベストロウリイしかない。だがこれで奴の敗北が決定した。

「俺のターン！ドロー！俺は手札からスレイブタイガーを特殊召喚する！」

スレイブタイガー

効果モンスター

星3 / 地属性 / 獣族 / ATK 600 / DEF 300

自分フィールド上に「剣闘獣」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードをリリースする事で、自分フィールド上に表側表示で存在する

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体をデッキに戻し、自分のデッキから「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

このカードの効果で特殊召喚したモンスターは「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果で特殊召喚した扱いとなる。

「効果により俺はホムプロスをデッキに戻し、グラディアルビースト剣闘獣ダリウスを特殊召喚する！！そしてダリウスの効果発動！！」

グラディアルビースト
剣闘獣ダリウス

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣戦士族 / ATK1700 / DEF 300

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、

自分の墓地から「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、

このカードがフィールド上から離れた時自分のデッキに戻る。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、

デッキから「剣闘獣ダリウス」以外の「剣闘獣」と名のついたモン

スター1体を
自分フィールド上に特殊召喚する。

場に現れた馬の様なモンスターはシゲルの墓地にあるカードを引っ張り出してきた。

「俺は墓地からヘラクノイノスを特殊召喚する！！だがダリウスの効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化される。（頼むぜウリイ）そして場のベストロウリイとヘラクノイノスをデッキに戻す」

「また融合か！？」

「そつだ、ベストロウリイと剣闘獣をデッキに戻して、現れな剣闘獣ガイザレス！！」

グラディアルビースト

剣闘獣ガイザレス

融合・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / ATK2400 / DEF1500

「剣闘獣ベストロウリイ」 + 「剣闘獣」と名のついたモンスター

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上のカードを2枚まで破壊する事ができる。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードを融合デッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ベストロウリイ」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「は、ははは！！！驚かせんな！！攻撃力たった2400じゃねえか！！やっぱり屑だな、ヘラクノイノスなんて強力なカードを自分で手放すなんてよ！！そんなので俺のF・G・Dを倒そうなんてよ！！！」

「残念、もうお前は負けている」

シゲルはそういつと突然F・G・Dが消え失せた。Aもユウモツバキもフェイトも驚きの表情を隠せなかった。

「ガイザレスの効果、召喚成功時フィールド上のカードを2枚まで破壊する」

「何だと！？」

「その効果により未来融合とグラント・ドラゴンを破壊した。そして俺は手札より魔法カード剣闘訓練所を発動！デッキから剣闘獣と名のついたモンスターを一体手札に加える。ラクエルを出ッから手札に加えてそのまま召喚！！」

シゲルの場に再び炎を纏った獣人が現れた。だがこの時ユウは気に

なった。どうしてラクエルを召喚したのか。ガイザレスとダリウスでもう相手のLPは0になるのに、シゲルはラクエルを召喚した。

「伏せカードオープン、『眠る魂の咆哮』」

「な、なんだそのカードは!?!」

Aが聞いて来るがシゲルは無視をしている。するとラクエルとシゲルのデュエルディスクの墓地から炎が上がった。それはヘラクノイノスを召喚した時の様な

「眠る魂の咆哮は墓地及び場の剣闘獣をゲームから除外して融合条件に合った剣闘獣を一体特殊召喚する」
グラディアルビースト

眠る魂の咆哮

通常罫

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「剣闘獣」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

「ば、馬鹿な!!! 墓地に剣闘獣は!!! ヘラクノイノスの効果の
グラディアルビースト
時か!!!」

「そつだ。墓地の2体の剣闘獣と場のラクエルをゲームから除外し、
グラディアルビースト
再びこの場に現れる、ヘラクノイノス!!! バトル!!! ダリウスで直
ダイレクトアタック

接攻撃！！」

「ば、馬鹿め！！トラップカード聖なるバ「トラップカード」な
あ！？」

「パラドックス・フュージョン。場の融合モンスターをゲームから
除外して魔法・罫の発動、モンスターの特殊召喚のどれかを無効に
して破壊する。俺はガイザレスをゲームから除外する！」

パラドックス・フュージョン

カウンター罫

自分フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター1体を
ゲームから除外して発動する。

魔法・罫の発動、モンスターの特殊召喚のどれかを無効にして破壊
する。

発動後2回目の自分のエンドフェイズ時に、このカードを発動する
ために

除外したモンスターを表側攻撃表示でフィールド上に戻す。

場のガイザレスが相手の場の聖なるバリア ミラーフォースと共に
粒子になって消えうせた。その時ユウは気付いた。どうしてシゲル
はラクエルを召喚したのか。それはもしも相手のカードでパラドッ
クス・フュージョンを発動した場合、このターンで止めを刺すこと
ができないからだ。

「バトル続行、ダリウス行け！！」

「ぐうう！！ば、馬鹿な…俺が…ブルーであるこの俺が…！！」

A / LP 4000 2300

ダリウスの攻撃を喰らったAは信じられないような目をしていた。だがシゲルはめんどくさそうに、静かに言った。

「ヘラクノイノスの攻撃。バーストブレイカー」

「ぐおおおおお!!!」

A / 2300 0

シゲル side Out

ユウ side

「シゲル強いね!」

「まあな…まああの馬鹿がミスをしてたのもあるかな」

「ミス?」

シゲルの言葉にツバキが聞いてきた。一見ミスを犯していないように見えるが何処がミスなのか…

「F・G・Dでヘラクノイノスを攻撃した時だ。あるときセクトル

を攻撃してもしも『眠る魂の咆哮』が無かったら俺の負けだった。あの場合攻撃力が高いヘラクノイノスじゃなくてセクトルを狙うのが普通だ」

「あ、そっか…5000のF・G・Dで400のセクトルに攻撃すれば…」

「俺のLPは0。まああの馬鹿はそんなこと考えなかったがな…ん？」

するとシゲルは辺りを見回した、ユウも辺りを見回して何かに気付いた。

「ツバキ、フェイトは？」

「え？あれ？さっきまでそこにいたのに…」

「急にだな…まあいいか、そういえばツバキ…だっけ？」

「は、はい」

いまだにフェイトとユウ、十代と翔以外（俺もいるぞ by三沢）と話すのが慣れないツバキだがシゲルはまた無視をした。するとシゲルは右手を出した。

「これからもよろしくな」

「あ、よ、よろしくお願ひします」

「ついでユウ達の長い一日が終わりを告げ

無かった。

第二話 獣の魂 現れる魔法少女（後書き）

オリジナルカード
眠る魂の咆哮

第三話 怒りの決闘？本気の畏（前書き）

どうも、ネイビーです。

前回で初めての感想？を頂きましたが、指摘のみのコメントでした。

………不覚……orz

まあ、間違いがあるならコメントお願いします。できる限りなくしますが…

ではござ

第三話 怒りの決闘？本気の畏

女子寮・フェイトの部屋

「どうだった？フェイトちゃん」

「うん…映像で見たのと同じ顔だけど…ユウがあれに関わってるとは思えないかな…」

「せやけど…船で見かけた時、誰かと話しておったで。やはり怪しいなああ…」

フェイトの部屋での会話。それ以前のこそこそとしている3人組の方が怪しかった事に誰も気づかなかった。

レッド寮・食堂 9時

あの後ツバキを女子寮に送ってからユウとシゲルは歓迎会に参加した。その時十代と翔とシゲルが自己紹介をしてすぐに打ち解けた。ちなみに十代と翔の部屋は隣らしい。

「へえ…あのクロノスに勝ったのか」

「まあな。それを言ったらユウなんか俺よりも凄かったぜ。いつか俺のヒーローと戦おうぜ！..」

「うん、いいよ」

「あ、あの…3人とも不味いつすよ…」

「…何が?」

十代とユウ、シゲルがご飯を食べながら受験の時などの話をしていた。それに翔は大徳寺先生だいとくじが話をしていたのを翔が話そうとしていた。だが大徳寺先生の「小さいことは気にしないのじゃ」で再び3人は食べ始めた。

女子寮 11時

「それではよろしく願いします」

「…お願いします」

ブルー女子寮の寮長である鮎川あゆかわの挨拶が終わり、生徒達は目の前の御馳走を食べ始めた。だがツバキだけが少し浮いていた。周囲には仲良くなった生徒がグループを作って会話をしていたが、ナミネは昼間はレッド寮に行っていたのでそんな友達には

「ツバキ〜!!」

いた。いつの間にかいなくなっていたフェイトだ。フェイトの横には栗色の髪の少女が2人並んで歩いてきた。

「フェイト？どうしたの？」

「ううん。さっきから一人ぼっちでいたから…一緒に行く？」

「いいの…？」

少し躊躇いがちにツバキが聞くとフェイトは笑顔で頷いた。その時左右にいた2人の紹介をしてないのに気付いた。

「この2人は私の友達のなのとはやてだよ」

「高町　なのはだよ。よろしくね」

「八神　はやてや、よろしく」

「ひ、姫野　椿でしゅ……」

ツバキは思いつきり噛んでしまった。それになのは達は必死に笑いをこらえているがツバキは顔を赤くして体育座りで隅っこに座ってしまった。

「ごめな〜ツバキ〜（クスッ）」

「わああ〜／＼／／／」

はやての反応に更にツバキは顔を赤くしてしまった。するとなのは
が出入り口の方を見て何かに気付いた。

「あれ？あれって…天上院さん？」

なのはの言つとおり天上院てんじょういん 明日香あすかが何処かに行こうとしていた。
気になった4人は後を付けることに。

レッド寮・十代と翔の部屋 午後11時15分

「いや〜食った食った！」

「案外うまかったな」

「そうだね、はい」

「兄貴、お茶」

十代とシゲルが座っていると翔とユウがお茶を持ってきた。翔は寝
ていた前田まえだ 隼人はやとにもお茶を渡そうとしたが、いららないと言われて
しまった。

その時十代のPDAにメールが届いた。そこにはブルーの生徒（万
丈目 準）のボイスメッセージが入っていた。

『やあ、ドロップアウトボーイ。午前0時デュエルフィールドで待っている。互いのベストカードを賭けたアンティールでデュエルだ。勇気があるなら来るんだな。それとユウとか言うガキも連れてこい』

「へへ…面白くなってきたぜ！」

「ボクも呼ばれた？まあいいか…」

十代の横で「でも」とユウが呟くと同時に部屋の空気が凍った。

「大事なカードを賭けてか…」

「お、おいユウ…？」

「ユ、ユウが怖いっす！」

シゲルが声をかけるがユウは聞こえていないのかもすごく（怖い）笑みを浮かべていた。それに翔と十代が震えていた。一方隼人は寝てしまったのか気にしていない。

午前0時

ユウ、十代、シゲル、翔がブルー専用デュエルリングへ向かっていた。終始翔は十代とユウを止めようとしていた、がシゲルに「諦め

る。こついう奴らだろ」と言われた。

そして4人がデュエルリングに着いた時万丈目の他に昼間レッド寮でツバキとフェイトに声をかけてシゲルに負けた2人組もいた。

「よく来たな、91番、110番」

「あ、あの時の……!」

万丈目の後ろから2人組がユウとシゲルを指さして言った。昼間の出来事を知らない翔はどうして2人が指差されているのか気になった。

「ユウとシゲル君の知り合いっすか？」

「……誰？」

ユウとシゲルの言葉で明らかに2人組はキレていたが万丈目に制止された。

「へへ、デュエルと聞いちゃあ来ない理由は無いぜ」

「見せてもらっぜクロノス教諭を倒したのがマグレなのか実力なのか」

その言葉を聞いて静かにユウが十代の前に立った。

「一つ聞きたいけど、ボクを呼んだのもクロノス先生を倒したから？」

「そうだ。それと貴様の持つスピリットを頂くためだ」

万丈目の言葉にシゲルはいらっときたが、それ以前にキレていた人物がいた。

「残念だけどスピリットは渡さない…そして…完膚なきまでにあんたを倒す…!!」

ユウだった。ユウの言葉に若干の殺気が混ざっているのを全員が感じた。だが万丈目はそれを気のせいだと震える脚に聞かしてユウを指さした。

「俺と勝負しろ!!」

「いいよ、だけどスピリットは使わない。賭けを持ちかけたのを後悔させてあげる」

アンティ

そしてユウはデュエルリングへ上がった。それと同時にデュエルリングが起動した。

「デュエル!!」

ユウのターン

「オレのターン、ドロー!!」

ユウのドロー宣言に何か違和感を感じたシゲルは横にいた2人に話しかけた。

「…なあ、今ユウ『オレ』って言ったよな？」

「ん？そうか？」

「聞いてなかったっす」

「言ってたわ」

そう言ったのは背後から来た明日香だった。その後ろにはツバキ達4人もいた。ツバキも驚いた表情をしていた。

「明日香？どうしたんだ？」

「あなたたちの事だから来るとは思っていたわ」

「ツバキは何してんだ？」

「明日香さんが寮を出て行くのが気になって…」

そんなこと言っているうちにユウがカードを伏せて終了宣言をしていた。

ユウ／手札3枚 裏守備1体 伏せ一枚 魂吸収

魂吸収

永続魔法

このカードのコントローラーはカードがゲームから除外される度に、1枚につき500ライフポイント回復する。

「魂吸収？スピリットデッキにあんなの入って無かっただろ」

「確か入って無い…大和之神とかしか除外するカードは無いし…」

シゲルとツバキがそう言ってる間に万丈目のターンへと移った。

「俺のターン、ドロー！！俺はリボーン・ゾンビを攻撃表示で召喚
！！！」

リボーン・ゾンビ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / アンデット族 / ATK1000 / DEF1600

自分の手札が0枚の場合、

フィールド上に攻撃表示で存在するこのカードは戦闘では破壊されない。

万丈目の場に所々が腐っている人型のモンスターが現れた。それを見たツバキは怯えながらシゲルの背後に隠れた。どうやらアンデットやゾンビの類が苦手のようなのだ。

「リボーン・ゾンビで裏側守備モンスターを攻撃!!」

「残念。攻撃宣言時、永続罨発動!マクロコスモス!!効果により墓地へ送られるカードは除外される!さらにメタモルポットの効果発動!!」

マクロコスモス

永続罨

自分の手札またはデッキから「原始太陽ヘリオス」1体を特殊召喚する事ができる。

また、このカードがフィールド上に存在する限り、墓地へ送られるカードは墓地へは行かずゲームから除外される。

メタモルポット

効果モンスター (制限カード)

星2 / 地属性 / 岩石族 / ATK 700 / DEF 600

リバーズ：お互いの手札を全て捨てる。
その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロース
る。

ユウの場の壺の中に入ったモンスターがお互いの手札を吸いこんだ。
そしてメタモルポットは異次元へと飛ばされた。

「何だと!?!」

「除外されたカードは9枚：よって魂吸収の効果で4500ポイント
ライフを回復する!」

ユウ/LP4000 8500

「クソ：カードを二枚伏せてターン終了!」

万丈目/手札3枚 リボン・ゾンビ 伏せ2枚

「オレのターン!ドロース!」

ユウのドロース宣言を聞いたツバキは小さな声で呟いた。

「…なんか…ユウじゃない…みたい…」

だがその呟きを聞く者はいなかった。しかしデュエルは続く。一方万丈目の取り巻きの2人組はこの世のものではないモノを見るような気分だった。

「オレは魔法カード黄金の封印の黄金櫃を発動！！デッキのカードを一枚除外し、2ターン後手札に加える！！」

封印の黄金櫃

通常魔法（準制限カード）

自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。
発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。

「効果によりネクロフェイスをゲームから除外！！」

「きゃあぁー！」

ユウの選択したモンスターがホラー系のアンデットモンスターだったのでまたツバキは震えてしまった。だが本当のネクロフェイスの恐怖は外見ではない。

「ネクロフェイスの効果発動！！ゲームから除外された時、お互いにデッキの上から5枚ゲームから除外する！！」

「5枚のカードだと!!?」

ネクロフェイス

効果モンスター（制限カード）

星4 / 闇属性 / アンデット族 / ATK1200 / DEF1800

このカードが召喚に成功した時、
ゲームから除外されているカード全てをデッキに戻してシャッフルする。

このカードの攻撃力は、この効果でデッキに戻したカードの枚数×100ポイントアップする。

このカードがゲームから除外された時、

お互いはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する。

「更に除外されたカードは12枚、よって6000ポイントライフを回復する!!」

ユウ / LP8500 14500

「ば、馬鹿な!!?ライフが10000を超えるだ!!?」

「更に墓地にモンスターが存在しないため、手札からガーディアン・エアトスを特殊召喚する!!」

ガーディアン・エアトス

効果モンスター

星8 / 風属性 / 天使族 / ATK2500 / DEF2000

自分の墓地にモンスターカードが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードに装備された装備魔法カード1枚を墓地へ送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを3枚まで選択し、ゲームから除外する。

この効果でゲームから除外したモンスター1体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は500ポイントアップする。

ユウの場に純白の翼を背に生やした天使が舞い降りた。

「こ、攻撃力2500のモンスターを生贄なしで召喚したと…！
！」

「ガーディアン・エアトスでリボーン・ゾンビに攻撃！精霊のオペ
ラ…！」

「ウグツ…リボーン・ゾンビが…！！！」

エアトスの放った衝撃波がリボーン・ゾンビに直撃し、リボーン・
ゾンビは消滅した。

万丈目 / LP	4000	2500
ユウ / LP	14500	15000

「カードを伏せてターン終了」

ユウノ手札3枚 ガーディアン・エアトス 伏せ1枚 マクロコス
モス 魂吸収

「オレのターン！！ドロー！！俺は伏せていた魔法カードディファレンシオン・D・D・
リバイバル Rを発動！！手札を一枚捨て、ゲームから除外されているモンス
ターを一体特殊召喚する！！」

ディファレンシオンリバイバル
D・D・R

装備魔法

手札を1枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター1
体を選択して

攻撃表示でフィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊す
る。

ユウノLP15000 15500

「効果によりメタモルポットの効果でゲームから除外された地獄戦ヘルソルジャー
士を特殊召喚、更にリバースカード地獄の暴走召喚を発動！！自分
が攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚成功した時、同名カ
ードを特殊召喚する！！そして相手は自分の場のモンスターと同名
カードを特殊召喚できる！！」

ヘルソルジャー
地獄戦士

効果モンスター

星4 / 閻属性 / 戦士族 / ATK1200 / DEF1400

このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られ
た時、

この戦闘によって自分が受けた戦闘ダメージを相手ライフにも与える。

地獄の暴走召喚

速攻魔法

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に

攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から

全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、

そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

86

「効果により地獄戦士^{ヘルソルジャー}をデッキから2体特殊召喚する！！」

「残り一体のエアトスは除外されている」

ユウ / LP 15500 16000

「更にヘル・アライアンスを装備。装備モンスターと同名カード1枚につき、装備モンスターは800ポイント攻撃力が上がる！1600アップだ！！」

ヘル・アライアンス

装備魔法

フィールド上に表側表示で存在する装備モンスターと同名のモンスター1体につき、

装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

ヘルソルジャー
地獄戦士 / ATK 1200 2800

「エアトスを越えた！」

「バトル！ヘルソルジャー地獄戦士でエアトスに攻め、リバーズカードオープン！
なに！！！」

「グランドクロス！このカードは場にマクロコスモスがある時発動できる！！フィールド上のモンスターを全て破壊し、相手に300ポイントダメージを与える！！！」

「なに！？」

フィールドで起こった大爆発に巻き込まれ、3体のヘルソルジャー地獄戦士とエアトスが破壊された。さらに魂吸収とグランドクロスのライフ変化が起こる。

万丈目 / 2500 2200
ユウ / 16000 19500

「くっとう……俺はモンスターとカードを伏せてターン終了！！！」

万丈目／手札1枚 伏せモンスター1体 伏せカード1枚

万丈目の伏せたカード、それは聖なるバリア ミラーフォースと魂を削る死霊だ。ミラーフォースで攻撃モンスター破壊、もし破壊されても魂を削る死霊は戦闘破壊されない。

これですばらく時間を稼ぐができる。『並大抵』の相手なら。

「オレのターンドロワー！手札からカオス・グリードを発動！効果により2枚ドロワー！！」

カオス・グリード

通常魔法

自分のカードが4枚以上ゲームから除外されており

自分の墓地にカードが存在しない場合に発動する事ができる。

自分のデッキからカードを2枚ドロワーする。

ユウ／19500 20000

『並大抵』ではないユウには関係が無かった。

「手札から魔法カード『異次元からの罠』を発動！！」

ユウ／LP20000 2000

「何！？LPが2000まで減つただと！？」

「異次元からの罠はライフが10000以上ある時発動することが

できる。ゲームから除外されている罫を一枚発動することができる」

異次元からの罫

通常魔法（制限）

ライフポイントが10000以上ある時、ライフを2000になるように払う。

ゲームから除外されてる自分の通常罫を選択する。

このカードは選択したカードの効果になる。

「だ、だが！貴様のライフは2000まで下がった！次のターンが来れば俺にも勝機が「来ないよ」なんだと!？」

「だって…このターンで終わるから（………）
選択するのはD・D・ダイナマイトだ！このカードは相手の除外してあるカード一枚につき300ポイントのダメージを与える!!」

「なん…だと…!!」

D・D・ダイナマイト

通常罫

相手が除外しているカードの数×300ポイントダメージを相手ライフに与える。

「17枚除外されている…5100ポイントダメージを与える!!」

「う、うわあああああああああああああ!!……!!」

万丈目 / 22000

爆発により万丈目はデュエルリングから転げ落ちてしまった。だがユウは万丈目を無視して8人の元へと向かった。

「ユウ…お前…」

「…あれが僕の本気… 『異次元デッキ』だよ」

いつもデュエルを楽しみ、そしてカードを、モンスターを大事にするスピリットデッキとは違う異次元デッキ。その存在がシゲルとツバキには信じられなかった。

「っ！？不味い、ガードマンよ！！此処から逃げるわ！！」

明日香の声に促されてその場にいたメンバー達はすぐに校舎の外へと出た。そこで女子寮メンバーと別れた。

レッド寮前

「なんか疲れたな…」

「そっつすね…」

もう日付を1時間前に越えてしまったためか、4人は疲労困憊だった。すぐに十代と翔は部屋へ戻ってしまった。ユウも部屋に戻ろうとするが部屋の鍵はシゲルが持っていることに気付いて開けてもらおうとして振り返ると。

「誰だ？そこにいるのは」

シゲルがある茂みを睨んでいた。見た感じそこには誰もいない感じがする。が、茂みが揺れた。

「あかんわ、どうしてもバレてまうな…」

「うん、まあ仕方が無いね」

「じゃははは…そうだね…」

そこにいたのはなのは、フェイト、はやての3人だった。ユウはシゲルの近くまで歩いて行って3人の服装がブルー女子の制服ではないことに気付いた。

「一体何の用だ？わざわざ気配消してまで付けてくるには何か理由があるんだろ？」

「どじする？はやて」

「うん…見逃しては…くれへんやろな…」

困った感じでフェイトがはやてに聞くが、はやては判断に困っている感じだ。するとなのは一步前にでてきて、2人を見た。そしてなのはが言った言葉が2人の運命を変えた。

「…2人は異世界って信じる？」

第三話 怒りの決闘？本気の罠（後書き）

ネイビー「はい今回はここまで」

ユウ「……………」

ツバキ「ユウのあのデッキ…『異次元』って…」

ネイビー「デッキ除外、ともいう。TF5で作者が作ったデッキ。

というかオリキャラのデッキは作者がTF5で作ったデッキを元に

「こんなカード在ればいいんだけどな…」と思ったものを入れてい
る」

シゲル「…あいつは…ユウなのか？」

ネイビー「一人称が変わったり、戦法が変わったりとかは…まあ過
去編見たいなのをいつかやるのでその時に」

オリジナルカード

異次元からの罠

第四話 出会う魔導師と決別する獣（前書き）

今回はデュエル無しです。

言い忘れてましたが、なのは達はA・Sのリンフォース消滅の数カ月後です。それとルールは一応アニメですが、カード効果はOC Gです。

第四話 出会う魔導師と決別する獣

レッド寮前

「…異世界？」

なのはが2人に聞いた質問、それは『異世界を信じるかどうか』だ。その質問にユウは「精霊世界があるなら異世界もある」と思ってそう応えようと「すまねえが…」その前にシゲルが答えた。

「いきなり異世界なんて言われてもピンと来ねえよ…どづいうことかしっかり説明してくれ」

「シゲル、どうして」

ユウの言葉にシゲルは口を手を塞いで止めた。上手い具合に3人から見えないようにして塞いで3人には聞こえないように小さな声でユウに話しかけた。

「あいつらが普通の人間とは思えないのは分かるだろ？」

「……………（コクコク）」

まだ口が塞がれているのでユウは首を動かして返事することにした。

「だが俺達と同じ様に精霊が見えるとも限らない。他にもお前のスピリットを狙っているかもしれない…確実にロクなことじゃないが…此処はできるだけ情報を引き出す。分かったか？」

「…（コク）」

「俺達にいきなりそんな事を言った理由も含めて説明してくれないか？」

何事も無かったかのようにシゲルが3人に言った。3人はシゲルとコウのやり取りに気付かなかったのか、説明を始めた。

「私達は『時空管理局』です。あなたたちにロストロギア反応があるので一緒に来てもらえませんか？」

「時空管理局？ロストロギア？一体」

「なんのことだ？」その言葉を言う前に足元に巨大な円サークルが現れると強力な光が辺りを包み込んだ。

「??？」

「っ…!!？此処は…一体…!？」

「…明らかに…アカデミアではないな」

「そうだ」

見知らぬ機械的な場所に飛ばされたユウとシゲルは辺りを見回してそう言った。何処かのコンテナの中みたいな感じで出入り口が一か所ある。するとそこから緑の髪の女性と黒髪の少年が現れた。それに気付いたユウは少しオドオドしているがシゲルは右足を半歩前に出して少し警戒している。

「あんた等はいったい何者だ？」

「私はこの『艦』^{ふね}の艦長のリンディ・ハラオン。こっちは息子のク
ロノよ」

「…俺は「獣斬君と聖牙君ね、話は聞いてるわ」…そりゃどうも」
「ねえ、艦ってどういうこと？」

ユウがシゲルの後ろから疑問になった事を聞いた。確かにこの場所が船内だと言われても違和感が無い。だがそれにしては静かすぎる。船なら多少の波の揺れと、小波が聞こえるはずだ。それが飛行船なら気圧の関係で耳が痛くなるか、耳鳴りがするはずだ。

「ここは巡行艦『アースラ』の訓練室…まあ平たく言えば宇宙船

の中だ」

「宇宙船!?!」

ユウとシゲルは予想外だと言わんばかりに驚きの声を上げてしまった。そのはずだろう、いきなり現在地が「宇宙船」と言われるのだからだ。その時船内アナウンスが流れた。

『提督、なのはちゃん達が『あの子』を連れてきましたよ』

「分かったわ。私の部屋に通して。あなたたちもこちらへ」

リンディはユウとシゲルにそういうと訓練室を出た。クロノは2人を出るのを待っているがユウはシゲルの服を少し掴んで小声で聞いた。

「どうするつもり?」

「一先ず行くしかないだろう…それに『あの子』って言うのが気になる。まあ、心配するな。喧嘩ならだれにも負けねえよ」

シゲルはそう言ってユウの頭に手をポンと乗せて撫でた。2人は一応同年だが何処かシゲルは大人びており、そしてユウは子供の様に無邪気だから兄弟のようにも見える。

リンディの部屋

「……………」

部屋に入った途端2人は言葉を失った。機械的な部屋なのは同じだが置いてあるモノが　ししおどし、畳と和風で部屋の景觀と全く合っていない。と、そこにはリンディの他になのは、フェイト、はやて、クロノと

「ツバキ!？」

「ユウ……」

ツバキが疲れた表情で座っていた。どうやら寝る寸前だったらしく真っ白のパジャマを着ている。ユウとシゲルは寮に着く寸前で連れてこられたから制服のままだ。

するとリンディはお茶を出した。それを受け取った3人だがリンディは横に置いていた砂糖を大匙で……

「……………」

ドン引きするほど入れている。それにクロノは呆れているのでいつもの事なんだろう。流石にのどが渴いたのかユウとツバキはそのま

ま飲んでいるが、シゲルはお茶を置いたまま腕を組んでいる。

「あなたはいる？」

「結構だ…それよりも早く説明を願いたい。明日は授業もあるし…
ユウとツバキも疲れている」

「そうね…では説明します。まずは…」

そこからリンディは時空管理局、そしてロストロギアの説明を始めた。見たことも聞いたことも無い世界に3人は静かに聞いている。

「つまり大規模な警察と軍隊を合わせたモノが正義の組織が時空管理局で…ロストロギアは滅んだ世界の遺産…という感じか」

「そうだな…大雑把に言えばそれで合ってる」

「ロストロギアは危険なモノなの…」

「そうね…ある世界ではロストロギアの暴走で消滅した事もあるのよ…」

なのはの言葉に続くようにリンディが悲しそうにそう言った。ちなみに話が理解できないのかユウは少しオーバーヒートして頭から湯気が出ている。

話が長かったのかツバキはウトウトしている、というかユウに寄り掛かって半分寝ている。それを見たリンディは眠たいのなら寝るよ
うに伝えるとツバキは静かに寝た。

そして本題に

「そのロストロギアとはどのようなものだ？」

「分からないわ。判明してるのは特殊な力が宿っていることしかね
…」

特殊な力 シゲルは初め精霊のカードかと思った。イナ、ダーク、
ガール、ウリイは確かに特殊な力ともいえる、が十代もハネクリボ
ーを持っている。それならば十代もこの場にいるはずだ。

「……………カードは渡せない…と言ったらどうします？」

突然ユウが口を開いた。それに初めは全員言ってる意味が分からな
かった、がすぐにクロノは理解した。ロストロギアとは

「カードがロストロギアなのか!？」

「うん…昔不思議な力が宿ってるって…」

そう言った時ユウの体がわずかに震えていた。だがそれに気付かなかったクロノのは興奮しながらユウに詰め寄った。

「ならばそのカードを渡してもらおうか！そのカードは僕達が管理しな「黙れ」え？」

「やっぱりと言うべきか…予想通りと言うべきか…：ロクなことじゃないな…」

「なんだと！！」

「クロノ！」

シゲルの言葉にクロノがカチンと来たのかシゲルに言い寄るが、リンディがそれを制する。リンディはどういうことなのか説明を求めた。

「簡単なことだ、俺達には関係ない。管理局？ロストロギア？そんなもんは知らない。俺達は勝手に此処に連れて来られ、訳のわからない話をされ、その上大切なモノを奪われるのが嫌なだけだ」

そう言うとシゲルは寝ているツバキを背負って立った。ユウも無言でシゲルの横に立っている。

「俺達は帰らしてもらおう。明日から授業が始るし、ユウももう疲れ

きっている」

「ふざけるな！ロストロギアをこちらに渡してもらおうぞ！」

そう言ってクロノは杖の様な物を構えた。それにシゲルは何もせず
にクロノを睨んでいた。それもはっきりと分かるぐらいの殺気を込
めて。

「一つ聞きたい…貴様等はいったい何様だ？無理やりここに連れて
来て、その上無関係のツバキを叩き起こして、拳銃の果てにはユウ
のカードを渡すまで帰さないだど？」

「……………分かりました。また後日話を「やらない。そもそも貴様等
が言うようにユウのカードがロストロギアだと言うのも、貴様等に
預けて安全だという保証はどこにもない」っ……………！！」

シゲルの言葉にリンディは苦虫を嚙んだような顔になる。シゲルの
言っていることは正論だった。それも正論すぎるほどに

「第一それが本当だとしても俺達は協力する義理も義務も無い。こ
れが俺の言いたいことだが…分かるか？」

「……………分かりました。クロノ、3人を案内しなさい」

「かあさ、艦長……！」

リンディの判断にクロノが反発した。そりゃあ目の前に目標ロストロギアがあるのに自分の母親が手を引こうとしているのだから無理も無い。

「…行くぞユウ」

「……………」

一方ユウも少し俯いていた。その理由は自分の持つ『カード』の所為でシゲルとツバキに迷惑がかかったのだ。だがシゲルは気にしていない様子でツバキを背負って部屋を出ようとした。

「獣斬君……それと聖牙君も」

「……………なんだ？」

部屋を出ようとしたシゲルはリンディが呼びとめた。だがただ単に引きとめるのではなく、何かの決意をしたような眼だった。

「あなた達に一つ聞きたいことが…後でツバキさんにも聞いといてください。『世界の矛盾』という言葉に…聞き覚えはありませんか？」

「世界の…矛盾…？」

「ボクは聞いたことが無いです」

その言葉にリンディは「そうですか…」と納得するともう何も言わなかった。クロノも黙って2人を先導した。

ユウとシゲルの部屋

「『世界の矛盾』…か…」

「ねえシゲル。ツバキどうする？寮に送るのは…」

ユウは寝ているツバキの方を見た。このまま外に寝かせるわけにはいかない。かと言って女子寮に送るにしては時間（現在1時半）とバシヤマ恰好で明らかに変な目で見られる。

「仕方が無い…オレのベットに寝かせる。明日の朝早くに寮に送って何とかごまかすしかないだろ」

そう言ってシゲルは毛布を取り出すと壁に寄り掛かって寝た。ユウは何か言いたそうだったがシゲルが寝るのを見てツバキをベットに寝かせると自分のベットに入って寝た。

ちなみに現在2時半。

アースラ

「母さん！あの3人を返してもよかったですか!？」

「クロノ、彼の言う通りよ。それにクロノが聖牙君に詰め寄ったのも褒められる行為ではないわ」

「っ……………!?!」

リンディはそういうとシゲルが残したお茶を見た。クロノぐらいの年の割にすっかりして周りをよく見ていた。その上相手に言い分を言わせない話術を持っている。

「…母さん…なぜ『あの事』を…ユウ達に…?」

「恐らく彼らが関わるのはもっと先…でも…もしもの時があるかもしれないからね…」

フェイトの質問にリンディはそう言つと残っていたお茶を飲み干した。

アースラ：通信室

大小様々なモニターが展開しているその部屋になのはとはやて、エイミイと言う少女がいた。モニターには長いブロンドの髪の少年が映っており、背後には巨大な本棚があった。

「ユーノ君。ユウ君達の事何か分かった？」

「ううん…データベースには変わった事は無かったよ。シゲルって人も特には…けど」

「けど？」

ユーノの言葉にはやてが聞き返した。ユーノが歯切れが悪い時は大概何かがある、それが今までの経験だった。

「ツバキのデータ…無いんだ。それも両親や生まれた場所とか…全部ね」

「確かに…それはおかしいね。地球なら戸籍があるはずなのにそれが無いってことは…『次元漂流者』かもしれないね」

次元漂流者 それはこの世界の人間ではないことを意味する。そうなれば時空管理局が保護するのが普通なのだが、それはまだ可能性たでしかないから強行はできない。もしかし

「でも…ツバキはなんであつてもツバキだよ！」

「…そうやな。ツバキは私達の友達や」

「おい、ツバキ起きろ」

「う…ん…？あれ？シゲル？どうして私の部屋に？」

シゲルの言葉で起きたツバキはシゲルの顔を見て首を傾げた。まだ寝ぼけているのか此処が自分の部屋だと思っていた。

「…ここは俺とユウの部屋だ。昨日の寝る寸前の事覚えてるか？」

「昨日の…？あ、そういえばなのはに呼ばれて…宇宙船に…夢じゃなかったんだ」

思い出したのかツバキの目はハッキリとしていた。そりゃ昨日「宇宙船に乗った」という事実があるのだから無理も無い。

「……………」

「あ…ユウ…どうしたの？」

「シゲル……どうして『カード』の事を聞かないの？」

『カード』と言う単語にツバキは首を傾げている。途中で寝てしま

つたツバキは事情を知らないためシゲルが簡単に説明をした。

「まあ…聞く必要も無いからな。別に話したくないなら離さなくてもいい」

「私も…言いたくない事なら私もある。それにユウみたいに特殊なカードなら私も持つてるの」

「え…ツバキ…も!？」

ユウは自分と同じ様なカードがあるのを聞いて驚いた。それにシゲルもデッキケースから一枚のカードを取り出した。

「俺も持つてる。ただあの時言いたくなかったからな」

「シゲルも……」

シゲルの言葉に更に驚いていた。この場に自分と全く同じような境遇の人間が2にいたのだからだ。

「まあ…ユウ。カードを持っている俺が言うのもなんだが…」

シゲルはそういうとカードをケースに戻し、真っ直ぐとユウ、そしてツバキの目を見た。

「それがなんだって言うんだ？それがお前がユウだと、ツバキだという証明か？そんなのが無くたってお前らはお前ら、俺は俺だ。」

そいつとシゲルは時計を見た。もう朝日が出てくる時間だった。

「そろそろツバキを寮に送った方がいいな」

「あ、その前に…ツバキって『世界の矛盾』って知ってる？」

「っ！？」

ユウの質問にツバキの体が一瞬だけ震えた。ユウもシゲルもそのことに気付いていた。

「ツバキ…？」

「……………知ってるわ。けど……………」

そう言ってツバキは俯いてしまった。おそらく何か言いたくない事があるのだろう。それに気付いたユウは少しあたふたしてしまった。

「い、いめん。言いたくないならいいけど」

「…うん。いつか…話す」

こうして『時空管理局』との初めての対面は終わった。ちなみにこの後、3人は授業中に寝てしまったのは言っまでも無い。

第五話 精霊（スピリット）VS英雄（ヒーロー）（前書き）

はい、ネイビーです。

…………正直何も言うことがなくなっている。
まあ、どうぞ

第五話 精霊（スピリット）VS英雄（ヒーロー）

管理局との接触から2日後。接触の後から管理局からは何も言わなくなっていた。だが、なのは達はツバキと仲良くしている様で、その所為かユウやシゲルとも交流がある。

初めは警戒していたシゲルも警戒するだけ無駄だと判断した。

そして今は普通のアカデミアの学生として授業を受けているのだが

「シニョール丸藤、フィールド魔法の説明をお願いするノーネ」

「えええと……あの……」

「フン、やっぱりオシリスレッドの生徒には、答えられない質問なの〜ネ」

クロノスが翔にフィールド魔法の説明を求めた。だが答えられない翔はモゴモゴしていると、周りから茶々を入れる奴が現れた。すると十代が手を上げて発言をした。

「でも先生。知識と実戦は関係ないですよね」

「？」

「だって俺もオシリスレッドの一人ですけど、先生に勝っちゃたし」

それを聞いてクロノスはハンカチを悔しそうに啜っていた。

「ううう…マンマミーヤ…!!」

「あ、先生」

ユウが何かを思い出したように手を上げると全員がユウを注目した。クロノスは話の流れが（自分が十代に負けた話から）変わると思っ
て期待したが、

「それを言うとボクもオシリスなのに先生に勝ちましたよね。それ
にボクと十代はフィールド魔法のおかげで勝ちましたよ」

「ノオ〜ウ!!」

クロノスは大泣きした。それと同時に教室内に笑い声が上がった。

そして授業終了後

「お〜い！ユ〜ウ〜」

「ん？あ、十代」

レッド寮に戻ろうとしたユウに声をかけたのは十代だ。

「どづしたの？」

「いやあ、前に戦う約束したのに時間決めて無かったからな……」

「じゃあ今する？」

十代の言葉にユウは笑顔でそう言った。確かに今2人とモデュエルディスクとデッキを持っている。

という訳で

「」「デュエル……」

ユウVS十代

「ボクのターン！ドロー……」

ユウはデッキから一枚引いた。そして確認すると

「モンスターを伏せて、カードを二枚セット!!ターンを終了!!」

「どうして裏守備なんやろう?」

「スピリットは表側にいる時エンドフェイズに手札に戻ってしまう。壁にするのなら裏守備じゃないとできない」

2人が戦っている所の近くにシゲルとツバキ、はやて、三沢くみぞがいた。
ん?へんな言葉が見えた?キノシダトオモウヨ

はやての疑問に三沢が答えた。それに3人が「三沢居たの?」的な表情をしていたが気にしないでおこう。

ユウノ手札3枚 伏せモンスター1体 伏せカード2枚

「行くぜ、オレのターン!!」

十代の手札 それは今までで最高の手札だった。

「融合を発動!!手札のフェザーマンと、バーストレディを融合!
エレメンタヒーロー
!現れる、E・HEROフレイム・ウィングマン!!」

フィールドに緑の体に赤い竜の頭を右手に持つヒーロー、十代のフ

エイバリットカードのフレイムウイングマンが現れた。

エレメンタロー

E・HERO フレイム・ウイングマン

融合・効果モンスター

星6 / 風属性 / 戦士族 / ATK2100 / DEF1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「更に手札からエレメンタローE・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚!!」

エレメンタロー

E・HEROスパークマン

通常モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK1600 / DEF1400

様々な武器を使いこなす、光の戦士のE・HERO。

聖なる輝きスパークフラッシュが悪の退路を断つ。

「行くぜ、バトルフェイズ!! フレイム・ウイングマンで攻撃!!
フレイム・シュート!!」

「クツ…」

ユウ / LP4000

ユウの場のモンスターが破壊されてしまった。が、ユウにダメージは無かった。

「今破壊されたのは竜宮之姫^{オトヒメ}。攻撃力は0だからフレイム・ウィングマンの効果ダメージは無い！！そして竜宮之姫^{オトヒメ}の効果発動！！スパークマンを守備表示に変更する！！」

竜宮之姫^{オトヒメ}

スピリットモンスター

星3 / 光属性 / 魔法使い族 / ATK

0 / DEF 100

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚・リバースした時、相手フィールド上の表側表示モンスター1体の表示形式を変える事ができる。

十代の場のスパークマンが防御態勢になった。これでこのターンも攻撃できるモンスターは居なかった。

「やるなあ。オレはカードを一枚伏せて、ターンを終了する」

十代 / 手札1枚 フレイム・ウィングマン スパークマン

「ユウも十代も流石だな」

「そうだね…一ターンでフレイム・ウィングマンを召喚した十代も、

それをダメージ0で防いだユウもすごい…!!」

シゲルの言葉にツバキも同感した。だが此処でユウはフレイム・ウイングマンを破壊できるのかどうかがこの先のデュエルを決めるだろう。

「ボクのターン…!!ドロー…!!」

ユウは引いたカードを見て、何処か安心した様子だった。おそらく引いたのは

「ボクはフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動…!!」

フレイム・ウイングマンを倒す布石だろう。

「死皇帝の陵墓の効果発動…!!ライフを2000支払い、来て…スピリットモンスターヤマタノドラゴン八俣大蛇を召喚…!!」

ユウ / LP 4000 2000

ヤマタノドラゴン
八俣大蛇

スピリットモンスター

星7 / 炎属性 / ドラゴン族 / ATK 2600 / DEF 3100

このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、手札が5枚になるまでデッキからカードをドロウする。

「更に手札から装備魔法、ヤタノカガミ八汰鏡を装備！！バトル！ヤマタノドラゴン八俣大蛇でフレイム・ウィングマンに攻撃！！屍山血河！！」

ヤマタノドラゴン八俣大蛇の口から多くの衝撃波がフレイム・ウィングマンを襲った、
が

「畏カード、ヒーローバリアを発動！！このカードの効果により攻撃を一度だけ無効にする！！」

ヒーローバリア

通常畏

自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

ヤマフレイム・ウィングマンが左手を前に出すと透明な壁が出現し、ヤマ八俣大蛇の攻撃を防いだ。

「だめか…このままターンを終了する！」

ユウノ2枚 ヤマタノドラゴン 八俣大蛇 + ヤタノカガミ 八汰鏡 伏せ2枚

「ん？どうして八俣大蛇が手札に戻らないんだ？」

「装備してある八汰鏡の効果。ヤタノカガミ 装備してあるスピリットモンスターは手札に戻らなくてもいいだよ」

ヤタノカガミ
八汰鏡

装備魔法

スピリットモンスターにのみ装備可能。

装備モンスターはエンドフェイズ時に手札に戻る効果を発動しなくてもよい。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。

「これで、今度はユウが有利になったね」

「2人とも…すごいな」

ツバキの呟きにはやてが静かに言った。先程とは逆に攻撃力2600を誇る八俣大蛇を1ターンで召喚したユウも、それを防いだ十代もすごい。

「こりゃ、先にダメージ与えた方が有利だな」

「オレのターン、ドロー！！おつ、こいつは…」

十代は引いたカードを見て少し喜んでいた。恐らく八俣大蛇ヤマタノドラゴンを破壊
することのできるカードだろう。

「俺はフィールド魔法、まてんろう摩天楼 - スカイスクレイパー - を発動！
！」

それまで墓場の様だったフィールドが、巨大なビルが立ち並ぶ 魔
天楼 へと変わった。

「スカイスクレイパーの効果！フィールド上のE・HEROは攻撃
する時、攻撃力が低い場合攻撃力を1000上げる！！」

まてんろう摩天楼 - スカイスクレイパー -
フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、
攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い
場合、
攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントア
ップする。

「これで十代が勝てるはずや！」

はやての言うとおりこれでフレイム・ウイングマンが八俣大蛇を破壊すれば効果ダメージ3100とスパークマンの攻撃1600でユウのライフは0になる。

「これでフレイム・ウイングマンは八俣大蛇を越えた！！スパークマンを攻撃表示に変更してバトル！！フレイム・ウイングマンの攻撃！！スカイスクレーパーシュート！！！」

フレイム・ウイングマン / ATK 2100 3100

体が炎に包まれたフレイム・ウイングマンが、八俣大蛇に体当たりをする、が

「装備されている八汰鏡ヤタノカガミの効果発動！！装備されてるこのカードを破壊することで、装備モンスターの破壊を無効にする！！！」

「なに！？だが、戦闘ダメージは受けてもらおう！！！」

ユウ / 2000 1500

「スパークマンで、八俣大蛇ヤマタノドラゴンに攻撃！！スパークフラッシュユー！！」

「八俣大蛇ヤマタノドラゴン！！屍山血河！！」

スパークマン / ATK 1600 2600

スパークマンの放った電撃と、八俣大蛇ヤマタノドラゴンの放った衝撃波がぶつかり合い大爆発を起こした。そして煙が晴れるとフレイム・ウィングマンしか場には残っていなかった。

「俺はこのままターン終了！！」

十代 / 手札1枚 フレイム・ウィングマン

「どうする気だユウ…もう死皇帝の陵墓も使えず、壁を出してもフレイム・ウィングマンの効果でLPは0になる」

「ボクのターン、ドロロー！！」

シゲルの言葉の意味 絶体絶命だった。手札3枚と伏せカードの2枚で逆転するてはあるのか……

「っ！ボクは…伏せていた魔法カード『テラ・フォーミング』を発動！！フィールド魔法『魂の聖地 スピリット・フィールド』を手札に加える！！」

「スピリット・フィールド？」

聞いたことのないカードに4人と十代は首を傾げていた。名前からするとスピリットモンスター専用のフィールド魔法だろうが、そんなカードは聞いたことは無い。

「手札からフィールド魔法、スピリット・フィールドを発動！！」

今度はフィールドが魔天楼から青い光が立ち込める聖域へと変貌した。

「スピリット・フィールドの効果発動！！墓地のスピリットモンスターをゲームから除外することで墓地にいるレベル4以下のスピリットを効果を無効にして召喚できる！！ボクは八俣大蛇ヤマタノドラゴンをゲームから除外して竜宮之姫オトヒメを特殊召喚する！！」

魂の聖地 スピリット・フィールド
フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する場合、スピリットモンスターは召喚条件を無視して特殊召喚できる。自分の墓地に存在するスピリットモンスターを除外することで、自分の墓地に存在する星4以下のスピリットモンスターを特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使えず、特殊召喚したスピリットモンスターの効果は無効化される。

フィールド上のスピリットモンスターは手札に戻らなくてもよい。

「更にもう一枚の伏せカードデュアルサモン二重召喚を発動！！手札からいなほのしろつ因幡之白兔を召喚！！！」

いなほのしろつ
因幡之白兔

スピリットモンスター

星3 / 地属性 / 獣族 / 攻 700 / 守 500

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

相手フィールド上にモンスターが存在しても相手プレイヤーに直接攻撃する。

『 やつと出番だよ〜 』

「いじめんね」

ユウのフィールドに因幡之白兔が現れると同時に精霊の声が響いた。それを聞いたのか十代が驚いた顔をしている。

「ユウ、お前精霊が見えるのか!？」

「うん、十代の横にハネクリボーがいるのも見えるよ」

そうユウが言うと十代の横にいたハネクリボーが羽を上げると、イナが同じように手を上げた。

「まあその話はあとで…デュアルサモン二重召喚の効果でボクはいぬのこ因幡之白兔とオト竜宮之姫ヒメを生贄に現れる!!ヒノカグツチ火之迦具土!!」

ユウの場の2体のモンスターが消え、そして炎を纏った男性が現れた。

「バトル!!ヒノカグツチ火之迦具土でフレイム・ウィングマンを攻撃!!ヒノカグツチ紅蓮滅殺拳!!」

「くう…フレイム・ウィングマンが…」

炎を纏った火之迦具土ヒノカグツチの拳でフレイム・ウィングマンは破壊された。その余波で十代にもダメージを与えた。

十代 / LP 4000 3300

「ターン終了…スピリット・フィールドで火之迦具土ヒノカグツチは手札に戻らない」

ユウ / 手札 1枚 火之迦具土ヒノカグツチ

「十代はそのままでは負けるな」

「火之迦具土ヒノカグツチの効果…それで十代はまさに絶体絶命だ」

「オレのターン!!」

十代がカードを引こうとした、その瞬間。

「火之迦具土ヒノカグツチの効果発動!!このカードが戦闘を与えた次の相手の
ドローフフェイス前に、相手は手札をすべて捨てる!!」

「何だと!?!」

十代の手札 死者蘇生が墓地へと送られた。そして手札、場の力
ードは0

「クツ…ドロォー!!俺はE・HEROバブルマンエレメンタセーローを守備表示で特殊
召喚!!バブルマンはこのカード以外手札が無い時、特殊召喚がで
きる!!更にフィールド上と手札にカードが無い時、カードを二枚
ドロォー!!」

エレメンタセーロー
E・HEROバブルマン

効果モンスター

星4 / 水属性 / 戦士族 / 攻 800 / 守 1200

手札がこのカード1枚だけの場合、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に
自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、
デッキからカードを2枚ドローする事ができる。

引いたカード、それを確認すると2枚とも伏せた。

「俺はターンを終了する!!」

十代ノ手札0枚 バブルマン 伏せ2枚

「ボクのターン、ドロー!! ボクはスピリット・フィールドの効果
で竜宮之姫オトシメを除外して、
因幡之白兔いなはのしんじゆたんを特殊召喚!!」

「ただいま」

イナがユウの場に再び現れた。だが直接攻撃ができず、手札にも戻らないので守備表示で現れた。

「更に火之迦具土ヒノカグツチに装備カード、
草薙剣クサナギノツルギを装備!!そしてバトル!
!バブルマンを攻撃!!」

剣を持った火之迦具土ヒノカグツチがバブルマンを切り裂いた、と同時に

クサナギノツルギ
「草薙剣の効果!!! 装備したモンスターが守備モンスターを攻撃して、攻撃力が守備力よりも上だった時、その分だけ戦闘ダメージを与える!!!」

「なに!?!」

十代 / LP 3300 1700

「このままターン終了!!!」

ユウノ手札1枚 ヒノカゲツチ
火之迦具土 + 草薙剣 クサナギノツルギ
因幡之白兔 いなばのしろつきぎ

「へへ...」

「? どうしたの」

絶体絶命の状況で十代は笑っていた。それにユウは首を傾げると十代は本当に楽しそうに答えた。

「だってワクワクするだろ!!! スピリットモンスター... 予想よりも強いぜ!!!」

「ふふ... けど、もう終わりだね。このターン... 何も出来なかったらボクの勝ちだ」

「確かに…十代がもしも壁モンスターを召喚しても火之迦具土ヒノカグツチと因幡之白兔なほのしんじゆまかの攻撃でライフは無くなる…」

ユウとシゲルの言うとおりだ。どれほど守備力が高くても十代のデッキでレベル4のモンスターの守備力なら2000だ。貫通で800、そして因幡之白兔で700の計1500だ。

だが十代は勝ち負け以前に勝負を楽しんでいた。

そして十代は静かにデッキの一番上のカードに指を置き、目を瞑つて

「行くぞ!!オレのターン!!ドロー!!」

引いたカードを確認した十代は 勝利を確信した。

「俺は伏せていた、ヒーローライブを発動!!自分フィールド上にモンスターがない時、ライフを半分払ってデッキからE・HEROエレメントヒーローを一体特殊召喚する。来い、E・HEROクレイマン!!」

ヒーローライブ

通常魔法

自分フィールド上にモンスターが表側表示で存在しない場合、ライフポイントを半分払って発動する事ができる。自分のデッキからレベル4以下の

「E・HERO」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

十代 / LP 1700 850

十代の場に土で出来た巨大なヒーローが現れた。

エレメンタヒーロー

E・HEROクレイマン

通常モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / ATK 800 / DEF 2000

粘土でできた頑丈な体を持つE・HERO。

体をはって、仲間のE・HEROを守り抜く。

「更にミラクルフージョンを発動!!自分フィールド上のクレイマン、墓地のバーストレディ、フェザーマン、バブルマンを融合!!」

「!4体融合!?!」

ミラクルフージョン

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「現れる!!究極のE・HEROエリクシーラー!!」

エレメンタヒーロー

E・HEROエリクシーラー

融合・効果モンスター

星10 / 光属性 / 戦士族 / ATK2900 / DEF2600

「E・HERO フェザーマン」 + 「E・HERO バーストレディ」

+ 「E・HERO クレイマン」 + 「E・HERO バブルマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの属性は「風」「水」「炎」「地」としても扱う。

このカードが融合召喚に成功した時、ゲームから除外された全てのカードを

持ち主のデッキに戻し、デッキをシャッフルする。

相手フィールド上に存在するこのカードと同じ属性のモンスター1体につき、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

十代の場に光り輝く最強のヒーローが現れた。すると火之迦具土と
因幡之白兔いなばのしろうさぎから出た光がエリクシーラーに吸い込まれた。

「エリクシーラーの効果!! 相手フィールド上に存在する同じ属性のモンスター×300ポイント攻撃力が上がる!! そしてエリクシーラーは光、風、水、炎、地属性としても扱う!! よって600ポイント攻撃力が上がる!!」

エリクシーラー / 2900 3500

「そして最後はこれだ！！魔法カード、ヒーローエフェクト！！墓地に存在するE・HEROと名のつく融合モンスターをゲームから除外して発動！！このターン終了時までオレの場のモンスターはその効果を得る！！」

ヒーローエフェクト

通常魔法

墓地のE・HEROと名のついた、
エレメンタヒーロー

融合モンスターをゲームから除外し自分のフィールド上に存在する、
モンスター1体を選択する。

選択したモンスターはエンドフェイズまで除外したモンスターの効果を得る。

このターン選択したモンスター以外のモンスターは攻撃することができない。

選択したモンスターはエンドフェイズに除外される。

「効果により、フレイム・ウィングマンをゲームから除外！！そしてエリクシーラーはフレイム・ウィングマンの効果を得る！！」

「…負けか」

透明なフレイム・ウィングマンがエリクシーラーに吸収され、右手に赤い光が宿った。それを見てユウは静かに呟いた。

「バトル！エリクシーラーで火之迦具土に攻撃！！フュージョニスト・マジスタリー・シュート！！」
ヒノカグツチ

「クッ……」

「あ、そうだよ。出てきてイナ」

ユウの言葉に反応するようにイナが現れた。と、それに合わせてシゲルとツバキもウリイとダークを出した。

「俺たちも見える。こいつは相棒のウリイ」

『よろしく頼むぞ。結城殿』

「私も…私のお気に入りのダークよ」

『よろしく』

「おう！よろしくな！！」

『クリクリ〜』

こうして精霊を交えた話は終えた。あることを除いて。

「（火之迦具土ヒノカゲツチを出したターンのドロウしたカード……何だっただろうな）」

明らかにユウが顔を曇らせた、最後まで使われなかった手札。気になったシゲルはこっそりとユウに聞いてみることにした。

「なあ、ユウ。最後まで残った手札は…何だったんだ？」

「……ボクの『カード』を出すためのモンスターカード」

そう聞いたとき、ユウはそのカードに何かトラウマがあることを感じていた。

第五話 精霊（スピリット）VS英雄（ヒーロー）（後書き）

は、い、ども、……前書き通り言うことがないです。

ユウたちが負けるとしたら、十代とかな……って感じですね。

ちなみにユウの引いたカードは普段のユウなら使わないカードです。

オリジナルカード

魂の聖地 スピリット・フィールド

ヒーローエフェクト

第六話 王道？お約束？ 獣VS儀式の魔導師 前編（前書き）

はいネイビーです

今回は初の前後編…そしてあり得ないカードの数々…
それがダメな人は戻ってください。

ではござい

第六話 王道？お約束？ 獣VS儀式の魔導師 前編

ユウとシゲルの部屋

ユウと十代が戦った日の夜。ユウとシゲルは部屋でデッキの調整を行っていた。

「そういえば…シゲル」

「なんだ？」

デッキ調整の最中にふとユウが気になった事を聞いた。ちなみに今部屋には2人しかない。

「シゲルのデッキ…グラティアルヒースト剣闘獣^グってあまり見たことが無いよね…それにベストロウリィやガイザレスは見たこと無いよ」

「…まあ、仕方ないと言ったら仕方ないけどな……」

そう言いうとシゲルはカードを一枚取り出し、ユウに渡した。それは

「オレの『カード』だ。」

「『カード』って……これ……」

ユウはそう言っただけでカードを見た。そのカードは何処か神秘的な雰囲気を感じているが、同時に言葉にできない恐怖があった。

「そのカードは剣闘獣グラディアルビーストにしか扱えない。そしてそのカードの存在を知ったペガサスさんが剣闘獣を作ったんだ。一般的に出回ってる剣闘獣グラディアルビーストと、それとは別にベストロウリイ専用のガイザレスを俺にくれた……ってところだな」

「じゃあ、このカードが剣闘獣グラディアルビーストの元になってるってこと？」

「そういうことだ。最もそいつを召喚した事は一度も無いけどな」

そう言うとシゲルはカードをデッキホルダーに入れた。するとユウもデッキからカードを一枚取り出した。

「じゃあ、ボクの『カード』も見せてあげる」

「……いいのか？」

シゲルの問いにユウは無言で頷くとカードを渡した。その『カード』を見たシゲルは何処か、自分の『カード』と似た雰囲気を感じた。

「それがボクのカード」

「……………神の…カードか」

女子寮

お約束と言っか、王道と言っべきか

「僕は手紙で呼びだされたんだ!!」

翔が捕まっていた。唯一違うのがその場にツバキ、なのは、フェイトがいたことだ。
そして

レッド寮

「ユウ！シゲル！大変だ！！翔が捕まった！！」

……………お約束。

女子寮

「　　という訳でこうなったの…」

「誰に言ってるユウ」

ユウの独り言にシゲルが静かにツッコミを入れた。十代の前には明日香達と翔、ツバキ達がいた。ちなみに今翔はグルグル巻きに縛られている。

「覗きは人として駄目だよ」翔

「僕は無実だあ!!」

ユウの言葉に翔は声を張り上げた。その横にいたシゲルは冷ややかな目で翔を見ていた。

「覗いたのなら人として軽蔑するがな」

「覗いてなあ〜い〜!!!!」

シゲルの言葉に翔はさらに張り上げた。少し泣きそうだったからユウとシゲルは笑いながら謝った。

「まあそついうことだ。翔はそんな真似はしねえよ」

「あんだね！そいつは風呂場の近くをうろついていたのよ！！」

明日香と共に風呂に入っていた枕田まくらじた ジュンコがそうシゲルにつつかかてきた。確かに彼女達からしたら『うろついていた 見たかもしれない』のと同じに感じるだろう。

「で…ボク達にどうしてほしいの？」

「え？」

ユウの言葉に浜口はまぐち ももえが首を傾げていた。確かに「翔を返せ！」とか「勝手にしろ」とかなら分かるが、「どうしてほしい？」と聞いて来るとは思わなかったからだ。

「俺達まで呼んだってことは何か要求があるんだろ」

「そこまで分かっているのなら話は早いわ。私となのは、フェイトと戦って全員に勝てるのならこの子は返してあげるわ。もしも一人でも負けたのなら…」

「翔は…居なくなるか」

明日香の言葉にシゲルはそう呟いた。それに翔は喚いていたが他の

メンバーは無視をしていた。そして各々3か所に分かれて決闘^{デュエル}することになった。

シゲルVSフェイト

「なんでこうなるんだか…」

「ま、まあ…勝ち負けはともかく勝負を楽しもうよ」

何処からか翔の「勝ち負けは大事だよ…!!」という声が聞こえた気がするが、気のせいにしておこう。

「デュエル!!」

シゲルの先行から始まった。初期手札の5枚は良いともいえず、また悪いとも言えなかった。

「俺のターン、ドロ―!!」

だが、様子見としては良い手札だった。

「俺は剣闘獣^{グレイアールビースト}ホプロムスを守備表示で召喚!!カードを伏せてターン終了!!」

シングル/LP4000 手札4枚 ホプロムス 伏せ一枚

実を言うとシゲルはフェイトのデュエルを見たことが無かった。またフェイトがどういうデッキを使うのかも知らなかった。

「私のターン、ドロー!!」

その為、最初のターンは様子見をする必要があった。そして場にはホプロムスとカードが一枚、それで十分様子見ができる

「私は魔法カード高等儀式術を発動!!」

「儀式デッキか…?」

できるはずだった。

「そうだよ。高等儀式術は手札の儀式モンスターと同じレベルになるようにデッキの通常モンスターを墓地に送ることで儀式召喚ができる!!」

高等儀式術

儀式魔法（制限カード）

手札の儀式モンスター1体を選択し、そのカードとレベルの合計が同じになるように自分のデッキから通常モンスターを墓地へ送る。選択した儀式モンスター1体を特殊召喚する。

「デッキの通常モンスターゴギガ・ガガギゴを生贄に捧げて手札の終焉の王 デミスを儀式召喚！」

ゴギガ・ガガギゴ
通常モンスター

星8 / 水属性 / 爬虫類族 / ATK2950 / DEF2800
既に精神は崩壊し、肉体は更なるパワーを求めて暴走する。
その姿にかつての面影はない…。

終焉の王 デミス

儀式・効果モンスター（準制限カード）

星8 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK2400 / DEF2000

「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。

フィールドか手札から、レベルの合計が8になるよう
カードを生け贄に捧げなければならない。

2000ライフポイントを払う事で、

このカードを除くフィールド上のカードを全て破壊する。

「……………ヤバイな」

「デミスの効果！！ライフを2000払いフィールド上のデミス以外のカードをすべて破壊する！！終焉の嘆き！！」

フェイト / LP4000 2000

デミスの体から現れた闇がシゲルの場のホプロムスとカードを包み込んだ、が

「伏せカード、ディフェンシブ・タクティクスを発動！！剣闘獣が場にいる時のみ発動する事が出来る。俺はこのターン戦闘ダメージは受けず、モンスターは戦闘破壊はできない…が、効果でやられるな…」

シゲルがそう言った瞬間ホプロムスが闇に吞まれて消えて逝った。若干シゲルを恨めしそうに見ていたのは気のせい ではないな。

「ディフェンシブ・タクティクスはデッキの一番下へ戻る」

「このターン私はまだ通常召喚をしてない。マンジユ・ゴットを通常召喚、効果を発動！！デッキから儀式モンスターか、儀式カードを一枚手札に加える！私は儀式カード覚醒の証を手札に加えて魔法カード、儀式の準備を発動！！デッキから覚醒戦士かくせいせんし クーフリーンを手札に加えて墓地の高等儀式術を手札に加える！！」

マンジユ・ゴット

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / ATK1400 / DEF1000

このカードが召喚・反転召喚に成功した時、

自分のデッキから儀式モンスターまたは

儀式魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

儀式の準備

通常魔法

自分のデッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加える。

その後、自分の墓地から儀式魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

「そして儀式カード覚醒の証を発動！！フィールド上のマンジュ・ゴットを生贄に覚醒戦士 クーフーリンを召喚！！」

覚醒の証

儀式魔法

「覚醒戦士 クーフーリン」の降臨に必要。

フィールドか手札から、レベルが4以上になるようカードを生け贄に捧げなければならない

覚醒戦士 クーフーリン

儀式・効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK 500 / DEF 1000

「覚醒の証」により降臨。

自分の墓地に存在する通常モンスター1体をゲームから除外する。

次の自分ターンのスタンバイフェイズ時まで、

このカードの攻撃力はこの効果によってゲームから除外した通常モンスターの攻撃力分だけアップする。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

フェイトの場の仏は消え、長い槍をもった戦士が現れた。

「クーフリーンの効果！墓地に存在するゴギガ・ガガギゴをゲームから除外して攻撃力を次の自分のスタンバイフェイズまで上げる！」

「おいおい……」

フェイトの墓地からゴギガ・ガガギゴが現れると青い光になり、クーフリーンと同化した。

クーフリーン / ATK 500 3450

「私はターンを終了する！！」

フェイト / LP 2000 手札3枚 デミス クーフリーン

下手をしたらわずか1ターンでシゲルは負けていた。そのことを考えるとシゲルの背筋が凍るが、フェイトのデッキが分かったただけで十分だった。

「俺のターン、ドロー……！」

そして儀式デッキに有効な手段と今のフェイトの手札に高等儀式術があるから場合によってはゾークなどのカードによって破壊される可能性もあった。

「（……マイナス思考は最悪の結果を呼ぶ……あいつに倒す為には……手札が足りねえ……）天使の恵みを発動！！デッキからカード2枚引き、その後一枚をデッキに戻しシャッフルする！！」

天使の恵み

通常魔法（制限）

デッキから2枚ドロし、その後一枚をデッキに戻す。
このカードを発動するターン自分は、
特殊召喚及びバトルフェイズを行えない。

「スレイブウルフを守備表示で召喚！！カードを2枚伏せてターン終了！！」

場に青い片目に傷のある狼が現れた。

スレイブウルフ / DEF 1200

シングル / LP 4000 手札2枚 スレイブウルフ 伏せカード2枚

「私のターン!!」

クーフリーン / ATK 3450 500

フェイトはカードを一枚引いて考えていた。スレイブと名のついたカードはエイブとタイガーしか見たことが無い。スレイブの効果はデッキから剣闘獣を呼び込む効果が多い。

だが効果破壊なら

「私は高等儀式術を発動!! デッキからエルフの剣士と、音速^{ソニック}ダックを墓地に送って破滅の魔王 ガーランドルフを儀式召喚!!」

破滅^{はめつ}の魔王^{まおう}ガーランドルフ

儀式・効果モンスター

星7 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 2500 / DEF 1400

「破滅の儀式」により降臨

このカードが儀式召喚に成功した時、

このカードの攻撃力以下の守備力を持つ、

このカード以外のフィールド上に表側表示で存在する

モンスターを全て破壊し、破壊したモンスター1体につき

このカードの攻撃力は100ポイントアップする。

効果破壊ならスレイブウルフの効果は発動しないと踏んだフェイトは自分のモンスター諸共破壊しようとした。

「ガーランドルフの効果発動！！儀式召喚成功時、ガーランドルフの攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊する！！」

「スレイブウルフの効果発動！！このモンスターはカード効果で破壊された時、手札からレベル4以下の剣闘獣を呼びだす！！」

スレイブウルフ

効果モンスター

星3 / 土属性 / 獣族 / ATK 800 / DEF 1200

このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、

このカードが相手のカード効果によって破壊され墓地へ送られた時、手札から「剣闘獣」と名のついたレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚する。

このカードの効果で特殊召喚したモンスターは「剣闘獣」と名のついたモンスターの

効果で特殊召喚した扱いとなる。

ガーランドルフの咆哮でフィールドのモンスターは全滅した。それと同時にスレイブウルフの遠吠えが響き渡った。

ガーランドルフ / ATK 2500 2800

「俺は手札より剣闘獣レティアリイを守備表示で特殊召喚！！効果発動、相手の墓地のカード一枚をゲームから除外する！！高等儀式術を除外する！！」

「あゝ！！私の高等儀式術が…」

グラディアルヒースト

剣闘獣レティアリイ

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / ATK1200 / DEF 800

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在するカード1枚をゲームから除外する事ができる。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから

「剣闘獣レティアリイ」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

シゲルの場に現れた槍を持つ爬虫類の様なモンスターがフェイトのデュエルディスクに槍を突き刺すと高等儀式術だけ持って行かれた。「ううう……あのカードが無くなるのは痛いな……私は手札からDRを発動!!手札を一枚捨てゲームから除外されているモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する!!!」

「……………案外…フェイトって……………怖いな」

シゲルがそう呟くと同時にフェイトの場に巨大な凶暴なモンスターゴギガ・ガガゴゴが現れた。高等儀式術で墓地に送ったモンスターをクローリンの効果で除外しDDRなどで回収する。そう言ったデッキだ。

「手札はもう無い…バトル！！ガールランドルフでレティアリイに攻撃！！破滅の咆哮！！」

「グッ……」

ガールランドルフによってシゲルの場のモンスターは居なくなってしまった。だがフェイトにはまだゴギガ・ガガギゴの攻撃権が残っていた。

「ゴギガ・ガガギゴの攻撃！！」

「畏カードオープン！！眠る魂の咆哮！！墓地のホプロムスとレティアリイをゲームから除外！！」

ホプロムス、レティアリイ　その素材で召喚できる剣闘獣はいないはずだった。

「このカードはホプロムスと剣闘獣1体を素材に召喚する。来い！！」

そう　その存在が^{シゲル}

「^{グラティアアルビースト}剣闘獣マキロ！！」

『世界の矛盾』だったからだ。

第六話 王道？お約束？ 獣VS儀式の魔導師 前編（後書き）

ふう…前後編は疲れる……
それに後編は

オリジナルカード

天使の恵み

スレイブウルフ

グラディアルビースト
剣闘獣マキロ

これ以上のオリジナルカードが出ます。チートカードも…

次回もお楽しみに（ - - ）ノシ

第七話 獣の意地 儀式の脅威 獣VS儀式の魔導師 後編 (前書き)

はい、ども

テスト週間に俺は何してんだ…

ともかくシゲルVSフェイトの決着です。てか…チートカード…

まあ、どござ

第七話 獣の意地 儀式の脅威 獣VS儀式の魔導師 後編

シゲルの場に分厚い装甲に身を包んだ巨大な戦艦の様なケリディアルビースト剣闘獣が現れた。その大きさと、フェイトは聞いたことのない剣闘獣に呆然としていたがすぐに気を取り直した。

マキロ / DEF 2700

「けどゴギガ・ガガギゴの方が上回ってる!!!バトル続行!!!」

「マキロの効果発動!!!ターンに一度デッキの一番上のカードを墓地に送ることで破壊を無効にする!!!」

ケリディアルビースト

剣闘獣マキロ

融合・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 岩石族 / ATK 1400 / DEF 2700

「剣闘獣ホプロムス」+「剣闘獣」と名のついたモンスター

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能(「融合」魔法カードは必要としない)。

このカードが戦闘で破壊される時、デッキの一番上のカードを墓地に送ることで、破壊を無効にすることができる。この効果は相手のバトルフェイズのみ行える。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードを融合デッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ホプロムス」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。

墓地へ送られたカードは相棒ハストロウリイだった。だが手札のあのカードで十分何とかなる。

「そしてバトルフェイズ終了時、マキロを融合デッキに戻しデッキからラクエルとサムニテを特殊召喚する！！ラクエルの効果で攻撃力は2100になる！！更に畏カードハンディキャップマッチ！効果によりデッキからダリウスを召喚！！」

ラクエル / ATK 1800 2100

「うーん…私はターン終了」

フェイト / LP 2000 手札 0 枚 ガーランドルフ ゴギガ・ガ
ガギゴ

「俺のターン！！」

引いたカード、そして伏せてあるカード その中での最善の手

「……………?」

その時フェイトはシゲルの目の色が変わってる気がした。普段のシゲルの目は黒なのだが薄い赤に見えた。だが暗くて気のせいなのかもしれなかった

「俺はミラー・ビーストを攻撃表示で召喚!!」

シゲルの場にガラスで出来た狼とライオンを組み合わせたようなモンスターが現れた。だが見たところ剣闘獣ではないようだった。

「ミラー・ビーストの効果!! 召喚成功時、墓地の剣闘獣と名のついたモンスターをゲームから除外する。ミラー・ビーストは表側表示で存在する時、そのモンスターと同名カードとなる!! ベストロウリイを除外!! そしてこの効果で除外されたモンスターは2ターン後のエンドフェイズデッキの一番下に戻る!!」

ミラー・ビースト

効果モンスター

星3 / 光属性 / 獣族 / ATK

0 / DEF

0

このモンスターの召喚成功時、

墓地に存在する「剣闘獣」と名のついたモンスターを

1体ゲームから除外する事ができる。
このカード名は表側表示で存在する時、
除外したモンスターと同名カードとして扱う。
除外したモンスターは2ターン後のエンドフェイズ、
デッキの一番下へ戻る。

場にいたミラー・ビーストはベストロウリイの様な姿に変わった。

「そしてベストロウリイとなったミラー・ビーストとダリウスをデッキに戻してガイザレスを特殊召喚する！！そしてガイザレスの効果！！ゴギガ・ガガギゴとガーランドルフを破壊する！！」

ガイザレスの巻き起こした旋風が2体のモンスターを包み込み破壊した。

「バトル！！ガイザレスで「攻撃宣言時、墓地のセメタリー・ガーナナーの効果！！」なっ！？」

フェイトの墓地から赤い髪の女性が現れた。そしてその女性がガイザレスの動きを止めた。

「墓地に存在するこのカードをゲームから除外してバトルフェイズを終了させる！！」

セメタリー・ガードナー

効果モンスター（制限）

星2 / 光属性 / 戦士族 / ATK 2000 / DEF 1000

墓地にこのカードが存在しフィールド上にカードが存在せず、手札が0枚の時相手の攻撃宣言時発動することができる。

このカードを除外し、バトルフェイズを終了する。

「いつの間に……DDRの時から…俺はカードを伏せ、ターンを終了する!!」

シゲル / LP 4000 手札1枚 ガイザレス ラクエル サムニ
テ 伏せ1枚

「私のターン!!ドロー!!」

圧倒的にシゲルが有利 なのだが恐らくこの戦況をフェイトは一変してしまうだろう。

理屈や理由なんてない、本能的にシゲルはそう感じていた。

「貪欲な壺を発動!!墓地のガーランドルフ、デミス、クーフリーン、エルフの剣士、ゴギガ・ガガギゴをデッキに戻してシャッフル!!そして2枚ドロー!!」

そして感じるのはフェイトの逆転の手段。その為にはカードが足りない。だから

「魔法カード、存在しないモノの叫びを発動！！相手の除外されているモンスター1体につきカードを1枚ドロウする！！」

更なるドロウをするだろう

存在しないモノの叫び

通常魔法（制限）

手札が2枚以下の時、相手の除外されている

モンスター1体につきカードを1枚ドロウする。

相手の除外されているモンスターが4体以上いる場合
発動することはできない。

「除外されているモンスターは3体！！カードを3枚ドロウ！！」

「…この流れはやばいな」

たった1枚の手札から4枚までドロウした。おそろく

「カードを一枚伏せて、手札から儀式魔法、破滅の儀式を発動！！
手札の破滅の女神 ルインを生贄にガールランドルフを儀式召喚！！」

再びフェイトの場に破滅の魔王が現れた。そして破滅の魔王の咆哮

でシゲルの場のモンスターは居なくなっていました。

「ガーランドルフの効果！！破壊したのは3体だから攻撃力300アップ！！バトル！！ガーランドルフでシゲルに直接攻撃！！」
ダイレクトアタック

「ぐうああ！！！」

シゲル / LP 4000 1200
フェイト / LP 2000 手札0枚 ガーランドルフ 伏せカード
一枚

予想通りと言うべきか、一気に逆転されてしまった。だがシゲルにもまだ手は残っていた。だがその為にはあのカードが必要だった。

「俺のターン！罠カード、異次元からの帰還を発動！ライフを半分払いゲームから除外されているモンスターを可能な限りを特殊召喚する！異次元より俺の場に再び現れる！ベストロウリー！ホプロムス！レティアリィ！」

異次元からの帰還

通常罠（制限カード）

ライフポイントを半分払って発動する。

ゲームから除外されている自分のモンスターを

可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

エンドフェイズ時、この効果で特殊召喚した全てのモンスターはゲームから除外される。

シゲル / LP 1200 600

時空の裂け目から3体のモンスターが現れた。だがこの効果で召喚されるモンスターはターンの終りに再び除外される。

「更にグラディアル・リターンを発動！俺は墓地のガイザレス、ラクエル、サムニテをデッキに戻しシャツフル！そして1枚カードをドローする！」

グラディアル・リターン

通常魔法

墓地に存在する「剣闘獣」と名のついたカード3枚をデッキに戻す。その後、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「ドロー！カードを一枚伏せ、そしてベストロウリイとホプロムスをデッキに戻して、再び破壊の旋風を巻き起こせ！！ガイザレス！！」

再び現れたガイザレスが巻き起こした旋風でガーランドルフと伏せカードを

「罨カード！！リチュアガード！！自分フィールド上にレベル6以上の儀式モンスターが存在する時、相手のカードを破壊する効果を無効にし、破壊する！！」

「なに!?!」

リチュアガード

カウンター罠

自分フィールド上にレベル6以上の儀式モンスターが存在する時、相手の「カードを破壊する」効果を持つ
モンスター、魔法、罠の効果と発動を無効にし破壊する。

破壊できなかつた。更にガイザレスを破壊されるという窮地に落とされてしまった。

だが ガイザレスは

「手札からグラディアル・リベンジの反撃を発動!!場の剣闘獣と名のついた融合モンスターが効果で破壊された時デッキから剣闘獣を1体特殊召喚する!!来いムルミロ!!」

困だった。

グラディアル・リベンジ
剣闘の反撃

速攻魔法（制限）

自分のフィールド上の剣闘獣と名のついたモンスターが効果で破壊された時デッキから剣闘獣を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効され、ターン終了時墓地へ送られる。

グラディアルビースト

剣闘獣ムルミロ

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻 800 / 守 400

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊する。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ムルミロ」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

シゲルの場に変な魚の様なモンスターが現れた。そして剣闘グラディアル・リベンジの反撃もフェイトには聞き覚えが無かったカードだ。

「また：でも攻撃力800なら私のガーランドルフには…!!」

「剣闘獣は単体では無く、他の仲間と共に闘グラディアルビーストう獣場のムルミロとレティアリイをデッキに戻し、現れる!! 剣闘獣ラカン!!」

グラディアルビースト

剣闘獣ラカン

融合・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 魚族 / ATK2000 / DEF1000

「剣闘獣ムルミロ」+「剣闘獣」と名のついたモンスター

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードの融合召喚成功時、自分フィールド上のカード一枚と相手フィールド上のカード一枚をゲームから除外することができる。ターン終了時この効果で除外された相手のカードはフィールド上に戻る。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードを融合デッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ムルミロ」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。

場にいたモンスターが消え、巨大なシーラカンスの様なモンスターが現れた。するとシゲルの場の伏せカードと、ガーランドルフが水に包まれた。

「ラカンの効果発動!!お互いのフィールド上のカードを除外することができる!!」

「!?そんな!!」

そしてガーランドルフは消えた。フェイトにもう打つ手は無かった。

「ラカン!!これで終わりにしろ、フェイトに直接攻撃!!」

ダイレクトアタック

「きゃああああ!!!!」

「う…負けた…!!」

「危なかった…強いな…フェイトは」

シゲルの言葉を聞いてフェイトは笑顔になった。するとどこからか「ガツチャ!!」という声が聞こえた。どうやら十代と明日香のデュエルも終わったみたいだ。

残りはユウとなのはだけだった。

第七話 獣の意地 儀式の脅威 獣VS儀式の魔導師 後編 (後書き)

……なんだろうな……

マキロにラカン……完璧チートだ……とくにマキロ……守備高いのに破壊無効があるって……

オリジナルカード

ミラー・ビースト

セメタリー・ガードナー

存在しない者の叫び

リチュアガード

グラディアル・リベンジ

剣闘の反撃

グラディアルビースト

剣闘獣ラカン

ちなみに、ラカンの自分と相手のカード除外はスクラップドラゴンの効果をイメージして作りました。

ただドラカンの効果で除外された自分のカードは戻ってこないデメリットがあります。

今回はユウVSなのはです。お楽しみに〜) . . (ノシ

…なのはのデッキどうしよう

第八話 白き魔王のバーン? 精霊VS天使の魔導師 前編(前書き)

ども、ネイビーです

今回はシゲルVSフェイトの裏で行われていたユウVSなのはです。

ちなみにタイトル見て気づくと思いますが、アテナバーンです。

…やはりというか…グダグダです。

第八話 白き魔王のバーン？ 精霊VS天使の魔導師 前編

シゲルとフェイトが戦っている頃

「はあ…眠い…」

「にやはは…そういえば戦うのって初めてだね…っ！？」

欠伸をするユウになのはが苦笑いをしていた。ちなみにこの時間（10:30）はいつもならユウは寝ていた。少し眠そうだが、仕方なくユウは構えた。

するとなのはは何かに驚いたような表情に一瞬なった。だが、残念なことにそれにユウは気付かなかった。

「…ねえユウ君」

「なに？」

構えたユウになのはが何かを決意したような目をしていた。ちなみにこの時シゲルがいれば、明らかに「ロクなことじゃないな」と言うだろうとユウは思った。

「アンティで…ロストロギアの…『カード』を賭けて」

「…それはできない。シゲルの言うとおりに時空管理局に協力するよ
うなことはしない……それともう一つ」

眠気いっぱいだったユウの目は一気に覚めた。ユウの答えを聞いた
なのは顔を俯かせたが、ユウはそれを無視して宙そらを見上げた。

「ボクは君が嫌いだ。クロノ」

アースラ

「っ！？どうして…僕がなのはに頼んだのに気付いたんだ！」

アースラのブリッジでクロノがそう叫んだ。先程シゲルとフェイト
の勝負がついた頃になのはに念話でアンティをするように持ちかけ
たのだ。

だがすぐにユウは気付いていた。なのははアンティなんて持ちかけ
ない。誰かがなのはに指示をした。では誰か？

会ったメンバーでそういうことを指示するのはクロノしかいなかった
からだ。

『クロノ君…やっぱり駄目だよ…大切なカードを渡せなんて』

「クッ……」

なのはの言葉にクロノは苦虫を噛んだような顔になった。すると2人はデュエルディスクを構えた。

「ボクはアンティが嫌いなんだ…だから無理だよ」

そう言ったユウの目は少し悲しい表情をしていた。その目はかつて一人でいたなのは、母親に裏切られたフェイト、はやての為に消えて行ったリインフォースと同じ眼だった。

それは昔何か大切なモノを失くした目

「行くよ！なのは！！」

「…うん」

「「デュエル！！」」

なのはのターン

「私のターン！ドロー！！私は神の居城 ヴアルハラを発動！！自分のフィールド上にモンスターが存在しない時手札の天士族モンスターを特殊召喚することができるの！！」

神の居城 ヴアルハラ

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「効果によって手札からアテナを特殊召喚！！そしてシャインエンジェルを攻撃表示で召喚！！アテナの効果を発動！！ユウ君に60ポイントのダメージ！！」

「クツ…」

ユウ / LP 4000 3400

アテナ

効果モンスター

星7 / 光属性 / 天使族 / ATK 2600 / DEF 800

1ターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

天使族モンスター1体を墓地へ送る事で、

「アテナ」以外の自分の墓地に存在する

天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。
フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚され
た時、
相手ライフに600ポイントダメージを与える。

「私はこのままターン終了!!」

なのは / 手札3枚 アテナ シャインエンジェル 神の居城 ヴァ
ルハラ

「ボクのターン!!」

早速1ターン目に強力な天使アテナと天使シャインエンジェルを呼び込む天使を出された。だ
が今の手札ではアテナを倒すことはできない

「ドロー!……え?」

引いたカード、それはいつも自分が使っているスピリットモンスター
ーだが、今手札にあるカード、そして相手の場

最悪のコンボが成り立った。

「ボクはスピリットモンスター 阿修羅^{アスラ}を攻撃表示で召喚！！阿修羅は天使族だからダメージを受ける！」

ユウ / LP 3400 2800

更に装備カード ヤサカノマカタマ 八尺勾玉を装備！！バトル！！阿修羅でシャインエンジェルを攻撃！！地獄の千手剣！！」

なのは / LP 4000 3700

「うう！！で、でもシャインエンジェルの効果発動！！デッキからシャインエンジェルを特殊召喚！！更にアテナの効果発動！！600ポイントのダメージ！！」

シャインエンジェル

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1400 / 守 800

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の

光属性モンスター1体を自分フィールド上に
表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

阿修羅の投げたナイフでシャインエンジェルは串刺しになって消滅した。だがシャインエンジェルが消滅時に放った光が新たなシャインエンジェルを生みだした。

そしてアテナの生み出した衝撃波でユウにダメージが

ユウ / LP 2800 3600

無かった。しかも通常よりも回復していた。それになのはがキョトンとしていた。

「な、なんで回復してるの!?!」

「阿修羅に装備した八尺勾玉の効果! 戦闘でモンスターを破壊した時、そのモンスターの元々の攻撃力分回復する!」

「え!?!」

ヤサカノマガタマ
八尺勾玉

装備魔法

スピリットモンスターにのみ装備可能。

装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの元々の攻撃力分だけ自分のライフポイントを

回復する。

装備モンスターが自分フィールド上から手札に戻る事によってこのカードが墓地へ送られた時、このカードを手札に戻す。

「さらに阿修羅の効果発動!!」

「にゃ!?!どうして阿修羅にまた武器が!?!」

ユウの言葉に阿修羅の手に再びナイフが現れた。その光景になのは驚いていた。

「阿修羅は相手の場のモンスターすべてに攻撃することができる!そしてシャインエンジェルで呼びだされたシャインエンジェルは別のモンスターとして攻撃することができる!攻撃!地獄の千手剣!」

「にゃあ!?!」

アスラ
阿修羅

スピリットモンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1700 / 守1200

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。

なのは / LP 3700 3400
ユウ / LP 3600 4400

「ううう……シャインエンジェルの効果…デッキから勝利の導き手
フレイヤを守備表示で特殊召喚、アテナの効果で600ダメージ！」

ユウ / LP 4400 3800

だが此処でユウは攻撃を止めた。フレイヤに攻撃は できない

「フレイヤの効果！フィールド上に天使族モンスターが存在する時、
フレイヤに攻撃はできない！！そして天使族モンスターの攻撃力と
守備力を400ポイントアップする！」

勝利の導き手フレイヤ

効果モンスター

星1 / 光属性 / 天使族 / 攻 100 / 守 100

自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の

天使族モンスターが表側表示で存在する場合、

このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの

攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

フレイヤ / ATK 100 500 DEF 100 500
アテナ / ATK 2600 3000 DEF 800 1200

「ボクはフィールド魔法スピリット・フィールドを発動！効果により阿修羅は手札には戻らない。そしてカードを一枚伏せてターン終了」

ユウ/LP4400 手札3枚 阿修羅+八尺勾玉 伏せカード1枚

「私にターン！私は手札からジェルエンデュオを攻撃表示で召喚！アテナの効果で600ダメージ！そしてフレイヤの効果で攻撃力と守備力が400ポイントアップ！そしてアテナの効果！！ジェルエンデュオを生贄に捧げて再びジェルエンデュオを特殊召喚！！効果でダメージ！！」

「っ！！」

ユウ/LP	4400	3800	3200		
ジェルエンデュオ/	ATK	1700	2100	DEF	400

「バトル！！アテナで阿修羅に攻撃！！」

「畏カード発動！！スピリットバリア！！これによりモンスターの戦闘ダメージを0にする！！」

阿修羅から発生したバリアがユウにダメージを与えなかった。だがスピリットバリアはモンスターがいなければ意味は無い。

「更にジェルエンデュオで直接攻撃！！」手札のスピリットガードの効果発動！！」にゃ！？手札から！？」

手札から発動するカード、その存在自体が珍しくなのは猫の様な驚いた声を上げてしまった。だがユウは冷静にカードを一枚墓地へと送った。

「手札のスピリットモンスターヤマタノドラゴン八岐大蛇を墓地に送って守備表示で特殊召喚！！来て！スピリットガード！！」

ユウの場に、巨大な盾の様なモノを持ったモンスターが現れた。

スピリット・ガード / DEF 0

「けどジェルエンデュオの攻撃力の方が上！！ジェルエンデュオで攻撃！！」

「スピリットガードの効果！墓地の八岐大蛇を除外し破壊を無効にする！！」

スピリット・ガード

効果モンスター

星3 / 光属性 / 戦士族 / 攻

0 / 守

0

相手の直接攻撃宣言時、手札のレベル5以上のスピリットモンスターを
墓地におくってこのカードを守備表示で特殊召喚することができる。
墓地に存在するスピリットモンスターを除外し、このモンスターの
破壊を無効にする。

「うう…私はターンを終了するの!」

なのは / LP 3400 手札3枚 アテナ ジェルエンデュオ
フレイヤ ヴァルハラ

ユウのターン

「ボクのターン!ドロー!魔法カードマジック・プランターを発動
!!場のスピリットバリアをコストにカードを2枚ドローする!!」

引いたカード、場の状況 そして墓地のカード、逆転への布石
全てが噛み合った。

「愚かな埋葬を発動!!デッキから竜宮之姫オトリメを墓地に送って、スピ
リット・フィールドの効果発動!!今送った竜宮之姫をゲームから
除外して阿修羅を効果を無効にして特殊召喚する!!」

「(あれ?ユウ君の目 赤色になってるの?)」

ユウの目は普段は青色の**はず**　だが鮮やかな赤い色になっている
ようだった。しかし暗く、よく見えない。

阿修羅 / ATK 1700

「そして場の阿修羅、スピリット・ガードを生贄に、ひさかへつち火之迦具土を
攻撃表示で召喚！！」

「けど攻撃力はアテナの方が上なの！！」

フィールドに現れた火之迦具土

それはユウのデッキ、そしてスピリットの最強モンスター

「更に魔法カードスピリット・ドローを発動！！墓地の阿修羅をゲ
ームから除外して2枚ドロー！！来た！！」

そう、普通ならそのはずだった

「フィールド上のレベル7以上のスピリットモンスターを除外して
手札から特殊召喚！！」

「え？」

ユウの言葉を聞いてなのはは混乱していた。その召喚条件のモンスターなんて存在しないはずだった

「太古に眠る精霊よ…^{スピリット}新たな肉体を得てこの地^{スピリット・フィールド}に現れる!!」

それ はその存在が^{ユウ}

「エンシエント・スピリット ^{やつのかみ}夜刀神!!」

『世界の矛盾』だったからだ。

第八話 白き魔王のバーン？ 精霊VS天使の魔導師 前編（後書き）

ネイビー「はい、終了」

コウ「ねえ、どうしてあとがきを会話式にしたりしなかったりするの？」

ネイビー「理由としては会話式にしても言うことがないから」

シゲル「どういうことだ？ 『世界の矛盾』が2人いるなんて」

ネイビー「まあ、ここで爆弾発言をすると…」

『世界の矛盾』について何も考えてない」

三人「……………？」

ネイビー「『世界の矛盾』なんて言ってるけどその設定が皆無。つまり何も考えてない。強いて言うなら名前だけでそれ以外は何もない」

三人「……………」

ネイビー「そんな憐れむような目で見えるな……」

オリジナルカード

スピリット・ガード

第九話 古の精霊？始まる狂い 精霊VS天使の魔導師 後編 (前書き)

はい、ユウVSなのはの後編です。

ともかく…チートカードが出た…そして、制限カード…へタしたら
禁止級の魔法もあります。

まあ、どうぞ

第九話 古の精霊？始まる狂い 精霊VS天使の魔導師 後編

ユウの場の火之迦具土が消えると、場には闇の様な刀を腰に携えた漆黒の衣服に身を包んだモンスターが現れた。

「夜刀神^{やつのかみ}の効果発動！！夜刀神の召喚に使用したモンスターの攻撃力と守備力が元々の攻守の数値となる！！火之迦具土の攻撃力は2800、守備力は2900！！更に除外されているスピリット1体につき攻守は300ポイントアップする！！除外されているのは4体、よって1200ポイントアップする！！」

エンシェント・スピリット ^{やつのかみ}夜刀神
スピリットモンスター

星10 / 光属性 / 戦士族 / ATK ? / DEF ?

このモンスターは他のカードの効果で特殊召喚できない。

このモンスターは「魂の聖地 スピリット・フィールド」が存在する場合、

フィールド上のレベル7以上のスピリットモンスターを除外して特殊召喚することができる。

このモンスターの元々の攻撃力・守備力は召喚時に除外したモンスターと同じになる。

このモンスターが場から離れた時ゲームから除外されているスピリットモンスターを効果を無効にして特殊召喚する。

除外されているスピリットモンスター1体につき、

このモンスターの攻撃力・守備力を400ポイントアップする。

「エンシェント・スピリット」と名のついたモンスターは1体しかフィールド上に存在できない。

夜刀神 / ATK ? 2800 4000 DEF ?
2900 4100

「こ、攻撃力4000!?」

「バトル!!夜刀神でアテナに攻撃!!闇斬審!!」

「にゃああああああ!!!!!!!!!!」

なのは / LP 3400 2400

夜刀神が飛び上がり刀でアテナを一刀両断した。その時のダメージでなのはが吹き飛んだ。と、同時にジェルエンデュオが爆散した。

「ジェルエンデュオはダメージを受けると破壊される…これで残りフレイヤだけ…そしてヴァルハラはモンスターが存在する時発動できない!」

「にゃ、にゃあああ!!!!負けちゃううう!!!!」

ユウ / LP 3200 手札 0枚 夜刀神 スピリット・フィールド
伏せカード一枚

「わ、私のターン！！私はジェルエンデュオを守備表示で召喚！！カードを2枚伏せてターン終了！！」

攻撃力4000の闇刀神に今のなのはの手札で勝つには手札の裁きを下す者 ボルテニスを召喚するしかなかった。

裁きを下す者 ボルテニス

効果モンスター

星8 / 光属性 / 天使族 / 攻2800 / 守1400

自分のカウンター罠が発動に成功した場合、

自分フィールド上のモンスターを全て生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した場合、生け贄に捧げた天使族モンスターの数まで

相手フィールド上のカードを破壊する事ができる。

そして伏せカードは魔宮の賄賂だ。シゲルが何か魔法・罠カードを使えばボルテニスを召喚し、効果で闇刀神とスピリット・フィールドを破壊すればユウにはボルテニスを破壊する手は無くなる。

それに攻撃をしてくるのならリアクティブアーマー炸裂装甲で破壊することもできる。

なのは / LP2400 ジェルエンデュオ フレイヤ 伏せカード
2枚

「ボクのターン！！ドロー！！……なのは」

「なに?」

ドローしたカードを見て静かにユウがなのを見た。そして

「楽しかったよ、けど終わりだ!!」

「にゃ!?!」

勝利宣言をした。だがジェルエンデユオは戦闘破壊はされず、フレイヤも戦闘を行えない。しかも貫通能力を付加する草薙剣クサナギノツルギを發動して攻撃も炸裂装甲と魔宮の賄賂で無効できる。

「ボクは手札からスピリットの咆哮を発動!!自分フィールド上にスピリット・フィールドとエンシエント・スピリットが存在する時、フィールド上のカードをすべて破壊する!!」

スピリットの咆哮

通常魔法

自分フィールド上に「魂の聖地 スピリット・フィールド」と「エンシエント・スピリット」と名のつくモンスターが存在する時、フィールド上のカードをすべて破壊する。

「リバーズカード魔宮の賄賂を発動!!効果を無効にするよ!!」

なのはの場の伏せカード　魔宮の賄賂が場に現れた、だが効果は発動すること無く、破壊された。

「ど、どうして発動しないの!？」

「カウンター罫!!カウンター・カウンターを発動!!カウンター
トラップの発動を無効にする!!」

そう、ユウの墓地のスピリットは全て除外されている。いるのは効果モンスターのガードだけだった。

カウンターカウンター

カウンター罫

カウンター罫の発動を無効にし、それを破壊する。

「全てを無に戻して!!夜刀神!!」

ユウの言葉と共に夜刀神の周囲から発生した衝撃波がフィールドのすべてのカードを墓地へと送った。

「にゃああああ　!!で、でも!!ユウ君の手札もフィールド上のカードも!!」

「夜刀神の効果！！フィールドから離れた時、除外されているスピリットモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！！再び現れる火之迦具土！！」

ユウの場に火之迦具土が何処からか現れた。そしてなのは伏せカード 炸裂装甲も破壊されている。今のなのはに火之迦具土を止める手立ては無い。

「火之迦具土の直接攻撃！！ダイレクトアタック紅蓮滅殺拳！！」

「にゃあああああ！！！！！！」

なのは / LP 2400 0

そして

「兄貴〜ユウ〜シゲル〜〜ありがと〜！！」

翔が3人に泣きついていた。流石に3人全員勝てると思って無かったらしく、明日香達は驚いていた。

「…さっさと帰って寝るよ……もう限界……」

「2度目は無いからな。次に覗いてたら助けねえぞ」

「ボクは覗いてないいいいいいい!!!!!!」

ユウとシゲルの言葉に翔は雄たけびを上げた。一方十代は女子メンバーに挨拶して帰り始めていた。

「ねえなのは」

「どうしたの？」

自室へと戻ったフェイトはなのはに話しかけていた。ちなみなのは、フェイト、はやてはそれぞれ個室だが3人は寝るときは一緒に寝ている。だが、いまはやてはアースラに戻っており今はいない。

「シゲルが知らない剣闘獣グラティアルヒーストを使ったんだ…それも2体」

「そっちも？こっちもユウが知らないスピリットを使ったよ…しかも結構強力なの！」

そう言ってなのはは闇刀神の説明と、それに関連する咆哮も話した。

フェイトもの方もマキロとラカンの説明をした。

「うーん…なのはの言ってたカードの効果は闇刀神じゃなくてエンシエント・スピリットがいる場合だから…他にもいるかもね…」

「もしかして…エンシエント・スピリットがロストロギアなのかな…」

なのはは静かにそう呟いた。確かにユウのエンシエント・スピリットは強力すぎる。そしてなのは達はデュエルモンスターのカードの中でもスピリットと剣闘獣のカードのデータはすべて持っている。

だが、そのデータに無い剣闘獣とエンシエント・スピリットはロストロギアの可能性があった。

「ただいま」

つと、此処でアースラからはやてが戻ってきた。しかし、どこか神妙な顔つきをしていた。

「どづしたの？はやてちゃん」

「2人に話があるんや」

心配そうになのはが聞くと、はやては言いにくそうに2人に言った。
若干だが目に涙を溜めて

「『どんな手を使ってでもロストロギアを回収せよ』……それが管理局の決定や……そしてシゲルとツバキも……例の『カード』を持っているんじゃない……」

「『え!?!』」

「2人からも同じロストロギア反応や……いや、正確にはちゃう。根本的な反応は同じ……でも、少し特徴が異なる……昔2人が関わったジュエルシードの様に種類みたいなのがあるみたいなんや」

はやての言葉になのはとフェイトは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに俯いてしまった。

『ロストロギアの回収と管理』

それが管理局の仕事だ。だがそれを行うとなると　ユウ、シゲル、

ツバキの3人を敵に回すことになる。

それは　友を裏切ることだった。

レッド寮ユウとシゲルの部屋

既に安らかな寝息を立ててユウは寝てしまっていた。だがシゲルは部屋に備え付けてあるPCで誰かと会話していた。

「どういうことだ？エンシエント・スピリットなんてカードは存在しないはずだろ」

『どうやら思いのほかイレギュラーの影響が大きく出てしまっている様だな…徐々にですが未来が変わり始めている様だ。しかしあの子達があん戦いに関わってくることは確実なのだが…』

そう言っつて先程まで黒髪の女性が映っていた画面は何処か機械的な場所へと移った。そしてそこには

『シゲル！！』

『先に行け！！お前はあいつの元へ行くことだけ考えろ！！』

ユウとシゲル、そしてシゲルと対峙している

『これで終わりだよ、シゲルさん』

『あなたを倒してそれで終わる』

『そしてユウも……もうすぐ終わるんや』

なのは、フェイト、はやてが映っていた。だがそれは以前一度だけ見た管理局の制服姿だった。

「……はぁ……どう転がっても、いい『未来』じゃないな」

そう言って通信を終えたシゲルは寝た。

そして 夜は更けて行く。

第九話 古の精霊？始まる狂い 精霊VS天使の魔導師 後編 (後書き)

ネイビー「思いつきりやつちまったぜ」

ユウ「エンシエント・スピリット……夜刀神」

ネイビー「夜刀神は本当は巨大な大蛇の名前ですが…制作時にいい名前がなく使用しました」

シゲル「この勢いなら、まだエンシエント・スピリットがありそうだな」

ネイビー「出すよ。まだ作ってないけど他に二枚ほど」

ネイビー「え〜ここでお知らせです。上のように伝承と違う名前を使用したりすることも多々起こる可能性もあります。そこでカードの募集をしたいと思います」

ユウ「脈絡が見えないよ」

ネイビー「簡単に言うと、あまりカードが浮かばないから投稿されたカードを使っていこうと思います。多少名前や効果変更やカードの種類…魔法と罫や効果モンスターをシンクロにしたり…その逆も然り…あ、でもすぐに使えるかどうかは分かりません」

ツバキ「なんで？」

ネイビー「たとえば次はツバキVSはやての予定だけどスピリットや剣闘獣のカードは出ないから使えないとか。まあ気楽に投稿してください」

ネイビー「さて、今回は の通りツバキVSはやてです」

オリジナルカード

エンシエント・スピリット

夜刀神やつのかみ

スピリットの咆哮

え〜：サブタイトルがあれですが、今回正確には2人は戦いません。
さらに言つと厳密には決闘もしていません。

まあ、ギャグ小のほのぼのした感じですよ。

第十話 月一試験 予想外の腕前？ 魔法使いVS夜天の魔導師 前編

レッド寮・ユウとシゲルの部屋

「ここは……ここ？」

「ああ、だからこうなる」

「ねえ、こっちは？」

2人の部屋に部屋の住人であるユウとシゲル、そして親友のツバキがいた。ユウとツバキがシゲルにいろいと教えてもらっていた。大概の事はシゲルは分かっていたし、2人も呑み込みが早く既に範囲の8割方終わっていた。

範囲？何の範囲かというところ 『月一試験』だ

その名の通り月に1回筆記及び実技試験を行い、成績を決める試験だ。
レッド寮の大半の生徒は試験前日などになっても諦めて勉強をしない生徒が多い。

だがユウは分からない所はシゲルに教えてもらっていた。ユウがシゲルに教えて貰っているのを聞いたツバキも同じようにシゲルに教えてもらっていた。

ちなみにシゲルはレッド寮では一番頭がいい。というかイエローや

ブルー生徒の平均を大きく上回っていた。では、なぜそんなシゲルがレッド寮なのか？それは本人に言ってもらいましょう。

「ん？理由？ただ単に試験でシャーペンにシャーシン無いのに気付かず書けなかったただけだ。そして寝てた」

とのこと。

「そろそろ休憩にするか…もう2時間経ってるし」

「あ、もうそんなに…」

「そうしようか」

確かに既にお昼時、この日は学校が休みなので食堂で昼食を食べるのだが実を言うといつも料理を作ってくれる人が風邪をこじらせてしまった。なので購買で特別にレッド寮生に昼食が支給されていた。

「どうする？今から行くんじゃないかな？」

「あ…まあ大徳寺先生は『食材はあるので自分で何か作っても良いにゃ』って言ってたから、俺が作るうか？」

シゲルの言葉に一瞬2人が固まってしまった。シゲルが飯を作ると言いだしたのだ。シゲルを料理する所を2人は見たことが無かった。大概購買で買った弁当で済ましていたためシゲルが料理できるのか

分からなかった。

「……………」

「……………なんだよその眼は…一応自分で飯を作ることなんて多々ある…嫌なら購買に行くけどどうするんだ？」

呆れ表情でシゲルがそう言うと2人は顔を見合わせた。

「ユウはどうする？」

「ん〜でもシゲルの料理一度食べてみたいな…」

「…うん、シゲルが料理できるのかどうか知りたいし…」

「じゃあ作ってもらおうよ。それに購買も混んできると思うし」

「そうだね」

此処まで2人はアイコンタクトで会話をした。そしてこの時なぜブルー女子であるツバキは寮に戻らなかったのか2人は気付かなかった。

十代と翔、隼人の部屋

「兄貴〜！もう昼すよ〜！！いい加減起きてください〜！」

「んが、……ふぁ〜……おお……おはよう翔……」

先程まで寝ていた十代はやっと翔によって起こされた。ちなみに隼人も勉強に一区切りをつけたのか玄関で靴を履いていた。

「ん？隼人何処に行くんだ？」

「購買に飯を飯を買いに行くんだな」

そう言つて扉に手をかけようとして、止まった。それに十代と翔が顔を見合わせていると隼人は2人の方に振り返った。

「なんだか、旨そうな匂いがするんだな！」

「え？……あ、ホントだ！」

「そうだな…けど誰が」

そう言いながら3人は匂いがする場所（食堂）へと向かった。

食堂

「おいしい……！」

「うん!!おいしい!!」

誰もいないはずの食堂にはシゲルと、シゲルの作った炒飯をおいしそうに食べているユウとツバキがいた。冷蔵庫の中にあつた食材が卵と肉、少しの野菜と冷凍ご飯しかなく、それで作れるのが炒飯だけだった。

だが少し作り過ぎてしまったのか4人前ほど残ってしまった。どうするか悩んでいると

「お、旨そうな匂いだな!!」

「ん?十代か。あ、そうだ…そのフライパンに炒飯が残ってるから食べてもいいぞ」

それを聞いたのか3人は顔を輝かせて皿に盛りつけ始めた。ユウ達の横のテーブルに座ると手を合わせ、そして食べ始め

「うまい!!」

「おいしいっす!!」

「本当に美味しいんだな!!」

3人も本当に美味しそうに食べていた。

ちなみに6人が去った後で旨そうな匂いのするのに気付いた生徒が多くいたが、誰もいなかったため食堂が七不思議のひとつ『魅惑の食堂』と呼ばれるのはそう遠くなかった。

次の日

「ふう〜おわったあ〜」

「どうだったのユウ？」

「うん、大丈夫」

ユウとなのはが先程の試験での感触を話し合っていた。ちなみに大半の生徒は本日新発売のパックを買いに行っていた。

筆記試験が終わったので次の実技試験までしばしの食事休憩が入った。

「あら？2人はパックを買いにいかないのかしら？」

「あ、明日香さん」

試験を終えた明日香がユウとなのはの元へと訪れた。その手には購買の袋があり、中には購買のパンが多数あった。

「ボクは普段スピリットしか使わないから」

「私も…それに今デッキを弄って変になったら嫌だし…」

「まあ、それもそうね。パンいるかしら？」

「「いる／いるの!！」」

2人の声がずれることなくはもったので明日香は少しクスクスと笑いながら袋の中からパンを取り出すと2人に渡した。

エントランスホール

「これであの十代トロンアウトボーイを打ちのめすノ〜ネ!！」

「待ってください!!! クロノス先生!！」

クロノスが万丈目にカードを渡し、立ち去ろうとした時万丈目の取り巻きの2人組がクロノスを呼びとめた。

「なんなノ〜ネ？」

「俺達もあのユウとか言うガキとシゲルっている野郎を倒したい！」

「あいつらもこの学園には必要ないんです！！お願いします！！」

それを聞いたクロノスは少し考えていた。ユウはともかく、シゲルの成績は十分イエローでもお釣りがくるほど優秀だ。だがユウは十代よりも少しいいぐらいで十代と共に退学まで追い込もうと考えていたが、そうになるとシゲルまで

「イイデシヨウ。このカードを使い、必ず勝つのデース！！」

仕方がない、クロノスはそう割り切った。2人の取り巻きが勝つことを疑わなくて。

実技試験会場

「あ、シゲル！！」

「ん？おうユウ。もしかして次か？」

今現在最初のグループが試験をしていた。今回の試験内容は『勝つ』と、いたってスタンダードなテーマだった。

そしてユウとシゲルは第2組で順番は次だった。ちなみに十代も第2組の様だった。

『それデ〜ハ、第2組の生徒は前に出なサ〜イ!』

「ん?ボク達の順番か…行こう」

「おう」

ユウとシゲルは会場へと向かった。そして各々リングに上がると

「久しぶりだな…クズ!」

「ガキが…叩きのめしてやるよ!」

万丈目の取り巻きがいた。ちなみに隣同士のリングだから小声でも声が聞こえる。するとシゲルが一つため息をついてダルそうに口を動かした。

「たく…またメンドそうだな…」

「ははは…そうだね」

「2人とも〜頑張って〜!」

シゲルの言葉にユウが同意すると観客席の前方からツバキが応援していた。それに2人は軽く手を振って構えるとなぜか取り巻きが嫌な笑みを浮かべていた。

「グフフ…君達はボク達に勝てないよ」

「そうさ、そしてあそこにいる女も俺達のモノになる！！第一貴様等はあの女と釣りあわねえぜ！」

「グフフ…そうさ…悪いことはいわねない。あの子に近づくな」

明らかにユウとシゲルを嘗めていて、そしてツバキに危害を加えるそう感じたシゲルは軽く構えを解くとユウの方を向いた。若干ユウがキれている気がしたが、気にしないで置いた。

「なあユウ」

「なに？」

「勝負しようぜ。どっちが早く雑魚を倒すか」

「いいよ」

その言葉にカチンと来たのか取り巻きは青筋を立てた。

2分後

「「そ、そんな事が…」」

「火之迦具土ノヘラクノイノスの攻撃！！紅蓮滅殺拳！！ノバーストブレイカー！！」

「ば、馬鹿なああ！！！！ノちくしょおう！！！！」

取り巻きA / LP 2500 0
取り巻きB / LP 3000 0

二人同時に終わった。というか第2組のなかで2人が最初に終わった。

しかもレッドである2人がブルーに勝てたことに会場がざわついた。

「はあ…引き分けか」

「うん…やっぱり攻撃しとけばよかったかな…」

そう言いながら2人はリングを後にした。一方残された取り巻きたちはなぜ負けたのか、また自分が負けたことが認められず呆けていた。と

「フェザーマンの直接攻撃!!」

「うわあああ!!」

万丈目 / L P 1 0 0 0 0

こうしてクロノスの目論見が全て崩された。

第5組

第5組でツバキが試験を受けることになった。ちなみなのは、フェイト、明日香、三沢は勝ったが翔と隼人は負けていた。

そして

「よろしくや、ツバキちゃん」

「よろしくね、はやて」

ツバキの相手ははやてだった。だがいつもののはやてと違い、何処か神妙な表情だった。

それを観客席で見たユウとシゲルは首を傾げていたが、なのはとフェイトは俯いていた。

「ツバキ…」

「?どうしたの」

そして何かを決心したのははやては強くツバキの目を見て言った。

「ユウの持つてる『カード』と同じロストロギア…持つてるやろ」

「え…!?!」

「アンティヤ…それを賭けて勝負して…!!」

なぜはやてがカードを持つてるのか知っているのか、どうしてそれがロストロギアだと知ってるのかはどうしてもよかった。なぜ『はやてがアンティを持ちかけてきたのか』がツバキにとって衝撃だった。

「っ…てめえらはやっぱり他人の事なんてしらねえって言うことか…!!」

「ち、ちがう…!!」

シゲルの言葉になのはは必死に首を横に振る。だがユウもシゲルもツバキもはやての言葉にもう信じることは出来なくなった。

「…どうして……」

「ツバキ……」

「っ……………!!」

「「デュエル決闘!!」」

こうして ツバキ世界の矛盾VS はやて夜天の主の勝負が始まった。

第十話 月一試験 予想外の腕前？ 魔法使いVS夜天の魔導師 前編（後書き

というわけで次回がツバキVSはやてです。

そしてオリジナルカード募集します。詳しくは活動報告、前回の話を…

では） - - ）ノシ

第十一話 戻らない関係 現れる魔法神官 魔法使いVS夜天の魔導師 後編

はい、VSはやてです。

……まさかすごい弱体化してるカードがあるとは……

そういえば気づけばPVが24,000アクセス ユニークが3,200人超えてた。

ツバキのターン

「私のターン！！私は魔法都市エンディミオンを発動！！さらにおろかな埋葬を発動！！デッキのモンスターを1体墓地に送る！！そして魔法カードが発動されたためエンディミオンにカウンターが乗る」

魔法都市エンディミオン

フィールド魔法

自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

魔力カウンターが乗っているカードが破壊された場合、破壊されたカードに乗っていた魔力カウンターと同じ数の魔力カウンターをこのカードに置く。

1ターンに1度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを取り除いて自分のカードの効果が発動する場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを取り除く事ができる。

このカードが破壊される場合、代わりに

このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事ができる。

フィールドがゲームのRPGなどによくあるような街へと変わった。
エンディミオン/MO 1

「そして見習い魔術師を召喚！！効果でエンディミオンにカウンタ

ーを乗せる！！ターンエンド！！」

見習い魔術師 / DEF 800

エンディミオン / M 1 2

ツバキ / LP 4000 手札3枚 見習い魔術師

はやてのターン

「うちのターン…！！」

ツバキは本気だった。そしてこうなることは分かっていた。そうはやては自分に言い聞かせカードを引いた。そんなはやてに覇気は無かった。

「うちは手札の堕天使ゼラートを墓地に送ってダーク・グレファアーを特殊召喚！ダーク・グレファアーは手札のレベル5以上の闇属性モンスターを墓地に送ることで特殊召喚できる！」

ダーク・グレファアー

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 1700 / DEF 1600

このカードは手札からレベル5以上の闇属性モンスター1体を捨てて、

手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、手札から闇属性モンスター1体を捨てる事で自分のデッキから闇属性モンスター1体を選択して墓地へ送る。

はやての場に全身黒いダークモンスターのダーク・グレファアが現れた。おそらくこのカードがいるということとははやてのデッキは

「闇^{ダーク}デッキ…！」

「ダーク・グレファアの効果！手札のダーク・パーシアスを墓地に送ってデッキのダーク・クリエイターを墓地へ送る！そしてダーク・グレファアを生贄にダーク・ジェネラル フリードを召喚…！」

ダーク・ジェネラル フリード

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1700

このカードは特殊召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする魔法カードの効果は無効にし破壊する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに、

自分のデッキからレベル4の闇属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「フリードで攻撃…！」

「…見習い魔術師の効果発動…！デッキから見習い魔術師をセツトする…！」

明らかになツバキの敵意、そしてそれは自分へと向けられていたはやては、後悔していた。

なぜ自分は友達を裏切ってしまったのか

「カードを2枚伏せてターン終了…」

はやて / LP 4000 手札0枚 フリード 伏せカード2枚

「私のターン！！私は見習い魔術師を反転召喚！！効果でカウンターを乗せる！！」

エンディミオン / M 2 3

「……信じてたのに…」

「え…？」

魔力カウンターがエンディミオンに乗った時、ツバキがそう呟いた。はやての耳には掠れて聞こえていたが、確かに「信じていた」と聞こえた。

「私は見習い魔術師を生贄にダイクレッド・エンチャンター闇紅の魔導師を攻撃表示で召喚！！」

「久々の出番だな」

ツバキの場に現れた闇紅の魔導師はそう言いながら杖を構えた。そしてカウンターが増え、攻撃力が上がった。

闇紅の魔導師 / ATK 1700 2300

「魔法カードまじょくしよつあぐ魔力掌握を発動！闇紅の魔導師にカウンターを乗せ、同名カードを手札に加える！！さらに自身の効果でエンディミオンと闇紅の魔導師にカウンターを更に乗せる！！」

まじょくしよつあぐ
魔力掌握

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。その後、自分のデッキから「魔力掌握」1枚を手札に加える事ができる。

「魔力掌握」は1ターンに1枚しか発動できない。

エンディミオン / M 3 4

闇紅の魔導師 / M 2 4 ATK 2300 2900

「フリードを上回った!？」

「カード2枚伏せ、バトル！！闇紅衝撃波導ダイクレッド・ショック・ウェイブ！！」

「くう…!!」

はやて / LP 4000 3400

ダークの攻撃で闇に染まった將軍が破壊された。だがそれでもはや
ての目からは先程まで無かった闘志が見えていた。言い訳・弁解・
そして交渉　どれをするになってもまず、この決闘を勝たなくて
はいけなかった。

ツバキ / LP 4000　手札1枚　闇紅の魔導師　エンディミオン
伏せカード2枚

「うちのターン！！罨カードリビングゲットの呼び声を発動！！墓
地に存在するダーク・パーシアスを特殊召喚！！」

ダーク・パーシアス

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 天使族 / 攻1900 / 守1400

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体をゲームから除外する
事で、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する

闇属性モンスターの数×100ポイントアップする。

ダーク・パーシアス / ATK 1900　2300

「攻撃力が上がった!?!」

「墓地に存在する闇属性モンスター×100ポイント攻撃力がアッ
プするんや!!」

だが、それでも攻撃力が足らなかつた。だが今はやての手札にあるカード　それははやての切り札だ。^{エクス}

「フィールド上のダーク・パーシアスを生贄に捧げてこのモンスターを特殊召喚できる!!」

「!?!?そんなモンスターが!?!?」

場のダーク・パーシアスが消えると更に巨大な黒い翼が備わつたダーク・パーシアスが現れた。

「これがうちの本当の切り札!!ダーク・ネオ・パーシアス!!」

ダーク・ネオ・パーシアス

効果モンスター

星7 / 闇属性 / 天使族 / ATK 2300 / DEF 2000

このカードは自分フィールド上の「ダーク・パーシアス」1体を生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

このモンスターの攻撃力は墓地の闇属性モンスター1体につき、攻撃力が300ポイントアップする。

このモンスターは、相手のカード効果で破壊されない。

「ダーク・ネオ・パーシアスは墓地の闇属性モンスター×300ポイントアップする!!墓地には5体のモンスター、よって攻撃力は

1500アップ!!さらに伏せカードマジック・プランターを発動!!リビングデットを破壊して2枚ドロー!!」

ダーク・ネオ・パーシアス / ATK 2300 3800
はやて / 手札 0 2

「カードを一枚伏せ、魔法カード『デステイニー・バースト』を発動!!デッキの上から3枚墓地に送り、その中にいる闇属性モンスターの数だけ、場のパーシアスの攻撃力を500アップさせる!!」

デステイニー・バースト

通常魔法

自分の場にレベル7以上の闇属性モンスターが存在し、手札が無い場合のみ発動することができる。

デッキの上から3枚墓地へ送り、その中の闇属性モンスター1体につき

エンドフェイズまで500ポイント攻撃力が上がる。

エンディミオン / M 4 5

墓地へ送られたのは死者転生、ダーク・ホルス・ドラゴン、ダーク・シムルグ 闇属性モンスターは2体だ。そして自身の効果も含め

ダーク・ネオ・パーシアス / ATK 3800 4800 5400

「攻撃力5400!？」

「バトル!!ダーク・ネオ・パーシアスで闇紅の魔導師に攻撃!!
ダークネスパーシア!!」

「畏カード、炸裂装甲!!効果で「無理や!ダーク・ネオ・パーシ
アスはカード効果で破壊されへん!!」そんな...!!」

『クツ!!すまないツバキ...!!』

「うわああああ!!!!!」

ツバキ/LP4000 1500

ツバキの場にいたダークが黒い闇騎士によって倒された。だがダ
ークの居た場所に3つの光が残されていた。

「っ...エンディミオンの効果発動!!魔力カウンターが乗ったカ
ードが破壊された時、そのカードに乗っていたカウンターをエンデ
イミオンに乗せる!!」

エンディミオン/M5 9

ダーク・ネオ・パーシアス/ATK5400 4400

はやて/LP3400 手札0枚 ダーク・ネオ・パーシアス 伏
せカード

「私のターン！！伏せていた魔力掌握を発動！！エンディミオンにカウンターを乗せ、デッキから魔力掌握を手札に加える！！さらに自身の効果でエンディミオンにカウンターが乗る！！」

エンディミオン / M 9 1 1

「更にリバーズ罠！！魔力昇華を発動！！フィールド上にある魔力カウンターを4つ取り除き、カードを2枚ドロロー！！」

魔力昇華

通常罠

自分フィールド上の魔力カウンターを4つ取り除き発動する。
デッキからカードを2枚ドロローする。

エンディミオン / M 1 1 7

ツバキ / 手札 2 枚 4 枚

「（ん？…ツバキの目が…赤くなってる…？…そういえばなのはちやんやフェイトちゃんも似たようなことを…）」

ツバキの目の色が鮮やかな青から赤色へと変わっているのにはやては気付いた。

その時、先日の翔の偽ラブレター事件でユウとシゲルの目の色も変わってる事をなのは達から聞いていたの思い出した。

「墓地のエンディミオンの効果発動!!」

「墓地!?!」

ツバキがそう言った瞬間セメタリーゾーンが光り出し、1体のモンスターが現れた。

それは今フィールドにいる『魔法都市エンディミオン』を収めるモンスター

「場の魔法都市エンディミオンのカウンター6つを墓地に送ることで手札、墓地から魔法都市を統べる者を特殊召喚する!!現れて!!
!神聖魔導王しんせいまどうおう エンディミオン!!」

エンディミオン/M7 1

そして現れた 最高神の魔法使いの一人、

『神聖魔導王』の称号を持つモンスター 『エ

ンディミオン』

神聖魔導王 エンディミオン

効果モンスター

星7/闇属性/魔法使い族/ATK2700/DEF1700

このカードは自分フィールド上に存在する

「魔法都市エンディミオン」に乗っている魔力カウンターを6つ取り除き、

自分の手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する魔法カード1枚を手札に加える。
1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、
フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

「いつの間のそんなモンスターを…」

「最初に発動したカード…『おろかな埋葬』で墓地の送ってたの」

そうデュエル開始と共にツバキが発動したデッキのモンスターを墓地へと送るおろかな埋葬で墓地に落としたモンスターだ。

エンディミオン / ATK 2700

「けどパーシアスの方が攻撃力は上や!!」

「エンディミオンは自身の効果で特殊召喚された時、墓地の魔法カードを一枚手札に加える!!おろかな埋葬を手札に加える!!そして手札の魔力掌握を墓地に送り、フィールド上のカード一枚を破壊することができる!!その伏せカードを破壊!!」

「うっ…カオス・バーストが…」

「そしておろかな埋葬を発動!!デッキからツイン・マジシャンを墓地へ送る!!」

エンディミオン / M 1 2

エンディミオンにカウンターが乗った。だがもう、エンディミオンのカウンターは関係なかった。それは　ツバキが『このターンで終わらせる』つもりだったからだ。

「手札から死者蘇生を発動！！墓地の闇紅の魔導師を特殊召喚！！」

エンディミオン/M2　3

『ふむ…私とエンディミオン…ということは『あれ』を使うつもりか』

「うん…それが…今の私の全力だから…もう手加減する気は無い！
！フィールド上のレベル6以上の魔法使い族モンスター、エンディミオンと闇紅の魔導師の2体を生贄に！！」

その言葉に会場がざわついた。その召喚条件が満たすモンスターは
たった一つ

「黒の魔法神官（マジック・ハイエロファント・オブ・ブラック）
を特殊召喚！！」

ブルーアインズ・アルティメットドラゴン
神をも超える竜をも超える伝説の決闘者武藤遊戯が召喚した魔法使
デューエリスト
いだ。

黒の魔法神官（マジック・ハイエロファント・オブ・ブラック）

効果モンスター

星9 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK 3200 / DEF 2800

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在するレベル6以上の魔法使い族モンスター2体を

生け贄に捧げた場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
罨カードの発動を無効にし破壊する事ができる。

「そして最後の切り札^{カード}！！装備魔法『魔導師の秘術』を黒の魔法神官に装備！！バトル！！黒の魔法神官でダーク・ネオ・パーシアスに攻撃！！！」

「はあ！？攻撃力はこっちの方が上や！！！」

はやてはそう言った。確かに黒の魔法神官の攻撃力は3200、パーシアスの攻撃力は4400、そしてその差1200

ダーク・ネオ・パーシアス / 4400 1900

「な、なんで攻撃力が！？」

「魔導師の秘術の効果…墓地の魔法使い属性モンスターの数だけ攻撃力を500下げる…！！墓地には5体の魔法使いがいるから2500ポイントダウン！！！」

魔導師の秘術

装備魔法

自分の場の「黒の魔法神官」にのみ装備可能。
装備モンスターが戦闘を行う場合、墓地の魔法使い族モンスター1体につき

相手の戦闘を行うモンスターの攻撃力を500下げる。

このカードが表側表示で存在する場合、自分はモンスターを召喚、特殊召喚、セット、反転召喚することはできない。

「バトル！！魔法神官でパーシアスに攻撃！！セレスティアル・ブラック・バーニング！！」

「きゃああああ！！！！！！！！」

はやて / LP 3400 2100

はやての場の黒き天使はツバキの黒の魔法神官の炎の魔法で完全に消滅した。だが

「墓地のツイン・マジシャンの効果発動！！」

はやてのターンはもう来ない。

「ツイン・マジシャンは墓地に存在する時、場のレベル8以上の魔法使い族モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、フィールドの魔法カードを2枚墓地に送ることでもう一度攻撃することが

できる!!」

「なんやて!!」

ツイン・マジシャン

効果モンスター

星5 / 風属性 / 魔法使い族 / ATK1200 / DEF2000

このモンスターは1ターン2回攻撃することができる。

墓地にこのカードが存在しフィールド上に存在する

レベル8以上の魔法使い族モンスターが、

戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分フィールド上の魔法カード2枚墓地へ送って発動する。

そのモンスターはもう1度攻撃することができる。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

「ツ、ツバキ!!」

「はやて…もう2度と…私達の前に…」

黒の魔法神官は杖をはやてに向ける。

だが、もうそれはツバキの目には入っておらずその眼は完全に光が消えていた。

「現れないで!!黒の魔法神官、エンディミオンと魔導師の秘術を糠に再び攻撃して!!セレスティアル・ブラック・バーニング!!」

試験で秘密裏に行われていたツバキとはやてのアンティデュエルだがあの日からは達はシゲル達の前に現れようとはしなくなつた。

秘密裏とは言え親友ツバキにアンティを持ちかけた所為か、噂では以前とは別人のように落ち込んでいるらしい。

だがシゲルとツバキには気にすることは無かった。その理由は

「…行…くよ…ゴホっ！………」

「39・8…寝とけ。完全に風邪だ」

「そつだよユウ」

ユウが熱を出した。それも結構高い高熱だった。だがそれでもユウは授業に出ようとしてた。こつという所は結構頑固なのだが

「ユウ、この指を見る」

「…え…?」

ユウの顔の前に人差し指で顔を指し、トンボを捕まえる時の様にくるくる回すと

「…………ふにゃ…………」

目を回して倒れた。それも今までに言ったことのない腑抜た声を上げながら。それを見たツバキは苦笑いをしながらユウの布団を整えた。シゲルはため息をつきながらユウの頭に濡れタオルを乗せた。

「帰りしなに薬を貰ってくる。それまで寝とけ。イナはユウの容体を見といてくれ」

『行ってらっしゃい』

ホームルーム
HR

「ニョ？シニョールタはどうしたノ〜ネ？」

「あ、熱出して今日は休みます」

お昼時

「十代、一緒に食おうぜ」

「いいぜ」

十代達とシゲルとツバキが昼飯を食べている時、ツバキはユウの事が心配だった。

一方心配されているユウは…

「うう〜……ん……頭が……重い……」

悶えていた。

放課後

はいそこ、早いと言わない。特にこれと言って言うことが無いんだ。

「シゲル」

「ん？ツバキどうした」

教室を出ようとしたシゲルをツバキが呼びとめた。

「これから寮に戻るの？」

「いや、一度保健室で薬貰ってから戻るが…来るか？」

「うん」

side Out

保険室

???? side

「ええ…問題無いわ」

『出来る限り穩便に頼むぞ』

保険室内にいた金髪の女性が『空中に浮いていたモニター』に映っていた黒髪クロノの少年と通信をしていた。

「ふう…結構いいところなのに任務ってね…」

コンコン

女性がため息をつくとき扉をノックする音が聞こえた。どうやら誰かが来たようだ。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは黒髪シゲルの男子と白髪ツバキの女子だ。

side Out

「あら？どうかしたのかしら？」

「ちよつとルームメイトが風邪をひいて…風邪薬を貰いに来たんですが…貴女は？」

見慣れない金髪の本ブカットの女性　明らかにこの学園ではあまり見ない女性だった。

するとその女性は思い出したように自己紹介をした。

「私はつい先日この保健室に派遣された女医のシャマルよ。あなたは…獣斬君と姫野さんね？噂はよく聞くわ」

「え、ええ…そそそついでです」

「……………どうせ碌でもない噂だろうな」

明らかに緊張してるツバキはシゲルの後ろにスウーと隠れてしまった。それにシゲルはため息をつくがシャマルはクスクス笑っていた。

「それでも無いわよ？ブルー生徒を圧倒する獣使いと、普段と決闘デュエルと性格の変わる二重魔法使いデュアルマジシャン、あとは…試験の日にクロノス先生に勝って、今もレッド寮のトップクラスの精霊の皇帝スピリットエンペラー…島の外に響いてる噂はこんなところね」

「中二病だな。てか誰か言わずとも誰なのか想像がつく、特に最後ユウ」

「ふふ…風邪薬ね。ちよつと待ってて」

シャマルは保健室の奥へ消えて行った。それにしても新しい保険の先生と言つのは初耳だったシゲルとツバキはなぜか別の意味で不安だった。

だがそれが2人は何か分からなかった。

レッド寮ユウとシゲルの部屋前

薬を貰ったシゲルと様子を見に来たツバキ、そして一応検診することになったのでシャマルが着いてきた。

「ユウ、元気か？」

「…おかえり…」

ユウは横になっていたが右手を上げてシゲルに返事をした。するとツバキと見知らぬ女性シャマルが入ってきたから首を少し横に傾けていた。簡単にシャマルが自己紹介をすると手際よく検診を始めた。

「…うん、後少し寝れば良くなるわ。あ、そうそう…此処の厨房借りるわね」

シャマルは昼を食べてないユウの為に粥を作ってくると言って部屋を出た。

そう、それがこの後の惨劇を呼び起こすとは

この時はまだ

誰も知ら

なかった……

「ただいま」

「」「」……「」「」

ほんの5分ほどでシャマルは戻ってきた。その手には鍋ダイク・マターを持っていた……

「えっ……シャマル先生？」

「何かしら？」

なぜこの先生は笑顔で暗黒物質ダーク・マターを持てるのだろうか？

それ以前に暗黒物質を持っている？そしてなぜ鍋に入っているのか？

「それは…なんですか？」

「ん？シャマル先生特性栄養満点お粥よ」

そう言った、確かにお粥と言った。だがどうやったら緑色になる。というかお粥はお水と米で作るモノのはずだ。キャベツやそう言った野菜があるのなら納得出来なくもなくもないが、お粥と確かに言った。

じゃあ

これは

何？

「……………ちょっと食べてもいいですか？」

「？いいわよ」

シゲルが試しに一口そのお粥ダーク・マターを食べてみた。

「……………」

「…シゲル？」

「……………」

「ど、どうしたの」

一口食べてからシゲルが動かなくなった。流石に心配になったユウとツバキが声を賭けるが全く動かない。

すると

「……………（ ・ □ ・ ）」

「シ、シゲル！！」

「口からなにか、何か出てるよ！！」

『しっかり気を保て！！』

口から何か（言うまでも無く魂）が出ていた。それにユウとツバキ、シヤマルには見えてないがウリィが慌てていた。

ちなみに翌日

「ツバキ」

「十代、どうしたの？」

「シゲルは？」

「……………」

「ど、どうしたんっすか!？」

「なんか知らんけど…遠い目をしてるんだな…」

欠席者 聖牙夕（熱） 獣斬繁（謎の幻覚、高熱、腹痛）

ネイビー「はい、これで決着」

三人「……………」

ネイビー「たぶんなのは達の出番は一気に減るね……」

オリジナルカード

ダーク・ネオ・パーシアス

ディステイニー・バースト

魔力昇華

ツイン・マジシャン

魔導師の秘術

ちなみに次回から少しばかり本編を飛ばすと思います。

あ、もしかすると次回にはもうシンク口出るかもしれません。

第十二話 夜の戦い 闇のゲームスタート VSシンクロモンスター前編(前書

はい、12話目です。今回初めてのシンクロモンスターが出ます。
それと今回はオリジナルカードの要素は少なめです。

第十二話 夜の戦い 闇のゲームスタート VS シンクロモンスター 前編

シゲル昇天2日後（死んでいません）

一先ずシゲルが回復し、ユウの熱が引いて2日後。

この日の夜は十代の発案で引いたカードのレベルで怪談話をするこ
とになった。

参加者は発案した十代とユウ、翔、隼人の4人だ。シゲルは先日の
原因不明（シャマルの手料理）の腹痛によつてできなかった課題を
するため部屋に残っていた。

「因幡之白兔（レベル3）か…」

「てか、自分のカードっすね」

引いたカードのレベルによるため、レベル3と言つと微妙なところ
だった。そこで怪談かどうかは分からないが自分と相棒スリットの出会いの
話をすることにした。

「まだボクが小さい時の話だけど…その頃はよく夢を見たんだ。同
じ夢をね。』助けてくれ。オイラは此処だ』って。その言葉と見覚
えのある広場のある場所の上に因幡之白兔がいる夢を何回も見たん
だ」

そう言つてユウは自分の手元にある因幡之白兔を見た。今となつて

は夢なのかどうかもわからない。本当にイナが言ったのかもわからない。

「初めは気にして無かったけど、もう2週間ぐらいその夢を見た時やっぱり気になってその広場に行ったんだ。それで夢の場所を掘ってみると…」

「」「掘ってみると…?」「」

ユウの言葉を3人が聞き返した。そして

「カードを見つけたんだ…!!」

「え?ど、どういうことなんだな?」

「分からない。けど、その場所からボクが今使ってるスピリットデツキが出てきたんだ。」

「うーん…怖いんだかどうなのか分からないな…」

「ほっほっ皆さん何してんだニヤ〜?」

「」「うわあ〜!!」「」

「あ、大徳寺先生」

突然の先生の出現に十代達は椅子から転げ落ちてしまった。だがユウだけは平然としていた。

「びつくりした…!!」

「ありや…ユウ君だけは驚かないのにや…」

「だってファラオの泣き声が聞こえましたから。ねえ〜ファラオ〜」

「にゃ〜」

「…まあいいにゃ。所で何してるんだにゃ？」

てか、知らなかったのかい。この流れだと普通知って、出来心で驚かせたんだろ。

すると翔は引いたカードで怖い話をするってゲームの説明をしていた。それを聞いた大徳寺先生は

「それはそれは面白そうだにゃ。どれどれ…」

つと一枚引いてみた。そこには融合モンスター『FGD』フマボウケラリオンが

「れ、レベル12!？」

「そういえば…」

と、大徳寺先生は特待生寮の闇のゲームの話をした。今はすでに立ち入り禁止だが、何人もの行方不明者が出た話をして立ち去った。

（翌日）

ユウside

先日の肝試しで大徳寺先生が言っていた場所へと向かうことにした。本来なら十代達と一緒に行くはずだったんだけど

「……………（ガタガタガタガタ）」

ツバキが怖いのに付いて来た。しかも思いつきりユウの服を掴んで震えてる。

事情を知ったツバキが「心配だから」ということで一緒に行こうとしたのだが、行く時間が夜だということで更に恐怖心が出てきて、だがユウだけでは心許ないのでシゲルも行くのだが課題がまだ終わってなかったので、先に十代達が行ってしまった。

そして課題を終わらせたシゲルと共に3人が十代達を追いかけているのだが、ツバキが震えていたのだ。

「というか特待生寮ってこっちで合ってるのか？」

「うん、大徳寺先生に聞いたらこっちだつて」

と言っているうちに明らかに立ち入り禁止用に、張つてある有刺鉄線が見える建物が見えた。そして近くに『立ち入り禁止』と書かれた看板を見つけた。

「此処の様だな…てか、ツバキ怖いんなら帰れ」

「ダダダダダイジョウブ…：ウン、ダイジョウブ」

明らかに大丈夫ではないが、仕方が無いので進もうと

「あぶねえ!!」

「きゃ!?!うわあ!?!」

誰かが何かを飛ばしてきた。それは黒い球体だが明らかに実体がある。そう思ったシゲルは2人を突き飛ばしてその球体を避けた。その球体はその先にあった木にぶつかり、消滅した。見ても立体映像ではなかった。そしてその先には

「ちっ、外したか…」

長い銀髪の見たことのない服装に身を包んだ青年だ。その手には杖の様な様な物を握っていたが、明らかにアカデミアの生徒ではなくどちらかというと

「魔法使い…？」

アースラで見たクロノの様な服装だった。ツバキの呟きに青年少し驚いたような顔だった。

「へえ…俺様がどんなのか分かるみてえだな」

「たく…また管理局の野郎か…俺達の前に現れるなって言ったはずだ…！！」

「いやいや」

シゲルはそう言いながらデュエルディスクを構えた。すると青年は人懐っこい笑みを浮かべると両手を上げて敵意が無いようなそぶりを見せた。

「俺は管理局員じゃねえ。しがない魔法使いだ。敵じゃねえよ」

「ほほほんとですか？」

ツバキがユウの後ろからビビリながら聞いた。だがユウもシゲルも警戒していた。

すると今度は殺気を周囲にまきちらしながら青年は杖を構えた。

「たく…ガキだとすぐ信用してロストロギアを渡す思ったが仕方ねえ…力づくで奪ってやんよ…！」

「どつちにしろ敵か…2人とも下がってる…！！」

そう言うとシゲルは一步前に出た。青年の杖は一瞬光ったと思うと見たことのない形のデュエルディスクになった。

「デュエル…！」

「シゲルVS???」

2人が5枚カードをドロースると青年の周囲から薄暗い膜の様な物が現れた。

そしてその膜は徐々に大きくなりシゲルを包み込んだ。

「これはなんだ…!？」

「ふん…なあに…ちょっとしたショーだ…!!」

「ど、どうしよう、ユウ」

「うん…助けを呼びたいけど立ち入り禁止寮に来た事がばれたらボク達だけじゃなくて中にいる十代達も退学になっちゃう…ここはシゲルにまかせるしか…」

と言った時、ユウは寮から誰か出てきたのが見えた。4人組だったから一瞬十代達ではないと思ったが、そこにいたのは十代達と明日香だった。

「十代!!皆!!」

「ユウ!!」

「なんつすか…これ…」

「なんでシゲルがデュエルをしてるんだな…」

十代達が状況を掴めないが2人のデュエルは止まらない。

シゲルのターン

「俺のターン!!俺はホプロムスを守備表示で召喚!!カードを2

枚伏せてターン終了!!」

ホプロムス / DEF 2100

シゲル / LP 4000 手札3枚 ホプロムス 伏せカード2枚

????のターン

「ふん…グレイディアルビースト剣闘獣か…そんなカードを使うとはな、俺のターン!!」

青年は一枚カードを引くとにやりと笑った。

「手札の魔轟神獣ルビラーダを捨てチューナーモンスター魔轟神獣
チャワを特殊召喚!!」

「チューナー…!!?」

魔轟神獣チャワ

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 獣族 / 攻 200 / 守 100

自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。

手札から「魔轟神」と名のついたモンスター1体を捨て、
このカードを手札から特殊召喚する。

聞き覚えのない『魔轟神』と名のつくモンスター、そしてチューナ

ーという種類

何か嫌な予感が7人によぎった。

「さらに手札の魔轟神獣ノズチの効果を発動！！手札の魔轟神ルリーを捨て特殊召喚！！ルリーの効果！このカードが捨てられた時特殊召喚する！！」

さらにノズチの効果発動！！手札のレベル2以下の魔轟神を特殊召喚する！！

魔轟神獣キャシーを特殊召喚！！そして魔轟神ウルストスを通常召喚！！」

魔轟神獣ノズチ

効果モンスター

星2 / 光属性 / 獣族 / 攻1200 / 守 800
自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。

手札から「魔轟神」と名のついたモンスター1体を捨て、このカードを手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、

手札からレベル2以下の「魔轟神」と名の付いたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

魔轟神ルリー

効果モンスター

星1 / 光属性 / 悪魔族 / 攻 200 / 守 400
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

魔轟神獣キャシー

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 獣族 / 攻 800 / 守 600

このカードが手札から墓地へ捨てられた時、
フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を破壊する。

魔轟神ウルストス

効果モンスター

星4 / 光属性 / 悪魔族 / 攻1500 / 守 200

自分の手札が2枚以下の場合、

自分フィールド上に表側表示で存在する

「魔轟神」と名のついたモンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

「一気に5体のモンスターを召喚した!？」

「け、けどこれで手札は0「甘いな」え!？」

手札はもう無い、そして攻撃力はホプロムスの守備力に敵う者はいない。そのはずだった

「行くぜ! レベル4魔轟神ウルストスにレベル1魔轟神獣キャシーをチューニング!！」

キャシーの姿が消えると一つの光になった。そしてその光は緑色の輪を作りだした。

その中に入ったウルストスは4つの星に変わると直線に並んだ。

「希望を託されし悪魔の軍隊よ！！その力を以って天を切り裂け！
！シンクロ召喚！！」

一直線に並んだ星は輝きを増してそして辺りを光が包み込んだ。

「現れる！！魔轟神レイジオン」

「モンスターが…一つになった…！？」

シンクロ召喚を知らない4人は驚いていた。4人 十代と翔と隼人、明日香だ。

「レイジオンの効果発動！！召喚成功時、手札が2枚になるように
ドローする！！」

魔轟神レイジオン

シンクロ・効果モンスター

星5 / 光属性 / 悪魔族 / 攻2300 / 守1800

「魔轟神」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター
1体以上

自分の手札が1枚以下の場合、このカードがシンクロ召喚に成功し
た時、

自分の手札が2枚になるまでデッキからカードをドローする事がで

きる。

「ふはははは！こいつは良い！最高だぜ！魔法カード暗黒界の取引を発動！互いにカードを一枚引いてその後一枚捨てる！！更に魔轟神クルスの効果発動！墓地から魔轟神ウルストスを特殊召喚！！」

暗黒界の取引

通常魔法

お互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロし、その後手札からカードを1枚捨てる。

魔轟神クルス

効果モンスター

星2 / 光属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守800

このカードが手札から墓地へ捨てられた時、自分の墓地に存在するこのカード以外のレベル4以下の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

再び場に現れたウルストスから溢れた光はなぜか場の他のモンスターに力を与えていた。

「ウルストスの効果発動！！手札が2枚以下の時場の魔轟神は攻撃力400ポイントアップする！！」

レイジオン / ATK 2300 2700
ウルストス / ATK 1500 1900
チャワ / ATK 200 600
ノズチ / ATK 1200 1600
ルリー / ATK 200 600

「更にレベル4魔轟神ウルストスとレベル2魔轟神ノズチ、レベル1魔轟神ルリーにレベル1魔轟神チャワをチューニング！」

「またシンクロ……！」

明日香の言葉の通りチャワが緑の円になりウルストス、ノズチ、ルリーが星となって直線に並んだ。

4 + 2 + 1 + 1 = 8

「全ての悪魔を統べし者よ、我に戦う知力を授けこの場に君臨しろ
お……！シンクロ召喚……！魔轟神ヴァルキュルス……！」

青年の場に現れたのは軍服に身を包んだ巨大な悪魔だった。

魔轟神ヴァルキュルス

シンクロ・効果モンスター

星8 / 光属性 / 悪魔族 / 攻2900 / 守1700

「魔轟神」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

手札から悪魔族モンスター1体を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「ヴァルキュルスの効果は発動！！手札の2枚目のクルスを捨てカードを一枚ドロウする！！クルスの効果で墓地のウルストスを特殊召喚！！ウルストスの効果でヴァルキュルスの攻撃力を400ポイントアップ！！」

ヴァルキュルス / ATK 2900 3300

「攻撃力3300！？」

「シゲルのヘラクノイノスよりも上よ！！」

「あひゃひゃひゃひゃ！！バトル！！レイジオンでホプロムスに攻撃い！！！！」

レイジオンがホプロムスに迫った。が、すぐに青年の場へと戻っていた。

「罠カード、ディフェンシブタクティクス！！このターン俺のモンスターは破壊されない。そしてバトルフェイズ終了時、ホプロムスをデッキに戻してダリウスを特殊召喚！！効果で墓地のベストロウリイを特殊召喚！！」

『ふむ…手こずってる様だな』

「クソが…一俺のカード（暗黒界の取引）で墓地に送ってやがったのか…俺はカードを一枚伏せターン終了!!」

??? / LP 4000 手札0枚 ヴァルキュルス レイジオン
ウルストス 伏せカード1枚

何とかガイザレスを召喚できる状況にした。だがあの伏せカードがどうしても気になった。

シゲルのターン

「俺のターン!!…俺は場のダリウスとベストロウリィをデッキに戻し、現れる!!ガイザレス!!効果によりヴァルキュルスとレイジオンを破壊する!!」

シゲルの場に現れた鎧をまといし旋風 ガイザレスの巻き起こした突風で相手のモンスターが破壊された。恐らくあの伏せカードは

「バトル!!ガイザレスでウルストスに攻撃!!」

「バアカめ!!リバーズカード炸裂装甲!!ガイザレスを破壊!!」

やはり攻撃反応型の罠だった。何を焦っているのかガイザレスが破壊された。その時の衝撃でバンダナが緩まったのか、シゲルの顔があらわに

「あ？お、女…？」

え？「「「「「

「「「「「……

第十二話 夜の戦い 闇のゲームスタート VS シンクロモンスター 前編 (後書

はい、中途半端ですが此処までです。

ユウ達がシンクロを使うのは恐らくもうちょっと先です。

……というか… 十二話目でまだアニメ5話… 少し遅いかな…

まあ、とりあえずこの先で飛び飛びになることがあると思います。

第十三話 夜の戦い 本当のダメージ VSシンクロモンスター後編(前書き)

今回でVSシンクロの終わりです。

ところで最近前後編が多い気がする…

第十三話 夜の戦い 本当のダメージ VS シンクロモンスター後編

炸裂装甲で破壊されたガイザレス その衝撃でシゲルのバンダナが外れてしまった。

シゲルのバンダナが無いとなぜか女性に見えた。いつもはバンダナで分らないがシゲルの髪は結構長く、肩ぐらいまであるのだ。

「てめえ…女だったのか…!?!」

「俺は男だああ!?!?!」

シゲルは肩に引っかけかかっていたバンダナをいつものように頭に巻く。すると元々の、目つきの悪い男に見えるになった。

「…シゲル君って…バンダナを取ると女に見えるんすね」

「初めて知ったぜ」

「カードを2枚伏せてターン終了!?!」

シゲル / LP 4000 手札2枚 伏せカード3枚

「なんか…シゲル君焦って無いつすか？」

「そうなんだな。なんだかガイザレスで伏せカードを破壊しなかったのはおかしいんだな」

翔達はシゲルの異変に気が付いていた。それはシゲル自身も分かっていた。

????のターン

「俺のターン！！貪欲な壺を発動！！墓地のヴァルキュルス、キャシー、ルリー、ノズチ、チャワをデッキに戻してカードを二枚ドロ！！！！つあひやひやひやひや！！！！
こいつは…俺は魔轟神獣オロチを攻撃表示で召喚！！召喚成功時墓地の魔轟神を特殊召喚する！！」

魔轟神獣オロチ

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 獣族 / 攻 400 / 守 600

このモンスターが召喚に成功した時墓地の「魔轟神」と名のつくモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはターン終了時に破壊され、攻撃を行うことはできず、効果は無効化される。

このモンスターがシンクロ召喚の素材になった時、その時シンクロ召喚したモンスターはカード効果では破壊されない。

「効果でレイジオンを特殊召喚する！！行くぞ…場のレイジオンとウルストスにオロチをチューニング！！」

「！？シンクロモンスターを更にシンクロ！？」

明日香は驚いているが、レイジオンとウルストスは今までと同じ様に星になった。そして9つの星と一つの輪が合わさり

「全ての魔轟を統べる王よ！！此処に降臨し、魔轟の進む道を示せ！！シンクロ召喚！！」

5 + 4 + 1 = 10

「魔轟神レヴァアタン、召喚！！」

巨大な鎧に身を包んだモンスターが現れた。

魔轟神レヴァアタン

シンクロ・効果モンスター

星10 / 光属性 / 悪魔族 / 攻3000 / 守2000

「魔轟神」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついた

モンスターを3体まで選択して発動する事ができる。

選択したモンスターを手札に加える。

レヴァアタン / ATK 3000

「攻撃力3000!？」

「不味いわ…シゲルの場には壁になるモンスターはいない…!!」

状況はシゲルは最悪　さらにあいつの手札には普通は存在しないカードがあった。

「魔法カード魔神旋風を発動!!自分の場にレベル6以上の魔轟神が存在する場合、フィールド上のカードをすべて破壊する!!」

「っ!？」

魔神旋風

通常魔法

自分フィールド上にレベル6以上の「魔轟神」が存在する時、フィールド上の魔法・罫を破壊する。

フィールドに吹き荒れた突風でシゲルの場のミラーフォースとリビングデットが破壊された。それを見た青年は高笑いをしていた。

「一つ…聞きたい…なぜお前が…シンクロ召喚を使える…?」

「ああ? まあ冥土の土産に教えてやんよ。と言っても詳しくは知らんなあ。ミッドチルダでよく知らん女に貰った」

それを聞いたシゲルは自分の目的ターゲットを思い浮かべた。

そう言っつてシゲルはふらふらになりながらも立ち上がった。
と、そこに乱入者が

「夜神志度やがみ じゆ!!」

「ああ? 誰だ?」

青年 夜神志度が振り向いた先には、ブルーの制服とは違う白い服に身を包んだのはと、黒い服を着たフェイトがいた。2人の手には杖の様な物があり、それを志度に向けていた。

「時空管理局です!! 大人しくしなさい!!」

「はん!! 時空管理局だあ? それがなんだっていうんだ! 今死にかけのこいつの持つロストロギアを奪えば怖いもんなかねえ!!」

「っ!! シゲルさん!!」

なのははフラフラのシゲルを見て声を張り上げた。だがシゲルはそれに気にしないようにしてデッキの一番上に手を掛けようとしたがシゲルは立っているのがやっとだ。

「っ…夜神志度！！このデュエルボクが引き継ぐ！！」

「「ユウ!?」」

突然ユウがシゲルの横に立ってディスクを構えた。そして腰のデッキケースから一枚のカードを取り出した。

「シゲルのカード、そしてボクのカードを賭ける！！」

「フン、まあどちらでも良い。だが、貴様はライフはそのまま手札は五枚…そしてこのターンで貴様が勝たなければ、貴様はライフが残っていても負けだ！！」

「なっ、ふざけるな！！そんなのユウが不利なだけじゃないか！！」

志度の出した条件はユウが限りなく不利だ。しかも志度の場には攻撃力3000のモンスターがいる。たった1ターンでは不可能に近かった。

「嫌なら引っ込んでな！！まあ、どちらにしるそこにいる奴は終わ

りだなあ!!」

「ユウ…下がって…ろ…!!」

シゲルが息を絶え絶えにそう言うが、ユウは静かに首を横に振った。そして自分のデッキから5枚のカードを引いた。

「今度はボクがシゲルを守る番だ…だから休んでて…ボクのターン…!!」

手札が6枚　それで相手の場の攻撃力3000のモンスターを倒し、一気に4000のライフを削れる自信がユウにはあった。だが、シゲルは限界が来たのか、ゆっくりと倒れた。

「…シゲル…ボクは手札抹殺を発動!!手札をすべて捨て、5枚ドロ…する!!」

「おいおい!粹がつてる割には手札事故かあ!？」

手札抹殺

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドロ…する。

「フィールド魔法スピリット・フィールドを発動!!このカードが

場にある時、全てのスピリットモンスターは特殊召喚することができる！！死者蘇生を発動！！墓地のガイザレスを攻撃表示で特殊召喚！！

スピリット・ドローを発動！墓地の砂塵の悪霊をゲームから除外して2枚ドローする！！

そしてスピリット・フィールドの効果発動！！墓地の竜宮之姫を除外し、不死之炎鳥フシノトリを特殊召喚！！

更に墓地の因幡之白兔をゲームから除外し大和神ヤマトノカミを特殊召喚！！手札の夜叉を通常召喚！！」

不死之炎鳥

スピリットモンスター

星4 / 炎属性 / 鳥獣族 / 攻1200 / 守 0

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた場合、その数値だけ自分のライフポイントが回復する。

ヤマトノカミ
大和神

スピリットモンスター

星6 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2200 / 守1200

このカードは通常召喚する事ができない。

自分の墓地に存在するスピリットモンスター1体をゲームから除外した場合のみ

特殊召喚する事ができる。

特殊召喚したターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

相手フィールド上に存在する魔法または罫カード1枚を破壊する事

ができる。

夜叉^{ヤシヤ}

スピリットモンスター

星4 / 水属性 / 天使族 / 攻1900 / 守1500

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚・リバースした時、相手フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を選択して持ち主の手札に戻すことができる。

「凄い…一気に場にモンスターを4体並べた…」

「だがどうするつもりだあ？スピリットの最大攻撃力は火之迦具土の2800だ！！俺のモンスターに敵う訳ねえだろ！！」

「モンスターのステータスは攻撃力だけじゃない。

このモンスターは場のレベル4以上のスピリットモンスターを3体除外することで特殊召喚することができる！！夜叉、不死之炎鳥、大和神をゲームから除外…

彼の者の贅に捧げ闇にを誘い込む魔の大蜘蛛よ、此処に現わせ！！

エンシェント・スピリット ^{ツクモ} 土宮茂 特殊召喚！！」

ユウの場の3体のスピリットが消えると巨大な蛛が現れた。土宮茂の周りには居よな瘴気が漂っていた。

土宮茂 / ATK?

「攻撃力が決まって無い…だと?」

「土宮茂は召喚した時、墓地のスピリットモンスターを装備する、それが土宮茂の攻撃力と守備力になる。墓地の八岐大蛇を装備!」

土宮茂 / ATK? 2600

「だがそれでも俺の場のモンスターには届かねえ」更に除外されているスピリットモンスターの数×300ポイント攻撃力と守備力が上がる!」なっ…!!」

「今僕の除外されてるスピリットは6体：攻撃力は1800ポイントアップする!」

エンシエント・スピリット ツクモ 土宮茂
スピリットモンスター

星10 / 地属性 / 昆虫族 / ATK ? / DEF ?

このモンスターは自分フィールド上のレベル4以上のスピリットモンスター3体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚することができる。

このカードが特殊召喚に成功した時、墓地に存在するスピリットモンスターを1体、

このモンスターに装備カード扱いとして、装備することができる。

このモンスターが場から離れた時ゲームから除外されている

スピリットモンスターを効果を無効にして特殊召喚する。

このカードの元々の攻撃力と守備力は装備されているモンスターと同じになる。

除外されているスピリットモンスター1体につき、

このモンスターの攻撃力・守備力を300ポイントアップする。

「エンシエント・スピリット」と名のついたモンスターは1体しかフィールドの上に存在できない。

土宮茂 / ATK 2600 4400

「攻撃力4400だと！！だが、もうお前は通常召喚を行った！！これで俺のライフを削りきることは「魔法カードスピリットの復活を発動！！墓地に存在する雷帝神を特殊召喚する！！」なんだと！？」

スピリットの復活

通常魔法（準制限）

このカードは場に「魂の聖地 スピリット・フィールド」と

「エンシエント・スピリット」と名のつくモンスターが存在する時、発動できる

自分墓地に存在するスピリットモンスターを1体特殊召喚する

またこの効果で召喚したモンスターがレベル5以上であった場合、レベル×100ポイント、攻撃力と守備力がダウンする

「これで終わり…バトル！！土宮茂でレヴアアタンに攻撃！！土宮業破！！」

「っ……はあ……はあ……はあ……」

「シゲル!!」

「おいシゲル!!」

志度が気を失ってるのを見た5人とユウは倒れたシゲルに駆け寄った。

「っ!ツバキと翔君は鮎川先生かシャル先生を医務室に呼んで! 隼人君はシゲルを背負って医務室に行くわよ!!」

明日香の指示の元、急いでシゲルを運ぶように動き出した。この時全員、なのはとフェイトが志度を何処かへ運んでいたのに気付かなかった。

保健室

「うん、これで大丈夫。火傷はそれほどひどくは無いから跡は残らないわ」

「……よ、よかった……!!」

シゲルの治療を終えた鮎川は6人にそう言った。それを聞いた6人

は緊張が緩んだのかへタリと腰から落ちてしまった。

「何があったのか聞きたいけど、もう遅いわ…明日の放課後保健室に来なさい。いいわね」

こうして立ち入り禁止寮探検から始まった事件は終わった

時空管理局の存在を無関係の者達（十代・翔・隼人・明日香）に知られながら

さて、今回は初の投稿カード紹介です。

ユタさんより

『スピリットの復活』

『土宮茂』（名前のみ）

俺の偏見と独断でスピリットの復活は準制限にさしてもらいました。特に意味はないですが無制限なのに場合によっては奇跡の蘇生よりも発動が簡単なのはどうかと…ということですよ。

オリジナルカード

魔轟神獣オロチ

魔神旋風

エンシエント・スピリット

土宮茂^{ツクモ}

ちなみにシゲルは女子ではなく、女子に見える男子です。

普通の男子生徒より髪が長く、そして目がパッチリで額が男子よりも広いから女子に見えます。

そしてバンドナが額を隠し、髪がバンドナに巻き込まれる形で短く見え、バンドナのせいで目つきが悪く見える、そういう設定です。

さて今回は途中数話飛ばします。お楽しみに（ ・ ）ノシ

第十四話 初の協力？ タッグデュエル開始 精霊&獣VS門の番人 前編（前

日本大丈夫かな…結構大きな地震があつてほぼ岩手が壊滅状態だけ
ど…

奈良も少し揺れたな…

第十四話 初の協力？ タッグデュエル開始 精霊&獣VS門の番人 前編

シゲル&ユウVS志度の戦闘の翌日。

レッド寮十代と翔の部屋

ゴンゴンゴン！！！ゴンゴンゴン！！

「うん…誰だよ…こんな朝っぱらから…」

十代は眠い目を擦りながら強く叩かれたドアを開けた。そこにはアカデミア倫理委員会の女性とその部下数名が立っていた。

282

「結城十代、並びに丸藤翔だな。お前達を査問委員会に連行する」
「…はあ？査問委員会？」

聞き慣れない単語に十代が首を傾げていると翔も起きたのか十代の横に立っていた。

隼人は我関せずと言わんばかりに寝ていた。

「それと…聖牙タ、並びに獣斬繁の部屋は隣であっているか？」

「あ、ああ…そうだけど」

十代の返答を聞いた部下の一人が2人の部屋へと向かい、同じようにドアをノックした。

「此处を開ける！今すぐここを開ける！！」

「…ふぁい…」

完全に今さっきまで寝ていたユウが扉を開けた。一方部下は部屋の中をちらりと見てユウを見た。

「聖牙夕で間違いないな？獣斬繁はどこだ？」

「ん…シゲルは今保健室に「嘘をつくな！！獣斬繁はどこだ！！」
っ！？」

前日の戦いでまだシゲルの眼は覚めていない。だがそう言っても部下は声を荒げて、ユウの胸倉を掴んでいた。

「おい、オツサン！！何してんだ！！」

「黙れ！！貴様等…一体奴をどこに逃がした！？」

「落ちつけ。事情を聞かせてもらおうか？」

一応上司である女性が男性を宥めてクールダウンした。ユウは先日の事 シンク口召喚以外の事をすべて話した。それを聞いた女性

は少し考えて

「保健室に確認を取る。その間に3人は査問委員会に来てもらう」

査問委員会

「『ええ〜!! た、退学!?!』」

突然の退学通知　その理由は

「本日未明、結城十代以下3名は閉鎖され、立ち入り禁止となっている特別寮に入り込み、内部を荒らした。更にレッド寮の獣斬繁に危害を加えた。調べは付いている!」

「ちよ、ちよつと待てよ!! 俺達はシゲルに危害なんか加えてない!!!」

十代はそう言い返した。だがクロノスは嫌な笑みを浮かべて3人を見ていた。

「ふん!! デハ、どうしてシニョールシゲルが、今朝保健室に運び込まれたノーネ? 状況的に見て、アナタ達が寮に侵入を止めようとしたシニョールシゲルを、傷つけたとしか考えられないノ〜ネ」
「ち、違うつすよ!!」

十代と翔は必死に否定するが、他の倫理委員会＋クロノスは3人を冷たい目で見ていた。
と、その時

「少し黙つとけよ、先生」

「によ！？誰だノーネー！そんな、こと、ば、使い…シニョールシゲル！？」

車椅子に乗ったシゲルが部屋の中に入っていた。鮎川先生の言ったように火傷の跡は無かったが、所々に包帯を巻いていた。

「あの時、俺とユウは先に寮へ向かった十代達の後について行つた。寮に入る寸前、何者かが俺に勝負を挑んで…途中でぶつ倒れた、そしてこの有様だ。だが、そいつは確実に十代や翔では無かった」
「ま、待ちなさい！！あなたは何を言ってるの！？あなたは自分を襲った犯人を庇うと「黙れ！！」「っ！？」

倫理委員会の女性の言葉を遮ってシゲルはその女性を睨んだ。モニター越しに見えているはずなのに、女性には背後から拳銃を突きつけられている様な恐怖が伝わった。

「あの時俺が戦ったのは十代達じゃない！！これ以上俺の友達を犯^{ダチ}

人扱いするのなら…どうなるか分かってるのか!？」

「っ!?わ、分かったノーネ。けど寮に侵入したのには変わりないノーネ。なので…結城十代、丸藤翔、聖牙夕は退学にする「ちょ、ちよつと待て!!」ノーネ!？」

クロノスの言葉に今度は十代が被せてきた。それにクロノスはイライラしながら十代を見ていた。

「なんでユウまで退学扱いなんだよ!!ユウは寮に入って無い!!」

「そうっすよ!!入ったのは僕と十代の兄貴だけっす!!」

「フン!!でも入ろうとしたから『未遂』として「だったら俺もだ。俺はずっとユウと一緒に行動してた」ムググググ…!!（このまま4人を一遍に退学にしたら我が校に変な噂が出るノーネ…）仕方ないノーネ。別のペナルティの方法を提案する！」

それは『制裁タッグデュエル』!!」

放課後・保健室

「タッグか…」

一先ず査問委員会を終えた4人は保健室へと来ていた。その理由は鮎川先生の許可なしにシゲルが車椅子で出歩いたからだ。今現在シゲルは説教を喰らっている。

「うん…十代と翔、ボクとシゲルで1週間後指定された相手と戦う。けど4人ともデッキのテーマも戦法もバラバラ…どうするかな…」
「…ただいま」

そう言っただけでシゲルが戻ってきた。ちなみにシゲルの服装は新しいオシリスレッドの服と膝掛けをしていた。

だが、どうやらこつてり絞られたようで査問委員会に来た時、いや、いつもよりも覇気が無い。

「……………シゲル」

「……………なんだ？」

「……………なんでも無い」

ユウがどんなお仕置きがあったのか聞こうとしたが、若干やつれてる様な気がしたからやめた。と、その時来訪者が。

「目が覚めたそうね」

「良かったんだな」

明日香と隼人、そして無言でツバキが入ってきた。ツバキの手にはお見舞いの果物が

どこから持ってきたんだ？そんなもん果物

と、保健室に入ったツバキがシゲルの状態（車椅子）を見て驚いていた。

「体は大丈夫なの？」

「まあ問題ねえな。見た目はあれだが、まだ多少歩くと体が痛むから車椅子に乗ってるだけだ」

「聞いたわ。制裁タッグの話…私達もあの場所にいたのにね…」

明日香が残念そうにそう言った。後で聞いた話だが、明日香を助けるために十代は寮の中で闇のゲームをしたらしい。

「まあ、仕方ないよ。けどまだチャンスがあるだけ良いよ」

レッド寮ユウとシゲルの部屋

一応鮎川先生に許可もとり、シゲルは部屋に戻っていた。制裁デュエルの事は聞いていたのでタッグ用のデッキ調整の為のカードを取りに戻るぐらいは許可を貰えた。

「それで、デッキどうするの？」

「うん…異次元は絶対使えない…けどスピリットもほとんどタッグに向いてないし…」

「剣闘獣もほとんど…タッグには向いてないカードばかりだ」

タッグ様にデッキを組み直すとしても期限は1週間　とてもだが間に合いそうにもない。だが、このままで行くのも勝てる確率は低い

「シゲル君はいるにや？」

「ん？いますよ、大徳寺先生」

珍しくファラオを連れてない大徳寺先生が一つの封筒を持ってやってきた。

「君にアメリカからお手紙にや」

「アメリカ？」

アメリカと言う単語にユウとツバキが食いついてきた。だがシゲルは誰からなのか分かっているのか、無言でそれを受け取った。そして大徳寺先生は興味が無いのかすぐに部屋を出て行った。

「誰からなの？」

「ん？ペガサス」

バンドナを巻きなおしたシゲルは封筒を開けた。中には数枚のカードと手紙があった。
そのカードは

「スピリット!? それとチューナーにシンクロ!?」

「だな…こっちは魔法使い…で、剣闘獣…後は手紙か…」

親愛なるシゲルボーイへ。突然の手紙とカードにびっくりしていることでシヨウ

そのカード達は、ミーが新しく作ったカード達デース。いつかユーが言っていた『シンクロ』と『チューナー』を元にしてミーが作ってみた物です。そのカード達まだ市場に出回って無いのですが、そのカード達はユーが持つことに意味があるとミーは思いマス。

オウ！忘れるところでした！剣闘獣以外にもカードが入っていますよね？そのカードはユーの友人のユウボーイよツバキガールに渡しといてください。それではユーと再会する日を待っています

……ありがとう、ペガサス」

そう言っただけでシゲルは手紙を机の上に置いた。その手紙の中をツバキがチラッと見ると全て英語だった。翻訳しながらシゲルは読み上げていたのだ。

そしてペガサスから届いたスピリットを見ていたユウがあることに気付いた。

「ってシゲルがシンクロとチューナーを考えたって何!?!」

「ああ…なんか知らんけど夢でシンクロとチューナーのカードのイメージがたまに出ることがあったんだが…そのことをペガサスに言

「ったら面白がって作り始めたんだ」

「……………」

シゲルの夢に出たカードを面白がって制作した。それが前日のあのデュエルで強力な力を発揮するモンスターと同じだとは2人は絶句した。

本当は夢の事は嘘なのだが

「まあちよつどいいか…スピリットと剣闘獣のこのカードをテーマにタッグ用のデッキを作りなおすか」

1週間後

1週間の間に隼人の父親が連れ戻しに来たり、十代が翔の兄でアカデミア最強と詠われるカイザーこと、丸藤亮と戦ったり
ちなみにその場にユウ達3人もいた。

ん？なんでそのシーンを飛ばすのか？だっていてもほぼ意味無いもん。3人も応援してるだけで終わりだから。

ちなみに今2人のデッキにシンクロは入って無い。
なぜシンクロをデッキに入れなかったのかというと、シンクロモンスターを入れると上手くデッキが回らなくなるから、シンクロ用のデッキの調整はまた今度となった。

「ではこれより！！タッグデュエルを行いマス！！」
「先生、所で相手って誰ですか？」

なぜか多くの生徒が観客席にいるが、ユウは気にせず対戦相手を聞いた。ちなみに今十代と翔がリングに上がって、ユウは車椅子に乗ったシゲルと共にリングサイドにいる。

「立ち入り禁止寮に入った不心得者」を叩きのべ「すべく！伝説のデュエリストを呼んである」の！！」

「……！！！？？」

その時、誰かがリングサイドから飛び出してリングの上でアクロバティックな動きをしていた。

「我ら流浪の番人！！」

「迷宮兄弟！！」

観客席

観客席ではツバキ、明日香、三沢、隼人が並んで座っていた。

「聞いたことがあるわ…その無敵のコンビネーションでデュエルキングを苦しめたという…兄弟デュエリスト」

「そんな…タッグデュエルのスペシャリストと戦うなんて…」

デュエルリング

「おもしろ〜!!」

「案外楽しそうだな、十代は」

十代の反応を見たシゲルはそう呟いた。

40分後

「フォーチュンテンペスト!!」

「「うわあああああ!!!!!!!!」」

翔が融合召喚したユーフロイドファイターの攻撃で迷宮兄弟のライフは0になった。

それに会場は沸き上がった。タッグデュエルのスペシャリストに勝ったのだから無理も無い。

「ぬぬぬぬ…次はシニョールユウとシニョールシゲルのデュエルなノーネ!!」

「いよいよだね」

「まあ気楽にいくぞ」

そう言つてユウとシゲルはリングに上がった。ちなみにまだシゲルは車椅子に座つたままだ。鮎川先生の言うにはリハビリが必要なので立たない様にと言われていた。

「次は子供に怪我人か…」

「だが同じようには行かんぞ!!」

「子供…?」

「…?ユウ…っ!?!?」

迷宮兄弟の言葉にユウは小さく呟いてワナワナ震えていた。それにシゲルが気になって声を賭けると同時に背筋に寒気が走つた。

「クロノスせんせーい…早く始めてください」

「はわわわわわ…でゅ、デュエル開始!!」

なぜかクロノスは震えながら開始を合図した。その顔は恐怖に染まっていたが 一体何を見たんだ。

「…デュエル!!」「」「」

ルール補足

ライフは共通で8000

仲間の場合は自分のフィールドとして扱う。ただし、仲間のモンスターで攻撃は不可。
簡単な意思疎通（まかせろ、など）はしてもいいが指示は禁止。
各プレイヤーは1ターン目には攻撃できない。
生贄、融合素材に仲間のモンスターを使うことは可能。

兄のターン

「私のターン！私は地雷蜘蛛を攻撃表示で召喚！！カードを伏せ、永続魔法禁止区域を発動！！フィールドのモンスターはカード効果では破壊されない！！ターンを終了！！」

地雷蜘蛛

効果モンスター

星4/地属性/昆虫族/攻2200/守 100

このカードの攻撃宣言時、コイントスで裏表を当てる。
当たりの場合はそのまま攻撃する。
ハズレの場合は自分のライフポイントを半分失い攻撃する。

禁止区域

永続魔法

フィールドに存在するモンスターはカードの効果では破壊されない。

兄/LP8000 手札4枚 地雷蜘蛛 伏せカード

ユウのターン

「ボクのターン！ボクは魔法カードテラ・フォーミングを発動！！」

効果によりスピリット・フィールドを手札に加え発動！！更に阿修羅を守備表示で召喚し、カードを伏せターン終了！！」

ユウ/LP8000 手札4枚 阿修羅 伏せカード スピリット・フィールド

弟のターン

「私のターン！カイザー・シーホースを召喚！！そして魔法カード生け贄人形を発動！！兄者のモンスター地雷蜘蛛を生贄に捧げて手札のレベル7のモンスターを召喚する！！」

カイザー・シーホース

効果モンスター

星4/光属性/海竜族/攻1700/守1650

光属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

生け贄人形

通常魔法

自分フィールド上モンスター1体を生け贄に捧げて発動する。

手札から通常召喚可能なレベル7のモンスター1体を特殊召喚する。

そのモンスターはこのターン攻撃できない。

「現れる！！水魔神 スーガ！！」

水魔神 スーガ

効果モンスター

星7 / 水属性 / 水族 / 攻2500 / 守2400

相手ターンの戦闘ダメージ計算時のみ発動する事ができる。

このカードを攻撃するモンスターの攻撃力を0にする。

この効果はこのカードが表側表示でフィールド上に存在する限り1度しか使えない。

宮の場に全体が水で出来た巨大な脚の様なモンスターが現れた。
そのモンスターは

「ゲート・ガーディアンのパーツ…か」

ゲート・ガーディアン

効果モンスター

星11 / 闇属性 / 戦士族 / 攻3750 / 守3400

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「雷魔神・サンガ」「風魔神・ヒューガ」
「水魔神・スーガ」

をそれぞれ1体ずつリリースした場合に特殊召喚する事ができる。

「その通りだ、だが貴様等に止める手は無い！！魔法カード、闇の指名者を発動！！選択するのは雷魔神 サンガ！！」

「ふふふ…ありがたい…私のデッキにはサンガが入っている。よって手札に加わる！！」

闇の指名者

通常魔法

モンスターカード名を1つ宣言する。
宣言したカードが相手のデッキにある場合、
そのカード1枚を相手の手札に加える。

雷魔神 サンガ

効果モンスター

星7 / 光属性 / 雷族 / 攻2600 / 守2200

相手ターンの戦闘ダメージ計算時のみ発動する事ができる。

このカードを攻撃するモンスターの攻撃力を0にする。

この効果はこのカードが表側表示でフィールド上に存在する限り1
度しか使えない。

弟 / LP8000 手札2枚 カイザー・シーホース 水魔神
スーガ

シゲルのターン

車椅子に座ったままなので動きにくそうにしてカードを引いた。
そして一枚引くとチラリと場を見た。

「俺は魔法カード二重召喚を発動！このターン2回通常召喚がで
きる！！ベストロウリイ、そしてディカエリイを守備表示で召喚し、
カードを2枚伏せターン終了！！」

ホプロムス / DEF2100

ディカエリイ / DEF1200

シゲル / LP 8000 手札1枚 デイカエリイ ベストロウリイ
伏せカード2枚

兄のターン

「私のターン！！私はフィールドのカイザー・シーホースを生贄に
雷魔神 サンガを召喚！！そして生け贄人形をサンガに対して発動
！！サンガを生贄に風魔神 ヒューガを特殊召喚！！」

風魔神 ヒューガ

効果モンスター

星7 / 風属性 / 魔法使い族 / 攻2400 / 守2200

相手ターンの戦闘ダメージ計算時のみ発動する事ができる。

このカードを攻撃するモンスターの攻撃力を0にする。

この効果はこのカードが表側表示でフィールド上に存在する限り1
度しか使えない。

このパターン、そして兄の場の伏せカードは…

「死者蘇生を発動！！墓地に存在するサンガを特殊召喚！！」

再び現れたサンガ そして場にパーツは揃った。

場の3体の魔神が一つになっていく

「場のサンガ、ヒューガ、スーガを生贄にゲート・ガーディアンを

特殊召喚！！」

ゲート・ガーディアン / ATK 3750

場に巨大な番人が現れた

はい、制裁タッグです。シゲルは立ってデュエルするまでの体力が戻ってないので、車椅子に座りながらしています。

ちなみにシンクロを3人が使うのはもう少し先です。

今回のオリカはありません。

第十五話 決まる制裁 戦いの精霊 精霊&獣VS門の番人 後編(前書き)

制裁タッグの後半です。

投稿前のチエックで…一部兄 ユウ 弟 シゲルの順番がユウ 弟

ユウとなっていたので急いで直しました。その所為か少しグダッ
となってる部分があるかもしれませんが。

第十五話 決まる制裁 戦いの精霊 精霊&獣VS門の番人 後編

アースラ・ブリッジ

「クロノ君！！なんで私達はアカデミアに戻れないの！？」

「残念だが彼らは僕達の事を知り過ぎた。これ以上関わるのは危険なんだ」

そう言つてクロノは巨大モニターに映っているデュエルを見ていた。そこでは制裁タッグデュエルが行われており、迷宮兄弟の場にはゲート・ガーディアンがいた。

デュエルリング

場に現れたゲート・ガーディアンを見た観客達は「終わったな」とか「あれを倒すモンスターなんてな…」とか言っているが2人は無視をした。

「バトル！！ゲート・ガーディアンでベストロウリイに攻撃い！！
魔風衝撃波！！」

「クッ…」

『…早くも退場か…！！』

雷を纏った風がベストロウリイに直撃した。ベストロウリイの頑張りもむなしく粉々に砕けてしまった。

「フハハハハハ！！！！ゲート・ガーディアンに勝つなど不可能」
「悪いことは言わん。サレンダーするがいい！！」

兄 / LP 8000 手札 2枚 ゲート・ガーディアン

ユウのターン

「ボクのターン！！魔法カード手札断殺を発動！！全てのプレイヤーは手札を2枚捨て、2枚カードをドロウする！！」
スピリット・ドローを発動！！墓地の八岐大蛇を除外しドロウ！！カードを一枚伏せ、ボクは伏せていた二重魔法を発動！！手札の死皇帝の陵墓を墓地に送り、相手の墓地の魔法カードを使用する！！」
「っ！？生け贄人形で上級モンスターを召喚する気か！？」

305

兄はそう言っていた、がユウの狙いは別にあつた。闇の指名者の様に、場は共通だがプレイヤーは相手として認識するのなら

「残念、シゲルが相手ならシゲルの墓地のカードも相手のカードとなる。二重召喚を発動！！手札から雷帝神、そして火炎車カエンクルマを通常召喚！！」

「なんだと…！！」

カエンクルマ
火炎車

スピリットモンスター

星 4 / 炎属性 / 炎族 / 攻 900 / 守 100

このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバーシしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードがフィールドから離れた場合、カードを一枚ドロウする。
ユウの場に次々とスピリットモンスターが現れてくる。普通は特殊召喚できないスピリットが此処まで召喚されたら流石に驚くだろう。

「そして場のレベル4以上のスピリットモンスター3体除外しエンシエント・スピリット 土宮茂 を特殊召喚する!!」
「な、なんだこのモンスターは!？」

場に現れた大蜘蛛に迷宮兄弟は驚くばかりだった。だがこれ以上驚く事が

「召喚成功時墓地のスピリットモンスターを装備して、そのモンスターの攻撃力が土宮茂の攻撃力と守備力になる!!墓地の火之迦具土を装備!!そして除外されてるスピリットモンスター×300ポイント…計1200ポイントアップする!!」

土宮茂 / ATK?	2800	4000	DEF2900	4100
------------	------	------	---------	------

「ば、ばかな…ゲート・ガーディアンを…越えるだと…!!」
「そして火炎車の効果で一枚ドロウ!!禁止区域で破壊できなくても、戦闘で破壊できる!!バトル!!土宮茂でゲート・ガーディア

ンに攻撃！！土宮業破！！」

「ぐおおおおお！！！！！！」

迷宮兄弟 / LP 8000 7750

わずか1ターンでゲート・ガーディアンを破壊された事を迷宮兄弟は信じられない表情で見ている。しかも場には攻撃力4000を誇る土宮茂がいる。

ユウ / LP 8000 手札1枚 土宮茂(+火之迦具土) 伏せカード スピリット・フィールド

弟のターン

「わ、私のターン……！！神はまだ私達を見捨ててなかった！！魔法カードダーク・エレメントを発動！！自分の墓地にゲート・ガーディアンが存在する時、ライフを半分支払い、手札、デッキから闇の守護者 ダーク・ガーディアンを特殊召喚することができる！！先程の手札惨殺で私の墓地にゲート・ガーディアンは墓地に存在する！！よって効果発動！！」

ダーク・エレメント

通常魔法

自分の墓地に「ゲート・ガーディアン」が存在する場合に発動する事ができる。

ライフを半分支払う事で自分のデッキから「闇の守護神 ダーク・

「ガーディアン」を特殊召喚する。
このカードを発動する場合、このターン他のモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。

闇の守護神 ダーク・ガーディアン
効果モンスター

星11 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 3800 / DEF 3500

このカードは通常召喚できない。

「ダーク・エレメント」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードは戦闘で破壊されない

ダーク・ガーディアン / ATK 3800

迷宮兄弟 / LP 7750 3875

場に人間の上半身に蜘蛛の様な脚をもつモンスターが現れた。先程十代と翔を苦しめた戦闘破壊ができないモンスター さらに禁止区域で効果破壊もできない。

「だけど！攻撃力は土宮茂の方が上だ！！」

「甘い！！手札から装備魔法ガーディアンズ・パワーを発動！！1000の代償を払い、場に存在するゲート・ガーディアンもしくはダーク・ガーディアンの攻撃力を1000ポイントアップし、2回攻撃をすることができる！！」

ガーディアンズ・パワー

装備魔法

1000ポイントライフを払い、
自分フィールド上の「ゲート・ガーディアン」か
「闇の守護神 ダーク・ガーディアン」にのみ装備可能。
装備モンスターの攻撃力を1000ポイントアップし、
1ターンに2回攻撃することができる。
装備モンスターが戦闘でモンスターを破壊した時、
カードを一枚ドロウすることができる。

迷宮兄弟 / LP 3875 2875

ダーク・ガーディアン / ATK 3800 4800

「土宮茂を上回った!？」

「バトル!!ダーク・ガーディアンで土宮茂に攻撃!!ダーク・バ
ースト!!」

「うわああああ!!!!!!」

「ユウ!!」

ユウ / LP 8000 8000

土宮茂がダーク・ガーディアンによって破壊されてしまった。だが、
ユウのライフが減って無かった。

「馬鹿な!?!なぜライフが…」

「攻撃宣言時、スピリット・バリアを発動!!これで戦闘で受ける
ダメージは0!!」

しかし、今のダーク・ガーディアンは2回攻撃することができるだ。

「クツ：カードを一枚ドロし、行けえダーク・ガーディアン！直接k「その前に土宮茂の効果発動！！」なに！？」

「土宮茂は破壊された時、除外されているスピリットを特殊召喚することができる。八岐大蛇を特殊召喚！！さらにリバースカード、スピリットの反逆を発動！！場にスピリット・フィールドが存在する時、破壊されたスピリットモンスターよりもレベルの低いスピリットを特殊召喚することができる！！スピリットモンスター^{カケラ}神楽を特殊召喚する！！」

スピリットの反逆

通常罫

自分場に「魂の聖地 スピリット・フィールド」が存在し、スピリットモンスターが破壊されたとき発動できる

自分デッキから破壊されたスピリットモンスターのレベル以下のスピリットモンスターを一体特殊召喚する

その後破壊されたスピリットモンスターの攻撃力の半分の数値を特殊召喚したモンスターの攻撃力にプラスする

この効果で召喚したモンスターはニターン後の相手エンドフェイズにゲームから除外する

またこの効果で召喚したモンスターは相手プレイヤーにダメージを与えることはできない

ユウの場に頭が8つ存在するドラゴンと、青いポニーテールで白い衣類に身を包んだ女性が現れた。

八岐大蛇 / DEF 3100
神楽 / DEF 450

「だが、ダーク・ガーディアンは止まることは無い！！八岐大蛇へ攻撃！！ダークバー「罨カード発動！！」なに！？」

「グラディアル・ガード剣闘の盾！！相手の攻撃宣言時、攻撃を受けるモンスターを一番守備力の高い剣闘獣に移し替える！！剣闘獣はディカエリイのみ！！」

グラディアル・ガード
剣闘の盾

通常罨

相手の攻撃宣言時、その相手攻撃モンスターは一番守備力の高い守備表示の「剣闘獣」と名のついたモンスターに攻撃をする。

その戦闘でモンスターが戦闘破壊された場合、カードを一枚ドロウする。

「クツ…まあいい…ディカエリイに攻撃！！ダークバースト！！」

「くっ！！」

「シゲル！！」

ディカエリイが破壊されてしまった。だがこれでまだ望みは繋がる。破壊されたことによって場に伏せカードが開いた。

「剣闘の盾が発動しモンスターが破壊された時、カードを一枚ドロウする。そして伏せカード、剣闘獣の結束を発動！！ラクエルを特

殊召喚！！」

剣闘獣の結束

通常罫

自分場の剣闘獣となの付いたモンスターが戦闘で破壊されたとき発動できる

デッキから星4以下の剣闘獣一体を特殊召喚する

またこの効果で召喚したモンスターは剣闘獣の効果で召喚したものと扱う

ラクエル / ATK 2100

弟 / LP 2875 手札3枚 ダーク・ガーディアン ガーディア
ンズ・パワー

シゲルのターン

「俺のターン！！俺はラクエルを守備表示に変更し、剣闘獣ムルミ口を守備表示で召喚、カードを2枚伏せてターン終了！！」

ラクエル / DEF 400

ムルミ口 / DEF 400

『ふむ…膠着状態か……どうするつもりだ？』

「仕方ねえだろ…無理に突破しようとして失敗すれば俺達はこの学園からいなくなるぞ」

セメタリーにいるベストロウリイが静かに聞いてきた。もし、無茶

をしてダメージを喰らったら一気に戦況は不利になる。今は準備をする時間が必要だった。

シゲル / 8000 手札0枚 ラクエル ムルミロ 伏せカード2枚

兄のターン

「私のターン！！フハハハハハ！！！！」

これで貴様等の勝つ可能性は無くなる！！魔法カードダーク・エレメント発動！！」

「なっ！？二枚目だと！！」

迷宮兄弟 / LP2875 1437

ダーク・ガーディアン / ATK3800

「そして永続魔法、共同戦線を発動！！これはタッグデュエル専用の魔法カードだ！！このカードのコントローラーは仲間のモンスターで攻撃を行うことができる！！」

「おいおい……」

「……とことん容赦ないね」

共同戦線

永続魔法

このカードのコントローラーは自分フィールド上に存在する

タッグパートナーのモンスターで攻撃することができる。
この効果はタッグパートナーも使用できる。

「バトル！！私のダーク・ガーディアンで八岐大蛇へ攻撃！！ダーク・バースト！！」

「リバースカードオープン！！スピリットの誘導！！攻撃するモンスターをこつちが決定することができる！！攻撃対象を神楽へ変更する！！」

「構わん！！」

スピリットの誘導

通常罫

自分場に「魂の聖地 スピリット・フィールド」が存在する場合、相手の攻撃宣言時発動可能。

攻撃対象をこのカードのコントローラーが選択する。

ダーク・ガーディアンの攻撃で神楽が破壊されてしまった。だが、その時辺りが赤い光につつみこまれた。

「神楽の効果発動！！戦闘で破壊された時、バトルフェイズを終了する！！」

カグラ
神楽

スピリットモンスター

星3 / 水属性 / 魔法使い族 / 攻 200 / 守 450

このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが戦闘で破壊された時バトルフェイズを終了する。

「ごさかしい真似を戦闘で破壊したため、1枚ドロ。サイクロンを発動してスピリットバリアを破壊する!!ターンの終了!!」

兄/LP1875 手札0枚 ダーク・ガーディアン 共同戦線

ユウのターン

「ボクのターン……ボクはカードを1枚伏せてターン終了……」

ライフが8000あるとはいえ、攻撃力が4000を超え2回攻撃のできるダーク・ガーディアンをどうしても突破できない。その所為かユウにはもう気迫が無くなってきた。

その様子をデュエルリング横で見ていたクロノスはにんまりしていた。

「ぬふふふ……ドロップアウトボーイはもう戦う気力は無いノーネ……これでシニョールシゲルが折れたら……やっと一人ドロップアウトボーイをドロップアウトできるノーネ」

ユウ/LP8000 手札1枚 八岐大蛇 伏せカード スピリッツ

ト・フィールド

弟のターン

「私のターン！！バトル！！ダーク・ガーディアンで八岐大蛇へ攻撃！！」

「攻撃宣言時、ディフェンシブ・タクティクスを発動！！このターンモンスターは戦闘破壊されず、戦闘ダメージも0になる！！そして発動後このカードはデッキの一番下へと戻る！！」

シゲルの発動させたカードから強力なバリアが発生した。それによりダーク・ガーディアンの攻撃が止まった。

「クッ…（まあいい…あの少年の戦う気力はもう残されてしまい…）」

「（ああ…もう一人の青年を攻めたら、カタが付く…）」

どうやら迷宮兄弟はユウではなく、シゲルを狙いにつけたみたいだ。

「私はディフェンス・ウォールを守備表示で召喚！！このモンスターが表側守備表示で存在する場合、相手はこのカード以外のモンスターと戦闘を行えない！！」

ディフェンス・ウォール

効果モンスター／レベル4／地属性／戦士族／攻撃力10000／守備力2100

このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、相手はこのカード以外のモンスターを攻撃対象にすることはできない。

ディフェンス・ウォール / DEF 2100

「そしてカードを一枚伏せ非常食を発動！！今伏せた迷宮変化を破壊し、1000ライフを回復する！！」

そして1000ライフを払い装備魔法、ガーディアンズ・パワーを兄者のダーク・ガーディアンに装備！！」

「おお、ありがたい！！」

「4800のモンスターが：2体：！？」

観客席にいたツバキは信じられないように呟いた。先程の十代と翔の時と比べ、さらに状況は悪い。

弟 / LP 1875 手札3枚 ダーク・ガーディアン ディフェンス・ウォール ガーディアンズ・パワー×2

シゲルのターン

「俺のターン！！俺は剣闘獣ホプロムスを召喚！！そして場のラクエル、ムルミロ、ホプロムスをデッキに戻し、剣闘獣ヘラクレイノスを特殊召喚！！！！」

ヘラクレイノス / ATK 3000

「攻撃表示…だと??」

「血迷ったか…?」

「どうかな…バトル！！ヘラクレイノスでディフェンス・ウォールに攻撃！！バーストブレイカー！！」

「クツ…だが…スピリット・バリアが無い今、戦闘ダメージは起これぞ…！！」

「だからこうする、魔法カード、防御本能！！モンスターを全て守備表示にして、カードを一枚ドロウする！！」

防御本能

通常魔法

フィールド上にレベル7以上の獣族・獣戦士族・恐竜族・ドラゴン族が存在する場合発動することができる。

フィールド上のモンスターを全て守備表示に変更し、お互いのプレイヤーは自分フィールド上の守備表示になったモンスター1体につき

カードを一枚ドロウする。

この効果はメインフェイズ2でのみ発動可能。

ヘラクレイノス / ATK 3000 DEF 2800

ダーク・ガーディアン / 4800 DEF 3500

ダーク・ガーディアン / 4800 DEF 3500

「カードを一枚伏せ、ターン終了…！！」

シゲル / LP 8000 ヘラクレイノス 伏せカード1枚

兄のターン

「だが私のダーク・ガーディアンは2回攻撃が行える！！それで貴様等の場合はから空きとなる！！」

「過信…か。それだった俺達には勝てないぜ」

「戯言を…私のターン！！行くぞ！！ダーク・ガーディアンを攻撃表示に変更してバトル！！ダーク・ガーディアンでヘラクレイノスへ攻撃！！ダーク・バースト」

闇の衝撃波が防御体勢のヘラクレイノスへと向かっていた。

守備表示のヘラクレイノスは消し飛んでしまい、シゲルのはから空きとなった。

「ふっ…貴様の言葉の方が過信していたようだな！これで貴様の場合はから空きだぞ！！ガーディアンズ・パワーの効果で1枚ドロー！！」

「っ…！！」

流星に不味かった。おそらくユウの伏せカードも攻撃反応型ではない。つまり

「ダーク・ガーディアンで直接攻撃！！ダーク・バーストオ！！！！」

4800の直接攻撃をシゲルは受ける。

「うわあああああ！！！！！！！！！！」
「シゲル！！！！！！」

シゲル / LP 8000 3200

シゲルの座っている車椅子ごと吹き飛ばされそうになるが、何とか持ちこたえた。だが、志度との戦いで体力の戻っていないシゲルには堪えた様だ。

ユウは心配そうにシゲルを見た、シゲルはまだあきらめた目では無かった。

「っ…はあ…はあ…何とかなっただろ…？」

「ぐぬう…減らず口を…カードを3枚伏せ、ターン終了だ！！（伏せたカードは攻撃の無力化と魔法の筒…そしてデモンズ・チェーン…たとえばダーク・ガーディアンの攻撃力を越えるモンスターが現れたとしても私達の勝ちに揺るぎは無い！！）」

兄/LP1875 ダーク・ガーディアン

ユウのターン

流石にもうどうする事も出来なくなってきた。伏せカードはサイクロン、手札のカードもスピリットモンスターを除外して特殊召喚する大和神しかいない。そして場には効果の無効化されている八岐大蛇とスピリット・フィールドのみ。

「ボクの…ターン…」

デッキの一番上のカード それを引くのが怖かった。もしもこれで自分の望むカードが来なかったら 自分だけではなくシゲルも退学になってしまうからだ。

た そうなったらユウは自分を信じられなくなる。そうなるのが怖かつ

「頑張つて、ユウ!!!」

突然観客席からの声援が聞こえた。振り返るとツバキが必死に応援していた。人見知りのツバキが誰かの為に応援する。そう、入学試験の時もツバキがチャンスをくれた。

そのツバキの為に

「ユウ、見せてやろうぜ。俺の…俺達のジョーカー切り札を」

最後まで信じて、自分を守ってくれたシゲルの為に

「シゲル…うん…!!ドロー!!!スピリットドローを発動!
!墓地の土宮茂を除外しカードを2枚ドロー!!さらにスピリット・
フィールドの効果!!墓地に存在する火之迦具土をゲームから除外
して神楽を特殊召喚!!!」

『復活!!!』

「…え?神楽…精霊…なの?」

戻ってきた神楽が喋った。ユウの問いに神楽は「えへへ」と頭を掻きながら振り返った。間違いなく精霊だ。

『マスター、その話は後でね』

「…そうだね…更に伏せカードサイクロンでガーディアンズ・パワーを破壊する！！」

場に存在するレベル7以上のスピリットモンスター八岐大蛇をゲームから除外してエンシエント・スピリット 夜刀神 を特殊召喚する！！夜刀神の攻撃力と守備力は召喚に使用したモンスターと同じになり、除外されているモンスターの数×400ポイントアップ！！」

ダーク・ガーディアン / ATK	4800	3800
夜刀神 / ATK	2800	5600
DEF /	?	3100
0	5900	

「だが罨カードオープン！！デモンズ・チェーン！！これで夜刀神の攻撃と表示形式の変更を無効にし、効果を無効にする！！残念だったな、サイクロンでデモンズ・チェーンを破壊すればまだ何とかなったかもしれない！！」

場のデモンズ・チェーンのカードから鎖が飛び出してきて夜刀神を拘束した。

デモンズ・チェーン

永続罨

フィールド上に表側表示で存在する

効果モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは攻撃する事ができず、効果は無効化される。

選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

夜刀神 / ATK 5600 0 DEF 5900 0

「これで貴様の場のモンスターは」

「身動きとれまい！！我らの」

「連携に」

「死角は」

「「無い！！」」

モンスター　ンジンの様な喋りだが、確かに絶体絶命のピンチだろ
う

ユウの手札は1枚（大和神）、そして伏せカードも0、場には夜刀
神と神楽のみ…だが

「トランプカード、眠る魂の咆哮を発動!!!」

シゲルが勝利へのパズルを生みだした。眠る魂の咆哮　それは防衛本能で手札に加わったカード。先程のターン、直接攻撃のときでも発動できた。

だがしなかったのは

「剣闘獣ディカエリイ、剣闘獣ベストロウリイよ!その魂、我らの勝利への力となりフィールドに降臨せよ!!!剣闘獣ガイザレス、特殊召喚!!!」

ガイザレス/ATK2400

ユウへ繋げるため　勝利への為だ。

「ガイザレスの効果発動!!!召喚成功時フィールド上のカードを2枚まで破壊する!!!その伏せカードを破壊する!!!」

「何だと!?(クツ!!!攻撃の無力化と魔法の筒が...)」

もう最後の切り札を出す為のピースは整った。もし、先程のターンガイザレスを召喚して、破壊されていたのなら

「フィールドに存在する闇刀神、ガイザレス、神楽の3体をゲームから除外!!!」

ジョーカー
切り札が召喚できなかった。

「大いなる獣の魂よ、古より伝わる精霊と共に、新たな力を此処に授けたまえ！！」

ガイザレス、闇刀神、神楽は光の粒子となって消えた。そしてその粒子が合わさり

「戦いの精霊を特殊召喚！！」
ヴァルキリー

場に赤い鎧と長い剣を携え、そして背には血の様に赤黒い翼を羽ばたかせる戦いの天使が現れた。そのモンスターの姿に観客も、迷宮兄弟も、シゲルも見とれていた。

ヴァルキリー / ATK 0 DEF 0

「ヴァルキリーの攻撃力はゲームから除外されているスピリットモンスターと剣闘獣の数×400ポイントアップする！！除外されているのは12体！！よって4800ポイントアップする！！」

ヴァルキリーが持っていた赤い長剣を天に掲げると、次元の裂け目から除外されているモンスター魂が剣に宿った。

ヴァルキリー / ATK 0 4800 DEF 0 4800

「ここ、攻撃力4800!?!」

「そしてこれが最後だ…ユウ!」

「うん!ヴァルキリーの効果発動!!1ターンに1度、手札のカードを一枚除外し、除外されているモンスターをデッキに戻す。そしてそのモンスターの効果と名前を得る!!剣闘獣ディカエリイを選択!」

そう宣言した時、ヴァルキリーの目の前にもう一本赤い長剣が現れた。そしてヴァルキリーはその剣を持つ　一瞬ヴァルキリーの後ろにディカエリイが見えた気がする。

ヴァルキリー / ATK 4800　5200　4800

「ディカエリイの効果は「剣闘獣」の効果で特殊召喚された時、2回攻撃ができる」

「そして、ヴァルキリーは場にいる時全てのスピリットと剣闘獣は、手札に戻らず剣闘獣の効果で特殊召喚された状態となる!」

「…!!ま、まさか!」

「ヴァルキリーも2回攻撃が…!!」

ヴァルキリー 戦いの精霊

融合・効果モンスター

星12 / 風属性 / 天使族 / ATK 0 / DEF 0

「エンシエント・スピリット」と名のついたモンスター＋「剣闘獣」と名のついた融合モンスター＋スピリットモンスターもしくは「剣闘獣」と名のついたモンスター

このカードは上記のモンスターをフィールド上からゲームから除外した場合のみ融合デッキから特殊召喚することができる（「融合」魔法カードは必要としない）。

このモンスターの攻撃力と守備力はゲームから除外されているスピリットモンスターと「剣闘獣」と名のついたモンスター1体につき400ポイントアップする。

1ターンに1度手札のカードをゲームから除外して発動することができる。ターン終了時までゲームから除外されている「エンシエント・スピリット」以外のスピリットモンスターか「剣闘獣」と名のついたモンスターを1体デッキに戻しそのカードと同名カードとして扱い、効果を得る。

このモンスターが表側表示で存在する時、「剣闘獣」と名のついたモンスターは「剣闘獣」と名のついたモンスターで特殊召喚された状態になり、スピリットモンスターは手札に戻らなくてもよい。

「バトル！！ヴァルキリーでダーク・ガーディアンに攻撃！！戦乱の審判！！」

「クツ…ダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されない…！！」

迷宮兄弟 / LP 1473 473

残りライフは既に500を切っていた。そして残り1回の攻撃ができるヴァルキリーの攻撃で 1000

「行くぞ、ユウ!!」

「うん!!ヴァルキリーでダーク・ガーディアンに攻撃!!」

「馬鹿な…」

「我らが二度も負けるなんて…」

「「追撃の審判!!!」」

「「うわああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」」

迷宮兄弟 / LP 473 0

レッド寮ユウとシゲルの部屋

今部屋にユウ、ツバキそして

『初めまして〜』

スピリットモンスターの神楽がいた。先程のデュエルの最中に神楽がスピリットだったことを知ったので挨拶的な感じで神楽を呼んだのだ。

「2人目の聖霊…驚いた…」

『私は神楽ってどういうの!あなたたちは?』

「あ、私は姫野椿。ツバキだよ」
『よろしく〜!! そうですねマスター、さっきマスターと一緒に戦つてた人は?』

神楽はそう言いながらシゲルを探した。確かにさっきまでユウと共に迷宮兄弟と戦っていた。だがシゲルは今、校長室にいた。

校長室

校長室にシゲル、鮫島校長、クロノスがいた。なぜここにいるのかというかと志度との戦いの事を説明するためだ。

だがクロノスは信じられないようだ。

『時空管理局』 『シンクロモンスター』 『魔法使い』 『現実に伝わる痛み』 『ロストロギア』 全ての話が物語だの妄想だの言われてもおかしくなかった。

「そうですか…世界は私達の知らないことが多いようですね」
「鮫島校長!! 彼の話信じるんでス〜カ!? 第一! 彼が持て来たシンクロモンスターも本物かどうかも分らないんでス〜ヨ!!」

まさか鮫島校長がこの話を信じるとは思っていなかったのかシゲルもクロノスも驚いていた。すると鮫島校長は笑いながらシゲルが持ってきたードを見た。

「このカードはつい先日E2のペガサス会長から存在を聞いていました…それに教師が信じないのなら、誰が生徒の話进行信じるんですか？」

私は彼が…いや、ユウ君、ツバキ君、十代君、翔君…彼らは真実しか話さないと信じています」

「校長先生…ありがとうございます…！」

レッド寮ユウとシゲルの部屋

「おい！！ユウ…！」

挨拶が済んだところで十代達が来た。ユウが「話がある」と言っ
て呼んでいたのだ。

普段は2人部屋の空間に6人の人間　ユウ、ツバキ、十代、翔、
隼人、明日香がいるため、少々窮屈に感じていた。

「それでユウ。俺達を呼んだのはなんだ？」

「1週間前の…シゲルが大げがをした理由」

「あ、そうっすよ！！なのはちゃん達が言っていた『時空管理局』
ってなんすか！？」

翔はあの時なのはの言った言葉、隼人は志度が言っていた言葉、明
日香は志度が狙っていたカードの事を聞いてきた。それにユウとツ
バキが懇切丁寧に説明をした。

「お、驚いたんだな…」

「世界は広いのね…」

「じゃああのシンクロやチューナーってなんなんすか？」

「そこまでは知らないけど…これ」

そう言つてユウはペガサスから届いたカードを見せた。スピリットのシンクロ、剣闘獣のシンクロ、魔法使いのシンクロの3つのシリーズのモンスターがあつた。

「このスピリットはボクが、魔法使いはツバキが、剣闘獣はシゲルが使う事になった。其々の召喚条件を見る限り…ボク達にしか使えない。志度にシンクロを渡した奴がどんなのか知らないけど…」
「多分…志度の様な人がまた出てくると思う…」

ツバキの言葉がその時部屋にいたメンバーに重く響いた

第十五話 決まる制裁 戦いの精霊 精霊&獣VS門の番人 後編(後書き)

タッグといえばユーフォロイドファイターやブラックデーモンズ、究極龍騎士の様なタッグならではのモンスターだと思いのヴァルキリー…強すぎだ。

オリジナルカード

火炎車

ガーディアンズ・パワー

剣闘の盾

共同戦線

スピリットの誘導

神楽

防衛本能

ヴァルキリー
戦いの精霊

投稿カード(2枚ともユタさんより)

スピリットの反逆

剣闘獣の結束

第十六話 Overkill? そもそもこれは決闘じゃない(前書き)

………今回はとにかくキャラが崩壊してます。

とくに…見てたらわかります。

あ、前は制裁でしたが今回からもつすでに万丈目が学園を去ってしばらくしてるので。

第十六話 Overkill? そもそもこれは決闘じゃない

制裁タッグから5日後　その間に万丈目と三沢が勝負し、万丈目が人知れず学園から去った。

ユウ、シゲル、ツバキ、十代、翔、明日香、隼人は学園の中を探したが見つからず、半ばあきらめていた。

そして本日はなぜか体育の授業があつた。愚痴を言いながらも生徒達はテニスをしていた。

「えい！」

「はあ！！」

「きゃ！」

……なぜ明日香とツバキが打ち合っている。体格的に見ておかしい。

ちなみに体育の教官は

「次！！」

「は、はい！！」

……なぜピンク髪のポニーテールの先生が素人に対して

思いつきりスマツシユをしている？

「すごいな……」

「そうだね…所であの先生は誰？」

ダブルスでタッグを組んでいた三沢とユウが一息つきながらその先生を見ていた。ちなみに基本的に男子のタッグはルームメイトだがシゲルは8日間ほどずっと車椅子に乗っていたため体力が落ちていたからリハビリで体育の教官と簡単な筋力トレーニングをしている。

「保険医のシヤマル先生と同時期にこの学園に来た…確か…シゲナム先生だったか…？」

元々は剣道の道場の師範だったが臨時で呼ばれたらしい」

「へえ…詳しいですね…もしかして…」

「なっ！ば、馬鹿を言うな…！！」

「そこ！！無駄口をたたく前に体を動かせ！！」

「は、はい！！」

そしてその後、翔とダブルスを組んでいた十代の打ち返したボールが隣のコートの日香に向かっていった。

だがそれを防いだ奴 言わずと知れた松岡 三ばりに熱い男

綾小路 ミツルだ。

そしてその防いだボールがクロノスの顔面に当たり、そこから十代が怒られてテニス部への一日体験入部となってしまった。

ちなみになぜかその手伝いをユウがすることになった。

普通に考えて翔じゃねえ？と思うのだが理由は不明だ。

「てやー!!」

「はっ!!」

「甘い!!」

「うわっ!!」

十代と綾小路が打ち合っているのだが素人VSテニス部なので、どちらが強いのかすぐにわかる。ちなみにユウは転がっているボールを拾って籠に入れている。

「立て!!これしきの事で倒れてどうする!!本当の試合はもっときついんだ!!今頑張らなくていつ頑張るんだ!!」

「…って言われてもな…俺はテニス部じゃないんだ!!」

と十代は愚痴っていると綾小路は籠の中のボールをちらりと見た。目算でボールの数を数えると一つ手に取った。

「これで最後だ!!あと50球!!」

「50!?!」

「どうだ!元気が出てきただろう!!その元気は明日へのエネルギー

「となるー!!」

30分後

「お、終わった……」

「お疲れ様」

クタクタになった十代にユウがスポーツドリンクを渡していると離れた位置に明日香、ツバキ、翔、ジュンコ、ももえが立っていた。すると明日香が綾小路の元へ

「あ、明日香君!! いや、僕に会いに来て……」

「十代、話があるんだけど」

綾小路をスルーして十代の元へ行った。ユウは十代からドリンクを受け取ると、周りに落ちていたボールを拾い始めた。すると突然

「離れたまえ明日香くん!! あまりこういう事は言いたくないが。

明日香くん、オベリスクブルーの妖精のような君にオシリスレッドの彼は似合わない! 明日香くん、君にはこのボクのような男が相応しい!! さあ、悪いことは言わない。早くその二人の傍から離れたまえ!!」

「……………(どうしたんだろう?)」

そしてなぜか明日香を賭けて十代と綾小路が勝負することになった。

ユウは一通りボールを拾うとコートサイドにいたツバキの横に行っ
た。

「なんでこうなるのかな？」

「うん…分かることは、あの人もすごく勘違いしてるってこと
だね」

ツバキの言葉に他の5人が頷いた。

そしてデュエルすることになるのだが 「勝った方が明日香のフ
イアンセ」ということになった。それにユウとツバキが首を傾げて
ももえの方を向いた。

「ももえさん、フィアンセって何ですか？」

「あら？」

「あんた達そんな事も知らないの…」

ももえはなんて言ったらいいのかわからず、ジュンコは呆れていた。
ちなみに翔は十代の応援で質問を聞いていなかった。

20分後

「フェザーマンの攻撃!! フェザーショット3連発!!」

「うわああああ!!!!!!」

やはりというべきか、強すぎる引きで十代が勝った。

「なにしてんだ？これ」

「あ、シゲル君」

「なんか知らないけど…明日香さんのフィアンセを賭けて勝負しろって」

「あの人…所でフィアンセってなんなの？」

十代が止めを来ると同時にシゲルが普通に歩いてきた。シゲルの問いに翔とツバキが答えた。すると次はユウが聞いてきた。それにシゲルはため息をつきながら頭を抱えた。

「ユウ、次はフランス語の勉強でもするか？ボンジュール並に有名な言葉だぞ」

「ボンジュール？」

「……それはこんにちは、とかの挨拶だ。フィアンセは…」

シゲルの言葉に今度はツバキが首を傾げた。と、負けて悔しいのか綾小路が見ていた泣きながら走ってきた

「ぼ、僕が負けるなんて…うわあああああ！…！！！」

「きゃー！！！」

そして前を見ていなかったのかツバキと激突してしまい、ツバキは尻もちをついてしまった。それに気づいた綾小路は先程の絶叫はどこへやら

「おや、すいません可憐なお嬢さん。僕とした事が君の様な綺麗な人を見失っていたようです」

「あ、あの…え…その…」

人見知りのツバキからすればいきなりこんなことを言われたら怯えてしまう。だがそれを知ってか知らずか　いや、知らない綾小路はツバキに詰め寄った。

「これから僕と一緒にお茶でもしませんか？」

「あ…の…え…」

「どうし、あ、そうか。僕の美しさに見とれているんだ」

完全に勘違いしてる。するとツバキが震えていた。それを見たジュンコが綾小路につかかってきた。

「ちょっと！！ツバキ怖がってるじゃないの！！」

「ツバキ…なるほど、ツバキと言うのか。美しい名前だね」

ジュンコの言葉をスルーした綾小路は怯えているツバキに更に詰め寄ってきた。
それを見た

「おい」

ユウの雰囲気

「ツバキから離れる変態」

処刑モード（命名：シゲル）へと

「なっ！？僕が変態だと！！君は一体何を言っている！！」

「嫌がるツバキに無理やり迫ってる下衆ゲスだろ？サッサと離れる」

「……いやいやいや、お前はそんな言葉使いではないだ
ろ！！」「」「」「」

明らかに万丈目の時とは違つぐらいキレているユウは完全に別人だ
った。

ルームメイトであるシゲルから見たら完全にユウではない、ユウの

姿をした誰かだった。

「あ、明日香さん。これは一体…？」

「ユウがキレると…別人になるんだけど…」

明日香がももえとジュンコに簡単に説明をしていた。一方なぜかつバキは安心していた。

理由？

好きな人に守られているから。

「ぐぬぬぬ…だったら僕と勝負しろ！！勝った方がツバキ君のフィアンセだ！！」

「いいだろう。だがあんたには…『地獄』を見せてやる」

「…なあ、翔…ユウから…黒い何か…見えるけど俺がおかしいのか…？」

「兄貴…僕も見えるツス…」

6人（ツバキ以外）はユウの周囲に黒い瘴気が漂っているのが見えた。

ツバキ？なぜかユウがツバキにその瘴気を行かない様にして放出しているからだ。

「『デュエル！！』」

ユウVS綾小路

「僕の「俺のターン！！」なっ…」

ユウが綾小路のターン開始宣言に被せてカードを引いた。更にいま明らかに「俺」と言った

「なあ、シゲル…」

「どうした？」

「あの綾小路って人……」

「終わったわね」

「……ああ」

以前のデュエル（VS万丈目）の勝負を知っている4人はそう言っていた。

「あの……」

「終わったって……？」

事情を知らない2人は何のことかさっぱりだった。それにシゲルは見ていたら分かると言った。

「永続魔法魂吸収を発動！！カードが除外されるたびにライフを500回復する！！カードを3枚伏せてウォーム・ワームを守備表示で召喚！！ターン終了！！」

ウォーム・ワーム / DEF 1400

ユウ / LP 4000 手札1枚 ウォーム・ワーム 魂吸収 伏せ
カード3枚

魂吸収、それは明らかに万丈目を圧倒した『異次元デッキ』のキークードだ。

「は、はは…粋がってた割には慎重だな…僕のターン…！僕は魔法カードサービスエースを発動…！手札のカードを一枚選び、相手はそのカードの種類を宣言する…！当たった場合はそのカードを墓地へ、外れた場合は除外し1500ポイントダメージを与える…！」

サービスエース

通常魔法

自分の手札からこのカード以外のカードを1枚選択し、相手にそのカードの種類を当てさせる。
当たった場合はそのカードを破壊する。
ハズレの場合はそのカードをゲームから除外し、相手に1500ポイントのダメージを与える。

「このカードは「モンスター」…メカ・サンダーボール…当たりだ…墓地へ」

「サービスエースにチェーンして永続罫、マクロコスモスを発動…！墓地へ送られるカードは全て除外される…！そしてサービスエースとメカ・サンダーボールは除外される…！さらに魂吸収の効果でライフを1000回復する…！」

ユウ/ＬＰ 4000 5000

「クッ…手札から猛攻のビックサーバーを召喚…！猛攻のビックサーバーは1ターンに2回攻撃することができる…！」

猛攻のビックサーバー

効果モンスター

星3 / 炎属性 / 戦士族 / ATK1500 / DEF800

このモンスターは1ターンに2回攻撃することができる。

猛攻のビックサーバー / ATK1500

「バトル!!! 猛攻のビックサーバーでウォーム・ワームへ攻撃!!! 灼熱サーブ!!!」

猛攻のビックサーバーが打ち出した炎のサーブでウォーム・ワームは燃え尽きた。だがそれがユウの狙いだ。

「ウォーム・ワームの効果!!! 破壊されたウォーム・ワームは相手のデッキから3枚のカードを墓地へ捨てさせる、さらにマクロコスモスの効果で除外、魂吸収の効果でライフを回復!!!」

ウォーム・ワーム

効果モンスター

星3 / 炎属性 / 昆虫族 / 攻 600 / 守1400

このカードが破壊された場合、

相手のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

ユウ / LP5000 7000

攻撃を受けたはずなのに更にライフが多くなっていた。普通ではあ

りえない事をするデッキ　それがユウの『異次元デッキ』の真骨頂だ。

「クツ…だが、2回目の攻撃が残ってるぞ…！灼熱レシーブ…！」
「罨カード、ガード・ブロック！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドローする…！」

ガード・ブロック

通常罨

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ユウ / LP 7000　7500

「僕はカードを伏せてターン終了…！」

綾小路 / LP 4000　手札2枚　猛攻のビックサーバー　伏せカード

「俺のターン…！闇の誘惑を発動…！カードを2枚ドローし、闇属性モンスター冥府の使者　ゴーズをゲームから除外…！魂吸収の効果でライフ回復…！」

ユウ / LP 7500 8500

「さらに魔法カード手札抹殺を発動!! お互いの手札をすべて捨て、捨てた数だけドロウする!! 捨てられるカードは除外され、更にライフを回復!!」

「クツ…」

ユウ / LP 8500 11500

「ゴブリンのやりくり上手を発動!! 一枚ドロウし、その後手札のカード一枚をデッキの一番下へ送る!!」

カオス・エンドを発動!! 自分のゲームから除外されているカードが7枚以上ある時、フィールド上のモンスター全てを破壊する!!」

「なんだと!?!」

ゴブリンのやりくり上手

通常罫

自分の墓地に存在する「ゴブリンのやりくり上手」の枚数+1枚を自分のデッキからドロウし、自分の手札を1枚選択してデッキの一番下に戻す。

カオス・エンド

通常魔法

自分のカードが7枚以上ゲームから除外されている場合に発動する事ができる。

フィールド上に存在する全てのモンスターカードを破壊する。

空に開いた時空の裂け目に猛攻のビクサーバーは吸い込まれてい

った。

ユウ/ＬＰ 11500 13000

「カードを3枚伏せてターン終了!!」

ユウ/ＬＰ 13000 手札0枚 魂吸収 マクロコスモス 伏せ
カード3枚

「ぼ、僕のターン!!僕は最強のビックサーバーを召喚!!更に装備カード、伝説のラケットを装備!!このカードはビックサーバーのみ装備可能!!モンスターを破壊した時、墓地のエースと名のついたカードを手札に加える...が、墓地にカードは無い」
「意味無いんじゃない」

伝説のラケットの効果を見た翔はそう呟いたが、綾小路の狙いは別にあつた。

「最強のビックサーバーの効果発動!!伝説のラケットが装備されている時、手札のスマッシュエースを捨てることで攻撃力を2400ポイントアップさせる!!」

伝説のラケット

装備魔法

フィールド上の「ビックサーバー」と名のついたモンスターを装備
することができる。
装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、
墓地の「サービス」と名のつく通常魔法を1枚手札に加えることが
できる。

最強のビックサーバー

効果モンスター

星3 / 光属性 / 戦士族 / ATK 0 / DEF 0

このモンスターは戦闘では破壊されない。

このカードに「伝説のラケット」が装備されているとき、
手札の「スマッシュエース」を捨てることでこのカードの攻撃力を
次の自分のスタンバイフェイズまで攻撃力を2400にする。

最強のビックサーバー / ATK 2400

ユウ / LP 13500

「バトル！！最強のビックサーバーで直接攻撃！！スマッシュアタ
ック！！」

最強のビックサーバーの打ったボールが真っ直ぐユウに向かってい
た。

だがその前にユウの伏せていたカードがオープンした。

「罠カードパワー・ウォール！！ダメージ計算時、デッキの上から
墓地にカードを任意の枚数墓地へ送りダメージを1枚につき100
減らす！！24枚のカードを墓地へ！！」

パワー・ウォール

通常罠

ダメージ計算時に発動する事ができる。

自分のデッキの上から任意の枚数分墓地へ送る事で、

自分が受けるダメージを墓地に送ったカードの枚数×100ポイント
ト少なくする。

「これ以上ライフを回復されてたまるか！！伏せカードサイクロン
！！魂吸収を破壊する！！」

コートに吹いた突風で魂吸収は破壊された、が、シゲルと明日香は
綾小路のプレイングミスに気付いていた。

「あの綾小路つてやつ…本当にブルーなのか…」

「どうかしらね…あんなプレイングミスをするなんて…」

「……え？」「」「」

どこがプレイングミスなのか分からない5人は同時に呆けた声を上
げてしまった。

するとシゲルはユウの場のあるカードを指さした。それは永続罠

「なんでマクロコスモスを破壊しなかったんだ？」

「「「「あつ！」「」「」」

そう、マクロコスモスを破壊すれば回復することも、除外する事も出来なくなるのに、なぜそうしなかったのか

「これで君のデッキは残り1枚！！他のカードは除外され、更に僕の場合に2400の最強のビックサーバーがいる！！」

確かにユウの墓地は0になり、死者蘇生等の墓地蘇生も不可能になるがユウのデッキは『異次元』デッキだ。第一『異次元デッキ』は除外されてるカードが増えれば増えるほど強く

「これでツバキ君は僕のモノだ！！」

綾小路の言葉　それがユウを完全に切れさせる言葉だった

「おい下衆」

「下衆つて…僕は綾小路だ！！いい加減人の名前を「じゃあお前は人の気持ちを知れ」えっ！？」

「ツバキが自分のモノ…？ツバキの気持ちも知らずによくそんなこと言えるな…ツバキ気持ちはお前のモノか？俺のモノか？違う…」

ツバキの気持ちはツバキのモノだ！！！！人の気持ちを知らないお前を俺は許さない！！

俺のターン！！！！

綾小路 / LP4000 手札0枚 最強のビックサーバー 伝説のラケット

そう言ってユウは、最後のカードを引いた。ふと、その時翔があることを思い出した。

「そういえば…ユウ君のデッキの一番下のカードって…ゴブリンのやりくり上手で戻したカードっすよね…？」

「あ、そういえば…じゃあ、あのカード…」

「あいつの…勝利への鍵だ」

ゴブリンのやりくり上手で一番下に戻したカード。ユウが何も考えずにデッキの一番下に戻す訳は無い。そして、除外された36枚のカード

「紅蓮魔獣 ダ・イーザを攻撃表示で召喚！！！！」

ダ・イーザ / ATK ?

「攻撃力が決まって無い!？」

綾小路がダ・イーザの攻撃力に驚いているとシゲルがツバキの目を塞いだ。

突然の事に驚いているがシゲルは大きなため息をついた。

「シゲル!？」

「こっから先…見ない方がいいぞ」

シゲルは静かにそう言った。前にシゲルは制裁タッグデュエル用のデッキ制作時に一度『異次元デッキ』を見たことがある。そして、ダ・イーザの効果は

「除外されているカード一枚につき攻撃力と守備力を400ポイントアップする!！」

「……え?除外されているカード……36枚……?」

簡単に説明をすると除外されているカード数36×400=14400(攻撃力)となる。
つまり…

ダ・イーザ / ATK? 14400

「攻撃力14400うううう!!!???」

「消える…ダ・イーザで最強のビクサーバーに攻撃!!紅蓮滅殺炎!!!」

ダ・イーザの吐いた強力な炎に包まれた最強のビクサーバーは苦しそうに悲鳴を上げた。戦闘破壊はできなくても、戦闘ダメージは通る。先日のタッグでもそうだった。

「うわああああああああああああ!!!!!!」

ダ・イーザの炎に包まれた綾小路は拷問にあったあのように叫んでいる。

綾小路 / LP4000 - 8000

え?なんでいつもなら表示しない-を出してるのかって?それは

「伏せカードD・D・ダイナマイトを発動!!除外されている相手カード一枚につき300ポイントダメージを与える。計10枚…3000ポイントのダメージ!!」

「なあ!?僕のライフはもうつわああああああああああああああああああ!!!」

綾小路 / LP - 8000 11000

オーバーキルをする

ツバキは素直にそうお礼を言った。すると良い笑顔のユウが戻ってきた。どうやら通常モードに戻ったらしくニコニコしてる。

「ただいま」

「お、おかえりっす」

「おう」

すると思い出したようにユウがシゲルに聞いてきた。

「そういえば…フィアンセってなんなの？」

「フィアンセの意味は……婚約者、許嫁…」

「……え？」

シゲルの言葉にユウとツバキは聞き返した。明らかにちょっとした爆弾発言だろう。

「まあ、簡単に言っと『好きな人』みたいなことだ」

「」

シゲルの言葉にユウとツバキは互いに互いの顔を見て

「」
「ボン！！（ふにゅ）…」

頭の上が爆発した。

その後他の6人は頭から湯気を出してる2人を急いで保健室へ連れて行った。

少し熱があるが心配無いとのことだった。その後は十代がユウを背負い、明日香がツバキを背負って其々の寮へと戻った。(なぜシゲルが背負って無いのかというと、いまだに右足を引きずっていたので背負うことができないからだ。)

ちなみにその後、コートの見回りに来たシグナムが黒焦げで気を失っていた綾小路を見つけた。

第十六話 OverKill? そもそもこれは決闘じゃない(後書き)

というわけで…14000のオーバーキル…とにかくパワーウォールをサイバーダーク風に使っネタがあり…

かといってスピリットも剣闘獣も魔法使いも墓地を溜めてメリットは…

墓地 除外なら…と考えたのが異次元のダ・イーザ…やりすぎた

オリジナルカード

猛攻のビックサーバー

伝説のラケット

伝説のビックサーバー

今回は…オリジナルストーリーです。正確には今回の話の続編です。あ、次回等々オリジナルシンクロが出ます。

第十七話 本当の気持ち 最強の執事さん？ VS 墓地獣（前書き）

はい、広島から投稿してまゝす（いつもなら奈良県で）
久々の田舎も結構いいものです。

今回は前回のフィアンセデュエルの続編です。

そしてユウがさらに少し壊れます。

そして今回からオリジナルシンクロモンスターが出ます。

第十七話 本当の気持ち 最強の執事さん？ VS 墓地獣

綾小路のフィアンセデュエルから2日後

レッド寮ユウ・シゲルの部屋

「……………」

「……………」

「……………はあ……………」

終始無言のユウとツバキ。そしてその空気の中で本を読んでいたシゲルはため息をついた。あの日から2人の反応がこんな感じなのだ。実を言うと2人共心の奥底では互いが互いを好きになっていた。だが、そのことを表に出してくることは無かったが

前日

「あ、ユウ」

「おはよ、ツバキ」

朝に教室で2人が会った時 それは普通の光景のはずだった。だが

「…ユウって…好きな人…いるの…？」
「……………え？」

突然のツバキの質問。だがユウの頭の中は先日のシゲルの言葉は響いていた。

『フィアンセは…恋人、許嫁……………まあ、好きな人みたいなことだ』
好きな人　いや、何かに好意を抱く事は今まで無かった。けど、
イナがあの日　試験から帰っている時に気になることを言っていた。
た。

『そういえば…今日ユウなんか普段と違った気がする』
「え？ボクはいつも通りだよ」
『いや～そうじゃなくて、ツバキを助ける時何か違う気が…気のせいかな』

それはどういうことだ？普段と違う　確かに初めてツバキを見た時、なんか心臓がバクバク言ってたような……………もしかして…

それが…

『

恋』？

「っ…！いや、いや、そんなのよく分からない！あ、ツバキは…？」
「……………」

ツバキの頭の中でもある言葉が響いていた。

『勝った方がツバキ君のフィアンセだ!!』
『フィアンセは…恋人…そんな感じだ』

シゲルがそう説明した時、そしてユウが綾小路に勝った時嬉しかった。確かに自分の為に此処までしてくれるのはうれしかった。だがそれとは何かが違う

そう、ユウが笑顔で話しかけて来てくれる度に体が熱くなるような気がした。

そのことを前にダークに言ったら

『ふむ…それは『恋』と言うとモノではないか?』

「こ、恋? そんな私ユウのこと……」

『嫌いではないんだろう? だった恐らくそれは恋だろう』

ダークがそう言った。だが、今までで自分の事を好きになった人や、逆に誰かを好きになった事は無かった。それだけではなく人見知りの所為か、周りには仲間や友達…その様な味方が誰もいなかった。

だが試験会場で初めて人に守^{ユウ}ってくれた アカデミアに入れたからシゲルと仲良くなれた。アカデミアに入って自分と一緒にいられる十代、翔、明日香、隼人

それれからなぜか少しユウの事が気になっていた。

そう考えると

「……………(シユ〜)……………」

「ツ、ツバキ！頭から湯気が出てるよ！！」

てなことがあった。改めて考えるとお互いが相手の事が好きなのに気付いた。それから互いが互いの顔を見るのはなぜか恥ずかしくなっていた。

そしてシゲルは薄々そのことを察していた。が、そのことにアドバイスなんて今までで一度もしたことが無かったから見守ることにしていた。が、

「……………（気まずい）」

無言の空気はこの上なく体に響く。その雰囲気には耐えられないのかイナやウリイと言った精霊達もカードの中に

『どづしたの？』

約一名例外がいた。この空気でも出てこれたあんたはヒーローだ。

「神楽どうかした？」

『うっん。なんかマスターもツバキもいつもとなんか違うかな？』

「……………」

『私はいつもの2人が好きかな？って思うんだけどね』

神楽がそう言った。そしてユウとツバキは互に見つめ合っ

「……………／／／」

互いに目をそらした。神楽よ、どうやらお前の望み通りいくのは無理みたいだな。

と、その時何処からかヘリの音が聞こえてきた

「なんだ…？結構近いな」

そう言いながらシゲルは扉を開いて外を見ると超大型ヘリがレッド寮の前に着陸していた。何事かと思ひ十代達や大徳寺先生も部屋から出てきた。

「なんだあのヘリ」

「あれって…AW社のマークだよね」

AW社と言うのは世界の軍事市場で知らぬ者はいないと言われる程のアメリカの巨大軍事会社だ。武器の販売、傭兵の派遣、軍事介入なども多々あり黒い噂が絶えないのだ。

ちなみになぜユウも知っているのかというのと、その総帥がデュエルモンスターズの大ファンで有名な大会で何回か優勝しているからだ。

と、そこに金髪のチャラチャラした感じの少年が現れた。

「フン…此処かがあいつがいるのか」

「はい、剣賭様。この島の中にお嬢様がいらっしやいます」

金髪の少年 剣賭とその横にいたお爺さん どうやら執事の様だが、誰か探しに来たらしい。と、その執事がユウ達の方を見て少し驚いた顔をしていた。

「剣賭様、いましたぞ」

「なに！？どこだ！？」

剣賭が執事に聞くと執事は優雅に手で何処か示した。その方向はユウと翔、そしてツバキだ。そして先程執事は「お嬢様」と言っていた。今現在レッド寮にいる女子は

「っ…!!」

ツバキしかいない。そしてツバキを見つけた剣賭は嫌な笑みを浮かべた。

「そんなところにいたのか、迎えに来たぞ!!」

「ツバキ、知り合　　ツバキ!？」

大声で剣賭が言ったからシゲルが聞いてみた。が、ツバキは振るえていた。

何かに脅えている様に、ユウの服を掴んでガタガタ震えていた。

「ツバキ、大丈夫か!？」

「貴様…俺の婚約者に何をする!！」

「「……………はあ?」」

珍しく十代とシゲルの声が被ってしまった。なんだか知らないが二日前に同じような光景があった気がする。そして

「おい下衆…ふざけるな」

「っ!？」

ユウがキレて処刑モードになるのもつい最近見た気がする。そして剣賭はユウの気迫に少しビビっていた。

「まあ…ユウがああなっているうちに聞くが…ツバキ、あいつとは知り合いか？」

「…………『自分の婚約者になれ』って…」

「…だろうつと思った」

シゲルはそう呟いたが、それがユウに聞こえていたかどうか分からない。

ふと十代がユウを見たら 背後に巨大な竜が見えた。一瞬だけだが、確かに見えた。

だが、ユウのデッキの八岐大蛇ヤマタノドラゴンではなかった。

「お、俺のモノに手を出すとどうなるか分かってるのか!？」

「貴様の…モノ? ツバキをモノ呼ばわりするのは…どうなるのか分かってるのか!?!？」

明らかに先日の綾小路の時よりも強い瘴気を ぁ、翔が気を失った。

というかほぼレッド生徒が気を失っていた。というか十代も顔を青くしてるのになんであの執事さんは平気なんだ?

見た感じもう定年を過ぎてもおかしくないぐらいの老人なのになんで平然とできるんだ?

「っ、っ…!!お、おいお前!! デュエリストならあいつを賭けて勝負しろ!!」

「いいだろう…シゲル」

「な、なんだ?」

突然ものすごくいい笑みで振り返ったのでシゲルもツバキも驚いて

ぁ、隼人が気を失った。それを見事にスルーしたユウはあるカードを取り出した。

「これえ、つかつてもいいかなあ？」

「…っておい！！それまだ調整中デツキだろ！！」

「良いじゃん　こんなの肩慣らしにちょうどいいしね　」

「っ！！1時間後、この学園のデュエルリングに来い！！1分でも遅れるな！！」

どンドンユウが壊れて行く気がした。最早こうなれば誰も止めれることなんてできない気がする。もう早くこの場を離れたいのか剣賭はツバキ達の横を通り過ぎて

「逃げるなよ…どうなるか分かってるんだろな？」

「っ…！！！！」

通り過ぎる時何かを小声でツバキに言っていた。残念ながらシゲルは聞き取れ

「ツバキ、何かあったの？」

なんで10mぐらい離れてるユウは聞こえたんだ？しかもこの様子じゃ全部聞こえたみたいだ。ツバキはガタガタ震えながら泣いていた。

「私…実は記憶が無いの…」

「……え？」

ツバキの言葉にユウ、シゲル、十代、大徳寺先生が驚いていた。なぜこの4人だけかという他の生徒は気を失っていたからだ。

「気が付いたら……知らない森の中にいたの……そこに羽黒竜也はぐろ たつや……
つて人が来て……私を引き取ってくれて……」

羽黒竜也と言うのはAW社の前総帥　つまりあの剣賭とか言う少年の父親だ。

だが前総帥は数年前にガンで死亡している。その数年前にツバキが引き取られたのだ。

「けど……AWは……元々は戦争で……親を亡くした子供の保護を……目的とした会社なの。なのに……竜也さんが亡くなって……剣賭が総帥になってから……AWは……戦争を引き起こす会社が変わったの……けど剣賭は人が死んでいくのを……楽しんでいたの」

そう言ってツバキは泣き崩れてしまった。兄妹の様に一緒にいた男が変わってしまったのだ。無理も無い。もういいと言わんばかりに

「大丈夫」

ツバキを優しく抱きしめた。悪夢を見た子供を慰めるように、頭を撫でながら

「ユ、ユウ…!？」

「…ボクも…大切な友達や、大好きな人なんて…周りにいなかった。この学校に来て皆に会えた。ボクが此処に来れたおかげは…ツバキのおかげなんだよ。だから…」

「今度はボクがツバキを守る番だ」

ユウはそう言って部屋に戻って行った。調整中のデッキの最終調整とデュエルディスクを取りにだが、何故かシゲルも付いてきた。

「調整終わらすんだろ？手伝う…それであの野郎を全力で吹き飛ばしてみる」

「…ありがと…相棒^{シゲル}」

45分後

新デッキの調整も終わったユウはシゲル、十代、ツバキと事情を聞いた明日香と三沢、目を覚ました翔、隼人と共にデュエルリングへと向かっていたのだが

「此処から先へは行かせませんよ」

「山本さん!!」

校内は言っただけぐらにあの執事さん 山本がディスクを構えていた。

やはりというべきかただでは通れないようだ。

「お嬢様、剣賭様の元へお戻りになってください」

「え…っと…執事さん?そこを通してくれませんか?」

ツバキはユウの後ろへ隠れてしまった。一応今は通常モードのユウは丁寧に頼んでみた、が山本はデッキをセットしていた。

「…たく。ここは俺に任せて先に行きな」

「いいでしょう…では始めますか」

シゲルの言葉に普通なら「私の相手はそちらの少年ですが」と言いそうだが素直に山本は答えた。それを見た他の7人がリングへと向うのを山本は見送っていた。

「…始める前に一つ聞きたい。どうして素直に俺の要求に応えた？」
「ほっほっほ…いえ…老人の単なる気まぐれですよ。では、私からも一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

互いにディスクを構え、そしてカードを5枚引いた。すると一瞬だけだが山本の眼は先程までのやさしそうな執事の目から戦場で相手を殺すような眼に変わった。下手なことを応えるとシゲルは山本に殺されてしまう気がした。

「あなたはお嬢様とは…？」

「…仲間だ……大切な…友達…^{たち}それ以上でも、それ以下でもない」

「ふむ…これ以上聞くのは失礼ですかね…では…」

「「デュエル!!!」」

シゲルのターン

「先行は俺からだ。俺のターン。剣闘獣ダリウスを攻撃表示で召喚」
「ほう…剣闘獣か…おもしろい。」

フィールドに現れた馬の獣人を見て山本がそう呟いた。
てか、山本さんさっきまでこんなキャラだったか？

ダリウス / ATK 1700

「カードを2枚伏せ、ターン終了」

シゲル/LP4000 手札3枚 ダリウス 伏せカード2枚

その頃 通路 (ユウside)

「シゲル…大丈夫かな…」

「大丈夫っすよ！あのシゲル君なんすよ！！」

不安そうなツバキを慰めるように翔がそう言った。だがツバキがそう言うということは何か不安なことがあるのだろう。

「そういえばツバキ君。あの山本と言う人はどういうデッキなんだ？」

「……………あの人のデッキは……………」

山本のターン (シゲルside)

『…あの老人のデッキ…何か嫌な予感がする』

「不吉なことを言うな…そういう不吉なことは本当に」

デッキのウリーの言葉にシゲルはそう呟いた。今まで嫌な予感がして外れたことなんて無かった。だがこのデュエルで嫌な予感 全く見当がつかない。

ウリーが言うにはあの老人のデッキが普通とは違うらしいが

「では私のターン!! 剣闘獣ラクエルを攻撃表示で召喚!!」
「『……………は?』」

ラクエル / ATK 1800

通路 (ツバキ side)

グラティアルピースト
「剣闘獣なの」

「……………はあ!?!」

再び戻ってシゲル side

「剣闘獣…ラクエル…レベル4の剣闘獣の中で上位のアタッカーに分類される獣人…まさか…あんたのデッキ…」

「驚きましたよ…私と同じ剣闘獣を扱う人がいるとは」

そう言って山本は装備カード剣闘獣の闘器デーモンズ・シールドを装備した。

剣闘獣の闘器 デーモンズ・シールド

装備魔法

「剣闘獣」と名のついたモンスターにのみ装備可能。
装備モンスターが破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。

装備モンスターが自分フィールド上からデッキに戻る事によってこのカードが墓地に送られた時、このカードを手札に戻す。

闘器　それは剣闘獣の強化のためのカード。ということとは…

「行きますぞ。ラクエルでダリウスへ攻撃!!!」

「伏せカードオープン!!!ディフェンシブタクティクス!!!…剣闘獣デッキなら説明はいらぬな」

「ええ。バトルフェイズ終了時、私はラクエルをデッキに戻し、剣闘獣ホプロムスを守備表示で召喚いたします!!!」

ホプロムス / DEF 2400

ホプロムス　やはりシゲルと同じ剣闘獣デッキだ。

「俺はダリウスを戻しムルミロを特殊召喚、更にハンディキャップマッチ!を発動!!!デッキからエクイテを特殊召喚!!!ムルミロの効果発動!!!ホプロムスを破壊する!!!」

ムルミロ / ATK 800

エクイテ / ATK 1600

「ふむ…デーモンズシールドは効果に手札に戻ります。カードを2

枚伏せてターン終了」

山本 / LP4000 手札3枚 伏せカード2枚

シゲル

剣闘獣デッキを使うシゲルは山本の伏せカードが気になっていた。剣闘獣の攻撃反応型罠カード 恐らくディフェンシブタクティクスなのだが、何かがおかしい。

剣闘獣デッキを使う場合、長所と短所は使う者が良く分かるはずだ。恐らくシゲルと山本のデッキはほとんど同じタイプのはずだ。だったらなぜ伏せカードに警戒をしなかった…

「俺のターン！！俺はラクエルを召喚！！そして場に存在するラクエル、ムルミロ、エクイテをデッキに戻しヘラクレイノスを特殊召喚…っ！？」

フィールドにヘラクレイノスが 山本の場に現れた。

ヘラクレイノス / ATK3000

「伏せカード、剣闘の束縛を発動いたしました。自分の墓地に剣闘獣がいる時、相手の特殊召喚したモンスターのコントロールを得ます」

「っ…！！だから特殊召喚承知の上でムルミロの警戒をして無かったのか…」

グラディアル・ロック
剣闘の束縛

永続罨

相手がモンスターを特殊召喚に成功した場合、

自分の墓地に存在する「剣闘獣」をゲームから除外し

その相手モンスターのコントロールを得る。

この効果対してに相手はモンスター効果、魔法、罨を発動することはできない。

その後、このカードを装備カード扱いでそのモンスターに装備する。
このカードが破壊された時、自分のゲームから除外されている「剣闘獣」と
名のついたモンスターを特殊召喚する。

このカードがフィールドから離れた時、装備モンスターのコントロールは相手へ移る。

「っ…俺はカードを2枚伏せてターン終了!!!（ヤバイ…この人…
今まで戦った中で一番強いかも…!!!）」

シングル/LP4000 手札0枚 伏せカード2枚

山本のターン

「それでは私のターン。剣闘の誘いを発動！手札の剣闘獣と名のついたカード、デーモンズシールドを墓地に送ってカードを2枚ドロ
ー!!!」

グラディアル・マインド
剣闘の誘い

通常魔法

手札の「剣闘獣」と名のついたカードを墓地に送って2枚ドロースる。

「剣闘の誘い」は1ターンに一度しか発動できない

このカードを発動したターン、自分はモンスターをデッキに戻すことはできず、

モンスターを通常召喚・特殊召喚することもできない。

「（自ら剣闘獣を墓地へ…デッキが主流じゃない剣闘獣の戦術…）」

そうか…それが噂に聞く墓地獣セクター・ヒーストか…」

「ほっほっほ…よくご存じですね」

一度だけペガサスからI2社のアジア支部本社で開発されたもう一つの剣闘獣

墓地から剣闘獣を使用する戦い方で『裏の剣闘獣』とも呼ばれるデッキだ。

だがその本社がある国がクーデータに逢い、同時に本社そのカードのデータが消えた。

現存するのはテスト用に作られた『墓地獣』と呼ばれるデッキしかないのだが

「なんであなたがそのデッキを持っている…ペガサスが探したが見つからないと言っていたはずだ」

「クーデータの收拾に前総帥の竜也様がAW社を向かわせまして…その時に回収されたと仰って降りました」

…確かにそれなら合点がいく。墓地剣闘獣を持ち帰ったAW社の竜
也はおそらく当時から繋がりがあった山本にそのデッキを渡したの
だ。

「剣闘の誘いを発動したターンモンスターを出すわけにはいきませ
ん。ですので…ヘラクレイノスで直接攻撃！！バーストブレイカー
！！！」

「まともに喰らってたまるか…カウンター罠、グラディアル・フォース剣闘力を発動！！相
手の直接攻撃宣言時、デッキの一番上から剣闘獣と名のついたモン
スターが出るまでカードをめくり、そのモンスターを特殊召喚し、
他のカードはデッキの一番下へ送る！！！」

グラディアル・フォース
剣闘力

カウンター罠

相手の直接攻撃宣言時発動することができる。

デッキの一番上から剣闘獣と名のついたモンスターが出るまでカ
ードをめくり、
そのモンスターを特殊召喚する。他のカードはデッキの一番下へ送
る。

このカードを発動したターン終了時、特殊召喚したモンスターは破
壊される。

「…ですが、貴方自身のモンスターの効果はご存知ですよね？」

「ああ…だがヘラクレイノスはカウンター罠を無効にすることはで
きない」

「なんと…！！！」

どうやら山本はヘラクレイノスを使った事が無いらしい。ガイザレスやベストロウリィはシゲルしか所持していないため無理もないが

「（墓地獣は融合モンスターがないのか……？）……来たぜ。剣闘獣ホプロムスを守備表示で特殊召喚！！他のカードはデッキの一番下へ」

「ふむ…このまま下手に攻撃して伏せカードが発動する事もありますか…私はカードを2枚伏せてターンを終えます」

山本 / LP 4000 手札 2枚 ヘラクレイノス 伏せカード 3枚

剣闘の束縛

シゲルのターン

「俺のターン！！俺は剣闘獣エクイテを守備表示で召喚！！このままターンを終える」

エクイテ / DEF 1200

シゲル / LP 4000 手札 0枚 エクイテ 伏せカード 1枚

山本のターン

「私のターン。永續罠、グラディアル・リベンジャー剣闘の解放を発動いたします。手札の剣闘獣を墓地へ送りゲームから除外されている剣闘獣を1体特殊召喚し

ます。手札のセクトルを墓地へ送り、ホプロムスを特殊召喚いたします！」

グラディアル・リベンジャー
剣闘の解放

永続罫 (制限)

手札の剣闘獣と名のついたカードを墓地へ送り
ゲームから除外されている剣闘獣を1体を選択し特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

ホプロムス / DEF 2100

「そして手札より剣闘獣ダリウスを召喚いたします。伏せカード剣闘の復活を発動いたします。墓地の剣闘獣と名のついたレベル4以下のモンスターを特殊召喚し、このカードを装備します」
「…… 剣闘獣用のリビングデッドか……」

グラディアル・リボン
剣闘の復活

永続罫 (準制限)

自分の墓地に存在するレベル4以下の「剣闘獣」と名のついた1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

ダリウス / ATK 1700

セクトル / ATK 400

場にはセクトルが現れた。剣闘の誘いで墓地送っていたのだ。だがデッキに戻すことのできないセクトルを出した所を見るとホプロムスと融合し、マキロを出す。だがそれでも何かが違う気がしていた。

「そして剣闘の場のセクトル、ダリウス、ホプロムスをデッキ戻し剣闘獣デバハーツを特殊召喚！」

フィールドに巨大な漆黒の馬が現れた。ダリウスが獣戦士、セクトルが爬虫類族なのに対し出番は獣族だった。

デバハーツ 聞いたことのないモンスターだった。おそらくはこのデッキのキーカードだろう。

「デバハーツの効果発動いたします。このカードが特殊召喚に成功した時、デッキより剣闘獣を2体まで特殊召喚します」

「なんだと…!?!」

グラディアルビースト

剣闘獣デバハーツ

融合・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 獣族 / ATK2700 / DEF2000

「剣闘獣ダリウス」+「剣闘獣セクトル」+「剣闘獣」と名のついたモンスター

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードが特殊召喚に成功した時、デッキより「剣闘獣」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚することができる。

この効果を発動したターン、バトルフェイズを行うことはできない。またこの効果を発動したターン、このカード以外の融合モンスターを特殊召喚することはできない。

フィールドに鎧の様な物を着た虎の様なモンスターと、犬の様なモンスターが現れた。

デバハーツ / ATK 2300

ティゲル / ATK 1800

ワীগ / DEF 1300

「さらにティゲルのモンスター効果、手札のディカエリイを墓地に送り剣闘獣と名のついたモンスターを一体手札に加えます。剣闘獣ヘルバードを手札に加えます

そしてワীগの効果でカードを1枚ドロします」

「っ…流石の墓地獣…もう次のコンボの準備まで整えているのか…

！！（だが…ヘルバード…？聞いたことの無い…）」

グラディアルビースト

剣闘獣ティゲル

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣族 / ATK 1800 / DEF 800

このカードは融合素材モンスターとして使用する事はできない。

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、

手札から「剣闘獣」と名のついたカード1枚を捨てる事で、

自分のデッキから「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を手札に

加える。

グレイディアルヒースト

剣闘獣ワーグ

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣族 / ATK 800 / DEF 1300

このカードは融合素材モンスターとして使用する事はできない。

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、
カードを1枚ドローする。

「デバハーツの効果を発動したターン、私は攻撃することはできません。カードを1枚伏せターンを終えます」

山本 / LP 4000 手札1枚 ヘラクレイノス デバハーツ テ
イゲル ワーグ

剣闘の束縛 剣闘の復活 剣闘の解放

伏せカード

シゲルのターン

「俺のターン！！来た…俺は剣闘獣ベストロウリイを召喚！！」
『ようやく私の出番かの』

フィールドに鳥人が現れた。それを見て山本は驚いているようだ。
剣闘獣ベストロウリイ 精霊が宿っている世界に1枚しかないカードだ。

墓地獣は元をたどれば剣闘獣と同じだから驚いても無理は無い。

「行くぜ…場のベストロウリィとエクイテをデッキに戻し、剣闘獣ガイザレスを特殊召喚!!」

「ほう…なかなか面白いカードを使いますな…ですがヘラクレイノスとデバハーツの攻撃力には及びませんぞ」

攻撃力2400　確かに攻撃力が3000を超えるヘラクレイノスは越えることは無い　だが、ガイザレスなら越えることができる。

「ガイザレスの効果発動!!特殊召喚成功時、フィールド上のカードを2枚まで選択し、破壊する!!」

「なんと…この状況を一変するとは…」

ガイザレスの生み出した竜巻　それによりデバハーツと剣闘の束縛を破壊した。

縛るモノの無くなったヘラクレイノスは

「剣闘の束縛の無くなったヘラクレイノスは俺の場に戻る!!」

「お見事…剣闘の束縛の効果、除外されている剣闘獣を特殊召喚しますが…除外されてる剣闘獣はいません。ですが伏せカード剣闘獣の咆哮を発動します」

「なに!？」

山本の場のカードが上がった瞬間、剣闘獣ホプロムスとアンダルが守備表示で召喚された。

ホプロムスは先程デバハーツの召喚時デッキに戻ったカード。

恐らく剣闘獣の咆哮は

「デッキから特殊召喚系か…」

「その通りでございます。フィールド上の剣闘獣と名のついたモンスターが破壊された時、デッキから剣闘獣と名のついたモンスターを2体特殊召喚します」

グラディアル・シャウト

剣闘の咆哮

通常罫

自分フィールド上に存在する「剣闘獣」と名の付いた融合モンスターが相手のカード効果、戦闘で破壊されたとき発動できる。

自分デッキから「剣闘獣」と名の付いたモンスターを2体まで特殊召喚する。

ホプロムス / DEF 2100

アングダル / DEF 1500

「だが…2体の攻撃力の方が上だ!!バトルフェイズ、ガイザレスでアングダルに攻撃!!凱陣旋風!!」

「クッ……」

「ヘラクレイノスでティゲルに攻撃!!バーストブレイカー!!」

「うっ!!!」

山本 / LP 4000 2800

一気に山本の場の主力モンスターを破壊した　が、どうも腑に落ちない。墓地獣のデッキがいかほどのものなのかはわからないが、此処までスムーズにいくのは何かがある。

「ガイザレスのデッキへ戻る効果は発動しない。ターン終了」

シゲル／LP4000　手札0枚　ヘラクレイノス　ガイザレス
伏せカード1枚

山本のターン

先程ティゲルで手札に加えたモンスター：それと引いたカード。どう考えても山本はこうなる事は予測していたはずだ。だが、この状況をひっくりかえせる方法も思いつかなかった。

「私のターン、カードを1枚伏せてターン終了」

山本／LP2800　手札1枚　ワীগ　ホプロムス
伏せカード　剣闘の復活　剣闘の解放

シゲルのターン

「俺のターン！俺はエクイテを攻撃表示で召喚！」

ラクエル／ATK1600

「エクイテでワীগに、ガイザレスでホプロムスへ攻撃！」

これで山本の場のモンスターは無くなった　が、一枚の伏せカードが気になっていた。

今シゲルの手札は0枚。ヘラクレイノスの効果を発動するためのコストが無い分、少し慎重になっていた。が、今は攻め時だった。

「ヘラクレイノスの直接攻撃！！バーストブレイカー！！」

「では、伏せカード剣闘の昇華を発動いたします。このカードは相手の直接攻撃宣言時、墓地の剣闘獣をゲームから除外し攻撃を無効にいたします」

グラディアル・ハブ
ン
剣闘の昇華

永続罫

相手の攻撃宣言時、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合効果を発動することができる。

墓地に存在する「剣闘獣」と名のついたモンスターをゲームから除外し、攻撃を無効にする。

「墓地の剣闘獣アングルをゲームから除外し、攻撃を無効にします」

シゲル/ＬＰ４０００　手札０枚　ヘラクレイノス　ガイザレス

エクイテ　伏せカード

山本のターン

「私のターン。カードを一枚伏せ…では私はこのデッキのエースを

召喚しますか」

「っ！？モンスターも無い状態で…エースを召喚だと！？」

そう言つて山本は手札のモンスター 剣闘獣ヘルバードをフィールドに出した。

「私は剣闘獣ヘルバードを攻撃表示で召喚！！」

ヘルバード / 星10 / ATK ? /

「馬鹿な！？レベル10のモンスターを生贄なしで召喚しただど！？それに攻撃力が…」

「ヘルバードは自分フィールドに存在する「剣闘」と名のつく永続罨を任意の枚数墓地に送つて召喚します。私の場には剣闘の復活と剣闘の解放、剣闘の昇華、そして伏せていた2枚目のが剣闘の昇華を墓地に送りました。そして召喚時に墓地に送つた枚数×1000攻撃力が上がります」

グラディアルビースト

剣闘獣ヘルバード

効果モンスター

星10 / 炎属性 / 鳥獣族 / ATK ? / DEF ?

このモンスターは通常召喚することができない。

自分フィールド上に「剣闘獣」と名のついたモンスターが存在しない場合

「剣闘」と名のついた永続罨を任意の枚数墓地に送つて特殊召喚することができる。

このモンスターの攻撃力と守備力はこの効果で墓地に送つたカードの枚数

1枚につき1000アップする。

相手は墓地のモンスターを選択する魔法・罨の効果を発動できない。このモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、そのモンスターの守備力分のダメージを与える。このモンスターがカード効果で破壊される場合、墓地の「剣闘獣」と名のついたモンスターを2体ゲームから除外することで破壊を無効にする。

ヘルバード / ATK ? 4000

「っ！4000だと!?!」

「ほっほっほ…驚きましたか？そしてヘルバードが存在する場合、相手は墓地のモンスターを対象にする魔法、罨カードは使えません」
「っ…!?!」

墓地のカードが使えないとなると、今場にある伏せカード『眠る魂の咆哮』が使えなくなる。そして4000を超えるモンスターやばすぎる。

「では行きますぞ…ヘルバードでヘラクレイノスに攻撃!!フェニックスブレイブ!!」

「グッ…ツ!?!」

体を炎に包んだヘルバードはヘラクレイノスに突撃してきた。

シゲル / LP 4000 3000

破壊されたヘラクレイノスだが、破壊したヘルバードは更に炎を増してシゲルに襲いかかってきた。

「ヘルバードの効果、破壊したモンスターの守備力、2800ポイントのダメージを受けてもらいますぞ」

「なっうわああああああああ!!!!!!」

シゲル / LP 3000 200

一気に3800もライフが削られた。しかも十代のフレイムウイングマンの様な効果ダメージのバーンを与えるモンスターがいるため、壁モンスターを出しても意味は無い。

山本 / LP 2800 手札0枚 ヘルバード

シゲルのターン

此処まで追い込まれてくるともう打つ手は無い

「俺のターン!!!流石…墓地獣だな…一気に逆転した…」

「ほっほっほ…剣闘獣には攻撃力4000を超えるヘルバードを倒せるモンスターはいませんな」

「どうかな?確かに今までならいなかった」

「……?」

今までだったら。

シゲルの行っている言葉 『今までならいなかった』 言い換えるのなら『今はいる』となる。だが、そんなモンスターはいない

「チューナーモンスター、パワー・リゾネーターを攻撃表示で召喚
!!!」

「はて…チューナー…？聞いたことが無いです。なんですか、その
モンスターは？」

「チューナーはあるモンスターの召喚に必要なモンスター…まあ見
たら分かる」

場に現れた白い猫、それを見た山本は首を傾げていた。確かにチュ
ーナーは聞いたことのないモンスターだ。持っているのはユウと、
シゲル、ツバキだけでこの学園でも数人しか存在を知らない。

パワー・リゾネーター / ATK 200 / 星 2

「見せてやる…俺の新たな力…」

「ほう…面白いですね…かかってきなさい!!少年よ!!」

山本の眼つきが思いつきり変わった。まるで戦場で相手を殺す軍人
の様な眼だ。

だが、シゲルの戦術は止まらない

「それじゃあ行くぞ…レベル 4、剣闘獣エクイテにレベル 2、パワ
ー・リゾネーターをチューニング!!!」

白い悪魔は薄い緑の輪リングに変わり、鎧を纏った鳥は輪の中で星に変わ
った。

そしてパワー・リゾネーターの輪の中で星になったエクイテが一直

線に並んだ。

「獣の魂を受け継ぐものよ、死にゆく者に新たな命を吹き込め!!」

4 + 2 = 6

そして並んだ星は強力な光となり輝いた。

「シンクロ召喚!!グラディアルビースト 剣闘獣ストーム・ウィング!!」

シゲル場に全体的に鮮やかな緑の体、そして黒いラインが入った巨大な鳥が現れた。

ストーム・ウィング / ATK 2400

このモンスターはペガサスが送ってきた剣闘獣のシンクロモンスターの1体だ。

その力は全てを癒し、全てを守る獣の鳥

「これは…なんと美しい…ですが私のヘルバードの攻撃力は4000ありますぞ」

「分かってる。パワー・リゾネーターの効果を発動!!このモンスターがシンクロ召喚の素材となった時、フィールド上のモンスター1体の攻撃力をこのターン終了時まで1000下げる!!」

「なんと…!!」

パワー・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星2 / 光属性 / 悪魔族 / 攻 200 / 守 600

このカードがシンクロ召喚に使用され墓地に行った時、

相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を1000下げる。

この効果は自分のライフが1000以下の時のみ発動できる。

ヘルバード / ATK4000 3000

「さらにストーム・ウイングの効果発動！！フィールド上の剣闘獣と名のついたモンスター1体をデッキに戻すことで墓地に存在する剣闘獣を1体特殊召喚する！！ガイザレスをデッキに戻しヘラクレイノスを特殊召喚！！」

ヘラクレイノス / ATK3000

グラディアルビースト

剣闘獣ストーム・ウイング

効果・シンクロモンスター

星6 / 風属性 / 鳥獣族 / ATK2400 / DEF1700

チューナー＋「剣闘獣」と名のついたチューナー以外のモンスター1体以上

自分フィールド上に存在する「剣闘獣」と名のついたモンスターをデッキに戻すことで、墓地に存在する「剣闘獣」と名のついたモンスターを

1体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、ターン終了時デッキに戻る。

このカードがフィールドからデッキに戻った時墓地に存在する魔法カードを1枚手札に加える。

「ほっほっほ…流石ですね…」

「行くぜ…ラストバトル!!ヘラクレイノスでヘルバードに攻撃!
!バーストブレイカー!!」

「迎え撃てヘルバード!!フェニックスブレイブ!!」

ヘラクレイノスとヘルバードの攻撃がぶつかった。そしてフィール
ドは大爆発に巻き込まれ2体のモンスターは消えた。

「行け!!ストーム・ウィング!!トルネードストライク!!」

「うおおおおおお!!!!!!」

山本 / LP 2800 400

「っ…!!ですが…まだ私のライフは…」

「残念だが、伏せカード眠る魂の咆哮を発動!!墓地と場の剣闘獣
をゲームから除外し、融合モンスターを特殊召喚する!!」

シゲルの伏せカードを見た山本はものすごく驚いていた顔をしてる。
おそらく墓地獣セメタリービーストの最後の罠がシゲルのデッキに入っていたのだから
だろう。

「少年…いや、シゲル殿。まさかそのカードを持っているのが貴方
だとは…」

「…それを言うのなら墓地獣を使うのがあんだだとは思わなかった

ぜ。墓地のホプロムスとヘラクレイノスを除外！！マキロを攻撃表示で特殊召喚！！」

マキロ / ATK 1400

「最後だ！！マキロで直接攻撃！！」

「うわああああああ……！！！！」

山本 / LP 4000

マキロの起こした地震で山本のライフが無くなった。と同時にシゲルはペタンと座ってしまった。

「あ、危なかった……」

「ほっほっほ……まさか私が負けるとは思いませんでしたよ」

デュエルディスクを収めた山本がそう言いながらシゲルの元へ歩んでいた。

てか、2400と1400（計3800）の直接攻撃を喰らってるのに

「山本さん……タフですね」

「いえいえ……これでも昔はもっとやんちゃをしておりましたよ」

……何だろう、この人が言うത്シャレにならないぐらいの事をする気がした。

「ほっほっほ…シゲル殿」

「…俺は呼び捨てでいい」

「ではシゲル、お願いがございます。このままツバキの友人として
いてください」

恐らく山本はツバキを年の離れた娘の様に可愛がっていたのだ
らう。

だからデュエルが始る前にツバキとの関係を聞いたのだらう。

「頼んでもよろしいでしょうか？」

「…当たり前だ」

第十七話 本当の気持ち 最強の執事さん？ VS墓地獣（後書き）

というわけでVS墓地獣でした。

え、墓地獣は一般的にデッキから特殊召喚して効果を使いますが墓地の剣闘獣を使うデッキもいいな…ということで墓地獣^{セクター・ビースト}です。

シンクロモンスターは剣闘獣をベースに作りました。

ストームウイングはダリウスです。特殊召喚時のみをフィールドの剣闘獣を生贄にささげるので少し使い勝手が悪い感じです。

オリジナルカード

剣闘の束縛

剣闘の誘い

剣闘力

剣闘の解放

剣闘の復活

剣闘獣デバハーツ

剣闘獣ワীগ

剣闘の昇華

剣闘獣ヘルバード

パワー・リゾネーター

剣闘獣ストーム・ウイング

投稿カード（ユタさんより）

剣闘の咆哮

ユタさんへ 剣闘の叫びの効果変更と名前の変更すいませんでした。効果はヘラクレイノスやデバハーツみたいな3体融合のとき、結構

ややこしいことになるので2体にさしてもらいました。
それと名前は「剣闘獣」だったらエクイテの回収で何度も使いまわ
ししてしまうので「剣闘」にしました。

今回はユウVS剣賭です。

第十八話 プライドの戦い 飛び上がる聖霊 VS 機甲部隊（前書き）

ふう…思いのほかグダグダになった…

ちなみにサブタイトルの『機甲』っていうのは『機皇』の誤字では
ありません。

流石にシンクロモンスターを使うのが数人でワイゼルとかは使いま
せん。

第十八話 プライドの戦い 飛び上がる聖霊 VS 機甲部隊

アースラ（なのはside）

ブリッジの巨大モニターには先程シゲルが召喚したストーム・ウィングが映っていた。

「（私とフェイトちゃん、はやてちゃんはクロノ君からの頼みでシゲルさん（え？なんでさん付けなのって？だって友達というか…なんかお兄さんの感じだから）の持つてるシンクロモンスターの事について聞いて来るように言われた）」

あの日夜神志度はシンクロモンスターを使用していた。シンクロモンスターは時空管理局の本部があるミッドチルダで最近発見されたカードの事だ。

ロストロギアではないがロストロギアと同等の力があるらしい。

だが志度はそのカードの事をあまり知らなかった。だがシゲルはシンクロモンスターを知っていた。だから管理局の知らない何かを知ってる可能性もある。

「…なのは」

「…なのはちゃん」

2人が心配そうになのはを見ていた。友達の事を裏切れないなのははロストロギアの確保のためにツバキを、ユウを、シゲルを裏切ったのだ。そのことで落ち込むのも無理は無い。

「うん…行くっ」

デュエルリング

ここで金髪の少年　　剣賭が仁王立ちで待っていた。約束の1時間まで残り2分

「山本の足止めが効いているな。ふっふっふ…「よお…よく逃げなかつたなあ…」っ!？」

山本が邪魔をしてるはずなのユウが目の前にいた。しかも背後に黒い瘴気が見えた。
先程よりもさらに極濃の真っ黒でユウの後ろの通路が見えないくらいだ。

「山本さんに足止めを頼むなんてね」
「う、うるさい!!だ、だが大会で優勝した俺が貴様の様な雑魚と勝負する義理なんて「デュエル、俺のターン!!」無視をするな!!」

最早処刑モードとなったユウの前には拒否権なんて無かった。
しかも物すごい笑顔で黒い瘴気を放っている。

観客席

ユウ、シゲル以外の6人は観客席にいた。ちなみに此処に来るまでにブルーのエリート意識の強い生徒がいたが、ユウの瘴気で気を失った。

「…なあ明日香」

「どうしたの、十代」

「いや…なんか…ユウがあの状態でスピリットを使うのって初めてだと思って…」

確かに今までならユウが処刑モードの時は異次元デッキで…オバーキル殺していたがスピリットデッキを使うのは初めてだった。

「魔法カード、スピリット・バーンを発動！手札のスピリットモンスターを1体墓地に送り相手にそのモンスターのレベル×200ポイントのダメージを与える！！手札の不死之炎鳥を墓地に送り800ポイントダメージ！！」

「なっうわあああああ！！！！！！」

スピリット・バーン

通常魔法

自分のフィールド上にモンスターが存在しない場合のみ発動可能。
手札のスピリットモンスター1体を墓地に捨て、
そのモンスターのレベル×200ポイントのダメージを与える。

剣賭 / LP 4000 3200

フィールドに現れた不死之火鳥がものすごい勢いで剣賭へ襲いかかった。

まさか1ターン目でダメージが喰らうと思って無かったのかものすごく驚いているがユウはそれを無視して続けた。

「手札からスピリットドローを発動！！不死之炎鳥をゲームから除外しカードを2枚ドロー！！裏守備モンスターを召喚しカードを2枚伏せてターン終了！！」

ユウ/LP4000 手札2枚 裏守備モンスター 伏せカード2枚

剣賭のターン

「クツ…俺のターン！！俺はマシンナーズ・ソルジャーを召喚！！効果発動！！召喚成功時、手札のマシンナーズと名のついたモンスターを1体特殊召喚する事ができる！！そしてそれにチェーンして突進を発動！！さらにサモンチェーンを発動！！」

マシンナーズ・ソルジャー

効果モンスター

星4/地属性/機械族/ATK1600/DEF1500

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合にこのカードが召喚に成功した時、

手札から「マシンナーズ・ソルジャー」以外の

「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

突進

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

サモンチェーン

速攻魔法

チェーン3以降に発動する事ができる。

このカードを発動したターン、自分は合計で3回の通常召喚を行う事ができる。

同一チェーン上に複数回同名カードの効果が発動されている場合、このカードは発動できない。

マシンナース・ソルジャー / ATK1600

「まずはサモンチェーンの効果により俺はこのターン3回通常召喚を行うことができる！そして突進の効果でソルジャーの攻撃力を700アップする！！」

マシンナース・ソルジャー / ATK1600 2300

「そしてソルジャーの効果でマシンナース・スナイパーを特殊召喚！！サモンチェーンの効果で残り2回モンスターを召喚できる。マシンナース・ディフェンダーとマシンナース・ギアフレームを召喚！！」

マシンナース・スナイパー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1800 / 守 800

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

「マシンナース・スナイパー」以外の「マシンナース」と名のついたモンスターを攻撃する事ができない。

マシンナーズ・デイフェンダー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1200 / 守1800

リバーズ：自分のデッキから「督戦官コヴィントン」1体を自分の手札に加える。

マシンナーズ・ギアフレーム

ユニオンモンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1800 / 守 0

このカードが召喚に成功した時、

自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の

「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、

または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。）

マシンナーズ・スナイパー / ATK1800

マシンナーズ・デイフェンダー / ATK1200

マシンナーズ・ギアフレーム / ATK1800

「ギアフレームの効果発動！！デッキからマシンナーズ・フォートレスを手札に加える！！バトル！！マシンナーズ・ソルジャーで伏せモンスターに攻撃！！」

「伏せモンスターは竜宮之姫だ！！効果によりマシンナーズ・スナイパーを準備表示に変更！！」

竜宮之姫が念力みたいなのでスナイパーの攻守を変更した。

マシンナーズ・スナイパー / DEF 800

「クツ…だがまだディフェンダーとギアフレームの攻撃が残ってる
！！マシンナーズ・ディフェンダーの直接「手札のスピリット・ガ
ードの効果発動！！」なっ！？」

「手札の偉大天狗を墓地に送ってスピリット・ガードを特殊召喚！
！」

スピリット・ガード / DEF 0

場に現れた半透明の大きな石像、だが体がガラスで出来ているため
かものすごく脆い。

「っ…無駄な壁を並べたか…ディフェンダーでその壁を破壊しろ！
！」

「スピリット・ガードの効果発動！墓地の偉大天狗を除外し、破壊
を無効にする！！」

一瞬偉大天狗がスピリット・ガードに映し出されるとディフェンダ
ーの動きが止まった。

「雑魚が…ギアフレームで攻撃！！」

「リバース罠、くず鉄のかかし！！相手モンスターの攻撃を一度だ
け無効にする、そしてこのカードは再びセットされる！！」

くず鉄のかかし

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

「クツ…ターン終了!!」

剣賭 / LP 3200 手札1枚 ソルジャー ディフェンダー ギ
アフレーム スナイパー

ユウのターン

先程スピリット・ガードを召喚したため、もうユウの手札が無くな
って

「ドロー!!魔法カードスピリット・ドロー!!墓地の竜宮之姫を
除外し、カードを2枚ドロー!!ディストラクシヨンドローを発動
!!フィールドのモンスター、スピリット・ガードを破壊し、レベ
ルの半分の枚数分カードを引く、2枚ドロー!!」

ディストラクシヨンドロー

通常罠

自分フィールド上の攻撃力500以下のモンスターを破壊し、
そのモンスターのレベルの半分と同じ枚数
デッキからカードをドローする。

一気に手札が4枚まで増えた。そして 処刑モードに不可能は無
い。

「魔法カードテラ・フォーミングを発動！！デッキから死皇帝の陵
墓を手札に加え、発動！！ライフを2000払いスピリットモン
スター八岐大蛇を召喚！！」

ユウ/LP4000 2000

八岐大蛇/ATK2600

「馬鹿な！一気に2600のモンスターを召喚するだ！！」

「まだだ！！手札から装備魔法、八尺勾玉を装備！！装備モンスタ
ーが戦闘でモンスターを破壊した場合、そのモンスターの攻撃力分
ライフを回復する！！」

死皇帝の陵墓で失ったライフをこのカードで回復する、その上八岐
大蛇の効果で手札増強 恐ろしいコンボだ。だが

「残念だが、マシンナーズ・スナイパーが存在する時、他のマシン
ナーズへは攻撃できない！！」

観客席

「そうだ。先程竜宮之姫の効果で守備表示になっているから効果は
使えない…このミスは…」

「いや、三沢君…多分…」

「……ユウはミスをして無い」「……」

三沢がそう言っているが、全員は少し焦っていた。処刑モードのユウを知らないのは三沢だけだ。ミスなんて

デュエルリング

「装備カード、草薙剣を発動！！装備モンスターは貫通効果を得る
！！」

「はあ！？」

クサナギノツルギ
草薙剣

装備魔法

スピリットモンスターにのみ装備可能。

装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

装備モンスターが自分フィールド上から手札に戻る事によってこのカードが墓地へ送られた時、
このカードを手札に戻す。

「バトル！！八岐大蛇でマシンナーズ・スナイパーに攻撃！！屍山
血河！！」

「うわあああああ！！！！！！！！」

剣賭 / LP 3200 1400
ユウ / LP 2000 3800 手札 / 0枚 5枚

一気に戦況をひっくりかえした。しかも手札5枚になると

「メインフェイズ2、手札からスピリット・フィールドを発動!!
効果で八岐大蛇は手札に戻らなくてもよくなる。更にカードを2枚
伏せてターン終了!!」

更なるプレーをする。

ユウ/LP3800 手札2枚 八岐大蛇 伏せカード3枚 草薙
剣 八尺勾玉 スピリット・フィールド

観客席

「凄いな…一気に手札補充と場を整えた…」

「けど…ユウはまだあの『カード』を出してない」

「…カード?」

十代の言葉に翔と隼人、明日香が首を傾げていた。デッキ調整を手
伝っている十代はユウの切り札ジョーカーを知っていた。

剣賭のターン

「俺のターン!!魔法カード、マシンナース・サブレポート機甲部隊の補給所を発動!!手札の
機械族モンスターを墓地の送ってカードを2枚ドロー!!」

マシンナース・サブレポート
機甲部隊の休憩所

通常魔法

手札のレベル5以上の機械族モンスターを墓地に送り発動する。

デッキからカードを2枚ドロウする。

「来たぜ！俺は場のマシンナース・ソルジャー、スナイパー、ギアフレームを生贄に捧げてマシンナース・バーサーカーを攻撃表示で召喚！！」

フィールドに様々な機械の残骸を合わせた機械の戦士が現れた。その体にはマシンナースの体の残骸があり、バーサーカーという名がなぜ付いているのかわかるほどおぞましい姿をしていた。

マシンナース・バーサーカー

効果モンスター

星9 / 地属性 / 機械族 / ATK3500 / DEF3000

このカードは特殊召喚できない。

このカードは自分フィールド上の「マシンナース」と名のついたモンスターを

3体生贄に捧げた場合のみ、通常召喚することができる。

墓地の機械族・地属性・レベル4のモンスターを2体ゲームから除外することでフィールド上のカードを1枚破壊することができる。

この効果は1ターンに一度まで発動できる。

このカードが破壊された場合、墓地に存在する機械族モンスターを1体特殊召喚することができる。

マシンナース・バーサーカー / ATK3500

「ッ…攻撃力…3500…！！」

「そうだ！！マシンナース・バーサーカーはフィールドのマシンナースと名のついたモンスターを3体生贄に捧げることで手札から特殊召喚することができる。さらに機甲部隊マシンナース・リサイクルラインの生産を発動！！相手フ

イールド上にセットされているカード1枚を選択し、そのカードが罠カードだった場合破壊し、墓地の機械族モンスターを1体特殊召喚する！！その一伏せカード（くず鉄のかかし）を破壊！！」
「クツ……！！！」

マシンナーズ・リサイクルライン
機甲部隊の生産

通常魔法

自分イールド上に機械族・地属性モンスターが存在する場合のみ発動可能。

相手イールド上にセットされた魔法・罠カードを1枚選択する。
そのカードを確認し罠カードなら破壊し、墓地の機械族・地属性モンスターを1体特殊召喚する。

外れた場合自分イールド上の機械族・地属性モンスターを1体ゲームから除外する。

何処からともなく現れた整備士の様なマシンが、ユウの伏せていたくず鉄のかかしを分解して、その部品達を剣賭の場まで持ってきた。

そしてその部品を組み立て始めた。

「そして墓地より甦れ！！マシンナーズ・フォートレス！！」

マシンナーズ・フォートレス

効果モンスター

星7 / 地属性 / 機械族 / 攻2500 / 守1600

このカードは手札の機械族モンスターを

レベルの合計が8以上になるように捨てて、

手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。
また、自分フィールド上に表側表示で存在する
このカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、
相手の手札を確認して1枚捨てる。

「マシナーズ・バーサーカーの効果発動！！墓地のソルジャーと
ディフェンダーをゲームから除外してフィールド上のカードを一枚
破壊する！！八岐大蛇を破壊！！」

観客席

「不味いぞ……！！もしも伏せカードで挽回できなければ……」
「大丈夫だ。ユウはこれしきの事で負けないぜ」

デュエルリング

「バトル！！マシナーズ・バーサーカーで直接攻撃！！」
「リバースカード、スピリットの導きを発動！！相手の直接攻撃宣
言時、デッキからスピリットと名のついたモンスターを1体特殊召
喚することができる！因幡之白兔を特殊召喚！！」

スピリットの導き

通常罫

自分フィールド上にモンスターが存在せず、「魂の聖地 スピリッ
ト・フィールド」が存在する場合、相手の攻撃宣言時発動するこ
とができる。

自分のデッキからレベル4以下のスピリットモンスター1体を
攻撃表示で特殊召喚することができる。

因幡之白兔 / ATK700

場に現れた因幡之白兔は　なぜか恨めしそうにユウを見ていた。

『…いいよ…どうせ出番なんてほとんど無いんだ…壁にしかされ
ないんだよ』

「……なんかごめん、イナ」

どうやら今まで出番が無かったのがショックなのか処刑モードのユ
ウよりも瘴気が広がっていた。普通の人には見えないのか、観客席
のツバキと十代しか驚いていなかった。

「構わん！！フォートレス、その壁モンスターを破壊しろ！！」

フォートレスの放ったミサイルや何やらで因幡之白兔が破壊された。

ユウ / LP3800　1700

「クツ…だけどリバーズ罷発動！！スピリットの反逆！！スピリッ
トモンスターが戦闘で破壊された時デッキからスピリットモンス
ターを1体特殊召喚する！！」

火炎車を守備表示で召喚！！」

「チツ…フォートレス！！そいつも片付けろ！！」

フォートレスが発射したミサイルは、火炎車に着弾し爆発した。

「火炎車はフィールドから離れた時、カードを1枚引く!!」
「フン…貴様のデッキは見たところスピリットだ。最大攻撃力は火之迦具土の2800…攻撃力3500を超えるマシンナーズ・バ―サーカーを倒す手は無い。ターン終了!!」

剣賭 / LP 1400 手札0枚 バーサーカー フォートレス

「確かに…このままでは、ユウが勝てる確率は低いな」

「ユウをなめんなよ、三沢」

三沢の言葉にシゲルと山本がやってきた。全員が2人が一緒に来た事に驚いていたが、よく考えると山本は足止めの為に残っていたから正直に言う通じたんだったらシゲルと戦う意味は無かった。

「それで…君はユウがこの状況をひっくりかえせると思うのか？」

「ああ、あいつのデッキには」

ユウのターン

「俺のターン!!スピリット・フィールドの効果発動!!墓地に存在する火炎車を除外し、因幡之白兔を特殊召喚!!」

因幡之白兔 / ATK 700

「ただいま…ねえ、もしかして『あれ』を使うの?」

「使うよ。そして手札からチューナーモンスター、スピリット・バ

ードを攻撃表示で召喚!!」

フィールドにスピリット・ガードの様なガラスの様な透明な鳥が現れた。

スピリット・バード / ATK 0

「攻撃力：0を攻撃表示だと…？一体何を考えてる!!」

「スピリット・バードが召喚に成功した時、デッキのスピリットモンスターもしくは、スピリットと名のついたモンスターを1体手札に加えることができる！雷帝神を手札に加える!!」

スピリット・バード

チューナー（効果モンスター）

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / ATK 0 / DEF 0

召喚成功時デッキから「スピリット」と名のついたモンスターか、スピリットモンスターを1体手札に加えることができる。

観客席

「一体彼は何がしたいんだ…？」

「これがユウの切り札だ」

三沢の呆れ半分の声にシゲルがそう言った。十代も頷いている。

そう チューナーとモンスター そしてレベル合計6

デュエルリング

「そんな雑魚を並べてどうするつもりだ!？」

「ボクのデッキに雑魚なんていない。デッキにいるのはみんな必要なカードなんだ。たとえば一つ欠けたら代用できるのもいない!。レベル3、因幡之白兔にレベル3、スピリット・バードをチューニン
グー!」

ガラスの鳥は緑の輪になり、ウサギの精霊は3つの星となった。

「精霊と魂に一つにし、古の魂よ飛び上がれ!」

3 + 3 = 6

「シンクロ召喚!! 聖霊鳥 シルフィを召喚!」

シルフィ / ATK 2500

フィールドに巨大な光で出来た鳥が現れた。その翼がはためくとから光の羽が落ちて神秘的な雰囲気醸し出していた。

「な、なんだ! なんだよ!! シンクロモンスターって何だよ!？」

「シンクロモンスターはチューナーモンスターと、チューナー以外のモンスターを墓地に送ってシンクロ召喚ができる!」

簡単にシンクロ召喚の説明をしたユウは手札の雷帝神を墓地に送っ

た。

「シルフィの効果発動！！手札のスピリットモンスターを墓地に送ることでフィールド上のカードを1枚持ち主の手札に戻す！！マシンナーズ・バーサーカーを手札に戻す！！」

「なんだと!？」

せいれいちよう
聖霊鳥シルフィ

効果・シンクロモンスター

星6 / 光属性 / 鳥獣族 / ATK 2500 / DEF 1800

チューナー+チューナー以外のモンスター

このカードはシンクロ召喚でのみ特殊召喚することができる。

手札のスピリットモンスターを墓地に送ることで

フィールド上のカード1枚を持ち主を手札に戻す。

この効果は1ターンに1度しか発動できない。

このカードが他のカードの効果でフィールドから離れる時、

墓地のスピリットモンスターまたは「スピリット」と名のついた

レベル4以下のモンスターを特殊召喚することができる。

シルフィの巻き起こした突風でマシンナーズ・バーサーカーが剣賭の手札へと戻った。だが、フォートレスとシルフィの攻撃力は同じ2500だ。

「カードを3枚伏せてターン終了!!」

ユウ / LP 1700 手札0枚 シルフィ 伏せカード3枚 スピ

リット・フィールド

剣賭のターン

「俺のターン！！（……手札にはさっき戻されたバーサーカーと機マシナス・サブレポート甲部隊の休憩所だけ…フォートレスだけじゃ心許ないな…）…ん？」

どうするのか考えているとユウが笑っていた。初めは何かユウの伏せカードに罫があるのかと思っていた　が、違った。

「どうする？どうやってボクのモンスターを倒す？」

この状況を楽しんでいた。純粹に、相手を打ちのめす為ではなく、今の自分の状況を楽しんでいた。

それにさっきユウが言った『代用がない』という言葉
もしもバーサーカーがいなければこのカードは使えない。

「……おい、ユウって言ったか？」

「ん？なに？」

どうやらユウは処刑モードから通常モードになっているため、普段の穏やかな状態に戻っている。

「一つ聞きたい。お前はツバキの事が好きなのか？」

「……うん。好きだよ」

ユウは頬を赤めらせながら応えた。昨日の様にオーバーヒートすることも無かった。ちなみに観客席のツバキは頭から湯気を出していた。

「そうか…そのシンクロモンスターがお前の全力なら、俺も全力で応えなくちゃいけないな！！魔法カード機甲部隊の休息所を発動！手札のマシナーズ・バーサーカーを墓地に送って2枚…！！？」
「え…！！？」

カードを2枚ドロしようにとして、剣賭がデッキの一番上のカードに指を掛けた時、そのカードが光り出した。それと同時に剣賭のデッキホルダーも光っている。

観客席

「おい！あのカード！」

「光ってるわ！」

「なんすか、あれ！」

「お、驚きなんだな！」

十代、明日香、翔、隼人が驚いた声を上げている。シゲルと山本は先程行った自身のデュエルで召喚されたストーム・ウィングと、今のデュエルで召喚されたシルフィと光が似てる気がした。

ん？ツバキと三沢？ツバキはまだオーバーヒートしているし、三沢は保健室に氷を貰いに行ってる。

「まさか…俺達以外にシンクロ召喚を…!?!」

デュエルリング

一方いきなりデッキの一番上のカードが光り出してきたので剣賭は驚いているが、同時に何処か安心できる気持ちになった。

「（なんだろう…この懐かしい気持ちは…）」

「剣賭、そのカード…多分君の気持ちに反応したんだと思う」

「気持ちに反応…?…なるほど…カードを2枚ドロ…!…!…!」

引いたカードを見て剣賭は驚いていたが、だがそのカードが自分の手に来た意味をなんとなく理解した。

「俺はチューナーモンスター、マシンナーズ・リサイクラーを召喚
!?!」

マシンナーズ・リサイクラー / ATK500 / 星2

巨大な籠の様な物を背負ったマシンナーズが現れた、すると剣賭の腰のデッキホルダーから更に強い光が現れた。

「行くぜ、場のレベル7マシンナーズ・フォートレスにレベル2、
マシンナーズ・リサイクラーをチューニング!!」

機械の整備士が生み出したリングに、巨大な機械の星が合わさった。

「機械の音が止まる時、全てを残骸にする悪魔が降臨する！！シンクロ召喚！！」

7 + 2 = 9

「刻みつけ、マシンナーズ・デストロイヤー！！」

フィールドに体が機械で出来た巨大な悪魔が現れた。

しかし、見た目は悪魔なのに何故か長いスナイパーライフルを背負っていた。

マシンナーズ・デストロイヤー / ATK 2500

その姿にユウも、シゲルも、十代も 観客席にいた人物全員がその姿に見とれていた。

ちなみに氷を取ってきた三沢と、復活したツバキもだ。

と、ユウは剣賭の目の色が緑色から赤になっているのに気が付いた。

「剣賭…どうしたの、目」

「…目？目がどかしたのか？」

どうやら本人は気付いていない。というか、ユウもシゲルもツバキもそんな事が今まででもあったのだが、本人は気付いていない。

「…？まあいい。マシンナーズ・デストロイヤーは召喚成功時、墓地のマシンナーズを手札に加えることができる。マシンナーズ・フ

オートレスを手札に加える！！そしてマシンナーズ・リサイクラーの効果発動！！」

マシンナーズ・デストロイヤー

効果・シンクロモンスター

星9 / 機械族 / 闇属性 / ATK2500 / DEF2300

チューナーモンスター + 「マシンナーズ」と名のついたモンスター
1体以上

このモンスターが特殊召喚に成功した時、墓地に存在する機械属性モンスターを1体手札に加える。

このモンスターが罫カードの効果で墓地に送られた時、デッキからレベル6以下の機械族モンスターを特殊召喚することができる。

剣賭は初めてシンクロ召喚を行ったはずなのにシンクロモンスターも、チューナーの効果も使い慣れていた。

「マシンナーズ・リサイクラーはシンクロ素材として墓地に送られた時、墓地の地属性・機械族モンスターをゲームから除外し、カードを2枚ドローする！！」

マシンナーズ・リサイクラー

チューナーモンスター（効果）

星2 / 機械族 / 光属性 / ATK500 / DEF400

このモンスターを素材として使用したシンクロモンスターの召喚に成功した時、

墓地の地属性・機械族モンスターを2体ゲームから除外してカードを2枚ドローする事ができる。

「ギアフレイムとスナイパーをゲームから除外してカードを2枚ドロー!!そして手札のフォートレスとソルジャーを墓地に送って、墓地のフォートレスを特殊召喚する!!」

フォートレス / ATK 2500

一気に剣賭の場にモンスターが現れた。しかも2体とも攻撃力2500だ。

流石のユウも驚いているが、それ以上に楽しんでた。いや、ユウだけじゃなくて剣賭も楽しんでた。

「バトル!!マシンナーズ・フォートレスでシルフィに攻撃!!」
「伏せカード、シンクロン・スピリット・パワー!!墓地の八岐大蛇を除外してフィールド上の『聖霊』の攻撃力を500ポイントアップする!!」

シンクロン・スピリット・パワー

永続罫

自分フィールド上にシンクロモンスターが存在する時、墓地に存在するチューナー以外のモンスターを除外し発動する。

フィールド上の「聖霊」と名のついたシンクロモンスターの攻撃力を500ポイントアップする。

フィールド上の「聖霊」と名のついたモンスターが破壊された時、墓地・デッキから「スピリット」と名のついたモンスターをフィールドに特殊召喚することができる。

シルフィ / ATK 2500 3000

「なっ！？しまっわあぁ！！！」

剣賭 / LP 1400 900

伏せカードのカウンターによってフォートレスは破壊された。
だが、フォートレスの効果 フォートレスの残骸がスピリットバ
ードに纏わりついた。

「っ、効果発動！！フォートレスは戦闘破壊された時、フォールド
上のカードを破壊することができる！！シルフィを破壊する！！」
纏わりついてた残骸がシルフィもろとも爆発した。

「っ……！！だけど、シルフィとシンクロン・スピリット・パワーの
効果発動！！シルフィはカード効果で破壊された時、墓地のスピリ
ットモンスターが『スピリット』と名のついたモンスターを特殊召
喚する！！雷帝神を守備表示で特殊召喚！！！」

雷帝神 / DEF 1600

「そしてシンクロン・スピリット・パワーは『聖霊』と名のついた
モンスターが破壊された時、デッキ・墓地から『スピリット』と名
のついたモンスターを特殊召喚することができる！！スピリット・
フィッシュを特殊召喚！！！」

スピリット・フィッシュ / DEF 1000 / レベル 2

「おもしろえ…!!おまえは強いな!!ユウ!!」

デュエルを楽しむのはどれぐらい久しぶりなのだろう。そう、初めてツバキとデュエルをして…そして大会で強い相手と戦ったびに楽しくなる…だが、それも久しぶりだ。

「だったらマシンナーズ・デストロイヤーでスピリット・フィッシュに攻撃!!デストロイバースト!!」

「っ…!!」

機械で出来た悪魔は背負っていたスナイパーライフルが出たばかりのガラスの魚を消し　スピリット・フィッシュは攻撃が当たる前に消えた。

しかも雷帝神がシンクロ召喚時みたいに星になっていた。

「リバーズ罨、緊急同調!!バトルフェイズ中のみ発動できる!!レベル4、雷帝神にレベル2、スピリット・フィッシュをチューニング!!」

先程と同じ様な光景がまた起こっていた。

「精霊よ、魂を一つにし大いなる世界を優雅に泳げ!!」

4 + 2 = 6

「シンクロ召喚!!聖霊魚　アクエアス!!」

フィールドに巨大な鮮やかな青い色の魚が現れた。と、言うかでかすぎる。

いつか見たシゲルのマキロや隼人のビツクコアラよりも大きい。

アクエアス / DEF 2600

「…ギリギリでかわしたか…俺はカードを伏せターン終了!!」

聖霊魚^{せいれいぎょ}アクエアス

効果・シンクロモンスター

星6 / 水属性 / 魚族 / ATK 1000 / DEF 2600

チューナー+チューナー以外のモンスター

このモンスターはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このモンスターが表側守備表示で存在する時、スタンバイフェイズ時に、

墓地の「スピリット」と名のついたモンスターをゲームから除外することによってカードを1枚ドローできる。

自分のエンドフェイズ時に墓地に「スピリット」と名のついたモンスターがない場合、このカードを破壊する。

剣賭 / LP 900 手札0枚 マシンナーズ・デストロイヤー 伏せカード1枚

ユウのターン

「ボクのターン！！ボクはフィールドのアクエアスの効果発動！！
墓地のスプリット・バードをゲームから除外し、カードを1枚ドロ
ー！！！」

手札の2枚のカード、そして伏せてある最後のカード、アクエアス
その中の最高の手は

「墓地の因幡之白兔を除外し、雷帝神を特殊召喚！！」

フィールドに雷帝神が守備表示で現れた。残念だが入試試験の後で
受け継がれる力は抜いた。だから今行える最高の手は

「フィールドの2体のモンスターを生贄に、火之迦具土を召喚！！」

火之迦具土 / ATK 2800

火之迦具土 それはスプリットモンスター最強のカードだ。だが

「残念だが、伏せカードツイン・ボルテックスを発動！！自分フイ
ールド上の機械属性モンスターと相手フィールド上のモンスターを
1体破壊する！！デストロイヤーと火之迦具土を破壊！！」
「！？？自分のモンスターも！！！！？」

ツイン・ボルテックス

通常罾

自分フィールド上の機械属性モンスター1体と
相手フィールド上のモンスターを1体破壊する。

デーモンがなぜか爆発し、その爆風に巻き込まれた火之迦具土が消滅した。

だが、剣賭の場になぜかモンスターが現れた。

「マシンナーズ・デストロイヤーが罾カードの効果で破壊された時、デッキからレベル6以下の機械属モンスターを特殊召喚することができる！！マシンナーズ・ブレードを特殊召喚！！」

マシンナーズ・ブレード

効果モンスター

星6 / 地属性 / 機械族 / ATK 2200 / DEF 1500

このモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、

破壊したモンスターのレベル×200ポイントダメージを与える。

フィールドに巨大な大剣を持った機械兵が現れた。しかもそのモンスターはフレイムウィングマンの様なバーンモンスターだ。

「戦闘で破壊したモンスターのレベル×200ポイントのダメージを与える…が、モンスターがないな。それにこのターンで何とかしないと俺の勝ちだ！！」

「…じゃあ、墓地のスピリット・フィッシュの効果発動！！墓地に

存在するスピリットモンスターをゲームから除外して特殊召喚することができる！！火之迦具土を除外！！」

スピリット・フィッシュ

チューナー・モンスター・効果

星2 / 水属性 / 魚族 / ATK 300 / DEF 1000

墓地に存在するスピリットモンスターをゲームから除外することで墓地からこのカードを特殊召喚することができる。

この効果はデュエル中に1回しか発動できない。

「そして伏せカード、マジック・プランターを発動！！自分のフィールドの永續罫を墓地に送ってカードを2枚ドロウする！」

場のスピリット・フィッシュ、そして手札のあのカードを合わせれば自身のエースを出すことができる。だが、その為に必要なカードが無かった。おそらく今引けなかったら負ける

「（皆：力を貸して…）ドロウ！！来た…！！手札の2体目の雷帝神をゲームから除外し伊弉凧を特殊召喚！！」

伊弉凧 / ATK 2200

フィールドに現れた伊弉凧のレベルは6、そしてスピリット・フィッシュのレベルは2だ。

「これがこのデッキのエース！！レベル6、伊弉風にレベル2、スピリット・フィッシュをチューニング！！」

「レベル…8！？」

シルフィもアクエアスもレベルは6だ。ユウはおそらく…いや、最上級シンクロモンスターの召喚を行おうとしている。

「大いなる魂よ！砕かれし魂と共に光の風を纏いその身を現わせ！！！！」

6 + 2 = 8

「甦れ…シンクロ召喚！！スピット・シルバー・ドラゴン！！」
『ガアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

フィールドに白銀の体に青いラインの入ったドラゴンが現れた。しかもその周りに魂の欠片 共言うべき光の破片が多く舞っていた。

スピット・シルバー・ドラゴン

効果・シンクロモンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK2500 / DEF2000

チューナーモンスター+チューナー以外のモンスター1体以上

自分フィールド上のモンスターがカード効果で破壊されるとき、

手札のチューナーモンスターを1対を墓地に送ることで破壊を無効にする。

フィールド上のカードが除外されるたびにカードを1枚ドロウすることができる。

自分フィールド上のモンスターが手札に戻った時、
相手フィールド上に存在する魔法・罠カードを1枚手札に戻す。

今まで見たシンクロモンスターの中でも一番美しい竜がユウの場に
いる。

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 2500

「そして最後の切り札はこれ！！場のスピリットの復活をゲームか
ら除外してスピリット・リベンジを発動！！墓地のスピリットと名
のついたモンスター1体につき、場のシンクロモンスターの攻撃力
を300ポイントアップする！！」

「墓地には…フィッシュとガードの2体だから600ポイント……
はあ、面白かったぜユウ」

スピリット・リベンジ

通常魔法

自分フィールド上の「スピリット」と名のついたカードを
1枚ゲームから除外して発動する。

自分フィールド上のシンクロモンスターの攻撃力は
自分の墓地の「スピリット」と名のついたモンスターの数×300
ポイントアップする。

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 2500 3100

「さらにスピット・シルバー・ドラゴンの効果で1枚ドロー！！バ

「ユウ!」

「たく、無茶ばかりしやがって…!!」

観客席で見ていたメンバーも勝負が終わると同時にリングへ上がっていた。

が、ツバキはどうしてかシゲルの背後に隠れていた。どうやら

「一つ聞きたい。お前はツバキの事が好きなのか？」

「……うん。好きだよ」

これが恥かしい様だ。と、もう逃げ場がないユウは意を決したようにツバキ（シゲルの前）まで歩いて行った。

「ツバキ」

「ひゃ、ひゃい!」

静かにユウがツバキを呼んだ時、ものすごくツバキが緊張してるよ
うな声で返事をした。

ちなみにシゲルはチラリと明日香とアイコンタクトをかわした後、
リングから降りた。ちなみに十代達は2人に連れて行かれ、リング
上にはユウとツバキしかない。

「…ボクは、ツバキの事が好きです」

「ユ、ユウ…」

「…ボクと付き合ってください!」

そう言ってユウは頭を下げた。ツバキはどうしようかと悩んでいた。いや、そう思ったが悩むまでも無かったのか笑顔で答えた。

「私も…ユウの事が好きです! !よろしくお願いします! !」

観客席

「やっと2人とも素直になったな」

「そうですね。マスターもツバキさんも互いの事を気にして素直じゃなかったからですからね」

観客席のシゲル達の近くにデュエルを傍観していたダークと神楽が今現在の状況を見てそう言っていた。

「まあ、この事は今ここにいるメンバーだけの秘密にしとけ。」

「そういえばお前はどつするんだ?」

嬉しそうに笑いあっているユウとツバキを見てそう忠告した剣賭に十

代が聞いた。

剣賭はツバキを追いかけてきて諦めたみたいだが、このまま以前の生活に戻るのかと思った。

「……今までの自分を見つめ直す為に、俺のできることをする。それが終わったら……この学園に入学しようと思ってる」

「そうか……じゃあ、しばらくさよらなだな」

どうやらユウとのデュエルで何かを感じたのか、負けたのに満足した表情だった。

レッド寮前

一先ず気を失っていたブルー生徒が目が覚めるとうるさいので、三沢と明日香以外の7人（ユウ・シゲル・ツバキ・十代・翔・隼人）はレッド寮のユウとシゲルの部屋へ行くことになり、剣賭と山本は寮の前に停めたヘリで帰るのだったのだが

「ッ……デメエらか……!!」

なのは達3人が待っていた。3人の姿を見た瞬間シゲルから笑顔が消えた。

「ま、待ってください!!」

「話を聞いて!!」

必死になのはとはやてがシゲルを落ち着かせようとしていた。ロス
トログア狙いではないということを理解したシゲルは警戒を解いた。

「ツバキ、あいつらは誰なんだ？」

「……………敵よ」

剣賭の言葉にツバキが答えた。と同時にフェイトが悲しそうな表情
をした。分かっていたことだ。もう仲間に入ることができないのを

「今さら何の用だ…!!」

「ユウ君と剣賭さん、シゲルさんの使ったシンクロモンスターにつ
いて…教えて貰いたいんです」

3人の使ったシンクロモンスター　ストーム・ウィングにマシ
ンナーズ・デストロイヤー、シルフィとアクエアス、そしてスピット・
シルバー・ドラゴンの事だ。

「ふむ…いささかお行儀が悪いようですね。お嬢さん方」

そう言ったのは山本だった。そのことに全員が意味が分からないよ
うだが、山本は続けた。

「私とシゲルのデュエルは周囲に人の気配はありませんでした。それどころかあの場所に入る時に扉の音がどうしても鳴るのです。ではどうしてシゲルがシンクロモンスターを使ったのをお知りになっているんでしょうか？」

「そ、それは…」

山本の言葉にはやては声を詰まらせていた。無関係の人にアースラのブリッジで見てたなんて言えない。かと言って言い訳なんてできる訳も無い。

「そ、それは…前に2人がシンクロモンスターを使ってるのを見たから…」

フェイトが何とか言い訳を考え付いた。はやてとなのはも領しているが、だがそれでは矛盾をしていた。『2人がシンクロモンスターを使っていたから』という理由では

「はて…私は剣賭様のデッキを熟知しているつもりです。ですが…シンクロモンスターというカードは入っていないはずですよ。ということは使う機会があったのは先程のデュエルだけです。お聞きしたいのですが…お嬢さん方はどこで見えていたのですか？」

「それに…ボク達は今日初めてシンクロモンスターを使った…そもそもボクのシンクロモンスターのデッキはさっき急いで仕上げで調整中にデュエルもしたことが無い。じゃあどうして知ってるの？」

完全に逃げ場を失った。なのは達は剣賭と山本が見ているのにもか

かわらず魔法で転移して行った。

「消えた…？」

「……あいつら…隠密行動って知ってるのか…？」

仕方が無いのでツバキが剣賭と山本に事情を説明した。

そして剣賭はそれを聞いて手伝えることがあれば言ってくれと言い、島を後にした。

アースラ

一方転移した3人はというと

「君達は馬鹿か！！無関係の一般人がいる前で魔法を使うなんて！

！」

「」「」「…ごめんなさい」「」「」

クロノに叱られていた。

数日後

「あれ…？シゲルって新聞読むの？」

「ああ。ちよいとばかり気になることがあってな…お、あった」

そう言ってシゲルが指をさした先には大きくこう書かれていた。

《ペガサス・J・クロフォード 新たなカードシリーズ『シンクロ
モンスター』を発表！！》

その下に小さく詳細が乗っていた。

デュエルモンスターの生みの親、ペガサス氏は通常・効果・融合・儀式とは別のモンスターである『シンクロモンスター』を発表した。

ペガサス氏は会見で「新たな可能性としてこのカード達を制作しました。既にテストプレーヤーとして数人のデュエリストに渡し、その調整も終えた」と述べており、シンクロモンスターが新たなデュエルを作り上げるのは予想できる。また

と、ペガサスがシンクロモンスターの制作をしたこと、シンクロモンスターの召喚条件、新たなルール変更について書かれていた。

「へえ…じゃあ、ボク達以外にもシンクロを使う人が出てくるってこと？」

「そうだな。俺とおまえと、ツバキ…そして」

と、シゲルそこまで言った時、ユウが見た畳まれた新聞の一面には大きく書いてあった。

《AW社 大きく会社方針変更か！？紛争地域の停戦に成功！！孤
児34人を保護！！》

「剣賭だな」

これが羽黒剣賭という男の償いだ。そして剣賭が学園に来るのはそう遠くない気がした。

第十八話 プライドの戦い 飛び上がる聖霊 VS 機甲部隊（後書き）

ユウ「皆さん久しぶりです！」

ツバキ「どうして急に私たちがここに…？」

久々にユウとかがいたほうが話が進むと思ったからね…

シゲル「で、剣賭の今後の扱いは？」

いつになるか分からないけどメインキャラとして出る。

ちなみに性格は丸くなったとはいえジャックの様なわがままな感じ
です。

ツバキ「ユウやシゲルはもうシンクロを使ったけど…私は？」

次回使用予定。ただ剣闘獣やスピリットと違い既存カードも出る。

ユウ「……ところで…」

ん？ユウとツバキがくっついて今後キヤツキヤウフフな展開かどう
か？

ツバキ「！？／／／／」

んゝまあ、恋愛系は苦手なんで……どうしてもラブラブな雰囲気
書けないから…

ユウ・ツバキ「（ほっ…）」

玉砕覚悟で行きますb

ユウ・ツバキ「神は死んだ！！」

オリジナルカード

スピリット・バーン

ディストラクシヨンドロー

マシンナーズ・サブレポート
機甲部隊の休憩所

マシンナーズ・バーサーカー

マシンナーズ・リサイクルライン
機甲部隊の生産

スピリット・バード

せいれいちょう
聖霊鳥シルフィ

マシンナーズ・デストロイヤー

マシンナーズ・リサイクルラー

シンクロン・スピリット・パワー

せいれいきよ
聖霊魚アクエアス

マシンナーズ・ブレード

スピリット・フィッシュ

スピット・シルバー・ドラゴン

スピリット・リベンジ

…… オリカが多い… タグに「オリカ大量」って追加するかな…

今回は予想以上のオリカの数に速くもオリカ紹介その2をします。

第十九話 怒るツバキ？ 猛攻のシンクロモンスター（前書き）

はい、今回ツバキの初シンクロ…若干やりすぎた感があります。
それと本来のキャラと離れてしまっキャラが…

それでもOKという方はどうぞ

第十九話 怒るツバキ？ 猛攻のシンクロモンスター

ユウとツバキが恋人になって数日後。

教室

「もう何人かは知っているか知っていると思えますが、来月からデュエルのルールが少し変わるノーネ！」

授業で通達されたルール変更。ルールといってもシンクロと名称変更だけだった。

「まず、モンスターの生贄はリリース、そして生贄召喚はアドバンス召喚と呼び方が変わりマース。そして一番重要なノーネ……」

クロノスがさういってと黒板？壁にプロジェクターで一枚のカードが表示された。

カードの枠が白い暗黒騎士ガイアのような 『大地の騎士ガイア・ナイト』だ。

「この白枠のモンスター……通称は『シンクロモンスター』と呼ばれるカードが新しく導入されるノーネ。チューナーモンスターとチューナー以外のモンスターで召喚されるノーネ。詳しくはカードが導入されたときにするノーネ」

と、クロノスが説明しているときにあるグループでひそひそと話していた。

「なあ知ってるか。すでにこの学園でシンクロモンスター持っているやつがいるらしいぜ」

「マジで？そいつからシンクロ奪えば一躍有名になるんじゃないか？」

昼休み

のような馬鹿生徒が惨殺状態で発見された（死んでいません。気絶してるだけです）

目が覚めた生徒の話によると、なぜかオシリスレッドの男子生徒の服を着た黒髪の女に襲われたと

それを聞いた明日香はバンダナを取ったあの男を思い浮かべた。――
シゲル
応食堂にいた彼に聞いてみると

「……明日香、世の中には知らない事がある」

「……………それは認めてるんじゃない？」

「……………」

屋上

何故かこの頃生徒達のテンションが変に上がっているのをユウは気になっていた。

「どうしたのかな……？」

「あれ？ユウ知らないの？」

ちなみにこの数日の間にツバキがシゲルに料理を教えてもらったのは誰も知らない。

「明日デュエルキングの遊戯さんのデッキが公開されるらしいよ」「あ、そういえばそんな事十代も言ってたな…あ、この卵焼きおいしい」

そう言つてユウは弁当箱のおかずを食べている。

ちなみにシゲルや神楽でも逃げだすほどの甘い空気が漂っているため、2人の周囲には誰もいない。

精霊達は全員十代がシゲルの元に行っており、そのことについても2人が「？」的な反応をしている。

「ユウは見に行く？」

「うん…ちょっと興味があるかな」

購買

「あら〜ごめんなさいね。さっき整理券が全部売れちゃったのよ」「あ、そうですか…」

購買で整理券を買いに来たのだが、トメさんが申し訳なさそうにそう言った。

後で十代に聞いたのだが翔がライイエローの神楽坂という奴と戦つて勝つたらしい。

夜

「で、こうなる訳か」

そう言っているのシゲルで、昇降口の前にユウ、ツバキ、十代、翔、隼人が正座させられている。

どうもユウの様子がおかしいのが気になったシゲルはこっそりユウが出て行くのを見て後を付けた結果、この五人がこっそりと入ろうとしていたのだ。

「はあ……」

「シ、シゲル……」

大きくため息をついたシゲルは時計を見た。時刻はもうすぐ10時になる。手招きをするように昇降口の影に隠れたので、同じように5人も隠れた。

「どうしたの？」

「もうすぐ見回りの警備員が交代で宿舎に戻る。やり過ごしてから行くぞ」

シゲルの言った通り警備員が出てきた。それを見た5人はこっそりと中に入った。

エントランスホール

「まさかシゲルも見たいなんてね」

「悪いか。前からペガサスに話を聞いていたぐらいしかデッキを知らないんだよ…だから興味があるんだ。てか、こっそり行くんなら下調べとかしとけよ」

と言ってるうちに展示室前に到着した。ちなみに少し遠回りしているのは防犯カメラの位置からして、遠回りした方が安全だからだ。

「ん？あ、三沢君…！」

「どうしたんだ、三沢」

6人とは別の方向から三沢がやってきた。隼人の話によるともう三沢は整理券を持っているらしいが

「はは、ちょっとフライングでキングのデッキを拝みに来たんだ」

「なんだよ〜皆考えることは同じなのか「マンマミーヤ…！」何だ今の…？」

十代の言葉と被るようにクロノスの叫び声が聞こえた。

事情を聞くと、デッキを見ようとしたら誰かが持ち去った後だったらしい。

「時間はまだそう立ってない、手分けして犯人を探すぞ！」

海岸（sideツバキ）

「うわぁあぁぁ…！！！！」

「翔君！！」

翔の叫び声に一番早く到着したのはツバキだった。その先にいたのは

「はははは！！！！俺が、凄い…俺がこんなに強い！！」

高笑いをする神楽坂だった。

「翔君、大丈夫？」

「あ、ツバキちゃん…あ、あいつが…」

そうやってデッキを盗んだ犯人が分かった。神楽坂は有名な他人のデッキをコピーした物を使うデュエリストだ。だがそれはあくまで「他人のデッキに似せた自分のデッキ」だ。だが、今回は自分の出は無く

「翔君、デュエルディスクを貸して」

「ほう…俺の最強のデッキに挑む気か？」

自信満々の神楽坂だが、ツバキは怒っていた。デッキは自分が考えたコンボ、戦術、自分が選んだカードで出来ているはずだ。だから

「貴方を…全力で倒す…！！」

他人の力でいい気になっている神楽坂を許せなかった。

「デュエル!!」

ツバキのターン

「私のターン!!フィールド魔法、魔法都市エンディミオンを発動!!」

場が磯から巨大な建物が見える魔法都市へと変わった。それを見て神楽坂は鼻を鳴らすように笑った。

「フン：お前の魔法使いデッキ：使ってみたんだが弱すぎだ。そんな雑魚デッキで俺の勝てるなんて思っなよ!」

確実に10000オーバーのダメージを3ターンで召喚する少年ユウが怒るだろうが今ここにいな

「ツバキ!!」

来ちまった。しかも他のメンバーもエンディミオンを見て居場所が分かり、ツバキと翔、神楽坂を見つけた。だが、先程の言葉をユウは聞こえなかったみたいだ。

「そう…じゃあ、雑魚に勝ってみなさいよ…!!」
「!?(な、なんだこの悪寒は…最強のデツキを持った俺が怯えている…?)」

ツバキの周囲に処刑時のユウと同等の瘴気が現れた。だが、上手くコントロールできないのか

「く、苦しいっす!! ツバキちゃん苦しいっす!!」

いまだにツバキの近くにいる翔にダメージが。が、ツバキは悶々と続けた。

「魔導戦士ブレイカーを召喚! 召喚成功時、魔力カウンターを乗せて攻撃力を300ポイントアップさせる!!」

魔導戦士ブレイカー

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻1600 / 守1000

このカードが召喚に成功した時、

このカードに魔力カウンターを1つ置く(最大1つまで)。

このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

また、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事で、フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を破壊する。

ブレイカー / MO 1 / ATK1600 1900

「カードを2枚伏せターン終了!!」

ツバキ / LP4000 手札3枚 ブレイカー 伏せカード2枚

神楽坂のターン

「俺のターン!!俺は魔法カード融合を発動!!手札のバフォメットとガゼルを融合!!現れる有翼幻獣キマイラ!!」

有翼幻獣キマイラ

融合・効果モンスター

星6 / 風属性 / 獣族 / 攻2100 / 守1800

「幻獣王ガゼル」+「バフォメット」

このカードが破壊された時、墓地にある「バフォメット」か

「幻獣王ガゼル」のどちらか1枚をフィールドに特殊召喚する事が

できる。

(表側攻撃表示か表側守備表示のみ)

場に2つの頭と翼を持つモンスターが現れた。それと同時にエンデイミオンに魔力カウンターが乗った。

キマイラ / ATK 2100

エンデイミオン / MO 1

「バトル！！キマイラで「威嚇する咆哮を発動！！」チツ…カードを2枚伏せ、ターン終了！！」

神楽坂 / LP 4000 手札1枚 キマイラ 伏せカード2枚

ツバキのターン

ツバキのターンだが…明らかにいつもと違う。ふとシゲルはあることを思い出していた。

『普段と決闘^{デュエル}と性格の変わる二重魔法使い(デュアルマジシャン)』

恐らくシャマルの言っていた意味はこれだろう。処刑モードのユウの様に本気になったツバキ 　どうなるのか予想するのも怖い。

「私のターン！！永続罫漆黒のパワーストーンを発動！！発動時パワーストーンにカウンターを3つ乗せる！！そして魔法カードワン・フォー・ワンを発動！！手札のモンスター1体を生贄に捧げ、レベ

ル1のチューナーモンスターサニー・ピクシーを特殊召喚！！」

ワン・フォー・ワン

通常魔法（制限カード）

手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。

手札またはデッキからレベル1モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

サニー・ピクシー

チューナー（効果モンスター）

星1/光属性/魔法使い族/攻 300/守 400

このカードが光属性シンクロモンスターの

シンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、

自分は1000ライフポイント回復する。

エンディミオン/M1 2

サニー・ピクシー/ATK300

フィールドに現れた妖精の様なモンスター、だが攻撃力はたったの300だ。

「フン…そんな雑魚…待て、チューナーだと…！！！」

つい本日の授業で聞いた『シンクロモンスター』と『チューナーモンスター』

学園で数人持っているという噂は神楽坂も知っていた。

「私のデッキを…侮辱するのは許さないわ…ブレイカーの効果で右の伏せカードを破壊する!! マナ・ブレイク!!」

「クツ…(ミラー・フォースが…)」

ブレイカー / M 1 0 / ATK 1900 1600

「場の漆黒のパワーストーンの魔力カウンターを2個取り除き、マジカル・イーターを特殊召喚!! マジカル・イーターは場の魔力カウンターを任意の数取り除いて特殊召喚することができる。そしてレベルは、この時取り除いた数と同じとなる」

マジカル・イーター

効果モンスター

星1 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK 0 / DEF 0

このモンスターは自分フィールド上の魔力カウンターを任意の数取り除き特殊召喚することができる。

このモンスターのレベルは取り除いた魔力カウンターと数と同じになる。

マジカル・イーター / ATK 0 / 1 2

フィールドにパワーストーンのような黒い球体が現れた。

「レベル2、マジカル・イーターとレベル4、魔導戦士ブレイカーにレベル1、サニー・ピクシーをチューニング!!」

「ば、馬鹿な…シンクロ召喚…だと…」

「大いなる魔導師よ、人類の英知を与えたまえ！」

2 + 4 + 1 = 7

妖精の輪をくぐった2体のモンスターが計6つの星となり、光り輝いた。

「シンクロ召喚！！ライブラリー・マジシャン！！」

ライブラリー・マジシャン / ATK 2700

フィールドにいくつもの本を持った年老いた魔法使いが現れた。さらにサニー・ピクシーの効果でライフが回復した。

ツバキ / LP 4000 5000

ちなみにまだ、ツバキは通常召喚を行っていない。

「場の永続罫、漆黒のパワーストーンを破壊し墓地のセメタリー・マジシャンを特殊召喚！！セメタリー・マジシャンはフィールド上にシンクロモンスターが存在する時場の永続罫を破壊し特殊召喚することができる」

セメタリー・マジシャン

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK 2000 / DEF 1500

自分フィールド上にシンクロモンスターが存在するとき、

自分フィールド上の永續罫を破壊し墓地に存在する
このカードを特殊召喚することができる
この効果で特殊召喚した場合、フィールドから離れる時除外する。

「そして魔力カウンターが乗ったカードが破壊された時、エンデイ
ミオンにそのカウンターを乗せることができる！！そして死者蘇生
を発動！！」

エンデイミオン/M2 4

「墓地のサニー・ピクシーを特殊召喚！！そして、レベル5、セメ
タリー・マジシャンにレベル1、サニー・ピクシーをチューニング
！！」

「またシンクロ召喚だ！？」

再びシンクロ召喚を行うツバキに神楽坂は驚いていた。ちなみに先
程から黙っているギャラリーは

「…なあ、ユウ」

「どうしたの…？」

「お前って…シンクロデッキの作成手伝ったか…？」

「……………一人でやったんだ…」

「おい、翔！！しっかりしろ！！」

「あははは…兄貴が2人もいる」

「戻るんだな！！翔！！」

「しっかりしろ！！」

とな感じた。ちなみになぜかツバキはシンクロカードを受け取る
一日でデッキを作り上げたのだ。なので剣賭が来た日ももうこのデ
ッキは持っていた。

「光の閃光が相手の守りを破壊する！！落ちろ雷鳴！！」

5 + 1 = 6

「シンクロ召喚！！エクスペローシブ・マジシャン！！」

フィールドに真つ白の魔導服に身を包んだ閃光の魔法使いが現れた。

エクスペローシブ・マジシャン

シンクロ・効果モンスター

星6 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻2500 / 守1800

チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター1体以上

自分フィールド上に存在する魔力カウンター2つを取り除く事で、
相手フィールド上に存在する魔法・罨カード1枚を選択して破壊す
る。

エクスペローシブ・マジシャン / ATK2500

「ライブラリー・マジシャンの効果発動！！シンクロモンスターが
シンクロ召喚に成功した時、カードを2枚ドロウする！！さらにサ
ニ・ピクシーの効果でライフ回復！！」

ライブラリー・マジシャン

効果・シンクロモンスター

星7 / 魔法使い族 / 光属性 / ATK2700 / DEF2400

チューナーモンスター・チューナー以外の魔法使い族モンスター2
体以上

このモンスターはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが表側表示で存在する時、

シンクロモンスターがシンクロ召喚に成功した時カードを2枚ドロ
ーする。

ツバキ / LP5000 6000 手札0枚 2枚

「手札から魔法カード、魔力掌握を発動！！エンディミオンにカウ
ンターを乗せ、デッキから魔力掌握を手札に加える、そして自身の
効果で更にカウンターを乗せる！！」

エンディミオン / M4 6

「エンディミオンのカウンターを6つ取り除き、神聖魔導王エンデ
イミオンを特殊召喚！！効果で死者蘇生を手札に加える！！」

エンディミオン / M6 0

エンディミオン
神聖魔導王 / ATK2700

「手札の魔力掌握を墓地に送りその伏せカードを破壊する！！」

「ッ……！！（炸裂装甲が……！！）」

これで神楽坂の場にはキマイラしかいなかった。だが、手札には死

者蘇生だけだ。

このターンで終わるなんて

「死者蘇生！！サニー・ピクシーを特殊召喚！！そしてレベル7神聖魔導王 エンディミオンにレベル1、サニー・ピクシーをチューニング！！」

1ターンに3回目のシンクロ…最早神楽坂は少し諦めているようだ。

「魔導師達の祈りを元に、今ここに混沌の赤き力呼び覚ませ！！シンクロ召喚！！」

7 + 1 = 8

「漆黒を包みこめ！！カオス・レッド・ドラゴン！！」

『グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！』

フィールドに赤い体で黒い翼を持つ巨大な龍が現れた。その威圧感に 神楽坂は怯えていた。

カオス・レッド・ドラゴン/ATK3000

「攻撃力3000だ！！」

「モンスターの能力は攻撃力じゃない…シンクロ召喚に成功したのでライブラリー・マジシャンの効果でカードを2枚ドロー！！さらに手札のテラ・フォーミングを墓地に送って相手の墓地のバフオメットをゲームから除外する！！」

「なに！？攻撃力3000に除外能力だ！！！！」

ちなみにまだツバキは通常召喚を行っていない（大事なので2回言いました）

そして ツバキがこのターンから通常召喚を行っていない。
いや、次のターンなんて来なかった。

「バトル！エクスポローシブ・マジシャンでキマイラに攻撃！！ラ
イトニング・エクスポロージョン！！」

「うわああああ！！！！」

神楽坂 / LP 4000 3600

キマイラが破壊され、そして効果でガゼルが守備表示で現れた。
だが、ツバキにそんなのは関係なかった。

ガゼル / DEF 1200

「カオス・レッド・ドラゴンでガゼルに攻撃！！ディストラクショ
ン・フォース！！」

「ツ…ガゼルが…更にカオス・レッドは貫通能力がある！！」な
っうわああああああ！！！！」

カオス・レッド・ドラゴン

効果・シンクロモンスター

星8 / ドラゴン族 / 闇属性 / ATK 3000 / DEF 2500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、手札の魔法カードを墓地に送ることで

相手の墓地のカードを1枚ゲームから除外することができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃
力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

カオス・レッドの闇の拳にガゼルは破壊され、更にその余波が神楽坂にも響いた。

神楽坂 / LP 3600 1800

もう神楽坂の場には何も無い。そして、もう自身を守る手も残っていない。

「ば、馬鹿な…俺の…最強のデッキが…!!」

「……馬鹿ですね」

信じられない様に呟いた神楽坂にツバキが呆れたようにそう言った。それにカチンときた神楽坂はツバキにつかかってきた。

「っ!!シンクロモンスターなんて卑怯な手を使いやがって!!そんなせこいカードに俺が負けるなんて「君の負けだよ」なっ…!!」

自身の負ける理由をツバキがシンクロモンスターを使う所為だと喚びだした。だがユウがそれを抑えた。

「…聞きたいけど、そのデッキの全部のコンボ、全部のカードの使い方、全部のカードを覚えてるの?」

「っ…!!武藤遊戯の使ったコンボは全部覚えて「ボクやツバキは自分のデッキの全部覚えてるよ」っそれが何だっっていんだ!」

一体何を言いたいのか分からないという様に神楽坂が手札を地面に投げつけた。その手にはブラックマジシャン、黒魔術復活の棺、死者転生があった。その3枚があればブラックマジシャンを召喚することができるはずだった。

「そのカード…死者転生を使わなかったのはなんで？」

「エンディミオンにカウンターが乗る、キーカードのどちらかが落ちる、墓地に有能なカードが無い、そんなのでこのカードが使えるか！！」

「いや、それは違うぞ神楽坂」

神楽坂はそう言うが、流石の三沢はコンボに気付いた。

「先程のターン、モンスターを召喚していないから死者転生でブラックマジシャンを墓地に送りガゼルを手札に加え召喚しておく、黒魔術復活の棺が使えるぞ」

「なっ…!!!」

「ね？君はそのデッキの事を全く知らないんだ。だって『君のデッキじゃないから』」

「…!!!」

ユウの言葉が神楽坂に響いた。『自分のデッキじゃない』
確かにそうだ。他人のデッキで戦い、自己満足になっていた。

そして自分はこのデッキの事を何も知らない。

「…………ラストバトル。ライブラリー・マジシャンで直接攻撃！！」
「うわああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

神楽坂 / LP1800 0

直接攻撃を喰らった神楽坂は負けてしまった。

「人のデッキを使って、人のデッキを馬鹿にして…そんな人にデュ
エリストを名乗る資格はない！！」

「っ…………俺は…何処で間違えたんだ…」

そう言っつて神楽坂は片膝をついた。が

「お前が弱いからだ」
「うぎゃあ！！」

神楽坂の背後にいた紅いパーカーの様な物を着た男性が神楽坂を蹴

り飛ばした。

「神楽坂!!」

「フン：このデッキを使えこなせない雑魚が…」

そう言った男性の手には武藤遊戯のデッキがあった。一方三沢とツバキが神楽坂の容体を見た。が、どうやら気を失っていた。

「テムエ…魔導師か…!?!」

シゲルの言葉に男性は心底驚いた顔をしていた。が、すぐに分かった様に笑った。

「そうか…テムエ等が志度を殺ったのか…あの馬鹿がやられるって聞いたからにはよっぽどのランクを持つてる奴かと思ってたら…ただの雑魚じゃねえか」

そう言って男性はどこからかディスクを取り出すと腕にはめて武藤遊戯のデッキをセットした。

「テムエ等を殺って、ロストロギアを貰ってやんよ!!」

「させるかよ!!俺が相手だ!!」

「まして」

そう言って十代が前に出ようとするのをシゲルが止めた。そしてその目線の先には無言でディスクを構えたユウがいた。

「…ほう。活きのいいガキがいるな…俺は庄司警都だ。テメエの名はなんだ？」

「オシリスレッド一年の聖牙せいがゆう」

こうして2人目の魔導師、終夜とのデュエルが始まった。

第十九話 怒るツバキ？ 猛攻のシンクロモンスター（後書き）

というわけでツバキ覚醒？状態ですが……………

ユウ「……………」

シゲル「……………」

ツバキ「な、何か言っつてよ！！！！」

ユウ「ツバキ…あそこまで…」

作っているうちにどんどんシンクロのパターンが浮かんで…そして
1KILL…

ツバキ「……………！！！！」

コンボを出すためにライブラリーを作ったあたりから何かおかしく
なった…

シゲル「てか、確実にハイパーライブラリアンの強化版だろ…」

うん、て言っても魔法使い族2体以上だから召喚条件は少し厳しい
けどね。

それならアーカナイトやテンペスターのほうがいい、ってパターン
になるしね。

ユウ「そういえば…ボクのスピットもそうだけどなんでドラゴン族
が？」

深い意味はない。ただ単にシグナー風にそれぞれにドラゴンを作っ
てみただけ。

精霊は宿るかもしれないけどシグナーVSダークシグナーの様な展
開にする予定は今のところない。

ちなみにシゲルや剣賭も持っている予定。いつ出るかは未定。

シゲル「神楽坂…なんかアニメとキャラが違うな」

今後改心してサブレギュラーで出す予定。誰かのデッキを真似るキ

ヤラは普通考えないから面白そうだから。

とはいってもアニメで出なかった場面でも出すかもしれない、ということ。メインで出番が増えるかもしれないし、もしかしたら今後一切出ないかもしれない。

ただ単にアニメではチヨイ役でこの作品メイン候補って感じかな。

シゲル「綾小路は？」

キャラ的に気に入らないから拒否。

オリジナルカード

マジカル・イーター

ライブラリー・マジシャン

セメタリー・マジシャン

カオス・レッド・ドラゴン

次回はユウVS警都です。

第二十話 精霊の危機 魔術師の戦略 VS 決闘王（前書き）

今回のサブタイトル：ただ単にいいのが浮かばなかったただけです。そして、最近言われたのが管理局の出番が少ないと…

そしてやはりというべきか、管理局はチヨイ役だった。

第二十話 精霊の危機 魔術師の戦略 VS 決闘王

アースラ

「クロノ君！！新たな時空犯罪者が出てきたよ！！」

「なに！？クツ…仕方ない、なのはとはやてを「クロノ、少し待ちなさい」かあ、艦長？」

クロノが現場になのはとはやてを送り出そうとしたが、それをリンデイが引きとめた。

そしてメインモニターにはユウがディスクを構えて立っていた。

「…彼に任せましょう」

海岸

ユウと対峙してる警都のデッキはさっき神楽坂から奪った武藤遊戯のデッキだ。

おそらく神楽坂以上の戦術を行ってくるだろう。

「…デュエル！！」

掛け声と共に警都の周囲からうすい膜状の何かが出てきた。志度の時と同じ『ダメージが実体化する』物が現れた。

「このドームの意味は知っているな？」

「っ…ボクのターン!!!」

ユウの手札…あまり好ましくなかった。スピリットの最大のデメリットである『手札へ戻る』効果を無効化にするスピリット・フィールドや伊弉凧等の補助カードが無い。
ということはスピリットは毎ターン手札に戻る。

「裏守備モンスターを召喚し、カードを2枚伏せてターン終了!!!」

ユウ/LP4000 手札3枚 裏守備モンスター 伏せカード2枚

警都のターン

「俺のターン!!!手札から魔法カード融合を発動!!!手札のブラックマジシャンとバスターブレイダーを融合!!!」
「っ!!!」

初っ端から融合を行った。だが素材がキマイラではない。
ブラックマジシャン
バスターブレイダー
と伝説の竜殺し…それは 黒魔術師

「融合召喚!!!超魔導剣士ブラック・パラディン!!!」

最強の龍破壊の魔導師だ。

超魔導剣士・ブラック・パラディン

星8 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2900 / 守2400

「ブラック・マジシャン」+「バスター・ブレイダー」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

手札を1枚捨てる事で、魔法カードの発動を無効にし破壊する。

このカードの攻撃力は、フィールド上及びお互いの墓地に存在するドラゴン族モンスター1体につき500ポイントアップする。

ブラック・パラディン / ATK2900

「バトル、ブラック・パラディンで攻撃!! 超魔導無影斬!!」

「っ…!!」

いとも簡単に壁モンスターが破壊されてしまった。流石にスピリット単体ではきつい相手だろう。

「カードを2枚伏せターン終了だ」

警都 / LP4000 手札1枚 ブラック・パラディン 伏せカード2枚

ユウのターン

「ボクのターン!! 手札からテラ・フォーミングを発動し、スピリット・フィールドを手札に加えてそのまま発動」ブラック・パラディンの効果発動!! 手札のカードを墓地に送り魔法カードの発動を無効にする!!」っ…!!」

最悪のパターンだった。スピリット・フィールドは一枚しか持っていないため、もうデッキには残っていない。

「相手の場にしかモンスターが存在しない時、手札のスピリットモンスター^{シンロン}神龍はリリース無しで召喚することができる!!」

^{シンロン}
神龍

スピリットモンスター

星5 / 炎属性 / ドラゴン族 / ATK1500 / DEF2000

このカードは特殊召喚できない。

相手フィールド上にのみモンスターが存在する場合、

このモンスターはリリース無しで召喚することができる。

このモンスターの召喚成功時、デッキ・手札からレベル3以下のチューナーモンスターを特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、

この効果を発動したターン、このモンスターはシンクロ召喚の素材にはできない。

神龍 / DEF2000

「だが、ブラック・パラディンの効果でドラゴン族が現れたことにより攻撃力が上がる」

ブラック・パラディン / ATK2900 3400

「神龍の効果発動!! 召喚成功時、デッキか手札からチューナーを特殊召喚できる!! スピリット・フィッシュを守備表示で召喚!! ターン終了!!」

スピリット・フィッシュ/DEF1000

ユウノ手札3枚 神龍 スピリット・フィッシュ 伏せカード2枚

警都のターン

「俺のターン、俺はこのままバトルフェイズに入る。ブラック・パラディンでスピリット・フィッシュに攻撃！！超魔導無影斬！！」

ブラック・パラディンの杖の先から発生した衝撃波がスピリット・フィッシュへ放たれたが

「伏せカード発動！！」

「っ！？消えた！？」

攻撃が当たる瞬間スピリット・フィッシュが消え、更には神龍も何処かへ消えていた。

「緊急同調！！このカードはバトルフェイズ中のみシンクロ召喚を行うことができる！！レベル5の神龍にレベル2、スピリット・フィッシュをチューニング！！」

空中に飛び上がっていた神龍は2つの緑のリングをくぐると体が透け始めた。

「精霊に仕えし魂よ、今ここに聖霊として呼び覚ませー！！」

5 + 2 = 7

「シンクロ召喚！！導け、聖霊師 ネファルロ！！」

場に真つ白の修道服に身を包み、細長い杖を持った白い長髪の美女が現れた。

ネファルロ / ATK 2700

だが、攻撃力はブラック・パラディンに届かない。しかしユウにはある狙いがあった。

「……（あの伏せカード、恐らく攻撃力上昇系のカード）…だが、バトル続行！！ブラック・パラディンで攻撃！！」

「伏せカード、聖地の守護陣を発動！！墓地にフィールド魔法が存在する時、そのフィールド魔法をゲームから除外してモンスター1体の攻撃力を800ポイントアップする！！」

聖地の守護陣

通常罫

自分の墓地にフィールド魔法があり自分フィールド上にレベル6以上のモンスターが表側攻撃表示で存在する時のみ発動することができる。

墓地のフィールド魔法を除外し、自分フィールド上のモンスターの装備カードとして扱う。

装備されたモンスターは攻撃力が800ポイントアップする。

装備モンスターが破壊される時、代わりにこのカードを破壊する。

ネファル口 / ATK 2700 3500

ネファル口の攻撃力がブラック・パラディンを越えた だが、
警
都はそれを予測していた。

杖の先に魔力を溜めた魔法をネファル口が放つが

「残念だが伏せカード、融合解除を発動！！ブラック・パラディンをエクストラデッキに戻し、墓地よりブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーを特殊召喚する！！」

融合解除

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在する

融合モンスター1体を選択してエクストラデッキに戻る。

さらに、エクストラデッキに戻したこのモンスターの融合召喚に使用した

融合素材モンスター1組が自分の墓地に揃っていれば、この1組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

龍破壊の魔導師が消えた。 更に黒魔術師と伝説の竜殺しが現れた。
ブラックマジシャン バスターブレイダー

ブラック・マジシャン / ATK 2500

バスター・ブレイダー / ATK 2600 3100

ドラゴンはユウの墓地に1体だけいるため、バスター・ブレイダー

の攻撃力は500ポイントアップした。

「けど、ネファル口には勝てない!!」

「もう一枚の伏せカードを発動!! デイメンション・マジック!!」

デイメンション・マジック

速攻魔法

自分フィールド上に魔法使い族モンスターが

表側表示で存在する場合に発動することができる。

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、

手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。

その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊することができる。

そのカードを見たツバキの顔色が変わった。

「ユウ!! そのカードは、自分の場の魔法使い族モンスターを手札の魔法使いを特殊召喚するカードよ!!」

「なんだ? それだけならまだ…」

ツバキの言葉に十代が何処が脅威なのか分からない様に言った。だが横にいた三沢が更なる補足をした。

「いや、それだけではなくその後、相手のモンスターを破壊する効果もある…!!」

「え!? それって…!!」

翔がこの後どうなるのか分かった様だ。

「場のブラック・マジシャンを生贄に手札のブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚する!!!」

ブラック・マジシャン・ガール

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2000 / 守1700

お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」

「マジシャン・オブ・ブラックカオス」1体につき、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

場に現れたブラック・マジシャン・ガールは何処か元気が無い様にうつろな表情をしていた。おそらく 精霊と似た何かが宿っているのだろうか。

483

「うっ!!ボクのアイドルっす!!」

「翔、殴られなくなったら黙ってる」

「これから『覗き君』って呼ぶよ」

「ごめんなさいっす!!!」

シゲルとツバキの言葉に翔は土下座をする勢いで2人に謝った。

「そしてディメンション・マジックの効果でネファル口を破壊する

「!!」

「聖地の守護陣の効果発動!! 装備されたこのカードを破壊することとで、装備モンスターの破壊を無効にする!!」

なんとか、デイメンション・マジックの破壊を回避したが聖地の守護陣が無くなったネファルロは弱体化した。

ネファルロ / ATK 3500 2700

「墓地にブラック・マジシャンとマジシャン・オブ・ブラックカオスがいるためブラック・マジシャン・ガールの攻撃力は300ポイントアップする!!」

ブラック・マジシャン・ガール / ATK 2000 2600

「なっ!!? いつの間に!!?」

「先程のブラック・パラディンのコストでな。バトル!!」

バスター・ブレイダーでネファルロに攻撃!! 破壊剣一閃!!」

バスター・ブレイダーが大剣を振り上げてネファルロに襲いかかった、だが

「ネファルロの効果発動!! 1ターンに一度、墓地のカードを一枚除外することで効果が変化する!! 墓地の聖地の守護陣を除外する! 罠カードは相手の攻撃を無効にする!!」

せいれいし
聖霊師

ネファルロ

効果・シンクロモンスター

星7 / 光属性 / 魔法使い族 / ATK 2700 / DEF 2000
チューナーモンスター + チューナー以外のモンスター1体以上
1ターンに1度墓地に存在するカードを除外し以下の効果を得る。

モンスター

手札のモンスターを任意の枚数デッキに戻してシャッフルし、その後デッキに戻した数と同じ枚数ドローできる。

魔法

相手魔法・罨ゾーンに存在するカードを1枚破壊する。

罨

相手モンスターとの戦闘を1度だけ無効にする。この効果は相手ターンでも発動することができる。

ネファル口の周囲に紅いバリアが現れた。それがバスター・ブレイダーの攻撃を防いだ。

「なんだと…!!クツ…俺はこのままターン終了!!」

警都 / LP 4000 手札0枚 バスター・ブレイダー ブラック・マジシャン・ガール

「ボクのターン!!ネファル口の効果発動!!墓地の神龍を除外して、手札のモンスターを任意の枚数デッキに戻してシャッフル!その後同じ枚数ドローする!!」

デッキに2枚戻したユウだが、別に手札が悪いという訳じゃなかった。問題は墓地のドラゴン族を減らすことだった。

「墓地のドラゴン族が減った事によってバスター・ブレイダーの攻撃力は下がる！！バトル！！ネファル口でバスター・ブレイダーに攻撃！！断罪の魔法！！」

「クツ…！！」

バスター・ブレイダー / ATK 3100 2600
讐都 / LP 4000 3900

ネファル口の掲げた杖の先から一筋の衝撃波がバスター・ブレイダーを切り裂くと悲鳴を上げてバスター・ブレイダーは消滅した。そして、ドームの影響か讐都の服の一部が焦げていた。

「更にカードを伏せ、ターン終了！！」

ユウ / LP 4000 手札3枚 ネファル口 伏せカード

讐都のターン

「俺のターン！！ブラックマジシャンガールを守備表示に変更し、カードを伏せターン終了！！」

ブラック・マジシャン・ガール / ATK 2600 DEF 1700

流石に攻撃力2800のネファル口を超えるモンスターはそうそういないはずだ。

それに伏せカードがあったとしても心配ないからだ。

警都 / LP3900 手札0枚 ブラック・マジシャン・ガール
伏せカード1枚

ユウのターン

「ボクのターン！！ネファルロの効果発動！！墓地のテラ・フォーミングをゲームから除外してその伏せカードを破壊する！！」
「伏せカードはブービー・トラップだ！！このカードがカード効果で破壊された場合、デッキからカードを一枚セットする！」

ブービー・トラップ
通常罫

セットされたこのカードが相手のカード効果によって破壊された場合、

自分のデッキの通常罫を一枚裏向きのままセットする。

そのカードが発動に成功した場合カードを一枚ドローする。

「っ…かわされた…バトル！！ネファルロでブラック・マジシャン・ガールに攻撃！！断罪の魔法！！」
コンヴァクシオン

先程と同じ様に一筋の衝撃波がブラック・マジシャン・ガールへ向かった。

だが当たる寸前に薄い膜状のガラスに当たった。

「残念だが、ブービー・トラップで伏せたカードは聖なるバリア・

ミラーフォースだ！！効果によりネファルロを破壊する！！」

「ネファルロ！！」

バリアに当たった衝撃波は暴発するとネファルロまでその余波が届き、破壊された。

さらにブービー・トラップにはもう一つ効果があった。

「伏せた罠カードが発動に成功した場合、俺はカードを一枚ドロウできる」

「クツ…スピリット・ディフェンダーを守備表示で召喚！！ターンを終了する！！」

スピリット・ディフェンダー / DEF 1000

ユウ / LP 4000 手札3枚 スピリット・ディフェンダー 伏せカード

警都のターン

「俺のターン！！」

スピリット・ディフェンダーは1ターンに一度、戦闘では破壊されない効果を持っている。その為このターンはダメージは無いと思っていた。

スピリット・ディフェンダー

チューナー（効果モンスター）

星4 / 炎属性 / 戦士族 / ATK 800 / DEF 1000

このモンスターは1ターンに1度戦闘では破壊されない。

「手札から魔法カード、テイクオーバー・ファイブを発動！！デッキからカードを5枚捨てる！！」

「墓地にカードを送った！？」

テイクオーバー・ファイブ

通常魔法

自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送る。

自分のドローフェイズにこのカードが墓地に存在する場合、

このカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを1枚ドローする。

「テイクオーバー・ファイブ」のカード及び効果は1ターンに1度しか発動できない。

墓地にカードを置くのがこのカードの狙いだった。落とされたカードはクイーンズ・ナイト、一磁石の戦士（マグネット・ウォーリアー）、魂の綱、翻弄するエルフの剣士、バースターカード狂戦士の魂だ。

「手札から魔法カード、貪欲な壺を発動！！墓地のバスター・ブレイダー、クイーンズ・ナイト、磁石の戦士、翻弄するエルフの剣士、マジシャン・オブ・ブラックカオスをデッキに戻し、カードを2枚ドロー！！」

そして警都の引いたカードはまざまざだった。

「ブラック・マジシャン・ガールを攻撃表示に変更し、ビッグ・シールド・ガードナーを守備表示で召喚」

ビッグ・シールド・ガードナー

効果モンスター

星4/地属性/戦士族/攻 1000/守2600

裏側表示のこのモンスター1体を対象とする魔法カードの発動を無効にする。

その時、このカードは表側守備表示になる。

攻撃を受けた場合、ダメージステップ終了時に攻撃表示になる。

ブラック・マジシャン・ガール/DEF1700 ATK2300

ビッグ・シールド・ガードナー/DEF2600

「カードを伏せ、ターン終了!」

警都/LP3800 手札0枚 ブラック・マジシャン・ガール

ビッグ・シールド・ガードナー 伏せカード1枚

ユウのターン

「ボクのターン!!スピリットモンスター、雷帝神を攻撃表示で召喚!!」

「かかったな!!伏せカードオープン!!」

場に長剣を持った精霊が現れるが、その瞬間警都の伏せてあったカードが発動された。

場に現れたのは赤い棺の様なものだった。

「あれは…黒魔術復活の棺!!」

「効果はなんだ？」

棺を見たツバキはそう声を上げるとシゲルが聞いた。どうやら魔法使い族関連のカードはシゲルよりもツバキの方が詳しい様だ。

「相手がモンスターを召喚した場合、そのモンスターと自分の場のモンスターをリリースし墓地の魔法使い族モンスターを特殊召喚する」

「……またブラック・マジシャンが現れるか」

黒魔術復活の棺

通常罫

相手モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する

魔法使い族モンスター1体を選択して発動する事ができる。

自分フィールド上のモンスター1体と相手フィールド上のそのモンスター1体をリリースする。

その後、選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

場に現れた雷帝神とビッグ・シールド・ガードナーが光の球体となつて棺に吸い込まれていった。そして棺が閉まる。

「俺の場のビック・シールド・ガードナーとお前の場の雷帝神をリリースしてブラック・マジシャンを特殊召喚!!」

開いた棺の中に腕を胸の前に組んでいるブラック・マジシャンが現れた。

そしてブラック・マジシャン・ガール墓地のブラック・マジシャンが居なくなつたため攻撃力が元に戻つた。

ブラック・マジシャン / ATK 2500

ブラック・マジシャン・ガール / ATK 2300 2000

「っ…死者蘇生を発動!!ビッグ・シールド・ガードナーを特殊召喚!!」

ユウの場に巨大な盾を腕に装備した戦士が現れた。

ビッグ・シールド・ガードナー / DEF 2600

「場のレベル4、ビッグ・シールド・ガードナーにレベル4、スピリット・ディフェンダーをチューニング!!」

巨体の戦士が緑の輪に、巨大な盾を持つ戦士が4つの星へと変わった。

「大いなる魂よ!砕かれし魂と共に光の風を纏いその身を現わせ!!」

4 + 4 = 8

「甦れ…スピット・シルバー・ドラゴン!!」

場に現れたユウの新たなエースモンスター その姿はシンクロモ

ンスターの中でも群も抜いて美しく輝いている。

「手札からスピリット・ドローを発動!! 墓地の雷帝神をゲームから除外してカードを2枚ドロー!!」

ユウノ手札1枚 3枚

だが、スピット・シルバーの攻撃力はブラック・マジシャンと同じだ。あとは相手との出たところ勝負しかない。

「バトル!! スピット・シルバー・ドラゴンでブラック・マジシャン・ガールに攻撃!! スピリット・ブラスト!!」
「クッ…!!」

警都 / LP 3900 3400

スピット・シルバー・ドラゴンの放った白銀の炎にブラック・マジシャン・ガールは包まれて破壊された。

ちなみに警都の視界の隅に、残念そうな顔をしてる翔を睨んでいるシゲルがいたのは気のせい ではないな。

「カードを伏せ、ターン終了!!」

ユウノLP 4000 手札2枚 スピット・シルバー・ドラゴン
伏せカード2枚

警都のターン

「俺のターン!! 俺はテイクオーバー・ファイブの効果発動!! ド

ローフェイズ時にこのカードを除外し、カードを1枚ドロー!!」
警都はカードを補充した。が、ユウは少しやばい状況に陥っていた。流石に簡単にライフを0にされることは無いだろうが、すぐにでも自軍のモンスターがやられる可能性があった。

「手札から装備魔法、まじゅつ魔術の呪文書じゅもんしょをブラック・マジシャンに装備!! 攻撃力を700ポイントアップさせる!!」

魔術の呪文書まじゅつじゅもんしょ

装備魔法

「ブラック・マジシャン」「ブラック・マジシャン・ガール」のみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は700ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分は1000ライフポイント回復する。

ブラック・マジシャン / ATK 2500 3200

「そして魔導師の宝札を発動!! 墓地のブラック・マジシャン・ガールをデッキに戻し、カードを2枚ドロー!!」

魔導師の宝札

通常魔法

フィールド上に「ブラック・マジシャン」が存在する時のみ発動できる。

墓地の「ブラック・マジシャン・ガール」もしくは「マジシャン・オブ・ブラックカオス」をデッキに戻し、シャッフルする。その後2枚ドローする。

疾風の暗黒騎士ガイアの放った槍の攻撃でユウは吹き飛ばされてしまった。しかもダメージの余波か、服がボロボロになっていた。

「俺はこれでターン終了だ!!」

警都 / LP 3400 手札 0枚 ブラック・マジシャン 疾風の暗
黒騎士ガイア 魔導師の力
伏せカード 1枚

ユウのターン

ユウのターンになったが、立ちあがったユウはフラフラだった。一気にライフを大幅に削られ、実際のダメージとして受けた量は半端無かった。

だが、その眼にはまだ闘志が残っていた。

「ボクのターン…!! (これで…何とか勝てる…!!) ボクは…う
…!!」

手札のカードを発動させようとするが、指先に力が入らなかった。ダメージが思っていたよりもひどく、立っているのがやっとだった。

その様子を見た警都は大きなため息をついた。

「はあ…どうやらもう限界の様だな。…興ざめだ…まあ、次は『あの女』を狙うとするか」

『あの女』？今この場にいる女は　ツバキしかいない。そして狙うということは、ツバキとこの『実際にダメージを負うドーム』で戦うということだ。

自分やシゲルだけでもフラフラになるこの戦いで　下手をしたら死ぬ確率だって

「…………え…………」

「ん？なんか言ったか？」

そう考えている途中だったが、考えよりも言葉が先に出た。

「だまれ…！！ツバキに…手を出させない…！！」

「ッ！？（何だ…この威圧感は…あの『赤い目』は！？）」

ツバキを守るため

自分の体力を考えると

今ここで、この夕

ーンでケリをつける。

「手札からスピリット・バードを通常召喚!!!スピリット・バードの効果発動!!!」

そう宣言した時、デッキから一枚のカードが飛び出した。

スピリット・バード / ATK 0

「墓地の阿修羅をゲームから除外して今手札に加えた大和神を特殊召喚!!!このモンスターは墓地のスピリットモンスターをゲームから除外して特殊召喚することができる!!!」

ヤマトノカミ
大和神

スピリットモンスター

星6 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2200 / 守1200

このカードは通常召喚する事ができない。

自分の墓地に存在するスピリットモンスター1体をゲームから除外した場合のみ

特殊召喚する事ができる。

特殊召喚したターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

相手フィールド上に存在する魔法または罫カード1枚を破壊する事ができる。

大和神 / ATK 2200

「そしてレベル6、大和神にレベル3、スピリット・バードをチュ
ーニング!!!」

魔に潜む聖なる魂よ、光を闇に染め、この場に降臨しろ!!!」

レベル9 ユウのデッキの最上級モンスターがこの場に現れる

「シンクロ召喚！！聖霊魔ルシア！！」

フィールドに4つの腕を持つ巨大な悪魔が現れた。その大きさはいつか見たビッグ・コアラ並の大きさだ。

ルシア / ATK 2800

「攻撃力2800…だが俺のブラック・マジシャンには及ばないぞ！！」

「リバーズカード！！スピリット・シンクロ精霊の同調！！墓地チューナーモンスターとチューナー以外のモンスターを除外して、墓地のシンクロモンスターを特殊召喚することができる！！墓地の夜叉とスピリット・ガードナーを除外してスピット・シルバー・ドラゴンを特殊召喚！！」

スピリット・シンクロ
精霊の同調

通常魔法

自分の墓地に存在するシンクロモンスターを1体選択し発動する。
選択したスピリットモンスターと同じレベルになるように、墓地に存在するチューナーモンスター1体とスピリットモンスターを任意の枚数除外する。
選択したシンクロモンスターを特殊召喚する。

場に再び、銀色のドラゴンが現れた。

「聖霊魔ルシア」がフィールド上に存在する限り、
自分は他に「聖霊」と名のついたモンスターを特殊召喚することは
できない。

ユウ/LP1000 200

そう、もうユウのライフは風前の灯だ。恐らく次にダメージを負えばユウのライフは無くなってしまう。

「更にスピリット・フィッシュは自身の効果で特殊召喚した場合フィールドから離れる時除外される!!! スピット・シルバー・ドラゴンの効果でドロー!!! 手札の竜宮之姫を除外し伊弉凧を特殊召喚
!!!」

伊弉凧/ATK2200

「バトル!!! ルシアでブラック・マジシャンに攻撃!!!」

「血迷ったか!? ブラック・マジシャンの攻撃力との差は400!
! お前のライフはこれで無くなる!!!」

そう、これでユウのライフは無くなってしまう。だが、先程からカードを引いているユウの手札に

「最後の伏せカード、アタックIIダメージ&アタックを発動!!! フィールド上のモンスター1体と攻撃力と同じにするように攻撃力を上げる!!!」

そして、エンドフェイズに上がった攻撃力と同じ数値ダメージを受ける!!!」

「なっ…!!!」

アタックⅡ（イコール）ダメージ&アタック
速攻魔法

自分のライフが1000以下の時、
自分のモンスターが相手フィールド上の攻撃力の高いモンスターを
攻撃する時、

そのモンスターと攻撃力と同じにするように攻撃力を上げる。
エンドフェイズに上がった攻撃力と同じ数値ダメージを受ける

つまり

ブラック・マジシャン / ATK 3200 Ⅱ ルシア / ATK 2800
3200

「ごめん…ルシア…バトル続行！！^{エクゼキューション}力の暴力！！」

「っ…向かえ撃て！！ブラック・マジック！！」

ルシアとブラック・マジシャン 2体は相打ちになる。

そして魔術の呪文書の効果で讐都のライフは1000回復する。

讐都 / LP 3400 4400

「行けえ！！伊弉凧で直接攻撃！！」

「クツ…伏せカード炸裂装甲を発動！！攻撃モンスターを破壊する
！！」

炸裂装甲が発動され、伊弉凧に向かって衝撃が飛んで行った。

「スピット・シルバー・ドラゴンの効果発動!!」

が、途中でスピット・シルバー・ドラゴンが立ち塞がった。そして炸裂装甲の衝撃はスピット・シルバー・ドラゴンがかき消した。

「手札のチューナーモンスター、スピリット・バードを墓地に送ってモンスターを破壊する効果が無効にする!!!バトル続行!!!」
「ぐうああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

警都 / LP 4400 2200

伊弉風の巻き起こした突風で警都の体はボロボロになった。
警都に手札も、伏せカードも、壁になるモンスターもいない。そしてこれで終わりだ。

「スピット・シルバー・ドラゴンで直接攻撃!!!スピリット・ブラスト!!!」

「うわあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

警都 / LP 2200 0

白銀の炎に包まれた警都は倒れた。

シゲルが近付き確認すると、髯都は衰弱しているが気を失っているだけだった。

一方ユウは

「はあ…はあ…つ、…疲れた…」

「ユウ〜!!!」

「ツバゴフっ!？」

何とか立っているユウにツバキがタツクルもとい、抱きついてきた。ツバキは泣いているが、ユウは体が折れそうになっている。てか、ユウの顔がツバキの胸に押しつけられている。

「心配したよ〜!!!」

「ツ、ツバキ!!!（あ、当たってる!ってツバキ思いのほか胸ある!?!）」

胸に当たっているのを気にして無い、てか気付いていないツバキは更に泣いていた。

「無茶しないでよ…」

「…ごめん」

— 先ず謝ったユウは限界だったのかスツと寝てしまい、静かな寝息を立ててしまった。

「で、どうするんだ?こいつ」

「もちろん、引き渡してもらおう」

十代が倒れている警都を見てそう言った言葉に返した　誰が？

「やっぱり来やがったか…管理局」

シゲルがそう言った先に黒い服に身を包んだ　クロノがいた。
シゲルの言葉を聞いたクロノは苦虫をつぶしたような顔になった。

「…無関係な人間に僕らの存在を話すってどう言っつもりだ？」
「それを言うならお前達だろ。関係ない俺やツバキ達を巻き込んだのはテメエらだろ」

「ツ…！！公務執行妨害及び、名誉棄損、ロストログアで貴様を逮捕する…！！」

「それは職権乱用じゃ…」

「ステインガーレイブ…！！」

「シゲル…！！」

シゲルの言葉に立場が悪くなったクロノは勝手な罪状を上げて杖を真っ直ぐシゲルに向けた。その先から白い光線の様な物が伸びてくる。

「ッ!」

間一髪でシゲルは避けた、が後ろにあった木が音を立てて折れた。十代の言葉に気付かなかつたらまともに当たっていたが、当たれば痛いですまなさそうだ。

「大人しく捕まることをお勧めするが…」

「断る…それに、お前の負けだ」

Bannon!!!

シゲルがそう言った時、一発の銃声が響いた。その音は海の方から聞こえ、そこに一隻の船が浮かんでいた。甲板には5〜6人の男に見覚えのある老人がいた。

「グツ…だ、誰だ…!!!?」

足に銃弾を受けたクロノは持っていた杖を支えにその船を見た。と、老人が手で獣を降ろすジェスチャーをする。その老人は

「山本さん!?!」

AW社総帥である剣賭の執事である山本だ。山本はいつもの様な優しい笑みを浮かべていた。

「ほっほっほ…時空管理局という組織は聞いただけでは判断にしくかったですか…お嬢様の言うとおり碌でもない組織の様ですな」
「…なんでもあの人がいるんだな?」

隼人が今この場にいる人間が全員聞きたい事を代表して言葉にした。

それに応えたのは予想外にシゲルだった。

「俺が呼んだんだよ。警都がもしも暴れ出したら止める手立てが無
いからな…まあ…こつなるとは思わんかったけどな」

「さてさて…少年、いかがしますか？このまま我々と争うのであれ
ば…」

山本がそこまで言った瞬間周囲の男性が銃をクロノに向けた。レ
ザーサイトが装備されたその銃は全てクロノの頭、胸、目、胴体
確實致命傷を負う場所に向けられていた。

「クッ…」

「あ、一つ言い忘れておりました。総裁である羽黒様より…『舐め
た真似はするな。これ以上変なことをするのならそれ相応の対応を
させてもらう』と」

「ッ…！…！…」

羽黒　すぐにクロノは剣賭の事だと気付いた。そして彼がAW社
という巨大な会社のトップだということは、場合によつたら時空管
理局の存在が広まってしまふということだ。

そう考えたクロノは転移魔法で撤退した。少年の姿が消えて他の男
性達は驚いているが、山本はそれをスルーした。そして、倒れてい
る警都を見た。

「この少年ですか？」

「ああ…頼む。できる限り情報を引き出しといてくれ」

そう言うと、山本の指示で男達は警都を連れて船は島から離れて行った。

「剣賭にあいつの尋問を頼んでいる。俺達は待つしかないな……」

「そうか……所で……神楽坂どうするんだ？」

いまだに目が覚めない神楽坂を見て三沢が聞いてきた。一先ずツバキが保険医であるシャマルと鮎川を呼ぶことにしたのだが、警都の事やデツキを盗んだことについては

翌日 校長室

「彼には罰を与えるノーネ」

そう言ったのはクロノスだ。居るのはツバキ、シゲル、十代、翔、三沢の5人と神楽坂がいる。6人の前にはクロノスと、椅子に腰かけている鮫島校長だ。

「けど先生「俺はどんな処罰を受けます」神楽坂……」

十代が口を挟もうとしたが、神楽坂はそれを遮った。ツバキとのデュエルで何がいけなかったのか、どうすればいいのか、神楽坂なりに考えた様だ。

「良い心がけですね。では神楽坂君、これを……」

鮫島校長がそう言って取り出したのは一つのデッキだ。神楽坂はそれを受け取って中を見て驚いていた。

「こ、校長先生……これ武藤遊戯のデッキじゃあ!？」

「……はあ!？」

珍しく5人の反応が被ってしまった、が鮫島校長はニコニコしながら一枚のチラシを取り出し説明を始めた。

「実は展示会のイベントとして、学園祭でそのデッキを使用するデュエルマシンと勝負するイベントがあったのですが…時に機械よりも人間が予想外の方法でデッキを駆使することもあります。その為誰かこのデッキを使用してイベントを行うことにしたのですが…やってくれますか？」

「ちなみに、参加人数は少なくとも数十人から百人近くになるからね」

百人近く　いくらデュエル好きの十代でも顔を青くしていたが、神楽坂は

「分かりました!!」

了承した。どれだけきつかるうが、罰ならば受ける気らしい。それからしばらくの間、神楽坂はそのデッキで出来るありとあらゆるコンボを研究したのは、誰も知らない。

レッド寮・食堂

「そうなんだ」

先程まで部屋で寝ていたユウはツバキとシゲルから話を聞いていた。十代がこの場にいない理由は

「スカイスクレーパー・シュート!!」
「手札からクリボーの効果発動!! 戦闘ダメージをゼロにする!!」
「フレイム・ウィングマンの効果発動!! デーモンの召喚の攻撃力分のダメージを与える!!」
「なんだと!?! うわああああ!!!!!!!!!!」

今現在、フライングで神楽坂と勝負をしていた。ちなみに三沢や明日香も並んでいる。

「で…問題は管理局だ。警都の引き渡しを拒否の上だしAW社の介入もあつたからな…もしかしたらめんどい事になるかもな」

アースラ・医務室

前日銃弾を脚に受けたクロノはベッドに寝て 居ない。ブリッジにいるリンディに報告をしに行こうとするのだが、同僚のエイミィに止められていた。

「クロノ君、安静にしてなきゃだめだよ!」

「大丈夫、もう痛みも引いてるし…」

そう言つて医務室を出ようとしたクロノだが、突然目の前の扉が開いた。

そこには緑髪の女性 リンディがいた。そして部屋を出ようとしたクロノを見て

「クロノ? 少し O H A N A S I I しましょうね」

「母と艦長!？」

若干白い悪魔が見えたクロノだった。

数分後、訓練室より少年の叫びこえが響いた。

そして数日後、島の停泊所に一人の少年?が立っていた。

「…此処にいらっしやるのね……亮様」

第二十話 精霊の危機 魔術師の戦略 VS 決闘王（後書き）

シゲル「今回はユウ対武藤遊戯のデッキか……」
そのうち武藤遊戯を出そうか考えている…精霊世界で

ツバキ「…………… / / / /」

ユウ「…………… / / / /」

シゲル「…………… ツバキ…胸がでかいのか？」

一応着やせする感じで設定した。ユウは正直に言うと結構背が低いからツバキもなんとなく小さくして2人を無垢な感じにしたから、どう考えても『ちびっこ』的なイメージになってた。

ユウ「…………… それで？」

じゃあ や なことができないから、たがいの体について気になる描写や、そういう感じの台詞とかを入れてみようと思っ
て胸がでかい設定にしてみた。

シゲル「…………… おい、伏字過ぎだろ」

はっはっは『氷デッキの使い手』を見たりしていいな〜と思っ
ていたら、この作品を書くきっかけだった『冥府を従えし者』がリ
メイクされてうれしかったから「行ってまえ!!!」的なノリで書い
てしまった。

そして後悔はない!!

シゲル「しろよ…………… 伏字のところから2人ともオーバーヒートして
るぞ」

オリジナルカード
シエンロン
神龍

精霊師ネファルロ

ブービー・トラップ

スピリット・ディフェンダー

魔導師の宝札

精霊魔ルシア

精霊の同調

あ、そうそう…ひとつ言い忘れてました。今まででユウとシゲルのチューナーは『スピリット』と『スレイブ』の二つのシリーズで作ってましたが…徐々にややこしくなってきたのでシゲルの使用するチューナーは『リゾネーター+オリジナル』で統一することにしました。スレイブ・キャットもパワー・リゾネーターと変更しました。

第二十一話 初の戦い…ではない？ 精霊VS獣VS恋する少女？（前書き）

サブタイトルに深い意味はないです。軽くく2回ほどデュエルがあります。

そして非常にグダグダです。

第二十一話 初の戦い…ではない？ 精霊VS獣VS恋する少女？

レッド寮

夕食前に大徳寺先生が大事な話があるとレッド生を集めた。

「え〜このたび、編入テストを合格した、早乙女レイ君なのにな」
「……………」

そうやって出てきたのは寡黙な少年？だった。ちなみに今シゲルは厨房に入って歓迎会の料理を作っている。なぜか料理を大徳寺先生に頼まれていた。

「へ〜綺麗な子なんだな」

「編入先がオシリスレッドだから落ち込んでるのかな…その気持ち分かるな」

「そつでもないぞ」

翔の言葉に返すようにシゲルと数人のレッド生が料理を運んできた。ちなみに運ばれた瞬間十代は料理をがつつき始めた。

「俺は結構気に入ってるぞ。贅沢過ぎるのは性に合わないからな」
「へへ！俺もだぜ！！いや〜レッドでよかったな〜！」

十代はそう言ってご飯粒のついた顔を上げた。

「お前は俺の料理が食べただけだろ」

シゲルの言葉に十代はギクリと口で言いながら反応した。その反応に食堂が笑いに包まれた。

その後、成り行きでレイは十代の部屋を使うことになった。

翌日

『今年のノース校との交流試合の日まで、もうまもなくです』

朝礼で鮫島校長が交流試合の事を話始めるとレイがカイザーを見た。それに翔が耳打ちで自分の兄だと伝えて、自分と似てなくて成績いいんだ…と小さな声で嘆いていた。

『今年の代表はまだ決まっていますが、今年はいつもと違いルールを少し変える通達がありました。』

「……………え？」

鮫島校長の声に生徒全員の声が被った。すると画面が説明の図へと変わった。

『今まででしたら代表生徒一人が選ばれましたが、今年は男子生徒一人、女子生徒一人、そしてタッグで二人の計四名が代表として選』

ばれるようになります』

「3試合…ってことは勝ち数とかで勝敗が決定するのか…」

『今年は3試合のデュエル終了時のライフポイントの合計で勝敗が決まります。仮に第一、第二試合でノース校が勝ったとしても、第三試合でその差を逆転できれば我が校の勝利となります』

つまり、たとえば他の2試合終了時の残りライフの合計が500だった場合、3試合目で残りライフ600ポイントの差をつけて勝てば総合的に優勝するということだ。

『誰が代表になってもいい様に、皆さん日々努力を重ねてください』

「へえ…編入生ね」

教室でユウから前日の事を聞いたツバキはそう言った。その目線の先には一人席に座ってるレイがいた。

「なあ、代表の中のタッグって…この学校にタッグ生徒なんかいるか？」

シゲルの言うタッグ生徒とは主にプロデュエルのタッグ部門を指している生徒の事だ。テレビで有名なタッグを行うデュエリストは生徒の時からその学科にいたのだが、アカデミアにはタッグ生徒の噂があまり無いのだ。

「こつこつ時って三沢君に聞けばどうだろう？」
「そうだな」

という訳で3人はイエロー席の三沢の元に行った。

「タッグ生徒か…俺の知る限りそこを専攻している生徒は聞いたことが無いな。だが恐らく、多く生徒はカイザーが男子生徒で選ばれるのを危惧してタッグを組む生徒が多いだろうな」

と、三沢がそう解析するが即席のタッグは上手く連携が取れないことが多いため仲間割れを起こす可能性も多いのだ。

「まあ、俺はお前らがタッグに選ばれる気がするけどな」

「俺達が？」

「ないよ、流石にね」

三沢の言葉にユウとシゲルが答えるが、強ち外れている気がしないツバキだった。

実技

「あれ？何してるの、レイ」

「あ、ユウ…シゲルも…？」

席へ向かったユウ達3人の前にきよるきよるしているレイがいた。どうやらデュエルリングまでの生き方が分からない様だ。そして2

人の後ろにいたツバキに気付いて首を傾げていた。
レッド生徒がブルー女子と仲良くしているのが気になった様だ。

「あ、私は姫野椿…貴方がレイね…？」

「あ、うん…よろしく…」

ユウと付き合ってから多少ツバキの人見知りが軽減されている…が、
ユウの後ろから自己紹介した所を見るとまだ恥かしい様だ。

「…まあいいか。デュエルリングに行くんなら一緒に行こうぜ」

「え…うん」

4人が実技会場に着くとちょうどクロノスがデュエルリングの上で
マイクを持って今回の実技の説明をしていた。

『本日の実技はいつもと違うノーネ！先日説明してイータ、シンク
ロモンスターの事について、分かりやすくするたメーニ！シンクロ
モンスターを持つ生徒同士で戦ってもらうノーネ！！』

「…え？」「」

クロノスの言葉を聞いた時、シンクロを持つ3人は効いていない様
に疑問の声を上げた。するとリングにある画面にユウとシゲルが映
し出されていた。

『デーハ！シニョールユウとシニョールシゲルにシンクロモンスター

ーを使ってもらうノーネ!!」

「ご指名かよ…」

「はは…行こうよ、シゲル」

あまり乗り気じゃないシゲルと笑顔のユウはリングへと向かった。残されたのはツバキとレイには気まずい空気が流れていた。

リング上

「それでは頼むノーネ」

「分かりました／おう」

『では、デュエル開始!!』

宣言と同時にクロノスは急いでリングから降りて行った。ふとユウが気になった事を聞いていた。

「そういえば、シンクロデッキで勝負するのは初めてだよな?」

「…そういやそうだな…まあ、行くぜ…」

「デュエル!!」

ユウのターン

「ボクのターン!!手札のスピリット・ソウルを墓地に送って効果発動!!デッキからスピリット・フィールドを手札に加えてそのまま発動!!」

「なんだ…そのカード。……………ペガサスカ」

スピリット・ソウル

チューナーモンスター（効果）

星1 / 光属性 / 天使族 / ATK 1000 / DEF 1000

このカードを手札から墓地に送ることでデッキから、

「魂の聖地 スピリット・フィールド」を1枚手札に加える。

場がユウのホームである青い光に包まれた場所が変わった。それよりもシゲルはユウがスピリット・ソウルというカードを使うことを知らなかった。

最近ペガサスからユウへ手紙があったのを知っているが、まさかこのカードが同封されているとは思わなかった。

「手札から火炎車を守備表示で召喚！そしてカードを伏せターン終了！！」

火炎車 / DEF 1000

ユウ / LP 4000 手札3枚 火炎車 伏せカード スピリット・フィールド

シゲルのターン

「俺のターン！！俺は剣闘獣ホプロムスを攻撃表示で召喚！！」

ホプロムス / ATK 700

「バトル！！ホプロムスで火炎車に攻撃！！」

「クッ…けど、火炎車はフィールドから離れた時、カードを1枚ド

ローする！！」

火炎車はホプロムスの起こした地震で起きた地割れに呑みこまれ消えた。

「そしてリバースカードスピリットの反逆を発動！！スピリット・フィールドが存在しスピリットモンスターが破壊された時、デッキからスピリットモンスターを特殊召喚する！！伊弉波を特殊召喚！！」

フィールドに巫女の服を着た女性が現れた。守備表示だから効果で攻撃力が上がっても意味は無い。

伊弉波 / ATK 1100 1900

そして、ホプロムスは何故か輝いていた。

「バトルフェイズ終了時、ホプロムスをデッキに戻して剣闘獣スパルティクスを攻撃表示で特殊召喚！！」

フィールドに巨大な斧を持った恐竜が現れた。さらに何処から巨大な盾をシゲルの前に降ろした。

グラディアルビースト

剣闘獣スパルティクス

効果モンスター

星5 / 地属性 / 恐竜族 / ATK 2200 / DEF 1600

「剣闘獣ホプロムス」以外の効果によって、

このカードを特殊召喚する事はできない。

このカードが特殊召喚に成功した時、

デッキから「闘器」と名のついた装備魔法カード1枚を手札に加える。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣スパルティクス」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

スパルティクス / ATK 2200

「スパルティクスは特殊召喚成功時、デッキから『闘器』と名のついたカードを手札に加える！！剣闘獣の闘器デモンズ・シールドを加えてスパルティクスに装備！！装備モンスターは破壊される時、代わりにデモンズ・シールドを破壊する！！」

スパルティクスは先程降ろした盾を腕に装備した。見た感じ禍々しい雰囲気は漂っていた。

「カードを2枚伏せ、ターン終了！！」

シゲル / LP 4000 手札3枚 スパルティクス デモンズ・シールド 伏せカード2枚

ユウのターン

「ボクのターン！！」

ユウの場にレベル4のモンスター、そして手札の枚数 恐らくもこのターンでシンクロを行ってるだろう。

「チューナー・モンスター、スピリット・ディフェンダーを守備表示で召喚!!」

ユウの場に巨大な戦士が現れると同時に会場にどよめきが上がった。チューナー・モンスターが現れたとなると次に行うのは

『シンクロ召喚』

「レベル4の伊弉波にレベル4のスピリット・ディフェンダーをチューニング!!」

場の巨大な戦士が4つの緑の輪に変わり、その中を通り抜けた巫女が4つの光に変わった。

「大いなる魂よ!砕かれし魂と共に光の風を纏いその身を現わせ!」

4 + 4 = 8

「シンクロ召喚!!甦れ…スピット・シルバー・ドラゴン!!」
『グオオオオオオオ!!……!!』

場に美しい銀色のドラゴンが現れた。その龍の姿に初めて見る生徒と教師は見とれていた。

「バトル！！スピット・シルバー・ドラゴンでスパルティクスに攻撃！！スピリット・ブラスト！！」

「クツ…だが、デーモンズ・シールドを破壊し、スパルティクスは場に残る！！」

シゲル / LP 4000 3700

「ボクはカードを伏せ、ターン終了！！」

ユウ / LP 4000 手札3枚 スピット・シルバー・ドラゴン
伏せカード2枚

シゲルのターン

「俺のターン！！俺は手札からスレイブ・タイガーを攻撃表示で特殊召喚！！このモンスターは場に剣闘獣がいる場合特殊召喚できる！！更に剣闘獣ラクエルを攻撃表示で召喚！！」

ラクエル / ATK 1800

「（ラクエル…多分ラクエルとスパルティクスをデッキに戻してゲオルディアスを召喚してくる…！！）」

グレイアルビースト

剣闘獣ゲオルディアス

融合・効果モンスター

星7 / 闇属性 / 恐竜族 / 攻2600 / 守1500

「剣闘獣スパルティクス」+「剣闘獣」と名のついたモンスター

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの守備力分のダメージを相手ライフに与える。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードを融合デッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣スパルティクス」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。

スピット・シルバー・ドラゴンよりも攻撃力が1000高く、更に効果で2000ポイントのダメージを与えることができる。

「（けど…伏せカードはシンクロン・スピリット・パワーだ。攻撃したら何とか…）」

「残念だがユウの思い通りにならないぜ、スレイブタイガーの効果発動！！ラクエルをデッキに戻し剣闘獣ダーツを特殊召喚！！」

ラクエルとスレイブタイガーが消え、そしてスパルティクスの横に細長い剣を持った獣人が現れた。

グレイアルビースト

剣闘獣ダーツ

効果モンスター

星2 / 地属性 / 獣戦士族 / ATK 1500 / DEF 1200

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時デッキからチューナーモンスターを特殊召喚することができる。

このモンスターはシンクロ召喚の素材に使用することはできない。

「ダーツの効果発動！！特殊召喚に成功した時、デッキからチューナーモンスターを特殊召喚することができる！！来いフォース・リゾネーター！！」

フィールドに念力の様な物を発生させている小さな悪魔が現れた。

フォース・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星2 / 水属性 / 悪魔族 / 攻 500 / 守 500

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送り、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

このターン、選択したモンスターが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時までモンスターを対象にする魔法・

罫・

効果モンスターの効果を発動する事ができない。

「レベル5のスパルティクスにレベル2のフォース・リゾネーターをチューニング！！」

小さな体から現れた輪をくぐり抜けた巨大な恐竜は星となり一列に並んだ。

「獣の命を喰らいし者よ、今ここに全ての魂を喰らい尽くせ!」

5 + 2 = 7

「シンクロ召喚! 来い、ソウル・ブラック・ドラゴン!」

フィールドに現れたのは強力な闇を放つ漆黒のドラゴンだ。その眼は鋭くスピット・シルバー・ドラゴンとユウを睨んでいた。

ソウル・ブラック・ドラゴン / ATK 2400

「ソウル・ブラック・ドラゴンの効果発動! 1ターンに1度自分フィールドに存在するモンスターを生け贄に捧げ、そのモンスタアの攻撃力を得る! ダーツを生け贄にその攻撃力を吸収する!」

ソウル・ブラック・ドラゴンがギロリとダーツを睨むと、ダーツは震えながらシゲルのデッキへと走って行った。

ソウル・ブラック・ドラゴン / ATK 2400 3900

「攻撃力3900!？」

「バトル! ソウル・ブラック・ドラゴンでスピット・シルバー・ドラゴンに攻撃! メガ・ブラック・シュート!」

「伏せカード、シンクロン・スピリット・パワーを発動! 墓地の火炎車を除外して攻撃力を500ポイントアップする!」

スピリット・シルバー・ドラゴン / 2500 3000

だが攻撃力はまだソウル・ブラック・ドラゴンに届かなかった。こ

れで何とかダメージを緩和して次につなげようということだ。
黒い炎がスピット・シルバー・ドラゴンを包み込んでいる。

「クッ……!!!」

ユウ/LP4000 3100

「（けど、もう一枚伏せカードのロスト・スター・ディセントと手札の死者蘇生でルシアを出せば……）」

「ソウル・ブラック・ドラゴンの効果発動!! 戦闘でモンスターを破壊した場合、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える!!」

「え、うわああああああああああ!!!!!!!!!!!!」

ソウル・ブラック・ドラゴン

シンクロモンスター（効果）

星7/闇属性/ドラゴン族/ATK2400/DEF1800

チューナーモンスター+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、

そのモンスターのもととの攻撃力分のこのカードの攻撃力をアップする。

この効果は自分のターンのメインフェイズ1のみ発動できる。

このモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊したとき、

そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

自分の場のカードがデッキに戻った時、カードを1枚ドロウすることができる。

この効果は1ターンに1度しか発動できない。

ユウ/LP3100 600

「つう…で、でももうこれで…」
「伏せカード眠る魂の咆哮を発動!!」

このカードを見た瞬間、ユウはもう終わった事を感じた。

理由としては眠る魂の咆哮は墓地と場の剣闘獣を融合するカードだ。そして墓地にはちょうど2体の剣闘獣がいる。つまり のカードを

「スパルティクスとダーツを除外し、ゲオルディアスを特殊召喚！
！直接攻撃!!!」

「うわあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

スパルティクスよりも巨大な恐竜が斧を振り上げてデュエルは終わった。

ユウ / LP 600 0

「つう…容赦ないよ…」
「悪いな、こついう性質タチなんで」

実技が終わると今日の授業は終わった。それと同時に2人とツバキはレッド寮へと向かった。理由はシンクロモンスターたかに集る生徒が大勢いたからだ。

放課後：夜

「デュエル!!」

何故が始った十代VSレイ

その様子を崖の上で見ているユウ、ツバキ、シゲル、翔、隼人、亮、明日香がいる。

「つて、レイって女の子だったの？」

「気付かなかったんだな…」

「そうか？」

「そうだと思ったけど？」

翔と隼人の言葉にユウとシゲルが返している。なぜそう思ったのか明日香が聞いてくる

「んゝ理由…って言うよりも…」

「なんとなく…雰囲気…」

2人は同時にツバキを見た。

「ツバキに似てたから？」

理由や理屈じゃなくて感覚で分かったらしい。そう言っている間に十代がフェザーマンで攻撃をしていた。

「ええ〜！勝負にならないよ！」

「翔はどっちの応援をしてるんだな……」

「でも、恋すると女性は変わるわ」

「……（同感だ、ユウに関わるとツバキが……）」

先日ユウの事を馬鹿にした生徒バカにツバキが勝負オーバーキルをして半殺し状態になった。それを見ていたブルー女子が失神するぐらいの気迫だったらしい。

そんなこんなでデュエルを見ているが 何故か精霊を見ることが出来る3人には十代の精霊の宿って無いモンスターの言葉が聞こえた。

「……どうしてなんだらう」

『恐らく……十代殿のモンスターではなく、レイという女子のモンスターに精霊と同じ力が宿っておるのだらう』

ツバキの言葉にダークではなく、最近出番が無いウリイがそう説明をした。確かにレイの『恋する乙女』は3人から見て、精霊が宿っている気がするが、精霊と何か違う感じもする。

と、スパークマンが奪われるのを見て明日香は十代は乙女の心が分かって無いと分かったらしい。が、カイザーはさらに補足した。

「一人の美女の為に、国が滅ぶことは歴史が証明した。……俺も女性の心は分かん」

「なるほどね…カイザーと呼ばれる男が手こずるわけよね」

「「「……え?」「」」

明日香の言葉にユウ達は何か気になる事に気付いた。明日香の言い方だと、カイザーは恋愛ごとに鈍感だということだが……なぜそれが分かる?

「フレイムシユート!」

「きゃああああ!」

フレイム・ウィングマンの攻撃でレイのライフは無くなった。そしてデュエル後、レイは初恋の誰かを追いかけてアカデミアに来たのだが

「出番よ」

「?」

「男の責任でしょ?」

明日香の言葉にカイザーが明らかに顔をしかめた。てかレイの初恋の人って

「亮様!！」

「(ですよねー!やつぱり!!)」「」

カイザーだった。この時3人の思っていたことが被っていたのは誰も知らなかった。

「まだ隠し事があるのかよ!？」

「レイは小学五年生だ」

「」「」「」「」

アカデミアに残ろうとするも、年齢制限に達していないので断られてしまった。

「なんだよ!俺って小学五年生に苦戦したのかよ!！」

「ごめんね、ガツチャ!楽しいデュエルだったよ!！」

十代の決め台詞を取ったレイ。それに十代はズッコケルがすぐにレイは大きなため息をついた。

どう見てもぶてくされているレイを見て明日香が言ったのは

「ムシャクシャする時は、思いっきり戦ってスッキリするモノよ」

という訳で

ユウVSユウ

「なんでこうなるの？」

部屋からディスクを持ってきたユウはそうため息をついた。なぜかレイはユウ、シゲル、ツバキ、翔、隼人の5人の中から選んだのだが、迷わずユウを選んだ。

「それにしても…最悪のパターンだな」

「え？」

「そうだな…レイにとっては厳しい相手だな」

「そうなのか？」

シゲルの言葉にカイザーが同感しているが翔と隼人は分からない様子だった。

十代も首を傾けているが、明日香は納得している様子だった。

「って、十代は気付けよ。レイのデッキ…相手のコントロールを奪うデッキだ。つまり　スピリットにしたら最高の相手だ」

レイのターン

「僕のターン！！恋する乙女を攻撃表示で召喚！！装備カードキューピット・キスを装備！！」

恋する乙女

効果モンスター

星2 / 光属性 / 魔法使い族 / ATK400 / DEF300

このカードは表側攻撃表示でフィールド上に存在する限り、戦闘で破壊されない。

このカードを攻撃した相手モンスターに乙女カウンターを1つ乗せる。

恋する乙女 / ATK400

キューピット・キス

装備魔法

装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを受けた時、ダメージステップ終了時に攻撃を行った乙女カウンターを置いているモンスターのコントロールを得る。

場にドレスの様な可愛い服に身を包んだ少女が現れた。先程と同じ

戦法。

そして装備カードで相手のコントロールを奪うのだが

レイ/LP4000 手札4枚 恋する乙女 キューピット・キス

ユウのターン

「ボクのターン!!ボクはスピリットモンスター雷帝神を召喚!!」

雷帝神/ATK2000

ユウの場に長い剣を持った着物を着ている男性が現れた。

『ん？お、可愛いお嬢さんやんけ』

「……………」
（…雷帝神が喋った———！！！！！！）
『……………』

精霊が見える4人と、精霊の4体が同じことを思った。
ウリイの思っているよりも恋する乙女の影響力が高いみたいだ。

「…ま、まあいいや…バトル！！雷帝神で恋する乙女に攻撃！！」
『ひゃっはああー！！』

何故かハイになってる雷帝神は恋する乙女を剣で切り裂いた。

「きゃあ！……って……なんで800だけ？」

「雷帝神は戦闘で与えるダメージは半分になる。1600の半分で800のダメージ……！」

簡単に説明していると何故か雷帝神の顔が赤くなってる気がした。

『酷いです……』

『わ、悪いお嬢ちゃん。今度は俺が守ってやるからな』

「……」『……』『……』(何してんの！……？……？……？)『……』『……』

何故か泣きそうな恋する乙女を見た雷帝神が向こう側についた。それに精霊達は言葉を失い、また精霊が見える者も言葉を失った。

「キューピット・キスの効果で乙女カウンターに乗ったモンスターをダメージステップ終了時に奪う……！これで君の場のモンスターは居なくなった(次のターン、ハッピー・マリッジで攻撃力を上げて2体で攻撃すれば……)」

どうやらレイはスピリットの特性を知らない様だ。けどユウもまさかスピリットの最大のデメリットが行かせる場面が来るとは思わなかったみたいだ。

「……カードを伏せてターン終了。そして雷帝神の効果発動」

「え？な、なんで雷帝神が……！？」

場にいた雷帝神は大きなため息をつく。恋する乙女に一礼してユウの元へと戻った。

どういふことなのか分からないレイは混乱していた。

「スピリットモンスターはターン終了時に手札に戻る」

「え？それじゃ…ボクの場合にモンスターは残らないってこと？」

レイの言葉にユウは静かに頷いた。一瞬がっかりそうに俯いたレイだが、すぐにそうなるとユウの場合が空きだと気付いた。

ユウ / LP 4000 手札 5枚 伏せカード 1枚

レイのターン

「ボクのターン！！装備魔法、恋の思い ハート・アローを恋する乙女に装備！！装備モンスターの攻撃力を800ポイントアップさせバトル！！」

どこからかハートの形をした弓矢が現れると恋する乙女はそれを構えた。

ドレスの少女が弓矢を構える 中々シユールな光景だ。

恋する乙女 / ATK 400 1200

「恋する乙女で直接攻撃！！」

「手札のスピリット・ガードの効果発動！！八岐大蛇を墓地に送り

守備表示で特殊召喚！！」

スピリット・ガード/DEF0

「守備力0…？（何か効果が…？）けど続行だ！！シューティング・キス！！」

「墓地の八岐大蛇を除外し、破壊を無効にする！！」

スピリット・ガードの効果で攻撃は止まるはずだった。だがその攻撃は止まることなくスピリット・ガードにブチ当たった。

「なんで…？」

「破壊は無効にされた…けど、ハート・アローの効果発動！！装備モンスターが攻撃を行った場合、その相手モンスターに乙女カウンターを乗せる！！」

恋の思い ハート・アロー

装備魔法

自分フィールド上のモンスター1体に装備可能

装備モンスターが相手モンスターを攻撃した時、

そのモンスターに乙女カウンターを乗せる。

装備モンスターは攻撃力を800ポイントアップする。

確かにこれならカウンターを乗せれるが、それはダメージを負った時だ。

つまり次に恋する乙女を攻撃すれば、攻撃モンスターもスピリット・ガードも奪われるということだ。

「ボクはターンを終了する！！」

レイ／LP3200 手札4枚 恋する乙女 キューピット・キス
ハート・アロー

ユウのターン

「ボクのターン！！手札断殺を発動！！カードを2枚捨て、2枚ドロー！！手札の雷帝神をゲームから除外して伊弉凧を特殊召喚！！更りバースカード テラ・フォーミングを発動！！フィールド魔法死皇帝の陵墓を手札に加えそのまま発動！！」

フィールドが巨大な墓場となった。てか、伊弉凧はともかく恋する乙女が死皇帝の陵墓にいるのはなかなかシユールだ。

「ライフを2000ポイント支払い、火之迦具土を生贄なしで召喚する！！」

ユウ／LP4000 2000

「墓地の因幡之白兔を除外して大和神を召喚！！バトルフェイズ！！」

大和神／ATK2200

バトルフェイズを宣言したユウにレイは驚いている。攻撃すればモンスターは奪われるのは分かっているはずなのにだ。

「けど、攻撃したら乙女カウンターが…」

「その乙女カウンターを乗せるために戦闘を耐えるライフはもうない」
「あ……」

どうやら自分が負けると分かった様だ。

「バトル！！伊弉凧で攻撃！！」
「きゃああああ！！！！」

レイ/LP3200 2200

攻撃を行った伊弉凧は無言でレイのフィールドへと向かった。どうやら雷帝神は武士の様な感じ、伊弉凧は寡黙みたいだ。
てか、いつの間にかスピリット・ガードが向こうのフィールドにいる。

「大和神で恋する乙女に攻撃！！」
「きゃああああ！！！！」

レイ/LP2200 1200

今度の大和神は雄たけびを上げながら向こうのフィールドへ向かった。見た目があれだし、どうやら半分化け物とかしている様だ。

「ラスト…火之迦具土で恋する乙女に攻撃！！紅蓮滅殺拳！！」
「きゃああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

レイ / LP 1200 0

3体の猛攻でレイのライフが無くなった。

「負けた…ユウって結構強いね（しかも…カツコイイし…）」

「…レイ…？ちょっといい？」

「（ゾクッ）う、うん、いいよ（な、なにこの不安）」

レイが何を考えているのかわかったのか、ツバキはレイを岩場の影に連れて行き

それから

レイを見かけたのは

誰もいなかった…

546

「って、ボクを勝手に殺さないで…!!」

翌日 船着き場

「レイ、これあげる」

そう言ったのはデュエルの終えた2人に近寄ったツバキだった。その手には2枚のカードがあった。

「これって…チューナーとシンクロ…!？」

「うん。また今度会う時まで、そのカード大事にしてね」

ツバキの渡したカードはツバキでは扱い辛かったが、恋する乙女を使つて十代を追い詰めたレイなら使いこなせるはずだった。

そしてその2枚のカードに挟まれるように小さく折りたたまれた紙があった。

それを開くと

『ユウは私のだからね』

すぐに投げ捨てた。先日の岩場で言われたのはユウはツバキの彼女で手を出したら

「（な、何も無かった！その後は何も無かった！！）」

トラウマと化していた。

そして出航時刻に

「待っててね〜!!十代様〜!!!!」

「はあ!？」

どうやらレイはユウをあきらめた様だった。

校長室

「そうですか…彼…いや、彼女は帰ってしまいましたか」

「残念なノーネ。彼女はイエローでもずば抜けて試験の得点がよかつたノーネ」

シゲルからレイが学園を去ることを聞いた鮫島校長とクロノスがそう応えた。だが、校長は純粹に学園に残らせて好きなことをさせたかったと、クロノスは

「（彼女に頼んであのドロップアウトボーイを排除しようと思っていたのノーネ）」

ということを考えていただろう。

「それで、君は他にも用があると…」

「ああ、そうです。以前お話しした時空管理局の事についてですが…『高町なのは』『フェイト・T・ハラオン』『八神はやて』の3人がもう3ヶ月ほど授業に出てないので…」

シゲルの言葉を聞いた鮫島校長とクロノスは互いに顔を合わせた。すると鮫島校長は机の中から一冊の資料を取り出した。

「シゲル君、これは今年の…君達と共に入学してきた生徒の名簿だ。

此処をよく見てくれ」

鮫島校長の指をさした所を見てみるとその名前が空欄になっていた。他にも2か所空欄状態の場所があった。

「これは…?」

「そこには、先程君の言った3人の少女の名前が入っていました…が、」

「何者かがこの学園からその3人の名前を消したノーネ。ちなみに、ペガサス会長に調べてもらっターラ、この国にその名前は無かったノーネ」

つまりこういうことだ。『彼女達は最初から居なかった』事になっている。

「どついう訳か、教師達も彼女達の事を覚えている人はいなかった。時空管理局は結構な力を持っている様ですね…」

「…はあ…面倒なことになりそうだな…」

第二十一話 初の戦い…ではない？ 精霊VS獣VS恋する少女？（後書き）

ユウ「……………なにこれ？」

ちよっとしたブレイクタイムですよ。最近本編からずれたことを多くやってたから修正的な意味で本編を入れてみたのと、初のユウVSシゲルをやってみたら…グダグダになった。

ツバキ「へえ…レイね…（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…）」

チヨイ待て！！レイに対して憎悪の効果音を出すな！！そしてなぜそんなに笑顔なんだ！！

シゲル「けどな…一歩間違えたら大変なことになってたたる？」

一瞬レイの救われない恋でハーレムを作ろうかと思っただけどめんどくさいことになるからやめた。けど本編で万丈目VSレイのとき、多少心境変化でレイが恋する乙女を使いつつ、シンクロを使う描写が欲しくてツバキからシンクロを渡した。

ユウ「……………じゃあ、あの手紙は？」

ギャグ

オリジナルカード

スピリット・ソウル

剣闘獣ダーツ

ソウル・ブラック・ドラゴン

恋の思い ハート・アロー

シゲル「…ソウル・ブラック…俺の切り札か…」

5D・sのシグナーの龍みたく、

- ・スターダストの様に効果破壊無効系（スピット・シルバー）
- ・レッド・デーモンズの様相に相手への効果破壊（未定）

- ・ブラック・ローズの様に攻守変更の確実にダメージを与える（カオス・レッド）
- ・ブラック・フェザーの様に相手の攻撃力を下げてダメージ（ソウル・ブラック）
- ・パワー・ツールの様にサーチ（未定）
- ・エンシェントフェアリーの様に特殊召喚系（未定）

となっている。ブラック・ローズは攻守変更だけど貫通系にしてみたのは、コストがなく、ダメージを与える一般的なのは貫通かと思っただから。

ブラック・フェザーは攻撃力を下げるのではなく、逆にこっちが攻撃力を上げる感じでジ・アースの効果を複写した。

後は裁きの龍のように破壊効果を持った龍と特定のカードをサーチする龍、モンスターを特殊召喚する龍を出す。ちなみにそれを持つキャラは既に決まってる。

中には既存キャラ？がいる

ツバキ「なんで疑問形？」

知らない人もいるだろうし、ネタバレになるから名前は出せない。ちなみになのはのキャラで。

シゲル「ますます分かんぞ…」

たぶんそのキャラでタグが増えるだろうね…出たら。

ついでになんとか次回予告的なものを作ってみました。

次回予告（ツバキside）

とうとう始まった対抗試合選考戦

男子代表として十代と三沢君、タッグ代表でユウとシゲルが…誰？
たぶんブルーと戦うことになったの…けど…

どうして私が女子代表選に出ているのだろう…？

しかも目の前にはあの人が　けど、代表戦は興味ないけど、負けたくない！！

行くよ…カオス・レッド・ドラゴン！！

次回第二十二話　選考戦開始！！魔法使いVS機械の天使

デュエル開始！！

第二十二話 選考戦開始！！魔法使いVS機械の天使（前書き）

少し間が空きました。おそらく少し更新が遅くなると思います。

鮫島の言葉にクロノスはものすごく驚いた声を上げていた。亮でさえ2年で代表になったのに入学したての下級生が代表に選ばれるのが無理も無い。

「そういうことで、こちらの代表も全員一年生が良いだらうということになってね…どうだろう、丸藤君」
「俺も構いません」

こうして対抗試合は一年のオールスター戦となることが決定した。

「では、本日の議題は誰が対抗試合の代表にするのかだが…」
「…遊城十代」

亮が上げた名前に教師達は驚いていた　いや、大徳寺先生は面白そうに笑っていた。

「彼なら、面白いデュエルを見せてくれると思います」
「うむ、彼なら実力も申し分ない」

亮の言葉に鮫島校長も同意した。他の教師達も十代のユニークな戦術、性格、そして万丈目を倒した実力　確かに十分納得できるが、ただ一人　クロノスは反対の様だ。

「（グヌヌ…嫌なノーネ！あのドロップアウトボーイに任せるノーハ…）ワタシはシニョールシゲルを推薦「あ、彼は聖牙君と共にタッグ代表にすることにしたのだが…」」（ノオオオオオオオ！！！！！！

「！！」

レッド生徒だが、クロノスはいつかブルーに上げようと考えていたシゲルを推そうとしたが、既にユウと共に別枠で決まっていた。

「（ほ、他には…あ！！）三沢大地はどんなノーネ!?」

「ライイエローの三沢君…ですか?」

「2人を戦わせて勝った方が代表にするのはどうでしょうノーネ!?」

それを聞いた鮫島校長は少し考えていた。確かに三沢でも十分代表としての資質がある。だがそれは十代も負けず劣らず、と言った感じだ。

「それならば、候補の生徒達にデュエルしテハいかかでショーウ!?」

「………」

「え?俺?」

「そうなのによ、三沢君と戦って勝った方がノース校とのデュエルに出場できるのによ」

そう聞いて十代と三沢が顔を合わせて「良いデュエルをしようぜ」的な感じで笑った。

そして思い出したように大徳寺先生はユウとシゲルを見た。

「それとタッグの代表は聖牙君と獣斬君が候補に挙がってるのじゃ」
「え？」

「俺とユウが？」

そう聞いた時あるブルー男子が立ち上がった。

「先生！！どうしてブルーじゃなくてこいつ等が！！」

「どうしてと言われても…ただ単に十代君と三沢君は一年の中では
トップクラスの實力があるのだからじゃ」

「だけどそのレッドは落第寸前」彼は前年度代表の丸藤亮君の推
薦ニヤ」なっ！？」

大徳寺の言葉に教室にざわめきが走った。つまり十代はカイザーが
認めた男となる。

カイザーは学園最強だ、その最強に認められるとなると誰も口が出
せなくなる。

「じゃ、じゃあ！！そのタッグはどうして！？」

「彼らのはあの時のタッグでは見事なコンビネーションを見せてくれ
たのじゃ。この学園にはタッグ生徒はいないから、経験的には彼ら
か十代君と翔君のコンビかのどちらかですが…十代君は男子個人の
代表候補となり、タッグ代表候補から外れるのじゃ」

あの時のタッグとは迷宮兄弟とのデュエルの事だろう。確かに互い
が互いのサポートをし、その上2人の最強カード戦ヴァルキリーいの精霊という
カードも召喚した。

が、どうも納得できないのか2人のブルー男子が立ち上がった。

「だったら俺達とそいつらが戦って勝った方が代表にしてください
!！」

「そつだ！俺達もそいつらに勝って実力を示したらいいだろ!！」

と、喚いている。大徳寺先生は仕方ないなという感じにため息をつくと了承した。そして残るは女子代表の枠だが

「女子代表は天上院君か姫野君、これも戦って勝った方にしてもら
うにゃ」

「私と明日香さんが…?」

というこどで

次の日

『お待たせしたノーネ!!ただいまから学園代表デュエルを始める
ノーネ!!』

クロノスの宣言で始まった3試合のデュエル。最初はタッグ選抜の
ユウとシゲル対ブルー男子^{モウ}×2からだ。

『第一試合、レッドのシニョールユウ、シニョールシゲル対！！ブ
ルーのシニョール茂部緒とシニョール雑魚伽羅なノーネ！！』

第一試合が開始する前にユウがシゲルとデッキの最終確認をしてい
た。

「こんなところか…」

「ねえ、シゲル。今回のデュエルのルールって…」

「ああ、あの時とは違ってるからな…少し考えなくちゃいけないな
…」

制裁タッグとはルールが少し違った。

- ・LP8000（2人共通）
- ・フィールドと墓地は2人共通　つまりモンスターゾーンと魔法・
罫ゾーンは一人分しかなく、リビングデット等の自分の墓地対象カ
ードは相方の墓地も使える。
- ・相方の伏せたカードは使用可能で、カードの確認もOK。相方の
モンスターで攻撃も可能

色々書いているが、簡単に言うとTFのタッグルールです。

そして 最初に戻る。

『勝者〜！！シニョールユウ&シニョールシゲルペア〜！！』

「勝ったね」

「余裕だったな」

そう言つて2人が降りたリングには、なぜ負けたのか分からない様に放心してるブルーの2人がいた。

2人が簡単に勝つた理由 ブルーはユウとシゲルのスピット・シ
ルバーとソウル・ブラックを意識して対ドラゴンデッキできた。が、
そのことにいち早く気づいたシゲルはドラゴンを使わない様に伝え
ると2人は聖霊と剣闘獣で勝負した。

ちなみにブルーはなにをしたかというと

「不幸を告げる黒猫の効果発動！！ドラゴン族・封印の壺をデッキ
の一番上に乗せる！！」

不幸を告げる黒猫

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 獣族 / 攻 500 / 守 300

リバーズ：デッキから畏カードを1枚選択し、デッキの一番上に置
く。

「王家の眠る谷・ネクロバレー」がフィールド上に存在する場合、
選択した畏カードを手札に加える事ができる。

ドラゴン族・封印の壺

永続罨

このカードがフィールド上に存在する限り、
全ての表側表示ドラゴン族モンスターは表側守備表示になり、
その後表示形式変更を行う事はできない。

ドラゴンは2人のメインデッキには入っていない。つまり狙いはエクストラの2体の龍だった。
他にも竜殺者や竜殺しの剣、天使族がいないのにウィクトーリアなど、お世辞にも良いデッキではなかった。

第二試合

『デーハ！！イエロー寮代表三沢大地対！！レッド寮代表ドロップ遊城十代！！』

確実にドロップアウトボーイと言いかけた。

そして第二試合は十代は今までのと同じ様にE・HEROデッキ、三沢は自分のデッキに十代の融合封じを加えた対HEROデッキだった。

序盤で融合を封じられ、さらに自身の非融合で一番強いエッジマンまでもが破壊された十代。

だが、十代は諦めなかった

「俺はワイルドマンでリトマスの死の剣士に攻撃！！ワイルドサイクロン！！」

「迎え撃て！！リトマスの死の剣士！！」

「サイクロン・ブーメランの効果発動！！スピリット・バリアを破壊し500ダメージ！！」

自爆特攻で十代が勝利をおさめた。

そして第3試合

『では最終試合　女子代表決定戦を行うノーネ！！』

初のツバキVS明日香だ。シンクロ魔法使いのツバキと機械天使と呼ばれている明日香のサイバーデッキ　どちらが勝つのだろう。

「よろしくね、ツバキ」

「よ、よろしくお願いします、明日香さん」

『では、デュエル開始！！』

ツバキのターン

「私のターン！！私はフィールド魔法魔法都市エンディミオンを発動！！カードを2枚伏せ、魔導戦士ブレイカーを攻撃表示で召喚！！」

フィールドはツバキのホームのエンディミオンへと変わり、召喚されたブレイカーに魔力カウンターが乗った。

魔導戦士ブレイカー / M0 1 / ATK1600 1900

「ターン終了！！」

ツバキ / LP4000 手札2枚 ブレイカー (M1) 伏せカード2枚 エンディミオン

明日香のターン

「私のターン！！私はサイバー・チュチュを攻撃表示で召喚！！」

明日香の場にバレリーナの服に身を包んだかわいらしい少女がいた。

サイバー・チュチュ / ATK1000

「バトルフェイズ！！サイバー・チュチュで攻撃！！」

「え！？攻撃力はブレイカーの方が上なのに…」

そうツバキが不思議がつているとサイバー・チュチュはブレイカーのはるか上に飛び上がり、そのままツバキに向かって一直線に下降してきた。

「サイバー・チュチュは相手の場にこのモンスター以上の攻撃力のモンスターしかいない時、直接攻撃ができる!!!」

「そんなきゃああ!!!」

サイバー・チュチュ

効果モンスター

星3/地属性/戦士族/攻1000/守 800

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力が

このカードの攻撃力よりも高い場合、

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

ツバキ/LP4000 3000

「カードを3枚伏せてターン終了!!!」

明日香/LP4000 手札2枚 サイバー・チュチュ 伏せカード3枚

ツバキのターン

最初に決めたのは明日香だった。そしてブレイカーがいるにもかかわらず攻撃表示で場にいるチュチュと3枚の伏せカード 確実に

「（チュチュを守るカード…けど）私のターン！！ブレイカーの効果発動！！ブレイカーに乗ってる魔力カウンターを取り除き、フィールドのカード一枚を破壊する！！右のカードを破壊！！マナ・ブレイク！！！！」

ブレイカーが剣を振つとその衝撃波でカードが真っ二つに切れた。そのカードは

『炸裂装甲』

一応攻撃反応型のカードを破壊に成功した。だが残り2枚の伏せカードも攻撃反応型のカードの可能性があった。

「手札から魔導騎士ディフェンダーを攻撃表示で召喚！！」

ディフェンダー / ATK 1600 / MO 1

「バトル！！ブレイカーでチュチュに攻撃！！」

魔導戦士はバレリーナの少女めがけて剣を振り下ろした。様に見えるが、そこにいたのはバレリーナの少女ではなく、バレリーナの女性がいた。

「速攻魔法プリマの光！！場のサイバー・チュチュを生贄に捧げてサイバー・プリマをデッキ・手札から特殊召喚することができる！

！」

プリマの光

速攻魔法

自分の場の「サイバー・チュチュ」1体を生贄に捧げる。

「サイバー・プリマ」1体をデッキ・手札から特殊召喚する。

サイバー・プリマ

効果モンスター

星6 / 光属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1600

このカードの生け贄召喚に成功した時、

フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て破壊する。

サイバー・プリマ / ATK2300

魔法都市エンディミオン / M0 1

「攻撃力：2300!!」

「さてどうする？対象がいなくなっただわ」

ブレイカーは剣を収めてツバキの場へと戻っている。だが、このまま攻撃を行っても無駄にダメージを喰らうだけだ。

「ッ…ターン終了!!」

ツバキ / LP3000 手札2枚 ブレイカー ディフェンダー (M1)
伏せカード2枚 エンディミオン (M1)

明日香のターン

「私のターン!!!」

明日香は引いたカードを見てニヤリと笑った。どうやら明日香のエースを引いた様だ。

「手札からサイバー・プチ・エンジェルを召喚!!!」

サイバー・プチ・エンジェル / ATK 300

明日香の場に何かを持っている小さな機械の天使が現れた。

「サイバー・プチ・エンジェルは召喚成功時、デッキから『機械天使の儀式』を手札に加える!!!」

サイバー・プチ・エンジェル

効果モンスター

レベル2 / 光属性 / 天使族 / 攻撃力300 / 守備力200

このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから「機械天使の儀式」を1枚選択して手札に加える事ができる。

「儀式：けど機械天使なんて…聞いたことが無い」

「じゃあ、これから見せてあげるわ。手札から機械天使の儀式を発動!!!フィールドのサイバー・プリマとサイバー・プチ・エンジェルを生け贄に捧げ手札のサイバー・エンジェル だきに 茶吉尼 を儀式召

喚！！」

場の機械の小さな天使とバレリーナの女性が消えると4つの腕を持つ戦士が現れた。

機械天使の儀式

儀式魔法

「サイバー・エンジェル」と名のついたモンスターの降臨に使用する事ができる。

自分のフィールドまたは手札から儀式召喚するモンスターと同じレベルになるように
モンスターをリリースしなければならない。

サイバー・エンジェル 茶吉尼^{だきに}

儀式・効果モンスター

レベル8 / 光属性 / 天使族 / 攻撃力2700 / 守備力2400

「機械天使の儀式」により降臨。

フィールドか手札から、レベルの合計が8になるようカードを生け贄に捧げなければならない。

このカードは墓地から特殊召喚できない。

このカードが特殊召喚された時、フィールド上のモンスター1体を破壊する。

守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

茶吉尼 / ATK 2700

エンディミオン / M 1 2

「茶吉尼の効果発動！！特殊召喚成功時に相手のモンスターを1体破壊する！！ディフェンダーを破壊！！」

「ディフェンダーの効果発動！！ディフェンダー自身に乗っているカウンターを取り除き、破壊を無効にする！！」

何とか茶吉尼の効果をかわしたが、ディフェンダーの効果は1ターンに一度までだ。

「バトル！！茶吉尼で魔導騎士ディフェンダーに攻撃！！」

「きゃあ！！」

ツバキ / LP 3000 1900

「うっ…リバーズカード！魔導師の術印を発動！！フィールドのモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキか手札からレベル4以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚する！！マジシャンズ・ヴァルキュリアを特殊召喚！！」

魔導師の術印

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキからレベル4以下の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。

マジシャンズ・ヴァルキュリア / DEF 1800

「モンスターが…カードを伏せてターン終了!!」

明日香 / LP 4000 手札 0枚 茶吉尼 伏せカード 2枚

ツバキのターン

「私のターン!!ドロー!!」

手札に来たのはエンディミオン。茶吉尼と攻撃力は同じだが、特殊召喚するための生け贄も魔力カウンターも無い。その上魔力掌握等のサポートも無い。

「手札からワン・フォー・ワンを発動!!手札のエンディミオンを捨て、デッキからレベル1のエフェクト・ヴェーラーを特殊召喚する!!」

ツバキの場に青い髪の少女が現れた。

エフェクト・ヴェーラー / DEF 0

エフェクト・ヴェーラー

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻 0 / 守 0

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。この効果は相手のメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

「そして、手札から見習い魔導師を召喚!!」

見習い魔導師 / ATK 400

「見習い魔導師の効果発動!! エンディミオンにカウンターを乗せる!!」

エンディミオン / M 2 4

「行くわ…レベル4の魔導戦士ブレイカーとレベル2の見習い魔導師にレベル1、エフェクト・ヴェーラーをチューニング!!」

その瞬間会場にざわめきが走った。ユウとシゲルがシンクロモンスターを使っているのは知っていたが、ツバキまでもがシンクロを行うことができるとは誰ひとり思わなかったからだ。

「大いなる魔導師よ、人類の英知を与えたまえ!!」

4 + 2 + 1 = 7

「シンクロ召喚!! ライブラリー・マジシャン!!」

ツバキの場に本を持った老人が現れた。見た目は弱そうに見えるが、魔導師は見た目は恰好だけでは計り知れない力を持っている。

ライブラリー・マジシャン / ATK 2700

「更に魔力昇華を発動！！エンディミオンに乗ってるカウンターを4つ取り除き、カードを2枚ドロー！！」

エンディミオン / M 4 0

ツバキ / 手札1枚 3枚

「手札のレベル・マジシャンは場に魔法使い族モンスターが存在する時、墓地の魔法使い族モンスターを除外することで特殊召喚することができる！！」

レベル・マジシャン / ATK 600

レベル・マジシャン

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK 600 / DEF 0

このモンスターは通常召喚できない。

このモンスターは自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在し、

自分の墓地の魔法カードを除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。

このモンスターは特殊召喚に成功した時、

墓地の魔法カードを一枚手札に加えることができる。

フィールドに星の模様が服に描かれた魔導師が現れた。その手には一枚の魔法カードがあった。

「レベル・マジシャンは特殊召喚成功時墓地の魔法カードを手札に加えることができる！！ワン・フォー・ワンを手札に加えてそのまま発動！！手札のモンスターを墓地に送りサニー・ピクシーを特殊召喚！！」

エンディミオン/MO 1

ツバキの場にかわいらしい妖精の様なモンスターが現れた。それと同時に女子生徒から黄色い声援？が上がった。

「レベル4のマジシャンズ・ヴァルキュリアとレベル3のレベル・マジシャンにレベル1のサニー・ピクシーをチューニング！！」

そう宣言した瞬間辺りに黒い霧が立ち込めた。だが、霧は薄く、問題無くデュエルは続けられた。

「魔導師達の祈りを元に、今ここに混沌の赤き力を呼び覚ませ！！シンクロ召喚！！」

4 + 3 + 1 = 8

「漆黒を包みこめ…カオス・レッド・ドラゴン！！」

ツバキの場に現れた赤い竜　それはユウの持つスピット・シルバ
ーやシゲルの持つソウル・ブラックとは違う雰囲気を漂っていた。

「シンクロ召喚に成功したからライブラリー・マジシャンの効果で
カードを2枚ドロー!!」

ツバキ/手札0　2

そして、引いたカードを見てツバキは一瞬顔を曇らせた。相性はい
いが　正直このカードを使うのは気が引けるカードがあった。

だが、明日香にそんなことも言ってられなかった。

「このカードは自分の場にレベル8以上のシンクロモンスターが存
在する時特殊召喚することができる!!クリエイト・リゾネーター
を特殊召喚!!」

クリエイト・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星3/風属性/悪魔族/攻　800/守　600

自分フィールド上にレベル8以上のシンクロモンスターが表側表示
で存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる

ツバキの場に背に電動カッターの様な物を背負った悪魔が現れた。
てか、『リゾネーター』って

「俺のカード!?!」

「え!？」

「こっそり借りたよ(にっこり)」

観客席で叫んだシゲルにツバキはにっこりと小声で答えた。

「手札から魔法カード死者蘇生を発動!!墓地のエンディミオンを特殊召喚!!」

神聖魔導王エンディミオン / ATK2700
エンディミオン / M2 3

「レベル7神聖魔導王エンディミオンにレベル3、クリエイト・リゾネーターをチューニング!!」

レベル10 今まで3人のシンクロ召喚で一番最高レベルのシンクロ召喚だった

「光と闇の狭間にいる魔導師よ 全ての魔を従えよ!!」

7 + 3 = 10

「シンクロ召喚!!神帝魔導エンディミオン!!」

フィールドに様々な杖を持ったエンディミオンに似た魔導師が現れた。それ以前に観客席ではレベル10の魔法使いとなるなどのような効果を持っているのか、という声が多く上がっていた。

エンディミオン / ATK 3000

「攻撃力3000が…2体も…!!」

「バトルフェイズ!!カオス・レッド・ドラゴンで茶吉尼に攻撃!
!デストラクションフォース!!」

そう宣言した時、明日香の伏せカードが上がった。そのカードは十代とのデュエルでも使った罠カード

「ドゥーブルパッセ!!相手が自分フィールド上のモンスターに攻撃宣言をした時、その攻撃は私への直接攻撃となり、その後自分のモンスターの攻撃力分のダメージを与える!!」

ドゥーブルパッセ

通常罠

相手モンスターが自分フィールド上の表側攻撃表示モンスターの攻撃対象になった場合に発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃は自分への直接攻撃になる。

その後、相手プレイヤーは攻撃対象となったモンスターの直接攻撃時の攻撃力の数値分のダメージを与える。

そしてドゥーブルパッセの発動を見た十代は慌てていた。

「もしこれでツバキが何も出来なかつたら明日香の勝ちだ!!」

「まずはカオス・レッドの攻撃を受ける　きゃああああ!!!!」

明日香 / LP4000 1000

「っ…そして、茶吉尼の攻撃力分2700のダメージを受けてもら
う!!!」

「リバーズカード、傷印の封殺を発動!! 相手が発動したダメージ
を与える効果を半分にして、お互いに魔法カードを1枚手札に加え
る!!!くうう!!!」

傷印の封殺

通常罨

相手が「ダメージを与える」効果を持つ魔法・罨・モンスター効果
を発動した時発動できる。

手札を一枚墓地に送りそのカード効果によって自分が受けるダメー
ジを半分にする。

その後互いにデッキから魔法カードを一枚手札に加える。

ツバキ / LP1900 550

他がに手札に加えるカード それがこのデュエルの勝敗を喫した。

「（私が手札に加えたのはミスフォーチュン…これでツバキの場の
モンスターの攻撃力の半分のダメージを与えれば…）」

ミスフォーチュン

通常魔法

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して
発動する。

選択したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手ライフ
に与える。

このターン自分のモンスターは攻撃する事ができない。

もし次のターン明日香のターンが回ってくれば、明日香の勝ち『だった』　そう、『だった』ら

「神帝魔導で…」

「攻撃宣言前にリバースカード、闇の呪縛を発動！！エンディミオンの攻撃を封じて攻撃力を700ポイントダウンする…！！」

エンディミオン / ATK 3000 2300

「これであなたはもう攻撃するモンスターはいない…さあ、ターン終了を宣言しなさい…！！」

「まだ私のバトルフェイズよ…墓地から魔法カード都市の魔導図書館を発動…！！」

「……………墓地から魔法…！！……………」

「墓地から…！！」

「墓地から魔法…！！」

『ぼぼぼぼ、墓地から魔法カードを発動したノーネ…！！』

……………はい、少し遊んでみました。てか、遊びすぎました。

そう宣言した時ツバキのセメタリーゾーンから一枚の魔法カードが現れた。

「このカードは自分の場に魔法都市エンディミオンが存在する時、墓地から発動することができる!!」

「いつの間に……さっきの傷印の封殺の時ね」

そう、その時墓地に送ったカードだ。そして、『傷印の封殺』『都市の魔導図書館』はユウのスピリット・ソウルと同じ様にペガサスから送られたカードだ。

「都市の魔導図書館は墓地に存在する魔法カードを3枚除外してフィールド上のカードに魔力カウンターを4つまで乗せる!!」

都市の魔導図書館

通常魔法

フィールド上に「魔法都市エンディミオン」が存在する場合墓地に存在するこのカードと魔法カードを3枚除外し、

自分フィールド上のカード1枚に魔力カウンターを4つまで乗せる事ができる。

この効果はバトルフェイズ中でも発動できることができる。

「神帝魔導に魔力カウンターを3つ乗せる!!」

「（一気に3つも……）でも、魔力カウンターが乗っても意味は無い!!」

「神帝魔導の効果発動!!このカードに乗っている魔力カウンターの数で効果が決定する!!3つのおつてる場合は相手の魔法・罠の効果が無効にする!!」

「なんですって!?!」

神帝魔導エンディミオン

シンクロモンスター（効果）

星10 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK3000 / DEF2300

「神聖魔導王エンディミオン」+チューナーモンスター

このモンスターは上記のモンスターを素材にしたシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

1ターンに1度、このモンスターは「魔法都市エンディミオン」に乗っている魔力カウンターをこのカードに移してもよい。この効果を発動したターンこのカードは攻撃することはできない。

このモンスターに乗っている魔力カウンターの数によって以下の効果を得る。

1個

自分フィールド上のカード1枚に魔力カウンターを乗せる。この効果は自分のターンのスタンバイフェイズのみ発動できる。

2～3個

このモンスターが表側表示で存在する限り、自分のターン中相手の魔法・罫の効果は無効にする。

4～5個

1ターンに1度、自分フィールド上のモンスターは効果、戦闘では破壊されない。

6個

1ターンに1度手札の魔法カードを墓地に送り、墓地の魔法カードを手札に加えることができる。

7個

手札の魔法カードを除外することで相手フィールド上のカードを1枚破壊する。この効果は1ターンに1度しか発動できない。

このモンスターが破壊された時、墓地に存在する「神聖魔導王エンディミオン」を1体選択することができる。選択したモンスターを特殊召喚することができる。（この効果は選択した「神聖魔導王エ

ンディミオン」の効果で特殊召喚した扱いになる)

「そんな…」

「まだバトルフェイズ中だよ…エンディミオンで茶吉尼に攻撃！
マジック・ディパード！」

「きゃあああああ！……！」

明日香 / LP 1000 700

「最後！！ライブラーマジシャンで攻撃……！」

「きゃああああああああああああああああああ……！！！！！！
！……！！！！！！」

明日香 / LP 700 0

『そこまで！！勝者シニョールツバキ……！！！！』

こうして最後の代表が決定した。

「はあ……強いわね……ツバキは」

「そ、そんなこと……それに……少しずるしちゃった……」

そう言つてツバキはデッキから『クリエイト・リゾネーター』を取り出した。そう、先日のデッキ調整時にシゲルがデッキのカードをツバキが使っているのだ。ちなみにシゲルのデッキには剣闘獣は本来2枚積みだが、チューナーは一枚しか入れてない。

つまり本来と違うデッキでシゲルはタッグを行ったのだ。

「でも…本人は気にしてないみたいよ」

「え？」

明日香の言っとおりシゲルは三沢とデッキの内容について語り合っていた。

「でも、後で返した方がいいわね」

「そうですよね」

こうして対抗試合の代表は決定された

第二十二話 選考戦開始！！魔法使いVS機械の天使（後書き）

はい、というわけで選考会でした。

ユウ「どうしてボクとシゲルのデュエルがダイジェスト？」

なんか俺の中でブルー「バカが多いってイメージだから…それで2人がてこずる描写が思いつかない。

十代は…まあ、既に分かっているしいいかな。てな訳でツバキVS女子代表

ツバキ「じゃあ、私が明日香さんと戦ったのは？」

女子でほかにももえかジュンコ…オリキヤラは出す気はなかったから三人のうちの誰かで、ももえは相性的に微妙でジュンコはハーピィでの展開が思いつかないし…一応GXヒロイン役だった明日香ならちようどいいかなって感じ。

シゲル「俺のクリエイトをツバキが使ったのは？」

作中でも書かれてるようにツバキのカオスと相性が良かったから。

まあ、このままツバキが使うことになるけど…理由は次回で。

オリジナルカード

魔導師の術印

レベル・マジシャン

傷印の封殺

都市の魔導図書館

神帝魔導エンディミオン

ユウ「次回は？もけもけ？本番？」

いや、ちよつくらオリジナル要素を含ませるためにオリジナルストーリーをやる。

あとなんとなく『次回の最強カード』も今回からしてみる。

次回予告：ユウ

突如としてボクとシゲル、ツバキは見知らぬ場所に飛ばされた。そこにいたのは『悪魔』と『チビ龍』を守る少女だった。そしてシゲルはその悪魔と対峙することになったの。

そして、その場所がどこなのか分かった。そこで抱えている問題もだけど、ボクたちはその問題に首を挟まなくちゃいけない理由がある。待っててね

次回第二十三話 異世界？チビ龍？そして精霊の絆

最強カードは『マジシャンズ・ヴァルキュリア』

次回もよろしく頼むぜ

第二十三話 異世界？チビ龍？そして精霊の絆（前書き）

今回からオリジナルストーリーに入ります。

ちなみに今回はデュエル無しです。

第二十三話 異世界？チビ龍？そして精霊の絆

ノース校対抗戦：当日

「いよいよ今日だね…」

「なんだ？緊張してるのか？」

海岸でのんびりと待ち時間まで釣りをしているユウとシゲルがそう言っていた。どうもユウはタッグデュエルが苦手らしく、誰かとコンビになると足を引っ張るかもしれないというプレッシャーで上がってしまおうようだ。

「まあ、あの時と違って負けても心配ないからな。気楽に行こうぜ」
「うん…」

「2人ともノースの人たち来たよー！！」

遠くの方でツバキが2人を呼んでいた。それを聞いたシゲルは手早く道具をかたずけるとユウを先に港に行かせた。

レッド寮：物置

道具を置いて、腰に付けたデッキケースを確認したシゲルは外に出て 身構えた。

「たく…これから学校行事でダルイつてのに…なんのようだ…？」
「いい加減協力して貰うわよ…獣斬君」

そこには数人の時空管理局局員と共にいたリンディがいた。だが、
全員杖デバイスを持っており、それをいつでもシゲルに向けて攻撃をできる
ようにしてあった。

「生憎だが断る。俺はお前達に協力する気は無い。そしてカードも
渡す気は無い」

「そうじゃないわ…あなたが夢で見たっていうシンクロモンスター
…それについてね」

「…どういうことだ？」

「シンクロモンスターは時空管理局の本局があるミッドチルダで出
回ってるロストロギアに似た力なのよ。…そしてこの世界のデュエ
ルモンスターの生みの親のペガサス・J・クロフォードが作りだ
したシンクロモンスターに貴方が一枚咬んできると睨んだけど」

リンディの予想通り、ペガサスはシゲルが話したカードを元に作っ
た。だが『魔轟神』というカテゴリのカードはペガサスも作って
おらず、シゲルも知らなかった。

だが、リンディの説明に一つの仮定が浮かんだ。

「一つ聞きたい。『この世界の生みの親』ってことは他の世界にも

デュエルモンスターズがあるってことか？」

「ええ…其々作った人や由来は違うけど…以前あなたが戦った志度という少年が使ってたカードはミッドチルダでメジャーなカードよ」

「メジャー？シンクロモンスターは普通に出回っているのか？」

そう聞いたリンディは少し説明しずらそうに言葉を摘んだ。

「実を言うと…シンクロモンスターは市場に出回っているわ。けどその大半は本物のシンクロモンスターのカードをコピーした偽物よ。本物のシンクロモンスターはとてつもない力を秘めているの」

そう聞いてシゲルは納得した所があった。志度との戦いのおかげに奴の切り札のレヴァアタンの攻撃だけ、本能的に危険だと察知した。だがレイジオンやヴァルキュルスには無かった。

おそらくレヴァアタンはその『本物の』シンクロモンスターのだったのだろう。

「私達の目的はその本物のシンクロモンスターを探ること。そしてこの世界でシンクロモンスターの作成に関わった貴方に協力をして「嘘をつくな」え…？」

「俺がシンクロモンスターの制作に関わったのが確かだ…が、初めは違う理由だった。ユウの持つロストロギアを奪うために、そして次に俺とツバキのロストロギアを奪うために俺達の前に現れた…つ

まりお前らは 「

そこまで瞬間リンディの周りにいた局員がシゲルに向かって魔法を放った。

それによりシゲルの姿が砂煙に覆われ見えなくなった。

「っ!?!?」

「提督、ロストロギアは直ちに回収しなくてはいけません…」

リンディは驚いていたが、ため息をつくとまだ姿の見えぬシゲルの元へと歩いて行った。

シゲルの傍らに落ちているはずのロストロギアとシンクロモンスター
ーの回収にへと

が

「あぶねえ……ウリイのサポートが無かったら死んでたな……」
「「「なっ!?!」」」

何故かホプロムスに守られていたシゲルがいた。しかもその周りに膜状のドーム　　デイフェンシブタクティクスのような物が張っていた。

「な……なんなの……それは……」

選考会：夜　　ユウとシゲルの部屋

「ごめん……このカード……返す」
「あゝ構わねえよ」

交流試合のデッキ調整の為にツバキが2人の部屋に来た時、デッキ

に代表選考戦でシゲルから『無断で』借りたクリエイト・リゾネーターのカードがまだあったので返そうとしていた。

「それに…『そいつ』もツバキの所に行きたがってるみたいだしな」
「え？」

そう言ったシゲルの目線　ツバキの腰の後ろには　クリエイト・リゾネーターがいた。

「あ…かわいい…」
『グリ？』

今にも抱きつきそうなツバキを愛くるしい表情でクリエイト・リゾネーターが見上げていた。

その2匹の生物に　2匹？

『キュア？』

クリエイトの横に赤いチビ龍が浮かんでいた。それに3人が大きなため息をついた。
ちなみにユウの膝の上には白い…いや、銀色のチビ龍が、シゲルの肩の上には黒いチビ龍がいる。

『グア？』
『ガア？』

3人のメインデッキにこの3匹の精霊と思われるドラゴンはいない。
エクストラには

『スピット・シルバー・ドラゴン』

『ソウル・ブラック・ドラゴン』

『カオス・レッド・ドラゴン』

この3体しかいない…が、どうして精霊になっている。そしてなぜ
デフォルメなんだ…

「……まあ、できる限りクリエイトのやりたいようにさせたいし…
お前が持つといてくれ」
「分かった。名前…どうしよう」

「クリエイト・リゾネーター」は流石に長すぎるから、ツバキはイ
ナやダークの様に名前をつけようとして考えていた。

「うん…名前…」
『グリ？』

「グリ…グリ…うん、『グリ』、これが貴方の名前『グリ』」

良かった」

グリという名前が気に入ったのか、クリエイト・リゾネーター（グリ）は喜んでいた。

で、次の問題は　なぜデフォルメになったのか分からない3匹の子ビだ。

「……ウリイかダークはいないの？」

「……俺のデッキには今いないな」

「私も…精霊界に戻ってる」

ユウは精霊界にや、精霊に詳しい2体に聞こうとしたが、生憎留守の様だった。イナも神楽も精霊界に戻っており、ツバキもデッキを取り出してそう言おうとした　が、

「……えっ！？/なっ！？/きゃ！？」「」

突然ツバキの周囲が輝いた。

あまりの眩しさに3人と4匹の聖霊は目を瞑ってしまった。

そこには誰の姿も無かった。

アースラ

「あれ…？」

「どうかしたの？」

リンデイにお茶を渡したエイミイが首を傾げていた。

そう、エイミイの見た反応は見間違いではなかった。だが、そのことを管理局が知ったのは大分後だった。

??????

「っ…！？…ここは…どこ…！？」

「何なんだ…！？」

ユウは眩しさが無くなるのを確認して目を開けると何処かの街中の路地にいた。

そこには全員 同じように驚いているシゲルとツバキ、グリと黒と赤のチビ龍が2匹

「カオス何処行つた？」
「キュア！！！！！！」

少し離れたところでカオスらしき泣き声が聞こえた。

「あっちだね」
「て言うか…何かに襲われてないか？」
「行ってみようよ」

そう言つて3人は移動した。ちなみに精霊達は3人の肩か頭の上に乗っている。

??????

「クツ…お姉ちゃんの帰りまで…私が此処を守る役目…なのに…」
「グガガガガ…いい加減諦めな…今なら我の専属のペットとして飼つてやる」

3人が向かった先にはカオスを守るように一人の少女が得体のしれない悪魔と対峙していた。だが少女一人に対し、悪魔は10体以上いた。

「断ります!! 私はあるたたちには屈しません!!」
「そうか…ならば…やれ!!」

先頭の悪魔の言葉に促されるように他の悪魔たちが少女に襲いかかった。

少女はもう戦う力が無いのか、カオスを抱きかかえると悪魔に背を向け、自身の体を盾にした。

「グガガガガ「おらあ!!」があ!?!」

少女に襲いかかっていた一匹の悪魔が誰かに蹴り飛ばされた。そこにいたのは赤い服を着た少年 シゲルがいた。

少女の方に心配そうにユウとツバキが近寄っていた。すると3人を見た少女は驚いた声を上げていた。

「なんで…此処に人間が…?」

「「え?」」

少女の言葉の意味が分からなかったが、とりあわずは悪魔たちをどうにかするのが先決だった。

「グガガガガ…さて…どう料理するかな…」
「グダグダ言っただけでかかって来い！」

「…グガガガガガ！！！！」「！！」
「危ない！！」

シゲルの言葉に触発されたのか3体の悪魔が襲いかかってきた。それに少女が助けに行こうとするが

「え…？」
「あっけねえ」

3体の悪魔が倒れていた。全部シゲルがひざ蹴り、回し蹴り、肘打ちで倒したのだ。

「ほう…いい腕だな…が、人間ごときが我に歯向かうな！！！」
「っ！？」

悪魔が何か天を仰ぐような仕草をして、それと同時に不穏な空気が漂った。
それに嫌な予感を感じたシゲルはすぐにその場を離れるとそこに、雷が落ちた。

「あぶねえ…気づくの遅れたら死んでたか…テメエが『スカル・デ
ーモン』だってな…」

「が……!!」
「ツバキ？何したんだ？」

動かなくなったデーモンを見て、威嚇する咆哮を発動させたツバキの方を振り向いた。

ツバキはデュエルディスクを展開させ、魔法・畏ゾーンに威嚇する咆哮を発動させていた。

「此処では使ったカードが現実に発動されるらしいの」
「なるほど……じゃあ……」

そう言ってシゲルはデーモンを見ると効果が切れたのか、再び攻撃を行おうとした。

「ごさかしい真似を……魔降雷……!!」
「来い！ホプロムス……!!更にディフェンシブタクティクス……!!」

デーモンの落とした雷とホプロムスの張ったバリアがぶつかり合うとで辺りに砂煙が立ち込めた

「行けえ……!!紅蓮滅殺拳……!!」
「グオオ……!!」

が、砂煙の奥から右手に炎を身に纏った火之迦具土がデーモンに襲いかかっていた。

「クツ…この借りは必ず返すぞ…!!!」

そう言い残しデーモンの召喚は部下を引き連れて撤退した。無理に追撃する必要も無いので3人はデュエルディスクを治めると少女の方へと歩いて行った。

「大丈夫？」

「あ、ありがとうございます…！」

「…?…マジシャンズ・ヴァルキュリア？」

ツバキが少女がマジシャンズ・ヴァルキュリアだと気が付いた。言われてみれば確かにその通りだった。

「え…えと…とりあはず私の家に行きましょう」

ヴァルキュリアの家

「キュリア」

「こら、カオス！」

カオスはヴァルキュリアの膝の上が気にいったのか降りようとしな
い。それにツバキがカオスとしかると、少ししょんぼりしたカオス
はトコトコとスピットとソウルの所も出歩いて戯れていた。

「…所でヴァルキュリア…此処は？」

「此処は魔法都市エンディミオンの下町です。それと私はルキと呼
んでください」

ルキの説明で此処が精霊界だと確定した。しかしなぜエンディミオ
ンに飛ばされたのか分からなかった。

「ねえルキ、あいつらはなんなの？」

「…最近エンディミオンの外れに謎の建造物が現れたんです。そこ
から最近デーモンの召喚の様な悪魔が…。悪魔族のその集団は町に
現れては悪さをするので…町から調査団として強力な魔導師達が向
かったのですが…」

そこまで言っつてルキは言葉を閉ざした。おそらく先程の状況、そし
てこの家にある写真に映った多くの魔導師達、町の様子

「なあ、ルキ」

「どづかしましたか…？」

シゲルの言葉に顔を上げたルキの目には涙が溜まっていた。誰か
家族の誰かがその建造物に向かったらしい。そのことを思い出し
ていたのかもしれないが、3人はそんなルキに声をそろえて言った。

「……その建造物はどこ？」

「え……？も、もしかして行くんですか……！？」

「うん、その精霊達を助けたいんだ」

ルキの言葉にユウは頷き、微笑んだ。だがルキはそれに反対した。

「でも！あそこに行けば確実に殺されて」

「ルキ……私にとって……精霊を見捨てるのは……私の家族を見捨てるの
と同じ感じがするの……」

必死に止めようとするルキにツバキは一枚のカード　闇紅ダクの魔導
師のカードを取り出した。そしてそのカードをルキに見せた。

「これは……闇紅の魔導師？」

「うん……私の……大事な家族なの」

その言葉の意味をルキは分からなかった。なぜカードが家族ということなのか、そしてなぜこの3人が精霊に手を貸そうとするのか。

「私…昔から一人ぼっちだったの。家族がいなくて…寂しかったの。そんな時ダークがいてくれたから」

「ダーク…もしかして闇紅の魔導師の精霊のダークですか!？」

ルキの言葉に3人は顔を見合わせた。ダークの事を知っているらしい。もしかするとダークの他にイナやウリイの事も知っているかもしれない。しれなかった。

「ダークの事…知ってるの？」

「…はい。実は…先程言っていた調査団の指揮を執っているのが…ダークさんなんです」

「…え?」「」

ダークが調査団の指揮官だった。だが、ダークはそのことを一度も話していなかった。するとルキは何か思い出したように室内から一枚の手紙を取り出した。

「実は…ダークさんが…自分達を訪ねた人間が現れたならこれを渡せと…」

「ダークが…?」

手紙を受け取ったツバキはその紙に書かれている文章を読み上げた。

『これを読んでいるということはこちらの世界に来てしまっている様だな。今私達が置かれている状況を時間が無いから簡単に書き遺しておく。』

此処、エンディミオンは私の故郷だ。度々マナから連絡が来ていたのだが、最近エンディミオンで不穏な空気が流れていると聞く。調べるために私と、イナ、ウリイ、神楽を中心に調査団を派遣することになった。だが、街外れで奴らを見かけたのでこれを残すことにしておく。詳しいことはルキに聞いてくれ。』

ただそれだけしか書いていなかった。だが、ダークの他にイナ達が此処に訪れていたようだ。ユウはその手紙を聞き終えてルキの方を向いた。

「ウリイとイナ…神楽まで此処に来てるのか…」

「……ルキ、一体何が起こってるの？ダークの言う『奴ら』って…？」

「…ダークさんが言うには…『時空管理局』という組織だと」

「『管理局!?!?!』」

ルキの言葉に3人は大きな声を上げてしまった。人間界で自分達に

構ってくる『敵』それがまさか精霊界にもいるというのだ。

「…奴ら絡みか、完全に関わらないわけにはいかないな」
「そうだね」

「まさか…本当にあそこに行くんですか！？あそこに行ったら殺される可能性だってあるんですよ！！…なのにどうして」

ルキは必死に3人を呼びとめようとしていた。だが、3人は止まることはできない。何故なら

「…家族が待ってる」

「か…ぞく」

「精霊だの人間だの、そういう問題じゃない。家族がそこで戦ってるなら助けに行く」

「まあ、そういうことだ。場所を教えてください」

「……………分かりました」

ユウとシゲルの言葉にルキは決意したのか、自身の杖を持つと先導して行った。

???前

「此処か…」

ユウがそう言っただけで見つめてる先には、平べったく大きな建物があった。見た感じが家やビルというより研究所の様な感じだった。

「さあて…所でチビ共は、カードに戻れるのか？」

シゲルが準備体操の様に体の関節を伸ばしていると、自身の背にくっついてるソウルを見てそう聞いた。ソウルは愛くるしい表情で「グア？」と首を傾げている。どうやらできない様だ。

『グリ〜』

「あれ？グリはカードに戻れるの？」

訂正、どうやらメインデッキに投入されているグリは戻れるようだった。

が、スピットも戻れないところを見るとどうやらエクストラのモンスターはデッキに戻ることはできないようだった。

「仕方ないね…ルキさん。この子たちをお願いします」

「前から来るやつは俺とユウで潰す。後ろからはツバキ、ルキはチビ龍の護衛ってとこか」

4人がどうするのか話し合っていると前方の扉から誰かが飛び出してきた。

「此処は立ち入り禁止だ！今すぐここから立ち去れ！！」

「？あなた「ああ？立ち入り禁止？管理局が精霊界で何をしてんだ？」（シゲル？）」

ユウが出てきた人に誰なのか聞こうとしたのだがシゲルはそれを手で押さえてその管理局員に聞いた。

「悪いが秘密事項で話せない！此処は管理局の魔法研究所「嘘よ！！」「っ！？」」

今度は管理局員の言葉にルキ被せた。そう、魔法使い族であるマジシャンズ・ヴァルキュリアには分かっていた。『この研究所に魔力が感じられないのが』

「お姉ちゃん達は何処！？此処にいるはずよ！！」

「っ！何の事が分からんな…さつさと」「スピリット・バーンノラカン、やれ」「グオオオオオ！！？」

必死にルキが涙を流しながら声を荒げるが、管理局員は白を切っていた。それに少し苛つとしたユウとめんどくさそうにシゲルがカードを発動させていた。そして気絶寸前の倒れた管理局員を踏みつけ

「「邪魔」」

と言い残し中に入って行った。それにルキは驚いて呆けていたが、ツバキがルキを引っ張る形で中に入って行った。

内部

「侵入者だ!!」

「捕えろ!!」

「多いね…来て、阿修羅！ネファルロ！」

「ウザったいんだよ…来いディカエリイ！ラクエル！」

前方から現れた管理局員は2人が蹴散らしていた。ちなみに防御はスピリット・ガードとホプロムスによって十分だった。

ちなみに後方かというと

「魔導騎士ディフェンダー！魔導戦士ブレイカー！アーカナイト・マジシャン!!」

ツバキ一人で十分だった。ちなみにエンディミオンを発動させていると、局員が魔法で攻撃しようとするとかウンターが乗っていた。それによりディフェンダーの効果で守りは万全だった。

ルキはちょうど中央でたまにツバキの手伝いをしていた。

一方

「はあ…はあ…もううー！多すぎだよ！！」

「愚痴を言っただうにかなるもんかの？」

「ウリイの言うとおり、一体でも多く倒すのが先決の様だな…」

イナが自身の杵を持って攻撃しようとした局員の背後から攻撃をし、ウリイが局員の杖を破壊しダークが止めを刺す

その様な連携でもうどれほどの時間がたったのだろうか。3人？の他の調査団の仲間達は2日前にほとんど捕えられてしまった。何とか逃げ延びた者達の多くは動く事もままならない怪我を負っていたため一先ず近くの洞窟に避難させた。

だが、捕まっている者も多く3人はその救出の為に収容部屋を目指していたのだが、待ち伏せされていた。

「これでくたばれ！！ディスターショット！！」

「これしきッ（グッ…体が…！！）」

「「ダーク！！！！」」

局員の攻撃からイナを守るうとしていたダークだが、腕がもう動か
なかつた。腕だけではなく体も動かなくて、そのまま攻撃を受けそ
うになった。

「ホプロムス、ディカエリイよ一体になり現れる!!マキロ!!」

「「なっ!?!」」

ウリイに向かっていた攻撃を防いだのは巨大な要塞　マキロがその攻撃を防いだ。
そして出入り口には

「薙ぎ払え、闇斬審!!」

「吹き飛ばせ!バーストブレイカー!!」

「いっけえ!!マジック・テンペスト!!」

今ここにいる精霊のマスターである3人　闇刀神を召喚して敵を切り伏せているユウ、ヘラクレイノスを召喚し、衝撃波で敵を殲滅してるシゲル、マジックテンペスターを呼び出し撃ち落としてるツバキがいた。

「な、なんで此処に!?!」

「水臭いよイナ!!どうして相談してくれなかったの!?!」

なぜここにいるのか分からなかった。ダークの予想ではまだ2日ほ

ど先だと予想していたのだ。

「とにかく、まずは此処をかたずけるぞ、ウリイ!!」

「了解：ラクエルよ：我に鎧を授けたまえ!!」

ウリイがそう言うとうウ達を守っていたラクエルがウリイと一体化する。そして辺りを吹き飛ばす風を纏ったウリイ　　ガイザレスが現れた。

「行くよ、ダーク!!」

「分かった：テンペストよ、我に力を…」

ダークの言葉に反応するようにマジック・テンペスターとダークが一体となり、黒い服を身に纏った魔法神官　　ブラック・ハエロド・ファントムが現れた。

「イナ、結構派手に行くよ!!」

「うん、マキロ！闇刀神！一緒に行こう!!」

イナの言葉に頷く様に顔を動かしたマキロとただ無言で立ち上がった闇刀神は共に光の粒子になると一つの合わさった。そしてかつてシゲルとユウの切り札として危機を救ったモンスター　　ヴァルキリーが現れた。

とこの時、局員は嘗めていた。たった3人+4体の精霊相手に余裕だ

第二十三話 異世界？チビ龍？そして精霊の絆（後書き）

というわけで精霊界編（仮）突入です

ユウ「なんで（仮）？」

いまだにこの精霊界でどのようなアクションを起こすのか思いつかないから。

ひとまず伏線確定やシゲルの新たな力の説明を含めてどうするか悩んでいるところ。

そのうち確定したストーリー名を出すと思う。

シゲル「じゃあ、俺の攻撃を防いだ力とかはまだ先か？」

そうなるね。ついでに設定ではメインデッキに投入されている精霊はカードに戻ることが出来る。エクストラに入ってる精霊はカードに戻るとはできない感じです。

ツバキ「ルキの説明は？」

今のところ精霊界のメインキャラ予定：説明するとマジシャンズヴアルキュリアでエンディミオンに調査団が言っている間護衛として残った魔導師ってぐらいかな。

次回予告：シゲル

ウリイ達の救出に奮闘する俺たちだったが此処でのそれぞれの役割を決めることになった。だが、捕まってた奴らが一世一代の大勝負をして脱獄を試みていた。

時間がなく、俺は此処の防衛を任されていた。

此処を守れなかったら全員変えることは不可能に近くなる
だが、現れたのは復讐に燃えるアイツだった。

帰る道は、俺が守る。

次回第二十四話 帰路確保 ライフポイントの恐怖？

最強カードは『剣闘獣フレイム・ファング』だ。

次回もよろしくな。

第二十四話 帰路確保 ライフポイントの恐怖？（前書き）

今回は結構あっさりした内容です。

第二十四話 帰路確保 ライフポイントの恐怖？

「戦乱の審判！！」

「凱陣旋風！！」

「セレスティアル・ブラック・バーニング！！」

「……ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！！！！！」

「……」

ヴァルキリーの剣技で、ガイザレスの竜巻で、黒の魔法神官の炎で
局員は次々に倒れて行った。

「シゲル、今のうちに話すことが二つある」

「なんだ？」

ガイザレスがヴァルキリーと黒の魔法神官のサポートをしながらシ
ゲルに話しかけた。ちなみにユウ達デュエリストは魔法や罟、モン
スターでサポートをしている。

「神楽の事だが……はあー！！」

「そっぴやいな……捕まったのか？ムルミロ、破壊しろ！！」

ちなみに声で分かるように2人は戦いながら会話をしている。他の2人はサポートだけで手一杯だった。

「いや、神楽は安全な場所に避難している…我らは捕まった同胞を助けに…はあああ！右が収容部屋、左は実験室だ！！」

「なんでそんな事が…バーストブレイカー！！知ってるんだ！？」

「実は3日前に此処に攻め入った時、偶然にもこの建物の図面を手に入れたのじゃが…流石に罠は書かれておらん…そして仲間は捕えられ、脱出時にほぼ全員が負傷をしたのじゃ。なんとか捕えられた者達を助けに来たのだが…この様だ」

ウリイはガイザレスからベストロウリイに戻っていた。ちなみに周囲はもう局員で戦える者はいなかった。ウリイとダークを中心に全員が輪になって話しあっていた。が、ルキはそこら辺を走り回っているチビ龍を追いかけていた。

「ちよい待て…3日前って、お前らが精霊界に発ってまだ数時間ぐらいだぞ」

「………恐らく精霊界と人間界の時間は違う様じゃ。時間的に…こっちで1日が向こうの1時間といったところじゃの」

「なるほど…じゃあ早く捕まってる人を…」

「待つんだ」

と言いながらユウが先を歩こうとしたがダークに呼び止められた。

ちなみにダークもイナも元に戻っている。が、どうやら本来とは違うヴァルキリーや黒の魔法神官といった力は疲れる様でぐったりしている。

唯一無事だったウリイはガイザレスはウリイの上位種みたいなもので慣れていろいろらしい。

「もう一つのはすべきことは、二日前に気になる事を聞いた」
「気になること?」

「実はその実験室から女の子の声が聞こえるって。よく耳を澄ませないと聞こえないぐらい小さいけど…研究員に女性はいないらしい」

「……バリバリ気になるだろ、それ」

イナの言葉にシゲルがそう返した、とその時ルキがダークに聞いた事を聞いた。

「ダークさん、お姉ちゃんも捕まって…?」
「いや、マナは少し離れたところに負傷した者が隠れている洞窟がある。その防衛を任せた…幸い怪我も無い」

ルキはダークの言葉を聞いて安心した。だが、事態は徐々に悪くなっていく。室内の赤いランプが点滅した。

『緊急事態発生！緊急事態発生！！囚人が暴れ出している！！すぐにB-2地区へ！！』

「どうやら時間がなさそうだな…」

「じゃあ…私が捕まってる人の所に、ユウがその研究室、シゲルは此処で退路の確保は？」

「良い案だな…じゃがの…いいのか？確実に進む方が厳しい道だぞ？」

ツバキの提案にウリイが聞いた。確かに此処で防衛するより、先に進む方が体力的にも精神的にもしんどくなっていく。

「けど…ダークは皆を助けたいでしょ？」

そうツバキはダークを見た。確かに故郷のエンディミオンの人たちが捕まっているダークにとってはエンディミオンの人たちの救出に行きたかった。だが、バラバラで行動するほどの力は3人に残っていないかった。

「だから、ダークのマスターの私が付いて行ってあげる。此処を封じられると外に出れなくなるから一番強いシゲルに守ってほしいの。それでユウはその研究室の女の子って言うのを調べて」

ブラック・デーモンズ・ドラゴンだ。その声はいくつかに重なって聞こえ、部屋の中で反響していた。が、どう見てもシゲルの事を知っているようだった。

「まあ…聞くけどよ…お前あの時のデーモンだよな？」

「……そうだア！！だが今の俺は紅眼の黒龍と同一になって新たな力を手に入れたアア！！」「」「」

その声を上げたブラック・デーモンズ・ドラゴンの周囲に石板状のカードが現れた。

「なるほど…それがお前のデッキか」

「……そうだア！！貴様は此処で終わるウ！！」「」「」

ブラック・デーモンズの叫び声を聞いてシゲルはため息をつく。墓地とディスクにセットしていたカードをシャッフルし、デッキにセットした。するとウリイはシゲルのデッキに戻りソウルはシゲルの後方まで歩いて行った。

「最初から決まった勝負なんて…どこにもないぞ」

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

「クククデユエル!!」「」「」

シゲルがディスクを構え、カードを5枚引くと同時にブラック・デーモンズの前に5つの石碑が現れた。更に

「ッ……またこのドームかよ」

「ククク……その様子だと知っている様だなア……」「」「」

例のダメージが実体化するドームが辺りを包み込んだ。だが、臆することは無い 『ダメージを受けなければ』 いいのだから

シゲルのターン

「俺のターン!!俺はフィールド魔法剣闘獣の檻 コロッセウムを発動!!」

フィールドが無機質な部屋から巨大な檻の様な場所へと変わった。

「そして手札からスレイブ・エイプを召喚!!」

スレイブ・エイプ/DEF300

「カードを2枚伏せ、ターン終了!!」

シゲル

LP4000 手札2枚

スレイブ・エイブ

伏せカード2枚

剣闘獣の檻 コロッセウム (0)

ブラック・デーモンズ・ドラゴンのターン

「「「「私のターン！！我はヘルウェイ・パトロールを攻撃表示で
召喚！！！！」」」」

ヘルウェイ・パトロール / ATK1600

ブラック・デーモンズ・ドラゴンの場に真つ黒の警察官の様な悪魔
が現れた。ちなみにルキを助ける時に倒れていた悪魔だ。

「「「「バトルウ！！ヘルウェイ・パトロールで雑魚に攻撃イ！！
ヘル・チエイスイ！！！！」」」」

ヘルウェイ・パトロールが持っていた長い警棒を振り上げるとスレ
イブ・エイブ目掛けて振り下ろした。

「クツ…だが、スレイブ・エイブが戦闘で破壊されるとデッキから
剣闘獣を一体特殊召喚する！！」

「「「「ヌルイイ！！！！ヘルウェイ・パトロールが戦闘で破壊した
モンスターのレベル一つにつき100ポイントのダメージを与える
ウ！！！！！！喰らえエ！！！！」」」」

「なに…っ!!」

ヘルウエイ・パトロール

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1600 / 守1200

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル×100ポイントダメージを相手ライフに与える。

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。

シゲル / LP 4000 3800

シゲルはライフが減ると同時に体に激痛が走った。だが、志度との戦いよりは軽いものだった。

「クッ………だが、スレイブ・エイブの効果で剣闘獣ベストロウリイを召喚!! 来いウリイ!!」

「うむ…さつさと終わらせるぞ!」

場に現れたウリイはやる気満々だった。さらにフィールド魔法のコロッセウムに光が灯った。

「コロッセウムの効果発動!! デッキからモンスターが特殊召喚さ

れた時、カウンターを乗せる！そしてカウンター一つにつき剣闘獣の攻撃力を100ポイント上げる！！」

剣闘獣の檻 コロッセウム

フィールド魔法

モンスターがデッキからフィールド上に特殊召喚される度に、

このカードにカウンターを1つ置く。

フィールド上に表側表示で存在する「剣闘獣」と名のついたモンスターは、

このカードに乗っているカウンター1つにつき、

攻撃力と守備力が100ポイントアップする。

このカードがカードの効果によって破壊される時、

手札から「剣闘獣の檻 - コロッセウム」1枚を捨てる事でこのカードは破壊されない。

コロッセウム / C 0 1

ベストロウリイ / ATK 1500 1600

「リバーズ罨ハンディキャップマッチを発動！剣闘獣と名のついたモンスターが特殊召喚に成功した時、デッキから剣闘獣を特殊召喚する、出でよラクエル！！さらにコロッセウムにカウンターが乗る！！」

コロッセウム / C 1 2

ベストロウリイ / ATK 1600 1700

ラクエル / ATK 1800 2000

「……ぐぬぬ……我はカードを2枚伏せ、ターン終了だア！！
（伏せカードはミラーフォースと万能地雷グレイモヤ…攻撃すれば

ドカーンだ……！！）「……」

ブラック・デーモンズ・ドラゴン

LP4000 手札3枚

ヘルウェイ・パトロール

伏せカード2枚

シゲルのターン

「俺のターン（あの伏せカード……確実に攻撃反応型だ）手札から剣闘獣ディカエリイを召喚！！そしてディカエリイ、ベストロウリイをデッキに戻してエクストラデッキから剣闘獣ガイザレスを特殊召喚！！」

ガイザレス / ATK2400 2600

「……攻撃力が2600だとオ……！！（だが、我の場には伏せカード……迂闊に）「ガイザレス効果発動！！」なにイ……？」

「召喚成功時場のカードを2枚まで破壊することができる！！その伏せカードを破壊だ！」

「……な、なんだとおお……！！！！！！」

破壊されたミラーフォースと万能地雷グレイモヤを見てシゲルは一つ気になった事がある。もしかすると

ダーツ / ATK 1500 1800

「更にダーツの効果でデッキから、クロック・リゾネーターを特殊召喚！！そしてカウンターが乗る！！！」
そしてダーツの効果発動時、ラクエルをデッキに戻しホプロムスを
守備表示で特殊召喚！！そしてカウンターが乗る！！！」

クロック・リゾネーター / DEF 600

コロッセウム / C 3 4

ラクエル / ATK 2400 2500

ダーツ / ATK 1800 1900

ホプロムス / DEF 2400 2800

「ターン終了！！！」

シゲル

LP 3800 手札 2枚

クロック・リゾネーター ラクエル ダーツ ホプロムス

伏せカード 1枚 コロッセウム (4)

ブラック・デモンス・ドラゴンのターン

「「「「我のターン！！！！」」」」

ブラック・デモンス・ドラゴンの前に一枚の石板が現れる。流石にクロック・リゾネーターは守備力も低いので、下手したら一気に破壊される可能性もあった。

「……我は手札より融合呪印生物ゆうごうじゅいんせいぶつ - 闇を召喚するウ!!!」

融合呪印生物 - 闇 / ATK 1000

フィールドに禍々しい闇を放出する球体状の何かが現れた。だが、シゲルはそれだけで終わらない気がした。

「……更に墓地のヘルウェイパトロールは除外することで手札の守備力2000以下の悪魔族モンスターを特殊召喚することが出来るウ!!!手札より現れる…デーモンの召喚!!!!」

デーモンの召喚 / ATK 2500

フィールドに初めて対峙した時と同じ悪魔が現れた。そして融合呪印生物の効果は

「……融合呪印生物は自信と他のカードリリースすることで融合モンスターを特殊召喚することができるウ!!!!」
「……そして呪印生物は素材の代わりとなる…」

そう、これはデーモンの召喚を素材とした融合召喚の布石だ。そして、今日の前にもいるデーモンを素材として出せるのは

「……融合呪印生物とデーモンの召喚をリリースし我自身を特殊召喚するウ!!!!」

ブラック・デーモンズ・ドラゴン

融合モンスター

星9 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3200 / 守2500

「デーモンの召喚」 + 「真紅眼の黒竜」

一瞬ブラック・デーモンズ・ドラゴンが消えたと思ったが、すぐにモンスターすぐに現れた。そして攻撃力3200

今の状態ではヘラクレイノスで十分倒せる攻撃力なのだが いや
な予感しかしなかった。

「……更に我は手札から装備魔法メテオフレアを我に装備するウ
！」「……」

「メテオフレア？」

聞き覚えのない装備カードにシゲルは思わず聞き返してしまった。
するとブラック・デーモンズは得意げに説明を始めた。

「……このカードを装備したモンスターは攻撃力を800ポイントアップさせ、更に相手フィールド上のモンスター全てに攻撃をすることが出来るウウ……！」「……」

「なっ！？攻撃強化に全体攻撃だと！？」

あまりに強力な効果にシゲルは目を見開いた。知っている中で全体攻撃ができるモンスターは少なく、更に装備カードとしての効果があるのも知らない。

メテオフレア

装備魔法

自分フィールド上の閻属性・ドラゴン族の融合モンスターしか装備できない。

このカードを装備したモンスターは攻撃力を800ポイントアップし、

相手フィールド上のモンスター全てに1回ずつ攻撃することができる。

装備モンスターは直接攻撃ができない。

装備モンスターが破壊される時代わりにこのカードを破壊する。

「……だが、相手に直接攻撃ができなくなる難点もあるが…此処でのダメージは実際のモノとなるのは知っておるなあ？」

「クッ…」

「……更に不純融合を発動！！互いに融合モンスターをカードの効果で特殊召喚できなくなる！！」

不純融合

永続魔法

互いに「融合召喚する」効果以外の効果で融合モンスターを特殊召

喚することはできない。

フィールドに融合モンスターが存在しない場合、そのプレイヤーは1ターンに1体のモンスターしか攻撃を行えない。

このカードは発動後3ターン目の自分のエンドフェイズに破壊する。

最悪だった。剣闘獣は融合を使わない融合モンスターが主体だから、シゲルは剣闘獣の得意な戦術はとれなくなる。

「バトルフェイズウ…合計3600の戦闘ダメージ…そして全てのモンスターを失うがいいイイ！！！！私の攻撃イ！ウノ・ギガ・メテオ・フレアアアア！！！！」

まず最初にホプロムスに攻撃が着弾した。守備表示だったためダメージはないが、攻撃を受けたホプロムスは姿が見えなくなった。

「グッ……」

「続けてクロック・リゾネーターに攻撃だアア！ドス・ギガ・メテオ・フレアアアアアア！！！！」

次に攻撃を受けたクロック・リゾネーターも姿が見えなくなってしまう。

次々に姿を消す自分のモンスターにシゲルは何もできなかった。伏せてあるカードもシンクロモンスターがいないと使えない罠だ。

「……さてエ……お楽しみはこれからだア…ラクエルに攻撃イイ！！！！トレス・ギガ・メテオフレアアアアア！！！！」

最初に文字通り声にならない悲鳴を上げたシゲルは徐々に声の大きさが涸んでいき、そしてその声が聞こえなると同時に倒れてしまった。

志度との戦いするときとは比べ物にならないほどのダメージを受けたシゲルはピクリとも動かない。

『シゲル！！！！！』
「グア！！！！」

デッキに眠っているウリイはシゲルに声をかけることしかできなかつた。だがソウルは実体を持っているため、シゲルに近づき嘴で必死にシゲルを叩いた。

だが、シゲルは動かない。

「クククククク…流石にこのダメージ量…死んだかア…まあ良い。援軍が来る前にこの先にいる脱走者を捕えて主の元へ…」
「…え…」
「むウ？」
「」
「」

倒れているシゲルの横を素通りしてその先の通路に向かおうとした
ブラック・デーモンズは何かの声を聞こえて振り返った。

「.....」

だが、そこには倒れているシゲルと、必死にシゲルを起こそうとつ
ついているソウル、そして同じく必死にシゲルに声をかけているウ
ライしいなかった。

「.....」（気のせいかな？）.....「待
て.....」!？」

再び歩き出そうとしたブラック・デーモンズはハッキリと男の音が
聞こえた。
それは

「まだ…勝負の最中だ…」

先程死んだはずの男

「貴様のターンは…終わりか…？」

シゲルだった。だが、シゲルは倒れたままでブラック・デーモンズを睨んでいた。それに心配そうなソウルと何とも言えない表情のウリイがシゲルを見ていた。

「……ば、馬鹿なア…あの苦痛で生きているなどオ……」「……」

驚いているブラック・デーモンズを尻目にシゲルはゆっくりと、フラフラになりながらも立ち上がった。そしてその横にはクロック・リゾネーターが浮かんでいた。

「人間なめんな……クソが…クロック・リゾネーターの効果…！ク
ロック・リゾネーターが表側守備にいる時、一度だけ破壊を無効に
する…！」

クロック・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星3 / 地属性 / 悪魔族 / 攻1200 / 守600

このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、

このカードは1ターンに1度だけ戦闘またはカードの効果では破壊

されない。

ブラック・デーモンズ・ドラゴン
LP1000 手札0枚
ブラック・デーモンズ・ドラゴン
メテオフレア 不純融合

シゲルのターン

「俺のターン!!!」

引いたカード、2枚の手札、場の状況、相手LP、墓地、そして
エクストラデッキ
その中で最良の 勝つための戦略は

「俺は手札の剣闘獣バウンドの効果を発動!!!手札のモンスターを
墓地に送ることで効果を無効にしてこのカードを特殊召喚すること
ができる!!!」

剣闘獣バウンド

効果モンスター

星4/地属性/獣族/攻1000/守1200

手札のモンスターを1体墓地に送ることで

このカードの効果を無効にして特殊召喚することができる。

召喚・特殊召喚成功時、墓地に存在する「剣闘獣」と名のついたモ
ンスターを除外することができる。

このカードがフィールドから離れた時、除外したモンスターを特殊

召喚する。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻すことで、

デッキから「剣闘獣バウンド」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

フィールドにボールの様な体のモンスターが現れた。

バウンド/DEF1200

「貪欲な壺を発動！！墓地のラクエル、ダーツ、ホプロムス、スレイプエイプ、スパルディクスをデッキに戻し、カードを2枚ドロップ！！」

引いたカード　そして、見えた逆転への道

「クッ…なにを恐れているウ…まだ我の方が有利イ…そう、
我の勝利に揺るぎはないイ！！」何か思いついた様だなア…だがア、
メテオフレアは破壊されるとき身代わりとなるウウ！！…そして不
純融合で貴様は1回しか攻撃することができないイイ！！」「
「そうか…まあ、関係ない。このターンで終わらしてやる…！！レ
ベル4のバウンドにレベル3のクロック・リゾネーターをチューニ
ング！！」

綺麗な音色を奏でたクロックは、3つの輪に変わり、球体の剣闘獣
は4つの星へ変わった。

「獣の命を喰らいし者よ、今ここに全ての魂を喰らい尽くせ!」

行くぜ、ソウル　そう心の中で呟いた時、後ろにいたソウルは頷いた。そして　ソウルの体が大きくなり

4 + 3 = 7

「喰らい尽くせ!ソウル・ブラック・ドラゴン!」

『ガアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

場に現れたソウルは　怒っていた。シゲルを傷つけ、殺しかけたブラック・デーモンズに

ソウル / ATK 2400

「クツクツ...それがシンクロ召喚かア...だが、攻撃力は我に遠く及ばぬウ!」

「どうかな?ソウル・ブラックはただの勝利への布石だ...シンクロ召喚はチューナーとモンスターを繋げ、進化するための道だ。そして

シゲルは伏せていたカード、そして手札のカードで勝てる自信があった。

「これが勝つための切り札だ!!!リバース罨スカーレット・カーペツト!!!自分の場にドラゴン族のシンクロモンスターが存在する時墓地の「リゾネーター」と名のつくモンスターを特殊召喚する!来い、クロック・リゾネーター!」

スカーレット・カーペツト
通常罨

フィールド上にドラゴン族のシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、

自分の墓地に存在する「リゾネーター」と名のついたモンスターを2体まで選択して発動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

クロック・リゾネーター / ATK1200

「「「そんな雑魚…何体並べようが私の敵ではないイ!!!」」」

」

「言っただろ!チューナーはモンスター共に進化すると、手札から剣闘獣ベストロウリイを攻撃表示で特殊召喚!!!行くぞ、ウリイ!

!!!」

「我也戦うぞ、シゲル!!!」

ベストロウリイ / ATK1500 1900

「レベル4、剣闘獣ベストロウリイにレベル3、ダーク・リゾネー

ターをチューニング！！獣の魂を受け継ぐものよ、立ち塞がる敵を破壊せよ！！」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚！！グラディアルビースト剣闘獣フレイム・ファング！！！」

フィールドに巨大なライオンが現れた。その体は炎の様に真っ赤で、巨大な牙が見えていた。

フレイム・ファング / ATK 2600

「…… たった攻撃力2600で一体何ができるウウ！！！！」
「フレイム・ファングの効果発動！！シンクロ召喚成功時、墓地の剣闘獣と名のついたモンスター1体：ベストロウリーの攻撃力をこのカードに加える！！さらにコロッセウムの効果で攻撃力をさらに上げる！！」

グラディアルビースト

剣闘獣フレイム・ファング

シンクロ・効果モンスター

星7 / 炎属性 / 獣族 / ATK 2600 / DEF 1200

チューナー+「剣闘獣」と名のついたチューナー以外のモンスターシンクロ召喚成功時、墓地に存在する「剣闘獣」と名のついたモンスターを1体選択することができる。

エンドフェイズまで選択したモンスターの攻撃力分このモンスターの攻撃力をアップさせる。

このカードがフィールドからデッキに戻った時
相手フィールド上のカードを1枚破壊する。

フレイム・ファンク/A T K 2 6 0 0 4 1 0 0 4 5 0 0

「攻撃力4500だとオオオオ!?」

ブラック・デーモンズはフレイムファンクの攻撃力の高さに驚いていた。

「だがア!!!メテオフレアを墓地に送って破壊を無効にしたのターン貴様のモンスターに攻撃すれば私の勝ちだア!!!」

「どうかな?ソウル・ブラック・ドラゴンの効果発動!!!フィールド上のモンスターをリリースし、そのモンスターの攻撃力を吸収する!!!フレイム・ファンクをリリース!!!」

フレイムファンクが炎に変わり、その炎がソウル・ブラック・ドラゴンに憑依した。

ソウル・ブラック・ドラゴン/A T K 2 4 0 0 6 9 0 0

「こ、攻撃力6900ウウウ!!!????」

「バトル!!!ソウル・ブラック・ドラゴンでブラック・デーモンズ・ドラゴンに攻撃!!!消えされ!!!メガ・ブラック・シユート!!!」

「ククグオオオオオオオオオ!!!」

ブラック・デーモンズ・ドラゴン / LP 10000

ククグツ... 小僧オ... よく見ているオ!!!
これが負けた者のな
れの果てだアア!!!」

そう言い残したブラック・デーモンズ・ドラゴンは　光の粒子と
なって消えた。

そこにはなにも残されて居なかった　周囲の壁や床の燃え尽きた
跡が無ければ戦っていた事さえ疑うほどだ。

「...ギリギ...リ...勝てた...」

「シゲル!!!大丈夫か!？」

終わってデッキから出てきたウリイはすぐにシゲルに駆け寄った。
シゲルは壁に寄り掛かって少し苦しそうにしていたが、無事だった。

「ウリイ...すまん。少し寝る...動き...があつた...ら起こして...
く...れ...」

ウリイの返事を聞く前にすつとシゲルは寢息を立ててしまった。ど

うやら予想以上に精霊界の現実のダメージは堪えたらしく死んでいる様に眠ってしまった。

それに心配そうにソウルがシゲルを見ていた。それを見たウリイはため息をつくとしゲルの腕からデュエルディスクを外した。

「ソウルよ、シゲルを頼むぞ」
「グア？」

ウリイはソウルにそう言うと言いつと出口側の扉の向こうへ向かった。

そこには大量の悪魔……いや、悪魔の他にもさまざまな種族、更には管理局員もいた。シゲルの言う「動き」とはこいつ等が来た時、ということだが、ウリイはそれを無視した。

今のシゲルには満足に戦う体力も無かった。その為

「今我のマスターは就寝中なのでな…代わりとってはなんだが我が相手になってやる…かかってくるがいい…!!!」「」「デュエル…!!!」「」「」

ウリィが代わりに戦つことに

第二十四話 帰路確保 ライフポイントの恐怖？（後書き）

ユウ「ホントにあっさり……なのかな？」

カードのコンボやそれといった事も無く……シゲルの新しい力の片鱗を……

シゲル「どこにそんなのあった？」

それに関しては3話ほど後の話だ。分からなくてもそこで話がある。

オリジナルカード

メテオフレア

不純融合

剣闘獣バウンド

剣闘獣フレイム・ファンゲ

ツバキ「それにしても……メテオフレアって強いわね……」

融合のドラゴンで閻属性だからね。剣闘獣でも一応そんなモンスターを出すことはできる。

次回予告：ユウ

シゲルと別れたツバキはエンディミオンの人たちの救出にむかった。

……神楽坂って人と戦った時みたいに怒ってるから多分問題ない……よね？

ボクはイナとスピットと一緒に研究室みたいなところに辿り着いた。情報通りの女の子や、それを取り囲んで何かをしている研究者みたいな人がいた……

けど……その後の光景は、ボクは一生忘れることはないと思う。

そして現れた謎の女性……あの人は敵なのかな……それもこの戦いで

分かる…！！

次回第二十五話 正体不明 風を纏いし者
最強カードは『聖霊天ルナ』

次回も楽しみに〜

第二十五話 正体不明 風を纏いし者(前書き)

今回はユウVS????です。

そしてこの戦いであるフラグを立てます。

第二十五話 正体不明 風を纏いし者

B - 2 地区

「バニツシング・バスター！！」

「コールドブレイカー！！」

管理局員が先の放送を聞いてB - 2地区で脱走者を 殺していた。元々此処は違法研究所だった。目撃者を捕えるよりも殺す方が情報流出につながることはない。

「クツ…ひるむな！！俺達の力を見せつける！！」

「ウオオオオオオオオオ！！！！！！」

アーカナイトマジシャンの掛け声とともに他の魔法使い族モンスター達の精霊も自身を奮い立たせた。だが数も戦力も管理局側の方が上だった。

徐々に精霊側に負傷者が増えて行った。脱走メンバーの指揮を執っていたアーカナイトはどうやって此処を切り抜けるのか考えがまとまらず焦っていた。

「ゴミどもを抹殺しろオオ!!!」

管理局側の一人の言葉が響いた瞬間

精霊たちに転機が

「ゴミって…なに？」

ドス黒い声が響いた。それに一瞬辺りに緊張が走った。それほどま
でこの越えの威圧感がすごかったのだ。そしてその声の元は

「ゴミって…精霊の事？」

青い服を着て白い髪の

「じゃあ、あなたたちは…ゴミ以下ね」

周囲から瘴気が出ているツバキ（闇ツバキ：命名シゲル）だった。

「な、人間!？」

「馬鹿な!？精霊界に人間がいるだと!？」

管理局側の人間は驚いていた。見たところ魔導師ではない少女がこの場にいたのだから　だが、そんな事は些細のことだった。

「ダーク、思いっきりやつちやつて」

「（…どこで育て方を間違えたかな…）言われなくても…ダークレッド・ショック・ウェイブ闇紅衝撃
波導!…!!」

「ッッグオオオオオオオオ!!!」

ダークの攻撃で管理局員の多くが倒された。ちなみに今現在ツバキ

のデッキから魔力カウンターを乗せるカード（ほぼ全て）によって
ダークの攻撃力は既に6000を超えていた。

そしてある意味父親代わりだったダークは黒い笑みを浮かべるツバ
キを見てそう思った。……強ちハズレでもないが。

「みんな!!!」

「ルキ!? 一体どうして……」

「クソ…ゴミがアアア!!!」

そう言っただけの一人がルキに向かって杖を向けた。気付いた時に
既に攻撃がルキに向かっていた。

「トラップカード、魔法の筒!! それはあなた自身で喰らいなさい
!!!」

「はっぐオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!」

ルキに向かっていて攻撃は謎の筒に吸い込まれ、魔導師の背後に浮
かんでいた筒から出てきた。自身の最強魔法を喰らった管理局員は
そのままノックダウンだ。

「クッ…あの服装…デュエルアカデミアの生徒だ!!!」

「ならデュエルでケリをつけてやる!!!」
「ゴミもろともやってやる!!!」

《《《《Duel mode on》》》》

管理局員のデバイスがそう言った瞬間、局員の腕にデバイスが変化したデュエルディスクが現れた。

「ルキ、みんなを連れて逃げて!!!ダーク、カオス、行くよ!!!」
「分かってる!!!」
「キユアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!」

こうしてツバキVS管理局員多数が始った。

通路：ホール

「…う…あ…?」

ブラック・デーモンスの戦闘で深手を負ったシゲルは10分後には目が覚めていた。

まだ体中が痛むし、意識も朦朧としているが、自身の左腕にデュエルディスクが無いことはわかった。

「……ウリイ……も……いねえか……」

周りにいたのは寝ているシゲルの横で心配そうに見ていたソウルだけだった。

ソウルは今チビ龍の姿　いや、鳥のようにも見える。

普通に考えるとソウルはデッキを取るなんて行動をするのは不可能だ。

「……ソウル……ウリイは……どこだ？」

「グア」

ソウルの目線の先はユウ達と共に来た方の道だ。
いないウリイ、無くなったディスクとデッキ。どう考えても

「ウリイの野郎……起こせて……言ったのにな……」

ふらつと立ち上がったシゲルは腰のデッキホルダーからソウル・ブラック・ドラゴンを取り出した。

「あの馬鹿ウリイを叱りに行くか……ソウル」

「グア……！」

大きく頷いたソウルと共にシゲルがその扉の前まで歩いて行った。

通路

「グツ… スパルデイクスが……」

「クツクツク… 俺のカタストルは闇属性以外を効果で破壊する効果を持っている… 貴様のモンスターなど「撃ち抜け!!」なあ!？」

管理局員が自慢している様に見ていた機械のモンスターに黒い炎が襲いかかってきた。

それと同時にウリイに嫌な予感がした。

その炎の出どころは 破壊された壁の向こう側だった。

「おい… ウリイ… 何かあれば起こせって言ったよな？」

「シ、シゲル… そうじゃが…」

「なんだ貴さま…っ!？」

いきなり現れた黒髪で黒いバンダナをしている少年に管理局員が睨んだが、その少年が出てきた後ろの壁の穴から更に黒く巨大な龍が現れた。

「たく… 約束ぐらい守れ。それにエクストラ持っていかないでどう

するつもりだ？ラクエルとスパルデイクスだけじゃ心許ないだろ」

「むう…すまぬ…」

「まあいいや…で、テメエ等俺の家族に何してくれてるんだあ？」

「グツ…だ、だがその程度の龍…やれ…！」

一人の局員の指示で《A・O・J》シリーズのシンクロモンスターが一斉に襲いかかってきた。だが

「ソウル！ラクエルの力を得て敵を薙ぎ払え…！！」

『ガアアアアアアアアアアア…！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

ソウルはラクエルの力を得て敵を　一撃で殲滅して行った。

「テメエ等なんぞ…ブラック・デーモンズに比べたらただの雑魚だ
ああああ…！！」

この時ウリイは自分のマスターでありながら恐怖を覚えたらしい。

実験室

「クソ…この装置でも上手くないか…」
「次の奴の準備を早くしろ！」

そこにいたのは数人の研究員と身に服を纏っていない少女がいた。
その少女は十字架の様な物にくくりつけられ、首に小さな機械を取りつけられていた。

その装置を取り外すと他の研究員が新しい装置を取り付けた。だが

「…あ…え……や……！！！！！！！！」

少女は目を見開くと小さな声で悲鳴を上げた。この様な苦痛にあつてどれほど経ったのか、研究室の壁には数えることができないほどの装置の残骸が積み上げられていた。その数は1000を優に超えている。

だがこれはほんの一部だった。それほどまでに少女は悲鳴を上げ、そして疲れ果ててしまった。

そして少女の声が枯れてしまったのだ。

「クッ…これもか……次の「やって、阿修羅！！」なぐうお！！！！」

何処からか少年の声が聞こえた瞬間研究員の腕や背にナイフが刺さっていた。ナイフというよりも短剣に近いそれを投げたのは
6
つの手を持つスピリットだ。

「クツ…侵入者か!!?」

「……………阿修羅とスピリット・フィッシュをリリース、来て…八岐大蛇!!!」

ユウの前に8つの頭を持つ龍が現れた。それを見た研究員は一瞬ひるんだ。あまりにも大きすぎるからだ。するとユウはデッキの一番上のモンスターを2体召喚した。

「来て…雷帝神!!伊弉波!!」

更に長剣を持った男性と、袖の無い巫女服に身を包んだ女性が現れた。

「八岐大蛇の攻撃!!屍山血河!!!」

「回避イ!!!」

八岐大蛇の攻撃を研究員が必死に避けた。だが、避け切れずに3人ほどぶつかった。

「そっちこそ！！こんな子供を捕まえてどうする気さー！！！」

「グッ……」

ユウの言葉に研究員は声を詰まらせた。正直に何かを言うほど馬鹿でもない。

だが　それに

「クスクス… 『精霊界の征服』かしら？」

「なあ！？き、貴様…なぜ　」

研究員が声の出元が誰なのか分かったのが、驚いていた　が、その研究員はその後の言葉を言うことが無かった。

研究員の上半身が無くなっていたのだ

「え……？」

その光景に初めは理解できなかつたユウも徐々に理解して行った。
先程まで生きていた男性が、上半身を失い

「……」

真っ赤な水を垂れ流す噴水に変わってしまった。

「うっ……う」

「

頭で理解した瞬間、自らの胃に詰め込まれていたモノが逆流してきた。

そしてその場で全て吐き出してしまった。

「ユウ!!」

「グア!!」

中学生を出たばかりだったユウにとってはトラウマとなるであろう事態にイナとスピットが急いでユウに近づいた。

だが、ユウの体は胃の中のモノを全て出したはずなのにまだ出そうとしていた。

「クスクス…まだ子供には刺激が強かったかしら？」

「…あ…貴女は…人を殺して…何とも思わないんですか…？」

回復してきたユウはその女性に対して聞いてきた。その女性は出入り口に立っており、髪が水色で左腕の袖が無いチャイナ服の様な物

を着ていた。

女性は訳が分からないような顔をしていた。

「なんとも、ってね…そうよ。私の敵は邪魔をさせない様に打ちのめしてるだけだからね。敵を殺すのになにかあるのかしら？それに…私はそこに群がってる下種が嫌いなよ」

そう言った時、逃げ惑っていた研究員全員が　ただの肉片となった。ユウはそれにまた吐きそうになったがなんとか持ちこたえた。

「グツ…じゃあ…貴女はボク達の敵なのか…！？」

ユウの言葉に女性は少し考えて面白い事を考え付いた様に笑った。

「私は強い人の味方よ。貴方が仲間となるのか…見極めてあげるわ」

「っ…伊弉波、その子をツバキの元に…イナ…！」

「うん！一緒に戦おう…！」

伊弉波は少女を抱えると研究室を出て行き、イナはユウのデッキへと戻った。

女性は左腕を掲げるとそこにデュエルディスクが現れた。だがその

形がアカデミア一般型や、数年前に開発された初期型と違い、鳥の翼の様な形をしていた。

「デュエル!!」

ユウのターン

「ボクのターン!!ボクはスピリット・ディフェンダーを召喚!!」

フィールドに巨大な盾を持ったガラスの戦士が現れた。

スピリット・ディフェンダー / DEF 1000

「更にカードを伏せてターン終了!!」

ユウ

手札4枚 LP4000

スピリット・ディフェンダー

伏せカード1枚

女性のターン

「私のターン。私は手札から龍の渓谷を発動するわ」

「龍の…渓谷…?」

聞き覚えのないフィールド魔法を聞いたユウは周囲を見て驚いた。無機質な真つ白な部屋から何処までも続く渓谷へと変わっていた。よく見ると渓谷の所々に洞窟みたいなのが見える。そこから様々な形の龍が行き来していた。

「更に手札抹殺を発動、互いに手札をすべて捨て、カードを引く」

「（フィールド魔法の後に手札交換…なにを考えてるんだ…？）」

ユウも手札を全て墓地に送って4枚引いた。土宮茂が墓地に送られたのは少し痛いはまだ何とかなる。

「龍の渓谷の効果発動。手札のカード…ドラグニティ アイギスを墓地に送り、デッキからレベル4以下の『ドラグニティ』と名のついたモンスター…レギオンを手札に加える」

「ドラグニティ…聞いたことのないシリーズ……」

龍の渓谷

フィールド魔法

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。

自分のデッキからレベル4以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

自分のデッキからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る。

だが、女性のコンボはまだ始まってすらいなかった。

「此処から本番よ、坊や！レギオンを召喚するわ。レギオンの効果発動、召喚成功時墓地のドラグニティと名のついたチューナーを装備することができる。アイギスを装備」

「墓地からモンスターを装備した!?!」

ドラグニティ レギオン
効果モンスター

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1200 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地に存在するレベル3以下の

「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

自分の魔法&罫カードゾーンに存在する

「ドラグニティ」と名のついたカード1枚を墓地へ送る事で、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

レギオンの横に現れた白い体の龍の背は丸くなっており、レギオンがその龍の腹を持ち、盾の様にした。

ユニオンモンスターでもないのにモンスターを装備する効果にユウが驚いていると女性は手札の魔法を発動させた。

「更に手札から竜操術を発動。ドラグニティと名のついたカードを

装備しているモンスターは攻撃力を500上げ、1ターンに1度ドラグニティを装備できる」

竜操術

永続魔法

「ドラグニティ」と名のついたモンスターを装備した、自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

また、1ターンに1度、手札から「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備することができる。

レギオン / ATK 1200 1700

「竜操術の効果で手札のアキュリスをレギオンに装備。レギオンの効果発動：アキュリスを墓地に送ることで相手のモンスターを破壊し、更にアキュリスの効果を発動、墓地に送られたフィールドのカードを破壊する」

「なつ：1回の効果で2枚のカードを破壊した!？」

レギオンの腕に装備されていたアキュリスがスピリット・ディフェンダーに突撃すると次に伏せカードに向かって行き爆発した。

ユウのディフェンダーと伏せていたくず鉄のかかしが破壊された。これではユウはいい的になる

「バトル、レギオンで直接攻撃!!」

「まだだ!!手札の八岐大蛇を墓地に送ってスピリット・ガードナーを特殊召喚!!」

スピリット・ガードナー / DEF0

「たった守備力ゼロで壁にする気かしら?バトル続行!!」

「スピリット・ガードナーの効果発動!!墓地の八岐大蛇を除外して破壊を無効にする!!」

場に現れた強力な光がスピリット・ガードナーを守った。それを見た女性は納得して笑っていた。

「なかなかやるわね…ターン終了」

女性

手札2枚 LP4000

レギオン

アイギス 竜操術 伏せカード

竜の溪谷

一方その頃

「ダーク、カオス、止めよ!!」

「了解!!はああああ!!!!!」

「キュアアアアアアアアアアア!!!!!」

ダークが最後の局員に向かって魔法を発動させ、カオスは飛び上がり紅き炎を右手に纏わせ局員に攻撃した。そして、敵はそれで全員いなくなった。

「ダークよ、よくやってくれた!!」

「皆の者…よく持ってくれたな」

ツバキが逃げるように促しても、エンディミオンの人たちは逃げようとしなかった。たった一人の少女にまかせつきりにするのはどうしてもできないと言ってツバキの手伝いをしていた。

「ところでダークよ…その子は誰だ？」

「私のマスターのツバキだ。なぜかこの世界に迷い込んでしまったが…」

「えっと……姫野椿…です…」

「キュア」

ダークの後ろからツバキが自己紹介をした。最早お約束となつてしまった光景だが…ちなみにそのツバキの横にチビ龍になったカオスがいる。

そこに介入者が

「むっ！？誰だ！？」

ブレイカーの言葉に全員がその方向を見ると、少女を抱えたユウのモンスター 『伊弉波』 が立っていた。

「伊弉波…？どうしたの…その子…？」

ツバキの言葉に伊弉波はただ無言に少女をダークに渡した。そして、スウーッと消えてしまった。

ダークは手早く少女の容体を確認した。

「酷く衰弱している…命に別条はないが…急いで休ませた方がいい」

「けど……なんで伊弉波がこの子を…？」

ツバキはそこが不思議だった。恐らく研究室からする声の正体はこの少女だが、それをなぜ研究室に行ったはずのユウののモンスターである伊井波が連れてきたのかが

「…あの、この子をお願いします、ダーク行こう!」

どうしても嫌な予感がしたツバキは研究室へと急いだ。

研究室

「ボクのターン!」

ユウが勢いよくカードを引いた。相手のカードは恐らく魔轟神と同じ未知なるカード。だから相手が何かをする前にかたずける気だ。

「手札から死者蘇生を発動!! 墓地のスピリット・ディフェンダーを特殊召喚!!」

「レベル8…シンクロする気かしら?」

女性の言葉の通り、ユウは自身の新たな力を出そうとしていた。

「レベル4、スピリット・ガードナーにレベル4、スピリット・デ

イフェンダーをチューニング！！天が輝くとき、光と共に天使よ…
舞い降りろ！！」

4 + 4 = 8

「シンクロ召喚！！聖霊天ルナ！！」

フィールドに三対の翼を持つ天使が舞い降りた。その姿は神々しく、そして優しい光を持っていた。

ルナ / ATK 2700

「ルナの効果発動！！召喚成功時手札のスピリットモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する！！ただし効果は無効化される！！」

せいれいてん
聖霊天ルナ

シンクロモンスター・効果

星8 / 光属性 / 天使族 / ATK 2700 / DEF 2500

チューナーモンスター + チューナー以外のモンスター1体以上

このモンスターはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このモンスターのシンクロ召喚成功時手札のスピリットモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚してもよい。

このカードが破壊された時、このカードのシンクロ召喚に使用したシンクロ素材が一組墓地に揃っていれば召喚条件を無視して特殊召喚してもよい。

このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、カードを一枚ド

ローする。

「効果により手札の因幡之白兔を特殊召喚！！来て、イナ！！」

『うん、行くよユウ！！』

場にイナが現れた。だが効果が使えないため守備表示だが。

因幡之白兔 / DEF 500

「バトル！！ルナでレギオンに攻撃！！プリズム・ヴェール！！！」

光の粒がレギオンに襲いかかってきた。だが、装備状態となっているアイギスがその光を受け溜めた。

「アイギスは装備モンスターが破壊される時代わりに破壊される効果があるのよ。戦闘ダメージは受けちゃうけどね」

女性 / LP 4000 3000

「更にアイギスは破壊された時墓地のチューナーを特殊召喚する…
再びアイギスを特殊召喚」

ドラグニティ アイギス

チューナー・効果モンスター

星3 / 風属性 / ドラゴン族 / ATK 900 / DEF 1500

このカードの召喚に成功した時、手札から「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する事ができる。

このカードが装備カード扱いとしてモンスターに装備されている時、そのモンスターが破壊される場合このカードを代わりにこのカードを破壊することが出来る。

このカードが自身のカード効果で破壊された時、墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたチューナーモンスターを1体を特殊召喚することが出来る。

アイギス / DEF 1500

レギオン / ATK 1700 1200

「クツ：まだモンスターが残ってる…カードを伏せて、ターン終了」

ユウ

手札1枚 / LP 4000

ルナ 因幡之白兔

伏せカード1枚

女性のターン

「私のターン。それじゃあ見せてあげましょうか…私の力を」

「え…？」

どういうことなのか、分からなかった。デュエルにおいて力とは一体どう意味なのか

「レベル3のレギオンにレベル3のアイギスをチューニング！」
「っ！？シンクロ召喚!？」

3つの輪になったアイギスの中をくぐったレギオンは3つの星へとなった。

「霧満ちたる溪谷より、紅き竜騎士が飛び立つ!！」

3 + 3 = 6

「シンクロ召喚!！魔を払う槍となれ、ドラグニティナイト ガジヤルグ!！」

フィールドに赤い体を持った竜が現れた。だが問題はそこではない。ガジヤルグが現れたと同時に周囲から強力な風が現れた。それもソリッドビジョンとかそういうレベルではなくまるで台風だ。

「クツ…なんだ…この風は…!？」
「やっぱり…貴方まだ具現化をしてないのね」

必死に風を堪えていたユウを見た女性が残念そうにそう呟いた。だがその言葉はしつかりユウに聞こえていた。

「具現化つてなんのこと…!？」

「…貴方には関係ないわ。手札から魔法カード調和の宝札を発動。手札の攻撃力1000以下の攻撃力を持つドラゴン族チューナーを捨て、カードを2枚ドロウするよ」

調和の宝札

通常魔法

手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「更にガジャルクの効果発動。デッキからドラグニティ ドウクスを加え、ドラグニティ レヴァンティンを墓地に送る」

「手札に…」

ドラグニティーガジャルク

シンクロ・効果モンスター

星6/風属性/ドラゴン族/攻2400/守 800

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。

自分のデッキからレベル4以下のドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を手札に加え、

その後手札からドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を捨てる。

「そしてドウクスを通常召喚、効果発動：墓地のブラック・スピアを装備する。更にドウクスは場のドラグニティと名のついたカード一枚につき200、攻撃力を上げるわ」

フィールドに指揮棒の様な物を持った鳥人が現れると近くに黒い体の龍が現れた。そして白い竜は体を真っ直ぐに伸びて、槍になった。

ドラグニティ ドウクス

効果モンスター

星4/風属性/鳥獣族/攻1500/守1000

このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する

「ドラグニティ」と名のついたカードの数×200ポイントアップする。

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する

レベル3以下の「ドラグニティ」と名のついた

ドラゴン族モンスター1体を選択し、

装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

更に竜操術で攻撃力が500上がった。

ドウクス/ATK1500 2600

「けど攻撃力はルナの方が上だよ!!!」

「場に存在するドラグニティと名のついたモンスターを除外するこ

とで墓地のレヴァンティンは特殊召喚することができるのよ」

そう言った時、黒い槍と指揮棒を持った鳥人は異次元へと消えて行った。そしてその場所に巨大な赤い体の龍が現れた。

「そしてレヴァンティンは召喚・特殊召喚成功時墓地のドラゴンを装備する…墓地のダインスレイブを装備!!」

「クツ…流れが止まらない…!!」

ドラグニティアームズ レヴァティン
効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2600 / 守1200

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する

「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したモンスター1体をゲームから除外し、

手札または墓地から特殊召喚することができる。

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

「ドラグニティアームズ・レヴァティン」以外の

自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、

装備カード扱いとしてこのカードに装備することができる。

このカードが相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、

装備カード扱いとしてこのカードに装備されたモンスター1体を特殊召喚することができる。

ポロポロの剣を装備したレヴァティンに赤い体のガジャルク、そしてユウの場にはルナと因幡之白兔のみだ。

「ルナは破壊された時、発動する効果がある…なら、それを封じ込めたらいいのよ…バトルフェイズ！！レヴァテインでルナに攻撃！！」

「えっ…攻撃力はこっちが上なのに…っ!？」

女性 / LP 3000 2900

そう言っていたが、レヴァテインが持っていた剣　ダイインスレイブから異次元の裂け目が現れた。

「ダイインスレイブは装備されているモンスターと自身を除外することで戦闘を行ったモンスターを除外することができるのよ。ただし装備モンスターの攻撃力は500下がるわ」

ドラグニティ　ダイインスレイブ

効果モンスター・チューナー

星3 / 風属性 / ドラゴン族 / ATK 300 / DEF 500

このモンスターは召喚成功時、墓地の「ドラグニティ」と名のつくモンスターを特殊召喚し、このカードを装備することができる。

このカードを装備したモンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

装備状態のこのカードがフィールドから離れたとき、装備モンスターを除外する。

装備モンスターが戦闘を行った場合、このカードと装備モンスターを除外することで、

戦闘を行ったモンスターを除外することができる。

「クツ…だからレヴァティンを…」

「そう、ルナの効果で墓地からシンクロ素材を出された場合次のターン私が不利になる可能性がある…だったら『破壊しない』…ダイインスレイブの効果でレヴァティンとルナを除外する…!」

ダイインスレイブから発生した次元の裂け目に巻き込まれレヴァティンとルナが消えた。そして場にはガジャルグと因幡之白兔しか残って無い。

「バトル!!ガジャルグで因幡之白兔に攻撃!!」

『うわあああああああ!!!!!!』

「クツ…イナ!!!!」

ガジャルグがイナを切り裂いた。と同時にさらに強い風が吹いた。

「…此処の空気は悪いわね…あまりいい風が来ない…カードを伏せ、ターン終了よ」

女性

手札2枚 / LP2900

ガジャルグ

竜操術 伏せカード2枚

竜の溪谷

第二十五話 正体不明 風を纏いし者（後書き）

ユウ「……………」

流石に人が殺されるのを見て平常でいられないね。

シゲル「誰だよ…あの女…」

うん、まだはつきりと敵か味方かという設定が出来上がって無い。

その内主要メンバーを含めたキャラ紹介を設定シリーズの方に行けると思う。

聖霊天ルナ

ドラグニティ アイギス

ドラグニティ ダーインスレイブ

あ、ちなみにアイギスとダーインスレイブは戎鴛さんにとこのカードと同一です。説明文なども頂いちゃいました（無許可で）（オイ

684

次回予告：side NO

女性との戦いで追い込まれたユウ。だがそこに現れたツバキ。そしてそのツバキを見た女性がある言葉を発した。それを聞いたツバキは

女性との賭け それは今後の物語を大きく左右させるものだった。

飛び上がる聖霊 スピット・シルバーが女性を追い詰め

そして、ユウとツバキは

次回第二十六話 賭け

最強カードは『ミラクルシンクロフュージョン』

次回もお楽しみに

シゲル「てか、この：side NOってなんだ？」

簡単に言つと誰も次回予告をしてない第三者視点、side Out
的なこと。

第二十六話 賭け（前書き）

うん、思いのほかグダったな…
てか、確認しなおしたらユウの手札結構な事故っぷりだった…

第二十六話 賭け

女性

手札2枚 / LP 2900

ガジャルグ

竜操術 伏せカード2枚

竜の溪谷

ユウ

手札1枚 LP 4000

伏せカード1枚

ユウのターン

「クツ…ボクの…」ユウ!!「え…ツバキ!？」

ユウがカード引こうとした瞬間研究室にツバキとダークが入ってきた。
だがそれに反応したのはユウだけではなかった。

「……あんた…ツバキに何をした…!!」
「あらら？怒っちゃった？私は別になりもしてないわ…そうね…その子の失われた記憶に関係していると言った方がいいかしら？」

「「なっ!?!」」

ユウとダークは女性の言葉に驚いた。この女性はツバキの記憶を過去を知っているというのだ。

剣賭がツバキを取り戻しに来た時に聞いた、ツバキの過去 見知らぬ森にただ一人孤独に目覚めたツバキ。それが数年前のだったはず

「一体なんでツバキは苦しんでいる!?!」

「貴方には関係の無い事よ。そうね…私に勝てればその子の過去を教えてあげるわ」

「クッ…俺のターン!!」

本気となったユウはカードを一枚引いた。今女性の場にいるガジャルグはほっとけば確実に新たなカードを呼び込むため、早めに処理をしなくてはいけなかった。

「手札から永続魔法、受け継がれる聖霊を発動！！墓地の聖霊と名のついたモンスターを除外して同じレベルのスピリットモンスターを生贄なしで召喚できる！！」

受け継がれる聖霊

永続魔法

墓地に存在する「聖霊」と名のついたシンクロモンスターを除外し、手札の除外したモンスターと同じレベルのスピリットモンスターを選択する。

そのモンスターを生贄なしで召喚してもよい。

このカードが墓地に送られた時、その召喚したモンスターをデッキの一番下に戻す。

召喚したモンスターが手札に戻った場合2000ポイントのダメージを受ける。

そのモンスターがフィールドから離れた時、このカードを除外する。

「墓地のルナを除外して手札の火之迦具土を生贄なしで召喚する！！」

火之迦具土 / ATK 2800

場に火之迦具土が現れた　だが、それと同時に竜の溪谷を飛んでいたドラグニティが火之迦具土を拘束した。

「残念だけど永続罫ドラグニティ・バインドを発動させたわ。竜の溪谷が場にある時、墓地のドラグニティと名のつくチューナーを除

外して召喚したモンスターの効果を無効化して、攻撃を封じるわ」

ドラグニティ・バインド

永続罫

フィールド上に「龍の渓谷」があり、相手がモンスターを召喚した時、発動することができる。

墓地のチューナーモンスターを除外して召喚したモンスター1体を選択する。

選択したモンスターは効果は無効化され攻撃宣言できず、表示形式の変更ができない。

そう言つて女性は墓地のアイギスを除外した。だがユウの狙いは伏せていたカードを発動させることだった。

「リバーズカード、新たな目覚めを発動！！墓地のチューナーを選択し、自分フィールド上のモンスターのレベルを選択したチューナー分下げて特殊召喚する！！」

新たな目覚め

通常罫

墓地に存在するレベル3以下のチューナーを1体選択する。

自分フィールド上のレベル7以上のモンスターのレベルを選択したモンスターのレベルを下げる。

選択したモンスターを特殊召喚する。

「効果で墓地のレベル1、スピリット・コクーンを選択し火之迦具

土のレベルを下げ特殊召喚!!」

「あらあら…手札抹殺のタイミング間違えたかしら？」

場に小さなさなぎのモンスターが現れた。

そう、手札抹殺の時墓地に送られたカードだ。だが、女性はそんな事は些細なことだった。ユウがシンクロするのも。

「レベル7となった火之迦具土にレベル1のスピリット・コクーンをチューニング!!」

大いなる魂よ！砕かれし魂と共に光の風を纏いその身を現わせ!!」

7 + 1 = 8

「甦れ…スピット・シルバー・ドラゴン!!」

「ガアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

場に現れたスピット・シルバーはやる気満々だった。更にユウは墓地のスピット・コクーンを取り出した。

「スピット・コクーンの効果発動!!素材となったモンスターの効果をシンクロモンスターに付加させることができる!!」

スピット・コクーン

チューナー・効果モンスター

星1 / 地属性 / 昆虫族 / ATK 200 / DEF 500

このカードがシンクロ素材に使用された時、このカード以外のシンクロ素材となったカードを1枚選択する。

このカードを素材にしてシンクロ召喚したシンクロモンスターは選択したモンスターの効果を得る。

この効果で効果を得たモンスターは戦闘では破壊されず、手札に戻らない。

スピリット・コクーンが場に現れると光になり、スピット・シルバーと一体化した。

「効果でスピット・シルバーに火之迦具土の効果を追加させる！！バトル！！スピット・シルバーでガジャルグに攻撃！！スピリット・ブラスト！！！」

女性 / LP 2900 2800

「ふふふ、怖い怖い…好きな人を傷つけられて怒ったかしら？」

「黙れ…！！俺が勝つたらお前の知ってる事全部教える！！！」

そう言ってユウはチラッとツバキを見た。もう悲鳴を上げていないが、まだ震えているツバキを抱きかかえるダークがいた。

ユウ

手札0枚 / LP 4000

スピット・シルバー・ドラゴン

女性のターン

「私のターン、ドロー前に手札を全て捨てる…でしょ？」

「…そうだ。火之迦具土の効果を得たスピット・シルバー・ドラゴンがダメージを与えた」

火之迦具土の効果を持ったスピットが銀色の炎で女性を囲んだ。そうやって女性は手札を捨てた。だがまだ余裕の表情だった。

「ふふふ…ドロー前に伏せカードを使う。異次元からの埋葬よ。効果によってダインスレイブとアイギス、そして貴方のルナを墓地に戻すわ」

「……………」

これで女性の手札と場にカードは竜操術と竜の渓谷だけだ。引いたカードによっては女性は負けになる。だが女性は笑っていたままだった。

「どうして私が余裕でいられるか分からないと言った顔をしているわね」

「……………」

そう、その通りだ。竜の渓谷でモンスターを手札に加えたとしてもスピットに勝てる確率は低い。破壊されないスピットがいるのにとど

うやっても　だが　驚きの一言を口にした

「さっきのターンで私を倒さなかったのは残念だったわね」
「っ!？」

「私のターン、ドロー!! やっぱり私のデッキは応えてくれる…手札から魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動するわ! !墓地、もしくは場のシンクロモンスターを素材とした融合モンスターを特殊召喚できる!!」
「シンクロの融合モンスター!？」

ミラクルシンクロフュージョン

通常魔法

自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

「ふふふ…これが貴方を倒す…私の切り札よ…墓地のガジャルグと、アキュリスをゲームから除外して」

そう宣言した瞬間女性の墓地の赤い2体の龍が異次元へと飛び立った。そして女性のフィールドのモンスターゾーンの空間にひびが入った。

それと同時に女性は一枚の融合モンスターを掲げた。

「ドラグニティパラディン エクスカリバーを融合召喚する!!」

ひび割れた空間から一体の龍が現れた。黄緑色の龍 更にその背には緑の盾と槍を持ち、緑の鎧とマントを身に纏った騎士がいた。

ドラグニティパラディン エクスカリバー / ATK3000

「攻撃力…3000!!」

「エクスカリバーの魅力は攻撃力だけじゃないわ…召喚成功時、墓地のドラグニティと名のついたチューナーモンスターを好きだけ装備することができるわ、墓地のダークネスレイブ、アイギス、ブラッティストック、ピルムを装備するわ!!」

そう宣言した時、墓地から4つの光が飛び出した。その光はエクスカリバーの槍に集うと一掃輝いた。

「さらに…竜操術の効果で攻撃力が500上がる」

「ふふ、そうね。これでエクスカリバーの攻撃力は3500よそれにエクスカリバーは破壊される時、代わりに装備しているドラグニティを2枚破壊する効果があるわ…でも、装備しているモンスターの効果を無効化しちゃうのが残念だけどね」

エクスカリバー / ATK 3000 3500

「馬鹿な…手札一枚から攻撃力3500のモンスターだと…!?!」

ダークがエクスカリバーの攻撃力に驚いていた。場にあるカードも使わず、たったの手札が1枚。それも来るかどうか分からなかった確率で自身の思ったカードを引いたのだ。

「そこにいる精霊さんは離れていた方がいいかしら？ちょっと強い衝撃が行くわよ」

「っ…でも、ダメージは1000だけ…」

ユウがそう呟いた。そう、普通ならそうなるはずだった

「残念だけどエクスカリバーは装備していモンスターの数だけ追加攻撃できるのよ」

「「3500の5回攻撃!!??」」

そう、エクスカリバーは敵を殲滅する剣 たった一度の攻撃で敵を仕留めるのはかなわない なら、攻撃を増やす その願いから生まれたカードだ。

ドラグニティパラディン エクスカリバー

融合・効果モンスター

星10 / 風属性 / ドラゴン族 / ATK3000 / DEF2800

「ドラグニティ」と名のついたレベル6以上のシンクロモンスター
+ 風属性・ドラゴン族モンスター

このモンスターは融合召喚でしかエクストラデッキから特殊召喚で
きない。

このカードの融合召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ドラ
グニティ」と名のついたチューナーを任意の数だけ、このカードに
装備することができる。

このモンスターはバトルフェイズに、このカードに装備されている
「ドラグニティ」と名のつくチューナーモンスターのカードの数だ
けを通常の攻撃とは別に攻撃することができる。

このカードに装備されたカード効果は無効化される。

このカードが戦闘及びカード効果で破壊される場合、装備されてい
る「ドラグニティ」と名のつくカードを2枚墓地に送ることでの
カードの破壊を無効にする。（この時、装備カード扱いの状態から
墓地に送られることで発動する効果は発動しない）

「バトル…エクスカリバーでスピット・シルバー・ドラゴンに攻撃
セイント・スピア・ウン
…！！聖なる槍撃…！！」

「グッ…ああ…！！！」

ユウ / LP 4000 3000

スピット・シルバーが攻撃を受け止めるが、その余波はユウ だ
けでなくダークとツバキまで響いていた。

だが女性は攻撃を止めようとしなない。

「大切なら守りきってみなさい 聖なる槍撃2!!!」
セイント・スピア・ツィー

「ウツ…カオス…!ダークとツバキを守って!!」

「キュアアアアアアアアアア!!!」

ユウ/LP3000 2000

ユウの言葉を聞いたカオスの体が大きくなっていき、そしてその身を呈してダークとツバキを守っていた。だが、それにダークは油断してしまった。

「ふふふふ…自分の事は良いから好きな子を まるであの子みた
いだね」

「(あの子…?誰の事…?)」

女性の呟きにユウは考えていたが、それよりも先に次の攻撃が迫っていた。

「セイント・スピア・スリ
聖なる槍撃3!!!」

「ツ…ウアアアアアアアアア!!!」

ユウ/LP2000 1000

等々ユウのライフは1000になってしまった。そして次の攻撃で受けるダメージも1000…墓地にも、手札も、フィールドももう手詰まりだった。

そして、ダメージが限界を超してしまったのか、スピットは倒れてしまった。

「クツ…スピット…!!!もう、スピットに攻撃するのはやめて!!」

「ふふ…じゃあ、最後の攻撃…3500の衝撃を貴方が受けるかしら?」

悪戯を思いついたように女性がそう聞いた。並の人間がそれほどの衝撃を　精霊界での決闘で受けたのならただじゃすまない。

だが、ユウには受ける覚悟があった。精霊　イナも、神楽もスピットも大切な家族だったから、これ以上傷つけられなくなかった。

「…ボクが受ける。それでいいでしょ」

「ふふふ……良いわあ…その大切な物を守る目…その意思に免じてエクスカリバーよ、最後の攻撃!!」

「ごめん…ツバキ…イナ…シゲル…皆…」

「ユウ!!」

ユウがふつと目を閉じようとした瞬間背後から声をかけられた。

それは

「ツバ…キ?っ!!」

背後にいたのがツバキだと分かった瞬間ユウはツバキを抱きかかえた。それにツバキは初めは呆けていたが、すぐにユウが抱きかかえた理由が分かった。

「セイント・スピア・フォー
聖なる槍撃4!!!!!!」

最後のエクスカリバーの攻撃が迫っていた。その攻撃から守るためにユウが盾になろうとしていた。

「ユウ!! 避けて!!」

「…ツバキを見捨てるのはできない」

女性は最後までツバキを離さなかったユウを見て笑った。

「ふふふ…いいわあ…そう言った熱い関係。だけどね、約束よ。貴女の過去は話せないわ」

「……………」

それを聞いてユウは俯いた。もう少しでツバキの本当の過去を知ることができた。

だが、ツバキは女性を疑問の目で見ていた。

「じゃあ一つ聞いても良いですか…?」

「何かしら？姫野椿？」

女性がフルネームでツバキの名前を言った。

「…貴女は…私達の敵なんですか…?」

ツバキの質問に女性は一瞬顔をしかめた。するとエクスカリバーを呼び出すと女性は

「敵ではない…けど、味方でもないわ」

と、答えた。「そして」と前置きして2人に言った。

「一つだけ…私の善意で教えてあげる」

女性は悲しそうな目でユウを ツバキを スピットを、ダーク
を、カオスを見た。

「姫野椿 やがて貴女は仲間と共にいらなくなるわ…やがて大切な人たちを裏切ることになる」

「え…!?!」

「それってどういう」

ユウがどういふことなのか聞こうとしたが、それよりも速く女性はエクスカリバーに乗って何処かへ飛び去ってしまった。

「……………」

「…すう…すう…すう…すう……………」

女性の言葉がどうしても頭から離れないツバキ、そして疲れたのかツバキに寄り掛かって眠ってしまったユウ、傷付き、チビ龍になったスピットとその治療するダークに呼び掛けているカオスがいた。

「…ツバキ、スピットを運んでくれないか？ユウは私が運ぶ」

「…分かった」

やがて治療を終わらしたダークとツバキは一人と一匹の龍を背負って仲間達の元へと向かった

???

ある男性の前に竜に乗った女性がやってきた。その女性は先程ユウと戦ったあの女性だった。

「アラエル、一体どこに言っていたんだ？」

「奴らの研究所よ、ザフキ」

アラエルと呼ばれた女性はそう答えると嬉しそうにザフキという男性にあることを話した。

「エルを見つけたわ」

「なに！？エルをだと！？」

ザフキの言葉に周囲にいた3人の男女が反応をした。それを見たアラエルは一枚のカードを取り出した。

「これで…私達の目的を達成できる」

???

「あれ……？ここは……？」

ユウが目を覚ますと何処かの屋内の一室だった。どうやら寝室のようで、ベッドの上にいたのだがどうして自分が此処にいるのか分からなかった。

確か最後の記憶は女性と戦った所までで途切れていた

「あ……ユウ」

「え？ツバキ…此処は何処？」

部屋に入ってきたツバキは何処か元気がなさそうだった。

「ここは魔法都市の空き家よ。ユウが眠って…10時間ぐらいかな」
「10時間！？学校は!？」

流石に10時間寝ていればもアカデミアを休む事になってくる。だがツバキは疲れたようにクスツと笑った。

「此処じゃあ人間界の30分が一日らしいよ。だからまだ15分もたつてないみたい」
「そ、そうなんだ…」

どうもツバキの様子がおかしい…そう思ったユウは一つだけ心当たりがあった。

「ツバキ…ごめん」
「え…!?!? な、なんでユウが謝るの!?!？」

ユウの言葉が予想外だったのか、ツバキはものすごく驚いていた。そしてユウは俯いたまま言葉を発した。

「ボクが負けた所為でツバキの過去を聞く事ができなくて…」
「…どうして…ユウが…私に謝るの?？」

再び顔を上げたユウはツバキの顔を見て驚いた。

ツバキは泣いていた。目から溢れるほどの涙を溜め、それを流して少し震えていた。

だが、ツバキはそれを拭って声を震わせ、手を強く握りしめていた。

「私は……!! ユウを!! 裏切るかもしれないんだよ……!! なのになんでユウが謝るの……!!」

「ツバキ…」

ユウの呼びかけにも無視してツバキはさらに続けた。

「違うと思いたいよ！！なんであの人はそう言ったのか分かんない！！でも！！！！いずれそうなるかもしれないって思うと怖い！！！！」

「ツバキ…！！」

「いつかそうなってしまおう…ユウが…シゲルが…皆が私から離れて行くかもしれないのが…！！私がユウと…！！」

「ツバキ…！！」

ユウが自分を責め続けるツバキの肩を掴んだ。それにやっとツバキは言葉を止めた。

「ユウ…！！！！」

「ボクはなにがあってもツバキの味方だよ！！たとえ裏切られてもボクはツバキを信じる！！」

「ユウ……う……つわああああああああああああ！！！！！！！！！！」

等々ツバキは泣き出してしまった。
それをユウはツバキを優しく抱きしめ、ツバキが泣きやむまで一緒にいた。

シゲル side

「どうやら吹っ切れたみたいだな」

ユウが寝ていた部屋の前でシゲルがそう呟いた。研究所から脱出したツバキはどことなく落ち込んでいたが、どうやらもう心配はなさそうだ。

「よかった…ツバキさんが落ち込んでいるとマスターも悲しみますからね」

そう神楽が言った。洞窟内に避難していた精霊達も共に魔法都市へ帰還して今は休養中だ。すると近くの階段からルキが上がってきた。

「シゲルさん、あの子の意識が戻りました。でもすぐにまた寝て…」
「そうか…ツバキはユウに任せて俺達は休もう。あの子には明日話を聞こう…流石に疲れた…」

そう言つて3人は1階へと降りて行つた。

寝室1

「大丈夫？ツバキ」

「うん…ごめんね、ユウ。変なこと言つて…」

泣きやんだツバキはそういつてモジモジし始めた。理由としては、普段でも頼りにしているユウに泣きついてデレているからだ。

ちなみにツバキをあやしている時、ユウの心臓はバクバクだった。そりゃ自分の胸で好きな女の子が泣いているのだから無理も無い。

「あ、私何か飲み物とつて きゃあ!」

「ツバうぐ!」

立ち上がるうとしたツバキは バランスを崩してユウの上に覆いかぶさる形になってしまった。しかも顔が近く

「ね、ねえユウ……／＼／＼」
「ど、どうしたのツバキ？／＼／＼」

どうも付き合う少し前に戻ったみたいになってしまった。すると更に あの時以上のモジモジ感をただ寄せながら一言一句話し始めた。

「私……もっとユウの事知りたい／＼／＼」
「……ボクも／＼／＼」

こうして、熱い夜が始まった。そしてツバキは少女から女性になる前に2人とも限界で寝てしまった。

ドラグニティ・バインド

新たな目覚め

スピット・コクーン

ドラグニティパラディン エクスカリバー

エクスカリバーはアイギス、ダーインスレイブと同じく戒鴛さんの投稿カードです。ちなみに効果テキストは蟹と魔女の娘より引用です。

シゲル「おまえが書けよ」

めんどくさい

次回予告：sideユウ

ボクがあの子の人に負けて次の日

エンデイミオンの空き家でそれぞれ何があったのか話していると、研究室につかまっていたあの子が目を覚ましたらしい。

それで全員で話を聞いていると、その子は名前が無かった。

ツバキがつけた名前は 『紫苑^{しおん}』

そしてなぜか始まった紫苑との戦い。ゆるりとしているけど紫苑のデッキ…

ある意味のリベンジかな。まあそれでも本気で行くよ！

最強カードは「スピット・シルバー・ドラゴン」

次回第二十七話 コンボと経験

シゲル「紫苑か…」

ちなみに、紫苑は…うん、それは次回言おう

シゲル「なんだよ…その意味深なの…てか2人戻すの手伝え!!」
2人「ふにゅ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

まあ大丈夫でしょ（それに…今度から【キャツキャウフフでアレな展開】を多く出す予定だし…ウフフフフ…）
シゲル「……………（確実に何か企んでるな）」

それと、もしよければ感想や意見をください。

読者のリアクションが無いので俺のテンションが急降下中なので…
意見でも次にその要素を取り入れようと頑張ったりとテンションを
上げるのですが、今現在感想が全くないのでローテンションです…
シゲル「悲痛だな」

ユニーク数10000&PV100000突破記念番外編〜精霊の出会い〜（前

今回は番外編です。ユウが『スピリット』、そして『異次元デッキ』
を手に入れるまでの経緯とユウの過去の話です。

気付いて…オイラは此処だよ…お願い…助けて…

???…sideユウ

「…また…あの夢か…」

ボクの名前は聖牙タ。普通と少し違う12歳の少年だよ。

なにが違うのかって

「ユウ、起きた…?」

「うん…昨日はどうだった?」

今ボクが此処いるのが

「駄目：残飯も廃棄処分の奴も無い……」

童実野町地下……通称ゴーストシティと呼ばれる地下スラム街
だったから

ボクは7年ぐらい前まで普通の少年だった。兄弟は無く、少し厳しい父親と優しい母親と3人暮らしだった。父さんの仕事はアマチュアのデュエリストだった。けど、アマチュアのリーグでは上位に入っていた腕前だった。母さんはいたって普通の主婦だった。ただ少しドジっ子で、料理をして砂糖と塩を間違えることがまちまちだった。けど間違えて砂糖を入れても料理は何故か美味しかった。

けど

7年前・童実野町の外れの一軒家の2階

「誕生日おめでとう」

「おめでとう！」

「ありがとう！父さん、母さん」

ボクが5歳の誕生日の時　その日はいつも仕事で忙しかった父さんも無理言って休みにしてもらって誕生日を祝ってくれた。母さんは普通だったら料理は上手で、ボク好きな料理をなんでも

作ってくれた。

「そうだな…今年のユウの誕生日プレゼントはこれだ」

「なに？これって…デッキ？」

父さんがボクに渡したのは一つのデッキだった。少し使いこまれている気がしたけど、中身を見た

「『マクロコスモス』に『グランドクロス』…それに『ダ・イーザ』
ってこれって父さんのデッキ！？」

「そうだ。正確には俺のデッキをもとに改良を加えたデッキ破壊

いや、デッキ除外の『異次元デッキ』だ」

父さんはプロでもアマチュアの中でも数少ない『デッキ破壊』の使い手だった。けど自分のデッキもろとも破壊するメタモルポットや手札抹殺をして、残骸爆破でダメージを与えるデッキだった。

残骸爆破

通常罠

通常罠

自分の墓地のカードが30枚以上存在する場合に発動する事ができる。

相手ライフに3000ポイントダメージを与える。

それも緻密な計算の上に成り立っているデッキ その上デッキも

他に『ドロブースト』や『超重量』といった複数のデッキを使う珍しいデュエリストだった。その中の『デッキ破壊』を改良したデッキ　それをユウに渡したのだ。

「前に一回お前が俺の『デッキ破壊』を俺以上に使いこなした…お前ならこのデッキを使うことができるだろうな」

「父さん…ありがとうございます！」

ユウはまだデッキを持っていなかった。約束としてはユウが安心してデュエルできるまで持つ事を禁止されていた。

これがユウの最高の日になるはずだった

「あれ？父さん、このカード（ドゴオオオオオオオオオオオン！！！！）え！？な、なに！！？」

ボクがある一枚の『絵柄の無い白いカード』について聞こえなかった時、家の1階部分で爆発音が聞こえた。だが、父さんと母さんは驚く事は無かった。

「ユウ、よく聞いて」

「か、母さん！？」

パニックになっっているボクを、母さんが優しく抱きしめてくれた。
すると徐々に　ボクの体が透けてきた。

『な、なにこれ!?!』

「ユウ、母さんと父さんはある人たちに狙われてるの。もう私達は逃げる事ができないわ…けど、あなたは逃げれる。今貴方を纏っているのは姿を見えなくして、攻撃から身を守ってくれるモノよ…すぐに童実野町の中心に逃げなさい」

『母さん!?!』

すると誰かが階段を駆け上がってくる音が聞こえてきた。母さんはボクを抱きしめた腕を緩めると父さんと共に扉へ振り返った。

「逃げる!!ユウ」

『父さん!!…!!うわああああああああ!!…!!』

ボクは逃げた。2階のベランダ横にある階段を駆け下りて、童実野町の中心街へ走った。これがボクの最高の日から、最低の日へと変わった。

その次の日、ボクの家は燃えた。父さんも母さんも遺体は発見されなかった。警察はガス漏れに引火しての火事だと判断した。遺体は燃え尽きたとされ、ボクも死んだことになった。

現在：ゴーストシティ

今は似たような境遇に会った倉敷澪くらしきみおと福本徹ふくもとてつと暮らしている。けど、流石に子供を雇う場所も無く、残飯や廃棄処分される食べ物を食べ、暮らしていた。

けど此処の所まともにご飯を食べていない。

徹は自分の食べ物をボクと澪に残してどこかに行ってしまったらしい。

ちなみに澪は徹の事が好きだ。そして徹は澪の事が好きらしい。

けど…ボクは好きというのが分からない…あの日から楽しい事も、悲しい事も、嬉しい事も、怒ることも無かった。

理由は簡単、あの日からも感じなくなったからだ。けど…何のために父さんと母さんは殺されたのか、それを知るまで僕は生き続けることを決めていた。

725

「今日はボクが探してくる。澪は待つといて」

「分かった…気をつけてね」

ボクは一人地上で食べ物を探しに行くことに けど、この日…ゴーストシティへ来て初めて後悔した。『どうして澪を一人だけにしってしまったんだろう』って

童実野町・地上

「……………こんなところかな」

ボクは裏路地を通って落ちていた食べれそうな食料をかき集めた。少しカビの生えたパン、油の固まった肉弁当、密封状態で踏まれたおむすび

これでまだいい方だ。

「おい小僧」

「…ん…？誰？」

呼び止められたボクは、振り返ると高校生ぐらいの男の人が立っていた。白いコートを着て、右手にはアタッシュケースを持っていたけど 何の用だろう？

「何か用ですか…」

「貴様、俺の会社の前でなにをしている」

会社？そう思ってボクはその人の背後の大きなビルを見た。

「（なるほど…ボクみたいな子供がうつろつのが目障りなだけか…）」

食べれる物を集めていただけです。すぐに此処からいなくなりますよ」

「…そうか。お前親はどうしたのだ？」

流石にお昼時にこんなことをしてるから疑問に思ったのだろう。だけど その質問がむかついた。当たり前前の事を聞く様な感じがして

「いません…もう7年前に死にました」

「……お前「お前じゃないです。ボクは「ユウ……」」

ボクの言葉に被せてきたのは、同じストリートチルドレンの…ヤマさんだ。ちなみに本名ではなく、苗字か名前が取ったのらしいが…覚えてない。

「どうしたのヤマさん」

「大変だ！！漣が危ない！！」

その言葉に、ボクは思っただい食べ物落としてしまった。久しぶりのまともな食事なのに という考えが浮かぶ前にヤマさんに掴みかかっていた。

「漣が危ないってどういふこと!?!」

「さつき黒崎がお前の家に入って行くのが見えたんだ！！あのままじゃ」

ボクはヤマさんの言葉を全て聞く前にその場を走り出していた。黒崎狂多なまきまよた　ゴーストシティでは大人が介入しないことをいいことに好き勝手している野郎だ。そいつが『漣が待っている家』に入っ
行っただ

家：side 漣

「止めてください！！」

ユウが出かけて2時間ほど　その時黒崎が家に押しかけて来た。家といっても地下道の膨らみになっている所に住んでいるだけだった。ガスも水道も電気も無い　そんな感じのところだ。

そして黒崎とその取り巻き数人は

「うへへへ…漣タン可愛い…」

私の服を切り裂いて、写真を撮っていた。いわゆる性的暴行なのだ。だけど私が助けを求めても警察は来ない。実はゴーストシティには、警察の不祥事で住む場所の無くした人が多くいるのだ。その為、警察ではゴーストシティは無いものとされていた。そこに住んでいる

「警察は関わらないという方程式が成り立っているのだ。」

「ククク…いい写真が撮れたぜ…」

「か、返してください!!」

私は黒崎のデジカメを取ろうとした　　が、取り巻きが私を仰向けに押さえつけた。

それで私の大事な部分が露わに

「は、離して!!!止めて!!!!!!」

「お?なんだ?案外乗り気じゃねえ?か?」(カシャ、カシャ)

また写真を撮られた…:…もう、私…

「漣!!!コノオ!!!!!!」

「ひでぶ!!」

私が全てに絶望しそうになった時、私の大好きな人が　　徹が戻ってきてくれた。
そして、私を取り押さえしている人たちを睨みつけると、その人たちを蹴り飛ばした。

すると徹は来ていたジャケットを私にかけてくれた。

「ククク…まあ、良い。この画像、どれぐらいの値段で売れるだろうかな？」

そう言っつて黒崎はわざとらしく、デジカメをちらつかせた。

「漣！！徹！！」

そこにユウが戻ってきた。そして漣の状況を見て黒崎を睨んだ。すると思い出した様に黒崎が言った。

「ああ？この画像流してほしくないのなら勝負するんだな」
「勝負…！？」

徹が聞き返すと、黒崎はデュエルディスクを投げた。それを受け取ったユウは怪訝そうに黒崎を睨んだ。

「俺と勝負して勝てたらさっき撮った写真を消してやるよ。ただし…ハンデとしてそのデッキをこちらに渡してもらおうぞ！！」

「…な！？」

黒崎の出した条件　それは『異次元デッキ』を黒崎に渡すという
ものだった。

2人ともユウの『異次元デッキ』の事も　そしてユウの両親の形
見だということも知っていた。

「ユ、ユウ…!？」

漣は自分の所為でユウの大切なデッキが無くなるのが嫌だった。だ
が、ユウは迷わずデッキホルダーごと黒崎に投げた。

sideユウ

「…20分後、時計前広場だ」

黒崎はそう言い残すと取り巻きを引き連れて家を出て行った。

「ユ、ユウ…なんで…!!」

「……………徹、漣を連れて逃げ「バカ野郎!!」グツ!？」

ユウの言葉　それを聞いた瞬間、徹はユウを殴った。倒れたユウ
を見下ろす徹は息を切らし、右手を握りしめていた。

「あれはお前の宝物だったんだろ！！なんで易々と渡したんだ！！」
「じゃあ徹は、澪を見殺しにするの！？」

ユウの言葉に徹は眼をそらした。確かに澪を守ってやりたい、だがその力が徹には無かった。

「2人とももう止めて！！私の所為で仲間割れするのはやめて！！」
「……………」

澪がそう叫んでその場は収まった。だが、ユウは家を出て行った。
デッキは『異次元』のただひとつだった。その為に代わりとなるデッキが必要だった

「（あの夢…もう、あれに頼るしかない…）」

此処最近よく見た夢…誰かが呼ぶ声に賭けるしかなかった。

広場：s i d e n o

「はぁ…はぁ…」

昔徹、溼のよく3人で来ていた広場　そして夢に出てくる場所

「確か…此処…!!」

スコップなんて持ってないユウは素手でその場所を掘り始めた。爪の間に砂や土が入り込むが、気にしない様になっていた。だが、先日の雨と本日の強力な日差しで地面はカチカチだった。

「早くしないと…っ！」

等々ユウの爪が割れた。そこから血が流れ出してしまった。しかし痛がってる時間は無い。時計前広場から逆算すると残り時間は5分だ。

だが、爪が割れたことにより指先に力が入らなかった。

「ユウ…!!」

すると、そこに徹が現れた。徹はデュエルディスクを持って走っていた。

「徹…っ！」

「ユウ…手が…」

徹がユウの指先を見て息を呑んだ。ボロボロの爪に血が不気味さを
出していた。

だが、話す時間も無くユウはまた、その場所を掘ろうとした。

「待て」

それを徹は止めた。そしてユウを押しつけると、ユウの代わりにそ
の場所を掘り始めた。

「何かは知らねえけど…此処に何かあるんだろ？」

掘りながら徹が言った。だが、それにユウは応えることができな
かった。所詮夢の話だから、話したところで信じてもらえるのかもわ
からなかった。

「多分お前の事だから、ホントは、なにも、無いかもしれない、と

思ってるんだろ、」

徹が掘りながらそう言っていた。それにユウは俯いた。徹には何もかもお見通しだった。「だが」と徹は前置きして言った。

「お前の話を俺は信じるぜ。お前は、嘘を……？」

そう言って徹は掘った穴から何かを取り出した。土まみれの

「言わないからな」

黒いデツキケースだ

それにユウは驚いていたが、受け取ると中を見た。ユウ本人はあまり見たことの無いカードだが、これで戦うことができる。

「急げ、結構時間が危ない…俺は瀕の様子を見てからすぐに行く」

時計前広場

黒崎が時計前広場でユウの異次元デッキを見ていた。

「ふっ…なかなか良いデッキじゃん。あいつらはこれにしか頼れないからな…あゝ残り30秒が待ち遠しいぜ」

黒崎の言葉に取り巻きたちが笑った。だが、そんな彼らの前に

「間に合った…」

ユウがやってきた。それを見て黒崎がめんどくさそうに立ち上がった。

「ハッ！わざわざ不戦敗の報告をしに来るとは、お前達律儀だな」

また黒崎の言葉に取り巻きが笑った

ガシユン、ガシユン、キュイイイイイイン！！！！！！

が、その笑いが凍りついた。ユウのデュエルディスクが起動したのだ。デッキをセットして無いとディスクは起動しないのだ。

「デッキならある。さっさとやるぞ…!!」

響いたユウのドス黒い声。そう　これが初めての『処刑モード』だった。

ユウのターン

「俺のターン!!カードを3枚伏せ、モンスターを伏せる。ターン終了!!」

ユウ

手札2枚　LP4000

モンスター1体

伏せカード3枚

黒崎のターン

「俺のターン！！俺はゴブリン突撃部隊を攻撃表示で召喚！！」

ゴブリン突撃部隊 / ATK 2300

黒崎の場は大勢のゴブリンが現れた。ゴブリン突撃部隊 有名な
攻撃単体モンスターだ。おそらく次に

「カードを2枚伏せて、バトルフェイズ！！」

伏せカード あれは最終突撃命令か、スキルドレインの様なカード
だろう。

だが、その前にゴブリン攻撃を何とかすることが先決だ。

738

「ゴブリン突撃部隊で攻撃！！」

「伏せカード発動！フローラル・シールド！！相手の攻撃を向こう
にして、カードを一枚引く！！」

ゴブリンの向かった先に現れた花が、ゴブリンの攻撃を受け止めた。
だが、攻撃を無効にされたゴブリンは守備表示にならない。

「ターンエンドだ」

黒崎

LP4000 手札3枚

ゴブリン突撃部隊 (ATK2300)

伏せカード2枚

ユウのターン

「俺のターン！！伏せカード発動！！ゴブリンのやりくり上手！墓地に存在するゴブリンのやりくり上手の枚数分＋一枚カードを引く！！！」

「だがお前の墓地にカードは……」

と、黒崎はバカにした様に笑った。それを遠巻きに呆れた表情で見ている男がいたのだが、それにその場にいたメンバーは気付いていない。

「速攻魔法ダブル・サイクロン！！自分と相手の場の魔法・罠カードを破壊する！！俺はゴブリンのやりくり上手を、お前の場の伏せカードを破壊する！！！」

「な…チエーンブロック!？」

ダブル・サイクロン

速攻魔法

自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して発動する。

選択したカードを破壊する。

黒崎が驚いたように声を上げた。だが取り巻きたちは何のことなのか分かっていなかった。

「チェーンが積まれた事により、逆順処理…まずダブル・サイクロンの効果処理から。ゴブリンやりくり上手とその伏せカードを破壊する…！」

「はあ！？あいつ馬鹿じゃねえの！？自分で発動させたカードを破壊してんぞ…！」

取り巻き…Aがバカにしていた。が、黒崎は気付いていた。このデメリットのダブル・サイクロンをメリットに変える方法に

「更にチェーン処理！ゴブリンやりくり上手の効果…墓地にやりくり上手は1枚あるため、2枚ドロ…！」

「な！？カード破壊してんのに効果使うのか！？」

「ルール上は問題ない。ゴブリンやりくり上手はあいつのカードで破壊されただけ…効果を無効化されていない」

今度は取り巻きBが驚いていたが、黒崎が静かに説明をした。

確かに魔宮の賄賂の様なカウンターが使われていないため、効果は適用される。

「そして手札のカードを1枚デッキの一番下に置く、手札からフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動!!」

辺りが巨大な墓場へと変わった。更にユウは伏せていたカードを発動させた。

「デストラクト・ポーションを発動!!自分の場の雷帝神を破壊し、その攻撃力2000分のライフを回復する!!」

「ライフを2000も!?!」

デストラクト・ポーション

通常罠

自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

ユウ/LP4000 6000

「更に手札から二重召喚を発動!!このターン俺は2回の召喚を行える!!」

「はっ、だが俺の場には2300のゴブリンが…」

と言っている黒崎。だが、ユウはもう勝利までの方程式を完成させていた。

「死皇帝の陵墓の効果発動!!! ライフをモンスターの生け贄×1000 払うことで、そのモンスターを生贄なしで召喚できる!!! ライフを20000 払い火之迦具土を攻撃表示で召喚!!!」

ユウ / LP 6000 4000

火之迦具土 / ATK 2800

ユウの場に、上半身裸の炎を纏った男性が現れた。その姿を見た黒崎が怯え始めた。

「ば、バカな…スピリットモンスター…だと…!!!」

あまりのビビリ様にただ事じゃないと感じた取り巻きたち。だが、それを無視してユウは続けた。

「更に二重召喚の効果で2回召喚を行える、ライフを20000 払い八岐大蛇を召喚!!!」

ユウ / LP 4000 2000

八岐大蛇 / ATK 2600

今度は火之迦具土の横に八つの頭を持つ巨大な龍が現れた。そしてその顔の目 全てが黒崎を捕えた。

「バトルフェイズ!!! 火之迦具土でゴブリン突撃部隊へ攻撃!!! 紅

蓮滅殺拳！！」

「うわああああ！！！！！」

黒崎 / LP 4000 3500

火之迦具土がゴブリン相手に無双をしていた。

「更に八岐大蛇で攻撃！！屍山血河！！！」

「ウワアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

今度は八つの頭から放たれた光線に黒崎が包み込まれた。

黒崎 / LP 3500 900

「更に八岐大蛇が戦闘ダメージを与えた場合、手札が5枚になるまでドローする！！！」

「はあ！？てめえ卑怯だぞ！！！」

取り巻きたちが何か言っているが、ユウはそれを無視してカードを5枚引いた。

そしてその中の2枚のカードを伏せ、一枚の装備カードを火之迦具

士に装備させた。

「八汰鏡を火之迦具土に装備！ターン終了時にスピリットモンス
ターは手札に戻るけど、八汰鏡の効果で火之迦具土は場に留まる！
！」

ユウ

手札3枚 LP2000

火之迦具土（ATK2600）

八汰鏡 伏せカード2枚

黒崎のターン

「俺の「この瞬間、火之迦具土の効果発動！」はっ!？」

ユウの言葉に驚いていると、黒崎の手札が燃え上がった。

「熱ちちちちちちち!!!!!!」

「火之迦具土が戦闘でダメージを与えた場合、相手の手札を全て墓
地に送る!!!」

「卑怯者!!!」

「汚ねえぞ!!!」

取り巻きたちが火之迦具土の効果にそう叫んでいた。だが、ユウは

それを無視して黒崎を睨んだ。

「どうした？お前のターンだろ？」

ユウの言葉に黒崎は顔をしかめながらカードを引いた。だが、すぐに口を吊りあげて笑った。

「伏せていた死者蘇生を発動！！墓地のゴブリン突撃部隊を特殊召喚！！」

再びゴブリン達が黒崎の場に現れた。だが、あの手札 恐らくゴブリンは生け贄用員だった。

「ゴブリン突撃部隊を生贄に偉大魔獣ガーゼットを召喚！！」

フィールドに強大な悪魔が現れた。だが、攻撃力が決まって無い

「ガーゼットは生け贄に捧げたモンスターの攻撃力の2倍となる！
！ゴブリン突撃部隊は2300…つまりその2倍、攻撃力」

ガーゼット / ATK 4600

偉大魔獣ガーゼット

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 0 / 守 0

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げたモンスター1体の元々の攻撃力を倍にした数値になる。

「バトル！！ガーゼットで火之迦具土に攻撃！！魔獣轟拳撃！！！」

ガーゼットは腕を振り上げ、火之迦具土を殴りにかかってきた。だが、その火之迦具土の前に巨大な鏡が現れた。

「八汰鏡の効果発動！！このカードを破壊して装備モンスターの戦闘破壊を無効にする！！！」

「だが戦闘ダメージを受ける！！！」

「うわあああああ！！！！！」

ユウ / LP 2000 200

黒崎

LP 900 手札0枚

偉大魔獣ガーゼット (ATK 4600)

伏せカード無し

ユウのターン

今のユウの手札は 先程のターン戻った『八岐大蛇』、貫通能力を与える『草薙剣』、そして今の状況では意味の無い『死皇帝の陵墓』だ。

そして伏せカードは『受け継がれる力』と何故か入っていた『リビングデットの呼び声』だった。

少なくともこのターンで決めないと、火之迦具土が破壊され、勝つことが不可能になる。

「…ボクのターン」

だが、ユウは怖くなかった。デッキの一番上のカード それが『逆転の切り札』だと信じていたからだ。

「ドロー!」

引いたカード ステータスだけを見てみたら攻撃力の低い下級モンスター。

だが、その効果は勝つために必要不可欠な効果

因幡之白兔 / ATK 700

うん、間違いないとユウは思った。確実に因幡之白兔が喋っている。だが他のメンバーは気付いていない。いや、気付かないのはおかしい。

確実に気付くぐらいの大声を出していた。つまり、『自分にしか聞こえない』？

「まあ…それは後で良いか……伏せカード受け継がれる力を発動！場の火之迦具土を生贖に、その攻撃力…2800ポイントを因幡之白兔に加える…！」

『力が漲るよ…!!!!』

因幡之白兔 / ATK 700 3500

「はっ!!だが攻撃力なら俺のガーゼットが上だ!!」

黒崎はそう言った。だが因幡之白兔は相手のモンスターを倒すモンスターではない。

「バトルフェイズ!!因幡之白兔で攻撃!!」

「馬鹿め!!ガーゼットの攻撃力の差は700!お前のライフは0に」

と言い、ユウはそのデジカメを踏みつけた。取り巻きが止めようとするのもむなしく、デジカメは粉々に砕けた。

「き、貴様！…！よくウゴオ！？」

「金ちゃん！？うげえ！？」

取り巻きたちがデジカメを踏みつぶしたユウに襲いかかろうとするが、

「おいおい…逆恨みも良いところだぞ」

そこは徹がいた。実は徹は空手の有段者なのだ。その後ろには徹のジャケットとユウの変えのズボンを履いた漣がいた。

「クツ…クソ！！貴様…俺の親父を知ってるのか！？海馬コーポレーションの重役の」

「ふうん…中々の強かさだ」

遠巻きで見っていた男性がユウ達の元へと歩いていった。それを見た残

り取り巻きが苛立ちを隠さずにその男に絡んでいた。

「おい！てめえ一体なにもんだあ！？」

「ぶちのめされたくなかつたらさっさグフっ！？」

取り巻きBがその男に掴みかかったが、逆に顔面を殴り返されていた。

するとユウはその男性が先程ヤマさんが黒崎が押し掛けてきた事を伝えに来た時にユウと話していた人だった。

「今の戦術…中々のモノだ。デユエリストたる者、相手の戦術を卑怯者呼ばわりするとはこの俺が許さん！！！」

「なっ！？あ、あなたは…伝説の決闘者の一人…海馬瀬人！？」

黒崎がそう驚いていた。ユウも父親から聞いたことのある名前だった。

第一回バトルシティ開催者にしてベスト3に入った海馬コーポレーション社長だ。

「さて…俺の知る限り黒崎という重役は一人しかいない…だがあいつはもう俺の会社に必要ない…磯野！！」

「はい、瀬戸様」

何処からか海馬の執事？秘書？の様な男性が現れた。その手にはユウと話している時海馬が持っていたアタツシユケースがあった。

その中から海馬は書類の様な物を取り出した。いや、紅い書類を取り出した。

「黒崎はクビだ。俺の前でデュエリストを貶すことは許さん…たとえそれが子供でもな」

「な！？ま、まって」

黒崎がそう言うが手早く書類に必要な事項を書く、それをアタツシユケースに戻した。すると磯野は何処かへ向かった。それに黒崎はパタンと頭を下げた。

それに興味が無い海馬はユウ達を見た。

「お前…名前は」

「あ、言っただけ無かったかな…ボクは聖牙夕、で大切な家族の福本徹と倉敷漣」

「えっと…初めまして…」

「初めまして…」

漣と徹は海馬に挨拶をする、すると海馬は磯野が残したアタツシユケースから3枚の書類を取り出した。

「中々のデュエルの腕前だった…それを腐らせるのもいささか納得
いかない。そこで貴様には海馬コーポレーション経営の孤児院に入
ってもらおう。ついでにその2人にもだ」

「………What?」「」

3人が英語で聞き返してしまった。「だが」と前置きして更に一枚
の紙を取り出した。

「海馬コーポレーションが運営するデュエルアカデミアでデュエルの
腕を磨き、その後は何らかの形で我が社に貢献してもらおうぞ」

「………（この話…結構いい話じゃない…?このまま地下で暮ら
していてもなにも…あの事件の手掛かりがなにも入ってこない…そ
れにあの生活じゃあまともにその日を生きるのもままならないし…
それに父さんはアカデミアでデュエルの腕を磨いたって言った。
父さんを越えるためにも…）」

そう考えたユウは2人を見た。2人はユウが「イエス」と答えたら
そのままついて行き、「ノー」と答えたら再びあの生活に戻る気だ
った。

3人は一緒に暮らしていた。それは今までも　これからもそのつ
もりだったからだ。

だから行くときも、戻る時も一緒だ。

会場へ向かうボクの横にはボク以外には見えない『ウサギ』
イナ』が浮かんでいた。

あの日　　2人と離れていた時、イナがボクに話しかけたのだ。

そしてお互いの事、精霊の事、夢の事　色々と話をした。徹と漣
だけにはイナの事を話した。2人は見えていないが、イナがいる事
を信じてくれた。

「だってユウがそんなデタラメ言う訳ない」

と、正直ボクは嬉しかった。あの日からボクは『除外スピリット』
を使っている。父さんからくれたデッキは『除外スピリット』のホ
ルダーの横にある。

『異次元デッキ』はボクの『本気』だったから。けど　結局あの
『白いカード』の事は分からなかった。海馬さんに聞いても首を傾
げていた。

まあお守り代わりにスピリットの融合デッキに入れている。

「まあ、良いか」

『どっつしたの〜?』

いつの間にか準備室にしていたみたいで、周りに他にも受験生が
いた。するとイナがフラフラ浮遊しながらボクに話しかけてくれた。

孤児院から出ても大切な家族がいてくれる。それだけでもものすごく嬉しい

「離して!」

そこには白髪の綺麗な女の子が不良たちに絡まれていた。

これがボクの物語の始まり。そしてツバキと シゲルと そして神楽、スピット…これから多く繋がりができる親友とも、家族とも言える仲間たちとの出会いと、ボクの人生ともいえる戦いの始まりだった。

ユウ「ボクって結構すごい生活してたんだね…」

初めは普通に家族がいる設定で…その後孤児で…最終形態がストーリートチルドレンになった。

ユウ「徹と漣…どこかで見たような…」

まるつきしシゲルとツバキをベースにして作った。ちなみにあの2人はもし『シゲルとツバキが相思相愛の場合』という感じなキャラにした。

ユウ「何それ怖い」

そしてオリジナルカード無しのデュエル…スピリットのオリカ無しは結構大変だった…

ユウ「効果に癖が大きい奴のあるからね…」

けどあのデッキ、TFのスピリットデッキをベースにしてるから…ゲーム内ではそれほど難なく使えてるんだよね…

ユウ「これからもよろしくね!!」次回もお楽しみに!!

ユウ「そう言えば、なんで番外からこっちに移したの?」

向こうのほうのお気に入りが0だったから…

第二十七話 コンボと経験（前書き）

今回は5人目のメインキャラを出します。

コウ「あれ？4人目は？」

4人目は剣賭。けどもう少し出番は先になる。

第二十七話 コンボと経験

寝室1

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

ユウとツバキは起きると共に顔を真っ赤にした。理由は 生まれて初めて【言えないよ!!】をしたからだ。まあ【言えないよ!!】とはいえ、本番ではない、いわゆる練習だったからツバキの腰と少女の証は大丈夫だ。

そして2人は起こしに来たルキが来るまで顔が真っ赤だった。

リビング

「よお、よく眠れたか？」

「う、うん／＼／」

「ぐ、ぐっすりと眠れたよ／＼／」

「……………風邪か？」

ユウとツバキの顔が若干赤っぱいのに気付いたが、勝手にそう結論

付けたシゲルだった。まあいいと思ったシゲルは口を開いた。

「まあ、ユウが寝ている間にあった事を説明するぞ」

「あ、うん…みんな無事だったの？」

そうユウはルキを見た。ルキは優しそうに微笑んでいる。

「みんな無事でした。重傷者や怪我人も多くいましたが幸い死亡者はいません」

「そうなんだ…よかった」

そう言ってユウは目の前のグラスに入っていたジュースを一口飲んだ。

次に口を開いたのはツバキだった。

「そういえば…あの子は？」

「大丈夫じゃ。衰弱していたが、今はぐっすり眠っている」

そう言ったのはウリイだった。その手には洗面器とタオルが乗せられていた。今イナ、ウリイ、ダーク、ルキがローションで少女の看病をしていた。

と、その時ユウはシゲルが左腕を無意識に庇っている様に見えた。

「シゲル…腕どうかしたの？」

「ん？あ、ああ…ちよつと強い奴とやり合ってな…まあ問題な「嘘
じゃな」「うぐ」「

ウリイの言葉とルキに腕に掴まれたのにシゲルは顔をしかめた。

それにウリイはため息をつきながら説明をした。

「お主等が皆の者を救出に向かった後にのお…融合したデーモンが
現れたのじゃ」「

「デーモンって…デーモンの召喚の？」

「そうじゃ、ソヤツと闇のゲームをしてな…ライフが200まで減
ったのじゃ」「

「「200!?!?」「」

ライフポイント200というと、志度の戦いの時のライフが100
0だった。それであの大怪我だったが、普通に考えると今回の方が
ダメージが多いはずだった。

「何故か知らんが、あの時より激痛とかが少なかったな…まるで、
何かに守られてる感じがして…気付くとそれほど痛みは無かったな」

「なんでだろう…?」「

ユウはそう呟いていた。何か抗体が出来たような感覚らしいのだが、あの日から特別なにをしたわけでもない。

あれこれ考えているとイナがスウーッと入ってきた。

「あの子が起きたよ〜」

「そうか、まあ話聞きに行くか」

寝室 3

目が覚めた少女はベッドの上で上半身を起こしていた。だが、自分の置かれている状況が理解できなかった。

最後に覚えているのは管理局員が自分の体で実験をしていた時だったはず。

それで意識を失った後、気付けば何処かの家の寝室にいたのだから無理も無い。

コンコン、ガチャ

「目が覚めたみたいだな」

「……………はい……………」

入ってきたシゲルの言葉に少女が返そうとしたが、声が掠れてて途切れている。その為話すことができなかった。

「無理して喋ろうとするな」

「これを使って」

そう言つてルキが人間界の五十音表を持ってきた。流石に会話するのになにも無しならやりにくいということ、何故か魔法都市にあった五十音表を持ってきたのだ。

「色々聞きたいが…まあ、まずお前の名前はなんだ？」

シゲルの言葉に少女は五十音表の一字一字を指さして言った。

『わたしになまえはないです』

「名前が無い…？それってどういこと？」

次にツバキがそう聞くと少女は黙々と表の文字を指さして行った。

『わたしはもともとひとではないです』

「人じゃない…？じゃあ精霊なの？」

ユウの言葉に少女は首を横に振った。どういことなのか説明するために文字を指さした。

『ろすとりぎあおしつてますか』

ろすとりぎあおしつてますか ロストロギアを知ってますか

脳内でそう変換したシゲルはある一枚のカードを取り出した。それを見た少女は驚いていた。

「ロストロギアなら俺達も持っている。それがどうかしたのか？」

『わたしはやみのしよというろすとりぎあからつまれました』

「やみのしよ…闇の書？」

ツバキの言葉に少女は頷いた。そしてされに文字を指さした。

『ですがわたしをふくめたまてりあるというそんざいは たかまちなのはたちによつてけされたはずなのです』

「…ん？たかまちなのは…？高町って管理局のあいつか？」

シゲルの言葉に少女は少し驚いた顔をしたがすぐに何故か納得した。

『あなたたちはかんりきよくいんなのですか』

「うっん、ボク達は管理局とは敵対関係にあるの。ボクやシゲル、ツバキのカードを無理やり取るうとして…」

ユウの説明の途中に少女の口が少し動いた。その動きは「シゲルとツバキ？」と言っている感じがして、すぐにツバキは自己紹介をしてないのに気付いた。

「私は姫野椿っていうの。それでこっちが聖牙夕で…この眼つきの悪そうなのが獣斬繁っていうの」

「おいこらまで、誰が目つきが悪そうな奴だよ」

シゲルの言葉にツバキはゴメンゴメンという感じで苦笑いをしていた。

すると少女は新たな言葉を指さした。

『わたしはまてりあるえす いえ せんこうのせんめつしゃ し
ゆてるざですとらくたーというこたいめいしようです』

「シユテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者って…なんか物騒な名前だな」

シゲルの言葉に少女は「違くないですね」という口の動きをした。すると、ウリイが「言い難い名前じゃの」とボソツとつぶやいた。

『よければつばきがなまえをつけてくれませんか』

「え？私が…貴女の名前を？」

ツバキの言葉に少女は頷いた。他の2人や精霊達もツバキをじっと見ていた。ツバキは何かいい名前が無いかどうか考えていたが、先程の「星の殲滅者」という単語で一つの名前が浮かんだ。

「じゃあ紫苑…姫野紫苑ってのは？」

『しおんですか いいなまえですね』

少女 紫苑はそう指差しながら微笑んだ。そして紫苑が何かに驚いたように顔を触った。それにルキが不思議そうに聞いた。

「どうかしたの？」

『いえ わたしにかんじようはぶろぐらむされていないはずなのに わらえたので』

そう紫苑は不思議そうに文字を紡いだ。するとふと気になったユウが聞いてみた。

「ねえツバキ、どうして紫苑なの？」

「私の名前を山本さんが付けてくれたんだけど、その時見せてくれた本であった花言葉で…確か紫苑は『君を忘れない』だったから。それに紫苑は別名『アスター・タータリアン』って言われてるの」

それを聞いたシゲルは納得した。

「アスターはギリシャ語で星型のという形容詞だ。確かにあってるな……」

「へえ……じゃあ椿の花言葉は？」

それを聞いた時、ツバキ顔を薄らと紅くしていた。その理由が少女改め紫苑は分かっていた。チヨイ、チヨイとシゲルの服を引っ張り、こっそりと文字を指さしていた。

『つばきはかんたんにいとうあいじょうです』（椿は簡単に言っと愛情です）

「……まさにツバキだな」

そうシゲルは呟いた。ちなみにツバキは顔を赤くして「知らない！」「と首がもげるほど横に振っていた。

「で、姫野にするってことは……」

「剣賭に頼んで私の姉妹にしてもらうの。そうすればAWが関わることになって奴らが手出しできなくなると思う……」

確かに管理外世界である地球のAW社によって秘密を暴露されればたまったものじゃない。

「そついや…お前…紫苑つてデュエルできるのか？」
『はい』

そつ指差して、自身の左手の上に右手を添えるとマジックの様にデ
ツキが現れた。

『いまはこえがでませんし ではいすもないですが しよつぶしま
すか』
「勝負？」

とつこつと

ユウVS紫苑

一先ずベッドサイドに小さなテーブルを持ってきた。消去法でシゲ
ルは腕を痛めているため勝負できない、そしてあまりツバキは勝負
に乗り気じゃなかった。ただたため必然的にユウになった。

ユウのターン

「ボクのターン、ボクは火炎車を攻撃表示で召喚！そしてカードを
伏せてターン終了！そしてエンドフェイズ火炎車は手札に戻り、効

果発動！デッキからカードを1枚引く」

ユウ

手札6枚 LP4000

モンスターなし

伏せカード1枚

紫苑のターン

—先ず喋れない紫苑に代わってツバキが宣言を行うことになった。まあディスクを使っておらずカードを出すだけなのでゆったりとしている。

「ドロー！…え…このデッキ…」

宣言した後そうツバキが呟いた。手札のカードがあまりにもあいつのデッキのカードと似ていたのだ。不思議そうにツバキを見ていた紫苑だったが、それに気づいたツバキは微笑んだ。

「ユウ、結構しんどいと思うよ」

「え？」

「ふふ…紫苑、続けよう」

ツバキの言葉に紫苑は頷くと、一枚の魔法を使った。（これより

先、『』がツバキが言った紫苑の代訳です)

「『手札から魔法カード融合を発動！手札のE・HEROエレメンタルヒーローオーシャンとE・HEROザ・ヒートを融合！」

エレメンタルヒーロー
E・HERO オーシャン

効果モンスター

星4 / 水属性 / 戦士族 / 攻1500 / 守1200

1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

自分フィールド上または自分の墓地に存在する「HERO」と名のついたモンスター1体を選択し、持ち主の手札に戻す。

エレメンタルヒーロー
E・HERO ザ・ヒート

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 炎族 / 攻1600 / 守1200

このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO」と名のついたモンスターの数×200ポイントアップする。

「『E・HEROノヴァマスターを召喚！』」

そう言って出したのは紅い、炎の戦士だった。

ノヴァマスター / ATK 2600

「ってHEROって…」

「十代と同じ…HEROデッキ…!」

ユウとシゲルはそう驚いていた。HEROを使う奴は他に知らないが、オーシャン、ザ・ヒート、ノヴァマスター…十代が使うカードとは違うデッキ。

すると紫苑はノヴァマスターを指さし、その後ユウを指さした。初めは意味は分からなかったが、ツバキは理解した。

「『ノヴァマスターでユウに直接攻撃!』」

「伏せカード、くず鉄のかかしを発動!攻撃を無効にし、再びこのカードをセットする!」

それを見た紫苑は少し残念そうな顔をした。そしてカードを伏せて、「どうぞ」というように手を差し伸べた。

紫苑

手札 2枚 LP 4000

ノヴァマスター (ATK 2600)

伏せカード 1枚

ユウのターン

「ボクのターン！」

流石に紫苑がHEROを使うのに驚いたが、それでもユウは慌てず次の手を考えていた。火炎車によって一つ多くなった手

「因幡之白兔を攻撃表示で召喚！」

いつもならイナが元気いっぱいに出てくるのだが、今回は立体映像立体映像を使っていないため、カードのみだ。

因幡之白兔 / ATK700

「因幡之白兔は相手にしか攻撃しかできない！攻撃！」

紫苑 LP4000 3300

ディスクではないため、PDAの計算機能を使ってライフ計算をしている。

ツバキが紫苑の、シゲルがユウのライフ計算を担当している。

「カードを伏せてターン終了。そして因幡之白兔は手札に戻る」

ユウ

手札5枚

モンスター無し

伏せカード2枚

紫苑のターン

「『ドロー！E・HEROエアーマンを召喚！』え？効果？」

エアーマン / ATK 1800

紫苑が指差した所にはエアーマンの効果表示だった。そこにはエアーマンには2つの効果があった。そして片方の効果を指さし、そしてユウのくず鉄のかかしを指さした。

その意図が分かったユウはエアーマンをモンスターゾーンに戻すと説明を始めた。

「『エアーマンの効果発動！召喚成功時、2つの効果を選びどちらかを発動することができる！一つ目の効果を発動！！エアーマン以外のHERO一体につき、フィールドの魔法罫を破壊することができる！』」

「ってことは…！…！」

そう、ユウの守りの要が破壊されたのだ。

エレメンタルヒーロー

E・HERO エアーマン

効果モンスター（制限カード）

星4 / 風属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守 300

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法または罫カードを破壊する事ができる。自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「バトル！ノヴァマスターで攻撃！」
「手札の黄泉之英雄ヨミノエイユウを墓地に送ってスピリット・ガードナーを特殊召喚！さらに黄泉之英雄の効果発動！手札から墓地に送られた時、このカードをデッキに戻してシャッフルする！」

壁が現れた、が

「バトル続行！ノヴァマスターでスピリット・ガードナーに攻撃！」
「墓地にスピリットがないから効果は使えない…破壊される」

そう言ってユウがスピリット・ガードナーをセメタリーゾーンに置いた時、紫苑はノヴァマスターのカードを指さしてカードを一枚引いた。

「ええと…ノヴァマスターの効果、戦闘で相手モンスターを破壊した時、カードを一枚引く…でいいのかな？」

「…う…ん（コク）」

エレメンタルヒーロー

E・HERO ノヴァマスター

融合・効果モンスター

星8 / 炎属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2100

「E・HERO」と名のついたモンスター＋炎属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

ツバキの質問に紫苑は頷いた。言葉を出そうとするのだが、どうしても掠れて言葉が出ない。

寝ている間に調査団の衛生兵に診てもらったら、幸い軽症だったため、回復薬を投与して、今日か明日には日常会話に支障が無いぐらい回復するだろうとのこと。

「『エアーマンで直接攻撃!』」

ユウ / LP 4000 2200

「『ターン終了!』」

紫苑

手札3枚 LP 3300

ノヴァマスター（ATK2600） エーマン（ATK1800）
伏せカード1枚

ユウのターン

「ボクのターン！手札抹殺を発動！互いに手札全て捨て同じ枚数カードを引く！」

1ターン前に来ていたらスピリット・ガードナーが破壊されることはなかった。そこは少し運が悪かった。

「スピリット・ドローを発動！墓地の因幡之白兔を除外してカードを2枚引く！手札から雷帝神を召喚！」

雷帝神 / ATK2000

「さらに八汰鏡を装備！これで雷帝神はエンドフェイズ時に手札に戻らなくてもよくなる！バトル！！雷帝神でエーマンに攻撃！」
「えつと…」ヒーロ・シグナルを発動！モンスターを戦闘で破壊された時、デッキからレベル4以下のヒーロを特殊召喚する！…E・HEROフォレストマンを特殊召喚する！…で、雷帝神の効果でダメージは100だね」

ヒーロ・シグナル

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

紫苑 / LP 4000 3900

フォレストマン / DEF 2000

「そしてスピリット・バーナーを雷帝神に装備する！効果で守備表示に変更できる！」

スピリット・バーナー

装備魔法

1ターンに1度、装備モンスターを守備表示にする事ができる。

装備モンスターがフィールド上から手札に戻る事によって

このカードが墓地へ送られた時、

相手ライフに600ポイントダメージを与える。

このカードが墓地に存在する場合、

自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに、

このカードを手札に加える事ができる。

「雷帝神を守備表示に変更してターン終了！」

雷帝神 / ATK 2000 DEF 1600

ユウ

LP 2200 手札1枚

雷帝神 (DEF 1600)

スピリット・バーナー 伏せカード2枚

紫苑のターン

「『ドロー！』えつと…フォレストマンの効果？」
「……………うん…」

徐々にだが言葉が戻って来ていた。だが、まだ掠れており、紫苑はしんどそうに言っていた。一先ずフォレストマンの効果処理が始まった。

エレメンタルヒーロー

E・HERO フォレストマン

効果モンスター

星4/地属性/戦士族/攻1000/守2000

1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

自分のデッキまたは墓地に存在する「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

「『デッキ・また墓地から融合を手札に加えることができる。…デッキから融合を加える。さらに融合回収を発動！墓地の融合とオーションを手札に加える』」

「こいつぁ…ヤバイな」

シゲルがそう呟いた理由は2つある。一つ目はノヴァマスターの素材はHEROと帆の属性モンスター 明らか今まではない素材指定だ。シゲル自身の剣闘獣もそうだが指定されてない融合モンスターは展開がしやすい。

もう一つは十代のHEROでもそうだが、大量展開するためには融合が無いと始らない。それにシゲルの剣闘獣は融合が必要ない。そのため指定された剣闘獣だけで十分展開できるが、融合はデッキに最大3枚、補助カードも入れても6枚だがフォレストマンはデッキ・墓地から融合を回収できる。

「フォレストマンを早く何とかしないとやられるぞ…」

「『手札から融合を発動！手札のアイスエッジとシャインを融合！融合召喚…アブソルトZero！』」

アブソルトZero/ATK2500

「『更にE・HEROレディ・オブ・ファイアを召喚しフォレストマンを攻撃表示に変更！』」

レディ・オブ・ファイア/ATK1300

フォレストマン/DEF2000 ATK1000

「『バトル…アブソルトZeroで攻撃！』」

「装備されている八汰鏡を破壊することで戦闘破壊を無効にする！」

そうやって八汰鏡をセメタリーゾーンに置いたが、どうしようかと悩んでいた。伏せカードはスピット専用の罠カードでブラフで伏せていたのだ。だがどうも紫苑はそのことに気付いていた。

「『ノヴァマスターで雷帝神に攻撃！戦闘破壊時カードをドロー！』」

これでユウの場はがら空きになってしまった。2体の直接攻撃を喰らえばおしまいだ。

「『レディ・オブ・ファイアで直接攻撃！』」

「ヤバッ！！」

ユウ/ＬＰ 2200 900

「『フォレストマンで攻撃！』」

この攻撃が通ればユウのライフは無くなる。だが、ユウは慌てることなく墓地のカードを取り出した。

「まだ！墓地のスピリット・リカバリーの効果発動！このカードを除外して、墓地のレベル4以下のスピリットモンスターを墓地に送り、そのモンスターのレベル×400回復する！火炎車を墓地へ送り、1600回復！」

スピリット・リカバリー

効果モンスター

星2 / 光属性 / 天使族 / ATK 200 / DEF 500

このカードは召喚・反転召喚・特殊召喚ができない。

墓地に存在するこのカードを除外して、墓地のレベル4以下のスピリットモンスターを除外し、そのレベル×400ポイントライフを回復する。

ユウ / LP 900 2500 1500

「えつと…」カードを伏せ、ターン終了時レディ・オブ・ファイアの効果発動！エンドフェイズ時に自分の場のHEROー体につき、200ポイントダメージを与える！計800のダメージ！」「
「え？残り700!？」

エレメンタルヒーロー

E・HERO レディ・オブ・ファイア

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 炎族 / 攻1300 / 守1000

自分のターンのエンドフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたモンスターの数×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

ユウ / LP 1500 700

紫苑

LP 3300 手札3枚

ノヴァマスター (ATK 2600) アブソルートZero (ATK 2500) フォレストマン (ATK 1000) レディ・オブ・ファ

イア（ATK1300）
伏せカード2枚

ユウのターン

「ボクのターン、ドロー！来た！手札に加わった黄泉之英雄の効果発動！！デッキに戻ったこのカードがドローフェイズ時に手札に加わった時特殊召喚することができる！」

黄泉之英雄

スピリットモンスター（制限）

星7 / 闇属性 / 戦士族 / ATK2500 / DEF1700

このモンスターは通常召喚できない。

このカードは、このカード自身の効果でしか特殊召喚できない。

自分また相手のカード効果によってこのカードが墓地に送られた時、このカードをデッキに加えてシャッフルする。

この効果でデッキに加わったこのカードをドローした時、特殊召喚することができる。

このモンスターが特殊召喚に成功した時、デッキから「エンシェントスピリット」と名のついたモンスターを1体手札に加えることができる。

このモンスターは特殊召喚したターン除外することはできない。

「黄泉之英雄の効果発動！！デッキからエンシェントスピリット闇刀神を手札に加える！そしてモンスターの特殊召喚に成功した時、スピリット・マターは特殊召喚できる！」

スピリット・マター

紫苑の言葉にツバキが嬉しそうにそう呟くと紫苑は不思議そうにツバキを見た。

「どう…して…ですか？別に…私が喋れなくても…心配することは…」

「…ううん、そうじゃないの。初めて貴女の声が聞こえたから…」

そう、ユウが助けた時から先程まで眠り続けていた。そして掠れてまともに声が出なかったため、初めて紫苑の声を聞く事が出来たのだ。

「…そう…ですか…それより…続きを…」

「あ、うん。レベル5になった黄泉之英雄にレベル1、スピリット・マターをチューニング！」

ディスク無し・立体映像無しなので口上省略。

「聖霊鳥シルフィをシンクロ召喚！！」

シルフィ / ATK 2500

「更に手札のスピリットモンスター、闇刀神を墓地に送って相手の場のモンスターを手札に戻す！ノヴァマスターを手札へ！！」

「っ…流石ですね」

そういいながら紫苑はノヴァマスターをエクストラデッキに戻した。ルールではメインデッキ以外のカード…つまり融合モンスターやシンクロモンスターを手札に戻す場合、エクストラデッキへと戻るのだ。

「更にシルフィにスピリットフィッシュをチューニング！！シンクロ召喚！！スピット・シルバー・ドラゴン！！」

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 2500

スピットのカードを出すと、チビ龍だったスピットは思いっきり喜んでいた。

「墓地の闇刀神を除外してスピリット・フィッシュを特殊召喚！」

更にユウは伏せていたカードを使う。

「リバーズ罨銀翼の魂を発動！フィールド上に存在するレベル7以上のドラゴン族のシンクロモンスターの装備カードとなり、さらにスピリットと名のつくモンスターを任意の枚数除外して発動する！

さらにスピットの効果で2枚カードを引く！」

そうやって引いたカードはスピリット・バードとスピリット・デイ
フエンダー　これで保険が掛けれるが、あの伏せカード　だが、
臆することはない！！

「バトル！スピットでレディ・オブ・ファイアへ攻撃！！」

紫苑 / LP 3300　2100

「伏せカード発動します、ヒーロー逆襲。戦闘でE・HEROが破
壊された時、相手は私の手札を選択します。それがE・HEROだ
った場合、相手のモンスターを破壊して選択したモンスターを呼び
出します」

ヒーロー逆襲

通常罠

自分フィールド上に存在する「E・HERO」と名のついたモンス
ターが

戦闘によって破壊された時に発動する事ができる。

自分の手札から相手はカード1枚をランダムに選択する。

それが「E・HERO」と名のついたモンスターカードだった場合、
相手フィールド上のモンスター1体を破壊し、選択したカードを
自分フィールド上に特殊召喚する。

そうやって紫苑はシャッフルした4枚のカードを伏せた。自分でも

分からない様にして、動揺しない様にだ。

そしてユウは一番右はじのカードを選んだ。

「これ！」

「…残念でしたね。E・HEROオーシャンを守備表示で特殊召喚します」

オーシャン / DEF 1500

そう、融合回収で手札にあったカードだ。だがユウは慌てることなく手札のモンスター1体を墓地に送った。

「スピット・シルバー・ドラゴンの効果発動！手札のチューナーを墓地に送ることでモンスターを対象とした破壊効果を無効にする！更に銀翼の魂の効果発動！装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、その攻撃力を装備モンスターに加える！！そして装備モンスターは除外したモンスター分攻撃を行える！！」

銀翼の魂

永続罫

自分フィールド上のレベル7以上のドラゴン族・シンクロモンスターを選択して発動することができる。発動時、選択したモンスター以外のモンスターを任意の数除外する。

このカードを装備したモンスターは戦闘で相手モンスターを破壊し

た時、破壊したモンスターの攻撃力をターン終了時までこのカードを装備したモンスターに加える。

また、このカードを装備しているモンスターは、発動時除外したモンスターの数だけ、通常攻撃とは別に相手モンスターに攻撃することができる。

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 2500 3800

「スピットでフォレストマンに攻撃！」

「まだです！伏せカード、シークレット・ミッションを発動！攻撃を受けるモンスターはランダムになります！」

そう言つて紫苑は3体のモンスターを裏向きにシャッフルし、並べた。

シークレット・ミッション

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手は自分フィールド上のモンスターの中からランダムに1体を選択して

そのモンスターと戦闘を行うか、バトルフェイズを終了するかを選択する。

そしてユウは一つのカードを選んだ。

「真中を攻撃！」

「…選ばれたのは…アブソルートZero！」

紫苑 / LP2100 800

「アブソルートの効果発動します！フィールドから離れた時、相手フィールド上のモンスター全て破壊します！」

「まだ！手札のディフェンダーを墓地に送って破壊を無効にする！」

「…私の負けですね」

そう紫苑が呟いた。そう、まだ攻撃が行えるスピット、耐えられないライフ

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK3800 6300

「スピットでフォレストマンに攻撃！」

紫苑 / LP800 0

間一髪ユウが勝った。だが実際はユウは負けていた。そのことを聞くためにシゲルが聞いた。

「紫苑…なんで手を抜いたの？」

「…？本気でやりましたけど…」

紫苑の反応にツバキは最終的な紫苑の手札を広げた。

『融合』 『魔法石の採掘』

パラレル・ワールド・フージョン
『平行世界融合』

魔法石の採掘は墓地に魔法カードで有効なカードは無く、並行世界融合は除外されているHEROがいないため使えない。だが

「属性指定のHEROはいるんでしょ？だったらアブソルートZeroにフォレストマンとかで召喚したらユウのモンスターがいないくてそう攻撃で倒せれたんじゃないの？」

「…あ…そ、そうですね…」

分かった事。紫苑はデュエルの基本的な戦術は強いが、効果を応用した戦術が苦手なようだった。

「…あ、そうだ！紫苑、アカデミアに入学しよう！」

「…私が…アカデミアに…？」

驚いたようにシオンがユウに聞き返した。それにシゲルとツバキも納得した。

紫苑の戦術はまだ粗削りだったが、経験と実績を詰めば良い決闘者になる。

「ですが…私がいれば彼女達が出てくると思いますが…皆さんに迷惑がかかると…」

「いや、それなら逆に好都合だ。奴らを捕まえて情報を引き出すこともできるし、それに奴らも下手に手を出せない。奴らは無関係な奴が自分達の事を知られるのを嫌う。そうやすやすとは出てこれないはずだ」

シゲルの言葉に紫苑は悩んでいた。確かに自身はさらなる高みへと行きたかった。だがそれでもこの3人に迷惑をかけたくなかった。するとシゲルの持つてるカードが目に入った。

「…シゲル。それは確かロストロギアですよね」

「ん？ああ、とは言っても俺達からしたらただのカードだけだな」

そう言ってシゲルはカードを紫苑に渡した。同じようにユウとツバキもカードを渡し、紫苑はそのカードに手を翳し目を瞑ると何かを喋るように口を動かした。

「……っ!?!」「」

するとそのカードが光り輝いた。人間の3人は驚いているが、精霊達は驚くより身動きが取れない様になっていた。

「このロストロギアは…特定の人物に幻想を現実へと変える力を与えます」

「幻想を…現実に？」

ツバキが分からない様に聞き返すと、更に強い光が辺りを包み込んだ。

そこにいた紫苑以外は手で目を覆っていた。すると優しく紫苑の言葉が聞こえた。

「頑張ってください」

そしてその光がおさまると

「……………あの、紫苑さん……………皆さんは……………」
「心配無いですよ。」

紫苑とルキとツバキのカードしかいなくなっていた。紫苑の持っていたユウとシゲルのカードもユウも、ツバキも、シゲルも、イナやスピットと言った精霊達もいなかった

???

「う…ここはどこ…？」

ユウが当たりの光が消えたことを確認すると、目を開けた。そこは青い光が立ち込める『聖地』とも呼べる場所だった。

「あのカードが何かやったってとこだよな…」

「うん…けど…ここって…？」

ツバキの言葉に他の6人も気になった。此処にいた全員が、確実にこの場所を知っていた。そう　いつもユウが

「【魂の聖地】だよ…ボクの…ボク達の故郷の」

イナがそう言った。神楽も同じように驚いていた。ちなみにスピッ

トは何処か喜んでいる様子だった。すると7人の目の前に一人の女性が現れた

「お待ちしていました。選ばれた決闘者達よ」

「え…？つて君は…ルナ？」

ユウが聞いたようにそこにいた女性はユウのシンクロモンスター「聖霊天ルナ」だ。

その質問にルナは頷くと招くようにある場所へと手を差し伸べた。

「こちらに…カルマ様とアナト様が待つておられます」

「カルマと？」

「アナトが？」

ユウとシゲルがルナの言葉に引つかかった。だがルナが先導で魂の聖地の奥へと向かった。

そして、そこでなぜユウが、シゲルが、ツバキが奴ら 時空管理局が狙うシンクロ召喚と2人に聞いた『世界の矛盾』とは何なのか
その全てが分かった

第二十七話 コンボと経験（後書き）

さて、新キャラの

紫苑「姫野紫苑です」

紫苑は、なのはPORTABLEのマテリアルS『シユテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者』
です。

使用デッキは「漫画版HERO+アニメ補助カード」で性格・容姿はほぼ原作と同じです。

ユウ「ところで…なんでぼくたちが魂の聖地に？」

そろそろ『神のカード』についての話を出したかったから…同じロストロギアの紫苑がカードに呼び掛ける形でカードの精霊に呼び掛けた感じ。

ツバキ「じゃあなんで私のカードだけが残ってるの？」

それも次回でやる。けど、今回は予想外に長くなった…まだ前編しかできてない。

796

オリジナルカード

スピリット・リカバリー

黄泉之英雄

スピリット・マター

銀翼の魂

次回予告：シゲルside

突然紫苑に預けたカードからでた光に包まれた俺たちはイナと神楽の故郷である魂の聖地へと飛ばされた。

そこにいたルナの案内で俺とユウのカードの精霊であるカルマとアナトに出会った俺たちだが、2体は俺とユウに試練を出した。

神か何だか知らないが、誰にも負ける気は無いぜ。

だが、アナトは俺の想像をはるかに超えていた…

次回第二十八話 戦いの神

最強カードは「イージーチューニング」

第二十八話 戦いの神（前書き）

今回はシゲルのデュエルです。前半は説明は行ってます

第二十八話 戦いの神

魂の聖地

ルナに連れてこられた7人+チビ龍3匹はある場所に辿り着いた。そこは神殿の様な場所で、巨大な柱が多くある所だった。

「カルマ様、アナト様、お連れしました」

『御苦労じゃったの』

そう言ったのは巨大な銀色の体と銀色で青い体に入った龍だった。どこかしらスピットに似てる気がするが

「ガア
」

するとスピットが楽しそうにその龍の頭の上に乗った。すると銀色の龍は優しくそうにスピットを抱えた。

『久しぶりじゃの、スピット』

「えっと…スピットと知り合いですか？」

ユウが聞くと龍の近くにいた真つ黒で灰色のラインの入った狼の様なモンスター（こっちも結構でかい。もしかしたらレッド寮よりはるかに大きいかもしれない。）が当たり前前のように答えた。

「そりゃそうだ。スピット坊はカルマの子だ」

「え……？スピットの……お父さん？」

ツバキがシゲルの後ろで隠れるようにして驚いていた。いつもながらの人見知りだ。

それに狼 消去法でアナトが足元で顔をすりすりしているソウルの頭を撫でた。

「ソウルは我の息子の子……つまり我の孫だ」

「……なんでもありだな」

ソウルのマスターであるシゲルはそう呆れるように言った。魂レノマの聖地へ飛ばされる前に紫苑に渡したカード

「まさかスピットとソウルが 『神の子』 だとはな」

神のカードであるカルマとアナトの子だからだ。すると地面にスピットを降ろしたカルマが7人を見下ろした。

ちなみにカルマは学園にある謎のモニュメント（突起した塔の様な物）よりも大きい。

『お私たちの戦いは見ていた…時空管理局という組織の事も…そして奴らと対峙することもな』

『だが、お前達は戦う事が出来ん。奴らが強行手段に出れば確実に存在そのものを消される』

そう言った2体の神

「それがどうかしたの」

だが3人の人間はそれを聞いても揺らがなかった。そう、3人は勝てないとしても逃げることは考えてなかった。

『負けると分かっているながら逃げることはせんのか？』

「逃げたら精霊に危害が加わる。ならば俺達が精霊の盾になってやるよ」

「精霊だって生きているはず。それなのにゴミ扱いする人たちには容赦はしないよ」

「皆…！…！」

ユウがその言葉に納得するとシゲルがカルマを見た。

「試すってことは…俺達と勝負するってことか？」

「そういうことじゃの…わしはユウと、アナトはシゲルと戦うことになるの」

「我らが認めた褒美は我ら…我とカルマのカードの解放と、新たな力への手掛かり…そして世界の矛盾の事をお主らに話すということだが試験で我等を認めさせることが無かったら…その時は後で話すとして」

実を言うと3人の持つロストロギアは使うことができなかった。カードの絵図もテキスト表示の部分はまっさらで、名前すら入って無かった。

だが、其々そのカードの名を知っていた。理由は分からないが頭の中にイメージが浮かんでくる感じで知っていたのだ。

「世界の矛盾について何か知っているの？」

「うぬ…じゃが、そのことを含めワシらに力を見せることができないのなら…お主等が管理局に勝つなぞ、到底無理な話じゃ。その時は決めてもらっぞ」

「勝つてやるよ、そして教えてもらっぞ！」

「ほう…我らに対してその様な強気でいられるとはの」

そう言って各々デュエルの準備を始めようとしていた。だが、ツバ

キが手を上げて聞きたい事を聞いた。

「ちょっと待って、コスモスは？私のカードの」

「コスモスか…実はのう…コスモスは十年近く前に何者かによって封印されておるのじゃ」

「封印？」

精霊で封印とはどういうことなのか、ユウが聞き返すとそれに答えたのは予想外にダークだった。

「精霊達は生まれるときに自身の力を引き出す為にカードと共に生まれるのだ。だが最近…ここ50年の間に精霊のカードに特殊な力を発動させ、カードに精霊を閉じ込める事件が起こっておるのだ」

「なるほどな…その力はたとえ神と言えど抗えないということじゃの…」

ウリイの言葉にダークが頷いていた。するとカルマとアナトの腕にデュエルディスクが現れた。しかもデッキはセット済みだった。

「初めは我とシゲルだ。そして　メインデッキはシゲルのと同じモノを使う」

「メインデッキはってことは……エクストラは　」

ユウがそこまで言った時、アナトは一枚のカードを取り出した。

「我等のエクストラは其々一枚だ」

「なっ…融合主体の剣闘獣でたった一枚のエクストラだと…!!」

剣闘獣のデッキを持つシゲルは、剣闘獣の長所を知っていた。それは融合を使わない融合モンスターだった。その戦法で、時には意表を突く戦法も取ることができる。

だが、それをアナトはしないというのだ。

アナトのターン

「私のターン!! 剣闘獣ラクエルを召喚!!」

ラクエル / ATK 1800

ラクエル シゲルのデッキでは比較的召喚されるモンスターだ。

「更にスレイブタイガーを特殊召喚!! 効果は知っておるな?」

「ああ…場に剣闘獣がいる時特殊召喚できるモンスター…デッキから何かを出す気だな」

そう言うと、ラクエルはスレイブタイガーに乗っかると何処かへ行

ってしまった。

「その通り。ラクエルをデッキに戻してセクトルを特殊召喚する！」

セクトル / ATK 400

「カードを2枚伏せて、ターン終了！！主^{ぬし}のターンじゃ！！」

アナト

LP 4000 手札2枚

セクトル (ATK 400)

伏せカード2枚

シゲルのターン

「俺のターン！！（セクトルを攻撃表示：あれは確か俺のデッキと同じものだったはず。だったら…伏せカードは攻撃反応型のディフェンシブ辺りか…？）手札から剣闘獣ダリウスを攻撃表示で召喚！」

場に馬の頭の獣人が現れた。

ダリウス / ATK 1700

「更に剣闘の威嚇を発動!!!手札のバウンドをデッキに戻し、相手の魔法・罠を一枚破壊する!!!」

グラディアル・バーツ
剣闘の威嚇

通常魔法

手札の「剣闘獣」と名のついたモンスターをデッキに戻して相手の場の魔法・罠カードを一枚破壊する。

「チエーンだ、ディフェンシブタクティクスを発動する。効果説明はいらないはずだろう?」

「ああ。カードを伏せてターン終了だ」

シゲル

LP4000 手札2枚

ダリウス(ATK1700)

伏せカード1枚

アナトのターン

「私のターン!では我はバトルを行う!!!」

「なに...?攻撃力が低いセクトルだと...まさかそのカード...!!」

シゲルが気になっていたもう一枚の伏せカード ブラフでなければ

ば剣闘獣の戦車やパリの様なカウンターか

「そのまさかだ…ディフェンシブタクティクスを発動!!」

2枚目の守りのカード　ディフェンシブタクティクスだ。シゲルのデッキにディフェンシブタクティクスは2枚入っている。そしてアナトのデッキはシゲルと同じだ。

だが、それが同時に手札に来ることは全くと言っていいほどない。

「セクトルによつて我が受ける戦闘ダメージを失くし、破壊されない!!そしてバトルフェイズ終了時セクトルの効果発動!!デッキより現れる!!ムルミロ!オクタビウス!」

ムルミロ(DEF400)

オクタビウス(ATK2500)

アナトの場に魚の様なモンスターと鳥人が現れた。するとムルミロの生み出した泡がダリウスを包み込んだ。

「ムルミロの効果…フィールド上の表側モンスターを破壊する!ダリウスを効果発動前に破壊する!!」

「クツ…更にオクタビウスの効果もある…だろ?」

そう、オクタビウスの効果はシゲル自身もよく知っていた。ウリイと同じ魔法・罨破壊効果がある。

剣闘獣オクタビウス

効果モンスター

星7 / 光属性 / 鳥獣族 / 攻2500 / 守1200

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、魔法&罨カードゾーンにセットされたカード1枚を破壊する。

このカードが戦闘を行った自分のバトルフェイズ終了時に、手札を1枚捨てるかこのカードをデッキに戻す。

魔法・罨を破壊する ならば、

「伏せカード発動！！音程調律！！手札を一枚捨て、リゾネーターと名のついたモンスターを特殊召喚する！！」

音程調律

速攻魔法

手札を一枚捨て発動する。

デッキ・手札から「リゾネーター」と名のついたモンスターを1体特殊召喚する。

このカードを発動したターン、自分は通常召喚ができない。

「効果により、フレア・リゾネーターを特殊召喚する！！」

シゲルの場に炎の音叉を持った悪魔が現れた。一先ずこれで、次のターンシンクロを行うことができる。

「ふむ…我はこのままターンを終える」

アナト

LP4000 手札3枚

セクトル(ATK300) ベストロウリィ(ATK1500)

ムルミロ(DEF400)

伏せカード無し

シゲルのターン

「俺のターン！！俺は剣闘獣アンダルを攻撃表示で召喚！！」

フィールドに鎧を身に纏った大きなクマが現れた。

アンダル/ATK1900

「レベル4、剣闘獣アンダルにレベル3チューナーモンスター、フレア・リゾネーターをチューニング！！獣の命を喰らいし者よ、今ここに全ての魂を喰らい尽くせ！！」

4 + 3 = 7

に剣闘獣の使いに慣れていた。展開力のあるセクトルがいれば、更に不利になる可能性があった。

黒い炎がトカゲの様なモンスターを包み込んだ。そしてセクトルは破壊された。

アナト / LP 4000 1600 1300

効果を含めて大ダメージを与えることができた。だが、何処か腑に落ちない

アナトの戦術は、デッキを含め自信と同じ毛色になるはずだ。だが、セクトルを守る手も無くそのまま放置したとは考えにくい

「俺はカードを2枚伏せ、ターン終了だ」

シゲル

LP 4000 手札 0枚

ソウル・ブラック・ドラゴン (ATK 2700)

伏せカード 2枚

アナトのターン

「私のターン！！ククク…ソウルを出して、私のライフを削った事は認めてやるう…だが、私の試練は此処からだ！！手札からコール・リゾネーターを発動！！デッキからレベル・リゾネーターを手札に加える…！！」

コール・リゾネーター

通常魔法

自分のデッキから「リゾネーター」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「そしてレベル・リゾネーターの効果発動！！場のレベル5以上のモンスターのレベルを2つ下げることによって特殊召喚できる！！」

レベル・リゾネーター

効果モンスター・チューナー

星2 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK1800 / DEF900

このモンスターは通常召喚できない。

自分フィールド上のレベル5以上のモンスターのレベルを2つ下げることによって、

手札からこのカードを特殊召喚できる。

レベル・リゾネーター / ATK1800

アナトの場に星のマークの入った甲羅の様な物を背負った悪魔が現れた。

「レベル合計：5か7：ソウルを召喚する気が：！？」

「残念だ。一つだけ言い忘れていたが：エクストラは貴様のカードではない」

「「「！？」」」

シゲルのカードではない　つまり、見たことの無いカードが出てくる可能性があった。しかも、出されるカードはエース級のカード

「（待てよ…確かこれは『アナトの試練』のはず…そして…アナトは…！！！！）まさか…あれを…！！」

「どつやら気付いた様だな。それでは行くぞ…レベル3剣闘獣ムルミロとレベル5となった剣闘獣オクタビウスにレベル2レベル・リゾネーターをチューニング！！」

「合計レベル10！？」

ユウと神楽が驚いていると周囲に強力な風が吹いた。

それをユウは知っていた。そう、研究所で戦ったあの女性がシンク口召喚を行った時と同じ

「全てを統一すべし神よ、争う者達を鎮め新たな力を導け！！」

3 + 5 + 2 = 10

「シンクロ召喚！！降臨せよ…アナト！！」

アナトの持っていた『白い絵柄とテキストの無いカード』に絵柄とテキストが浮かび上がった。

フィールドに先程と同じ様な巨大な狼が現れた。

God of War - Anat -
Synchrono Effect Monster
Star 10 / attribute of God /
Illusionary God Beast / ATK400
0 / DEF4000
tuner + "Guardiaru Beast" 2 or
more non-Tuner monster with a
name and
This card is subject to the ef
fects of Magic, Trap Monsters
opponent.
When this card is sent to the
graveyard effect, Special Sum
on a monster body of the cemet
ery.
If the monster is destroyed in
the battle against this monst
er,
Special Summon monsters from y
our deck.
Monster summoned by this effec
t, "Guardiaru Beast" monster a

nd the effect of,
The summons would be treated s
pecial.
Once per turn, the cemetery” G
uradiaru Beast” can be retere
d to the deck and the monster.
When this card is destroyed in
effect, Special Summon the En
d Phase of the field.

アナト / ATK 4000

「攻撃力：4000……!!!」

「バトル!!!アナトでソウルに攻撃!!!ゴッド・バースト・スラッ
シュ……!!!」

アナトは振り上げた爪でソウルを切り刻んだ。その余波は大きく

「グオオオオオオオ!!!」

「キヤア!!!」

「うわぁ……!!!」

「きゃあー!!」

「うわあ〜!!」

「グリ〜!!」

シゲルだけではなく、ユウとツバキ 精霊達にもその余波が伝わった。

シゲル / LP 4000 2700

だが、『神のカード』の力はまだ使われてもいなかった

「アナトの第一の効果発動!!このカードが相手のモンスターを戦闘で破壊した場合デッキからモンスターを1体「剣闘獣」と名づいたモンスターの効果で特殊召喚する!!剣闘獣ダイカエリイを特殊召喚する!!」

ダイカエリイ / ATK 1600

「その召喚に対して伏せカード剣闘同調を発動!!墓地のレベル3、フレア・リゾネーターとアンダルをゲームから除外して墓地のソウルを再び特殊召喚!!」

グラディアル・シンクロ
剣闘同調

速攻魔法

相手がモンスターの特殊召喚に成功した時発動することができる。

墓地のシンクロモンスターを選択し、そのモンスターと同じになるように

墓地のチューナーモンスター1体とチューナー以外のモンスター1体以上除外する。

選択したモンスターを特殊召喚する。（この特殊召喚はシンクロ召喚扱いとなる）

「ほう…これをおぼすとは…カードを3枚伏せ、アナト第二の効果発動！！墓地の剣闘獣を一体デッキに戻すことができる！セクトルをデッキへ！！これでターンを終える！！」

アナト

LP1300 手札0枚

アナト（ATK4000） デイカエリイ（ATK1600）

伏せカード3枚

シゲルのターン

「俺のターン！！（ソウルの効果でバインドダメージを与えれば奴を倒せる…だが、あいつの表情…確実に何かを狙ってる）」

引いたカードを確認しながらチラリとアナトの表情を見た。だが、あれこれ考えていても始まらない

「手札から剣闘獣ベストロウリイを通常召喚！！」

『うむ、些か今までよりも強力な敵じゃの…』

ベストロウリイ / ATK 1500

ウリイがそっぴいなながらアナトを見上げた。その大きさと、威圧感に2人ともおされぎみだった。

「更に異次元からの帰還を発動！！ライフを半分払い、除外されているフレア・リゾネーターと剣闘獣アングルを特殊召喚！！」

シゲル / LP 2700 1350

アングル / ATK 1900

フレア・リゾネーター / DEF 1300

「更にベストロウリイとアングルをデッキに戻し、剣闘獣ガイザレスを特殊召喚する！！」

『力がみなぎるぞ！！！！』

ウリイに鎧が纏って行き、そしてガイザレスとなった。それと同時に強力な風が吹いた。

ガイザレス / ATK 2400

「ガイザレスの効果発動！！召喚成功時、フィールドのカードを2枚まで破壊することができる！！アナトと真ん中の伏せカードを破壊する！！」

そう宣言した瞬間ガイザレスが翼をはためかせ、強力な風が巻き起こった。

それがアナトの巨大な体と一枚のカードを包んだが

「残念だが…アナトの第三の効果は相手のカード効果の対象にはならない」

「ッ……不発か」

そう言っているうちに、伏せられていた『眠る魂の咆哮』が破壊されていった。

その時、ふとシゲルは気付いた

「（まずつたな…メインは同じだから眠る魂の咆哮は入っていてもおかしくない…エクストラに融合体がいなくても…）」

ブラフのカードを破壊してしまったのに気付いた。正直意味の無い状態でも入れなくてはいけないカードがある。その中の一枚が眠る魂の咆哮だ。

上手い具合にブラフに引っかけってしまった。

「なら…墓地のスレイブ・ワームの効果発動！！フィールドの融合モンスターのレベルを2つ下げ、このカードを特殊召喚する！！」

「ほう…音程調律の効果のときか」

そう、フレア・リゾネーターを召喚した際に墓地へ送ったカードだ。

スレイブ・ワーム

効果モンスター

星1/地属性/昆虫族/ATK600/DEF0

このカードが墓地に存在する時、

自分フィールド上の融合モンスターのレベルを2つ下げること

このカードを特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚に成功した時、フィールド上のカードを破壊することができる。

「スレイブ・ワームの効果発動！！特殊召喚成功時、フィールドのカードを破壊する！！（アナトは対象に取れない…ならば…）その伏せカードを破壊！！」

スレイブ・ワームがアナトの場の伏せカードを食べ始めた。そのカードは剣闘力。またもやブラフだった。

「っ…レベル4となった、剣闘獣ガイザレスとレベル1のスレイブ・ワームにレベル3、フレア・リゾネーターをチューニング!! 獣の魂を受け継ぐものよ、仲間と共に新たな力となれ!!」

4 + 1 + 3 = 8

「シンクロ召喚!! 闇に染まれ…グラディアル・ドラゴン 剣闘龍ダーク・ガブリアス・ドラ
グーン!!」

フィールドに細い体の黒いドラゴンが現れた。

ダーク・ガブリアス・ドラグーン / ATK 2700 3000

その時、セメタリーに送られたウリィはシゲルの瞳が赤色に代わっている様な気がした

「ダーク・ガブリアス・ドラグーンの効果発動!! 召喚成功時、フィールドのドラゴン族1体につきカードを1枚ドローする!! ソウルとガブリアスがいるから2枚ドロー!!」

グラディアル・ドラゴン
剣闘龍ダーク・ガブリアス・ドラグーン

シンクロモンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / ATK 2700 / DEF 2300

チューナーモンスター+チューナー以外のモンスター2体以上
このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、
フィールド上のドラゴン族1体につき、カードを1枚ドローできる。
このカードがカード効果でフィールドから離れた時、
相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「…………（グラディアル・リターンとイーजीチューニング：クツ：
引き運が悪かった…）ソウルの効果発動！！ダーク・ガブリアス・
ドラゴンをリリースし、その攻撃力：3000ポイント攻撃力を上
げる！！」

ソウル/ATK2400 5400

「そしてガブリアスの効果発動！！カード効果でフィールドを離れ
た時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！！選択され
ない効果だと、アナトも破壊できる！！」

そう宣言した時、ダーク・ガブリアス・ドラゴンが翼を広げ、ア
ナトとディカエリイへと突っ込んだ。

「そうか！それなら向こうの場はがら空きに」

ツバキがそこまで言った瞬間、アナトのフィールドはなにも「無く
なるはず」だった。

「残念だがアナトの第四の効果、効果で破壊された場合墓地のモンスター1体を特殊召喚する！場に戻れ！オクタビウス！！」

オクタビウス / ATK 2500

「クッ…だがこの攻撃が通れば終わりだ！！ソウル・ブラック・ドラゴンでオクタビウスに攻撃！！メガ・ブラック・シュート！！」

ソウルの放った漆黒の炎がオクタビウスへと向かっていた。が

「残念だがそうもいかん！！伏せカード発動ディフェンシブタクテイクス！！」

「なっ…デッキに戻ったカードを引いていたのか…！！」

オクタビウスの前方に現れたバリアに阻まれ、攻撃が止まった。ダメージも与えず、攻撃モンスターもいないためもう打つ手はない。

「伏せカードを2枚伏せターン終了!!」

ソウル・ブラック・ドラゴンの攻撃力が元に戻り、オクタビウスよりも下になってしまった。

ソウル・ブラック・ドラゴン / ATK 5400 2400

シゲル

LP 1350 手札 0枚

ソウル・ブラック・ドラゴン (ATK 2400)
伏せカード 2枚

アナトのターン

アナトの手札はなく、場にはオクタビウスだけだった。一方シゲルの伏せカードはイージーチューニングなので、オクタビウスで攻撃してくれば効果も含めてシゲルの勝ちのはずだった。

イージーチューニング

速攻魔法

自分の墓地に存在するチューナー1体をゲームから除外して発動す

る。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は、発動時にゲームから除外したチューナーの攻撃力分アップする。

「クツクツク…」

だが、アナトの顔は明らかに勝ちを確信していた顔だった。

「私のターンを迎える前にアナトの最後の効果が発動する!!!」

「っ!?!?…まだ効果があるのか…!!!」

効果の多さにシゲルは顔をしかめた。神のカードと言われている『オシリスの天空龍』や『オベリスクの巨神兵』、そして『ラーの翼神龍』でも多くて3つか4つ…だがアナトは第五の効果を発動させた。

「このカードがカード効果で墓地に送られた時、そのターンのエンドフェイズ特殊召喚される!!!場に戻れ、アナト!!!」

「クツ…自己回復効果……どんだけって言う話だ…」

シゲルの言葉に反応するようにフィールドに再び巨大な狼が現れた。

「私のターン!!!バトル!!!アナト…我自身でソウルブランクドラゴンに攻撃!!!ゴット・バースト・スラッシュ!!!」

アナトが腕を振り上げ、ソウルに向かって振り下ろした。

「…無駄だと分かかっていても抗うのが俺なんぞでな…イージーチュウニング発動！墓地のフレア・リゾネーターを除外し、攻撃力を300ポイントアップさせる！」

フレア・リゾネーターが現れ、そして消えた時に現れた炎がソウルに纏わりついた。

ソウル・ブラック・ドラゴン / ATK 2400 2700

「ならば我もそれに応えようとするかの…速攻魔法イージーチュウニングー！」
「なっ…！？」

まさかアテナもイージーチュウニングを使うとは思っていなかったシゲルは驚きの声を上げていた。

「墓地のレベル・リゾネーターを除外し、その攻撃力1800ポイントアップするー！」

「……………」

アナトの攻撃の余波で片膝をついたシゲル。そこに傷付いたチビソウルが飛んできた。そして心配そうにシゲルを見上げた。

「……悪いな……ソウル……痛い目にあわせて……勝てなくて」
「ガア……」

シゲルの言葉に残念そうにソウルが俯いた。その1人と1匹を尻目に今度はカルマがディスクを構えた。

「さて……次はワシとユウのデュエルじゃ」

第二十八話 戦いの神（後書き）

シゲル「戦いの神…アナトか…」
ちなみにアナトの日本語訳は

戦いの神 アナトー

シンクロ・効果モンスター

星10 / 神属性 / 幻神獣族 / ATK4000 / DEF4000

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードは相手の魔法・罫・モンスター効果の対象にはならない。
カード効果でフィールドから離れた時

シンクロ召喚に使用したモンスターを1体墓地から特殊召喚する。

このモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、
自分のデッキからモンスターを特殊召喚する。

この効果で召喚したモンスターは「剣闘獣」と名のついたモンスター
ーの効果で、

特殊召喚した扱いになる。

1ターンに一度、墓地の「剣闘獣」と名のついたモンスターをデッキ
キに戻すことができる。

このカードがカード効果で墓地に送られたターンのエンドフェイズ、
特殊召喚することができる。

シゲル「結構なチートだな」

まあ、本物の神に比べたら…ね？戦闘破壊もできないこともないし…

ツバキ「そう言えばどうしてコスモスは出てこなかったの？」

以前言ったかもしれないけどツバキの神のカードは出すタイミング
は決まっています。だけどそれがまだ先だった…

ユウ「けどコスモスってことは調和の神だから…モンスターを守る

効果とか？」
それはまだ決まってるません〜こっご期待！！

紫苑「いえ、まだオリジナルは出てませんよ」

剣闘の威嚇
グラディアル・バーツ

音程調律

レベル・リゾネーター

God of War - Anat -

グラディアル・シンクロ

剣闘同調

グラディアル・ドラゴン

剣闘龍ダーク・ガブリアス・ドラグーン

スレイブ・ワーム

次回予告：sideユウ

シゲルが負けた。それに僕は信じられなかった。
けどそんな感傷に浸っている間もなくカルマとの戦いが始まった。

おそらく強さはカルマと同じだと思っていたけどその上を行っていた
た

なぜカルマ達は僕たちのデッキをコピーして挑んできたのか、その
理由が分かった

次回、第二十九話 生命の神

最強カードは『銀翼の魂』

感想待ってるぜ！

第二十九話 生命の神（前書き）

はい、VS神のカード後編です。

前半はユウとカルマのデュエルです。後半は人間界へ帰還の話。

第二十九話 生命の神

神の試練

そう呼んでも良いかもしれない。神と呼ばれるカルマ、そしてアナト 2体の神がユウ達の前に現れた。力を示した場合力を貸すという2体の神。

だがアナトに挑んだシゲルは破れてしまう。そして次は

「デュエル!!」

ユウ、そしてユウの目の前にいる黒い地に着くほどの長い髪の少年

「ワシのターンからじゃ」

年を取った老人の口調の少年

『魂の神』のカルマの試練。

「ワシはスピリットモンスター火炎車を攻撃表示で召喚!!そしてカードを3枚伏せ、ターン終了じゃ。その最火炎車は手札へ戻りカードを一枚ドロー!」

カルマ

LP4000 手札4枚

伏せカード3枚

ユウのターン

序盤の出方がまるつきしユウと紫苑の戦いの始まりと同じだった。その為、伏せカードが何なのかも分かる。

「ボクのターン!!!」

恐らく攻撃反応型の『くず鉄のかかし』だ。それを除去しなければダメージを与えることができない。

「ボクはスピリットモンスターマンゲツノミコ満月巫女を攻撃表示で召喚!!!」

満月巫女 / ATK1500

ユウの場にウサギ耳の和服の女性が現れた。すると何故か空に欠けることの無い満月が現れた。

「満月巫女の効果発動!!! 召喚成功時手札のカードを2枚まで墓地に送り、相手の場の魔法・罫を墓地に送った枚数破壊する!!! 2枚捨て真ん中と右のカードを破壊する!!!」

マシゲツノミニ
満月巫女

効果モンスター

星3 / 光属性 / 天使族 ATK1500 / DEF1200

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

召喚・リバースした時、手札のカードを墓地に送り、

相手のフィールド上の魔法・罫カードを墓地に送ったカードを破壊する。

「ほう…破壊されたのはサイクロンとくず鉄のかかしじゃ」

それを聞いてユウはホツとした。くず鉄のかかしはユウのデッキに一枚しか入っていない。

「バトルフェイズ！！満月巫女でカルマに攻撃！！」

「甘いぞ！手札の大和神を墓地に送ってスピット・ガードナーを特殊召喚するのじゃ！！」

フィールドにおなじみとなったガラスの戦士が現れた。そして何処からか出した細長い人参で切りかかった満月巫女の攻撃を受け止めた。

「大和神を除外して破壊無効か…フィールド魔法、スピリット・フィールド魂の聖地を発動

！！そしてカードを伏せてターン終了！！」

ユウ

LP4000 手札1枚

満月巫女 (ATK1500)

伏せカード1枚

スピリットフィールド

カルマのターン

「私のターンじゃ。我は火炎車を守備表示で召喚してカードをセツト、ターンエンドじゃ」

火炎車 / DEF100

カルマ

LP4000 手札3枚

スピリット・ガードナー (DEF0) 火炎車 (DEF100)

伏せカード2枚

火炎車を召喚しただけで終わった状況にユウは眉を潜めた。

スピリット・ガードナーがいるため壁を増やしたいのは分かった。

ユウのターン

だが銀翼の魂などの専用カード等は少なく、確実に手札にはサポートカードがある確率が高かった。だが、それらを使わなかった。もしくは

「（もしかしたら手札に出せるカードが無い…だとしたら…）ボクのターン！ボクはカード「伏せカード発動するのじゃ！」え？」

カードを伏せようとした瞬間カルマは伏せカードを使った。

「速攻魔法、手札断殺！互いに手札を二枚捨て、二枚ドローする！

！」
「っ…」

手札の受け継がれる聖霊とスピリット・バードを墓地送ったユウ。これがあれば少なくとも上級のスピリットを出す事が出来たのだ。

「ボクは満月巫女をリリースしてスピリットモンスター、精霊龍（スピリット・ドラゴン）をアドバンス召喚！！」

フィールドのうさ耳の巫女が消えると、チビ龍だったスピットが大きくなったようなモンスターが現れた。

「精霊龍の効果発動！！召喚成功時、デッキのレベル2のチューナーを特殊召喚する！！スピリット・ビーストを特殊召喚！！」

精霊龍（スピリット・ドラゴン）

スピリットモンスター

星6 / 光属性 / ドラゴン族 ATK2100 / DEF1200

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚に成功した時、デッキからレベル2のチューナーを特殊召喚できる。

このカードはシンクロ召喚を行う時、「スピット・シルバー・ドラゴン」のシンクロ素材にしか扱うことができない。

フィールドにガラスのライオンの様なモンスターが現れた。

スピリット・ビースト / ATK800

「レベル6の精霊龍にレベル2のスピリット・ビーストをチューニング！大いなる魂よ！砕かれし魂と共に光の風を纏いその身を現わせ！！」

「舞い上がれ…スピット・シルバー・ドラゴン!!!」
『ガアアアアアアアアア!!!!!!!!!!』

チビ龍だったスピットがユウの場で巨大な美しい龍へと変わった。
それを見たカルマは面白そうに笑った。

「スピットが此処まで本気になるとは…聖牙タよ、お前は楽しませてくれるのお…!!!」

「まだこれから!!!カードを伏せ、スピットで火炎車に攻撃!!!」

白銀の炎が火炎車へと襲いかかった。スピリット・ガードナーをほつとしたのは、先程の手札断殺で墓地にスピリットを送った可能性が非常に高かった。

無理に攻撃して残されたら、そのまま『あのカード』へつなげられる可能性があった。

「火炎車の効果でカードを一枚引くが…残念じゃったの」
「え?」

火炎車の効果でカードを引くのは分かっていた。だがカルマの言う「残念」とは一体何の事なのか分からなかった。

「火炎車の効果にチェーンして畏発動!!!スピリットの反逆!!!」

「なっ!？」

まさかそのカードを使うのが予想外だったユウは驚きの声を上げてしまった。

今までならヒーローシグナルの様に突然他のモンスターが現れた事なら多々あった。

しかしスピリット専用でなおかつスピリット・フィールドがフィールドにある場合のみ発動できるカードをカルマが使ったのだ。

「デッキより因幡之白兔を特殊召喚する!！」

フィールドにイナと同じウサギのモンスターが現れた。
更に火炎車の効果で一枚引いた。

「クッ…ターンエンド…」

ユウ

手札0枚 LP4000

スピット・シルバー・ドラゴン(ATK2500)

伏せカード2枚

スピリット・フィールド

カルマのターン

「ワシのターン!!!ククク…ワシの試練はこれからじゃ!!!」

試練　シゲルの時はアナトが自身を召喚した。その効果に惑わされ、そしてシゲルはアナトに敗北した。

そしてこれは『カルマの試練』だ。

「ワシは手札からスピリット・バードを攻撃表示で召喚!!!そしてスピリット・バードの効果でスピリット・ディフェンダーを手札に加えたのじゃ!!!」

こうして合計レベルは

「レベル…10…!!!」

シゲルがそう呟いた。神の力はシゲル自身良く分かっていた。

「レベル4、スピリット・ガードナーとレベル3、因幡之白兔にレベル3、スピリット・バードをチューニング!!!」

全ての魂を司る神よ!彷徨う魂を救い、新たな命を授けたまえ!!!」

アナトの時と同じ様に強い風が辺りを包み込んだ。やはりその風をユウは知っていた。間違いなくアラエルの時と同じだ。

4 + 3 + 3 = 10

「シンクロ召喚！！降臨せよ、カルマ！！」

フィールドにスピットに似た巨大な龍が現れた。その威圧感は初めて見た時より大きく、ソリッドビジョンが実体に見えるほどだった。

God of Life - Karma -
Synchrono Effect Monster
Star 10 / attributes of God /
Illusionary God Beast / ATK400
0/DEF4000
Tuner Monsters + 2 or more non
-Tuner monsters
This card is subject to the ef
fects of Magic, Trap Monsters
opponent.
If the time away from the oppo
nent's monster card effect, th
e
You can Special Summon monster
s from the graveyard of the ce
meter together.
This card is the cemetery, on

the field or if
Treated as a monster spirit.
If the deck this card is Synch
ro Summoned from the Graveyard
"sanctuary of the soul - Spir
itual Fierly -" In addition to
the hand, and the other as lon
g as there in front of this ca
rd is destroyed and can not sp
ell his own field, new fields
can activate the magic.
Once per turn, you can select
monsters on your Main Phase sp
irit of the cemetery.
This card gains the effect of
the selected monster.
If the monster is destroyed in
the battle against this monst
er,
You can send to graveyard mons
ter that are removed from the i
r game.

カルマ/ATK4000

「クツ…攻撃力…4000…!!」

「カルマの第一の効果を発動じゃ、シンクロ召喚成功時、デッキ・
墓地から「魂の聖地 スピリット・フィールド」を手札に加え発

動するのじゃ。これでお主はワシのフィールド魔法を破壊できなくなる！」

カルマの効果は魂の眠る地を呼び寄せ、それを守る効果だった。だが、元々フィールドは魂の聖地だったのでさほど意味はなかった。

「そしてカルマの第二の効果を発動するのじゃ。墓地のスピリットを選択することでその効果を得る！！因幡之白兔を選択！！」

「っ！？攻撃力4000の直接攻撃可能モンスター！？」

通常の直接攻撃可能モンスターはよくても1000前半、逆巻く炎の精霊などの特殊な効果などでも元々は1000だった。

それが今目の前に、たった一枚のシンクロモンスターが、墓地のたった一枚のカードがあるだけでそこまでの効力を発揮していた。

「バトルフェイズじゃ。カルマでユウに直接攻撃！！ゴッド・ストライク・プレス！！！」

スピットの時よりもさらに大きく、そして輝いている白銀の炎いや、言うなれば光の炎がユウに迫っていた。

「リバーズカード、ガードブロックを発動！！戦闘ダメージを0に

してカードを一枚ドロウする!!」

そう宣言した時、ユウの前に光の盾が現れた。そしてその炎を受け止めた。

「ほう…この攻撃を避けるとはな、ワシはカードを2枚伏せターンを終える!!」

カルマ

LP4000 手札3枚

カルマ(ATK4000)

伏せカード2枚

スピリット・フィールド

ユウのターン

「ボクのターン!!手札からスピリット・ドロウを発動!!墓地の精霊龍を除外してカードを2枚引く!!(攻撃力4000…墓地のスピリットモンスターの効果を得るモンスター…なら…)死者蘇生を発動!!墓地に存在するスピリット・ビーストを特殊召喚!!その時スピリット・ビーストの効果が発動する!!」

スピリット・ビースト

チューナーモンスター・効果

星2/光族性/獣族/ATK800/DEF500

このカードがカード効果で墓地から特殊召喚に成功した時、自分フィールドに「リバース・トークン（星1/光族/獣族/A T K O / D E F O）」を2体特殊召喚する。

「更に因幡之白兔を召喚！！行こう！イナ！！」
『うん！！』

場に現れたイナはリバース・トークンとスピリット・ビーストと共に空高く舞い上がった。

「レベル1、リバース・トークン2体とレベル3、因幡之白兔にレベル2、スピリット・ビーストをチューニング！！
精霊と共に生きる魂よ、此処に全ての使者を還す力となれ！！」

1 + 1 + 3 + 2 = 7

イナが緑のリングに包まれた時、ユウの瞳が紅く変わっている様な気がした

「シンクロ召喚！！聖霊王スウェル！！」

フィールドに物静かそうな青年が現れた。その手には様々な本を持っており、どこことなくツバキのライブラリー・マジシャンに似ていた。

スウェル / ATK 0

「ユウ…攻撃力0のモンスターを出すって…」

「グリ…」

「あいつのことだ。あのカードの効果に賭けたんだろう…」

ツバキの言葉にシゲルがそう言った。確かに直接攻撃のできるイナを素材にしたということはスウェルに神を倒す為の効果があるのだろう。

「スウェルの効果発動!!シンクロ召喚成功時、互いの墓地に存在するカードを全て除外する!!」

「ほう…効果を使わせないために因幡之白兔を除外するとは…よく考えたのじゃ」

お互いの墓地にいたモンスターの数は 10体。

「これでカルマと因幡之白兔のコンボは使えない!!さらにスウェルはこの効果で除外したモンスター1体につき攻撃力が400ポイントアップする!!」

スウェル / ATK 0 4000

聖霊王スウエル

シンクロモンスター

星7 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK0 / DEF0

チューナーモンスター + チューナー以外のモンスター3体以上

このカードはシンクロ召喚以外の効果で特殊召喚できない。

このモンスターのシンクロ召喚成功時、自分と相手の墓地のモンスターを全て除外する。

この効果で除外したモンスター×400ポイントこのモンスターの攻撃力がアップする。

このカードが相手との戦闘、または相手のカード効果で破壊された場合、墓地・除外されている「聖霊」と名のついたモンスターを特殊召喚してもよい。

「バトルフェイズ!!!スウエルでカルマに攻撃!!!マスター・ブラック!!!」

スウエルの取り出した杖の先から漆黒の光が出てきた。その光が真っ直ぐにカルマへと向かっていた。

「リバース罠、フローラルシールド!!」

「なっ!?!」

いつしかユウを守った花の盾　それが今度は、カルマの場に現れた。

「効果は知っておるの? 攻撃を無効にして一枚ドロウする!!」

「クッ…カードを伏せてターン終了!!」

ユウ

LP4000 手札0枚

スピット・シルバー・ドラゴン(ATK2500) スウエル(A

TK4000)

伏せカード2枚

カルマのターン

「ワシのターン！！ふむ…因幡之白兔を取り除くためにスウェルとは、中々な手を使ってくるものじゃの…じゃが……

そんな小細工通用すると思わんことじゃの！！手札から雷帝神を攻撃表示で召喚！！」

雷帝神 / ATK 2000

「更に受け継がれる力を発動！！雷帝神をリリースしその攻撃力をカルマへ加算する！！よって 攻撃力は」

カルマ / ATK 4000 6000

「攻撃力…6000…！！？」

「バトルじゃ、カルマでスウェルへ攻撃！！ゴッド・ストライク・ブレス！！」

カルマの光の炎がスウェルへと襲いかかった。伏せカードを使うこ

カルマ / ATK 6000 4000

カルマ

LP 4000 手札 2枚

カルマ (ATK 4000)

伏せカード 2枚

ユウのターン

「ボクのターン！！（スウェルを失ってもう相手の墓地のカードを除外するカードは望めない……！！）ドロ……！」

伏せカード単体で望みを繋げるのは不可能に近かった。そして引いたカード 頭の中でカードの歯車が現れ 噛み合った。

「ボクはスピリット・リバースを発動！！手札のスピリットモンスターを墓地に送って除外されている『スピリット』と名のついたモンスターを特殊召喚できる！！スピリット・バードを特殊召喚！！」

スピリット・リバース

通常罫

自分のフィールド上に「聖霊」と名のついたモンスターが、「スピット・シルバー・ドラゴン」がいる場合のみ発動できる。

手札のスピリットモンスターを墓地に送り除外されている

「スピリット」と名のついたモンスターかスピリットモンスターを

特殊召喚する。

スピリット・バード/DEF0

ユウの場にガラスで出来た鳥が現れた。だが、本当の狙いは手札のスピリットモンスターを墓地に送ることだった。

「墓地に送られたイヌガミ犬神の効果発動！！手札からこのカードが墓地に送られた時、墓地のモンスターを持ち主のフィールドに特殊召喚する！！」

イヌガミ
犬神

スピリットモンスター

星2/地属性/獣族/ATK200/DEF100

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバーズしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが手札から墓地に送られた時、墓地のレベル4以下のモンスターを

持ち主のフィールドに特殊召喚する。

「ほう？だが犬神を召喚したとしてもレベル5のモンスターをシンクロする気か？だがお主のデッキにはレベル5のシンクロで」

「うん、ボクのデッキにはこの戦況を逆転できるシンクロモンスターはもういない……」

そう言って選択したモンスターが

「選択するのはカルマの墓地の雷帝神!!」

「なに……?」

カルマの墓地にいた雷帝神がフィールドへ現れた。

雷帝神 / ATK 2000

だが、ユウの真意は分からなかった。わざわざ相手のモンスターを蘇生する所でユウが有利になることはないはずだった。

「更に伏せカード、銀翼の魂を発動!!フィールドのスピリット・バードを除外してスピット・シルバー・ドラゴンに追加攻撃と、戦闘破壊したモンスターの攻撃力上昇を追加する!!」

「なるほど……その為の雷帝神とスピリット・バードか」

アナトがユウの目的に気付いた。もうユウは手札も、銀翼の魂で除外した時ひたカード1枚、フィールドのカードもない。

これが

最後の希望チャンスだった

「バトルフェイズ!!スピット・シルバー・ドラゴンで雷帝神に攻撃!!スピリット・ブラスト!!」

「うぬう…!!」

カルマ/ＬＰ 4000 3500

スピット・シルバー・ドラゴン/ＡＴＫ 2500 4500

これでカルマを越えた。そしてこの攻撃でカルマを破壊できたらユウの勝てる可能性が大きくなる。

「更にスピット・シルバー・ドラゴンでカルマへ攻撃!!スピリット・ブラスト!!」

白銀の炎がカルマへ向かっていた。

「クツ……!!」

カルマ / LP 3500 3000

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 4500 8500

「よし！神を倒した！！カードを伏せてターン終了！！」

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 8500 2500

ユウ

LP 2000 手札 0枚

スピット・シルバー・ドラゴン (ATK 2500)

銀翼の魂 伏せカード 1枚

カルマのターン

流石にエクストラ一枚のハンデで、その上もうシンクロを行えない
カルマにはユウを倒す手が無かった

「ワシのターン！！主に次のターンは回らせぬ！！手札から手札抹
殺を発動！！お主に手札は無い…が、どういうことか分かるかの？」
「っ……………！！！」

2人の使う『除外スピリット』は墓地にスピリットがいる場合その
真価が発揮されるデッキだ。ユウの墓地にスピリットはいないが、
これでカルマの墓地に確実に逆転の手が揃うことになる

「ククク…神を破壊したことは褒めてやるつ…じゃが、神をなめる
などだけ言っておこうかの…まずは手札から竜宮之姫を通常召喚！
！効果によりスピット・シルバー・ドラゴンを守備表示に変更する
！！」

竜宮之姫 / DEF 100

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 2500 DEF 2000

竜宮之姫の念力の様な物でスピットが防御体勢になった。更にカル
マは手札のカードを発動させた。

「そしてリバーズカードディストラクションローを発動！！竜宮
之姫を破壊し、カードを1枚ドロロー！！そしてこれが最後の試練だ
！！」

スピリット・シンクロ
聖霊の同調を発動!!」

「聖霊の…同調…!!」

聖霊の同調 それはユウ自身もよく知ってるカードだ。
墓地のチューナーとスピリットモンスターを除外し、墓地のシンク
ロモンスターを出すカード。

そしてカルマの墓地には

「レベル3、因幡之白兔、レベル3、竜宮之姫、更にレベル4スピ
リット・ディフェンダーを除外!!合計レベル10!!」

レベル10のシンクロモンスター カルマのデッキには一枚しか

入って無いエクストラのカード

「再び現れる！！カルマ！！」

フィールドに巨大な龍が再び現れた。

「クツ…神がまた…けどボクのスピットは守備表示だよ！」

「言ったはずじゃ！お主に次のターンなんてないとな！！装備力！
ド草薙剣をカルマに装備！！」

「馬鹿な…スピリット専門の装備を神が^{カルマ}装備した…！？」

ダークがその光景に驚いていた。シンクロモンスターはスピリット
モンスターではない。それなのに確かにカルマに新たな効果は付加
されていた。

「ククク…カルマの第四の効果！！フィールド、及び墓地ではスピ
リットモンスターとして扱う！」
「なっ！？」

もしもこれでスピットがカルマの攻撃を受けてしまうと、ユウの敗
北が決定してしまう。

はユウまで届いていた。

ユウ／＼LP2000 0

こうしてユウとシゲル

カルマとアナトの試練は終わった。

そう 2人の敗北で。

「ククク……どうだったかの？ワシらの力は」

カルマが人型から元の龍型へと戻った。そしてアナトも人型から大
上方へと戻って行った。

「…予想以上だった。正直、倒せると思っていた」

「俺達もまだまだだな……もしも管理局が俺達が使ってる神を奪う
のなら神に勝てない俺達は守れないしな……」

残念そうに2人がそう言った。シゲルの言つとおり自身が勝てない
神を使って、神より強い相手に勝てる確率は限りなく低い。

アナトの言葉にユウとイナ、シゲルとウリイにダークは意味が分からない様に声を上げた。ツバキは　その反応に首を傾げていた。

「俺達…負けただろ。それなのにしれクリアなのか？」

『ワシらは『力を示したら』といったはずじゃ。誰も勝てとは言っておらんぞ』

「え…えと、じゃあ、合格の基準って…なに？」

「それは我らより、その子が知っておるはずだ」

アナトの言葉にダークがツバキを見た。ツバキは顎に手を添えて説明を始めた。

「始める前に心がどうか言ってたから…多分、勝負の後のどうだったのか聞いたのが試練だったんじゃないの？」

『流石『世界の矛盾』の一人じゃな』

感心したようにカルマがそう言った。それに思い出したようにダークが聞いた。

「そうそう、それだ。結局『世界の矛盾』とは何のことなんだ？」

『ふむ…そのことを説明する前に…お主等…』

アナトが右前脚？でウリイとイナを指さした。その後右前脚を戻して左前脚でユウとシゲルを指さした。

『この2人が試練を受けている時…何か違和感を感じなかったか？』

アナトの言葉に2人同時に一つだけ心当たりがあった。一瞬の勝機を生みだした時の2人の目だ

「そういえば…スウェルを出した時、ユウの目が赤くなってたよう
な…」

「うぬ、シゲルがダーク・ガブリアス・ドラグンを召喚した時も赤くなっていたぞ」

その言葉に2人が互いの目を見た。だがそんな事はなく、いたって普通の普段と同じ色だった。

『そうじゃ。それに…ツバキ、お主も同じような現象が起こることがあるだろう』

カルマの言葉にツバキは頭を傾けた。眼の色なんて鏡でも見ない限り分からないのだ。無理もない。

「うん…気付かなかったけど…：：：：：ダークは知ってる？」

「いや、私も知らない。それが『世界の矛盾』の繋がりののか？」

『そう「あ！！」』

「どうしたんだ？ユウ」

ダークがアナトに聞くとアナトは頷いた。するとユウは思い出したように声を上げた。眼の色が赤くなる。今までで一度だけそうなった人を見たことがあった。

「剣賭だよ！剣賭もボクと戦ってシンクロ召喚をした時眼の色が赤くなってたよ！！」

確かにあの時、剣賭がマシナーズ・デストロイヤーを召喚した時目が赤くなっていた。それを聞いて興味深そうにカルマが「ほう」と呟いた。

『それならばその剣賭とやらもこの話を聞く必要があるようじゃの』

…それと主等をこの世界へ飛ばした者もな』

ユウ達を魂の聖地へ飛ばしたのは 紫苑だ。

紫苑がユウとシゲル、そしてツバキのカードに手を翳した時この世界へ来たのだ。

「それじゃあエンディミオンに戻る？ そうなら早くした方がいいし

…」

『そうだな。 それじゃあ元の世界へ飛ばすぞ』

????

「……………」

「如何いたしました？ 剣賭様」

自分の部屋でデッキを確認していた剣賭は唸っていた。 あの日
剣賭がツバキを連れ戻しに来た日のユウとのデュエルの時に突如として現れたチューナーとシンクロモンスター それを改めて確認していたのだ。

「…なあ、山本。 なんで俺のデッキに俺の知らないカードが混ざってるんだろうな？」

「ふむ…ツバキお嬢様の言っていた『敵』…それに関係があるのでは？」

そういいながら山本は剣賭にある書類を渡した。

剣賭の決まり事で仕事の書類は家に持つてくるのは禁じている。つまりこれは

「あの少年　警都という者の尋問で判明した事についてです」

「シゲルに頼まれた件か……ん？」

その書類を確認をし始めた剣賭。その時、その封筒の中に複数のカードが入っているのに気がついた剣賭はそれを取り出した。

空き家

ルキは目の前の光景に困惑していた。数十分前に彼らが光に包まれて消えてしまった。

そして『帰ってきた』のだが…

「へえ…此処がエンディミオンのアジトか」

「ふむ、中々良いところじゃの」

知らない女性と少年がいるのだ。片方は胸がでかく、灰色の髪を下ろしている女性　アナトと真つ黒で地面に付くほどの長さの少年

カルマ、この2人が来て早々部屋を見てそう言ったのだ。

「ツバキ、これ」

「え？あ、私のコスモスのカード…」

そう言っただけで受け取ったコスモスのカードには絵柄はなく、テキスト部分もまっさらだった。それを見たカルマとアナトはユウとシゲルの持っているカードを指さした。

「そのカードは我らの力を与えている」

「いざというときは主等の力になるじゃろっ」

「それじゃあルキ、またね」

「はい、皆さんまた来てくださいね」

その後、エンディミオンの人々との別れをした後、結構広い丘の上にカルマとアナトを含めたユウ達にルキが別れの挨拶をしていた。

魔法使いデッキのツバキとルキは結構中が良かった。だがルキは、
今だ負傷者の手当てをしている姉の為に此処に残ったのだ。

『それでどこに行くのだ？』

「剣賭の家。場所は…ドミノ町の…」

ツバキが場所を説明し始めると、カルマの周囲から徐々に次元の裂
け目が現れた。

剣賭の家

「…なるほどな。異世界にシンクロか…来週販売されるシンクロが
あるということは納得するしかないな…」

そう言って見たのはシンクロモンスター「スクラップ・ドラゴン」
だ。

見たことの無い「スクラップ」というシリーズにそれ専用とも言え
るシンクロモンスター、さらに自身のデッキに現れたチューナーと
シンクロモンスター　信じるしかなかった。

「ふむ……まあ、頼みごとはこんな位か……後の問題は…」

そう言っつて剣賭はチラリと窓際を見た。そこにはじーっと山本さんを見つめる土色のチビ龍がいた

「（……………なんで俺にしか見れないんだらうな…？）」

その龍の名は『クロック・ゴールド・ドラゴン』というのだ。なぜ知ってるのかというとシンクロモンスターの中にクロックに似たモンスターがいたからだ。

しかし、山本さんの目の前にいても気づいていない様なのだ。これといって何かするわけでもないが、どうも気になってしまふのだ。

『グル？』

「？（なんだ？天井なんか眺めて…っつて）はあ！？」

「む？なんと…これは…？」

クロックが見ていたところに 空間に ひびが入っていたのだ。

しかも徐々にそのひび割れが大きくなり

「「「うわあああああああ〜！！！！！！」」」
「……………」

「「！！！！？？？」」

2人の見覚えのある人物達　ユウにシゲルとツバキと見知らぬ少女　紫苑が落ちてきた。

ちなみに3人が頭から落下してるのに対して紫苑は無言で足から落下して見事に着地した。3人は下から、シゲル・ユウ・ツバキの順番で重なっている。

「なっ！？ツバキにユウ、シゲルも！？って誰だ！？」

「えと…剣賭、落ち着いて」

「…の前に…………早く下りてくれ…」

流石に小柄とは言え、人2人分の体重がかかっているシゲルは苦しそうだっただ。

「…で、色々聞きたいが……………なにから話してくれるんだ…………？」
「…うん、何から話そう」

アナトとカルマはユウ達を転送して後から行くと行っていた。
結局全て話し終えるまでに日を跨いだことを記しておこう。だがア
カデミアが休みだということを知った人は忘れていた。

第二十九話 生命の神（後書き）

ユウ「カルマか…」

アナトの戦いの時点でこの結果を予想できた人もいると思う。日本語訳は です。

生命の神 カルマ

シンクロ・効果モンスター

星10 / 神属性 / 幻神獣族 / ATK4000 / DEF4000

チューナーモンスター+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードは相手の魔法・罫・モンスター効果の対象にはならない。

このモンスターが相手のカードの効果によって場から離れた時、

墓地のモンスターを一体墓地から特殊召喚することができる。

このカードは墓地、またはフィールド上に存在する場合

スピリットモンスターとして扱う。

このカードがシンクロ召喚に成功した場合デッキ、墓地から「魂の

聖地 スピリットフィールド」を手札に加え、またこのカードが

表側で存在する限り相手は自分のフィールド魔法を破壊できず、新

たなフィールド魔法を発動できない。

1ターンに一度、自分のメインフェイズに墓地のスピリットモンス

ターを選択することができる。

このカードは選択したモンスターの効果を得る。

このモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、

自分のゲームから除外されているモンスターを墓地に送る事ができ

る。

シゲル「アナトよりもひどいチートじゃないか？」

ライフ4000だから因幡乃白兔を選択されたらもう終わったも同

然だね。

阿修羅の全体攻撃効果も下手したら1キルを狙えるしね。

ツバキ「アナトもカルマもこんな感じじゃあ…コスモスも結構すごいことになりそうね…」

コスモスの効果はまだ完成して無いけど、この2体と同じになるだろうね。

紫苑「ところでお聞きしたいんですが…なぜ魂の聖地を呼び、守る効果があるんですか？ただ単にモンスターは手札に戻らないといった効果でもよかったですのでは？」

……それをやろうとしたら…戦いの精霊に思いつきかぶってたから…

オリジナルカード

マンゲツノミコ
満月巫女

精霊龍（スピリット・ドラゴン）

God of Life - Karma -

精霊王スウエル

スピリット・リバー

犬神

次回予告：紫苑

精霊界から人間界へ送ってもらった私たちはツバキの実家ともいえる『羽黒家』にいた。あまりにも夜遅かったので泊めていただいたのですが、次の日私とツバキはデュエルリングにいました。

私にも、ツバキにも、譲れないモノがあります。なぜか他の人は呆れています。

次回第三十話 意地の戦い 魔導師VS英雄
最強カードは『魔法都市エンディミオン』

次回もよろしくお願ひします

第三十話 意地の戦い 魔導師VS英雄（前書き）

はい、そう言うわけでも30話です！

そして…うん、どうでもいい。

この戦いの意味は…どうでもいい…

第三十話 意地の戦い 魔導師VS英雄

夜が明けて数時間。結局そのまま剣賭の家に泊まった4人。
ちなみに山本さんが早速紫苑の戸籍を作っていた。コネって怖いね！

ちなみに客人用の寢室を2つ、4人で使うためユウとツバキ、シゲルと紫苑で寝ることとなった。普通ならユウとシゲル、紫苑とツバキなのだがユウとツバキが一緒に寝たいと言い、そうなった。

そして何故か部屋にはツインベットしかなかった。

リビング

「…ふあゝ……おう…剣賭…」

シゲルは起きるとリビングへと向かった。ちなみに剣賭の家に使用人はいない。

剣賭、そして山本さんだけが住んでいる。ちなみになぜ山本だけさん付けなのかというと　なんとなくだ。

そして起きたシゲルの前に剣賭がいるのだが　ものすごく驚いていた。

「…だ、誰だ？」

「…シゲルだが？」

シゲルはそう応えたが剣賭は半信半疑の剣賭はそこにあつた鏡を見せた。

そこには寝癖が魅力的な女性がいた

「あ、バンダナ忘れてた」

そう言つてシゲルは懐からバンダナを取り出すと頭に巻いた。それでいつものシゲルに戻つた。

「所で昨日は紫苑と寝たのか？」

「おい、言い方がおかしいだろ。あいつはベッドで寝たが、俺はソファで寝たぞ」

そう言つてシゲルはどこからカレットの制服を着るとリビングを見回した。

「そついやユウとツバキはまだなのか？紫苑も見えないが…」

起きた時すでに紫苑は着替えを済ませて部屋を出ていた。シゲルはズボン履き替えて上をTシャツ一枚で部屋を出た。ちなみにいつ

もしゲルは制服はジャケットの様に前を開けてけている。

「ツバキと紫苑は地下の決闘場デュエルリングだろうな」

「決闘場？なんでだ？」

ツバキは基本的に勝負を挑む事もない。楽しくが一番のツバキの気持ちだ。

一方紫苑も見た感じ好戦的な性格ではない。どちらかという身を守るような感じで戦っている。

「……………それがな…昨日作った戸籍があるだろ？」

「ああ、紫苑の戸籍か？ツバキの姉妹として登録してあるはずだろ？」

シゲルがそう言つと剣賭が「それが」と言つてその戸籍の「コピー」を見せた。

『家族構成』の所を指さすと父親と母親が剣賭の両親となっていた。そこは問題ない。

「どっちが姉になるのか聞いたらな……両方とも『私!』と応えてな…それでデュエルで決めると」
「……なんかどうでもいい決闘だな、それ」
「で、ユウはそれの観戦に向かった」

決闘場

「勝った方がお姉ちゃんで良いね？」
「いいですよ。絶対に負けません」

何故か燃えている2人と観客席でどっちを応援しようか悩んでいるユウに紫苑とツバキの戸籍を持っていつでも書きなおす準備をしている山本さんがいた。

「え〜と…山本さん…」
「どうかいたしましたか？」

ユウは素直な気持ちを山本さんに言った。

「どっちを応援すればいいのかな…？」
「ほっほっほ…それは自分で考えるモノですよ」

やんわりと誤魔化されたが実を言うと山本さんも分からなかった。

うつすらと戸籍を持っている手がブレていたのは誰も知らなかった。

「ちょうど始まる所か」

「…正直どうでもいいと思うけどな…」

そこに剣賭とシゲルも来た。

「デュエル!!」

紫苑のターン

「私のターン!!」(手札に融合できる組み合わせがある…けど、まずは様子を…) E・HEROフリーズ・レディを攻撃表示で召喚!!

フリーズ・レディ / ATK1200

フィールドに氷の体の女性が現れた。

「ターン終了!!」

紫苑

手札5枚 LP4000

フリーズ・レディ（ATK1200）
伏せカード無し

ツバキのターン

「私のターン！！フィールド魔法魔法都市エンディミオンを発動！
」

フィールドがツバキのホームへと変わった。ちなみに2人が使っている決闘場は学園の様な感じではなく、海馬コーポレーション最上階のデュエルリング（遊戯がエクゾディアをそろえた）の様な感じだ。

補足だが紫苑はディスクを持ってない。

「更にカードを2枚伏せてマジシャンズ・ヴァルキュリアを召喚！
」

マジシャンズ・ヴァルキュリア / ATK1600

フィールドにルキ ではなくマジシャンズ・ヴァルキュリアが現れた。

ふとユウとシゲルが思ったのはルキより凜々しい感じがする ルキはどこか幼い気がしていた。

「（フリーズ・レディの効果が分からない…けど、今が攻め時！！）

バトル！！ヴァルキュリアでフリーズ・レディに攻撃！！マジカル・シュート！！」

ヴァルキュリアの杖の先から光の塊がフリーズ・レディに向かって発射された。

「フリーズ・レディの効果発動！！相手の攻撃宣言時、自分フィールド上のモンスターの表示形式を変更できる！！」

フリーズ・レディ / ATK 1200 DEF 1500

だが、ヴァルキュリアの攻撃を止めることができずそのまま破壊された。

「フリーズ・レディが戦闘で破壊された時、デッキの魔法カードを一枚デッキトップに置く事が出来ます！！」

E・HEROフリーズ・レディ

星4 / 水属性 / 戦士族 / ATK 1200 / DEF 1500

このカードが表側表示で存在する時、相手の攻撃宣言時

自分フィールド上のモンスターの表示形式を変更する。

この効果は1ターンに1度しか発動できない。

このカードが戦闘で破壊された時、デッキの魔法カードを一枚選択する。

その後デッキをシャッフルし、選択したカードを一番上に置く。

「（恐らく…HEROの重要なあのカードが…）ターン終了！！」

ツバキ

LP4000 手札2枚

マジシャンズ・ヴァルキュリア（ATK1600）

伏せカード2枚

魔法都市エンディミオン

紫苑のターン

「私のターン！E・エマーゼンシーコールを発動！！デッキから
レディ・オブ・ファイアを手札に加えます！！」

E・エマーゼンシーコール

通常魔法

自分のデッキから「E・HERO」と名のついたモンスター1体を
手札に加える。

魔法都市エンディミオン/MO 1

「魔法カード融合を発動！！手札のアイスエッジとフラッシュを融
合！！融合召喚！！アブソルトZero！！」

アブソルトZero/ATK2500

魔法都市エンディミオン/M1 2

紫苑の場に氷の英雄ヒロが現れた。おそらく紫苑のデッキでのエース的
なモンスターだろう。

「レディ・オブ・ファイアを召喚します！！」

更にフィールドに炎を纏った可憐な少女が現れた。

レディ・オブ・ファイア / ATK 1300

「バトル！！アブソルットZeroでマジシャンズ・ヴァルキュリアに攻撃！！瞬間氷結（Freezing at moment）！！」

無数の氷の刃がツバキの場のヴァルキュリアに襲いかかった。

「ウツ…でもリバースカード発動！！魔導師の術印！！デッキからレベル4以下の魔法使いを特殊召喚することができる！！来て、ナイトエンド・ソーサラー！！」

フィールドの魔法陣から鎌の様な物を持った少年が現れた。

ツバキ / LP 4000 3100

ナイトエンド・ソーサラー / ATK 1300

「ナイトエンド・ソーサラーの効果発動！！特殊召喚に成功した時、相手の墓地のカードを2枚まで除外する！！（アイスエッジはともかく…フラッシュは無視しても大丈夫…だけど…）フラッシュとアイスエッジを除外する！！デイメンションソーサラー！！」

ナイトエンド・ソーサラー

チューナー（効果モンスター）

星2 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻1300 / 守 400

このカードが特殊召喚に成功した時、

相手の墓地に存在するカードを2枚までゲームから除外する事ができる。

そう宣言した時、紫苑のセメタリーゾーンに瞬時に現れ持っていた鎌で墓地を貫いた。そこには融合とアイスエッジがあった。

「ッ…（モンスターを除外されたのは痛いですね…それにナイトエンド・ソーサラーの攻撃力はレディ・オブ・ファイアと同じ…）私はカードを伏せてターン終了します！！その時レディ・オブ・ファイアの効果発動！！フィールドのHEROの数×200ポイントのダメージ！！400のダメージを与えます！！」

「キヤ！」

ツバキ / LP 3100 2700

紫苑

LP 4000 手札1枚

アブソルートZero（ATK2500）レディ・オブ・ファイア
（ATK1300）
伏せカード1枚

ツバキのターン

「私のターン!!」

引いたカードを確認したツバキは口元を緩ませた。

「手札から魔導戦士ブレイカーを召喚!! 召喚成功時ブレイカーに
魔力カウンターを乗せる!!」

ブレイカー/MO 1/ATK1600 1900

「そしてブレイカーの効果発動!! 魔力カウンターを取り除きその
伏せカードを破壊する!! マナ・ブレイク!!」

「…破壊されたのはヒーローバリアです（やばいですね…）」

攻撃反応型罠を破壊されて紫苑は内心焦っていた。が、ポーカーフ
エイズなのか無表情でツバキを見ていた。

「（あまり焦ってないね…）」

ツバキは紫苑を見てそう思っていたが外れていた。

「リバースカードオープン！！漆黒のパワーストーン！！発動後パワーストーンにカウンターを3つ乗せる！！さらにその魔力カウンターを1つ取り除きマジカル・イーターを特殊召喚！！」

漆黒のパワーストーン/MO 3 2

マジカル・イーター/ATK0

「そしてレベル4、魔導戦士ブレイカーとレベル1のマジカル・イーターにレベル2のナイトエンド・ソーサラーをチューニング！！魔術師が新たな星を身にまとい、更なる高みへ昇華する…大いなる魔力をその身に宿せ！」

4 + 1 + 2 = 7

「シンクロ召喚！！出でよ、アーカナイト・マジシャン！！」

フィールドに淡い魔導服を着た魔導師が現れた。

アーカナイト・マジシャン/ATK400

「攻撃力…400…？」

アーカナイトの攻撃力を見て紫苑は眉をひそめた。モンスターを減

らしてまでシンクロ召喚をしたということはアーカナイトの効果があるのだろう。

「アーカナイトがシンクロ召喚に成功した時、魔力カウンターを2つ乗せる！そしてアーカナイトは魔力カウンターの数だけ攻撃力が上がる！！」

アーカナイト・マジシャン

シンクロ・効果モンスター

星7 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻 400 / 守 1800

チューナー+チューナー以外の魔法使い族モンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

このカードに魔力カウンターを2つ置く。

このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、

このカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを1つ取り除く

事で、

相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

アーカナイト・マジシャン / ATK 400 2400 / M 0 2

「更にパワーストーンのカウンターを1つアーカナイトに移す！！」

漆黒のパワーストーン / M 2 1

アーカナイト・マジシャン / M 2 3 / ATK 2400 3400

「ですが、どうするんですか？アブソルートはフィールドから離れた時、貴女の場のモンスターを全て破壊しますよ」

「こうするの。バトル！！アーカナイト・マジシャンでレディ・オブ・ファイアに攻撃！！アークマジック！！」

アーカナイトの掲げた腕から魔力カウンターのような物が浮かんで、それがレディ・オブ・ファイアに向かった。そしてその弾丸がレディ・オブ・ファイアを貫いた。

「つう……！！」

紫苑 / LP 4000 1900

これでもうツバキは攻撃をできない。が、最初からツバキは攻撃する気が無かった。

「アーカナイトの効果発動！！魔力カウンターを一つ取り除き、フィールドのカード1枚を破壊する！！アブソルートZeroを破壊
！！」

「ですが…アブソルートの効果でアーカナイト・マジシャンを破壊
！！」

アーカナイト・マジシャン / M 3 2 / ATK 3400 2400

そしてアーカナイトの魔力の弾丸とアブソルートの氷の塊がぶつかり 爆散した。

「「っつ………！！！」

そして煙が晴れると、そこには何も無かった 否、光の玉が2つ浮かんでいた。

「エンディミオンの効果発動！！魔力カウンターに乗ったカードが破壊された時、そのカウンターをエンディミオンへと移す！！」

エンディミオン/M2 4

「カードを伏せてターン終了！！！」

ツバキ

LP2700 手札0枚

モンスター無し

伏せカード1枚 漆黒のパワーストーン(M1)

魔法都市エンディミオン(M4)

紫苑のターン

確実に先程の戦法は紫苑の展開力を奪うものだった。融合とアブソルート、さらにバーンダメージを与えるレディ・オブ・ファイアま

でも破壊された。

「私のターン！！エアーマンを攻撃表示で召喚！！第二の効果によりデッキからオーシャンを手札に加えます！！」

エアーマン / ATK 1800

「バトル！！エアーマンでツバキに直接攻撃！！」

「うっ！」

ツバキ / LP 2700 900

「カードを伏せてターン終了！！」

紫苑

LP 1900 手札 1枚

エアーマン (ATK 1800)

伏せカード 1枚

ツバキのターン

「私のターン！！（来た！！）漆黒のパワーストーンの効果発動！
！魔力カウンターをエンディミオンに移し、そしてカウンターの無

「なくなったこのカードは破壊される!!」

漆黒のパワーストーン / 1 0

エンディミオン / M 4 5

「そして手札からおろかな埋葬を発動!! デッキの神聖魔導王エンディミオンを墓地に送り、魔法都市に魔力が溜まる!!」

エンディミオン / M 5 6

「そしてエンディミオンの効果発動!! フィールドの魔法都市の魔力カウンター6つを取り除き特殊召喚!!」

エンディミオン

魔法都市 / M 6 0

エンディミオン

神聖魔導王 / A T K 2 7 0 0

フィールドにツバキのデッキのエースとも言える魔法使いが現れた。そして一枚墓地の魔法を選択した。

「エンディミオンの効果発動!! 墓地のおろかな埋葬を手札に加え、そのまま発動!! 墓地へ送るのは闇紅の魔導師!!」

『(…久々の出番が墓地行きか…)』

少し悲しそうなダークが墓地へ行った。それを見て剣賭が目を擦っ

ツバキ

LP900 手札0枚

カオス・レッド・ドラゴン（ATK3000）

伏せカード無し

魔法都市エンディミオン（MO）

紫苑のターン

「私のターン！！（違う…このカードじゃない…）E・HEROオ
ーシヤンを守備表示で召喚！！」

オーシヤン/DEF1200

「ターンを終了します！！」

紫苑

LP700 手札1枚

オーシヤン（DEF1200）

伏せカード1枚

ツバキのターン

「私のターン！！（引いたのは…装備魔法…モンスターじゃない。
けど、カオスには貫通はある！）カードを伏せ、バトル！！カオス・
レッド・ドラゴンでE・HEROオーシヤンに攻撃！！ディストラ
クシヨン・フォース！！」

深紅の炎を纏ったカオスの右腕がオーシヤンに襲いかかった。更に

その炎が紫苑へ向かっていた。

「カオス・レッド・ドラゴンは貫通能力がある！！その差…1800の戦闘ダメージを与える！！」

「これでツバキの勝ちか…？」

「いや、あのカードは…」

「ガードブロックを発動！！戦闘ダメージを0にし、カードを一枚ドロロー！！（これでもない…！！）」

引いたカードは『ホープ・オブ・フィフス』、そしてもう一枚の手札は『ザ・ヒート』だった。紫苑の狙っているのはカオスを倒せるヒーローだ。

その為にはあのカードが必要だった。

ツバキ

LP2200 手札0枚

カオス・レッド・ドラゴン（ATK3000）

伏せカード1枚

魔法都市エンディミオン（MO）

紫苑のターン

「私のターン！！ドロー！！（これでもない！！）手札から魔法カードホープ・オブ・ファイブを発動！！墓地に存在するE・HEROを5体デッキに戻し、カードを2枚ドローする！！」

ホープ・オブ・ファイブ

通常魔法

自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカードを5枚選択し、

デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

このカードの発動時に自分フィールド上及び手札に他のカードが存在しない場合は

カードを3枚ドローする。

エンディミオン
魔法都市/MO 1

墓地にいたアブソルート、フリーズ・レディ、レディ・オブ・ファイア、エアーマン、オーシャンがデッキに戻った。

そして

「ドロー!!(来た!!)」

引いたカードを見て紫苑は口元を緩ませた。

「手札からザ・ヒートを攻撃表示で召喚!!」

フィールドに炎を纏った男のヒーローが現れた。現れると同時にザ・ヒートの周囲に強烈な熱気が立ち込めた。

ザ・ヒート / ATK 1600 1800

「攻撃力が上がった?」

「ザ・ヒートは自身を含めたHERO1体につき、攻撃力が200上がります!!」

エレメンタルヒーロー
E・HERO ザ・ヒート

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 炎族 / 攻1600 / 守1200

このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO」と名のついたモンスターの数×200ポイントアップする。

「更にフェイク・ヒーロを発動!!手札のHEROをフィールドに

特殊召喚します！！手札のボルテックを守備表示で特殊召喚！！」

フェイク・ヒーロー

通常魔法

自分の手札から「E・HERO」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

そのモンスターは攻撃する事はできず、このターンのエンドフェイズ時に
持ち主の手札に戻る。

エンディミオン
魔法都市 / M 1 2

フィールドに電気を纏ったHEROが現れた。が、確実に壁ではなさそうだった。

ボルテック / DEF 1500

「それでどうするの？残り一枚の手札でカオスを倒せるの？」

「……ええ。これが……」

私の全力です！！ミラクル・フュージョンを発動！！」

「ミラクル・フュージョン…十代が使った事のあるカード。確か墓地と場のHEROを融合するカード」

一度ユウと十代が戦った時十代が発動したカード。その効果はその場にいたツバキも覚えている。

「フィールドのボルテックとザ・ヒートを除外！！出でよ…E・HEROシャイニング！！」

フィールドに光り輝くHEROが現れた。あまりの眩しさに紫苑以外の5人は目を庇つて。いや、山本さんは普通に見てる。てか、なぜ山本さんだけ眩しくないんだ？

シャイニング / ATK 2600
エンディミオン
魔法都市 / M 2 3

「シャイニングの効果発動！！除外されているHERO1体につき、シャイニングの攻撃力が300ポイントアップします！！除外されているのはザ・ヒート、ボルテック、アイスエッジの3体です！！よって」

シャイニング / ATK 2600 3500

E・HERO The シャイニング

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2100

「E・HERO」と名のついたモンスター + 光属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、ゲームから除外されている

自分の「E・HERO」と名のついたモンスターの数×300ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

ゲームから除外されている自分の「E・HERO」と名のついた

モンスターを2体まで選択し、手札に加える事ができる。

「攻撃力3500!?!」

「カオスを上回った!?!」

観客席でユウと剣賭がその光景に驚いていた。あと一步で敗北の所から一気に巻き返したのだ。

「バトル!! シャイニングでカオスに攻撃!! オプティカル・ストーム!!」

魔法都市 / M 3 4

手札のカードを無視するとしても、このドローで全てが決まる。

「ドロー!! 『グリ〜』 (グリと…これは…!!)」

引いたカードとそして伏せているカード、さらにチラツとエンディミオンを見た。

「手札から魔法カード、死者蘇生を発動!! 墓地に存在するモンスターを1体、特殊召喚する!! 墓地のエンディミオンを特殊召喚する!!」

エンディミオン / ATK 2700

魔法都市 / M 4 5

だが、それだけではダメだ。手札に魔法もないため、効果を使うことができない。

「手札からクリエイト・リゾネーターを召喚!!」

『グリ〜』

勢いよくグリが場に現れた。これで

「レベル7、エンディミオンにレベル3のクリエイト・リゾネーターをチューニング！」

光と闇の狭間にいる魔導師よ 全ての魔を従えよ！！」

7 + 3 = 10

「シンクロ召喚！！来て、神帝魔導エンディミオン！！」

神帝魔導 / ATK 3000

フィールドに神聖魔導の上をいく、神帝魔導が現れた。だが、それでもシャイニングに届かない。

「エンディミオンの効果発動！！魔法都市に乗っているカウンターをこのカードに移すことができる！！5つ全てのカウンターを神帝魔導に乗せる！！」

エンディミオン
魔法都市 / M 5 0
エンディミオン
神帝魔導 / M 0 5

しかし神帝魔導の効果 5つの場合は破壊を無効にする効果が発動される。その効果はいま必要無かった。

「それでどうするんですか？神帝魔導でも私のシャイニングには届きませんよ」

「それはどうかな。リバーズカードオープン！！魔力増幅魔術を神帝魔導に装備する！！！」

伏せていたカード。なぜこれのカードがダーク用に入れたのかという

「このカードは魔力カウンターが3つ以上乗った魔法使い族モンスターのみ装備できる！！そして装備モンスター攻撃力はカウンター1つにつき300ポイントアップする！！！」

魔力増幅魔術

装備魔法

このカードは、魔力カウンターが3つ以上乗った魔法使い族モンスターにのみ装備することが出来る。

装備モンスターの攻撃力は魔力カウンターの数×300ポイントアップする。

このカードを装備したモンスターは魔力カウンターを新たに乗せることが出来ず、装備モンスターの戦闘終了時に魔力カウンターを1つ取り除く。

装備モンスターの魔力カウンターが2つ以下になった時、このカードを破壊する。

このカードがこのカード以外の効果で破壊された場合、装備モンスターに魔力カウンターを2つ乗せる。

「えっと、いま神帝魔導には5つのってるから…」

「1500アップの」

神帝魔導 / ATK 3000 4500

「攻撃力4500…!!」

その攻撃力に紫苑は驚いていた。そしてこの攻撃で

「バトル!!エンディミオンでシャイニングを攻撃!!マジック・
ディパード!!」

「うくっ…きゃあああああ!!」

紫苑 / LP 7000

これで終了だ。そして どうでもいい勝負はツバキの勝ちだった。

「これで約束通り私がお姉さんね」

「…はい。改めてよろしくお願いします。』お、お姉ちゃん／／／

「

「「「……………まさかこれが理由か?」」」

紫苑が恥かしそうにツバキをお姉ちゃんといったのに観客席にいた3人が揃ってそう言った。

ちなみに山本さんは決着と同時に2人の戸籍を修復して、それを持って行っていた。

『ふむ、そろそろ説明を始めてもよいかの?』

そう言ったのはアナトだった。しかも人型ではなく巨大狼カミのすがただった。

「な、なんだこいつ!？」

「…大きいですね」

実を言うとユウ達を人間界へ戻したあと2人（体？）はすぐに精霊界に戻ってしまった。説明するためには必要な物があると言っていたのだ。

初めて見るアナトの姿に剣賭と紫苑は驚いていた。が、シゲルは右手を軽く上げた。

「よお、遅かったな」

「えと…これが昨日言っていた神の一体か？」

剣賭の言葉にツバキは頷いた。すると剣都は珍しそうにアナトをじっと見ていた。それにアナトは恥ずかしそうに剣都の後ろを指さした。

『お主の精霊がそこに居るだろ』

全員が底を振り向くと　そこにいたのは土色のチビ龍がいた。

「ん？剣賭の精霊か？」

「ってお前らあれ見えてるのか!？」

山本さんに言ってみたが見えてないと言った何かを4人は見えるよ
うだった。

「まあ見えるとうるか…」スピット
「そうだね…」カオス
「出て来い」ソウル

3人の呼びかけに4匹のチビ龍が現れた。

4匹？

『ピュイ？』

「「「…誰!?」」」

3人同時に反応するとそこには紫苑が抱えた淡い青のチビ龍がいた。

「ファントム・ブルース・ドラゴン…」ファン。私の精霊です
「え？紫苑ってシンクロモンスター持ってたの？」

ツバキがそう聞いた。紫苑のデッキに融合モンスターが多くいるが、シンクロモンスターが入っているとは思わなかったのだ。

「私のデッキに…チューナーはいないんです」

「チューナーがない？じゃあシンクロモンスターは…」

そう言って取り出したのは一枚のカード 『ファントム・ブルース・ドラゴン』だった。

「これ一枚です」

『まあ、その話は後でもらう。我が人間界に留まるのに時間制限があるのでな…』

そう言ってアナトはツバキの頭上に一冊の本を転送させた。

「え？な、何この本？」

『それはアカシックレコードというモノだ。アイオーンの奴が貸すのになかなか渋ってな…』

「はあ！？／嘘ですよね？」

アカシックレコードという単語聞いた瞬間シゲルと剣賭、紫苑が反応した。一方ユウとツバキはどういうことなのか分からないという表情をしていた。

「アカシックレコードって何？」

「何と説明したらいいでしょうか…宇宙、人類、過去、未来、全て

の歴史が書かれている本といったほうがいいでしょうか…」

紫苑の言葉に2人は更に首を傾げていた。それに剣賭が頭をガシガシ掻きながら簡単に説明した。

「過去と未来の事が書かれてる歴史書といった方が分かるか？」

「…うん、なんとなく分かった。けどどうしてそんなものが必要だったの？」

ユウがアナトにそう聞くと開いてみるようにアナトは言った。ツバキは試しに一ページをペラッとめくった。

「えっと…『結城十代という少年が、三沢大地という少年と代表選にて勝負し、勝利する』、って、これって…」

「どうかしたのか？」

今度は剣賭の方が何のことなのか聞いた。それに応えたのは 神 楽だった。

『2日ほど前にね いや、この世界だと昨日か。確かに十代と三沢は勝負したよ。その時はユウとシゲル、ツバキも戦ったね』

「そうなのか…ってあんた誰だ!？」

剣都は急に現れた神楽を見てそう言った。それにシゲルが簡単に「ユウの精霊の一体だ」といった。

「けどアカシックレコードと世界の矛盾…何の関係があるんだ？」
『ツバキ、そのページに他に誰がアカデミアのデュエルリングで戦っているか書いてある？』

「え〜と…あれ…!？」

アナトの言葉にツバキはそれを調べるように文章を指でなぞりそして驚いていた。

「誰も…私も、ユウもシゲルも明日香も…戦ったとは書かれてない…!！」

「……ハアア!?!/嘘ですよね!?!」「」「」

アカシックレコードは『確かな』世界の記録をするモノだ。その中であつた事が書かれていないのだ

『それが世界の矛盾だ。何かの理由の為に本来の世界と違う存在
そなたたちの事だ』

おそらくアナトの言葉を、説明を5人は一生忘れることはないだろう。

『残念だが…アカシックレコードを持ってしても…この世界はどうなるのか分からない』

そう言ってツバキの手からアカシックレコードが消えた。

第三十話 意地の戦い 魔導師VS英雄（後書き）

シゲル「なんだこれ？」

いったでしょ？どうでもいって。ふとアカデミアで十代とかが「姉はどっちだ？」的なことを聞くことを考えて…それでアカデミアで決まるより戸籍作っているときに決まったほうが都合がよかった。ユウ「……………」

ツバキ「ユウなんか言つてよ!!！」

それと今回から剣賭がメイン入りします!!

剣賭「よろしくな」

剣賭のイメージは…少し丸いく、仲間思いのテイルズのアビスの長髪ルークの的な感じ。

紫苑「具体的ですね」

オリジナルカード

E・HEROフリーズ・レディ

投稿カード：戎鴛さん

魔力増幅魔術

ユウ「それにしても…世界の矛盾か…」

それらの詳しいことは次回の序盤にします。

次回予告：side 剣賭

アナトという神から聞いた世界の矛盾…それに俺が含まれているとはな…

そして俺たちはアカデミアへと向かった。俺と紫苑は編入という形

になるのだが：そこに急展開が。紫苑の言葉を聞いてシゲルが危険だと知った俺とユウは急いでシゲルのもとへ向かった。

そこにいたのはカードを盗む

次回第三十一話 オールバーン

最強カードは『クロック・ゴールド・ドラゴン』

楽しみにな

第三十一話 オールバーン（前書き）

今回はロックバーンやキュアバーンなどのデッキテーマに作者オリジナルのテーマを勝手に書いてみました。

第三十一話 オールバーン

アナトから世界の矛盾について聞いた5人
本来の世界では存在しないという5人。そして、世界の補正で本来とは違う姿となりつつある。その後の世界がどうなるのか 破滅か、補正がかかって別の世界になるのか、世界の矛盾である5人がどうなるのかも分からなかった。

アカデミア港

「ここがアカデミアか…」
「結構いい所ですね」

アカデミアの港に降り立った剣賭と紫苑はそう言った。

ちなみになぜ紫苑だけでなく、剣賭までいるのかということ

2時間前

「俺達が世界の矛盾と呼ばれてるいる理由は…分かった…」

シゲルの言葉に他の4人は何も言えなかった。シゲルもその言葉の先が出なかった。あまりにも5人のとって大きすぎる話だったのだ。

『ノーバディ本来存在しない存在』

それがユウ、ツバキ、シゲル、剣賭の事だった。山本さんや他の人たちは別の生活を行っていたのがアカシックレコードに書かれていた。

だが、どこを探しても5人の事が書かれてなかった。

紫苑 シユテル・ザ・デストラクター いや、星光の殲滅者が『別世界』の日本にいたことが確認されていた。

しかし、何の因果があるのか別世界である『この世界の』精霊界へ飛ばされたのだ。

つまり紫苑も世界の矛盾の一人といっても良い。

『それと…我が来たのはもう一つ理由がある。奴らがお主等を責めてきた時の対処法が無かるう?』

「あ、ああ…俺はともかく、4人は…」

剣都は護身用に柔道と合気道を取得している。だがそれでも

『奴らを甘く見ない事じゃな。スポーツや競技ではない。殺し合いなのだ』

アナトの言葉がツバキに深く響いた。誰かを傷つけたり、傷つけられたりするのに心が苦しめられていたのだ。

だが、それを知ってか知らずかアナトは5人の目の前に何かを転送した。

『突貫工事だが、急いで作ったのだ』

そして転送されたソレは5人には見覚えのある物だった。

『精霊界での現象を人間界でも起こすことのできるモノだ。それがあれば戦うことはできる』

デュエルディスク　それも其々ユウは深い銀色、ツバキは明るい赤色、シゲルは薄い黒色、紫苑は淡い青色、剣賭は暗い黄色のカラーリングだった。

『それにカードをセットすると精霊化でも使えた実体化する力が働く。奴らの言う『デバイス』と同じものと考えた方がいいかの』

奴ら　時空管理局の事だ。3人は実際のその力を目にしている。

遠く離れた気が真つ二つに折れ、辺りを焦がす力　普通に考えれば勝てる可能性はない。

しかし、自分達の心を使えば、あるいは

『む？そろそろ限界かの…我らは基本精霊界を離れることはできぬ、此処から先人間界での事はお主等に任せるぞ』

その1時間後

「それじゃあ、そろそろ俺達はアカデミアに戻った方がいいな」

時刻はそろそろお昼時、フェリーの数はそう多くないため早めにアカデミアに向かった方が良かった。

すると剣都は

「よし、じゃあ山本。車回してくれ。あとしばらくの間会社頼むぞ」「畏まりました」

剣都の言葉に4人は首を傾けた。別に車を回せというのはおかしくない。しかし会社を頼むとは　？

「俺も今日からアカデミアに向かう。既に校長と理事には話を通している」

「……はあ!?!」

「嘘よね!?!」

「手際が良いですね」

回想終了

それぞれがディスクを持ってアカデミアに戻ってきたのだ。その間会社の意向はほぼ山本さんがすることに　　が、戻ってきて早々問題が

「……………うおえ……………」

「シ、シゲル……大丈夫?」

シゲルが船酔いしたのだ。実を言うとシゲルは船の揺れが大の苦手だ。入学日も保健室で少し休んだのだ。そして酔い止めもないため酔ってしまったのだ。

「あゝもう!!ツバキはシゲルを保健室に運んで行け!ユウは事情説明の為に紫苑と俺と校長室に行くぞ!」

剣賭の号令の元、其々そういう行動をすることに

保健室

『いない？』

「ええ。朝早くから室内にいなかったわ。デッキもロストロギアもね。けど昨夜から今朝私が行くまで魔力反応も無かったから誰かの所に行ったと コンコン あら？誰か来たわ。続きは後で」

クロノとの通信を切ったシャマルは扉を開けて入ってくる生徒を注目し、驚いた

いまさつき会話に出していた3人のうちの2人、シゲルとツバキだったのだ。

だがシゲルの様子がおかしかった。

「えっと…獣斬君どうしたの？」

「…それ…うぶ…」

「えっと…私の家族がこの学園に来るんだけど、その迎えに本島の港まで行ったんですけど、その時シゲルが酔っちゃって…」

尤もらしい嘘をツバキが言った。剣都がそう言うように言ったのだ。

「（なるほどね…だから朝早くからいなかったのか…）酔い止めを出すわ。少しはましになるでしょ。あとそのベッドで寝ときなさい」

保健室のベットを指さしたシャマルは柵から酔い止め薬を取り出しに行った。シゲルはベットに寝つ転がると腕で目を覆った。昔から船だけは酔うのだ。車や飛行機はともかく船だけは

「はい、酔い止めよ。これを飲んで寝てなさい」

薬とグラスの水を受け取ったシゲルはそれを一気に飲み干すと横になっただけで寝息を立てた。

「えと…2人を探しに行くので…シゲルをお願いします」

そう言うのとツバキは保健室を出て行った。シャマルは寝ているシゲルを一瞥し、その横の黒いデュエルディスクを見た。

「（このディスク…昨日まで無かった…いえ、今はそれどころじゃない。寝ている間にロストログアの回収を…）」

そう思っただけでシャマルはシゲルの腰のデッキケースに

校長室

「精霊界ですか…ですが、その様子では嘘ではない様ですね」

鮫島校長はユウ達の説明にそう言った。粗方剣賭が船に乗る前に説

明していたのでスムーズに説明することができた。すると鮫島校長はデスクの引き出しの一番下からある物を取り出した

「これは本校の生徒手帳です。肌身離さず持つていてください」
「ありがとうございます」

それを受け取った2人は持っていたバツクにそれを入れた。ちなみに2人の恰好は私服で、制服は後日届けられる予定だった。

「では部屋ですが…剣賭君はレッド寮の空き部屋…詳しくは管理人の大徳寺先生に聞いてください。紫苑さんはブルー女子寮、こちらは鮎川先生に聞いてください。詳しい話は後日するとしましょう」

鮫島校長の言葉に3人は一礼すると校長室を出た。ちなみに既に其々のカラーのデスクの使用許可は貰っていた。

エントランスホール

「なあ、保健室ってどこだ？シゲルの様子を見に行きたいんだが」
校長室から昇降口に向かう最中に剣賭がそう言った。確かに船から降りたシゲルの様子は普段の姿を知っていると考えられないくらい弱っていた。

「えっと、保健室は…「ん？聖牙か？どこに行っていたのだ？」え？」

保健室の場所を説明しようとするところにピンクのポニーテールの女性が来た。

体育教師のシグナムだった。

「あ、シグナム先生。ツバキの親戚の人を……！？」

ユウが剣賭の考えた嘘を述べようとした瞬間、辺り一帯の雰囲気が変わった。

そして、その発生源は

「ユウ、剣賭。その人から離れてください」

紫苑だった。紫苑は淡い青いデュエルディスクを構え、シグナムを睨んでいた。

一方いきなりの展開についていけないユウと剣都は取りあはず言われた通りシグナムから離れた。

「貴様……！！闇の書の残滓がなぜここにいる……！！」

シグナムがそう言って紫苑を見ていた。その手にはいつの間にか西洋の剣みたいなのが握られていた。

「この人はヴォルケンリッター烈火の将……つまり、管理局の一員です」

「なっ!?!」

紫苑の説明にユウは驚いていた。まさかなのは達以外に管理局員が紛れこんでいるとは思っていなかったからだ。

「闇の書の残滓……いや、シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者……一体何の目的だ!?!」

「目的……昔なら自らの使命に捕らわれていました……が、今は目的なんてありません」

そう言って紫苑はディスクを腕に嵌めた。それを見たシグナムは剣

をデュエルディスクに変形させると同じように腕に嵌めた。

「みんなどうし…一体どういう状況？」

「ツバキ…シゲルは？」

保健室からやってきたツバキが対峙してる紫苑とシグナムを見てそう言った。シゲルがいないことに首を傾けたユウは聞いてみた。

「保健室で寝たからシャマル先生にお願いして「シゲルが危ないです」え？」

いきなり声を荒げた紫苑に3人は目を丸くした。

「恐らくシャマルというのはヴォルケンリッターの一人です」

「っ!?!?ユウ場所案内しろ!?!」

紫苑の言葉を聞いた剣都はユウの首元を掴んでツバキの来た方向へ走って行った。

残されたツバキは混乱した目で紫苑を見た。

「え、ええと…?紫苑、どついう状況？」

「教師の中に管理局員が紛れこんでいたんです。このシグナムもその一人……」

そう聞いてツバキは驚いたようにシグナムの方を見た。今までとは違う雰囲気、シグナムに、信じられない様にツバキが聞いた。

「シグナム先生……嘘ですよね……？先生が管理局の一員なんて……」
「……姫野。本当だ。私は……私とシヤマルはお前達を騙していた」

その言葉に　ツバキは静かに涙を流した。

保健室

寝ているシゲルの腰のデスクケースを外したシヤマルは目的のカードを探した。

「……ガイザレス、ベストロウリィ……見たことの無いカードだけど違
うわね……ん？何も書かれてないカード……まさか……」

エクストラデックススペースのカードを見ていたシヤマルはそのカードが目的のカードだと判断し、そのカードを白衣の懷に

「シゲル！！」

入れたと同時に剣都とユウが保健室に入ってきた。一瞬焦ったが、シャマル平常心を保って2人を見た。

「聖牙君、保健室は静かに。それにそちらの子も「先生…もう芝居は止めてください」え？」

芝居といわれて一瞬カードを抜き取ったのを見られたのかと思っていた。だが剣都はシャマルを睨んでいた。

「テムエ：管理局のスパイなんだろ！！シゲルのカードを懐に入れてるのも知ってた！！」

「ちよつと、一体何の事？いきなり管理局なんて…」

と、シャマルが2人から目を離して椅子から立ち上がった。が、殺気のようなものを感じてシャマルが振り返ると

「とぼけてんじゃねえ！！ゴタゴタ言っていないで懐に入れたシゲルのカードを返せ！！」

暗い黄色のデュエルディスクを構えた剣賭が殺気を放っていた。そ

れも尋常ではないほどの量だった。

「クツ…クラールヴィント!」

《Duel mode on》

シャマルの呼びかけに応えるように腕にデュエルディスクが現れた。それと同時にシャマルの服が白衣から緑の魔導服へと変わった。

「ユウ!!お前はシゲルを起こせ!!」

「う、うん」無駄よ。服用させたのは睡眠薬…恐らく後1時間は寝たままね「っ!?!」

先程シゲルに渡したのは酔い止めではなく、強力な速攻性の睡眠薬だった。

その為シャマルが慌てることなくじっくりデッキを見る事が出来たのだ。

『まあ、ワシらにはじっくり見えておったかの』

しかし目撃者^{ウシイ}が部屋に入ってきた2人にシャマルの行動を説明したため、すぐ剣都は管理局だと判断した。

「デュエル!!」

剣都のターン

剣都がカードを引こうとした瞬間、シャマルの周囲から例の『ダメージを实体化するドーム』が辺りを包んだ。

「たく… 困いなんてしなくても逃げねえよ… 俺のターン!! 俺はマシンナーズ・ソルジャーを攻撃表示で召喚!!」

狭い保健室内に片腕が剣の機械の兵士が現れた。

ソルジャー / ATK 1600

「更にマシンナーズ・ソルジャーが召喚に成功した時、ソルジャー以外のモンスターがない場合マシンナーズを1体特殊召喚することができる!! マシンナーズ・シールドを特殊召喚!!」

ツギハギの巨大な盾を持った機械の兵士がソルジャーの呼びかけにこたえて現れた。

マシンナーズ・シールド

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / ATK 1000 / DEF 2100

自分フィールド上の地属性・機械族モンスターが破壊される時、このカードを墓地から除外することで破壊を無効にする。

シールド / DEF 2100

「カードを2枚伏せターン終了!!」

剣賭

手札2枚

ソルジャー（ATK1600） シールド（DEF2100）

伏せカード2枚

シャマルのターン

「私のターン！！私はビクバンガールをで召喚！！」

フィールドに炎を纏った女性が現れた。

ビクバンガール / ATK1300

「更にカードを3枚伏せてターン終了よ！！」

シャマル

LP4000 手札2枚

ビクバンガール（ATK1300）

伏せカード3枚

剣都のターン

剣都はシャマルの場のカードを見て眉をひそめた。相手の場のカードはビクバンガール、そして伏せカード。おそろく…

「（キュアバーン…か？）俺の「伏せカード発動！神の恵み！私がカードを引くたびにライフを500回復する！！」…そしてビックバンガールの効果でその時俺にダメージか」

神の恵み

永続罫

自分がカードをドローする度に、自分は500ライフポイント回復する。

ビックバンガール

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 炎族 / 攻1300 / 守1500

自分のライフポイントが回復する度に、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

「俺のターン！！（だったら速攻でケリを付ける！！）手札からマシンナーズ・ギアフレームを召喚！！効果によりデッキからマシンナーズ・リペアを手札に加える！！」

ギアフレーム / ATK1800

「二重召喚を発動し、フィールドの3体のマシンナーズを墓地に送り、マシンナーズ・バーサーカーを特殊召喚する！！」

フィールドにユウとの戦いで召喚された機械の化け物バーサーカーが現れた。

バーサーカー / ATK 3500

「更にバーサーカーの効果発動！！墓地のギアフレームとソルジャーを除く、フィールドのカードを1枚破壊する！！（キュアバーンなら、その要はあのモンスターだ！）ビックバンガールを破壊する！！」

そう宣言した瞬間バーサーカーの前に機械の残骸が集まり、それがビックバンガールに向かって飛んで行った。

「リバース罠、ライフエフェクト！！ライフを任意の数値支払うことで効果の変わる永続罠よ！ライフを3000払い、自分フィールド上のモンスターはカード効果で破壊されないわ！！」

ライフエフェクト

永続罠

発動時ライフを任意の数値（1000単位）支払うことで以下の効果を得る。

1000

相手の効果で手札のカードを捨てなくてもよい。

また相手はドローフイズ以外にカードをドロォーできない。

2000

自分のフィールド上の魔法・罠は相手のカードは破壊されない。

3000

自分フィールド上のモンスターはカード効果では破壊されない。

飛んで行った残骸はシャマルの体から現れた光の壁に阻まれた。

シャマル / LP 4000 1000

「ううう……………」

「一気にライフを3000まで…」

「それほどあのカードビックバンガールに執着してんだろ。(だが…どうも釈然としない。キュアバーンなら確かにライフを回復するが、それよりも相手のライフを減らすのが目的のはずだ…自分のライフを減らしてどうするんだ…?)」

シャマルの戦法について考えていた剣都は手札を確認して首よ思いつきり左右に振った。

「ああ!!あれこれ考えるのはガラじゃねえ!!バトル!!バーサーカーでビックバンガールに攻撃!!バーサークラッシュ!!」

バーサーカーがビックバンガールに向かって機械の残骸で出来た腕を振り上げた。

だが、その攻撃は緑の網みたいなものに阻まれた。

「攻撃宣言前にリバース罠、グラヴィティ・バインド・超重力の網
- を発動したわ！レベル4以上のモンスターは攻撃を行えない！」

グラヴィティ・バインド - 超重力の網^{ちゆうじゆうりきゅうりきゅう} -

永続罠（制限カード）

フィールド上に表側表示で存在する全てのレベル4以上のモンスターは攻撃をする事ができない。

「なっ… ロックキュアバーンデッキだと…！！」

ロックバーンとキュアバーンの利点を合わせたデッキ　ロックバーンは相手を封じるために自分のライフを減らしたり、モンスターが少ない傾向がある。

逆にキュアバーンはモンスターを守るカードをあまり入れず、ライフ回復カードを多く入れる傾向がある。
そのメリットの部分を合わせたデッキ　それがロックキュアバーンだ。

「クツ… ターンエンド！！」

剣賭

LP4000　手札2枚

バーサーカー（ATK3500）

伏せカード2枚

シャマルのターン

「私のターン！ドロー！！神の恵みの効果でライフを500回復！
！そしてビックバンガールの効果で500ダメージ！！」

「クツ…」

シヤマル / LP 1000 1500

剣賭 / LP 4000 3500

初めて実体化するダメージを受けた剣都だったが、500だったためそれほど苦にはならなかった。

「更に盗人ゴブリンを発動！！相手に500ダメージを与え、私はライフを500回復する！！更にビックバンガールの効果で500ダメージ！！」

「っ…！！」

シヤマル / LP 1500 2000

剣賭 / LP 3500 3000 2500

どんどん剣都のライフが削られていってる。しかももう2人のライフ差は無くなっていた。

その上苦痛がどんどん蓄積されているようだった。

「カードを2枚伏せてターン終了!!」

シャマル

LP2000 手札0枚

ビツクバンガール(ATK1300)

伏せカード2枚 神の恵み ライフエフェクト グラヴィティ・バ
インド

剣都のターン

「俺のターン!!(クソ…チューナー以外で網を抜けて、チュー
ナーの中にあれを倒せるモンスターがない…)俺はマシンナーズ・
ドッグを守備表示で召喚!!」

剣都の場に新たに機械で出来た犬が現れた。見た感じ狩猟犬の様な
フォルムで背に小さなバルカンが付いていた。

マシンナーズ・ドッグ/DEF1000

「更に機甲部隊の補給所を発動!!手札のマシンナーズ・ブレード
を墓地に送りカードを2枚引く!!(このカード…そうか…あのカ
ードを使えば…!!)」

剣都は引いたカードを見てこの場を切り抜ける方法を思いついた。

「（だがその為には…あのカードが…）ターン終了!！」

剣賭

LP2500 手札2枚

バーサーカー（ATK3500） ドッグ（DEF100）

伏せカード2枚

シャマルのターン

「私のターン!!!（上手くいけばこのターンで…）リバース罠、シモツチによる副作用を発動!！」

「な!？キュア・ロックに続いてシモツチバーンだと!？」

恐らくシャマルのデッキは…オールバーン全ての効果ダメージデッキだった。
有名な『ロックバーン』『キュアバーン』『シモツチバーン』
恐らく他にもあるだろう。

しかもその手段はロックバーンで相手の動きを封じ、シモツチバーンで相手の回復を封じ、キュアバーンでライフを回復する。

そのコンボに他のバーン系統のコンボ…そう考えるだけでえげつない。

「そしてドローフェイズ、ドロー! 神の恵みとビックバンガールの

コンボで回復とダメージ!!」
「うあ!!」

シヤマル / LP 2000 2500
剣賭 / LP 2500 2000

「クッ!!! オールバーンなんて聞いたこと無いぞ!!!」
「更に伏せカード、成金ゴブリンを発動!! 私はカードを1枚ドロ
ーし、相手のライフを1000回復する...けど、シモツチの効果で
ダメージへと変わる!!!」

成金ゴブリン
通常魔法

自分はカードを一枚ドロース、相手はライフを1000回復する。

「グッ...うわあああああ!!!」

剣賭 / LP 2000 1000

「更にドロースしたことにより、神の恵みとビックバングールの効果
発動!!!」

「なっ...うわあああああ!!!」

シヤマル / LP 2500 3000

剣賭 / LP 1000 500

既に3500のダメージを受けている剣都は見た目より精神的にダメージが大きかった。
来ている服がヨレヨレで全身が小刻みに震えているが、それ以上に息をするのがしんどくなっていた。

「…引いたカードは2枚目のシモツチ…残念ね」カードを伏せて、
ターン終了」

シャマル

LP3000 手札1枚

ビックバンガール(ATK1300)

伏せカード シモツチによる副作用 神の恵み グラヴィティバインド ライフエフェクト

剣都のターン

シャマルのコンボはすでに完成しており、このままだと剣都が負けていた。

「俺の…ターン…!!」

だが、シャマルは2つミスを犯した。一つはビックバンガールを攻撃表示にしていたこと。

もう一つは

「ドロー!!! (来た!!!)」

剣賭を一般人だと思って油断していたこと。

「リバースカードオープン!!! 死者蘇生!!! 墓地のマシンナーズ・ブレードを特殊召喚!!!」

マシンナーズ・ブレード / ATK 2200

フィールドに巨大な剣を持った機械の兵士が現れた。しかしシャマルのカードで身動きができない。

「そしてリバースカード、機甲部隊の生産を発動!!! 相手の伏せカードを確認し、畏だったら破壊し、それ以外なら自分の場のモンスターを除外する!!!」

「残念ね。手札斬殺、魔法カードよ」

そう神の恵みとのコンボの為のカードだが、シャマルの手札は1枚、発動できないカードだった。

「…場のマシンナーズ・ドッグを除外する」

「ふふ…これでますますあなたが不利に「ならねえよ」「え？」

確実に今現在の状況は剣都の不利だった。だが剣都は勝負を諦めたような眼や、焦っている目をして無かった。

「これで安心して…勝ちを狙いに行ける」

むしろ、勝ちを確信した眼だった。

「除外されたマシンナーズ・ドッグの効果発動！！カード効果によつてこのカードがフィールドから離れた時、デッキから地属性・機械族モンスターを手札に加えることができる！！マシンナーズ・スナイパーを手札へ！！」

マシンナーズ・ドッグ

効果モンスター

星3 / 地属性 / 機械族 / ATK 800 / DEF 1000

このカードがカード効果でフィールドから離れた時、デッキから「マシンナーズ・ドッグ」以外の地属性・機械族モンスターを手札に加えてもよい。

「そんなモンスター手札に加えたところで何も変わらないわ!!」

そう、シャマルは自身の勝ちを疑って無かった。なにがあっても場のカードで勝てるはずだった。

「マシンナーズ・リペアを攻撃表示で召喚!!」

マシンナーズ・リペア

効果モンスター（チューナー）

星2 / 地属性 / 機械族 / ATK 200 / DEF 500

このカードが表側表示で存在するとき1ターンに一度

カード効果で破壊された機械族モンスターを特殊召喚できる。

マシンナーズ・リペア / ATK 200

「そして…これが俺のデッキのエースだ!!レベル6のマシンナーズ・ブレードにレベル2、マシンナーズ・リペアをチューニング!!機械の魂を持つ翼竜よ、その鋼鉄の翼で仲間を敵の脅威から守りたまえ!!」

「シンクロ召喚!!!吹き飛ばせ、クロック・ゴールド・ドラゴン!」

『グルルルルアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!』

場にチビ龍だったクロックが、本来の姿 鋼の鎧に身を包んだ翼竜へと変わった。

その体からは無数の銃身が生えており、背には巨大なガトリングがシャマルを狙っていた。

クロック・ゴールド・ドラゴン / ATK 2300

「シンクロ召喚!けど、レベル8なら攻撃は」

「クロック・ゴールドに見え見えの罠は通じない!!!シンクロ召喚成功時、相手の場の表向きの魔法・罠カードを全て破壊する!!!オートファイア!!!」

クロック・ゴールド・ドラゴン

シンクロモンスター

星8 / 地属性 / ドラゴン族 / ATK 2300 / DEF 2500

チューナーモンスター+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の

魔法・罠ゾーンで表側表示で存在するカードをすべて破壊する。

フィールド上のモンスター2体をリリースすることで

このカードは直接攻撃することができる。

クロックの全身の銃の砲口がシャマルの場の4枚のカードに向けられると一斉に発射した。

「なっ…!!シモツチだけじゃなくてグラヴィティバインドまでも…!!」

「そして、手札のマシナーズ・スナイパーとマシナーズ・ピースナイパーを墓地に送ってマシナーズ・フォートレスを特殊召喚する!!」

「っ…!?上級モンスターが…3体も…!?」

クロック、バーサーカー、フォートレス。剣都のデッキの最強軍団とも言える3体がフィールドに揃った。

「う、うそ…残り1ターンから…逆転したというの…!?」

「残念だが俺は手を抜く気はない。そして…テメエみたいな野郎に慈悲を与える気もない…!!バーサーカーの効果発動!!墓地のスナイパーとブレードを除外してビックバンガールを破壊する!!」

2ターン目の様に機械の部品がビックバンガールに飛んで行った。そしてビックバンガールに纏わりつく爆散した。

「バトル！！クロックで直接攻撃！！ジェノサイドイグニッション
！！！」

「きゃあああああああ！！！！！」

シャマル / LP 3000 700

なぜバーサーカーで直接攻撃しなかったのか。残りライフが3000
0だったからバーサーカーの攻撃でライフは無くなるはずだった。

「うつ…！？どうして…」

「言っただろ。俺は慈悲を与える気はないとな！！仲間に出した
テメエをすぐに眠らせる気はない！！！」

つまり ユウ（処刑モード）と剣都（今の状態）が同じだっただ
けだった。

「マシンナーズ・フォートレス！！あの女を撃ち抜け！！」
アマ

「ウゴっ……………！！！」

フォートレスの放った実弾がシャマルの喉元へ命中した。それによ
り一瞬でシャマルは気を失った。

シャマル / LP 700 - 1800

しかし、怒りに満ちた剣都はもうだれにも止めれない。

「マシンナーズ・バーサーカー！！奴をぶつ壊せ！！バーサーク
ラッシュュ！！」

「アアアアアア！！！！！！！！！！」

気を失ったシャマルに手を抜く事なくバーサーカーの腕が振り下ろされた。

シャマル / LP - 1800 - 4300

OverKill

その言葉がふさわしいという様にシャマルはボロボロになった。
着ていた緑の服は所々が破け、体の至る所から血が流れていた。

「はあ…はあ…はあ…たく…実際のダメージはこんなにしんどいの
か…」

「大丈夫？剣都」

ユウが片膝をついて息を整えているとユウが剣都に呼び掛けた。
剣都は荒い息を整えながら何かを指さした。

そこにはシャマルの盗んだシゲルのカードが落ちていた。
バーサーカーの攻撃で敗れた衣服から落ちたのだ。

「これ…うん、間違いない」

「はあ…はあ…ふう…それを証拠にこいつを警察に引き渡そう。
そうすれば奴らの」

とそういかけた瞬間、剣都はユウを突き飛ばした。

ドゴオン！

それと同時に保健室の壁から鈍い音が聞こえた。ユウと剣都が底を
振り向くと、鉄球がぶつかった様に壁が抉れていた。

「っ！？一体なんだ！？どこから飛んできた！？」

「ちっ…外したか…『アイゼン』！！」

室内にいる誰でもない声が響いた。そこにいたのは赤いゴスロリの

《Hammer Forum》

「っ……！」

ハンマー型のデバイスを持った少女が立っていた。

しかも明らかに話し合う雰囲気ではなく、叩きのめしに来ていた。

「クツ…新手かよ…しかも強行手段とは…」

「一度しか言わねーからよく聞け…ロストログアを渡せ」

有無も言わせないような少女の雰囲気に流石のユウも背筋が凍った。

『ユウ……！っっかりして……！』

「（イナ！？って、そうか……！）」

イナの呼びかけにユウが何かに気付いた。一方剣賭もそのことに気付いており、問題はそのタイミングだった。

「（仕方ねえ…）たく…それは要求じゃなくて脅迫じゃないのか？あゝあ、親の顔が見てみたいぜ」

「な！？はやてを馬鹿にするんじゃないやねえエエエエ……！！！！！！」

剣都が少女からユウが死角になる様に挑発すると少女は怒りの表情

で剣都に突っ込んできた。
紙一重で剣都がそれを避けると少女の視界からユウが消えるように
回り込んだ。

「はっ！ガキはガキらしくママの待つ家でも帰ってる！！」
「っ！！！！！テメエえ！！アイゼガッ！！」

少女が持っていたハンマーに呼び掛けようとすると、背中に強力な
衝撃が襲った。

「グッ…！？な、なんだ」油断大敵って言葉知ってるか？「！！」

少女がゆっくりとその方を無効とした瞬間、剣都が少女の腕を掴み、
足払いをし、思いつきりほおり投げた。背中から壁に激突した少女
は意識を手放した。

「…あ、危なかった…」
「そ、そうだね…」

ちなみにこの一連の動きを文で説明すると

剣都が少女を挑発し、引きつける。

ユウが瞬時にディスクを起動させ、イナを召喚する。

イナ「（餅つきアタック！）」

少女がそっちを向く。

剣都の背負い投げ。

という感じだ。だがこれが成功する確率は低く、運よく全て上手くいったようだった。

「見たところあいつも管理局だろ…此处に来て形振り構って無いな…」

「そうだね…前なら色々要求だけだったけど今回は剣都のデッキから抜いたり、襲ってきたり…あれ？」

ユウがふとシャマルの倒れている所を見て首を傾げた。

剣賭もそこを見るが特に何ともなつて無かった。ゴミ一つない床の上には『なにも』無かった。

「クラーウルヴィンド…転移…」

「！しまった！！」

剣都が気付いた時には遅く、シャマルは少女を抱えて消えている所だった。

「チツ…逃がした…」

「うん…油断した…」

剣都とユウがそう残念そうにつぶやいた。と、ユウが保健室に行く前に紫苑と対峙していたシグナムを思い出した。

「…2人とも大丈夫かな…？」

第三十一話 オールバーン（後書き）

剣賭「クロックか…」

イメージはブラックローズの全体破壊とパワーツールの攻撃力で…
ユウ「そして『オールバーン』ってなに？」

シモッチ、キュア、ロックなどのバーン系デッキの良いところ取りみたいなデッキ。

初めはキュア一択だったけどどうせならと追加した。

オリジナルカード

マシンナース・シールドー

ライフエフェクト

マシンナース・ドッグ

マシンナース・リペア

クロック・ゴールド・ドラゴン

次回予告：side紫苑

保健室に向かった剣賭とユウにシゲルを任せるとして…私は目の前の将に集中しましょう。

ですが、将の戦術に防戦に回る私…流石に分が悪いです。

そして逆転の手は たった一瞬。

次回第三十一話 サムライ

最強カードは『ファントム・ブルース・ドラゴン』

次回も楽しんでみてください。

第三十二話 サムライ（前書き）

今回でシゲルの長い回想は終わります……長かった……

第三十二話 サムライ

保険医のシャマルと、体育教官のシグナムは管理局員

そう言った紫苑に剣を向けたシグナム、そして保健室で寝ているシゲルに危機が迫っていると知った剣都
同じ島の中で起こった2つのデュエル。
シゲルのカードを盗もうとしたシャマルと戦った剣都は間一髪で奪還に成功した。

しかしそこに新たな襲撃者が

そして

「デュエル!!」

紫苑VSシグナム

紫苑のターン

紫苑はカードを引く前に泣き崩れてしまったツバキを見た。

ツバキはこの学園が好きだった。様々なつながりをくれた学園がシグナムもシャマルもその一つだった。だが

「…ツバキを…お姉ちゃんを泣かした貴女に湧きあがる…これが怒りなんです…」

そう呟いて紫苑はカードを引いた。

「手札からE・HEROフォレストマンを守備表示で召喚！！カードを2枚伏せてターン終…了…っ！！」

フォレストマン（DEF2000）

紫苑がターン終了を宣言しようとした週間3人の周囲の空気が変わった。

「やはり…結界を…」

「貴様を逃がすわけにはいかない。また闇を作りだす貴様を…！！」

紫苑

LP4000 手札3枚

フォレストマン（DEF2000）

伏せカード2枚

シグナムのターン

「私のターン！！」

引いたカードを見たシグナム
としか見えてなかった。

だがその眼は目の前の敵を倒すこ

シュテル・ザ・デストラクター

「手札から六武衆ザンジを攻撃表示で召喚！！」

フィールドに雷を纏った刀を持つ武士が現れた。

ザンジ / ATK 1800

「そしてこのモンスターは自分フィールド上に六武衆と名のついたモンスターがいる場合特殊召喚できる！！六武衆の師範を特殊召喚！！」

六武衆の師範

効果モンスター

星5 / 地属性 / 戦士族 / 攻2100 / 守 800

自分フィールド上に「六武衆」と名のついたモンスターが

表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが相手のカードの効果によって破壊された時、自分の墓地に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「六武衆の師範」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

フィールドに白髪の厳格な老人が現れた。

六武衆の師範 / ATK 2100

「バトル！！六武衆の師範でフォレストマンに攻撃！！」

「リバーズカード、ヒーローバリアを発動！！自分の場にE・HE ROがいる場合、相手の攻撃を一度だけ無効にする！！」

フォレストマンと師範の間に光の壁が現れた。その壁が師範の攻撃を防いだ。

「まだだ！！ザンジでフォレストマンに攻撃！！」

「なっ！？フォレストマンの方が守備力が上なのに…」

ザンジがフォレストマンに斬りかかるが、フォレストマンはそれを防いだ。

「クッ…！！」

シグナム / LP 4000

「肉を切らせて骨を断つ…その言葉があるのがこのザンジだ！！場にザンジ以外の六武衆がいる時、戦闘を行ったモンスターを破壊する！！」

「なっ…効果破壊！？」

六武衆 ザンジ

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守1300

自分フィールド上に「六武衆・ザンジ」以外の
「六武衆」と名のついたモンスターが存在する限り、
このカードが攻撃を行ったモンスターをダメージステップ終了時に
破壊する。
このカードが破壊される場合、代わりにこのカード以外の
「六武衆」と名のついたモンスターを破壊する事ができる。

突如としてフォレストマンの体から電撃が走り、それがもとでフォ
レストマンが発火した。

「うっ…ダメージ覚悟でフォレストマン破壊に来るとは…」
「フォレストマンは融合を手札に加える効果がある。そのデッキの
機動力を消す為には安い代償だ」

そう言つてシグナムはカードを伏せた。その時ツバキはシグナムの
言葉に違和感を覚えた。

どうしてシグナムはフォレストマンの効果を知っているのか。しか
も正確に。

シグナム

LP3800 手札3枚

ザンジ(ATK1800) 師範(ATK2100)

伏せカード1枚

紫苑のターン

「私のターン！！手札から魔法カード融合を発動！！手札のレディ・オブ・ファイアとオーシャンを融合！！現れて！E・HEROノヴァマスター！！」

ノヴァマスター / ATK 2600

フィールドに炎のヒーローが現れた。運よく融合を引けて召喚出来たのだが、紫苑はどうも六武衆というシリーズが気になっていた。

「（六武衆…6人の武人…それに何か意味があるのでしょうか…？）バトル！！ノヴァマスターで六武衆の師範に攻撃！！エクストリームフレーム！！」

ノヴァマスターの炎が一本の槍となって六武衆の師範へと飛んで行った。

「くう…！！」

シグナム / LP 3800 3300

師範は燃え尽きた。それと同時にノヴァマスターは一掃燃え上がった。

「ノヴァマスターの効果発動！！戦闘で相手モンスターを破壊した時、1枚ドロします！！メインフェイズ2！エアーマンを召喚！！」

エアーマン / ATK 1800

「エアーマン第二の効果発動！！デッキからフリーズ・レディを手札に加える！！ターン終了！！」

紫苑

LP 4000 手札 2枚

ノヴァマスター (ATK 2600) エアーマン (ATK 1800)
伏せカード 1枚

シグナムのターン

「私のターン！！手札から紫炎の狼煙を発動！デッキからレベル3以下の六武衆と名のついたモンスターを手札へ加える！！」

紫炎の狼煙

通常魔法

自分のデッキからレベル3以下の「六武衆」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「今手札に加えた六武衆 ヤイチを攻撃表示で召喚!!!」

ヤイチ / ATK 1300

フィールドに弓を構えた武将が現れた。それと同時に紫苑の伏せていたカードに矢が刺さった。

「ヤイチの効果発動!!!このカードの攻撃を放棄する代わりに相手の伏せカードを破壊することができる!!!」

六武衆 ヤイチ

効果モンスター

星3 / 水属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守 800

自分フィールド上に「六武衆・ヤイチ」以外の

「六武衆」と名のついたモンスターが存在する限り、

1ターンに1度だけセットされた魔法または罫カード1枚を破壊する事ができる。

この効果を使用したターンこのモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

このカードが破壊される場合、代わりにこのカード以外の

「六武衆」という名のついたモンスターを破壊する事ができる。

「だったら破壊される前に使います!!!チェインでリバーズカード、エレメンタル・チャージを発動!!!自分の場のE・HEROの数×1000ライフを回復します!!!」

エレメンタル・チャージ

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO」と名のついたモンスター1体につき、

自分は1000ライフポイント回復する。

紫苑 / LP 4000 6000

「くっ…かわされたか…バトル！！六武衆 ザンジでノヴァマスターに攻撃！！」

「！？攻撃表示モンスターに攻撃…！？」

先程のフォレストマンなら守備表示で、戦闘破壊されることはなかった。だが今は攻撃表示のノヴァマスターへ攻撃を仕掛けに来た。

「手札から紫炎の寄子の効果を発動する！！手札からこのカードを墓地に送り自分の場の六武衆は戦闘で破壊されない！！」

紫炎の寄子

チューナー（効果モンスター）

星1 / 地属性 / 戦士族 / 攻 300 / 守 700

自分フィールド上に存在する「六武衆」と名のついたモンスターが戦闘を行う場合、

そのダメージ計算時にこのカードを手札から墓地へ送って発動する。そのモンスターはこのターン戦闘では破壊されない。

シグナム / LP 3300 2500

「うっ…だが、ザンジの効果発動！！ノヴァマスターを破壊する！！」

「ノヴァマスターが…！！」

体をマヒしたノヴァマスターがに更にザンジがきりかかった。それによりノヴァマスターが爆散した。

「クッ…ですが、これで貴女の場のモンスターは全て…」

「まだ私のバトルフェイズは終わらない！！手札から速攻魔法、六武の書を発動！！場の六武衆と名のついたモンスターを2体リリースし、デッキから六武衆の主を召喚する！！場のザンジとヤイチをリリース！！現れる、大將軍紫炎！！」

六武の書

速攻魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する

「六武衆」と名のついたモンスター2体をリリースして発動する。

自分のデッキから「大將軍 紫炎」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

大將軍 紫炎

効果モンスター

星7 / 炎属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2400

自分フィールド上に「六武衆」と名のついたモンスターが

2体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手プレイヤーは1ターンに1度しか魔法・罠カードの発動ができない。

このカードが破壊される場合、代わりにこのカード以外の

「六武衆」という名のついたモンスターを破壊する事ができる。

紫炎 / ATK 2500

シグナムの場の2人の武将が消えると、モンスターゾーンの一角から炎が上がった。その中から赤い鎧に身を包んだ将軍が現れた。

「バトルフェイズ中に現れた紫炎にはまだ攻撃権が残っている!! 紫炎でエアーマンに攻撃!!」

「きゃあ!!」

紫苑 / LP 6000 5300

切りかかった紫炎から逃げるようにエアーマンが避けるが、すぐさま追撃をしてきた反しについて行けずエアーマンが破壊された。

シグナム

LP 2500 手札 2枚

紫炎（ATK2500）
伏せカード1枚

紫苑のターン

「私のターン！！クツ…フリーズ・レディを召喚！！ターン終了！
！」

フリーズ・レディ（ATK1200）

紫苑

LP5300 手札2枚

フリーズ・レディ（ATK1200）

伏せカード無し

シグナム

「私のターン！！六武衆 イロウを召喚！！」

紫炎の横に黒いコートの様な物を着て、細長い刀を持った武士が現れた。

イロウ/ATK1700

「バトル！！イロウでフリーズ・レディへ攻撃！！」

「フリーズ・レディの効果発動！！相手の攻撃宣言時、自分の場のモンスターの表示形式を変更する！！」

フリーズ・レディ / ATK 1200 DEF 1500

そして防御の体勢になったフリーズ・レディごとイロウは切り裂いた。

「さらにフリーズ・レディは破壊された時、魔法をデッキの一番上に乗せる!!」

「だが貴様の場はから空きだ!!紫炎の直接攻撃!!」

場にモンスターが居らず、そのまま真っ直ぐ紫炎は紫苑を切り伏せた。

「うぐっ…!!…ま、まだです…!!」

紫苑 / LP 5300 2800

まだ紫苑のライフは多く残っており、次に引くカードでまだ望みはあった。

「リバーズ罨発動!!六武衆推参!墓地の六武衆と名のついたモンスターを特殊召喚する!!現れる!六武衆の師範!!」

「っ…!!また…!!」

六武衆推参!

通常罨

自分の墓地に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される。

六武衆の師範 / ATK 2100

フィールドに白髪で髭の生やした老人が現れた。そして、紫炎の時と同じ『バトルフェイズ中の特殊召喚』なので

「六武衆の師範で直接攻撃!!」

「っああ!!」

紫苑 / LP 2800 700

師範の一閃に紫苑は片膝をついた。実際のダメージが蓄積していくこの状況で普通よりライフを多くした紫苑のダメージは通常より多くなっていた。

「エンドフェイズ、六武衆推参!で特殊召喚された師範は破壊されるが、代わりに他の六武衆を破壊することでその破壊を無効にすることができる。イロウを破壊」

シグナム

LP 2500 手札 2枚

紫炎 (ATK 2500) 六武衆の師範 (ATK 2100)
伏せカード無し

紫苑のターン

「私の…ターン…!!」

力の入らない指先に喝を入れてカードを引いた。先程フリーズ・レディの効果でデッキの一番上に置いたカードを引いた。

「私はホープ・オブ・フィフスを発動!!墓地のフォレストマン、レディ・オブ・ファイア、ノヴァマスター、オーシャン、エアーマンをデッキに戻してカードを2枚ドロロー!!」

引いたカードはミラクルフュージョンと新たなHEROだった。

「私は手札から魔法「無駄だ!!」っ!?!」

手札から魔法カードを発動しようと、セットしたが発動しなかった。

「紫炎が場にいる時、貴様は魔法・罫を1度しか使えない!!そして紫炎にも身代わりの効果を持っている!!」

「っ…!!カードを2枚伏せてモンスターをセット!!ターン終了!!」

紫苑

LP700 手札1枚

伏せモンスター
伏せカード2枚

シグナムのターン

「私のターン！！六武衆 カモンを召喚する！！」

カモン / ATK 1500

紅い鎧を着た武士が現れた。ちなみに刀や弓を持っておらず、何故か炎の玉を操っている。

「これで幕引きだ！！カモンでそいつに攻撃！！」

「っ……！！」

破壊されたのはアイスエッジだった。直接攻撃のできるこのモンスターでシグナムのライフを削れたが、その後の守りができない。

だが、この後もギャンブルでしかない。

「リバーズ罠、ヒーロー逆襲を発動！！場のE・HEROが破壊された時、手札のカードを相手は一枚選択しそのカードがE・HEROだった場合に特殊召喚し、相手のモンスターを破壊します！！」

ヒーロー逆襲

通常罠

自分フィールド上に存在する「E・HERO」と名のついたモンスターが

戦闘によって破壊された時に発動する事ができる。

自分の手札から相手はカード1枚をランダムに選択する。

それが「E・HERO」と名のついたモンスターカードだった場合、相手フィールド上のモンスター1体を破壊し、選択したカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

そう、紫苑は発動しようとした魔法を伏せたのは、このカードの発動範囲を狭めるためだ。

「貴様の手札は…1枚…!!」

「そう、手札は1枚!!からE・HEROネクロ・リターナーを特殊召喚!!」

フィールドに骨の様な仮面を被った巨体のHEROが現れた。

ネクロ・リターナー / DEF900

「そして紫炎を破壊します!!」

「紫炎の効果発動!!カモンを破壊し紫炎は守られる!!」

透明な衝撃が紫炎に向かっていったが、カモンがそれから紫炎を守った。

「師範でネクロ・リターナーを攻撃！！」

「クツ…ごめん…！！」

真つ二つにネクロ・リターナーがぶつた斬られた。それを見て紫苑は苦虫を噛んだような顔になっていた。

「最後だ！！紫炎で直接攻撃！！」

「紫苑！！」

場にモンスターがいない紫苑にツバキが叫んだ！！このままだと紫苑が負けてしまう。

だが、紫苑はまだ勝負をあきらめてなかった。

「墓地のネクロ・リターナーの効果発動！！戦闘で破壊された時、墓地のHEROを特殊召喚する！！」

E・HEROネクロ・リターナー

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 戦士族 / ATK1200 / DEF900

戦闘でこのカードが破壊された時墓地の「E・HEROネクロ・リターナー」以外の、

「E・HERO」と名のついたモンスターを特殊召喚することができる。

このカードは墓地から特殊召喚できない。

そう言った瞬間、紫苑の場の一角からスウーっとフリーズ・レディが現れた。

「クツ…小細工を…！！紫炎でフリーズ・レディに攻撃！！」

再びフリーズ・レディが破壊された。そして紫苑はデッキを見た。

「（１ターンに一度しか魔法が使えない…けど伏せカードを使えば…）デッキトップにカードを置く！！」

「（魔法を置いた…つまり、あのカードかあの伏せカードが逆転の手…なら）カードを伏せ、ターン終了！！」

シグナム

LP2500 手札1枚

紫炎 (ATK2500) 六武衆の師範 (ATK2100)

伏せカード1枚

紫苑のターン

「私のターン！！リバースカード発動！！ミラクルフュージョン！
！墓地に存在するアイスエッジとフリーズ・レディを融合！！」

「やはりアブソルトZeroか！！（だが私の伏せカードは六尺
瓊勾玉！！これでカード破壊を無効にすることができる！！）」

むさかにのまがたま
六尺瓊勾玉

カウンター罫

自分フィールド上に「六武衆」と名のついたモンスターが
表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

相手が発動した、

カードを破壊する効果モンスターの効果・魔法・罫カードの発動を
無効にし破壊する。

だが、シグナムの言葉を聞いて紫苑はにやりと笑った。

「残念ながら違います！！融合召喚！！ダイヤモンド・ダスト！！」

「なっ！？（私の知らないモンスター！？）」

ダイヤモンド・ダスト / ATK 2700

フィールドにフリーズ・レディよりも大人の氷の女性が現れた。
それを見てシグナムは目を見開いた。

「驚くのはまだ早いです！！ダイヤモンド・ダストは融合召喚に成功したターン、相手のモンスターの効果を無効にする！！」
「なに！？」

E・HEROダイヤモンド・ダスト

融合モンスター

星6 / 水属性 / 戦士族 / ATK 2700 / DEF 1500

「E・HEROアイスエッジ」+「E・HEROフリーズ・レディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功したターン、相手フィールド上のモンスターの効果を無効にする。

「これで私はまだ魔法を使える！！魔法カードデイモンション・ヒーローを発動！！除外されているHEROの数だけカードをドロウできる！！」

デイモンション・ヒーロー

通常魔法

自分フィールド上に「HERO」と名のついた

融合モンスターがいる場合のみ発動できる。

除外されている「E・HERO」と名のついたモンスターの数だけ
ドロォーできる。

発動ターンの終了時、この効果でドロォーした枚数手札を捨てる。

「除外されているHEROはアイスエッジとフリーズ・レディの2
体！！カードを2枚ドロォー！！（これは…！！）…やはり、私も『
世界の矛盾』なんですね」

「なにを…言っている？」

紫苑の言葉にシグナムはそう聞き返した。『世界の矛盾』の事はシ
グナムも知っていた。

ロストロギアのような存在。だが危険性はロストロギアより低いと。
紫苑は元々はロストロギアの一部だ。

「私は手札からE・HEROシンクロンを召喚！！」

シンクロン/ATKO

「シンクロン…？だが、そいつはチューナーじゃないはずだ！！そ
れに攻撃力0とは…馬鹿にしているのか！！」

フィールドに小さな剣を持った勇者が現れた。そしてシグナムの言
う通りだった。シンクロンは効果モンスターで、チューナーモンス

ターではない。

「ふふふ…この子をあまりなめない方がいいですね。小さな力は確かに弱いですが、それはやがて大きな力へと進化します！」
「なに…?」

「レベル6のE・HEROダイヤモンド・ダストにレベル2のE・HEROシンクロンをチューニング！」
「っ!？」

効果モンスターであるシンクロンからシンクロ召喚時に出る緑のリングが現れた。

「闇を切り裂く光の心…その全てを具現化せよ!!シンクロ召喚！」

6 + 1 = 7

「光と共に舞え!!ファントム・ブルース・ドラゴン!!」

ファントム・ブルース・ドラゴン / ATK2800

フィールドに淡い青い龍が現れた。その色は紫苑のディスクの色とお揃いだった。

「馬鹿な…なぜシンクロ召喚を行える…！？それになんだその龍は！？」

「E・HEROシンクロンはフィールド上に融合モンスターが存在する時チューナーとして扱います！！」

E・HEROシンクロン

効果モンスター

星1/光属性/戦士族/ATK0/DEF0

自分フィールド上に融合モンスターが存在する時このモンスターはチューナーとして扱う。

このカードがシンクロ召喚の素材となる時、他のカードは「E・HERO」と名のついたモンスターでなければいけない。

「そして貴女の最後の質問…この龍は『世界の矛盾』と共にいる龍…簡単に言いますと

『世界の矛盾の証』です」

「な、なにを言っている…貴様は闇の書シユテル・ザ・ディストラクターの闇…世界の矛盾は…」
「あ…」

シグナムの言葉に紫苑は一つ大きなため息をついた。そしてちらりと紫苑はツバキを見た。

「私は…闇の書の一部でも、シュテル・ザ・デストロクター星光の殲滅者でもないです。私は…

姫野紫苑…姫野椿の妹です!!

ファントム・ブルース・ドラゴンの効果発動!!手札のカードを一枚墓地に送ることで、墓地から送ったカードと同じ種類のカードを回収する!!墓地に送ったのは死者蘇生!!よって墓地から魔法力カードを手札に加えます!!」

ファントム・ブルース・ドラゴン

シンクロモンスター

星7 / 水属性 / ドラゴン族 / ATK 2800 / DEF 1600

チューナーモンスター + チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンの一度手札のカードを1枚墓地に送る。

その後、墓地に送ったカードと同じ種類（モンスター・魔法・罫）のカードを

1枚手札に加える。

このカードが相手のモンスターを戦闘で破壊した時、相手に800ポイントのダメージを与える。

「そして手札に加えたミラクルフュージョンの効果発動！！墓地のネクロ・リターナーとシンクロンを除外！！現れて…E・HERO シャイニング！！」

フィールドに光のHEROが現れた。これまでに除外されているのはダイヤモンド・出すとを出す為に除外したアイスエッジとフリーズ・レディ、そしてネクロ・リターナーとシンクロンの4体

シャイニング / ATK 2600 3800

「バトル！！シャイニングで紫炎に攻撃！！オプティカル・ストーム！！」

「くうっ！！」

強力な光に包まれた紫炎は焼けつきた。そしてその余波がシグナムを襲った。

シグナム / LP 2500 1200

「これで最後です!! フォントム・ブルース・ドラゴンで六武衆の師範に攻撃!! イリユージョン・ダスト!!」

フォントム・ブルー・ドラゴンの周囲から虹色の霧が発生し、それが師範を包んだ。

そしてその霧が晴れると師範は消えていた。

「っ……!! だ、だが!! 私のライフはまだ!!」

「フォントム・ブルース・ドラゴンの効果発動、戦闘で相手モンスターを破壊した時相手に800ポイントのダメージを与える!! 霧に迷い込め、フォントムガスト!!」

「な…あ、がああああ!!!!」

シグナム / LP 1200 5000

シグナムのライフが0になった瞬間、シグナムはばたきと倒れてしまった。それと同時に紫苑も膝をついた。

「紫苑、大丈夫?」

「だ、大丈夫です…すこし…疲れてしまいました…」

そういつが紫苑の顔色が悪かった。どうも体は本調子じゃないらしく、体力も完全に戻っているわけではなかったみたいだ。

「それよりも…シグナムを拘束…しなくては…!!」

「拘束されるのは君の方だ」

「なっ!?!」

「しまった!!」

そこに入った第三者の声と共に2人の体が光の輪によって拘束されていた。

そこに降り立ったのは足に包帯を巻いた少年

「ようやく捕まえたぞ、それに闇の書の残骸が残っていたとはな…!!」

クロノだった。しかもクロノは紫苑を睨んでいた。

「ロストロギア所持、及び公務執行妨害で姫野椿、君を捕縛する。そしてロストロギア闇の書の欠片、シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者、君を逮捕する」

「うっ…（どうしよう…ディスクまで手が届かない…）」

「拘束ですか…管理局は無関係な人を巻き込みますね」

ツバキの焦りもつゆ知らず、紫苑はクロノをそう挑発した。そう言われたクロノは怒りの目をしてシオンを睨んだ。

「貴様！！管理局を愚弄するな！！」

「愚弄？私は事実を述べたまでですよ。無関係の9歳の子を言葉巧みに管理局の駒とした事を言っているだけです？」

「黙れ！！」

等々クロノの堪忍袋の緒が切れたのか、紫苑の顔を思いつきり殴っていた。

いた、殴ろうとしていた。

「そこまでしてもらおうか」

「っ！？」

クロノの手を止めたのは

「丸藤さん!？」

丸藤亮 通称カイザーだった。

亮は紫苑に向けられたクロノの腕を掴んだまま足払いでクロノを倒した。

「何か騒がしいと思って来てみたら…どういった状況だ？」

「え、あ、その…」

ツバキは説明に困っていた。十代達なら以前説明したのだが、その中に翔もいたのが問題なのだ。もしかすると亮は翔が関わっている事を酷く咎めるかもしれない。

「…話したくないのならまあいい…こいつ等は校長に話して特待生寮にでも閉じこめておこう」

「っ!？」

特待生寮が何なのか分からないが、確実に身動きが取れ無く事を悟ったクロノは必死に思考を張り巡らせていた。

「紫電一閃!!」

「!!?!」

そのクロノの思考を遮ったのはシグナムの声だった。3人の視界は砂煙にまぎれてしまった。

「クツ…一体なんだ…!？」

「あの技…シグナムですね」

紫苑の言葉でツバキはシグナムの倒れていたところを見た。そこにシグナムはおらず、クロノも消えていた。

「（魔力反応が消えている…）逃げられましたね」

「…そうか。事情を聞きたいところだが…なにかに巻き込まれてるのだろうか？」

「…そうです」

流石のカイザーは2人を見てそう言った。亮自身にも何か確信が持てる何かがあったのだろう。

「まあいい…今度全て話してもらおう…今は来週の対抗デュエルの事を考えておけ」

亮はそう言い残すとその場を去った。

「…助けられましたね、彼に」

「そうだね…」

数日後

「姫野紫苑です」

「羽黒剣都」

全校生徒の前で紫苑と剣都が転校生の挨拶していた。だが紫苑は無

表情で、剣都はダルそうにしていた。しかも剣都はAW社の総帥と
いうのは伏せているが、見た目が見た目だけに男子生徒達の印象が
悪かった。

「2人ともツバキちゃんの兄弟みたいなものだニヤ。それでは、席
は紫苑君は十代君の横、剣賭君はユウ君の横だニヤ」

大徳寺先生が席の場所を言うと2人は無言でそこへ座った。
その後、シヤマルとシグナムが退職という形で学園を去った事を伝
えた。

その後の休み時間

「紫苑さん！！ボクと付き合って「断ります」あう…」

紫苑は様々な男子生徒から告白されたが、紫苑はそれを全て断った。
端から見れば美少女とも言える容姿の紫苑だから無理もないが、恋
愛に興味ない男子生徒以外の生徒はほぼ壊滅した。

「なあ、紫苑。お前E・HEROデツキなんだよな？」

「そうです。お姉ちゃんから聞きましたが十代は私と違うE・HE
ROなんですよね？」

紫苑の言葉に十代はサムアップしながら「ああ！」と答える。
そして無理やり十代が今度デュエルの約束を取り付けた。

一方剣都は

「羽黒君！！よろしくね！！」

「ねえねえ、好きな食べ物何！？」

「羽黒君ツバキちゃんの家族なの！？」

「あ、ああ…」

女子の質問攻めに遭っていた。男子生徒がビビる容姿でも女子生徒には人気だった。だがいくらなんでも多すぎだった。

「あゝもう！！質問は一人ずつ！！剣都が困っているじゃない！！」

「あ、ジュンコさん…」

ジュンコの言葉に女子生徒はしょんぼりしてしまった。
すると剣都はジュンコを見た。

「え〜と…あなたは？」

「私は枕田ジュンコよ、ジュンコでいいわ」

こうして早速アカデミアに馴染んでいった2人だった

ノース校対抗戦：当日

ホプロムスを見てリンディは驚いていた。ただの人間であるはずのシゲルが召喚術を行ったのだ

「な…なんなの…それは…」

「話すことなんてない。さっさと消え失せろ！！来い、ダーク・ガブリアス・ドラグーン！！」

シゲルは黒いディスクにあるシンクロモンスターをセットした。それと同時に闇に染まった龍が現れた。

「ダーク・ガブリアス・ドラグーン！！デリート・フィールド！！」

「っ！！撤退！！」

ダーク・ガブリアスの攻撃が届く前に局員は一斉に撤退した。それを見たシゲルは一つため息をついてディスクを収めた。

「…行くか」

オリジナルカード

E・HEROネクロ・リターナー

E・HEROダイヤモンド・ダスト

デイメンション・ヒーロー

ファントム・ブルース・ドラゴン

紫苑「そう言えばどうしてシグナムは私のカードを知っていたんですか？」

ん〜…まあ、いつか出るはずだと思う設定でやるね。

次回予告：sideシゲル

リンディ達が逃げて行ったあと、俺は急いでリングに向かっていた。だがその最中、レッド寮の神谷が倒れていた。神谷の話を聞いた俺は速攻で代表選を終わらせて 地獄を見せることにした。

………まあ、処刑モードのユウが怖いから理由は言わないけどな。

それにしても…どうもノース代表のあいつが…

一方紫苑は、あいつと会っていた

次回第三十二話怒りと処刑

最強カードは『デスカイザー・ドラゴン』

感想待ってます!!

第三十三話 怒りと処刑（前書き）

今回はものすごくゆったりしています。

まじめに書くつもりでしたがタッグは使えるので軽く…そして、
最後までさかの…

第三十三話 怒りと処刑

リンディ達がいなくなったのを見たシゲルは急いでデュエルリングへ向かっていた。

「やばいやばい、結構ギリギリ…なんだあれ？」

シゲルが校舎に入ろうとしたら物陰に何かがあるのが見えた。どうしても気になったシゲルはそこへ

「っ！？おい、大丈夫か！！」

「うっ……シゲル…君…」

そこにいたのはガタイの良いレッド寮の生徒 神谷龍という生徒だ。そして神谷のデッキだと思われるカードが辺りに散らばっていた。

「おい、なにがあった」

「うっ……知らない人が…ボクのカードを……それで…」

「おいシゲル、どうし…え？」

そこに神谷のルームメイトが来た。それを見たシゲルは神谷に優し

く聞いた。

「…そいつの特徴は…？すぐにいなくなっちゃならないが、速攻で終わらせて探し出して…地獄を見せてやる」

「体が大きくて…おかつぱ頭だった…お願い…シゲル君…カードを…取り戻…し…」

そこまで言っつて神谷は気を失った。その目尻には涙が流れていた。

デュエルリング

「あ、シゲル…遅いよ…!!」

「悪い悪い、で、相手は？」

神谷をルームメイトに任せたシゲルはリング横でユウと合流した。ちなみに第一試合はタッグ、第二は女子、第三は男子の戦いだ。

「向こうサイドにいるみたいだよ」

「…（なんか周囲にカメラが多い様な…まあいいか）」

『あゝマイクテストス、デーハ！！これよりデュエルアカデミア対抗試合を開始するノーネ！！第一試合！！アカデミア校代表獣斬繁

アツインド
& 聖^{アツ}牙^{インド}タココンビー！！対するは！ノー^{アツ}ス校代表久本（ひさもと）卓^{アツ}郎
と三^{アツ}上^{インド}信也^{アツ}タツグー！！^{アツ}』

リングに上がった2人の前には 一言で言つとキモイ男と平凡な男の2人組がいた。片方がおかつぱ太っており、で、片方が七分^{アツ}分けのやせ形2人組。

「ぐへへへ……」

「……はあ……」

「……」

正直に言つとブルーの態度のでかい雑魚の方が何倍もまじだった。三上という生徒はまだ真面目そうだったが、明らか久森は気持ち悪かった。

そんな2人を無視してクロノスがルール説明をした。

『簡単にルールを紹介するノーネー！！ライフポイントは4000！
！またモンスターゾーン及び魔法トラップゾーンは一人分しかないノーネー！！タツグは順番にターンを迎え、また相方のカードを使つても良いノーネー！！』

簡単に言つとライフが4000のタツグフォー^{アツ}スルールです。ちなみになぜ8000じゃないのかというと、後でわかります。

『そして先行後攻は平等にくじを引く事にしたノーネ!!』

そう言ったクロノスの前には穴のあいた箱と4つのボールがあった。

『赤色はアカデミア、青色はノース校生徒から始まるノーネ!!』

そう言ってクロノスはくじをゴソゴソと探っていた。そして取り出したのは

『青色なノーネ!! よって先行はノース校のシニョール久本より始まるノーネ!!』

「後攻か：まあ、こっちの先行はお前だったからちようどいいな」

「そうだね。それにデッキを探るのもちようどいいしね」

「ユウウ!! シゲル!!」

2人で簡単な作戦会議をしていると遠くの方から2人を呼ぶ声が聞こえた。

そっちを見るとツバキが紫苑、剣都と共に一番見える席に座って手を振っていた。

それにユウは手を振り返してシゲルはそっと手を上げた。

久森の言葉にシゲルとウリイ、神楽、イナが同時に同じことを思った。

ツバキをそれ（モノ扱い）するとどうなるのか、シゲルは2度ほど見たことがあった。

その時の相手は

「お、おい！！すぐに謝れ！！」

「おいおいビビってるのか？…？？」

シゲルの言葉に三上がそう言った。が、その笑顔が一瞬にして凍りついた。

一瞬にしてユウの瘴気がリングを包み込んだのだ。

『ねえ、シゲル…』

「……もう手遅れだ……」

イナの言葉にシゲルがそう言った。何事か分からない久森は怯える手つきでカードを引いた。

「ぼ、ボクちゃんのターン！！手札抹殺を発動！！手札を全て捨てる！！そして墓地の馬頭鬼の効果発動！！墓地に存在するこのカードを除外することで墓地のアンデットを特殊召喚する！」

馬頭鬼

効果モンスター（制限カード）

星4 / 地属性 / アンデット族 / 攻1700 / 守 800

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、

自分の墓地からアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。

「墓地のゾンビキャリアを特殊召喚!!」

ゾンビキャリア / ATK400

フィールドに丸っこい体のゾンビが現れた。

だが、驚くべきなのはそのステータスなのだ。

「チューナー…（そういえば3日前だったかな…シンクロが出回るの）」

ユウは怒る頭をクールダウンしながらそう考えていた。が、そんなユウも焦る事態が　そして　この世の混沌が

「手札からゾンビ・マスターを召喚!!効果発動!手札のカードを一枚墓地に送って墓地のアンデットを特殊召喚する!!」

ゾンビ・マスター

効果モンスター

星4 / 闇属性 / アンデット族 / 攻1800 / 守 0

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

手札のモンスターカード1枚を墓地に送る事で、
自分または相手の墓地に存在するレベル4以下のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「効果でゴブリンゾンビを特殊召喚!!」

ゴブリンゾンビ / ATK 1100

「レベル4のゴブリンゾンビにレベル2のゾンビキャリアをチューニング!!」

墮落せし冥界の主よ、生ける屍となりて再び王座へ還りざけ!!」

4 + 2 = 6

「シンクロ召喚!!蘇りし魔王ハ・デス!!」

フィールドにアンデット化したハ・デスが現れた。

蘇りし魔王ハ・デス

シンクロ・効果モンスター

星6 / 闇属性 / アンデット族 / 攻2450 / 守 0

「ゾンビキャリア」 + チューナー以外のアンデット族モンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上に存在するアンデット族モンスターが

戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

ハ・デス/ATK2450

「シンクロモンスター…!!」

「ぐ、ぐふふふ…!!どうだ驚いたか!!このカードはさつき手に入れたばかりだ!!」

『さつき』という言葉に2人は引っかけた。本日購買は開いておらず、ノースから丸一日かかってアカデミアに来る。

「さつきってどういうこと?」

「ぐふふふ…アカデミアのグズ生徒から頂いたんだよ!!」

それを聞いてシゲルは神谷の言葉を思い出した

『体が大きくておかつば頭』

「そうか…てめえが神谷からカードを盗んだのか…!!」

「ぐふ?人聞きの悪いな、ボクが持っていた方がこのカードの「ふざけてんじゃねえぞグズ野郎!!」「ぐひ!?!」

久森の言葉にブチ切れたシゲルが声を荒げた。それに会場がざわついた。
ボーカーフェイス
常に冷静のシゲルが此処までキレたのだ。

「テメエが使ってるのは神谷のカードだ!!それを奪った神谷はな、泣いてたんだよ!!それででかい顔してるテメエが許せねえ!!」

「ぐ、ぐふ!!そ、そんな事はボクから勝つてからいいなよ!!ゴブリンゾンビは墓地に行った時、守備力1200以下のアンデットを手札に加える!!2体目のゴブリンゾンビを手札に加える!!」

ゴブリンゾンビ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / アンデット族 / 攻1100 / 守1050

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手はデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

自分のデッキから守備力1200以下の

アンデット族モンスター1体を手札に加える。

「フィールド魔法アンデットワールド発動!!お互いのフィールド、墓地のモンスターは全てアンデット族となる!!」

アンデットワールド

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族
として扱う。

また、このカードがフィールド上に存在する限り
アンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚をする事はできな
い。

辺りが禍々しい場所へ変わった。だが全員思っている事がある。

『『『』』』』 (なぜかフィールド魔法よりこの男達シゲルとユウが怖い!!!) 『『『』』』

ちなみにユウもシゲルの言葉を聞いて状況判断して再びヒートアッ
プしていた。

どうなっているのかというと 2人の精霊達は逃げ場を失った。

「そして墓地のゾンビキャリアの効果発動!!手札のカードをデッキ
の一番上に置いて特殊召喚できる!!(これで何度もこいつを召喚
すれば…)」

フィールドに再び丸っこいゾンビが現れた。

「レベル4ゾンビマスターにレベル2のゾンビキャリアをチューニ
ング!!」

墮落せし冥界の龍よ、死者の魂を糧とし再び現れる!!」

「シンクロ召喚！！甦れ、デスカイザー・ドラゴン！！」

フィールドに体の腐った龍が現れた。

デスカイザー・ドラゴン / ATK 2400

「さらにデスカイザー・ドラゴンは特殊召喚成功時相手の墓地のアンデットを自分の場に特殊召喚する！！」

「は？2人の墓地にアンデットなんかいるか？」

観客席にいた十代がそう呟いた。するとそのすぐ後ろにいた剣都がため息をつきながら説明した。

「あの久森ってやつは最初に手札抹殺で全員の手札を捨てた。そしてあのフィールド魔法でフィールドと墓地のモンスターはアンデット族として扱うことになってる」

「「あー！！」」

剣都の説明に十代と翔が思い出したように言った。てか、翔も気づ

かなかったのかよ。

デスカイザー・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星6 / 炎属性 / アンデット族 / 攻2400 / 守1500

「ゾンビキャリア」+チューナー以外のアンデット族モンスター1体以上

このカードが特殊召喚に成功した時、

相手の墓地に存在するアンデット族モンスター1体を選択し、

攻撃表示で自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時そのモンスターを破壊する。

「ぐふふふふふふ…そうだな、ボクちゃんは…（ス、スピリットモンスター！？特殊召喚できない……うげ、こっちは墓地にモンスターが2体だけ…仕方ない…）じゃあお前の墓地のスパルディクスを選択する！！…あれ？」

「無駄だ」

高々に久森が宣言するが、なにも起こらなかった。周囲からは「故障か？」とか「バグか？」とか声が聞こえる。すると急いでクロノスがマイクを取った。

「シ、シニョールシゲル！！どういうことなのか説明するノーネ！！」

「残念だがスパルディクスはホプロムスの効果でしか特殊召喚でき

ない。だから死者蘇生やリビングデットでも特殊召喚ができない」

「ク、クソ！！そのモンスターを選ぶ！！」

久森の場にガラスで出来た魚が現れた。てかこのモンスターしか召喚できないモンスターがいるなんて2人手札はどうなっていたんだ？

スピリット・フィッシュ/DEF1000

「ボクは再び手札を…あれ！？ゾンビキャリアが無い！！」

墓地のゾンビキャリアを探す久森をシゲルは哀れむような眼で見ている。

「馬鹿が、ゾンビキャリアは効果を発動すると除外されるんだよ。墓地をいくら探そうがそこには居ないぞ」

「ぐ、ぐふ！？な、なんだその効果！？」

ゾンビキャリア

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星2/闇属性/アンデット族/攻 400/守 200

手札を1枚デッキの一番上に戻して発動する。

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたこのカードは、

フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「ぐぐぐぐ…カードを2枚伏せてターン終了！！（だけど僕ちんの場合は万全…伏せカードはミラーフォース、ボクちんに負けは無い！！！！）」

久森&三上

LP4000

デスカイザー・ドラゴン（ATK2400） 蘇りし魔王八・デス（ATK2450） スピリット・フィッシュ（DEF1000）
伏せカード2枚

ユウのターン

「オレのターン！！！」

ユウの言葉を聞いた観客席の何人かは『あ、終わった』と思った。
処刑モードのユウ 想像するだけで恐ろしい。

「死皇帝の陵墓を発動！！！」

フィールド魔法が張り変わった事により、不気味なエリアから巨大な墓へと変わった。

「ライフを1000払い、召喚！！砂塵の悪霊！！！」

ユウ&シゲル / LP3000

砂塵の悪霊 / ATK2200

フィールドに体の赤い悪霊が現れた。しかし、それと同時に強力な砂嵐が発生した。

「砂塵の悪霊の効果発動！！召喚成功時砂塵の悪霊以外のモンスターを全て破壊する！！」

「ぐ、ぐふ！？なんだそのデタラメ効果は！？」

砂塵の悪霊

スピリットモンスター

星6 / 地属性 / アンデット族 / 攻2200 / 守1800

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚・リバースした時、

フィールド上のこのカード以外の表側表示モンスターを全て破壊する。

フィールドの砂嵐が晴れると砂塵の悪霊以外のモンスターはいなくなっていた。

するとユウは墓地のカードを除外した。

「墓地の満月巫女を除外してスピリット・フィッシュを特殊召喚！

「！」
「ぐふ！？なんだと！？」

フィールドに再びガラスの魚が現れた。そしてユウのフェイバリットが

「レベル6の砂塵の悪霊にレベル2のスピリット・フィッシュをチユーンング！！」

大いなる魂よ！砕かれし魂と共に光の風を纏いその身を現わせ！！」

6 + 2 = 8

「シンクロ召喚！！飛び上がれ、スピット・シルバードラゴン！！」

フィールドに銀の龍が現れた。その眼には怒りがこもっており、ノース代表を睨んでいた。

「バトル！！スピット・シルバー・ドラゴンで直接攻撃！！」

「ぐひ！！引つかかったな！！リバーズ畏、聖なるバリアm「手札のスピリット・マターを墓地に送って効果発動！！」最後まで言わせる！！」

久森が何か言っているが、ユウはそれを無視して続けた。

「手札のチューナーを墓地に送ることでミラーフォースの効果は無

効にする！！」

「ぐ、ぐひひひひひひひひひひ！！」

ノース代表 / LP4000 1500

「カードを2枚伏せターン終了！」

ユウ&シゲル

LP3000

スピット・シルバー・ドラゴン

伏せカード2枚

三上のターン

「ワイのターン！！」

もうすでにノースのライフは少なかった。だが三上の戦術なら何とかなる可能性があった。

「手札からライトニングボルテクスを発動！！手札を一枚捨てて相手のモンスターを「手札のスピリット・ガードナーを墓地へ」くっ！！死者への手向けを「手札のダーク・リゾネーターを墓地へ！！」っ！！（しもた…相方の手札も使えるの忘れとった…）」

ルールとしてはフィールドと墓地共有だけで、手札は其々だから問題ない。そして三上の手札のモンスターはいなかった。

「（じゃが、まだワイにチャンスはある！！）死者蘇生を発動！！墓地のデスカイザー・ドラゴンを蘇生！！そして効果により相手の墓地のダーク・リゾネーターを特殊召喚！！」

デスカイザー・ドラゴン / DEF 1500

ダークリゾネーター / DEF 300

「カードを伏せてターン終了や！！（伏せカードはリビングデット…これで次のターンは何とか…）」

三上&久森

LP 1500

デスカイザー・ドラゴン / DEF 1500 ダークリゾネーター /

DEF 300

伏せカード 2枚

シゲルのターン

「俺のターン「伏せカードリビングデットの呼び声を発動！！効果により墓地のプロミネンス・ドラゴンを特殊召喚！！」…」

三上の墓地から炎の龍が現れた。だが今のタイミングで召喚する事は普通ない。だとしたら、何かあるのだろう。

「更に速攻魔法地獄の暴走召喚を発動！！ワイは更にデッキより2体のプロミネンス・ドラゴンを特殊召喚する！！」

地獄の暴走召喚

速攻魔法

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に

攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から

全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、

そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

プロミネンス・ドラゴン/ATK1500

プロミネンス・ドラゴン/ATK1500

ロックバーンを一気に決めるのが三上の目的だった。それと同時にノース生徒から「終わったな」とか、「公開処刑じゃねーの？」とか聞こえてきたが、シゲルはそれを聞き流した。

「手札から剣闘獣ラクエルを召喚！！」

シゲルの場に炎を纏った獣人が現れた。

ラクエル / ATK 1800

「更にスレイブタイガーの効果発動！！場に剣闘獣がいる場合このカードを特殊召喚できる！！そしてタイガーの効果発動！！このカードをリリースし、場の剣闘獣をデッキに戻すことでデッキの剣闘獣を特殊召喚する！！」

ラクエルはスレイブタイガーに跨ると何処かへ消えさった。
そしてシゲルがデッキから特殊召喚したのは

「剣闘獣リーダーを特殊召喚！！効果発動！！召喚成功時手札の「スレイブ」と名のついたモンスター特殊召喚する！！」

剣闘獣リーダー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣戦士族 / ATK 1100 / DEF 1200

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、手札から「スレイブ」と名のついたモンスターを特殊召喚してもよい。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、

デッキから「剣闘獣リーダー」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

フィールドに現れた年寄りの犬の獣人　　いや、それでもその眼光は相手を倒す為に輝いていた。

その獣人が持っていた竹刀を地面に叩きつけると、近くに緑の鳥が現れた。

「手札よりスレイブ・バードを特殊召喚!!」

スレイブ・バード / ATK 200

「そしてスレイブ・バードの効果発動!!フィールド上に剣闘獣がいる時、このカードと俺のライフ1000を代償にベストロウリイを特殊召喚する!!(来いよお…ウリイイ!!!)」

『は、はいiiiiiiii!!』

スレイブ・バード

効果モンスター

星2 / 風属性 / 鳥獣族 / ATK 200 / DEF 350

自分フィールド上に「剣闘獣」と名の付くモンスターが表側表示で存在する時、ライフを1000払い、このカードをリリースして発動する。

デッキまたは墓地から「剣闘獣ベストロウリイ」を特殊召喚する。

この特殊召喚は「剣闘獣」と名の付いたモンスターの効果で特殊召喚したとして扱う。

この効果を発動したターンの同じフェイズ中に「剣闘獣ガイザレス」

を特殊召喚した場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外
することで、フィールド上のカードを1枚破壊することが出来る。

シゲル&ユウ / LP 3000 2000

ベストロウリイ / ATK 1500

シゲルの言葉にウリイが珍しく敬語で急いで現れた。それほどまで
にシゲルの雰囲気怖かった。

「そしてベストロウリイの効果発動!!魔法・罠カードを一枚破壊
する!!まずはそのリビングデットの呼び声を破壊!!」

「くっ…!!(これぐらい許容範囲じゃ!!)」

三上はリビングデットが破壊されるのくらい予想済みだった だ
が、まだずっとシゲルのターンだった。

「場のベストロウリイとリーダーをデッキに戻し、エクストラデッ
キからガイザレスを特殊召喚!!(全力だああ!!)」
『り、了解いいいいいい!!!!!!』

ガイザレス / ATK 2400

フィールドから消えたベストロウリイは急いで鎧を着て、ガイザレ
スとしてフィールドに戻ってきた。

「ガイザレスの効果！！特殊召喚成功時にフィールド上のカードを2枚！！更にスレイブ・バードの効果で1枚　計3枚のカードを破壊する！！2体のプロミネンス・ドラゴンとダーク・リゾネーターを破壊！！」

「なあ！？（ロックが一気に破られた！？）」

一気にノース代表のフィールドがデスカイザーのみとなってしまうた。

しかしそれでもシゲルは止まらない！！

「そして墓地に存在するスピリット・マターはレベル6以上のモンスターの特召召喚成功時、このカード自身を特殊召喚できる！！レベル6のガイザレスに、レベル1のスピリット・マターをチューニング！！

獣の命を喰らいし者よ、今ここに全ての魂を喰らい尽くせ！！」

6 + 1 = 7

「シンクロ召喚！！奏でろ…ソウル・ブラック・ドラゴン！！」

フィールドに漆黒の体を持つ龍が現れた。その眼は真っ直ぐデスカイザーを見ており、デスカイザーは助けを求める様にソウルを見ていた。

「（…精霊か？まあ、どちらにしる早く助けた方がいいな）バトルフェイズ！！スピット・シルバー・ドラゴンでデスカイザー・ドラ

すると三上は自分のセメタリーにいたデスカイザー・ドラゴンと、
負けたことが信じられなくて呆けている久森からカード数枚を抜き
取った。

そしてリングを降りたユウとシゲルの元へ向かった。

もしも8000なら大差で…第二、第三試合をする必要が無くなる
からだった。

廊下

「たく…あんな雑魚に神谷がぼこられるなんて胸糞悪い」

「…ユウ、戻ってこいお前」

いつの間にかユウの口調が剣都の様になっていた。

それにシゲルが少しビビリながらそう言うのと背後から誰かが来る気配がした。

「ん？お前は…確か三上だっけか？」

「はあ…はあ…あ、ああ…さっきのデュエルの最中…ワイのこの久森がアカデミアの生徒のカードを盗んだって…すまんかった」

そう言うて三上は数枚のカードを取り出した。どうやら久森が奪った神谷のカードらしい。

「…ちよつと待ってる」

そう言うてシゲルは神谷のルームメイトにメールをした。すぐに返事が返ってきており、内容は奪われたカードとその枚数だった。

「……確かに、全部あるな」

「あの馬鹿と何年もつるんでいたからな…あいつのデッキとは違うカードぐらいわかるわ。けど…まさかここまでするとは思わなかった…」

三上はそう言つて静かに怒りの色を浮かべた。どうやら三上のプライド　デュリストとしての誇りが久森を許せないようだった。

「…お前、あの馬鹿とつるむの止めて一人で頑張ってみるよ。お前なら結構いいとこまで行けるかもな」

「……ありがと、それとすまなかつた」

観客席

「…シゲルがあそこまで怒るのか…」

「彼なりに我慢できない何かがあつたのでしょ」

十代の言葉に明日香がそう言った。志度との勝負の時は怒るといつても自らを奮い立たせるように声を張り上げた。だが今は

「誰か〜!!救急車!!」

「馬鹿!!此処は離島だ!!来るわけ無いだろ!!」

「医者〜!!」

「シャマル先生はどこに行つたんだ!!」

「先日シグナム教諭と共に止めたノーネ!!」

先生等が安心して廃人の様になつた久森を治療しようとドタバタし

ていた。
だが鮎川先生は神谷の治療の為保健室から離れられず、カオスとなっていた。

15分後

『お待たせしたノーネ！！これより第二試合、姫野椿VS高野（こちよ）うや）千代の勝負を始めるノーネ！！』

一先ず放心した久森はリング横に捨てられており、だがそれを全員無視した。
突然暴れて、で三上に沈められたからだ。

『では、デュエル開始！！』

クロノスが開始を宣言したと同時に紫苑が席を立った。それに明日香が不思議そうな顔をしていた。

「少し喉が渴いたので飲み物買ってきます」

そう言って紫苑はデュエルリングを後にした。すると十代も立ち上がった。

「悪いな、ちょっとトイレ行ってくる」

「も〜！さっきの休憩中に言っとけばよかったじゃないっすか〜！
」

十代は翔の言葉に苦笑いをしながらリングを後にする。
それと入れ違いにユウとシゲルが戻ってきた。ちなみに遅れた理由
が神谷にカードを私に行っていたからだ。

「お疲れ〜っす！」

「おう」

「あれ？十代と紫苑は？」

「2人は、飲みもん買いにとトイレなんだな」

ユウの言葉に隼人がそう返した時、ユウは嫌な予感がした。

通路

「はあ〜スッキリしたぜ」

トイレを終えた十代は観客席へと戻ろうとしていた。

すると、通路内に見知らぬ少女が通っていた。

「ん？誰だ？アカデミアにあんな奴……！！！」

その少女　初めは初対面だと思っていた。だが長い間会っていなかったため忘れていただけだった。

「（高町…なのは…！？）」

時空管理局の白き悪魔と言われた少女だった。だが先月人知れずこの学園を去ったはずの彼女が此処にいたのだ。

「（一体どうして…後を付けてみるか）」

明らかに観戦や応援ではない雰囲気を纏っていたなのはの後を十代は付けて行った。

アースラ

「なのは…！！！」

「なのはちゃん！！」

フェイトとはやてはアースラ内にいるはずの少女を探していた。だがどこを探しても見つからないのだ。

船室・ブリッジ・訓練室　もう探していない場所などほぼ無い。

そもそも3人は自室謹慎を言い渡されていた所だ。剣都がユウと勝負をした日、剣賭と山本に存在を知られ、そのことでもう少し慎重に行動ということので3人の部屋とブリッジ、訓練室以外は行く事を禁止されていた。

そんな時、なのはが見当たらないのを2人は知った。

「フェイトちゃん、なのはちゃん…どうしたんやろ…」

「何処にもいないってことは…まさか…」

フェイトは先日クロノとシグナムと対峙した少女の事を思い出していた。

『姫野紫苑』

少女はそう名乗っていた。だが、彼女は

「なのは…アカデミアに向かったんじゃ…」

「…その可能性が一番高いんや…どう考えても…」

あの日少女となのはの交わした約束。それでなのはが紫苑の元へ向かったかもしれない。

「…クロノに掛け合ってみよう。もしかしたら…」

「そうやな」

エントランス

アカデミアのエントランスは広く、3組のデュエルが行えても十分お釣りがくるほどの大きさを誇っている。

「（エントランス…？…？…？…？…？…？…？…？）
客席の方だろ…？」

「……………待たせたかな？」

十代があれこれ考えているとなのははそこで待っていた少女にそう聞いた。

物陰に隠れながら十代はそれが誰なのか見た。

「（…紫苑…？どうしてなのとは…？）」

「いいえ、先程来たばかりです…高町なのは」

「久しぶりだよね…いまは紫苑ちゃんかな？」

どうやら紫苑となのは知り合いだっただようだ。

ちなみに十代は紫苑の事は自分達と同じ管理局の敵だとしか聞いてない。

いや、正確にはユウ達も『闇の書』から生まれた事しか知らない。

「…ずっと待っていました」

「…うん」

紫苑が辛い様に、悲しい様に、寂しそうに言った言葉。それになのはは泣きそうに頷いた。

「…あの日…あの時の約束が…叶う日を…」

「…うん…」

「『私達が…いつか家族の様になれると』…それが唯一の望みだった」

「……………」

なのははなにも言わなかった。
その約束から、いくらかの時が流れた。だがそれでも紫苑は待ち続けた。

その日が来るのが

「知ってますか？私あの日からずっと…管理局の違法研究所で人体実験の素体となっていたんですよ」

「え…!？」

「（嘘だろ…）」

紫苑の言葉になのはは驚いた声を上げた。それに十代も信じられない様にしていた。
だが、そんな絶望な表情のなのはを無視して紫苑が言い放った。

「来る日も来る日も…何なのかよく分からない装置の為に私の体が使われました」

「そ、そんな…」

「毎日毎日痛かった…気を失う事も多くありました…けど、私に安らぎの時間はありませんでした」

「っ……………!!」

なのはの顔が驚愕から、悲哀へと変わっていく。すると、紫苑はキツとなのはを睨んだ。それも憎悪の様な眼で

「いつか貴女が助けてくれる。いつか私の家族になつてくれる。そう思っていたけど、それは私だけのようでしたね。私はユウに助けられ、姫野紫苑として、ツバキの妹になった」

「…ごめ…な…ごめ…んな…さ…い…!!!」

なのはは掠れ掠れの声で謝った。紫苑は長いことなのはを待っていた。だがなのはが助ける来るとは一度として無かった。

それどころか、その非道とも言える行為をしていたのはなのはの仲間たちだった。

「時空管理局、高町なのは…貴女の呼びかけに応えた分かり合っためではない…貴女と敵対するためです。私は『世界の矛盾』の一人として…」

「…う…」

なのはは息を殺して泣き始めた。何処かでなのははこの戦いを軽く見ていたのかもしれない。紫苑を見つけて、『友達になれる』とか思っただけで無かったのかもしれない。

だが、紫苑はその手を取ることはない。自らと同じ様な体験をした

子供がまだ多くいるかもしれないからだ。

紫苑の目的はアカデミアで力を付け、そう言った子供を助けることだった。

だから

「チエーンバインド!!」
「っ!?!」

管理局から狙われることとなる。

「クロノ君!？」

紫苑の体を縛ったバインドを発生させたのはクロノだった。

「やっと捕まえたぞ、星光の殲滅者」

「っ…!!」

紫苑はクロノを見た後なのはを睨んだ。なにも言っただけならクロノが此処に来ることはない。

「高町なのは…!! 騙しましたね…!!」

「ち、違う!! 私は…!!」

紫苑の言葉になのはは必死に否定した。だがそれを無視してクロノが持っていた杖を紫苑に向けた。

「無駄な抵抗はするなよ。君は存在してはいけない存在だ」

「っ…!! くっ…!!」

クロノ言葉に紫苑はバインドを無理に外そうと抵抗した。だがきつく縛られているのか、全く身動きが取れなかった。

「さて早く艇に戻らなくてはな…この世界の人間に見つかったら」
待て!」「っ!?!」

クロノの言葉に聞くように現れた人物

「十代君…?」

「なのは!!それにお前!!紫苑をどうする気だ!!」

威嚇するように十代がクロノを睨んでいるが、クロノは涼しい顔をしていた。

「姫野紫苑は偽名。本名は「そういうことじゃない!!紫苑をこれからどうするんだ!!」……本局に連行後、恐らくロストロギアの生体実験だろうな」

「っ!!お前…!!」

十代がクロノに対して悪態をつくくとクロノは杖をデュエルディスクに変え、十代と対峙した。

それと同時に周囲に例のドームが包みかけた。

「待て十代」

そう呼びとめた男にクロノ以外の3人は見覚えが
この学園でこの男を知らない人はいないだろう
というよりも、

「カイザー!？」

「丸藤さん!？」

ブルー生徒　そして学園最強という称号を持つ男カイザーだった。

「お前はこれから代表戦だ。そろそろツバキの勝負が終わる…」

「だけど…!!」

そついいながら十代はいまだに捕らわれている紫苑を見た。
すると亮が十代の前に立った。

「俺が相手をする、行け」

「…頼むカイザー!!」

十代は急いでリングへと走って行った。そして残されたカイザーは
真っ直ぐクロノを見た。

「前にも会ったな」

「っ………良いだろう…デュエルだ!!」

顔を知られているクロノは言い訳などできず、ディスクを構えると
ドームがクロノと亮を囲った。

「一応だが名乗らしてもらおう…サイバー流師範代、丸藤亮」

「時空管理局、執務官クロノ・ハラオン」

「「参る!!」」

第三十三話 怒りと処刑（後書き）

ユウ「あの久森ってやつ…潰す」

ツバキ「ユウ、元に戻って…（泣）」

ユウ「ツバキ？どうしたの？」

うん、あそこの2人をほっておく

剣賭・紫苑「同意」

シゲル「で、最後のなんだ？」

ふっふっふ…次回はカイザーVSクロノだ。

剣賭「異色の勝負だな」

紫苑「ところで…私の約束とは？」

なのはPORTABLEだと少し違うかもしれませんが、紫苑はなのはと戦った後

『いつかあなたと家族になりたい』と言ってなのはも『私も』と約束した。

だが精霊界で管理局の憎しみができ、管理局にいるなのはもそれに関わっている可能性があり、そして世界の矛盾として生きるためになのはと敵対することにしたというわけだ。

シゲル「ちょいまで、なのは達はどうなんだ？あいつらもこの世界じゃ…」

アカシックレコードだと他の世界にいる人間も書いてあって、なのは達もいたけど紫苑はいなかったことになってる。けど山本さんみたいに実際との史実とは違うことになってる

剣賭「説明長いな」

オリジナルカード

剣闘獣リーダー

投稿カード

スレイブバード

剣賭「一つ聞きたいが、お前紫苑×亮にする気なのか？」
いや、亮は孤高な一匹狼的な感じがするから。紫苑の恋愛フラグは
もう少し先かな

次回予告：紫苑

捕えられた私を助けるために亮さんがクロノ・ハラオンと勝負する
ことになった。

上級モンスターを並べるクロノと、相手の場のカードを破壊する亮
さん この勝負どちらが勝つのか分からない。

そしてラストターン まさかの出来事が…

次回第三十三話 3体の切り札 カイザーVSクロノ
最強カードは『サイバー・ドラゴン』

第三十四話 3体の切り札 カイザーVSクロノ（前書き）

ある種のトラウマ出現作成ですね…

第三十四話 3体の切り札 カイザーVSクロノ

捕らわれた紫苑を助けようとした十代だったが、カイザーに代表戦に集中しろという言葉を受け、リングへ向かった十代。

そして紫苑救出の為、クロノと対峙した亮^{カイザー}

デュエルリング

ツバキ/LP600

「カオス・レッド・ドラゴンで攻撃!!」

「きゃあああああ!!」

高野/LP400

結構ギリギリで勝ったツバキ。高野のデッキが魔法カードを使うとダメージを与える系統のデッキだったため危なかったが何とか勝てた。

「…あ、ありがとうございました」

「…ありがとう、楽しかったわ」

高野はそう言うとりングを後にした。ツバキも観客席にいるユウ達の元へと向かった。

『デ〜ハ〜！次は最終戦〜！シニョール万丈目VSドロップシニョール十代〜！』

そう宣言した時、何故か万丈目だけ出てきた。

「……………ぬ？（なぜドロップアウトボーイだけ来ないノーネ？まさか逃げたとか…………）」

「十代め…怖気づいて逃げたのか？」

「誰が〜！〜！」

万丈目の言葉に反応するように十代が駆け足でリングに現れた。それを見たアカデミア生徒とクロノスはホツとしていた。

「十代…なにしてたんだ？」

「さあ？」

観客席ではシゲルと三沢が十代が遅れたことに関して首を傾げていた。

ここまで時間がかかるほどトイレは遠くなく、しかも亮が探しに行つたきりだった。

『役者がそろつたところで再確認するノーネ！！現在アカデミア代表が2勝しており！！ライフポイント差は2600！！次にシニョール万丈目がライフポイント2650以上で勝利すればノーネ校の勝利！！シニョール十代は2550以下までライフを削る、もしくはシニョール万丈目に勝利すればアカデミア校の勝利なノーネ！！では、デュエル開始！！』

「デュエル！！」

イントランス

全員がデュエルリングに行ったイントランスは人気が無く、4人の男女しかいなかった。

その内の2人　クロノと亮は対峙して、デュエルを開始した。

クロノのターン

「僕のターン！！手札から氷結界の軍師を攻撃表示で召喚！！」

氷結界の軍師 / ATK1600

フィールドに笠を被った老人が現れた。するとクロノは手札を一枚墓地に送った。

「軍師の効果発動！！手札の氷結界と名のついたモンスターを墓地に送ることでカードを1枚ドローする！！」

氷結界の軍師

効果モンスター

星4 / 水属性 / 魔法使い族 / 攻1600 / 守1600

手札から「氷結界」と名のついたモンスター1体を墓地へ送って発動する。

自分のデッキからカードを1枚ドローする。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「更に今ドローした大波小波を発動！！フィールド上の水属性モンスターを全て破壊し、その数だけ手札の水属性モンスターを特殊召喚する！！」

大波小波

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターを全て破壊する。

その後、破壊した数と同じ数まで手札から水属性モンスターを特殊

召喚する事ができる。

「効果により軍師を破壊し、手札から氷結界の虎将ガンターラを特殊召喚する！！」

フィールドの軍師が消えるとスキンヘッドの屈強な男性が現れた。

ガンターラ / ATK 2800

「カードを伏せ、エンドフェイズにガンターラの効果発動！！墓地の氷結界の虎将グルナードを特殊召喚する！！」

氷結界の虎将ガンターラ

効果モンスター

星7 / 水属性 / 戦士族 / 攻2700 / 守2000

自分のエンドフェイズ時、自分の墓地に存在する

「氷結界の虎将 ガンターラ」以外の「氷結界」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない

グルナード / ATK 2800

今度は鎧を身に纏った虎将が現れた。しかも1ターンでこの2体の上級モンスターを揃えたクロノはただ者では無い事に亮は気付いていた。

クロノ

LP4000 手札1枚
ガンターラ(ATK2700) グルナード(ATK2800)
伏せカード1枚

わずか1ターンで場を整えたクロノになのはと紫苑は驚くばかりだった。

だが 恐らくクロノは知らない。

亮のターン

「俺のターン、ドロー」

今相手にしてるのが、学園最強と呼ばれている男だと

「アースクエイクを発動。効果によりフィールドのモンスター全ての表示形式を守備表示に変更する！」

アースクエイク

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て守備表示にする。

フィールド全体に巨大な揺れが発生するとガンターラとグルナードが体勢を崩した。

ガンターラ / ATK 2700 2000
グルナード / ATK 2800 1000

「更に手札より、融合を発動!!」

「いきなり…!?!」

亮はわずか1ターン目で融合を発動させた。

「手札の2体のサイバードラゴンを融合…現れる、サイバー・ツイン・ドラゴン!!」

フィールドに双頭を持つサイバー・ドラゴンが現れた。

これがカイザーと呼ばれる一つの理由 ドローの引き運だ。

サイバー・ツイン・ドラゴン / ATK 2800

「バトル!サイバー・ツイン・ドラゴンで氷結界の虎将ガンターラに攻撃!!エヴォリユーション・ツイン・バースト!!」

「クッ…!!(ガンターラに攻撃するならアースクエイクを発動しない方がダメージがあった、プレイミスか…!?!)」

クロノは破壊されるガンターラを見てそう思っていた。だが、カイザーが狙っているのはダメージではない。

更なる破壊だった。

「サイバー・ツイン・ドラゴンはバトルフェイズ中に2回攻撃することができる」

「なっ…複数回攻撃だど!!」

サイバー・ツイン・ドラゴン

融合・効果モンスター

星8/光属性/機械族/攻2800/守2100

「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

クロノが亮の説明に驚いていると再びサイバー・ツイン・ドラゴンの口にエネルギーが溜まっていた。

「サイバー・ツイン・ドラゴンで氷結界の虎将グルナードへ攻撃!

!エヴォリユーション・ツイン・バースト!!」

「っ…グルナード…!!」

わずか1ターンで揃えた上級モンスターがたった1ターンで全て破壊されてしまった。だがクロノはまだあきらめていなかった。

「リバースカード、奇跡の残照を発動！！戦闘破壊されたモンスターを1体特殊召喚する！！グルナードを特殊召喚！！」

奇跡の残照

通常罨

このターン戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られたモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

グルナード / ATK 2800

フィールドに再び氷の鎧を纏った武将が現れた。
それを見た亮は手札のカードを2枚伏せた

「カードを伏せて、ターンエンドだ」

亮

LP 4000 手札 0枚

サイバー・ツイン・ドラゴン (ATK 2800)
伏せカード 2枚

クロノのターン

「僕のターン！！手札から氷結界の輸送部隊を召喚！！効果発動！！」

氷結界の輸送部隊

効果モンスター

星1 / 水属性 / 海竜族 / 攻 500 / 守 200

自分の墓地に存在する「氷結界」と名のついた

モンスター2体を選択して発動する。

選択したモンスターをデッキに戻し、

お互いにデッキからカードを1枚ドローする。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

氷結界の輸送部隊 / DEF 200

「墓地のガンターラと軍師をデッキに戻して、互いにカードを1枚ドロー!!!」

「……（これは……）」

引いたカードを見て亮は口元を緩めた。

だがそれに気付かないクロノは引いたカードをそのまま場に出した。

「グルナードが場にいる時、通常召喚とは別に氷結界と名のついたモンスターを召喚できる!!! 氷結界の守護陣を守備表示で召喚!!!」

氷結界の虎将グルナード

効果モンスター

星8 / 水属性 / 戦士族 / 攻 2800 / 守 1000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分のメインフェイズ時に1度だけ、

自分の通常召喚に加えて「氷結界」と名のついた

モンスター1体の召喚を行う事ができる。

氷結界の守護陣 / DEF 1600

フィールドに獣の様なモンスターが現れた。すると守護陣の周囲からうすい膜の様な物が現れ、クロノ場のモンスターを包んだ。

「守護陣が場にいる時他に氷結界があると、お前は守護陣の守備力以上の攻撃力を持つモンスターは攻撃できない!!」

氷結界の守護陣

チューナー（効果モンスター）

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 2000 / 守 1600

自分フィールド上にこのカード以外の

「氷結界」と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、

このカードの守備力以上の攻撃力を持つ

相手モンスターは攻撃宣言をする事ができない。

「ロツクか…が、甘いな」

「っ…カードを伏せてターン終了!!」

クロノ

LP 4000 手札 0 枚

グルナード（ATK 2800） 守護陣（DEF 1600） 輸送

部隊（DEF 200）

伏せカード 1 枚

亮のターン

「俺のターン…カードを2枚伏せてターンエンドだ」

亮

LP4000 手札0枚

サイバー・ツイン・ドラゴン（ATK2800）

伏せカード4枚

クロノのターン

「僕のターン！！魔法カード氷結の宝札を発動！！場の氷結界と名のついたモンスター1体につき、カードを1枚ドロウする！！場には3体いる！！3枚ドロウ！！」

氷結の宝札

通常魔法

このカードが自分の手札が他に無い時のみ発動できる。
自分フィールド上の「氷結界」と名のついた
モンスター1体につきカードを1枚ドロウする。

「（来た！！）手札から氷結界の番人ブリズドを召喚！！さらにグルナードの効果で氷結界の軍師を召喚！！」

一気にフィールドに氷の鎧を纏った武士と氷の鳥の様なモンスターが現れた。だがサイバー・ツイン・ドラゴンに届かない。

「軍師の効果発動！！ガンターラを墓地に送ってドロウ！！」

しかし亮は感じていた

「（このターン…来る！！）」

「レベル1の氷結界の番人ブリズドとレベル1の氷結界の輸送部隊とレベル4の氷結界の軍師にレベル3の氷結界の守護陣をチューニング！」

大気に潜む無尽の水よ！！氷点の槍となりて静寂を貫け！！」

1 + 1 + 4 + 3 = 9

「シンクロ召喚！！不浄を払え、氷結界の龍トリシューラ！！」

トリシューラ / ATK 2700

「シンクロ召喚だと…だが、俺のサイバー・ツインの攻撃力には届いてない」

「トリシューラの効果発動！！シンクロ召喚成功時相手のフィールド・手札・墓地のカードをそれぞれ一枚除外する！！」

「っ！？」

氷結界の龍トリシューラ

シンクロ・効果モンスター（制限カード）

星9 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻2700 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の手札・フィールド上・墓地のカードを

それぞれ1枚までゲームから除外する事ができる

トリシューラの3つ首から強力な冷気が発生するとサイバー・ツインは凍りついた。

しかし、氷は碎け無かった。

「リバース罠、異次元封鎖だ。俺の場のカードはこのターン除外されることはない」

異次元封鎖

通常罠

このターン、フィールド上のカードは除外されない。

「クソ…だが、墓地のサイバー・ドラゴンを除外！！バトル！！グ
ルナードでサイバー・ツイン・ドラゴンに攻撃！！！！」
「っ…相打ちか…！！」

ガンターラは剣をサイバー・ツインにつきたてるが、負けじとサイ
バー・ツインもエネルギー弾でガンターラを迎撃した。

「やれ！！トリシューラで直接攻撃！！」

トリシューラの口から放たれた大量の冷気　それに亮の服の一部
が凍りついた。

「ぐっ！？馬鹿な…ダメージが実際に起こるだ…！！」

亮 / LP 4000 1300

「まだ俺は戦える…！！」

「だが、もうお前に逆転する手はない！！死者蘇生を発動！！ガン

ターラを特殊召喚し、ターンエンド！！エンドフェイズ、墓地のグ
ルナードを特殊召喚！！」

ガンターラ / ATK 2700

グルナード / ATK 2800

クロノ

LP 4000 手札1枚

グルナード (ATK 2800) トリシューラ (ATK 2700)

ガンターラ / (ATK 2700)

伏せカード1枚

亮のターン

「俺のターン、ドローフェイズ時にリバース罠を発動！！」

「このタイミングで…？」

亮はカードを引く前に伏せカードを使った。

「貪欲の宝札！！」

それは 逆転の一手。

「貪欲の…宝札？」

みた事の無いカードにクロノは首を傾げた。貪欲と言えば墓地の力

ードを回収する「貪欲な壺」だが、宝札とは

「ドローフェイズ時俺の手札が0の場合、ドローを放棄しカードを互いに6枚までドローする!!」

「っ!?!なんだそのドロー補助カードは!?!」

確かにこれで一気に手札を補充した2人。しかしこれだとクロノにも手札が増えるもろ刃の剣だ

貪欲の宝札

通常罫

自分の手札が0枚の時のみ自分のターンのドローフェイズ時発動できる。

ドローフェイズのドローをスキップし、互いにカードを6枚になる様にドローする。

「そしてスタンバイフェイズ、無謀な欲張りを発動!!カードを2枚ドローし、その後2ターンの間俺はドローフェイズをスキップする。」

無謀な欲張り

通常罫

カードを2枚ドローし、以後自分のドローフェイズを2回スキップする。

亮/手札6 8

「見せてやる…サイバー流の力を！！手札から融合回収を発動！！墓地のサイバー・ドラゴンと融合を回収する！！そしてサイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚！！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ / ATK 1500

フィールドにサイバー・ドラゴンよりも一回りほど小さい機械龍が現れた。だが、召喚成功した途端どんどん小さくなっていった。

「リバーカードミニチュアライズを発動！！フィールドの攻撃力1000以上のモンスター1体のレベルを1と攻撃力1000下げる！！」

「自分のモンスターの攻撃力を下げた…！？」

ミニチュアライズ

永続罫

フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力が1000より上のモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルを1つ下げ、攻撃力は1000ポイントダウンする。

そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ / ATK 1500 500

亮は自分のカードで自分のモンスターを弱体化した。一見不利にしている様に見えるが、それが新たな戦術だった。

「手札より機械複製術を発動！！攻撃力500以下の機械族モンス

ターと同名カードをデッキより2体まで特殊召喚する！！」
「攻撃力500…その為に自分のモンスターを…！！」

機械複製術に効果により、ミニチュアライズよりも一回りほど大きいサイバー・ドラゴン・ツヴァイが2体並んだ。

「そして手札の魔法カードを見せることによって、サイバー・ドラゴン・ツヴァイはサイバー・ドラゴンとして扱う、手札の融合を見せる！！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ
効果モンスター

星4/光属性/機械族/攻1500/守1000

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、
ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。

1ターンに1度、手札の魔法カード1枚を相手に見せる事で、
このカードのカード名はエンドフェイズ時まで

「サイバー・ドラゴン」として扱う。

また、このカードが墓地に存在する場合、

このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ サイバー・ドラゴン
サイバー・ドラゴン・ツヴァイ サイバー・ドラゴン
サイバー・ドラゴン・ツヴァイ サイバー・ドラゴン

「マジック・プランターを発動！！ミニチュアライズを破壊し、カードを2枚ドロー！！」

「一体どれだけドローするんだ…」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（サイバー・ドラゴン） / ATK 500 1500

クロノはそう呆れていた。まあこのターンだけですでに10枚のカードをドローしているので無理もないが。

「融合を発動！！場の3体のサイバー・ドラゴンを融合！！現れる…サイバー・エンド・ドラゴン！！」

フィールドに3つ首を持つ機械龍が現れた。その威圧感にクロノは一歩下がってしまった。

サイバー・エンド・ドラゴン / ATK 4000

「こ、攻撃力…4000…!?!」

手札0、おまけにライフも少ない状況から一気に自身のエースカードを召喚した亮。だが、彼の猛攻はまだ止まらない。

「手札からDDRを発動！！手札のサイバー・フェニックスを墓地へ送り、除外されているサイバー・ドラゴンを特殊召喚！！」

サイバー・ドラゴン / ATK 2100

「そして手札よりフィールド魔法、フュージヨンゲートを発動！！」

「フュージョン・ゲート…？確か融合を使わず、融合召喚を行うカード…なぜさつき使わなかった…!？」

フュージョン・ゲート

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

「融合」魔法カードを使用せずに融合召喚をする事ができる。

この際の融合素材モンスターは墓地へは行かず、ゲームから除外される。

「手札の2体のサイバー・ドラゴンと、場のサイバー・ドラゴンを除外し…サイバー・エンド・ドラゴンを召喚!!」

サイバー・エンド・ドラゴン / ATK 4000

亮の場に2体目の三つ首機械龍が現れた。それを見てクロノは一步引いてしまった。

「ば、バカな…攻撃力4000が…2体も…!？」

最早圧巻の一言しかなかった。たった手札0の伏せカード3枚から此処まで巻き返したのだ。だが、亮の目指す先はその上を行っていた。

「先程言っていた質問だが…俺はこのデュエル、絶対に負けられない。その為…本気で行かせてもらう!!ライフを半分払い、速攻魔法サイバネティック・フュージョン・サポートを発動!!」

「サポート…? 一体何をやる気だ!？」

亮 / LP 1300 650

そうクロノが言った時、何故か亮の場にサイバー・ドラゴン・ツヴァイが3体現れた。

「サイバネティック・フュージョン・サポートは機械族、融合召喚を行う時墓地のカードを素材として融合召喚ができる!!」

「!?!」

サイバネティック・フュージョン・サポート
速攻魔法

自分のライフポイントを半分払って発動する。

このターンに機械族融合モンスター1体を融合召喚する場合、手札または自分フィールド上の融合素材モンスターを墓地に送る代わりに、

自分の墓地に存在する融合素材モンスターをゲームから除外することができる。

すると3体のサイバー・ドラゴン・ツヴァイは歪んで一体のモンスターを生みだした。

「現れる…サイバー・エンド・ドラゴン!!」

サイバー・エンド・ドラゴン / ATK 4000

「こ、攻撃力4000が3体…!？」
「さすがカイザーですね」

なのはが今現在の状況を見て驚いていると、紫苑は静かにそう言った。

色々やったので状況確認です

亮

LP650 手札1枚

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000） サイバー・エン

ド・ドラゴン（ATK4000）

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）

伏せカード無し

フュージョン・ゲート

クロノ

LP4000 手札6枚

氷結界の虎将グルナード（ATK2800）氷結界の龍トリシュー
ラ（ATK2700）

氷結界の虎将ガンターラ（ATK2700）

伏せカード1枚

既にクロノは顔面蒼白になっていた。勝てるかと確信した前のターンから嘘のように無情の攻撃力4000のモンスターが3体。

「悪いがこれで終わりだ。速攻魔法リミッター解除!!」

「なっ…!？」

リミッター解除

速攻魔法（制限カード）

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

Q・どうなるの？

「効果により場のサイバー・エンド・ドラゴンは攻撃力を2倍となる！！」

サイバー・エンド・ドラゴン / ATK 4000 8000

サイバー・エンド・ドラゴン / ATK 4000 8000

サイバー・エンド・ドラゴン / ATK 4000 8000

A・こうなる

「攻撃力8000（なの）！？」

「バトル！！3体のサイバー・エンド・ドラゴンで攻撃！！エターナル・エヴォリューション・バースト！！サアンレンダア！！！」

一撃目がトリシューラへ向かっていた。トリシューラが必死に攻撃を防ごうとするが、難なく破壊される。

「うわあああああああ！！！！！！！」

クロノ / LP 4000 - 1300

一撃目で既にクロノのライフは0だった。だが既に攻撃宣言が完了している2体のサイバー・エンドは攻撃を止めない いや、止められない

2撃目がガンターラへと向かっていた。ガンターラも難なく破壊された。

「グッ、があ、あああああああああああああ！！！！！！！」

クロノ/LP - 1300 - 6600

最早クロノは立っているのがやっとだった。だが無情にも最後の攻撃がグルナードへ向かっていた。

グルナードは持っていた剣でサイバー・エンド・ドラゴンに反撃しようとするが跡形もなく吹き飛んだ。

クロノ/LP - 6600 - 11800

「アアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

甲高い悲鳴を上げてクロノは吹き飛ばされた。

そして反対側の壁まで吹き飛んだ。

「クロノ君!!」

なのはは吹き飛ばされたクロノの元へと向かった。すると紫苑のバインドが消えた。

「助かりました、礼を言います」

「構わん…それにしても奴らはなんだ？」

亮が消えたクロノとなのはのいた場所を見てそう聞いた。だが紫苑は俯いて、なにも言わなかった。

デュエルリング

「行け!! フレイムウイングマン!! フレイムシュート!!」

「うわああああ!!!!!!」

万丈目 / LP2800 1600

「やった!! フレイムウイングマンがアームドラゴンを倒した!!」

「さらにフレイムウイングマンの効果で十代の勝ちだな」

翔の言葉に剣都がそう言うとフレームウイングマンの龍の様な右腕が万丈目の目の前で開いた。

「う、うわあああああ！！！！」

万丈目 / L P 1 6 0 0 0

十代が万丈目に勝った途端、万丈目の兄の2人が万丈目に激昂していた。

「たく…どの時代でも家の名前が大事なのか？」

「仕方が無いわ。万丈目君の家はそういうところなのよ」

シゲルの言葉に明日香がそう応えると等々兄達の堪忍袋の緒が切れたのか万丈目の胸倉を掴んでいた。

「ありやばいな」

「行こう！！！」

ユウの言葉に全員がリングへと降りて行った。観客席から飛び降りて行ったのでわずか15秒で到着した。あとで先生等のお仕置き

があるが。

「やめろあんた達！！万丈目は一生懸命戦ったんだ！！」

「他人が我ら兄弟の事に口出しするのか」

「第一、このデュエルにどれほどの金を賭けたと思っている！！」

「こいつは、俺達の顔に泥を塗ったのだ！！」

簡単に言っていると他人は関係ないという風なことだが　ツバキは悲しそうに言った。

「兄弟だからなに？負けたから怒るの？一生懸命頑張った人の気持ちも考えないでそんなの事いうの！？」

「小娘が…黙って「いいぞいいぞ！！」「っ！？」」

ツバキの言葉に兄の片方がそう悪態をつくが、それを遮ってノース校の一人がそう叫んだ。ツバキをたたえるような声だ　しかもそれを皮切りにどんどん大きくなっていった。……しかもアカデミアからもその声が上がっていた。

「兄さん達…もう、帰ってきてくれ」

「っ…！見損なっただぞ、準！！」

そついい捨てるよ2人はズンズンとリングを後にした。

「万丈目……」

「……………あれ？そついや紫苑は？」

「……………あああゝ！！！！」

ユウがこの場にいない紫苑に今さら気付いた。
すると十代が思い出したように声を上げた。

「そ、そうだった！！紫苑が！！！」

「私がどうかしましたか？」

十代が急いで何処かに向かおうとすると、その十代の目の前に
紫苑と亮がいた。

「し、紫苑…大丈夫だったのか？」

「ええ…まあ、何とか……」

万丈目がアカデミアに残ると決意したことでアカデミアはお祭り騒ぎだった。

だがレッド寮周辺はいつもと変わらず静かだった。

一先ずおもなメンバーが集まってなにがあったのか、亮が説明をした。

「それでだ……翔、それにお前達も……なにに関わっている？」

「お兄さん……」

亮が真っ直ぐ翔を見ている　そんな亮の前に一枚のカードが滑り込んできた。

「……？」

それに目をやるが、何も書かれておらず絵柄も無かった。

「説明するには……そのカードの事から話す必要がある」

シゲルが学園最強と言われた男に自分達の戦いの事を説明し始めた。

アースラ

「それでなのはさん、貴女はどういう事をしたのか分かりますね？」
「はい……」

ククロノを連れて帰ったのはだが、その後リンディの説教を受けていた。

独断行動・命令無視、そして敵である紫苑に勝手に会った。傍から見れば裏切り行動ともとれる事をしたのだ。

「で、なのはさん。なぜ彼女に会ったんですか？聖牙君達ならまだ分からなくてもないですがなぜですか？」

「約束を……あの時、あの子が言っていた願いを叶えてあげたかった……」

それを聞いたリンディはあごに手を当て考えていた。

「なぜ彼女がそういった事を……？」

リンディがそう聞くとなのはは泣きながら説明をした。

「ひぐつ……紫苑ちゃんが……管理局に……人体実験の素体にされて……ひぐつ……管理局の私とは……敵になるって……」

「……（まさか……此处で管理局の間が関係してくるとはね……）」

アースラ内では一番管理局と関わってきたリンディは管理局上層部の不正事項を聞いた事があった。

だがそれはあくまで噂、本当かどうか分からない。

「…なのはさん。こついつた人を知ってますか？」

「ふえ…？」

リンディはなのはの目を見てこつ言った。

「『言葉にしなきゃ分からない』」

「あ………」

そう、それはなのはがフェイトと戦った時に言った言葉だった。

「なのはさんの気持ち…紫苑さんに言葉にしないと分からないのでは？」

「……そうなの。言葉にしないと…」

そう言ったなのは目にはもう迷いが無かった。だが

「ですが、勝手な行動したので3日間部屋から出てはなりませんよ

」

「じゃー!」

レッド寮

一通り説明し、ついでに十代達に例の力と精霊界についても説明した。

始終十代のテンションが上がrippぱなしだったというのは言わずとも分かる事だが…

「なるほどな…だからこうなった訳か…」

亮がそう言って見せたのはいまだに凍っている服の裾だった。

トリシューラの直接攻撃で喰らった実際のダメージだ。

「……………俺は今年度で卒業する。できる事が少ないが手を貸そう」

「…いいのか?カイザー」

亮の言葉に剣都がそう聞くと亮は不敵な笑みを浮かべた。

「奴の戦い…俺の中で気になる事があった。その答えを俺は知りた
い…!!」

第三十四話 3体の切り札 カイザーVSクロノ（後書き）

紫苑「流石サイバー流ですね」

本当ならブリュ、トリシユ、グングに「サアンレンダア！！」をしたかったけど…そこまでの考えが浮かばなかった…

ユウ「これで第一章終わり？」

そう。イメージとして後3〜4章するつもり。……100話超えるな、それ。

シゲル「で、カイザーの仲間入りか」

今のところ5人+十代+カイザーで…まあ翔や明日香は管理局の戦いには行かないという感じ。

オリジナルカード

氷結界の宝札

貪欲の宝札

投稿カード（通りすがりのデュエリストさん）

異次元封鎖

次回予告：side:no

管理局との戦いが無い平和な日々

そんな時舞い込んだ夏祭りの通知。その日を満喫することを決めたメンバーたち。

そして祭り当日、戦いを忘れて楽しむ彼らは

次回幕間〜夏祭り〜

第二章終幕〜夏祭り〜（前書き）

今回はほのぼの系ですね。

そして大まかなカップリングが出ています

第二章終幕〜夏祭り〜

「「「夏祭り?」「」」

レッド寮の食堂で十代と剣都とデッキ調整をしていたユウは大徳寺にそう聞き返した。

「そつだニヤ〜。明日の夕方6時から島全体で夏祭りをする事になったのニヤ」

「この島で夏祭りなんかするのか…」

剣賭の意見も最もだった。大徳寺の説明によると今年度から生徒が売店などの出し物をしてその時の売り上げで新たなパツクの資金にするというイベントを今年はするらしい。

「まあ2人は代表戦で、剣賭君はまだこの学校の学生じゃなかったから知らなかったのニヤ。大体代表選考会の日ぐらいから告知してたのニヤ」

「だから…」

そう言ってユウはある事を思い出していた。それはルームメイトのシゲルがここ数日何かを作っていたからだ。それは祭りのはっぴだった。

「明日は一日祭りの準備だにや。その為授業は無いんだニヤ。あ、
そうそう…夏祭りのイベントが書いてるしおりだニヤ」

「へ…どれどれ」

受け取った剣都は中を見た。十代とユウもそれを覗き込んでいた。

「打ち上げ花火に男女混合タッグデュエル…盆踊りもあるんですね」
そう言ったツバキは明日香を見た。同様に代表生徒だったツバキと
編入してきた紫苑も3人と同じ様に夏祭りの事を知らなかった。
てか、なぜシゲルは知っていた？

「そうよ。私はももえとジュンコとあちこち回るけど2人はどうするの？」

「私は…ユウと回るかな？シゲルが祭りの出し物の方に回るんなら」

「私はどうしましょう…十代や翔と回りましょうか…」

とツバキと紫苑はそう言っていた。だがこの時、ほぼ全てのメンバーは知らなかった。

『男女混合タッグデュエル』という意味を

翌日・昼ごろ

夕方スタートと言えど既に様々な出店が準備を完了しており、またあちこち回る生徒もグループを作って見て回っていた。

「うお〜人がいっぱいだな」

「そうですね」

その光景を見て真つ赤な浴衣を着た十代と、鮮やかな青い浴衣を着た紫苑は本音を吐露した。ちなみになぜこの2人だけなのかというと

翔はこの後のイベントの手伝いの為、万丈目と何処かに行って隼人は祭りで使用する巨大絵の最終仕上げに取り掛かっていたからだ。

ちなみにその事を十代が知ったのは15分前だと言っておこう。

「それにしても…この浴衣というのは動きにくいですね」
「そうか？俺は結構気に入ってるぜ」

2人の浴衣は学園からの支給品だ。夏祭り参加者は浴衣着用が決められており、またその際参加者には引換券が渡される。

「…所で十代は、いつの間にそんなものを？」
「ん？」

十代の今の装備 頭にはひょつとこのお面、右手には綿飴とりんご飴、左手にはタコ焼きと水風船がある。

2人があちこち回っているわけでもないのに十代はなぜかこんなに持っていた。

「まあいいじゃねえか。ほれ」
「!？」

そう言っつて十代は持っていた綿飴を紫苑の口に押し込んだ。ちなみに十代はすっかり忘れていたがその綿飴は一口食べていたのだ。

「……美味しい」

「だろ！？そう固いこと言わずに楽しもうぜー！」

一方：ユウとツバキ

「ま、待った？／／／」

「だ、大丈夫／／／」

真っ白な浴衣を着たツバキがレッド寮で待ち合わせをした焦げ茶色の浴衣を着たユウがいた。ちなみに顔が真っ赤なのは2人ともお互いの恰好を見てときめいていた。

「え、えっと…それじゃあ…」

「う、うん…！！」

2人は顔を真っ赤にしながら手を繋いで祭りへと向かっていた。

「ほお〜お熱いね」

「シ、シゲル！？」

その光景を見ていたシゲルが2人にそう言った。シゲルの出店は焼きそば屋で、長蛇の列ができていた。リーズナブルの値段でありな

がら結構おいしいのだ。

「ほい」

「え？」

シゲルがユウに何かを投げ渡した。それは焼きそばのパックだった。

「奢りだ。持って行け」

「ちよつとシゲル！！料金取らないの！？」

そう言ったのはなぜか手伝いをしているジユンコだった。てか、なぜ明日香と共にではなくてシゲルと出店をしている。

「あれ？ジユンコさん…どうしてここに？」

「ん？前にこいつに助けてもらって、その恩返しよ…けど此処まで忙しくなるなんて思わなかったわ…」

ちなみにその助けてもらった出来事とは

交流試合3日前

「ジユンコさん、起きてますか？」

「…帰って」

ジュンコの部屋をノックした紫苑にジュンコは冷たくそう言った。この状態が2日ほど続いていた。ただの病気ならまだしも、真面目なジュンコが部屋から出ないのだ。

そのことを心配ツバキと紫苑だが、ジュンコは誰とも会いたくないそうだ。

昔からの親友であるももえと明日香もこんなジュンコは見たこと無いらしい。

ブルー寮：紫苑の部屋

「で？なんで俺に頼むんだ？」

放課後紫苑に呼び出されたシゲルはそう言った。そのまま紫苑の部屋に連れて行かれ事情を聞いたシゲルだが、一体紫苑は何を望んでいるのか分からなかった。

「恐らくジュンコさんは誰かに嫌がらせされていると思われます。その犯人を突き止めてほしいのですが」

「だから、なんで俺なんだ？」

そう言ったシゲル。だがこの時瞬時に嫌な予感がした。

「……おい待て紫苑、その後ろに隠してるモノはなんだ？」
「……………（ニヤリ）」

その日の夜

「……一体何の用なのよ」

そう言ったジュンコは今現在、人気の無い森の中にいた。嫌がらせをしていると思われる犯人から呼び出されたのだ。

「いやですね、貴女が邪魔なんですよ」

そう言ったのはガリガリの眼鏡をかけたイエロー生徒だった。

「明日香さんの横は貴女ではなく、ボクがふさわしい」
「…その為に、こんな嫌がらせを？」

そう言ったジュンコの前には脅迫文ととれる文面が多くあった。しかも10や20ではない数だった。それが3日間で送られてきたのだ。

鬱や人間不信になってもおかしくなかった。

「貴女が邪魔なんですよ。これぐらい」「はあ……」「？」

イエロー生徒がそう見下したようにジュンコを見ていたが、ジュンコは大きなため息をついていた。すると

「馬鹿だろ、お前」

『ジュンコではない誰か』の声でジュンコがそう言った。それにイエロー生徒が驚いた顔をしていた。

「たく、どんなことかと思ったらそんな事かよ……そんなんであいつを苦しめるな……」

「なっ！？お、お前は一体誰だ！？」

だが、イエロー生徒の言葉に『ジュンコ』は応えなかった。いや不敵に笑うとその眼が

「お前を……殺す者だ……！！！」

『シゲル』の目が赤く輝いていた。

『え？何ですか紫苑さんそのカツラは？』

『いや、別にジュンコさんに化けてくださいと言ってません。ジュンコさん似の誰かに化けてくださいということですよ』

『え？ちよ、ま、アッー』

そして、『ジュンコに似た格好のシゲル』がこの森にやってきたという訳だ。

「さて…女子を脅迫するような屑が…この後どうなるか分かってるよな？」

～中略～

回想終了

てな訳で、嫌がらせがばったりとやんだジュンコは次に来た紫苑に事情説明を求めた。

すると の事を全てばらしてしまったのだ。

「まあ、些細な事よ。それよりもこれから大会でしょ？」

「あ、もうそんな時間だ…ツバキ、行こう！！」

ツバキの手を取ってユウは校舎前へと向かった。

「…お前も明日香と行きたいなら行っても良いんだぞ」

「べ、別にあなたの為じゃないわ。気にしないでよ」

ジュンコの謎のツンデレ化　だがシゲルは特に気にしなかった。

校舎前

『それでは！！男女混合デュエル大会を開始する！！』

マイクを持った剣都の言葉に男女のペアを作った参加者はボルテージが上がった。

ちなみに8ペア16人の参加の中にはユウとツバキ、十代と紫苑もいた。

『MCはこの俺、羽黒剣都が執り行う！！そして実況は丸藤翔、解説は万丈目準だ！！さて、俺達の説明よりサツサと戦いだろうな！！その前に簡単なルール説明だ！！』

（LP4000のTFルールなので省きます）

『さあ！！それでは第一試合！！結城十代&姫野紫苑VS神谷龍&真下汐！！』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

第一、第二試合と次々と続いて行き、等々準決勝第二試合の終盤だった。

「おつかれさん」

「ん？ああ、あんがと」

休憩中だった剣都にシゲルが焼きそばのパックを渡した。2人の目の先にはユウとツバキが自身のエースカードで相手を圧倒している所だった。

「誰が優勝すると思うか？」

「順当なとこだと十代と紫苑だろうな…2人とモE・HEROでおかつ紫苑は十代のモンスターでも融合できる。逆に十代は紫苑のモンスターを素材にできないが紫苑のサポートカードを使える。他のペアなら自身のデッキかタッグ用のデッキで行くだろうが…慣れてないデッキならミスをするし、タッグ用じゃなかったらうまく捌けないだろうな」

剣都の言う様に準決勝の2試合は両方ともワンサイドゲームだった。そして第二試合がちょうど終わった。

「ゴホン…」では最終<sup>ファイナル</sup>試合！！聖牙タ&姫野椿VS結城十代&姫野紫苑！！この戦いの勝者が優勝者だ！！泣いても笑ってもこれが最後だ！試合開始！！！！」

「『『『デュエル！！』』』」

最初は紫苑のターンからだった。

「私のターン、フリーズ・レディを攻撃表示で召喚。カードを伏せてターン」

フリーズ・レディ/ATK1200

十代&紫苑

LP4000



手札5枚 手札4枚  
フリーズ・レディ（ATK1200）  
伏せカード1枚

「ボクのターン！！」

次はユウのターンだ。ユウは十代と紫苑のデッキ内容を一応は知っていた。  
だが紫苑のデッキは属性指定のみなので十代よりもトリッキーな動きをするだろう。

「手札からスピリットモンスター阿修羅を召喚！！」

フィールドに6つの腕を持つ天使が現れた。その手には短剣が握られていた。

阿修羅 / ATK1700

「バトル！！阿修羅でフリーズ・レディに攻撃！！」

阿修羅の投げられた短剣がフリーズ・レディに当たる前に奇妙な渦が現れた。  
その渦により短剣が弾き飛ばされた。

「リバース罫、ヒーローバリア。この効果で攻撃を無効にさしても  
らいました」

「失敗か…カードを3枚伏せてターンエンド、そして阿修羅は手札  
へ」

ユウ&ツバキ

LP4000

手札3枚 手札5枚

モンスター無し

伏せカード3枚

「俺のターン!!」

十代は勢いよくカードを引いた。そして引いたカードを見ると口元  
を緩ました。

「融合を発動!!手札のフェザーマンとバーストレディを融合!!  
現れる枚フェイスバリットカード…フレイムウイングマン!!」

フィールドに竜の頭を持つ右腕を備えたHEROが現れた。  
てか、やっぱり最初のターンで融合は…

「……(チートだな……)」

今会場の観客の心が一つになった。

「バトル！！フレイムウィングマンで直接攻撃！！フレイムシユート！！」

「リバースカードくず鉄のかかしを発動！！相手の攻撃を一度だけ無効にし、再びセットする！！」

ユウに迫っていた炎はボロボロのかかしに阻まれ止まった。

「フリーズ・レディの攻撃！！アイスパニッシャー！！」

「クッ……！！」

ユウ&ツバキ / LP 4000    2800

氷の弾丸に襲われたユウだったが、その瞬間一枚の伏せカードが開いた。

「リバースカード、ダメージコンデンサーを発動！！手札を一枚捨て、デッキからスピリット・ディフェンダーを特殊召喚！！」

スピリット・ディフェンダー / ATK 800

「おゝモンスターを場に出したか、俺はカードを伏せてターンエンドだ!!!」

十代&紫苑

LP4000

手札2枚 手札4枚

フレイムウイングマン(ATK2100)

伏せカード1枚

「私のターン!!!」

ツバキは引いたカードを見た後、十代と紫苑の場を見た。恐らく今の状況を切り抜けるためには

「魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動!!!手札の神聖魔導王エンディミオンを墓地に送ってデッキからサニー・ピクシーを特殊召喚!!!」

フィールドに可愛らしい妖精が現れた。

サニー・ピクシー/ATK300

「更に墓地のワン・フォー・ワンを除外してマジックストライカーを特殊召喚!!!」

フィールドに小さな剣を持った少年が現れた。

マジック・ストライカー

効果モンスター

星3 / 地属性 / 戦士族 / 攻 600 / 守 200

このカードは自分の墓地に存在する魔法カード1枚をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

「戦士族…？珍しいな、ツバキが魔法使いを使うなんて」

「いや、そうでもないぞ。あのデッキは『魔法使い族デッキ』じゃなくて『魔法デッキ』なんだ」

シゲルの言葉に剣都がそう応えた。それを聞いてシゲルはどことなく納得したが、ジュンコは納得して無かった。

「どづいうことなのか説明しなさいよ」

「つまりだ。確かにツバキのデッキに魔法使い族が多い。だがあのデッキのコンセプトはそこじゃない。エンディミオンや闇紅の魔導師などの魔力カウンターを乗せる事が目的のデッキだ。だから魔法が多く、マジックストライカーも楽に出せるから入れてるんだ」

双剣都が説明している間にデュエルは進んでいた。

「レベル3のマジック・ストライカーにレベル4のスピリット・デ  
イフェンダーをチューニング！魔導の頂を目指す者、戦士として  
の加護を受けよ！！」

3 + 4 = 7

「シンクロ召喚！！マジシャンズ・デイフェンダー！！」

フィールドに巨大な盾を持った魔導師が現れた。……どことなく顔  
が魔導戦士デイフェンダーに似てる気がするが…

マジシャンズ・デイフェンダー / DEF 2500

「そしてサニー・ピクシーをリリースして闇紅の魔導師を召喚！！」  
『久々の出番だあああああ！！！！』

ハイテンションで闇紅の魔導師が現れた。それもそのはず、ものす  
ごく出番が少ないからだ。  
ウリイはガイザレスとなるために必要、イナはなぜかよくユウが引  
くため壁として出てくる。神楽は此処という時の守りとして…だが、  
闇紅の魔導師は最近出番が無かった。

「闇紅の魔導師の効果発動！！召喚成功時、このカードに魔力カウ  
ンターを2つ乗せる！！さらにこのカードに乗っているカウンター

1つにつき攻撃力を300ポイントアップする!!」

闇紅の魔導師 / ATK1700 2300 / MO 2

「バトルフェイズ!! 闇紅の魔導師でフレイムウィングマンに攻撃  
!!!」

「リリース・レディの効果発動!! 効果でこのカードを守備表示に  
変更し、それに対して畏発動!! シークレットミッション!!」

突如フィールドに霧が発生し、それにより2体のHEROの姿が見  
えなくなった・・・

いや、霧の中につつすらと人影が見えた。だがどっちがどっちなの  
か分からない。

「さあて!!! 当たる確率は2分の一だ!!!」

「... 右へ攻撃!!! 闇紅衝撃波導!!!」  
ダーク・レッド・シヨック・ウェイブ

「はああ!!!」

右へ赤黒い波動を送ったダーク。そして霧が晴れると

「破壊されたのはフリーズ・レディ!!!効果発動!!!」

外してしまった。そして十代はデッキトップに一枚の魔法を置いた。だが次は紫苑のターンの為、来るのは更に次のターンとなる。

「私はカードを伏せてターン終了!!!」

ユウ&ツバキ

LP2800

手札1枚 手札1枚

マジシャンズ・ディフェンダー（DEF2500） 闇紅の魔導師

（ATK2300）

伏せカード3枚

「私のターン、手札から融合回収を発動。墓地のフェザーマンと融合を回収します」

「これは上手いな…相方の使ったカードを回収ってな」



「流石にあれこれ考えれる様にしているようだな」

シゲルの言うとおり、紫苑は自分でコンボや手段を考えてやっていった。

アカデミアに来て数週間だが、もう十分な経験を積んでいた。

「手札から融合を発動！！手札のフェザーマンとオーシャンを融合  
グレイト  
！！現れる、E・HERO Great TORNADO！！  
トルネード

GreatTORNADO/ATK2800

フィールドに嵐を巻き起こすヒーローが現れた。

「これが紫苑のHEROか…くう〜！！…かつこいいぜ！！」

「兄貴…そんなこと言ってる場合ではないっすよ…」

翔が十代の班のにそう呟くと突然フィールドの闇紅の魔導師とマジシャンズ・デイフェンダーが強力な風で体勢を崩した。

「GreatTORNADOは融合召喚成功時、相手の場のモンスター  
の好守を半部にする効果があります」

「そんな！？」

エレメンタルヒーロー グレイト  
E・HERO Great トルネード  
TORNADO

融合・効果モンスター

星8 / 風属性 / 戦士族 / 攻2800 / 守2200

「E・HERO」と名のついたモンスター + 風属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在する

全てのモンスターの攻撃力・守備力を半分にする。

闇紅の魔導師 / ATK2300 1150 / DEF2200 1100

マジシャンズ・ディフェンダー / ATK1500 750 / DEF2500 1250

「さらに手札より、ミラクルフュージョンを発動！墓地のオーシヤンとバーストレディを除外し、アブソルートZeroを召喚！！」

フィールドに氷のE・HEROが現れた。

それを見たシゲルが横で焼きそばを頬張っていた剣都に率直な疑問を聞いた。

「なあ剣都」  
「なんだ？」

「HERO使いは全員チートなのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その疑問に剣都は答えなかった。

「バトル！！アブソルートZeroでマジシャンズ・ディフェンダーへ攻撃！！瞬間氷結（Freezing at moment）！！」

「マジシャンズ・ディフェンダーの効果発動！！闇紅の魔導師に乗っている魔力カウンターを1つ取り除き、破壊を無効にする！！」

マジシャンズ・ディフェンダー

星7 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK1500 / DEF2500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードはシンクロ召喚に使用したモンスターの種族により以下の効果を得る。

#### 戦士族

魔力カウンターを1つ取り除く事でモンスターの破壊を無効にする。  
この効果は1ターンに一度しか使用できない。

#### 鳥獣族

魔力カウンターを1つ取り除く事でフィールド上のカード1枚を手札に戻す。この効果は1ターンに一度しか使用できない。

#### 天使族

自分フィールドの上の表側表示モンスターの攻撃力と守備力は500上がる。

闇紅の魔導師 / ATK 1150 850

等々闇紅の魔導師の攻撃力が1000を切ってしまった。しかしツバキには、まだ手は残されていた。

「ではフレイムウイングマンでマジシャンズ・ディフェンダーへ攻撃！フレイムシュート！」

「きゃあー！」

ユウ&ツバキ / LP 2800 1300

「っ……！！リバーカード、魔導師の術印を発動！！デッキ、または手札からレベル4以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

！デッキからナイトエンド・ソーサラーを守備表示で特殊召喚！！」

ナイトエンド・ソーサラー／DEF400

フィールドに鎌の様な物を持った少年が現れた。それと同時にその鎌から次元の裂け目が現れた。

「ナイトエンド・ソーサラーが特殊召喚に成功した時、相手の墓地のカードを2枚まで除外する！！融合とリリース・レディを除外！」

そう宣言すると紫苑と十代の墓地からカードが1枚ずつ裂け目に吸い込まれていった。

「フレイムウイングマンの攻撃…は、くず鉄のかかしがあるので無意味ですね。ターンエンドです」

十代&紫苑

LP4000

手札2枚 手札2枚

フレイムウイングマン（ATK2100） アブソルutzer

（ATK2500） GreatTORNADO（ATK2800）

伏せカード0枚

「ボクのターン！！！」

ユウは引いたカードを見た。そして手札のカード、場の状況

「ツバキ、借りるよ!!」

「うん!!」

ツバキの返事を聞いたユウは自身のエクストラデッキからカードを一枚取り出した。

「レベル6の闇紅の魔導師にレベル2のナイトエンド・ソーサラーをチューニング!!」

大いなる魂よ!砕かれし魂と共に光の風を纏いその身を現わせ!!」

6 + 2 = 8

「シンクロ召喚!!舞いあがれ、スピット・シルバー・ドラゴン!!」

「へへ…来たぜ、ユウのエースモンスター!!」

十代のテンションが上がっていた。

「そして、スピリット・バードを召喚!!効果発動!!」

スピリット・バード / ATK 0

フィールドにガラスで出来た鳥が現れると同時にデッキから一枚のカードが飛び出した。それはスピリット・コクーンだった。

「リバース罫、シンクロン・スピット・パワーを発動！！墓地のマジシャンズ・ディフェンダーを除外してボクの場のシンクロモンスターへの攻撃力を500上げる！！」

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 2500 3000

「そしてスピリット・バードを除外して銀翼の魂を発動！！更にスピットの効果でカードをドロー！！」

引いたカードを見たユウはそのままそのカードを魔法・罫ゾーンに置いた。

「スピリット・ドローを発動！！墓地の雷帝神を除外してカードを2枚ドロー！！更に手札断殺を発動！！互いに手札を2枚捨てる！！」

「（ネクロ・リターナーとシンクロン……ですが、これは好都合ですね）」

紫苑は墓地に送られたカードを見てそう思っていた。その後引いた

カードはエアーマンとフォレストマンだった。

しかしもうこのデュエルで使うことの無いカードと直感で感じていた。

「スピリット・ソウルの効果発動！！墓地に送ってスピリット・フィールドを手札に加えそのまま発動！！墓地の因幡之白兔を除外して神楽を特殊召喚！！」

『久しぶり〜十代〜！！』

「お、神楽だ」

現れた神楽を久しぶりに見た気がした十代だった。

「バトル！！スピット・シルバー・ドラゴンでアブソルートZeroへ攻撃！！スピリット・ブラスト！！」

「きゃあ！！！！」

十代&紫苑 / LP 4000 3500

「Zeroの効果発動！！貴女の場のモンスターを全て破壊します！！！！」

「手札のスピリット・フィッシュを墓地へ送り破壊は無効！！そして銀翼の翼の効果で破壊したモンスターの攻撃力…2500をスピ



ットに加算する!！」

スピット・シルバー・ドラゴン / ATK 3000 5500

「5500!?!」

「そして第二撃!!! Great TORNADOへ攻撃!!!スピリット・ブラスト!!!」

「きゃああああ!!!!」

十代&紫苑 / LP 3500 800

「ターンエンド!!!」

ユウ&ツバキ

手札0枚 手札1枚

LP 1300

スピット・シルバー・ドラゴン (ATK 3000) 神楽 (DEF 450)

シンクロン・スピリット・パワー 銀翼の翼 伏せカード1枚

このままいけばユウとツバキの勝利 そのはずだった。

「俺のターン!!!」

そう…十代が主人公では無かったら。そして　運までも味方に  
引いたカードをそのまま発動した。それはフリーズ・レディで引い  
たカードだ。

「死者蘇生を発動！！墓地のE・HEROシンクロンを特殊召喚す  
る！！」

フィールドに小さな勇者が現れた。だがその光景にユウは眉をひそ  
めた。

「シンクロンはHEROとシンクロするモンスター…けど十代のデ  
ッキにはシンクロモンスターはいないはず…」

「へへっ。それは…」

こういうことだ！！レベル6のE・HEROフレイムウィングマン  
にレベル1のE・HEROシンクロンをチューニング！  
闇を切り裂く光の心、その全てを具現化せよ！！」

「十代がシンクロ!?」

6 + 1 = 7

「シンクロ召喚！！！光と共に舞いあがれ、ファントム・ブルース・  
ドラゴン！！！」

ファントム・ブルース・ドラゴン / ATK 2800

そう宣言した瞬間十代の場にファントム・ブルースが現れた。  
その光景に会場にいた全員が驚いていた。

あの融合を使いこなす十代がシンクロを行ったのだ。

「へへ… 始まる前に紫苑から受け取っておいて正解だったぜ」

そう、始る前に紫苑が十代に持たせていたのだ。

それはある種のギャンブルで、紫苑がシンクロンを出せるチャンス  
を作らなければファントム・ブルースは確実に出せない。

「更に手札のスカイスクレーパーを捨てて、墓地からミラクルフユ

「ジョンを手札に加える！！そして発動だ！！」

今十代と紫苑の墓地にはフェザーマン、シンクロン、フレイムウィングマン、アブソルートZero、GreatTORNADOがいる。

恐らく

「墓地のフェザーマンとシンクロンを除外して現れる！！E・HEROTHESHAYINING！！」

シャイニング / ATK 2600

フィールドに光り輝くモンスターが現れた。するとその周囲から無数の光が現れた。

「シャイニングは除外されているE・HERO一体につき、300ポイント攻撃力がアップする！！除外されてるのは5体！！よって1500ポイント攻撃力をアップする！！」

シャイニング / ATK 2600     4100

「攻撃力4100……！！」

「これが最後だ！！手札からR-ライトジャスティスを発動！！フ

イールドのE・HERO一体につき魔法・罠カードを一枚破壊する  
！！その伏せカード…くず鉄のかかしを破壊だ！！」

「なっ！？」

「しまった！！」

<sup>アール</sup>  
R-ライトジャステイス

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のつ  
いた

カードの枚数分だけ、フィールド上の魔法・罠カードを破壊する。

伏せていたくず鉄のかかしが破壊された。

そして 終幕へ

「バトル！！シャイニングでスピット・シルバー・ドラゴンへ攻撃  
！！オプティカル・ストーム！！！！」

「ぐっう…スピット…！！」

ユウ&ツバキ/LP1300 200

「最後だ！！ファントム・ブルース・ドラゴンで神楽に攻撃！！イ  
リユージョン・ダスト！！」

「神楽の効果！破壊された時バトルフェイズを  
」

そう言っていたユウだったが、ユウとツバキの周囲に霧が立ち込めていた。

「ファントム・ブルースは戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に800ポイントのダメージを与える！！ファントム・ガスト！！」

「うわああああああ！！！！！！」

「きゃああああああ！！！！！！」

ユウ&ツバキ/LP2000

『そこまで！！優勝は…結城十代&姫野紫苑ペアああ！！！！』

「すげえよ！！あんた攻防初めてだ！！」

「両方とも！！ナイスバトル！！」

「はう…十代って案外かつこいいね…」

剣都の言葉と共に大歓声が上がった。その中には様々な声があったが中々聞こえなかった。

『優勝者には大徳寺先生より商品が渡されるぜ！！』

「にゃ。2人ともおめでとうだニヤ」

「先生！！やったぜ！！」

十代の言葉を聞いて何処にそんな元気があるのか大徳寺は苦笑いを浮かべていた。

そして持っていた小さな箱から2つのペンダントを取り出した。

「優勝した2人にはこのペンダントが贈呈されるニヤ」

「ペンダント？」

其々受け取った　十代は青い、紫苑は赤いペンダントを見た。

「まあ一種のお守りだニヤ（本当は恋愛成就のお守りだけど、2人には関係ないと思うニヤ）」

それを受け取った十代は持っていた青いペンダントをスツと紫苑にかけた。

「十代…？」

「…へへ。やっぱり紫苑には青が似合ってるぜ」

はにかんでそう言った十代は若干紫苑の顔が赤くなっているのがつかなくかった。

一方紫苑もお返しと言わんばかりに持っていた赤いペンダントを十代にかけた。

「…十代も、赤が似合いますよ」

『笑顔』でそう言った紫苑の言葉に十代はドキリとしてしまった。  
それを見た大徳寺は

「（案外必要になるかもしれないにゃ）」

と思っていた。

『それじゃあ！！最後に戦ってくれたすべての決闘者に拍手を！！』

劍都の言葉で大会が閉じた。

「悪いな、一日手伝わせて」  
「良いわよもう。過ぎた事をつだつた言ってもしょうがないでしょ  
…それにしてもおいしいわね」

ジュンコはシゲルの焼きそばの売れ残りを食べていた。他に翔や万  
丈目に隼人がいた。



「それに…一日中一緒にいられたからね…」

ジュンコの言葉を聞く人はいなかった。

「綺麗ですね…」

レッド寮の前の海が見える崖の上で座って夕陽を見ながら紫苑はそう言った。

その膝の上には疲れて寝てしまった十代がいた。

「…生きることの意味はないと思っていました。ですが…今日は楽しかったです」

そう言って紫苑は寝ている十代の頬にキスをした。

「今日は楽しかったね、ツバキ」

「うん。紫苑に負けたのは悔しかったけどね」

そっついながらユウは紫苑をブルー寮へ送っている最中だった。

「ユウ」

「ん？どうしたの？」

歩みを止めたツバキにユウは振り返った。

「来年も…祭り行こうね」

「…うん。約束だよ」

## 第二章終幕〜夏祭り〜（後書き）

さて、第二章終了です！

シゲル「おい待てこら。なんだこの突っ込みどころの話は」

まあカップルを出しただけです…

ユウ×ツバキ 紫苑×十代 シゲル×ジュンコだね。今のところ。

ツバキ「紫苑と十代にシゲルとジュンコさんって…また異色だね…」

まあ紫苑と十代はある設定をやるために。そしてシゲルとジュンコは…すまん剣賭

剣賭「は？」

初めは剣賭とジュンコだった。けどこうなった。

ユウ「なんで？」

どうしてもシゲルの相手が浮かばなかった。6人目のメンバーをやるにしてもシゲルは早めに決めていたほうが楽だったが…

紫苑「それで…ジュンコさんですか」

そう。そのおかげで剣賭の相手も考えついた

5人「……」（ものすごく悪い笑み…）「……」

そしてこれでいわゆる日常編終わりです。

次回からVSセブンスターズ戦と管理局の干渉です。

まあセブンスターズはそれほど出てきませんと思います。

次回予告：side紫苑

夏祭りから少し経過した時間。管理局の干渉も少なくなり、平和な日々を過ごしていた私たち…ですが、また新たな戦いが始まりました。

セブンスターズ  
七星という集団が世界を滅ぼす力を持つカードを狙っている…

そのために7人のデュエリストを……ですが校長、12人いますよ？

そして始まったHEROVSHERO

私は…負ける気はありません。

次回第三十四話 英雄たちの戦い  
最強カードは『融合』

次回もお楽しみに！！感想待ってます！！

## キャラ紹介〜世界の矛盾〜（前書き）

今回は第二章終了記念として、メイン五人の今現在のキャラ紹介をします。

## キャラ紹介〜世界の矛盾〜

名前：聖牙夕せいがゆう

愛称：ユウ

使用デッキ：除外スピリット

フェイバリットカード：スピット・シルバー・ドラゴン

身長：155cm

体重：45kg

髪の色：焦げ茶色

眼の色：青色

幼いころに両親を亡くし、数年の間ストリートチルドレンとして生きていた。

その為か差別、いじめ、孤独を嫌う。一人称はボク。誰とでも平等に接するが、ツバキにちょっかい掛けたりした奴は容赦しない。

また、シゲルに守られてばかりだったから負担をかけたくないと思っっている。

試験会場で絡まれているツバキを見て一目惚れしてしまったが、本人含め気付かなかった。だがその帰りに、イナに指摘され、そしてファイアンセ事件の時に改めて考え、告白した。

その後しばし2人で甘い空気を出してしまったため、購買でブラックコーヒーが良く売れるようになったが、2人は知らない

除外して活用するカードを豊富に入れた【除外スピリット】を使い、更にシンクロモンスターで盤石な攻めをする。ただしメンタル面で弱く、タッグなのではここぞという時に、味方の足を引っ張るかもしれないというプレッシャーでミスをする。

仲間や友達が危険な目に合っていると待っていていられず自らその厄介事に飛び込んでしまうこともしばしば…

幼いころから学校に行っていなかったため学がない。

精霊は『イナ』と『スピット』、『神楽』がいる。

名前：イナ

精霊：因幡之白兔

ユウが幼い時にしばし夢で探してくれと訴えかけていた。なぜ他のカードと共に埋められていたのか、そしてユウの元に行ったのかはイナ自身も知らない。

直接攻撃モンスターなのに最近壁にしか使われないのに不満を持っている。が、ユウが自身を使って負けるより使われずに勝つ方がいいと望んでいる。

攻撃名は『餅つきアタック』（ただし、イナしか言わない）

名前：スピット

精霊：スピット・シルバー・ドラゴン

ペガサスから送られたカードの中の一枚。ソウル、カオスと共に何故かデフォルメに精霊化した。また「ガア」としか喋れず、意思疎通もできない。他の2体からすれば臆病な次男という感じだ。3人と2匹にルキ、イナにしか懐かない。

名前：神楽

精霊：神楽

スピットと共にペガサスから送られたカードに含まれていたカード。

性格は陽気なお姉さんという感じだが、最近出番が無いのに不満を持っている。

ユウ（処刑モード）

ユウがブチ切れた状態。こうなればツバキやシゲルでも止められなくなり気性も荒く、好戦的になる。

デッキは本気で行くため『異次元デッキ』を使用する。

ちなみに瘴気を生みだせて、それをコントロールすることができる。

名前：姫野椿ひめののしほき

愛称：ツバキ

使用デッキ：魔力デッキ

フェイバリットカード：カオス・レッド・ドラゴン

身長：160cm

体重：（なぜか閲覧不可）

髪の色：白金（白髪に近い金髪）

眼の色：青色

アカデミアに来る数年前にとある森の中に倒れていたところを剣都の父親の竜也に保護してもらった。

そして剣都とは兄妹のような関係になったのだが、竜也が死亡し変わっていく剣都を見て恐怖を覚え逃げるようにアカデミアに入学した。

その後フィアンセ事件で自分の気持ちに気付き剣都の介入でユウに心情を明かした。

暇な時はシゲルとトメさんに料理を教わっている。

最近の悩みはときどき変な夢を見ることだ。もしかしたら失われた



記憶かもしれないが明らかに現実ではありえないような夢ばかりで首を傾げている。

今現在剣都と本当の兄妹の様に分かりあえて嬉しく思っている。そして血のつながりが無いが紫苑と姉妹の関係になりさらに明るくなった。

しかし人見知りだ。

ユウよりは学があるが幽霊やお化け、怪談話が苦手。

魔法カードやサポートカードによって魔力カウンターを乗せ、それによって展開する戦術を得意とする。だがシンク口導入後、それを踏み台に『魔力カウンターを乗せつつ展開』という戦術を取っている。

精霊は『ダーク』、『カオス』、『グリ』の3体がいる。

名前：ダーク

ダークレッド・エンチャンター

精霊：闇紅の魔導師

記憶を失い倒れていたツバキの唯一持っていたカード。

しかし精霊としてツバキの目の前に現れたのは竜也が引き取ってしばらくしてからだ。

その為ツバキの過去を知らないはずだ。

ある種のツバキの父親代わり。

名前：カオス

精霊：カオス・レッド・ドラゴン

ペガサスから送られたカードの中の一枚。スピット、ソウルと共に何故かデフォルメに精霊化した。また「キュア」としか喋れず、意思疎通もできない。他の2体からすれば甘えん坊な末っ子という感じだ。ほぼ全員に懐く。

名前：グリ

精霊：クリエイト・リゾネーター

元々はシゲルのカードだった『クリエイト・リゾネーター』をツバキは勝手に持ち出したのだが、その後グリの意思により正式にツバキのカードとなった。

カオス同様甘えん坊な性格でツバキや元所持者のシゲルに甘える。

名前：獸斬繁むねはらぬき

愛称：シゲル

使用デッキ：同調剣闘獣デッキ

ファイバリットカード：ソウル・ブラック・ドラゴン

身長：173cm

体重：57kg

髪の色：真つ黒

眼の色：黒

過去に何かあったらしいがそのことをシゲルの精霊のウリィと神の一体のアナトしか知らない。

料理が得意でよく生徒や大徳寺などの教師に頼まれて作っている。

しかし気に入らないブルー生徒や教師は断っている。

ちなみに作中では軽く触れられていたが複数のヘルウェイパトロールを倒すほどの喧嘩の腕前だ。

基本的にクールな性格で笑わないため、怖がられているが根は優しい人。

また面倒事をよく頼まれオリキャラの中では一番の苦勞人。最近ならルームメイトのユウと親友のツバキのラブラブムードに悩まされている。

世界の矛盾の中で一番頭がよく、常に冷静にいられる。だが船酔いがひどい。

デッキに戻して効果を発動する剣闘獣と様々な効果を持つリゾネーターシリーズを使いこなす。ちなみに作中では墓地獣と呼ばれる特殊な剣闘獣も存在する。

名前：ウリイ

精霊：剣闘獣ベストロウリイ

シゲルの主要カードの一体。老人の様な喋り口調で物知り。だが最近三沢エアーマンとなっている事に恐怖を感じている。

名前：ソウル

精霊：ソウル・ブラック・ドラゴン

ペガサスから送られたカードの中の一枚。スピット、カオスと共に何故かデフォルメに精霊化した。また「グア」としか喋れず、意思疎通もできない。他の2体からすればしっかり者で長男という感じだ。人を大切にしたり、楽しい人に懐く。

名前：羽黒剣都

はぐろ けんと

愛称：剣都

使用デッキ：機甲デッキ

フェイバリットカード：クロック・ゴールド・ドラゴン

身長：168cm

体重：54kg

髪の色：金髪

眼の色：緑

AW社という巨大軍事会社の総帥。実態は戦場孤児を集めて孤児院に入れている会社だった。だが前総帥の死亡後に戦争を仕掛ける傭兵会社へと変わってしまったツバキはその為に剣都から離れて行った。

今は改心し管理局の事を調べている。そして区切りをつけ、アカデミアへと入学した。

また合気道などの武道を極めており、シゲルよりも喧嘩が強い。

最近突如として現れたシンクロモンスターについて頭を悩ませている。

そして自身に精霊を見る力が備わった事も驚いていた。

ツバキの事が好きだったが、ツバキの気持ちはユウに向いているため身を引いた。

そして新たな妹となった紫苑に対してどう接していいのか分からない事に悩んでいる。

頭はシゲルの次によく、判断力にたけている。しかし他人と接するとどうしても強い口調になってしまう。

名前：クロック

精霊：クロック・ゴールド・ドラゴン



名前：ファン

精霊：ファントム・ブルース・ドラゴン

紫苑のデッキの唯一のシンクロモンスター。研究所に捕らわれている時から紫苑が所持しており、唯一の心の支えだった。

泣き声は「キュル」で意思疎通はできない。

基本的に紫苑についており、紫苑以外に懐く事はあまり無い。

## キャラ紹介〜原作メンバー〜

### 結城十代

原作の主人公。基本的に原作通りの性格だがユウ達が狙われているのを知って心配している。また紫苑との夏祭りの出来事で少し意識しているが鈍感な本人は気付いていない。

ごくたまに紫苑のカードを借りて使用する事がある。そのカードの中ではアブソルートZEROが一番のお気に入りらしい。

E・HEROのシンクロを作る気はないので恐らく漫画版とアニメ版を組み合わせたデッキを使用すると思われる。

### 丸藤翔

原作の一人。十代を兄貴と慕いよく行動している。だがなぜか十代と紫苑と一緒にいる場によく、万丈目やシゲルの所にもよく行っている。

初めてツバキを見た時惚れてしまったが、その後の経緯で身を引いた。

恐らくその内機械族シンクロ（ロイド系）で戦う事があると思われる。

### 丸藤亮

原作の一人。唯一原作の中で管理局と戦っており、ヘルカイザーの片鱗を見せた。

翔が管理今日の事に関わっていると聞いたが、もう子供じゃないと口出しするのは止めている。

孤高な感じがするが結構仲間思いで、厄介事に巻き込まれる紫苑や

十代をよく助けている。

サイバー流はシンクロを作る気はないので…「グオレンダア!!」  
が見れると思う。

天上院明日香

原作の一人。結構親しく接していたなのは達がいなくなったのに少しさびしい思いをしていた。だがシゲル、そしてユウが志度と戦ったているのを見て自分にはなにもできなくてムシヤクシヤしている部分もある。

恐らくだが、この先この作品でのデュエルの出番はないと思われる。

前田隼人

原作の一人。優しい性格で自分の周りで起きている戦いに心を痛めている。

実を言うとユウ達の後に加わった戦いの精霊や3体のドラゴンは隼人のデザイン。

隼人がこの作品で戦うのは、例のクロノス戦ぐらいしかないとかわれる。

三沢大地

原作の一人。原作メンバーの中で万丈目と共に唯一管理局の事を知らない人。

カードの知識が豊富で導入されたシンクロモンスターでの新たなコンボを考えている。

精霊でもないカードを見て惚れてしまう性癖は健在で、知ってか知らずか神楽も可愛いと思っている。



万丈目準

原作の一人。三沢と共に管理局の事が知らない人。  
その内アームドドラゴンで何か管理局と戦う事を考えている。  
万丈目の持つオジャマは5人にも見えるが、万丈目がすぐ引っ込めるため気のせいだと思っている。

枕田ジュンコ

原作の一人。この作品では今現在準レギュラーだ。  
管理局の事を知らず、また助けた事を言わなかったシゲルに惚れてしまった微妙な位置の人。  
シゲルに惚れている事をももえに指摘されると真っ赤になりながらデュエルで1KILLしてしまっよく分からない実力がある。

浜口ももえ

原作の一人。この作品では準レギュラーの一人。  
ジュンコと同様に管理局の事を知らない。  
周りの恋愛事情を「あらあら」と言いながら傍観している。  
何気に原作メンバーの中で一番周囲が見えて状況を理解しているかもしれない（恋愛的な意味で）

## キャラ紹介／管理局

高町なのは

管理局の戦力の一人。喋り方に独特の癖がある管理局の通称『白い悪魔』

戦い方は大型天使とアナトを組み合わせたアテナバーン系のデッキシユテル。紫苑を気にかけており、再び分かりあえたいと思っている。

『世界の矛盾』との亀裂を甘く見ており、いつでも仲直りできると思っている。

フエイト・T・ハラオン

管理局の戦力の一人。基本的に物静かだがデッキは儀式召喚に特化したデッキ。

記憶喪失で本当の家族を知らないツバキに何処かシンパシーを抱く。なのは同様『世界の矛盾』との亀裂を甘く見ている。

八神はやて

管理局の戦力の一人で通称『小狸』

戦い方は『ダーク』と名のついた闇属性モンスターを展開する戦法を取っている。

数年前に家族の『リーンフォース・アインス』を失ってから家族や友達を大切にしているが、その為には全て敵に回す気を持っている。『世界の矛盾』との亀裂を重く見ており、もう仲良くなれないと思っっている

リンデイ・ハラオン

管理局の戦艦アースラの提督。

最初は話し合いで3人がロストロギアを渡すと思っていたがシゲルの言葉になにも言えず、その後は徐々に武力行使で奪い始めた。

デッキは未使用だが相当な実力を持っている。

クロノ・ハラオン

管理局の戦力の一人。フェイトの義兄でリンディの実子。

実力はアースラ内ではトップでカイザーとも渡り合った(?)。

『氷結界』という名のシリーズを扱う。

シグナム

はやての持つ『夜天の書』の守護騎士の将。  
ヴォルケンリッター

使うデッキは『六武衆』という武士のデッキだ。

アカデミアに体育教官として潜入したが精霊界より帰還したユウと共に来た紫苑にばれてしまう。

なぜか紫苑のデッキのHEROを知っていた。

シヤマル

シグナムと同様ヴォルケンリッターの一人。

使うデッキはロック・シモッチ・キュアなどのバーン系統を全て入れた『オールバーン』

アカデミアに保険医として潜入したが紫苑に見破られてしまう。

その後剣都のオーバーキルでしばらく戦闘不能になった。

## キャラ紹介／管理局（後書き）

約二名いない人がいますが、それは奴らが出てきたとき出します。  
それとしばらくものすごく忙しくなるので8月の中ごろになるまで  
次話投稿できないと思います。

第三十五話 英雄たちの戦い（前書き）

はい、新作投稿です…いろいろと忙しかった…

## 第三十五話 英雄たちの戦い

夏祭りから数日後

代表戦の裏で人知れず行われてたカイザーVSクロノのデュエル。そして救出された紫苑。悲しそうな表情をしていたなのは。戦いを終えたカイザーが仲間に加わり一先ず安心している世界の矛盾の5人。

だが、誰も知らない所で新たな戦いが始まっていた

「今日の授業はこれで終了だニヤ」

大徳寺の言葉に全員が固まった体を伸ばしたり誰かと喋り始めたりしていた。

すると寝ていた十代は翔に起こされた。

「兄貴〜！授業終わりましたよ〜！！」

「グガッ…お〜飯だ！！」

そう言つと十代はどこからか弁当を取り出した。

ちなみに十代の席を中心に周りはユウ、シゲル、剣都が前にいて後ろにはツバキ、紫苑、三沢がいる。

「相変わらずだな」

「まあそれが十代だからね」

剣都の呆れた言葉にユウがそう言った。ちなみにもう2人は学園に馴染んできていて他にも親しい友人ができていた。

「おっと、十代君。弁当の前に一緒に校長室に来てもらおうニヤ」

「え？校長室？」

「十代。短い間だったが楽しかったぜ」

十代が大徳寺にそう聞き返すと万丈目が勝ち誇ったようにそう言った。

だが大徳寺は笑顔で万丈目の方を見た。

「万丈目君も呼ばれているニヤ」

「俺も!??」

「あと明日香さん、三沢君、聖牙君、獣斬君、羽黒君、姫野君姉妹もだニヤ」

「結構呼ばれてるな…9人も」

校長室：前

大徳寺引率の元9人は校長室に来ていた。

「なんで呼ばれたのさ」

「さあ？実は私も呼ばれたのにや」

「なんつーか、共通点の少ない面子だな」

十代の言葉に大徳寺は困った様にそう言った。すると剣都はぼつりと言った。確かにこの面子の共通点は無いいつても良い。

例の関係だとしても大徳寺と三沢と万丈目は関係なく、代表戦関係なら剣都と紫苑は関係ないといつても良い。

すると逆方向からクロノスと亮もやってきた。

それに気付いたクロノスはニヤニヤしながら9人を見ていた。

「そうそうたる顔触れですノーネ」

「いえ、ただ単に人数が多いただけです」

クロノスの言葉に紫苑はそう言った。確かにものすごく人数が多い。

取りあはず待たせるのは悪いので11人は校長室に入ることにした。



校長室

「三幻魔のカード？」

「そうです、この島に封印されている古より伝わる3枚のカード」

重々しく鮫島校長がそう言った。だがユウ達はそれほど重大には見ていなかった。

幻魔よりも恐ろしい神のカードの化身とも言えるカードを持っているからだ。

「え？この学園ってそんな昔からあったのか？」

「馬鹿。そのカードを封印した場所にこの学園を立てたんだろ」

十代の言葉に剣都がそう言った。すると校長室にいた全員が剣賭を見た。

剣都はそれに気にせず説明を続けた。

「封印したモノの上にわざわざ学園を立てるってことは…恐らくこの学園はそのカードの封印の為に建てられたんだろ。それなら離島にわざわざ学園を立てる意味も納得できる。その封印とやらが解けた場合も考えて街中で何かが起こるより周りに何も無い海なら被害も少ないしな」

「ほう…よく分かりましたね」

剣都の言葉に鮫島校長は満足そうにそう頷いた。

「学園の地下深くにその三幻魔のカードは眠っています。島の伝説によると、そのカードが地上に放たれる時、世界は魔に包まれ、混沌に覆われ、人々に巢食う闇が解き放たれ、やがて世界は破滅する。そう伝説が残されるほどの力を持つカードだと言われています」

「……………（ウリイ、そんなカード聞いたことあるか？）」

『（いや、我也聞いた事が無い）』

「よくわかんないけど、なんか凄そうなカードだな」

「黙って聞いているノーネ！！」

十代の他人事のような言葉にクロノスは怒鳴った。だが鮫島はそれを無視してさらに続けた。

「その封印を解こうと、挑戦してきた者達が現れたのです」

「一体、誰が？」

「七星、セブンスターズと呼ばれる7人のデュエリストです。全くの謎の集団ですが…その内の1人が既にこの島に潜入しています」

亮の言葉に鮫島校長はそう言った時、ある箱を取り出した。その中には7つの鍵が入っていた。

「この7つの鍵がそろった時、三幻魔が蘇ります。そこで、この7つの鍵を守っていただきたい」

「守るといっても、どうやって…」

万丈目の言葉に「もちろん」と校長は前置きして応えた。

「デュエルです」

「……………デュエルで!？」

12人はそう驚いた。デュエルで守るとは一体

「デュエルで勝たねば、鍵を奪う事が出来ない…それが、封印のルールです。だからこそ、学園内でも屈指の7人に集まってもらいました」

「ですが校長、12人いますが…」

紫苑の言葉の通り此処には12人がおり、5人ほど多かった。

「それは聖牙君と猷斬君、羽黒君に姫野君姉妹は別件で呼んだんです。ですが…もし他の7人の中に辞退するという者がいれば、この5人から代わりの人物を選出させていただきます」

「……………」

鮫島校長の言葉にシゲルは何か引つ掛かっていた。

「もしもセブンスターズと戦う意思があるのならば、この鍵を受け取ってもらいたいのですが…」

「……………」

校長の言葉に三沢、明日香、万丈目が顔を見合わせどうするか悩んでいると十代が鍵を受け取った。

「おもしれ…やってやるぜ」

「……………フッ」

それを見た亮も一つ笑いながら鍵を受け取った。そして三沢、明日香、万丈目も鍵を受け取った。

「ふふふのひ。校長！脅かすのはいけませんネ。要するに、学園

の看板を道場破りが奪いに来ると考えれば良いノ〜ネ」

「まあ…今は』そう考えて貰っても結構ですが」

『今は』ということは、後々で何かが起こる　もしくは起こる』可能性』があるということだ。

そしてクロノスと大徳寺も鍵を受け取った。

「ありがとうございます。この瞬間から戦いが始まっています。どうかいつでもデュエルの準備をしていてください」

そしてクロノス以外の6人は校長室を去って行った。残された5人は校長の前に並んだ。

「それで…校長先生は私達に一体何の用ですか？」  
「わざわざ三幻魔の話ボク達に言っつてことは…それ関係ですよ  
ね」

ツバキ、そしてユウの言葉に校長は椅子に座って腕を組んで頷いた。

「……この中で一番周りが見えてそうな…獣斬君と羽黒君に聞きませんが…先程の三幻魔のカードを聞いて、『奴ら』がどうすると思いますか？」

『奴ら』

その言葉は聞かれても大丈夫なように取りきめられた管理局の事を指す言葉だった。

それを聞いて2人はなぜ此処に呼ばれたのか理解した。

「奴らが…三幻魔を奪いに来る可能性があるということか」

「その通りです。話にしか聞いていませんが…奴らは貴方達のカードを狙ってきました…そして三幻魔も同じように力のあるカード…攻める理由は十分にありません」

確かに 目覚める前のカルマとアナト、そして今だ眠っているコスモスのカードを狙って来たやつらにとって三幻魔も似たようなものだ。

どうせあれこれ理由を並べて奪いに来る。断った場合

「7人が危ないということか」

シゲルの言葉によろやく事態を理解した3人。鮫島校長は頷くと空の鍵の入っていたケースを見た。

「セブンスターズ同様に、鍵を奪いに来る可能性があります。以前聞いた話ですと十代君達も奴らの存在を知っているらしいですが…これ以上彼らに負担をかけてはいけません。それに…貴方達は奴らと戦う力があると聞きました」

そう言って校長は5人の付けた特別カラーのディスクを見た。もしも強行手段を管理局がとつても5人なら対処できる。

「鍵の守護は彼らに任せるとして…奴らの対処はお願いします」

「つまり…俺達であいつらを守れってことか」

その後5人で話し合った結果、明日香は紫苑とツバキに任せて三沢はクロノスが適当に訳を作つて剣都がイエロー寮の空き部屋に住む事となった。

十代と万丈目はユウとシゲル、カイザーは問題無いと判断して護衛は付けていない。

「まあ、カイザーならあいつらを蹴散らすだろうな」

大徳寺とクロノスは教諭なので無理に張り付く事も無かった。  
一応管理局の事を知ってるメンバーにはそのことをメールした。

「お〜い!!!紫苑〜!!!」

そして5人がデッキ調整をレッドの剣都の部屋で行っていると十代達がやってきた。  
どうやら紫苑に用の様だ。

「どうかしましたか？」

「いや、前に勝負する約束をしただろ？そろそろ勝負しようぜ！」

そう、紫苑と剣都の転入の日に約束した 『HERO VS HERO』だ。

レッド寮前

「これは面白い事になったにや、ね？ファラオ」

対峙した紫苑と十代を見て大徳寺がそう言った。2人のデッキを知っている、また紫苑目当てでどんどん人が集まってきた。

「何か知りませんが、観客が多いですね」

『(オメエ目当てだよ!!)』



純粹に勝負を見に来たメンバーの心が一致した瞬間だった。

「デュエル!!」

十代のターン

「へっ行くぜ、俺のターン!!（融合は無い。けど、結構いい手札だぜ）俺はE・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚!!」

その宣言と共にバイザーの様な物をした電気のHEROが現れた。  
初手としてはまずまずのモンスターだ。

スパークマン / ATK1600

「更にカードを伏せてターンエンドだ!!」

十代

LP4000 手札4枚

スパークマン（ATK1600）

伏せカード1枚

紫苑のターン

「私のターン（スパークマン…十代のデッキは私とは色が違うHEROデッキ。融合は後に取っているのか…それともないのか…）私はE・HEROフォレストマンを守備表示で召喚」

体の一部が木と同化しているモンスターが現れた。紫苑のデッキの重要なサポートモンスターの一体だ。

フォレストマン/DEF2000

「さらにカードを2枚伏せてターンエンド」

紫苑

LP4000 手札3枚

フォレストマン（DEF2000）

伏せカード2枚

十代のターン

「俺のターン！！手札から融合賢者を発動！！デッキから融合を手札に加える！！」

「流石に融合のサポートカードは入っているのか…」

十代の使ったカードにどこかほっとしたシゲルがいた。  
理由としては まあ、十代だからだ。

「そして融合を発動！！場のスパークマンと手札のクレイマンを融合！！現れる！！E・HEROサンダー・ジャイアント！！」

フィールドに巨体を持つスパークマンが現れた。

E・HEROサンダー・ジャイアント

融合・効果モンスター

星6 / 光属性 / 戦士族 / 攻2400 / 守1500

「E・HERO スパークマン」+「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分の手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

サンダー・ジャイアント / ATK2400

「サンダージャイアントの効果発動！！手札のカードを一枚捨て、サンダージャイアントよりも攻撃力が低いモンスターを破壊する！！ヴェイパー・スパーク！！」

サンダー・ジャイアントの効果で発生した雷によってフォレストマインが破壊された。

「ッ…ですがリバーズカード、エレメンタル・ミラージユを發動します。効果により破壊されたフォレストマンを守備表示で召喚します！」

エレメンタル・ミラージユ  
通常罫

自分フィールド上の「E・HERO」と名のついたモンスターが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時に發動する事ができる。

このターンに破壊され墓地へ送られた「E・HERO」と名のついたモンスターを、  
全て自分フィールド上に特殊召喚する

紫苑の場のモンスターゾーンの空間に鏡が割れるような音がしフォレストマンが飛び出した。

フォレストマン/DEF2000

「じゃあサンダー・ジャイアントでフォレストマンに攻撃！！ボールテック・サンダー！！」

「リバーズ罫發動！ヒーローバリア！効果により戦闘を無効にする！！」

それを見た十代はワクワクと擬音が聞こえてきそつな表情をしてい

た。

「すげえ〜！！すげえ楽しいぜ紫苑！！俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！！」

十代

LP4000 手札1枚

サンダー・ジャイアント（ATK2400）

伏せカード3枚

紫苑のターン

「私のターン、スタンバイフェイズフォレストマンの効果発動。デッキより融合を手札に加えます。そしてエアーマンを通常召喚します」

フィールドに翼を持ったHEROが現れた。

エアーマン/ATK1800

「エアーマンの召喚成功時、デッキよりHEROを一体を手札に加えます。効果によりレディ・オブ・ファイアを手札に加え融合を發動！」

そう宣言した瞬間、紫苑の手札の炎のHEROが2体飛び出した。

「手札のザ・ヒートとレディ・オブ・ファイアを融合!!現れる、  
E・HEROフレイムブラスト!!」

エレメンタルヒーロー

E・HERO フレイム・ブラスト

融合・効果モンスター

星8 / 炎属性 / 炎族 / 攻2300 / 守1600

「E・HERO ザ・ヒート」+「E・HERO レディ・オブ・  
ファイア」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

水属性モンスターと戦闘を行う場合、ダメージステップの間  
このカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

紫苑のフィールドにザ・ヒートよりも熱いHEROが現れた。

しかし攻撃力がサングァー・ジャイアントに届いてなかった。

しかし本当の狙いはそこじゃなかった。

「手札からミラクルフュージョンを發動します。墓地のザ・ヒート  
とレディ・オブ・ファイアを除外し、E・HEROノヴァ・マスタ  
ーを召喚!!」

ノヴァ・マスター / ATK2600

もう一体熱いHEROが現れた。このターンで2回融合召喚をした

紫苑に野次馬がどよめいた。

「カードを一枚伏せ、バトル！ノヴァ・マスターでサンダー・ジャイアントに攻撃！！エクストリームフレイム！！」

「っー！！」

ノヴァ・マスターの炎に包まれたサンダー・ジャイアントは苦しもうにうめき声を上げて消滅した。

十代/LP4000 3800

「ノヴァ・マスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、カードを一枚ドロウする」

「それにチェインしてリバース罠、ヒーロシグナルを発動！！HEROが戦闘で破壊された時、デッキからレベル4以下のHEROを特殊召喚する！！来い、E・HEROワイルドマン！！」

フィールドにワイルドマンが守備表示で現れた。しかしエアーマンの攻撃でさえも壁にはならない。

「エアーマンでワイルドマンに攻撃！！ハイウィングー！！」

上空に飛び上がったエアーマンがワイルドマンに目掛けて滑空してきた。

「っ……!!」

恐らく十代のリバーズカードはブラフだろう。そうではなくてはサンダー・ジャイアントの時に発動しない理由が付かなかった。

「最後、フレイムブラストで直接攻撃!!」

「クッ……!!」

十代 / LP3800 1400

紫苑

LP4000 手札2枚

ノヴァ・マスター (ATK2600) フレイムブラスト (ATK

2400) エアーマン (ATK1800) フォレストマン (D

EF2000)

伏せカード1枚

十代のターン

「俺のターン!!っ来たぜ!!」

そう言った十代の目がワクワクしていた。それを見た紫苑は微笑ん



だ…十代はやはりどんな状況でも勝負を楽しんでいた。

「行くぜ！！俺は手札からエッジマンを攻撃表示で召喚！！」

「レベル7のモンスターをリリースなしで…！？」

エッジマン / ATK 2600 / 7

確かに十代の場に黄金の体のHEROが現れた。しかしリリースなしで召喚することはできないはずだった。

「へへ…墓地のネクロダークマンは一度だけHEROをリリースなしで召喚することができる！！」

E・HEROネクロダークマン

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1600 / 守1800

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、

自分はレベル5以上の「E・HERO」と名のついた

モンスター1体をリリースなしで召喚する事ができる。

ネクロダークマンの効果は紫苑も知っていた。しかし、そのカードを墓地に送るタイミングは無いといってもよかった。

「ですが、貴方の墓地にネクロダークマンは……そうか……あの時ですか…」

「気付いたみたいだな！」

『サンダー・ジャイアントの効果発動！！手札のカードを一枚捨て、サンダー・ジャイアントよりも攻撃力が低いモンスターを破壊する！！』

そう、サンダー・ジャイアントのコストの時だ。あの時十代はネクロダークマンを墓地に送っていたのだ。

「更にミラクルフュージョンを発動！！墓地のワイルドマンとエッジマンを融合！！」

「その為に…ワイルドマンを墓地に…！！」

ヒーローシグナルで呼び出すモンスターはバーストレディでもよかった。そしてランパート・ガンナーを呼び出せるが、それなら返しのターンで総攻撃を受け十代は負けていた。

勝つためには

「現れる、E・HEROワイルドジャギーマン！！」

この融合モンスターが必要だった。

E・HEROワイルドジャギーマン

融合・効果モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2300

「E・HERO ワイルドマン」+「E・HERO エッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。

「バトルフェイズ!! ワイルドジャギーマンでフレイムブラストに攻撃!!」

「くう!!」

紫苑 / LP4000 3800

「続いてフォレストマンに攻撃!!」

「クッ…!!」

「どうして十代はまだ攻撃できるの?」

「ワイルドジャギーマンは相手モンスター全てに攻撃することができる。バーサクデッドドラゴンもそうだな」

ツバキの言葉に最近出番が無かった三沢が答えた。

「更にエアーマンに攻撃!!」

「きゃあ!!」

紫苑 / LP3800 3000

「最後だ！！ワイルドジャギーマンとノヴァマスターに攻撃！！インフイニティ・エッジ・スライサー！！」

「攻撃力は同じ…相打ち狙い…！！（ですが、それで好都合！！）」

ワイルドジャギーマンとノヴァマスターは共に破壊され辺りは砂煙に包まれた。

「……………え？」「……………」

観客の全員が声をそろえて驚いていた。その目線の先には2人の場のカードの攻・守、LPなどが表示されている場所だったのだが

紫苑 / 30000  
十代 / 40000

2人とモライフが0になっていたのだ。

「リバーズ罨、ディフェンス・オブ・ヒーロー英雄防衛・リフレクター・ダメージ」  
「伏せカード、チェンジ・オブ・ヒーロー英雄変化・リフレクター・レイ」

ディフェンス・オブ・ヒーロー  
英雄防衛・リフレクター・ダメージ  
通常罨

自分フィールド上の「E・HERO」と名のついた融合モンスターが破壊され、その後自分フィールド上にモンスターがいなくなった場合のみ発動できる。  
破壊されたモンスター1体につき400ポイントのダメージを互いに与える。

チェンジ・オブ・ヒーロー  
英雄変化・リフレクター・レイ  
通常罨

自分フィールド上に存在する「E・HERO」と名のついた融合モンスターが  
戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。  
破壊された融合モンスターのレベル×300ポイントダメージを相手ライフに与える。

紫苑が発動したりリフレクター・ダメージで互いに1600のダメージが発生したのだが…十代がチェーンで発動したりリフレクター・レイで紫苑のライフが600まで下がってしまったのだ。

そしてその後紫苑のカード効果により1600のダメージで互いに0になったのだ。

「ああ、引き分けか…」  
「そうですね」

残念そうに2人が言った。ちなみに観客達は2人の攻防に呆然としていた。

「へへ…ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！！」  
「はい。楽しかったです」

こうしてHEROVSHEROという戦いは引き分けに終わった。

## 第三十五話 英雄たちの戦い（後書き）

久々ですね」

ユウ「結構間が空いたね」

まあ、ネタ切れの為の充電期間と部活が…

シゲル「部活？」

3日間の体験学習（行事）から5日間の合宿に2日間の大会…

紫苑「…計10日間休みないですね」

で、解説ですが、今回からセブンスター編の裏話と言う感じですね。

剣賭「裏？」

VSセブンスターはおそらく1度か2度のみ以外原作通り行きま  
す。けどオリキャラたちもどこかで少し参戦させるつもりです。

ツバキ「戦わせるのは？」

紫苑と…シゲルか剣賭か…まあ未定だね。

オリジナルカード

ディフェンス・オフ・ヒーロー

英雄防衛 - リフレクター・ダメージ

まあ、これは英雄変化のチェインでも互いにでもよかったけどル  
ル的には不可能でしたのでお互いにダメージなら引き分けなので作  
ったカードです。

次回予告

始まったセブンスターとの戦争。

そして一番手は十代だった。しかし…隣部屋だった2人となぜかあ  
の2人も巻き込まれてしまい…

そして翔と隼人が人質に闇のゲームが開始されようとしていた。

しかし十代の助けを求める声に彼らは手を指し伸ばさなかった。

2人を救えるのが自分だけだと決意した十代はセブンスターズのダイクネスとの戦いに挑む！

そして紫苑の目の前になぜかあの人物が

次回第三十五話 英雄VS闇龍

最強カードは「E・HEROワイルドジャーマン」

さてと…裏話どうしよう



第三十六話 英雄VS闇龍(前書き)

今回はデュエルは無しです。

## 第三十六話 英雄VS闇龍

前回突如として始まった紫苑VS十代のE・HERO同士の対決。その結末は予想だにしない畏の発動で終わった。

しかし此処にいた全員 敵の脅威が迫っている事を知る由もなかった。

紫苑VS十代の戦いが起こっているちょうどその頃

「彼らのディスクからデバイスの反応ですか…」

アースラでリンディがエイミィの報告にそう呟いた。どうしてもあの時シゲルが発動したカードの実体化したのに理由があるはずだった。

そしてその時のデータをもとにエイミィが仮説を立てたのだ。

「はい。おそらくはストレージと思われます…」

「…『カードを実体化する』デバイス…恐らくですがそれを5人全員持っているはずですね…しかし、そんなものどうやって…」

デバイスを作るのはパソコンを組み立てるのとはわけが違う。専用の部品から思考回路とも呼べるAI、それを導入する高性能パソコン。

どう考えても5人で制作できる代物ではない。いくら剣都がAW社総帥と言っても、紫苑が元・闇の書の一部だとしても必要なモノが足りないのだ。

「…ロストロギア」

そう呟いたのはクロノだった。その言葉にリンディ、エイミー、なのは、フェイト、はやてがクロノを見た。

「もしかしたらあのデュエルディスク…ロストロギアなのかもしれない」

「確かに…それがロストロギアに近い何かがあれば入っているとすら…」

フェイトも納得したように言葉を紡いだ。しかし、そんなものが都合よく5人の手に渡るとも偶然にしたら出来過ぎていた。

「…ユーノに頼んで、そう言った者があるかどうか調べてもらおうや」

「そうなの！そうすれば分かるの！」

夜：レッド寮

「ねえシゲル」

「どうした？」

そろそろ就寝時間となる頃、シゲルが二段ベットの下で寝転がって本を開いているとユウが上から顔を覗かせた。

「：今さらだけど…紫苑って結構無口だよね？」

「そうか？」

呼んでいた本を閉じてシゲルはユウを見た。

ちなみに本のタイトルは『リアル鬼g』 『 なんでも無かった。』

「うん、あまり喜んだり悲しんだりしてないし…」

「そう言われるとそうだが…」

そう言っつてシゲルは机の上のディスクを見た。

アナトから渡されたソレはかつて紫苑が持っていたデバイスと呼ばれるものと同じだと聞いた事がある。

「まあ…元から感情を表に出さない奴なのか、昔何かあったのかだ

な……」

「……なんだか、可哀想だよ」

そう言ったユウの顔が悲しそうだった。シゲルはベットから出ると目線をユウと同じ様に立った。

「……何かあったのか？」

「……ボクの過去……聞いてくれる？」

そう言っユウは自身の過去　両親の死と自分の境遇、澪と徹との生活、海馬との遭遇を話した。

「……その時の僕と同じ眼をしてたから……っ！？」

「なんだ！？」

突然窓の外から紫に光り輝く光が差し込んだ。

女子寮

「……！？」

「……どうしたの？」

ツバキの部屋でデッキ調整を行っていた紫苑とツバキ。だが紫苑が、何かに気付いた様に窓の外を睨んだ。

「…なにか、魔力的なものを感じました」  
「どうということ?」

そう言った紫苑はPDAを取り出すと通信機能をONにした。

「シゲル、聞こえますか?」

『ザー…紫…か?』

なぜかノイズ交じりで帰ってきた。島全体に電波が行きわたってるPDAの通信ならノイズは入らないはずなのに。

しかもノイズは徐々に酷くなっていた。

『ちょ…ど…い……すぐ…に…てくれザー…』

「…レッド寮で何かあったみたいです」  
「た、大変!」

2人は散らばっていたデッキを直して、其々のカラーのディスクを持って部屋を飛び出した。

????

「…駄目だ。通信が戻らねえ」

PDAを懐にしまったシゲルがそう言った。

近くにはユウ、明日香、十代、剣都が呆然と立っていた。

「ここは…?」

「火山…!？」

そう、レッド寮にいたはずの3人は火山の火口にいた。ちなみにアカデミアの火山は活火山でマグマが火口にあるのだ。

「てか、なんでお前らまで?」

シゲルが剣都と明日香に聞いた。既に剣都はイエロー寮に泊まり込んでいる。そして明日香はブルー女子寮に戻っている時間のはずだった。

「もしかしたら一番強いカイザーじゃなくて、レッド寮の十代を狙うかもしれないと思って…」

「で、部屋の間所が分からないというから俺が案内しに…けど、まさか的中するとはな…」

剣都が驚いたように周囲を見渡した。ちなみに5人の足元には光の足場ができており、落ちないようになっていた。

すると突然、火山からプロミネンスが発生した。

「プロミネンス…?」

「太陽とかで、炎が龍みたいに燃える現象よ。というか今なんて聞いたのかしら?」

「……誰だ?」

ユウと明日香の会話を尻目にシゲルがディスクを構えた。彼の睨んだ先には黒いコートのを着た、目元を隠す仮面を嵌めた一人の男性が立っていた。

「我が名はダークネス。セブンスターズの一人だ」

「お前が…!!」

セブンスターズ　それはほんの数時間前に鮫島校長から聞いた敵の名前だ。

「遊城十代…貴様が私の最初の相手だ」



「…セブンスターズ関係なら、ボク達は手は出せないね」

ユウはそう言っただけで構えていたディスクを降ろした。5人の仕事は7人の護衛。セブンスターズと戦う時までのだ。

それならば今、ユウとシゲル、剣都の3人に出番はない。

「やっぱり一番俺が強いのか!？」

「いや…多分あれだろ」

そう言った剣都の指先には、十代のペンダントと同じ様な半円の首飾りがあった。

「その通り…だが、私が欲しいのはその胸に揺れる七星門の鍵だ。貴様からそのカギを奪ってみせよう…闇のデュエルで」

「闇のデュエル…俺やユウが喰らった、ダメージを受けるあれか…」

シゲルがそう苦虫を噛んだような顔で言った。

確かにあのダメージは受けたいと思わないし、デュエルで命をかけたいとも思わなかった。

しかし、ダークネスの闇のデュエルは違った。

「兄貴〜!!!」

「十代〜!!!」

「っ翔!?!」

「隼人君!?!」

4人が見た先には、マグマすれすれの岩の上に隼人と翔がいた。2人を包み込むように光のドームがあった。

「光の檻に守られているが、あの折は時間とともに消滅する。このデュエルが長引けば、彼らはマグマの中に。更に負ければ…その魂をこのカードに封印される」

それを聞いて十代はダークネスに食いついた。だがダークネスはそれを一蹴した。

「全力でかかってこい、遊城十代!!!」

「ねえ!!!何とかならないの!?!」

明日香がユウ達に言った。3人の持つ力なら何とかなるかもしれない。確かにかつたからだ。

確かにモンスターやサポートカードで2人を助け出す事も不可能で

はなかつたが

「何ともできないよ……」

「それに俺達は、セブンスターズとの戦いには手は出さない」

それを聞いた十代は睨むようにシゲルを見た。親友が目の前で死にかけているのを見捨てると言ったのだ。

「テメエ!!! 翔と隼人を見捨てるのか!?!」

「はあ……十代。なんで鮫島校長が鍵を渡す時俺達を呼んだと思ってるんだ?」

射殺すように冷たい剣都の目　その目を見て十代は臆してしまっ  
た。

普段の剣都の目は確かに鋭く、睨んでいるようだった。しかしま  
の剣都の目はそこに冷徹さも混ざっていた。

「もしかしたら自分の周囲の人間が危険にさらされる可能性もある  
……自分が死ぬかもしれない……そうなる事も考えて、それで鍵を投げだ  
すかもしれないから俺達を呼んだんだよ。それなのにお前は楽しそ  
うにワクワクして、それで翔達が危険な目に遭ったら自分の所為じ  
ゃない、助けない俺達が悪いと言い張るのか?」

「クッ……」

「ちっ…!!」

「剣都!!」

十代は悔しそうに眼をそらした。それに苛立ったのか剣都は十代の胸倉をつかんだ。それを抑えるようにユウが剣都の腕を掴むが、それを剣都は無視した。

「テメエが戦うことを望んだから2人が巻き込まれた!! だったらその尻拭いは自分でしろ!! グダグダ言う暇があるならあいつを倒して2人を助け出せ!! 嫌なら代われ!! 決意もせず命を投げ出す戦いに参加するな!!」

「剣賭君!!」

剣都の言葉に明日香もユウと同じ様に止めに入った。それに熱が冷めた剣都は手を話した。

しかしその言葉が響いたのか

「…勝負だ…!! ダークネス!!」

「ふっ…良い目だ…」

「デュエル!!」

十代とダークネスの戦いが始まった

レッド寮

「いない」

ユウとシゲルの部屋に来たツバキと紫苑はそう呟いた。  
鍵は開いていたが中には誰もいなかった。十代の部屋の前にはカイ  
ザーと三沢がいた。

来る途中で2人に会ってそのまま一緒に来たのだ。

「十代達もいなくなってる」

「恐らく…一番手があいつらだったんだろっな」

そう言つてカイザーはレッド寮から校舎を見た。誰もいない校舎は  
異様な不気味さを

「ん？何だ…？」  
「どっかしました？」

カイザーと三沢が鍵を握っていた。そのカギは 震えていた。

「……火山だ。間違いなくそこにいる」

「何の騒ぎだ？」

すると一番奥の部屋から万丈目が現れた。その手には七星門の鍵が握られており、同じように震えていた。

「どっやら同じようだな」

「…そうだな。火山へ急ぐぞ」

火口

「ワイルドジャギーマンで2体の真紅眼の闇龍とスピア・ドラゴン  
へ攻撃！！インフィニティ・エッジ・スライサー！！」

ワイルドジャギーマン / ATK 2600 3600

レッドアイズ・ダークネスドラゴン  
真紅眼の闇龍 / ATK 3300

スピア・ドラゴン / DEF 0

ワイルドジャギーマンの腕から刃物が飛び出すとダークネスの場の  
モンスター全てを破壊した。

「うわあああああああああ！！！！！！！！」

ダークネス/LP600 0

ダークネスのライフが0になった瞬間、足場が崩れ始めた。

「翔…隼人…！！！」

「兄貴！！！」

「十代！！！」

だが 運命は残酷だった。

2人を守っていた檻が完全に無くなったのだ。

「あ、熱い！！！」

「助けてくれ〜!!」

溶岩の熱に2人は叫んだ。そして 2人の姿は溶岩に包まれた。

「翔!!隼人!!」

「嘘…うそよね…2人とも!!」

十代と明日香がその光景に眼を見開いた が、すぐにきよとんとした。

「へ？」

「なんだあ…これ？」

2人は なぜか水の泡に包まれていて無事だった。

「剣闘獣ムルミロ。まあ元々は破壊効果の水だが…破壊しなかったら何とかなるだろ」

「シゲル…!!」



すると辺りに光が立ち込めた。  
全員がその光から目を守る様に腕で覆った。

火山：火口付近

「…どうやら助かったみたいだな」

「兄貴!!」

「十代!!」

ばたりと十代は倒れてしまった。ダークネスとの戦いで蓄積されたダメージが限界を超えたようだった。するとすぐにシゲルが近づいて容体を見た。

「ダメージが溜まって、意識が無いだけだ。けど早いところ寝かせた方がいいな」

「皆!!!!」

遠くの方からツバキ達5人が走ってくるのが見えた。

「十代!?!」

「安心しろ、気失ってるだけだ。三沢、運ぶの手伝ってくれ」

## 保健室

ベットに寝かした十代の横のベットの上にはダークネス　天上院  
吹雪が寝ている。

ダークネスの正体を知って全員　特に明日香と亮は驚いた。  
2人の探していた人物がセブンスターズとして出てきたのだからだ。

「　　奴ら…なんて事しやがる…!!」

十代の戦いの経緯を聞いた万丈目がそう反応した。「だが」と前置  
きして剣都がその場にいた鍵の保持者を見回した。

「こうなる事可能性が高くなっていく。十代が勝って2人を助け出  
せたが…次はどうなるか分からない。下手をしたら死なせるかもし  
れない」

「…だからなんだ？」

そう言ったのは壁に寄りかかり、腕を組んで話を聞きながら目を瞑  
っていた亮だった。

「俺は相手がだれであろうと、どうしようが敵は倒すまで。敵が何かしようがそれは敵の作戦…ならばそれを崩せばいい」

「カイザーの言うとおりだな。相手がなにをしてくるのかしっかり分析する必要があるな」

カイザーの言葉に三沢と首を縦に振って万丈目も同意した。

「今日はもう遅いわ。2人はこのまま寝かしとくから、貴方達は部屋に戻りなさい」

翌日

「明日香さん？」

ブルー寮の廊下で紫苑が部屋に入ろうとしていた明日香を見かけた。だが時刻はようやくネボスケが起きる時間だ。

「あら？紫苑…どうかしたの」

「どこに行っていたのですか？」

「兄さんの様子をね…けどまだ目が覚めないみたい…」

そう言った明日香の顔は兄を見つけた嬉しさからか明るくも、目が覚めないという事実があって何処か暗かった。

「そうですか…あの、明日香さん」  
「どうしたの？」

なんだかすこし困っている様な紫苑の表情に明日香が眉をひそめた。  
あまり…というか全く紫苑は笑う事もない。悲しむ事もない。困る事もない。

しかし今目の前にいる紫苑は困っていた。

「…妹は…姉妹にどう接すればいいんですか…」  
「…え？」

あまりにもおかしな質問に明日香の反応が遅れてしまった。  
しかし紫苑はどういうことなのか説明を続けた。

「もう私がツバキの妹となって2週間ほどですが…私はどうすればいいの…妹とはどういう感じなのか分からないんです。だから…  
…っ…!?!?」

そこまで言った時、紫苑は持っていたディスクを廊下の先に向けて構えた。

その眼は威嚇するように鋭く、戦い慣れた者の眼だった。

「紫苑…!?!」

「魔力反応…なにか来ます」

静かに言った紫苑の言葉に明日香は紫苑の目線の先を見た。

「なにが来るの…?」

「この魔力…」

感じた魔力に覚えがあった。それは確か精霊界で

「ふう…そう殺気立つもんじゃないぞ。紫苑」

「なっ…なんであなたが…」

明日香が見たのは………長い黒髪の少年だった。

「あ、貴方は誰？」

「ん？おお…これは失礼したの…ワシの名は『カルマ』じゃ」

ユウの持つ神の化身　生命の神『カルマ』だった。

「カルマ…どうしてここに…」

「ふむ、精霊界でお主が捕まっていた研究所にの…不可解なデータがあったのじゃ。ダークに調べてもらったのだがの…精霊界や人間界に無い文字だったのじゃ。もしかしたら何か分かるかも知れぬのかもしれない…来てくれぬか？」

そう聞いた紫苑は少し考えていた。かつて自分のいた世界は此処と同じ世界　パラレルワールド 並行世界だった。

管理局は何らかの方法で並行世界である此処に現れていた。それに関して何か分かるかもしれない

「明日香さん、お姉ちゃんに伝言頼めますか？」

「伝言…？」

話について行けない明日香だったが、紫苑の呼びかけにそう応えた。

「しばらく留守にするのでお願いします、と行ってください」

「え、ええ…分かったわ」

明日香が紫苑に返事をするにチラリとツバキの部屋を見た。まだかすかに紫苑の寝息が聞こえる部屋の扉　そこから目を紫苑に戻す  
……

「……あら……？」

紫苑はすでにそこにいなかった。

アースラ

「次元震……？」

「はい。ですが……」

ブリッジで指示を出していたリンディだがエイミィの報告にそう聞き返した。

だがブリッジのメインモニターには次元震の報告は出ていなかった。

「サブモニターで一瞬だけ……調べてみたのですが、一瞬高い数値の次元震があったんです。場所はアカデミアのブルー女子寮からです」

「……エイミィ、なのはさんとヴィータさんに調査をお願いしてください」





### 第三十六話 英雄VS闇龍（後書き）

ツバキ「また結構間が空いたね」

まあ理由としてはこの次の話が浮かばなかったからね。

剣都「どういうことだ？」

俺の書くスタイルは何話か書き溜めて徐々に投稿していく感じ。

ただ前回から夏休み中の課題などでやる時間が無く、気力が無かったので次回が少しgdgdになっている。

紫苑「私は今回から別行動ですか…」

まあ紫苑sideのメインストーリーがあるからね。それは多分2話5ぐらい後かな。早ければ次の次、遅くても4話以内ぐらい

次回予告sideシゲル

明日香から紫苑が精霊界に言った事を聞いた俺達はある大事な事を思い出していた。そのことに不安になりながらもセブンスターと管理局への危機感を醸し出していた。

一方あるブルー生徒はこの頃学園で起こる異変に気付いていた。

しかしそんな生徒に管理局の魔の手が

次回第三十六話 スカウトという名の強奪

最強カードは「ヴォルテック・テール」

ユウ「ところであの題どうしたの」

ん？『ノーバディ・レコード』のこと？

シゲル「急に名前変更なんてどうしたんだ？」

前々から名前変えようと思ってたんだ。けどやるとしたら説明含め

ようとして今になった。

ちなみに由来は『世界の矛盾は存在しない』 〃 『ノーバディ』とそ  
の闘いの日々… まあ記録から『レコード』って感じ。

ユウ「どうしてノーバディの由来が…？」

ひとつだけ言っとくと作者はkingdom heartsが大好きです。

シゲル「……………」

第三十七話 スカウトという名の強奪(前書き)

はい、遅くなりました…

まあ遅れた理由などはあとがきに…

### 第三十七話 スカウトという名の強奪

「へえ…カルマがね…」

レッド寮の食堂で明日香から朝の事を聞いたユウとシゲルは驚いたようにそう言った。

「うん。けど大丈夫かな…一人であそこに…」

心配そうにツバキがそう言ったが無理もない。あの研究所は紫苑にとってはトラウマしかなく、一人だと管理局との戦闘になれば無茶もするだろう。

「まあ、ダークヤルキが何とかするだろ」

ダークはいま精霊界に戻って例の研究所の事について調べている。それにルキや魔法都市の住人達も手を貸してくれるはずだ。ちなみにダークヤルキが誰なのか知らない明日香は首を傾げている。

「…ねえ…ところで…」

何かを思い出したように先程まで首を傾げていた明日香が3人に聞

いた。

「十代の七星門の鍵…持つてるのシゲルのはずだったわよね？」

「え…？」

「あ…」

ダークネス戦後：夜

「十代が眠っている間に…誰かがこの鍵を持っていた方がいいんじゃないか？」

そう言ったのは同じく鍵を持つ者

エアーマン  
三沢だ。

「誰がエアーマンだ」

「三沢君、どうかしたの？」

地の文を読まないでください。

「確かに…十代がこう戦えない状態で襲われたらどうなる事か…」

劍都の言うとおり、戦えない状態でも奴らが十代を攻めてくればただでは済まない。  
しかし鍵を1人で2つ持つのはそれはそれで危険だった。

「私が持ちます」

そう立候補したのは紫苑だった。しかし正直言うと女子の紫苑より、荒事に慣れていた劍都やシゲルの方が安全の気もした。

「紫苑、それは流石にきけん、いいのか？お前が十代みたいに……いや、それ以上の事になるのかもしれないぞ」シゲル？」

ユウがそれを止めようとしたが、シゲルがそう紫苑に聞いた。紫苑はシゲルの問いになにも言わなかった。

その後、結局シゲルが鍵の管理をすることになったのだが。

回想終了

「……人選ミスったな」

どうやら鍵を渡したらしい。

ブルー女子寮

「ここで次元震が起こったみてーだな」

紅いゴスロリの服を着た幼〜ゴフっ!!? 「余計なことと言っんじやね!」…もとい、赤髪の少女となのはがいた。  
てか、地の文に突っ込まないでください……

「此処は…ちょうど明日香さんの部屋の前だね」

そう言ったなのは、ちなみになのはの部屋は今現在紫苑が使用している。

「ちょうど目の前はツバキちゃんだし…何か知ってるかも」

「……よし！そのツバキつてのに会いに行くぞ！」

そう紅い少女が言つとドカドカと歩きだしてしまった。

「にゃ！？ちょ、ヴィータちゃん！！」

## 湖

以前十代VS明日香があつた湖の近くをジュンコとももえが並んで歩いていた。

ちなみにどこかしらジュンコの顔が赤くなっているようにも見えた。

「それにしても…ジュンコさんにも春が来ましたね」

「う、うっさいわね！／＼／」

そう言つたジュンコの手には風呂敷に包まれた弁当があつた。そう、ジュンコの手作りだ。

「それにしても…最近変じゃない？」

「変…とは？」



唐突にジュンコがももえにそう聞いた。

実を言うとジュンコは人の顔と名前を覚えるのが得意で新入生の殆どの名前を覚えていたのだ。

「なんか最近学園の人がいなくなって無い？」

「…というとなのはさん達の事ですか？」

ももえがジュンコの問いにそう言った。

明日香、そしてツバキとよく行動していた3人組の事だ。

「確かにそうですよね…他にもシグナム先生やシャマル女医も急に転勤ですわね…」

同時に赴任して、そして同時に去って行った教師。

周りの生徒は気に留めていなかったがよくよく考えるとおかしいものだった。

普通なら離任・退任式を行うのだがそれも無く、急な用事ということだった。

そもそも女医なら鮎川とミーネという臨時の女医がいる。それに教員も人数が足りておりわざわざシグナムを着任させる事も無かったはずだ。

「それに…ね、前にシゲルが車椅子に乗るほどの大けがしたじゃん」  
「確か…立ち入り禁止寮に十代様達が忍び込んでその時誰かに襲われた時ですわね」

ちょうど制裁デュエルの1週間前の出来事だ。そもそも制裁デュエルはその禁止寮への無断侵入が原因だ。明日香とツバキもそのことに関わっていたので2人も知っていた。

だが、ジュンコが言いたいのはそこではない。その後の事だった。

「デュエルキングのデッキが盗まれたのは知ってるわよね？」

「ええ。確か…イエローの神楽坂様がデッキを盗んだところを誰かが奪って、その相手とユウ様が戦ったと聞きましたか…」

「どうやら、それも何か違うらしいよ。あの後明日香様から聞いたんだけど戦ってユウは怪我したらしいの。あり得ると思う？」

そう聞いてももえは考え込んでしまった。確かに普通のデュエルなら精神的な負荷がかかる事はあってもおかしくない。しかし肉体的にダメージを負う事は絶対にありえなかった。

そう言ってるうちにレッド寮の前まで歩いていた。

「誰かと争うことになったとしたら…」

「だったらユウじゃなくてシゲルは喧嘩してるわ。ツバキも多分…」

私達に何か隠してるはずよ……っ……！？」

そう言ったジユンコは来た道を振り返った。そこに特にこれと言つて変わった事はなかった。

「ジユンコさん？」

「（気のせいかな……いま誰か……）なんでも」

『なんでも無い』と言えなかった。ももえの後ろに見知らぬ男性が立っていた

明らか生徒でもない、そして教師だったら手にナイフなんて持っていない。

「ももえ……！」

「え？きやあつ……！」

なにが起こったのか、ももえは分かって無い。ナイフで切りつけられると思っただら首元に何かを打ちつけられた。

「ももえ……！あんた、何者よ……！」

「俺はディラ執務官。お前から強力な魔力反応があるから付いてきてもらっぞ」

そう言ってディラと名乗った男性は右手をジュンコに伸ばしてきた。逃げ出そうとしたのだが、右腕を掴まれた彼女はそれすら叶わなかった。

「触らないで！！ももえ！！」

倒れているももえに呼び掛けるももえはピクリとも動かない。

「騒ぐな！抵抗すれば公務執行妨害で逮捕するぞ！」  
「なにが公務よ！！あんたこそ傷害罪じゃない！！」

ジュンコの言葉に苛立ったのかディラは握る手にさらに力を込めた。

「っ……！」  
「俺の言う事を聞け！」

そう言われたジュンコ唇を噛みしめた。何とかしてこの状況を打開したかったが女子のジュンコよりも男性のディラの方が力が強かった。

それになぜか生徒が全く見えないのだ。助けを呼ぼうにも呼ぶ相手

がいなかった。  
すると突然ジュンコの意識が遠くなった

### レッド寮・食堂

「まあ、十代の鍵は紫苑が戻ってくるまでどうしようもないな……」

シゲルが纏めるように言うが他の3人は何処か遠い目でシゲルを見ていた。その視線を要約すると「あんたの所為だろ」というものだ。まあ、そうだろう。相談もせず勝手に鍵を紫苑に預けて、紫苑本人もそれを黙って受け取ってしまったのだ。

「……………悪い」

もう居心地が悪くなったのかシゲルが3人に頭を下げた。

「…シゲル、今度はちゃんと相談してよね」

ツバキの言葉に救われたシゲルだった。

お

あ

「ん？なんか騒がしいな」

レッド寮前

「だからヴィータちゃん待って!!」

「そいつが世界の矛盾だったとしたら叩きのめしたらすぐに分かる  
だろ!!」

言葉で分かる通り、今現在なのはとヴィータの2人は言い争いながら  
レッド寮へ向かっていた。

途中ツバキが世界の矛盾だと聞いたヴィータは更に止まらなくなっ  
ていた。

「だからヴィータちゃん!!今私達が……」  
「…ん？なんだよなのは」

急になのはが黙ったのだ。あのうるさいなのはが黙るとなると普通ではなく、確実に不気味だったヴィータは振り返った。  
なのははある場所を見て固まっていた。

「ももえ…さん…!？」

「？」

何か言ったなのはの目線の先を負う様に見ると 誰かがレッド寮の前で倒れていた。

「ももえさん…!」

「なのは…!」

なのはは倒れているももえの元へ駆け寄ろうとしていた。が

「セレスティアル・ブラック・バーニング…!」

「え…!？」

「なのは…!」

その前に現れた一黒尽くめの魔法神官（マジック・ハイエロファン  
ト・オブ・ブラック）と白髪ツバキの少女が立ち塞がった。

間一髪ヴィータはなのはを突き飛ばして炎の攻撃を避ける事が出来  
た。

「う…………ツバキ…ちゃん…!!」

「……………」

なのはは倒れながら攻撃を終えた魔法神官の横に立っていたツバキ  
を悲しそうな目で見た。一方のなのはを見ていたツバキの目の色は  
光を失くし、少なくとも友達や仲間を見るような雰囲気ではなかつ  
た。

「一体何の用？もう二度と私達の前に現れないでって言ったよね？」

「お前がツバキか!! 教えろ、星光の殲滅者はどこだ!!」

ツバキの質問に割ってヴィータが入ってきた。が、ツバキは無表情  
でカードを一枚引き、それをディスクにセットした。

「来て、エンディミオン!!」



今度は神聖魔導王がフィールドに現れると、持っていた杖の先から魔力の球弾が2人に向かって飛んで行った。

「クツ…アイゼン!!」

《protection》

その攻撃を避けれないと直感的に感じたヴィータはどこからともなくハンマーを取り出すと魔力の壁を作って攻撃を耐えた。

が、すぐに何か危険な感じを身で感じたヴィータはツバキを見た。

「星光の殲滅者? そんな人はいない…!! 私の妹を侮辱するのは…許さない!!」

その言葉に応える様に2体の魔法使いが杖を構えた。

「ツバキ!! 大丈夫!?!」

「大丈夫、けど…:…頭の中が怒りでぐちゃぐちゃになりそう…!!」

初めて見るツバキの怒りの、それも濃厚な殺意のこもった顔を見たユウは一瞬たじろいでしまったが、気を取り直してディスクを構えて2人を睨んだ。

「一体此処に何をしに来た」

「わ、私達は今朝起こった次元震を調べに来たの！そしたらももえさんが倒れていて」

「どうやら、テメエーらの同業者にやられたらしいぜ」

ももえの介抱をしていたシゲルがそう言って来た。シゲルが何の事を言っているのか理解できなかつたのはとヴィータだったが、それを無視してシゲルがさらに続けた。

「ももえが言ってたぜ？デイラ『執務官』っていうのに襲われたてな…あんた等の同業者だろ？」

「そんな…」

あまりにも驚愕する 執務官の誘拐事件と傷害事件の事実には2人とも言葉を失った。しかしそれどころじゃない3人はその2人を放っていた。

「行くぞ、ももえが言うには火山の方に連れて行かれたらしい」

3人と今は誰も使っていない剣都の部屋にももえを寝かしてきた明

日香は火山へと急いだ。

「なのは…」

「……………」

「あらあら、お困りの様ね？」

呆然となっている2人の背後から声をかけた人物　アラエルだった。

火山

「……………ここ………ここは………っ!？」

目が覚めたジュンコは目の前にある光景に驚く事しかできなかった。

そこには多くの生徒が倒れていた

およそ10〜20人ほどの生徒が　中には流血している生徒もいる。

その中心にあの男　ディラが立っていた。

あまりにもよく分からない状況にジュンコは混乱していた。

「え……私……確かもえとレッド寮に……そうだ……ももえは……!!?」

「チッ、目が覚めたか……まあいい、言っとおりにしてもらおうぞ小娘」

そう言つてディラはジュンコの前まで来た。ジュンコは立ち上がった、逃げようとしたがまだ頭が混乱しており、逃げる事が出来なかつた。助けを呼ぼうにも倒れている生徒しかおらず、助けてくれる人も

「待てよオツサン、なにしてんだ？こんな真昼間から」

いた。目の前に 物すごい瘴気を放っている人物が。その人物の後ろで3人の少年少女もいる。

「シゲル……!!」

「なんだ貴様？邪魔するなら「来な、ダリウス!!」っ!？」

シゲルの召喚した馬の獣人のモンスター　　ダリウスが真っ直ぐディラへと突っ込んでいった。

突然の奇襲にディラはジュンコを突き飛ばして回避行動を取った。突然の事にジュンコも自分を守るように立っているダリウスを丸い目で見ていた。

「え？ええ？モンスターが？え？なにこれ？ええ？夢？」  
「下がってる」

混乱するジュンコに冷徹な声が響いた。その声ができる方を向くといままでではありえないほど凄い殺気を込めた目でディラを睨んでいたシゲルがいた。

「クツ…なんだそのモンスターは…！！」

「テメエがディラか…管理局ってのは無関係の奴を巻き込む気か？  
ああ！？」

そう言っでディスクを起動させたシゲルは思いつきりディラを睨んだ。

ディラは怯みながらも持っていたナイフからのデバイスをディスクを変形させた。

「クツ…管理外世界に俺達の事を知ってる奴がいるなんて…！！」  
「ゴタゴタ言ってるんじゃないやねえ…目障りだ…！！」

「「デュエル！！」」

シゲルのターン

最早お約束となった現実のダメージのドームが2人を包み込んだ。

シゲルの恐ろしい所はキレていても冷静にいる事だった。ドロータカードを見てその中から最善の手を考えていた。

「スレイブ・エイプを守備表示で召喚！！カードを2枚伏せてターンエンドだ！！」

シゲル

LP4000 手札3枚

スレイブ・エイプ（DEF300）

伏せカード2枚

機械を装備したサルが現れると防御体勢をとった。

キレたシゲルを止めれるのなんて誰にも無理だった。

それを知らないディラはカードを引くとシゲルを睨みつけた。

ディラのターン

ディラ執務官は世界で多くの魔力保持者をスカウトするので有名だが、実際は攫って来た魔力保持者を洗脳や暴力で無理やり管理局に協力させていたのだ。しかしそのことを知ってるのはごくわずかで、彼に逆らった人は時空犯罪者に罪を擦り付けて殺しているのだ。

「俺のターン！！A・O・Jブラインド・サツカーを攻撃表示で召喚！！」

アリー・オブ・ジャステイス

A・O・J ブラインド・サッカー

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 機械族 / 攻1600 / 守1200

このカードと戦闘を行った光属性モンスターの効果は無効化される。

ブラインド・サッカー / ATK1600

フィールドに6本足の巨大な機械が現れた。だが問題はその見た目はステータスではない。そのカテゴリーである

「A・O・J…やっぱテメエ…管理局か…!!」

「A・O・J」 精霊界で管理局の使っていたシリーズだ。

まだ可能性が高かったただだがこれで確実だった。人間界、そして精霊界にA・O・Jというカテゴリーが存在しない以上管理局しか持たないカテゴリーだろう。

「バトル!! ブラインド・サッカーでその雑魚に攻撃!!」

デイラの宣言で巨大なロボットの背にあった装置から光線が伸びてそれがスレイブエイプに命中した。

「…だが、スレイブエイプは戦闘破壊された時デッキからレベル4以下の剣闘獣を特殊召喚する。来い、剣闘獣ベストロウリィ!!」

剣闘獣リーダー!!!」

スレイブエイブが雄たけびを上げると何処からともなく鳥の獣人が現れた。

それと同時に竹刀を持った獣人が現れたが　スレイブエイブが出せるのは1体までだ。

「なぜ二体もいる！そのサルの効果で出せるのは一体のみだろ!!!」  
「リバース罠、ハンディキャップマッチ！だ。剣闘獣が特殊召喚に成功した時剣闘獣と名のついたレベル4以下のモンスターを場に出す事が出来る！」

ベストロウリイ / ATK 1500

リーダー / ATK 1100

「クソが…カードを二枚伏せターンエンド!!!」

ディラ

LP 4000 手札 3枚

ブラインド・サッカー (ATK 1600)

伏せカード 2枚

シゲルのターン



「俺のターン、ドロー!!」

「……っ！ねえ、ユウ」

「どうかしたの？」

デュエルの行方を見守っていた4人だが、ツバキが何かに気付いた。ツバキが指差した先　シゲルの顔　シゲルの…『紅い』目を指さした。

「紅い目…!!じゃあ…」

「アナトの言ってた…世界の矛盾の証…」

2人の言葉に明日香とジュンコは首を傾げていた。何の事なのか分からず、またシゲルの目が赤くなってる理由も原因も分からなかった。

「場のベストロウリイ、リーダーをデッキに戻しエクストラデッキから剣闘獣ガイザレスを特殊召喚!!」

『力がみなぎるの…!!』

フィールドの鳥人はどこからともなく出現した鎧をまとい、そして強力な風の刃を生み出した。

その刃に切り刻まれたディラの伏せカードが消滅した。

「だが、リミッター解除を発動した！！このターンでブラインド・サッカーは破壊されるが、攻撃力が2倍となる！！」

ブラインド・サッカー / ATK 1600 3200

このターンのみとは言え、攻撃力が2倍となってしまうガイザレスではブラインド・サッカーを倒せなくなってしまった。

しかし、そんな事などシゲルにとってはどうでもよかった。

「手札からバリア・リゾネーターを通常召喚！！」

バリア・リゾネーター

星1 / 光属性 / 悪魔族 / 攻 300 / 守 800

このカードを手札から墓地へ送り、

自分フィールド上に表側表示で存在するチューナー1体を選択して発動する。

選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、選択したモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

シゲルの場にいつものリゾネーターと同じ姿の背に電極の様な物を背負った悪魔が現れた。

「レベル6のガイザレスにレベル1のバリア・リゾネーターをチュ  
ーニング！！獣の魂を受け継ぐものよ、雷鳴とともにその怒れる尾  
を振り上げる！！」

6 + 1 = 7

「シンクロ召喚！！いでよ、剣闘獣ヴォルテック・テール！！」

フィールドに黄色い立て髪と尻尾を持ったライオンが現れた。  
ちなみに大きさは、さほど大きくなく普通のライオンと同じだった。

ヴォルテック・テール / ATK 2200

「はっ！なあゝにがシンクロだ！！ただの弱体化じゃねえか！！」

デリラの言うとおりガイザレスよりもヴォルテック・テールの攻撃  
力は低かった。

だが、シゲルいまの状態が無駄な事なんてしなかった。

「バトルフェイズ！！」

「っ！？」

シゲルのバトルフェイズ宣言にデイラは驚いていた。このままヴォルテック・テールでブラインド・サッカーに攻撃すれば逆に破壊され、ダメージを負うこととなる。

「ヴォルテック・テールで攻撃！！」

「バカな！？ブラインド・サッカーの方が攻撃力が上だ！！」

確かにこのままだとヴォルテック・テールが戦闘破壊され、シゲルに1000のダメージを負うことになってしまう。

「ヴォルテック・テールは攻撃宣言時、手札のカード一枚を墓地に送ることで攻撃力を半分にして直接攻撃ができる！！」

「なんだと！？」

ヴォルテック・テール / ATK 2200     1100

突如としてヴォルテック・テールの雷の尾から電磁波が発生するとブラインド・サッカーは動かなくなった。

その横を素通りしてヴォルテック・テールは爪をデイラに振り下ろした。

「クツ…！！嘗めた真似を…！！」

デリラ / LP 4000 2900

ダメージを負ったデリラはそう悪態をつきながらシゲルを睨んだ。だがシゲルは冷やかな目でデリラを見ていた。

「聞かせる、なんでジユンコとももえを襲った？」

「っ…それはあの女が高い魔力を持っていたからだ。管理局にはいくらあっても人手が足りない。全ての管理世界を統一っ！？」

そこまで言った時デリラにすぎましい圧力がかった。

その発生源は言うまでもない

「もういい…喋るな、雑魚が…！！」

シゲルだ。世界の矛盾であるシゲルから風のような何かがデリラのしかかっていた。

その力はまるで台風の様に荒々しく、針の様に鋭い。

「この感じ…あの時と…!!」

ユウの脳裏に2人の姿が浮かんだ

名前<sup>アラエル</sup>の知らない女がガジャルクという名のシンクロモンスターを出した時に感じた『恐怖』

生命<sup>カルマ</sup>の神が試練の時、自身を出現させた時に自らに向けられた『本気』

それと同じ『殺気』を放つシゲル

「カードを伏せてターンエンドだ!!」

ヴォルテック・テール / ATK 1100 2200

シゲル

手札1枚 LP 4000

ヴォルテック・テール (ATK 2200)

伏せカード2枚

シゲルがターンエンドを宣言した瞬間ブラインド・サッカーが爆散した。

リミッター解除のデメリット効果でそのターンのエンドフェイズに

破壊される効果だ。

### 第三十七話 スカウトという名の強奪（後書き）

シゲル「さて、色々突っ込ませてもらうが…まずなぜこんなに時間が空いた？」

PCの調子が悪いんだよな…ニコニコ動画が見れないくらいそれと忙しかった…

ユウ「じゃあ今回の話は？」

ダークネス戦とクロノスVSカミューラ戦の合間ぐらい。たまに管理局の黒いところを出さないよね

それとフラグ確定の為にジュンコが攫われることにした。

ツバキ「じゃあ今回オリジナルカードが無いのは？ヴォルテック・テールが出たはずだけど」

ヴォルテック・テールはまだ効果を全て出したんじゃないから次回。

剣都「俺の出番は？」

次回もない！！

剣都「（#・・）」

紫苑「では、私は？」

次の次でメインで行く！！

紫苑「（^^）」

剣都「作者、お前どうしたんだ？」

様々な身の回りの変化でちよつとおかしくなった…

次回予告：sideシゲル

ジュンコを攫ったデリラ執務官との勝負

だがあいつは予想をはるかに超えるモンスターを召喚してきた。そのモンスターにより俺のライフは刻一刻と減らされていく。

破壊されないモンスターとの戦いに散っていく俺のモンスター。



勝機は 一瞬。

次回第三十八話 デス・ライフ  
最強カードは「剣闘龍ホーリー・ミラージュ・ドラゴン」

ユウ「結構ネタバレじゃない？」

第三十八話 デス・ライフ（前書き）

はい、後篇です。なんか同じ展開ばかりになってきたな…

## 第三十八話 デス・ライフ

シゲル

手札1枚 LP4000

ヴォルテック・テール(ATK2200)

伏せカード2枚

ディラ

手札3枚 LP2900

モンスター無し

伏せカード無し

ディラのターン

「クッ…俺のターン!!(なんなんだ!?!こいつは!?!)」

ディラは目の前のシゲルが理解できなかった。

戦いや死線を越えてきたディラにとってシゲルはただの学生であるはずだった。

しかし今まで戦って来たどんな犯罪者や相手、ましては殺人鬼よりも濃い殺気を放つシゲルが理解できなかった。

「(落ちつけ!!相手はただの学生だ!)マグネットサークル 磁力の召喚円 レベル LV2を  
発動!!効果によりA・O・Jアンリミッターを特殊召喚する!!」

マグネットサークル  
磁力の召喚円 レベル LV 2

通常魔法

手札からレベル2以下の機械族モンスター1体を特殊召喚する。

アリー・オブ・ジャステイス

A・O・J アンリミッター

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 機械族 / 攻 600 / 守 200

このカードをリリースして発動する。

自分フィールド上に表側表示で存在する「A・O・J」

と名のついたモンスター1体の元々の攻撃力を

このターンのエンドフェイズ時まで倍にする。

フィールドに黒い羽根を持った機械が現れた。しかし確実に攻撃要員ではない事にシゲルは気付いていた。

「（攻撃要員じゃない…じゃあリリースかシンクロか…!!）」

「手札からA・O・J アンノウ・クリエイター召喚!!」

フィールドに紫のメカニックの様な機械が現れた。するとその機械の中心のポットの様な所から新たな機械が飛び出した。

「アンノウ・クリエイターは召喚成功時、墓地もしくはデッキの機械族モンスターを場に召喚! A・O・J ディストラクションを特殊召喚!!」

アーリー・オブ・ジャスティス

A・O・Jアンノウ・クリエーター

効果モンスター（チューナー）

星3 / 闇属性 / 機械族 / ATK1300 / DEF1400

このカードが召喚に成功した時、デッキが墓地より「A・O・J」と名のついたレベル4以下のモンスターを1体を特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚したモンスターは効果は無効化され、攻撃宣言ができない。

アーリー・オブ・ジャスティス

A・O・Jデストラクション

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 機械族 / ATK2400 / DEF1000

このモンスターは召喚・特殊召喚成功時自分フィールド上のモンスター1体選択する。選択したモンスターを破壊する。

様々な武器を備えたそのモンスターだが、どことなくボロボロだった。どうやら効果は無効化され、 unnecessary 装備がそぎ落とされたのだろう。

「レベル4のデストラクションとレベル2のアンリミッターにレベル3のアンノウ・クリエーターをチューニング!!」

殺戮という名を持つ古代の人形よ、近代の兵器となりてよみがえれ  
「!!」

4 + 2 + 3 = 9

「シンクロ召喚！！殲滅せよ、A・O・Jデス・ライフ！！」

フィールドにおぞましい兵器を身に纏った巨大な人型の機械が現れた。ミサイル・機関銃・レーザー砲・無数の刃物で出来ているといつても良いモンスターだ。

デス・ライフ / ATK 0

「は、ははは…おおきいこと言つて攻撃力0つて…」

「いや、多分あのモンスターの目的は攻撃力じゃなくて効果なんだ」

現れたモンスターにジュンコはホツとしたようにそう言った。だがユウが警戒してそう言った。

「バトル！！デス・ライフでヴォルテック・テールへ攻撃！！」

「（恐らく攻撃して効果破壊か、攻撃力変化系の効果…なら）リバ

グラディアル・リアクティブ

ース異発動！！グラディアル・リアクティブ 剣闘の破壊！！相手の攻撃宣言時、攻撃対象となつたヴォルテック・テールを墓地に送つて相手の攻撃モンスターを破壊する！！」

グラディアル・リアクティブ

剣闘の炸裂

通常罠

自分フィールド上に存在する剣闘獣と名のつくモンスターが攻撃対象に選択された時発動できる。

選択されたモンスターを墓地に送ることで攻撃モンスターを破壊することができる

この効果を使用した次のターン、自分は剣闘獣と名のつくモンスター

ーを自身の効果でデッキに戻すことができない。

ヴォルテック・テールがデス・ライフに噛みつくと発電し、暴発した。

それに巻き込まれてデス・ライフも姿を消した。

「なるほど、これなら相手にやらせる前に……え……？」

ツバキが破壊された2体の場所を見て驚いた。

破壊されたはずの兵器デス・ライフが無傷でそこに佇んでいたからだ。

「残念だがデス・ライフは相手のカード効果で破壊される時、墓地

のモンスター以外のカード1枚を除外することで無効にする！！」

そう言うってデイラは墓地のガイザレスの効果で破壊した罫カードを除外した。

それによってまだデス・ライフの攻撃権がまだ残っている。

「クツ：ヴォルテック・テールの効果発動！！カード効果でこのカードがフィールドから離れた時、墓地の剣闘獣と名のついたモンスターを特殊召喚する！！再び来い！！ガイザレス！！」

剣闘獣ヴォルテック・テール

シンクロモンスター

星7 / 光属性 / 獣族 / ATK2200 / DEF2000

チューナー＋「剣闘獣」と名のついたチューナー以外のモンスター1体以上

このカードが攻撃する時、手札のカード一枚を墓地に送ることで相手に直接攻撃することができる。

この効果を使用したターンのエンドフェイズ時までこのカードの元々の攻撃力は半分となる。

このモンスターが他のカード効果によってフィールドから離れた時、墓地に存在する「剣闘獣」と名のついたモンスターを特殊召喚することができる。

『むう…：思いのほかこやつは手こずるかもしれぬの…』

ガイザレス / ATK2400



現れたガイザレスがいまだに佇んでいるデス・ライフを見てそう険しそうに言った。

デス・ライフから何か感じるのかガイザレスもシゲルも警戒している。

「ガイザレスの特殊召喚成功時、フィールドのカードを2枚まで破壊する！！デス・ライフを破壊！！」  
「マグネットサークルレベル

「バカめ！！墓地の磁力の召喚円 L V 2 を除外して破壊を無効にする！！そして攻撃続行！！」

そう宣言すると全ての銃身がガイザレスへと向けられた。

「デス・ライフは機械以外の種族のモンスターと戦闘を行う場合、俺の受ける戦闘ダメージを0にする！！さらにこのモンスターは戦闘では破壊されない！！」

デイラ / LP 2200

「そしてこのカードと戦闘を行ったモンスターを破壊し、その攻撃力の半分のダメージを与える！！」

「なんだと!？」

『ぬぐあああああ!!!』

全ての銃身から発射された弾丸がガイザレスを撃ち抜いた。

ア・リリー・オブ・ジャステイス

A・O・J デス・ライフ

シンクロモンスター

星9 / 闇属性 / 機械族 / ATK0 / DEF0

チューナーモンスター + 「A・O・J」と名のついたモンスター2  
体以上

このカードはシンクロ召喚以外で特殊召喚できない。

このカードは戦闘で破壊されず、

機械族以外のモンスターとの戦闘で受ける戦闘ダメージを0にする。  
このカードと戦闘を行った相手モンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える。

このカードが相手のカード効果で破壊される時、墓地に存在するモンスター以外のカードをゲームから除外することで破壊を無効にする。

その余波はシゲルまで到達していた

実際のダメージとして。

「グッ…アアアアア…!!」

シゲル / LP 4000 2800

「シゲル…!!」

「な、なんで!?なんでシゲルが怪我を!?!」

瞬時にユウ達はあのシンクロモンスターが『本物』だと分かった。しかし事情を知らないジュンコは驚いていた。シゲルの頭には石か何かで切ったのか血が流れていた。

「っ…!!剣闘の咆哮を発動!!剣闘獣と名のついた融合モンスターが効果で破壊された時、デッキから2体の剣闘獣を特殊召喚する!!来い、バウンド!!ホプロムス!!」

バウンド / ATK 1000

ホプロムス / DEF 2100

かつて自身と同じ「剣闘獣」というカテゴリーを使った剣都の執事である山本の持つカード 『墓地獣』のキーカードの一枚をシゲルが使用していた。

4人が精霊界から戻った日（第二十九話）

「ふむ…剣闘獣の融合モンスターかこんなにもあるのですか…」

「そついや墓地獣にはデバハーツしかないみたいだな」

以前の戦いの際にヘラクレイノスやガイザレスを出したシゲルは他にもラカンやゲオルディアスを持っていた。しかし山本の持つ融合モンスターはデバハーツしかないのだ。

「ふむ…このカードは私より貴方の方が使いこなせそうですね」

「これは…確かにそうだが…」

それと同時にシゲルの持つガイザレスやゲオルディアス等の山本が持っていない融合剣闘獣に相性のいいカードである剣闘の咆哮はシゲルの方が持つてゐる方がいいと判断した。

「私としては其々のカードにはあるべき持ち主がいると思つています。そしてこのカード達もいずれ本当の持ち主に辿り着くと…」

「…それが俺だと言いたいのか？」

回想終了

「（山本さんからもらったカードが役に立った…が、生憎このカードだけだからな…クソ、ヘルバードがあれば何とかなっただかも知れんが…）」

バウンドの効果発動！特殊召喚成功時、墓地の剣闘獣をゲームから除外する！！ヴォルテックテールを除外！！」

「雑魚を何体並べようが無駄だ！！カードを伏せてターン終了！！」

デリラ

手札0枚 LP2900

デス・ライフ（ATK0）

伏せカード1枚

シゲルのターン

「俺のターン！！（戦闘破壊されないあれを破壊するには墓地の魔法・罠を全て取り除く事だ…奴の墓地にはリミッター解除のみ…だがさっき剣闘の炸裂を使ったから融合は使えない…）チツ…カードを伏せて、モンスターを守備に変更してターンエンドだ！！」

バウンド / ATK1000 DEF1200

シゲル

手札1枚 LP2800

バウンド（DEF1200）ホプロムス（DEF2100）

伏せカード1枚

剣闘の炸裂で剣闘獣をデッキに戻す効果は使えなかった。かと言って手札と合わせてデス・ライフを破壊する効果を持つカードやそれ呼び込むカードは無い。

今は耐えるしかなかった。

デリラのターン

「俺のターン！！スタンバイフェイズ時ゲームから除外されている異次元の宝玉の効果を発動！！」

「なに…！？」

除外されているということはガイザレスで破壊され、デス・ライフで除外されたカードだが、今の状況で効果を発動するとなると

「このカードがスタンバイフェイズ時除外されている時、墓地に戻すことでカードを1枚ドロウする！！」

異次元の宝玉

通常罫

ゲームから除外されている攻撃力1500以下のモンスターをデッキの一番下に戻す。

自分のスタンバイフェイズ時、このカードがゲームから除外されている場合

このカードを墓地に戻すことでカードを1枚ドロウすることができる

る。

「クソ…ガイザレスの破壊が完全に裏目だ…!!」

シゲルが睨むようにディラとデス・ライフを見比べて悪態をついた。

「ククク…俺はA・O・Jリサイクル・フィールドを召喚!!」

シゲルのデッキとの相性の良さが分かったディラは調子に乗っていた。

更なる追撃の為召喚したのは無機質な紫の巨大な箱だった。

リサイクル・フィールド / ATK 800

「リサイクル・フィールドは召喚成功時、墓地のA・O・Jを一体特殊召喚する事が出来る!!再びアンノウ・クリエーターを特殊召喚!!」

アリー・オブ・ジャスティス

A・O・Jリサイクル・フィールド

星2 / 闇属性 / 機械族 / ATK 800 / DEF 100

このカードの召喚成功時、墓地の「A・O・J」と名のついたレベル3以下のモンスターを1体特殊召喚することができる。

「行くぜ、レベル2のリサイクル・フィールドにレベル3のアンノウ・クリエーターをチューニング！」

太古から存在せし闇の正義よ、此処に光を消しされ！！」

3 + 2 = 5

「シンクロ召喚！！A・O・Jカタストル！！」

今度は一つ目で多足の蜘蛛の様なモンスターが現れた。そのモンスターの効果はシゲルも知っていた。

「（カタストル：確か精霊界で管理局が使っていた闇属性以外を効果で破壊するモンスター：なら…）リバーストラップ発動！！グラディアル・トラップ剣闘獣の罠！！相手がモンスターをシンクロ召喚に成功した時、そのモンスターと同じレベルの剣闘獣トークンを守備表示で特殊召喚する！！」

剣闘獣トークン / DEF0 / 地属性 / 5

フィールドに張りぼての獣が現れた。それを見たディラはそのカードをなぜ今発動したのか考えを巡らせていた。

「（わざわざ破壊される確率が高い状態でモンスターを増やした…壁か？いや、奴の事だ…恐らくあれで上級シンクロを狙ってくる…だったら…）カードを伏せてバトルフェイズ！！カタストルでそのトークンへ攻撃！！その瞬間カタストルの効果発動！！闇属性以外のモンスターとの戦闘行う場合、相手モンスターを破壊する！！」



「っ……！！だが、トークンの効果発動！！トークンがカード効果で破壊された時、墓地から剣闘獣と名のついたモンスターを特殊召喚する……来い！ガイザレス……！」

### 剣闘獣の罠

#### 通常罠

自分の場に2体以上「剣闘獣」と名のついたモンスターが存在し、相手がモンスターのシンクロ召喚に成功した時発動することができる。

シンクロ召喚に成功したモンスターと同じレベルの剣闘獣トークン（攻0/守0、地属性、獣族）を特殊召喚する。

このカードは「剣闘獣」と名のついたモンスター以外のシンクロ召喚の素材にできず、「剣闘獣」と名のついたモンスター以外のリリース素材にはできない。

このトークンが相手のカード効果で破壊された時、墓地の「剣闘獣」と名のついたモンスターを1体特殊召喚する。

「ぬっつ……大丈夫かの？シゲル」

「俺の心配はいらねえ……（だが、問題はこの戦いに勝ちの目が無いんだよ……）ガイザレスの効果発動！！デス・ライフとそのセットカードを破壊……！」

「デス・ライフの効果発動！！墓地の異次元の宝玉を除外、さらに魔法採掘機を発動！！フィールドの機械族シンクロモンスターをリリースし、墓地の魔法カードを1枚回収する……カタストルをリリースし手札に加えるのはリミッター解除……！」

### 魔法採掘機

## 速攻魔法

自分フィールド上の機械族シンクロモンスターを1体リリースし発動する。

墓地に存在する通常魔法以外の魔法カード1枚を選択し、手札に加える。

このカードで手札に加えたカードは発動後2ターン目のエンドフェイズまでセット・発動ができない。

「なんで…自分のモンスターを…？」

そう言った瞬間カタストルが消え、代わりにリミッター解除が手札に加わった。

なぜカタストルという強力なシンクロモンスターを犠牲にしてまで墓地のカードを回収したのかというと、カタストルの効果の穴だった。

「カタストルは闇以外のモンスターに強力な効果を発揮する。逆に言えば闇に対してはただのモンスターなのよ。シゲルのデッキに機械族はいなくても闇属性モンスターは多くいるわ…だから自らの手で破壊したのよ」

明日香の説明通り、カタストルに攻撃力を上げたソウルで攻撃すればまだシゲルに勝機があった。

いや　　そこにしか勝機が無かった

「更にデス・ライフでガイザレスに攻撃！！デス・ライフの効果で貴様のモンスターを破壊し、1200のダメージを与える！！」

『ぬぐぐああああああ！！！！！！』

「ガイザレス！！うわあ！！！！」

シゲル / LP 2800　　1600

またガイザレスが破壊され、シゲルにダメージが降りかかった。

しかし、そのおかげで2体のモンスターが場に残っていた。

ディラ

LP 2200　手札1枚

デス・ライフ (ATK0)

伏せカード1枚

シゲルのターン

「俺のターン！！手札からコール・リゾネーターを発動！！デッキからチェーン・リゾネーターを手札に加え召喚！！」

ダーク・リゾネーターやバリア・リゾネーターの様な小悪魔が鎖を背負って現れた。

チェーン・リゾネーター / ATK100

「チェーン・リゾネーターは相手の場にシンクロモンスターが存在する時、デッキから『リゾネーター』と名のついたモンスターをデッキから召喚できる！！ダーク・リゾネーターを特殊召喚！！」

チェーン・リゾネーター

効果モンスター・チューナー

星1 / 光属性 / 悪魔族 / 攻 100 / 守 100

相手フィールド上にシンクロモンスターが存在し、

このカードの召喚に成功した場合にデッキの「リゾネーター」と名のつく

チューナーモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ダーク・リゾネーター / ATK1300

フィールドにお馴染みとなった小悪魔が現れた。

1ターンに一度破壊されないこのモンスターでもデス・ライフの破壊効果には意味を成さない。

なら打つ手は

「レベル4のバウンドにレベル3のダーク・リゾネーターをチュウニング！」

獣の魂を受け継ぐものよ、立ち塞がる敵を破壊せよ！！」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚！！来い、剣闘獣フレイム・ファング！！」

フレイム・ファング / ATK 2600

フィールドに真っ赤な狼が現れた。それと同時にフィールドに黄色い立て髪を持つライオンが異次元から現れた。

「バウンドの効果で除外していたモンスターはフィールドから離れた時、特殊召喚する！！」

「はっ！！だが何体モンスターを並べようと無駄だ！！」

ヴォルテック・テール / ATK 2200

「そしてフィールドのホプロムスとフレイム・ファングをデッキに戻し、剣闘獣マキロを融合召喚！！」

フィールドの炎の狼と岩の獣が一つに交わり、巨大な戦艦がフィールドに現れた。

だが、ダーク・リゾネーターと同様戦闘破壊無効効果は意味をなさ



ジュンコの問いにユウはそう応えた。そう、優しい性格のソウルは精霊界の時よりも ジュンコやもえなどの無関係の人間を巻き込んだ事も怒っていた。

「貪欲な壺を発動！！墓地のマキロ、ガイザレス、バウンド、ダイク・リゾネーター、バリア・リゾネーターをデッキに戻し、カードを2枚ドロウする！！（来た！！）」

引いたカードと場のカードが頭の中で線と線で繋がって行った。

「シンクロン・リゾネーターは相手の場にシンクロモンスターが存在する時特殊召喚することができる！！」

シンクロン・リゾネーター

効果モンスター・チューナー

星1/闇属性/悪魔族/攻 1000/守 1000

相手フィールド上にシンクロモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

シンクロン・リゾネーター/ATK1000

フィールドに乗用車の初心者マークのような物を背負っているお馴染となった小悪魔が現れた。

「レベル7のヴォルテック・テールにレベル1のシンクロン・リゾネーターをチューニング！！」

獣の魂を受け継ぐものよ、仲間の為にその身を散らせ！！」

7 + 1 = 8

「シンクロ召喚！！来い、剣闘龍ホーリー・ミラージュ・ドラグ  
ン！！！」

フィールドに光り輝く龍が現れた。その姿はユウのスピットに似て  
いる長い胴体をもつ聖なる龍だった。

ホーリー・ミラージュ・ドラグ ン / ATK 1000

「は、ははは…ふざけやがって…たいそうなこと言う割に出したの  
はただの1000のモンスターじゃねえか！！！」

「さつきも同じようなこと言ってたよな？ソウルの効果発動！！フ  
ィールドのモンスター1体をリリースし、その攻撃力を得る！！ホ  
ーリー・ミラージュをリリースし1000アップする！！！」

そう宣言した時、粒子になったホーリー・ミラージュはそのままソ  
ウルに吸収された。

ソウル・ブラック・ドラゴン / ATK 2400 3400

「こ、攻撃力3400！？だ、だが俺のデス・ライフの効果を忘れ



たわけではないだろうな？確かに既に墓地に魔法・罫は無いが戦闘では破壊されないモンスターだ！！お前はすでに召喚権を行使し、破壊系統にはコストが付く！！その手札一枚とその黒い『2匹』のりゅ…う…で……………！！？」

そう、『2匹』の龍。

シゲルの場にはソウルの他にもう一体　　ダーク・ガブリアス・ドラグ　　ンがその場にいた。

ダーク・ガブリアス・ドラグ　　ン / ATK 2700

「ば、バカナ…確かにお前の場にはモンスターが1体だけだったはず…！！」

「ミラージュって言葉に気付くべきだったな。ホーリー・ミラージュ・ドラグ　　ンはカード効果で墓地に行った時、エクストラか墓地から剣闘龍を特殊召喚する！！」

グラディアルドラゴン

剣闘龍ホーリー・ミラージュ・ドラグ　　ン

シンクロモンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 1000 / DEF 1000

チューナーモンスター + 「剣闘獣」と名のついたレベル6以上のモンスター

このカードはシンクロ召喚以外で特殊召喚することができない。  
このカードが他のカード効果によってフィールドから離れた時、  
自分のエクストラデッキ・墓地から「剣闘龍ホーリー・ミラージュ・ドラグ　　ン」以外の「剣闘龍」と名のついたモンスターを1体特殊召喚することができる

(この特殊召喚はシンクロ召喚として扱う)  
このカードが相手モンスターを破壊した時、デッキからカードを1枚ドロウすることができる。

そう、ミラーージュ写し身なのだ。

ホーリー光と闇の表裏一体　そしてダークを呼ぶためにホーリーが存在する。

「ま、ちよつとばかり体に響くが…等価交換だ!!!バトルフェイズ!!!」

「っ!?!?」

シゲルのバトルフェイズ宣言　そしてその前の言葉の意味

「ダーク・ガブリアス・ドラグ　ンでデス・ライフへ攻撃!!!デリート・フィールド!!!」

「だ、だがデス・ライフの効果で戦闘ダメージを0にし、攻撃モンスターを破壊してその半分のダメージが…!!!」

ダーク・ガブリアスの周囲から紫色の光が辺り一帯に伸びて行った。しかし、その光をかくぐりデス・ライフはダーク・ガブリアスの額に向かって刃をつきたてた。



「駄目だ!!」

しかし、ユウはその時ディラが笑っている様に見えた。それも相手を欺いたような顔で、勝利を確信して

「リバース罨、リ「速攻魔法サイクロン！！そのセットカードを破壊する！！」は？」

ディラノ伏せカード 破壊

わずかな突風が吹いてセットカードが吹き飛んだ。ツバキが見たそのカードは何処かの墓地の様な絵面だったと記しておこう

ディラノLP22000

「じほっ、じほっ…！！」

ディラのライフが0になってすぐにシゲルが蒸せた。その後少量の血を吐いたので恐らく気管に血が流れていたのだろう。

「はぁ…はぁ…危なかった…」

「シゲル！！」

最後に引いたシンクローン・リゾネーターとサイクロンが無ければ負けていただろう。

それに少し恐怖していると後ろからジュンコが駆け寄ってきた。



ディラはこうなる事に心当たりがあつたらしく、その女の憎しみを膨らませていた、しかし、この後の光景を　　5人は一生忘れることはないだろう。

「あああああああああ

！！！！！！？」

「え…？」

膨らんだ風船が徐々に萎むようにディラの声が小さくなっていた。それだけならこの後気絶や最悪ショック死等を考えていたのだが

「え…？な、なにこれ…！？」

「人が…」

ディラの体が声が萎むと比例して　砂になっていた。そしてディラの声が聞こえなくなると間を置かずにディラの姿は完全に無くなった。

「ど、どういふ…こと…？」

その光景に呆然とするしかなかった5人だった。

精霊界：ルキの家

「待っていましたよ」

「お久しぶりです」

精霊界に飛んだ紫苑はまずルキの家を目指した。ダークも下宿して  
いると聞いた事があるのでまず行動を起こす為にはダークの協力が  
必要だったのだ。

「ダークさんは今出かけているわ。たぶんそろそろ戻ってくるから  
上がったいて」

「はい」

そして紫苑はルキの家に消えた。

一方ダークは

「ふむ…やはりユウと戦ったのは…」

「ええ、『アンゲロス』の様です…ドラグニティということは恐ら  
くアラエルかと…」

自身の配下であるレベル・マジシャンの報告を聞いていた。先日の  
紫苑救出でユウと戦った敵の事だ。ツバキの過去を知っており、あ  
れほどの力を持つ人物でダークが心当たりがあった人物。それが



アラエルだった。

「どうするんですか…この事を…」

「うむ…長に伝えてくれ、あの子たちには私から伝える（アンゲロス…か。私も本当の事を言う時が近いということか…コスモスよ）」

ダークはアンゲロスの名を聞いてコスモスの名を思っていた。

精霊界：エンディミオンの外れ

「此処が精霊界か…」

そう言ったのは ヴィータだった。その横には同じように驚いた目で周囲を見渡していたのがいた。そして2人が目指すのは『研究所』だった。

人間界

「そうでしたの…」

目が覚めたももえ、取り返したジュンコに説明を終えた4人。説明にどっと疲れた4人だったがそれよりも心配だったのが

「ジュンコ、怪我はないか？」

シゲルが心配するように連れ去られたジュンコにディラが何かした可能性があった。幸いももえは気を失っただけだったがジュンコは分からない。

「…大丈夫よ、それよりもあんたこそどうなの？私なんかの為にそんなにボロボロに」

「友達を守るためだ、これぐらいどうってことない」

素っ気なくシゲルがそう言うが、この時ジュンコの顔が赤くなっていたのに誰も気づいてない。

「（ま、守るって…私の事を守るって…はっつ／＼／＼）」  
「（あらあら）」

いや、一人だけ気づいていた。



次回予告：side紫苑

ルキの家を経由して研究所に辿り着いた私はそのデータが予想通りミッドチルダ：管理局の本拠地の言葉だと判明した。

早速翻訳に取り掛かるが、膨大な量に数日費やしてしまった。

だが あの雰囲気は一体…

謎の感覚に襲われた私はやがてあの2人と向き合うことになった

此処で白黒はつきりした方がいいですね…

次回第三九話 friend or enemy

最強カードは『ミラクルフュージョン』

追伸：感想が欲しい…それとなんかアイデアとかも…

第三十九話 friend or enemy(前書き)

感想が欲しいイイイイイイイイ!!!!!!!!

### 第三十九話 friend or enemy

人間界：海岸・カミューラの城

「お兄さん!!」

「サイバー・エンド・ドラゴンで直接攻撃!!」

「……………」

亮/LP40000

カミューラの発動した幻魔の扉。それによって相手のフィールドへ行ってしまった亮の最強カード『サイバー・エンド・ドラゴン』自身の最強カードによって亮のライフが0になってしまった

「さあ!!私の人形となりなさい!!」

「っ……………!!」

亮の目から光が消えると、鍵と共に亮の姿が消えた。

それと入れ替わりにカミューラの手には青い髪の小さな人形が現れた。

「あははは…アアッハッハッハハハハ!!!!!!」

高笑いをしながらカミューラが消えた。

シゲルがディラと戦った2日後、新たなセブンスターズの一人であるカミューラが現れた。

カミューラはまず、クロノス教諭とデュエルをした

昨夜

クロノスの場には自身のエースカードである古代の機械巨人が1体アンティーク・ギアゴレムに対してカミューラの場にはカミューラのエースカードであるヴァンパイア・ジエネシスと復活効果のあるヴァンパイア・バツツと不死のワーウルフがいた。

そしてヴァンパイア・バツツの効果でヴァンパイア・ジエネシスは古代の機械巨人よりも攻撃力が上となっていた。

「……諸君、よく見ておくノーネ！！そして約束するノーネ！！……例え闇のデュエルに敗れたとしても、闇は光を凌駕出来ない。……そう信じて決して心を折らぬこと。私と約束してください！！」

「最後の授業は終わったのかしら？クロノス先生！」

「先生……！？」

「一体何を……！？」

クロノスの言葉にユウと翔が訳が分からないと言ったようだった。しかし剣都は気付いていた。

クロノスが敗北を認めたと

「ヴァンパイア・ジエネシスで古代の機械巨人に攻撃！！ヘルビシヤス・ブラッド！！」

「ぬうううううう！！！！ま、まだまだなノーネ！！」

クロノス/LP1700 1500

巨人のヴァンパイアによってクロノスは自分の場がから空きとなった。そしてまだ攻撃権のある2体のモンスターがいてもクロノスは闇に屈しなかった。

「不死のワーウルフで直接攻撃！！吼えよ！ハウリング・スラッシュ！！！！」

「ぬわああああああああ！！！！！！！！」

クロノス/LP1500 1000

狼男の発した超音波で更に傷付いたクロノス。しかしカミューラは攻撃を止めない。

「止めよ…舞え！！ブラッティ・スパイラル！！」

「ボーイ！光のデュエルを…！！」

クロノス/LP1000 0



ライフが0になったクロノスはその場に倒れてしまった。

その後は翌日戦い、敗れた亮と同じ様に人形になってしまった。ただ「気に入らない」ということでカミューラは人形クロノスを捨てて行った。

「クロノス先生に続き亮さんまでも…」

カミューラの城から帰還したユウとシゲルだったが、学園最強とも謳われるカイザーが負けたのにシヨックを隠せないでいた。

「ユウ、シゲル、いるか？」

「剣都？どうかしたのか？」

もう消灯間近で寝ようとしていたところに何故か剣都がやってきた。その顔はどこか心配そうだった。

「紫苑とまだ連絡が取れないのか？」

「ああ…今は研究所を調べているらしいけどな…ダークが付いているから問題はないと思うが…アレ以外ならな」

『アレ』

シゲルが渡した紫苑の持っている十代の七星門の鍵の事だ。別に問題はないが、このままずっと精霊界にいるのなら些か問題があった。

「まあ、何年もない訳じゃないだろうし、問題ないだろ」

精霊界：違法研究所

「これが例のデータですか？」

ダークの案内の元、違法研究所のコンソールを操作して出したのデータを前に紫苑がそう聞いた。

「そうだ。どうやら何らかのデータらしいが…知らない文字でな。街の考古学者に見せても分からないそうだ」

そして困り果てたダークは偶然その時エンディミオンの民の様子を見に来たカルマに相談したそうだ。するとカルマは人間界で此処の事を一番知っていた紫苑に白羽の矢を立てたという訳だ。

「…これはミッドチルダ語ですね。管理局が拠点を置いている世界の言葉です」

「…なるほど。精霊界とも人間界とも違う異世界の言葉か…解読はできるのか？」

「問題ありません。全文解読するので少し時間をください」

紫苑がそう言った　それが二日前だった。

それから籠りつきりで紫苑は解読した文章を紙に写していた。しかし、あまりにも膨大な量にまだまだ時間がかかりそうだった。

「このプログラム…夜天の書と同じ…いや、補助プログラム…？」

そのプログラムの電子番号　大まかに言うとプログラムの指紋が夜天の書と同じだった。

しかし、『夜天の書』そのものではなく後から付けるプログラムの様だった。

「（私の知らないプログラム…分かっているのは…これは　…！?）」

紫苑は頭の中で考えを纏めようとした時、何かを感じた。殺気や雰囲気ではなく、地震の前触れのような嫌な予感だ。

「…一体何が…？」

そう言いながら辺りを見回すがこれと言って変わった事はない。近くに自分が写した紙の束とデータを表示しているコンソール、それ

と無機質な壁にその壁にかかっている針時計しかなかった。

「……もう5時間も……」

時計が目に入って、見ると既に今日は5時間も作業していた。固まった体を伸ばしながら少し休憩をしようと頭を休め始めた。

「確か30分が1日だと言っていたので……1時間と少しぐらいですか……」

人間界でどのぐらい時間がたったのか考えていた紫苑。その間に一通り体を伸ばしきった紫苑は座っていた椅子の背もたれにもたれかかった。

それと同時にスウーッと紫苑は眠気に襲われ、夢の中へと潜って行った。

・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・

「お　　い　　お　　」

「……ん……?」

誰かが呼ぶ声がして夢の世界から戻ってきた紫苑は目を開けた。そこには銀髪で赤と黒の服に身を包んだ魔導師　　ダークがいた。

「紫苑、大丈夫か？」

「…ふえ…？」

ダークが心配する事が何なのか分からない紫苑は慣れない椅子でガチガチになった体を伸ばし、欠伸をしながら時計を見た。

「…寝すぎましたね」

かれこれ6時間きっちり寝てしまっていた。まだ少し眠い目を擦りながらダークが持ってきたコーヒーをちびちびと飲み始めた。一方ダークは紫苑を起こした後、写してあった紙に目を通していた。

「なるほど…やはりこれは君の過去に関係があつたのか」

「ええ…ですが、どこまでが関わりがあるのか判明するのは…最後の部分ですね。もしかしたら夜天の書のバックアップなのかもしれませんし、私の構成プログラムなのかもしれませんね」

恐らくこれが紫苑の冗談のつもりだったのだろう。しかし確かにこれが悪魔となるのか天使となるのかそれともただの『データ』となるのかだれにも分からなかった。

「そうか…所で紫苑に一つだけ伝えなければならぬ事がある」

「なんですか？」

今の状況でダークが何かを伝えるということは人間界  
戦いの事だと思っていた。

セブンスターズ  
七星との

しかし 状況はより複雑に、より深く変化していた。

「理由は不明だが…以前この世界の時間と人間界の流れる時間が違うという話をしていたと思う」

「ええ…お姉ちゃんに聞きましたが、此処の1日が人間界の30分だと。ですから人間界でまだ1時間20分ほど…」

と言って紫苑はコーヒーの最後の一口を飲み干した。

「実は今から6時間ほど前に精霊界全域で謎のエネルギーが観測されてな…ついさっき神楽が人間界からこっちに戻ってきた時、エンディミオンの寄ったのだが妙な事を言っただけ…」

「妙な事…ですか？」

そもそも神楽が真面目な事をするとは思えない2人だったのはまあ、置いていて。

「人間界だと6時間ぐらい前…紫苑がこちらの世界に来たはずだと

言っていた」

「…………え…?」

それはおかしかった。6時間ということは精霊界では12日も経っているはずだった。

「で、調べた結果だが…ほぼ流れる時間が同じだった…2つの世界の流れる時が全く同じだった…つまり、6時間前から精霊界で何かが起こったということだ」

「……………(精霊界で…まさか…『次元震』…)」

時をも変化させる莫大なエネルギーに一つだけ心当たりがあった。世界を滅ぼすほどのエネルギーを持つ次元震なら時間の流れが変化するもおかしくなかった。

「(ですが、それでもなにも無しで次元震が起こるとも…):…そのことに関しては情報が足りなすぎますね」

「確かにそうだな。今も私の部下が他の集落の者と共に調べているが…めぼしい情報はないそうだ」

そう言ったダークだったが、紫苑はダークに部下がいるのが驚きだった。すると

「ダークさん、居ますか?」

研究室にルキがやってきた。ルキがやってくるのは珍しく、いつもならダークが研究所と家と往復してるためわざわざダークを訪ねる事もしなくていいのだが…

「実はエンディミオン周辺の見張りから報告が…」

先日の世界の矛盾VS管理局のエンディミオンの民救出作戦の後、エンディミオンの周囲には見張りを設けていた。念の為だが、また管理局の襲撃や他の集落 例えばエーリアンやインヴェルズなどの侵略や交戦を好む部族が疲労したエンディミオンを襲わないという事もない。

「エンディミオンの東側に2人組の人影を見たって。特徴は片方が栗色の髪に白い服、もう片方は赤いゴスロリの服で赤毛…どうおもっ？」

「どう考えても精霊ではないな…恐らくは管理局か…「なのはとヴィータ」なに？」

ルキの報告にダークが考えていた。しかし精霊にその様なモンスターは存在せず、人間だしたらと口にしてると紫苑がコンソールを叩きながら応えた。

「恐らく管理局員の高町なのはと鉄槌の騎士ヴィータではないかと



思います」

「知っていんですか？」

ルキの言葉に紫苑のコンソールを叩く音が一瞬止まった。しかしまた同じように音が鳴り

「私のオリジナル…とでもいいでしょうか…彼女は限りなく私に近い…いえ、私が限りなく彼女に近いと言った方が正しいですね。そして、もう一人のヴィータも私と同じ夜天の書のプログラムの一つ…と言っても私は元ですがね…」

何処か自虐したような口調で紫苑が説明した。

「彼女達は人間界で何らかの理由で捜査中にこちらの世界に飛ばされた…という所ですね。それか私が此処にいると知って来たか…」

そう言つてコンソールのキーで「タアン」と心地いい音を立てながら画面に研究所の監視カメラの映像を出した。出入り口のカメラには何も映っておらず、それを見た紫苑は次の画面を映し出した。同じようにエントランス、様々な通路、部屋を次々に表示していると一つの画面で止まった。

「……どうやら私狙いの様ですね」

何かに警戒するようになるのはとヴィータが通路を進んでいる映像だ

った。

それを見た紫苑は近くに置いていたデュエルディスクを持つと部屋を出ようとした。

「どこに行く気だ？」

「グイータはどうであれ、なのはは私に話があるそうです…私の問題なんです」

研究所：A - 3 地区・通路

「ここが…紫苑ちゃんが捕まってたって言う…」

「氣いー抜くんじゃねーぞ、どんな仕掛けがあるか分からねえからな」

グイータがそういいながら自身のデバイスを握りしめていた。

やがて2人のいる地区のホールへと抜けたが、そこには先客 紫苑がいた。

「紫苑ちゃん…!!」

「っ!!闇の書の残滓!!」

なのはとグイータ、それぞれが別々の反応を示した。一方紫苑はデ

イスクを腕に嵌めて、起動させていた。

「何処まで付きまとう気ですか？いい加減にしてほしいんですがね  
…」

「紫苑ちゃん!!」

「お前がこの世にいたらいけないぐらい、自分でも分かってるはず  
だろ!!」

ヴィータの言葉に微かに紫苑の目に殺意がこもった。しかしほんの  
一瞬で、誰も 紫苑すらもそのことに気付いていなかった。

「でしたらそれは、貴女にも言えることでは？元閻の書の騎士」  
「ッ…！テメェ!!」

ヴィータは紫苑に殴りかかりたい気持ちを必死で抑えた。  
すると横にいたなのはが悲しそうな目で紫苑を見ていた。

「紫苑ちゃん、私の話を聞いて!!」  
「断ります、私はあなたの仲間にも友達にも…家族にもなる気はな  
いです」

そう言って突き放した紫苑。だがなのはは違うと言わんばかりに首  
を横に振った。

「謝りたいの」

「謝る…？一体何をですか？私の苦しみを知らなかった事ですか？貴女の仲間が私に行つた事ですか？それとも約束を守れなかった事ですか？」

紫苑は静かな怒りを込めて言い放つた。それも違つと言わんばかりになのはは首を振つた。

「私が…貴女の苦しみを知らうとしなかつた事を謝りたいの」  
「っ！？」

なのはの言葉に紫苑は予想外だと言わんばかりに目を見開いた。だが、なのははそれをスルーしてさらに続ける。

「私の我儘で家族、友達つて言つても貴女は納得しない。私があるたの事を知ろうとしなかつたから…だから…「だからなんなんですか！」「！？」」

突然声を荒げた紫苑。その眼には怒りとも憎しみとも、悲しみとも言えないような表情がこもっていた。

「それで全てが許されると思つてるのですか！？それで分かりあう事ができると思つているんですか！？」

「紫苑ちゃん！！私は「っ…」なら私が管理局と分かりあうことのない理由を言いましょうか！」「え？」

先ほど述べた理由が管理局を嫌う理由だと思っていたのはとヴィータは呆けた声を出してしまった。しかし歯止めが利かなくなった紫苑は左手でヴィータを指さした。

「管理局に…わたしを紫苑しおんだと認めない人がいる…それが管理局だから！私を闇の書の残滓だと信じ込んでいるから！！私は局員の貴女と戦う！！」

そう言つて紫苑はディスクを構えカードを5枚ドロした。

「紫苑ちゃん！！」

「なのは！構えろ！！」

必死に説得しようとするのはだったがヴィータが自身のデバイスをディスクに変えて構えた。それを見てなのはも同じようにディスクを構えた。

「デュエル！！」

「デュエル！！」

「…デュエル」

紫苑、ヴィータは声を張り上げてデュエルを宣言するが、

1VS2の変則全員LP4000のバトルロワイヤルルールです。  
順番は紫苑 ヴィータなのは 紫苑です。

紫苑のターン

「私のターン、E・HEROフォレストマンを守備表示で召喚！」

フィールドに紫苑の戦術の要とも言えるHEROが現れた。

フォレストマン/DEF2000

「ターンエンド！」

紫苑

LP4000 手札5枚

フォレストマン(DEF2000)

ヴィータのターン

「あたしのターン！！手札の俊足のギラザウルスは特殊召喚扱いで  
召喚できる！！」

俊足のギラザウルス

効果モンスター

星3/地属性/恐竜族/攻1400/守 400

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚に成功した場合、  
相手は相手の墓地に存在するモンスター1体を  
選択して特殊召喚する事ができる。

ギラザウルス / ATK1400

フィールドにラプトルの様な恐竜が現れた。  
ギラザウルスの効果にはさらに続きがあるが、それは紫苑の墓地に  
モンスターがいなければ発動できなかった。

「更に大進化薬を発動！！フィールドのギラザウルスをリリースし、  
これから3ターンの間あたしは恐竜族モンスターをリリースなしで  
召喚できる！！」

大進化薬

通常魔法

自分フィールド上に存在する恐竜族モンスター1体をリリースして  
発動する。

このカードは発動後、相手のターンで数えて  
3ターンの間フィールド上に残り続ける。

このカードがフィールド上に存在する限り、  
レベル5以上の恐竜族モンスターをリリースなしで召喚する事がで  
きる。

フィールドのギラザウルスが消えるとヴィータは手札の上級恐竜族  
モンスターを一枚引つ張り出してきた。

「手札のジュラック・タイタンをリリース無しで召喚する！！」

ジュラック・タイタン

効果モンスター

星9 / 炎属性 / 恐竜族 / 攻3000 / 守2800

このカードは特殊召喚できない。

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、

罨・効果モンスターの効果の対象にする事はできない。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する攻撃力1700以下の

「ジュラック」と名のついたモンスター1体を

ゲームから除外する事で、このカードの攻撃力は

エンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。

ジュラック・タイタン / ATK3000

「攻撃力…3000!!」

「これがあたしのデッキのエースだ!!カードを2枚伏せてターンエンド!!」

ヴィータ

手札1枚 LP4000

ジュラック・タイタン (ATK3000)

伏せカード2枚 大進化薬

なのはのターン

「私のターン…コーリング・ノヴァを召喚してターンエンド…」

コーリング・ノヴァ / ATK1400



先程ガツンと言われたなのはの覇気はすでになかった。そんな状態で召喚したのは光・天使のリクルーターだった。攻撃表示で。

なのは

手札5枚 LP4000

コーリング・ノヴァ（ATK1400）

伏せカード無し

紫苑のターン

「私のターン（なのははもう戦う意思はない…なら狙うのは…）スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動！デッキから『融合』を手札に加える！手札からE・HEROエアーマンを召喚！！」

フィールドにプロペラのついた風のHEROが現れた。その風が吹いた時、紫苑のデッキのカードの一枚が飛び出してきた。

エアーマン / ATK1800

「エアーマンの効果発動！デッキよりE・HEROオーシャンを手札へ、そして先程加えた融合を発動！」

紫苑の宣言でフィールドの一角が歪んだ。融合発動の独特の現象だ。

「手札のレディ・オブ・ファイアとオーシャンを融合！融合召喚！アブソルートZero！！」

歪んだ空間に2体のHEROが飛びこむとフィールドに紫苑のデッキで一番効果が強力なモンスターが現れた。

アブソルートZero / ATK2500

「更に融合回収を発動！墓地のオーシャンと融合を手札に戻し、再び融合を発動！！手札のオーシャンと場のフォレストマンを融合！！融合召喚、E・HEROジ・アース！！」

ジ・アース / ATK2500

フィールドに白いHEROが現れた。それを見たヴィータの顔が曇った。

「クツ…ジ・アースってまた厄介な…！！」

「（シグナムもそうでしたが、ヴィータも私のカードを知っている…？いや、今はそれどころじゃない）ジ・アースの効果！！自分フィールド上のアブソルートZeroをリリースし、その攻撃力分攻撃力をアップさせる！！地球灼熱」  
ジ・アースマゲマ

E・HEROジ・アース

融合・効果モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「E・HERO オーシャン」+「E・HERO フォレストマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のつ

いた

モンスター1体をリリースする事で、このカードの攻撃力は  
このターンのエンドフェイズ時まで、リリースしたモンスターの  
攻撃力分アップする。

ジ・アース / ATK 2500 5000

ジ・アースの手には溶岩を彷彿とさせる紅い剣が握られた。それと  
同時になのはとヴィータの場のコーリング・ノヴァとジュラックタ  
イタンが凍りついた。

「アブソルトZeroの効果発動！！フィールドから離れた場合  
相手フィールドのモンスター全てを破壊する！！」

その言葉と共に2体のモンスターが砕け散った。だがなのははそれ  
を無表情で見えており、ヴィータは必死に次の手を考えていた。

「クッ……！！リバースカード、ディノクライシス発動！！自分の場  
の恐竜族モンスターが破壊された時、タイタンを除外してジュラッ  
ク・ティラヌスを特殊召喚！！」

ディノクライシス

通常罫

自分フィールド上の恐竜族モンスターが破壊され墓地へ送られた時  
発動することができる。

そのモンスターを除外して、そのレベル以下の手札の恐竜族モン  
スター1体を特殊召喚することができる。

フィールドに炎を身に纏った巨大なティラノザウルスが現れた。

ジュラック・ティラヌス / ATK 2500

ジュラック・ティラヌス

効果モンスター

星7 / 炎属性 / 恐竜族 / 攻2500 / 守1400

自分フィールド上に存在する恐竜族モンスター1体を

リリースする事で、このカードの攻撃力は500ポイントアップする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊して墓地へ送った時、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

「ですが、どちらにしろ貴女はここで終わりです。バトルフェイズ  
！ジ・アースでジュラック・ティラヌスへ攻撃！地球灼熱斬！！アース・マグナ・スラッシュ」

「うわあああああ！！！！」

ヴィータ / LP 4000 1500

灼熱の剣を振りかざしたジ・アースの攻撃をティラヌスはモロに喰らってしまった。炎と炎のぶつかり合いで起こった爆発にヴィータが巻き込まれてしまった。

「っ！？ヴィータちゃん！！」

「っ…ハッ…ハッ…！！」

ハツとしたなのはが吹き飛ばされたヴィータの名を呼んだ。立ち上がったヴィータを見たのはは息を呑んだ。ヴィータの着ていた服は炎でボロボロになり、いたる所に火傷のあとが見られた。

「これで終わりです、エアーマンで直接攻撃！」

上空に飛び上がったエアーマン。

この攻撃が決まればヴィータのライフはゼロになる。

「トラ…ッ プ発動…!!！」

途切れ途切れでヴィータが伏せていたカードを発動させた、と同時に上空に上がっていたエアーマンに隕石が命中した。

「ジュラシック…インパクト!!！」

息を整えたヴィータの声に反応するように更に多くの隕石がフィールドに降り注いだ。

『流星群』と言えば聞こえがいいが、そんなロマンチックなモノではないモノだった。

「自分のライフが相手より低い場合発動できる！フィールドの全て

のモンスターを破壊し、そのプレイヤーに破壊したモンスター1体につき300のダメージを与える!!」

その説明の最中にもジ・アースに隕石が降り注いだ。

そしてフィールドは溶岩に覆われた。

ジュラシック・インパクト

通常罫（制限）

自分のライフポイントが相手より少ない場合のみ発動可能。フィールド上のモンスターを全て破壊する。

この効果で破壊されたモンスター1体につき、そのモンスターのコストローラーは300ポイントのダメージを受ける。

次の自分のターン終了時までお互いのプレイヤーはモンスターを召喚・特殊召喚できない。

紫苑 / LP 4000 3400

「っ…!!なら、カードを2枚伏せてターンエンド!」

紫苑

LP 3400 手札1枚

伏せカード2枚

ヴィータのターン

「あたしのターン…!!カードを伏せてターンエンドだ!!」

ヴィータ

LP1500 手札0枚

伏せカード1枚 大進化薬

フィールドにある大進化薬でもジュラシック・インパクトの効果で召喚ができない。それどころかヴィータのデッキは超上級恐竜にそのサポートカードを多く入れたパワーデッキだ。

一度リズムを崩されると調子に乗りにくくなるのだ。

なのはのターン

「……………」

なのはのターンになったがなにも言わず、俯いていた。その間にもジュラシック・インパクトで一面溶岩だったフィールドが冷えて、元通りになっていた。

「紫苑ちゃん」

「…なんですか」

ディスクを降ろしたなのはに驚きながら紫苑が聞いた。なのはは泣きそうないや、既に泣きながら紫苑に訴えかけた。

「なんで…ひつぐ…なんで戦わなくちゃいけないの…？」

「……………」  
「なのは…」

自分が泣いている事に気付いたなのはそれを拭った。しかし壊れた蛇口の様に更に溢れてくる。

「ひつぐ…だつて…私は紫苑ちゃんと戦いたくない…なのに…」  
「…それがなんですか」

「…え…？」

なのはの質問の紫苑の答え　それは

「私は管理局と戦う理由がある…それが復讐だとしても、私は戦う。ただそれだけ、それがあなたと私が戦う理由…それに…」

そう言つて紫苑が威嚇するようになのはとヴィータを見た。ヴィータはその目つきに一瞬ひるんでしまった。

「貴女達だつて…ユウや剣都と戦う理由が無かった。ただロストロギアを持っている、それだけで戦った…それでユウと戦う理由があるかもしれない、けど剣都には無かった。それと何か違いがありますか？」

「それは…」



そう言っただけなのはまた俯いた。確かに自分がユウと戦ったのは口ストロギア、それだけだった。だが剣都の時はそれも確定して無い時…しかも武力行使でヴィータは襲った。

「分かってないようなんですが…私やお姉ちゃん…それに他のみんなも貴女達とはもう『関わりたくない』と思っていますよ」「っ!？」

その声が 紫苑の声がツバキに聞こえた。だがツバキは此処には居ない。しかしツバキに言われてる気がした。

「貴女がどう思っているのか知りませんが、もう貴女を私達は敵としか見てません。そして…」

そう言っただけ紫苑は下ろしたディスク 淡い青のデュエルディスクを再び構えた。

「敵なら、排除します」

「……………私のターン!!」

紫苑の言葉に、なのはの心に火がついた。確かに敵としか思ってい

ないならないのなら

「（敵らしく、力づくで話を聞いてもらうの！！）」

余談だがこの時ヴィータはなにかデジャヴを感じ、そしてそのデジャヴに恐怖を覚えたらしい。

「手札からヘカテリスを墓地に送ってデッキのヴァルハラを手札に加えるの！！そのまま発動！！」

なのはの背後に神々しい居城が現れた。そしてそれは強靱な天使が現れる前触れだった。

「ヴァルハラの効果で手札の天使族モンスター、アテナを特殊召喚！！」

アテナ / ATK 2600

フィールドに槍と盾を持った戦う天使が現れた。紫苑は以前ユウから聞いて居たアテナバーンの事をしっかりと覚えていた。

「そしてフレイヤを守備表示で召喚！！」

フィールドにチアリーダーの様なモンスターが現れた。それと同時にアテナの持つ槍に雷が走った。

「アテナの効果！！天使族モンスターが出るたびに相手に600ポイントのダメージを与えるの！！」

「っ…！！」

紫苑 / LP 3400 2800

雷が真つ直ぐと紫苑に向かい、そして直撃した。だが、コンボはまだ始まったばかりだ。

「アテナの効果発動！！フィールドのフレイヤを墓地に送って再びフレイヤを特殊召喚するの！！そして600ダメージ！！」

「っあ…！！」

紫苑 / LP 2800 2200

「そしてフレイヤの効果で私の場の天使族モンスターの攻撃力を400上げるの！！」

フレイヤ / ATK 100 500 DEF 100 500  
アテナ / ATK 2600 3000 DEF 800 1200

「バトルフェイズ！！アテナで直接攻撃するの！！」

「リバース罠、ソニック・マジック発動！！手札の魔法カードを1枚墓地に送り、セット状態の通常魔法を発動することができる！！」

ソニック・マジック

通常罠

相手の直接攻撃宣言時、

手札の通常魔法を墓地に送ることによってこのカードを発動することができる。

自分フィールド上のセット状態の通常魔法を発動する。

発動したカードは効果処理後、除外される。

「伏せカードはミラクルフィージョン、よって墓地のエアーマンと  
レディ・オブ・ファイアを除外してGreatクレイトTORNADOトルネードを融  
合召喚！」

GreatTORNADO / ATK2800

「GreatTORNADOの効果発動！！」

そう宣言した瞬間アテナとフレイヤが竜巻に巻き込まれた。

「融合召喚成功時、相手フィールドのモンスター全ての攻守を半分に  
する！！ダウン・バースト！！」

「っ！！アテナの攻撃力が……！！」

フレイヤ / ATK 500    250    DEF 500    250  
アテナ / ATK 3000    1500    DEF 1200    600

「っ…バトルフェイズ終了なの!!!カードを伏せてターンエンド!」

なのは

手札2枚    LP 4000

アテナ (ATK 1500)    フレイヤ (DEF 250)

伏せカード1枚    ヴアルハラ

### 紫苑のターン

「私のターン、手札からパラレル・ワールド・フュージョン並行世界融合を発動!ゲームから除外されているHEROをデッキに戻すことで融合モンスターを召喚できる!レディ・オブ・ファイアとエアーマンをデッキに戻し、ノヴァマスターを召喚!!!」

パラレル・ワールド・フュージョン  
平行世界融合

### 通常魔法

ゲームから除外されている、融合モンスターカードによって決められた

自分の融合素材モンスターをデッキに戻し、「E・HERO」と名のついた

融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードを発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚する事はできない。

ノヴァマスター / ATK 2600

「バトルフェイズ!! GreatTORNADOでヴィータに直接攻撃!! スーパーセル!!」

風の竜巻が真っ直ぐとヴィータへ向かっていた。しかし、突如としてその向きがアテナへと変わった。

「リバース罠、シフトチェンジ!! 攻撃対象をアテナへ移し替えるの!! きゃう!!」

シフトチェンジ

通常罠

自分フィールド上に存在するモンスター1体が相手の魔法・罠カードの効果の対象になった時、または相手モンスターの攻撃対象になった時に発動する事ができる。その対象を自分フィールド上に存在する正しい対象となる他のモンスター1体に移し替える。

なのは / LP 4000 2700

「ですがまだノヴァマスターの攻撃が残っている!! バトル、ノヴァマスターでヴィータに攻撃!!」

今度は炎の槍がヴィータへ飛んで行った。しかしその槍を防ぐように薄黄色のバリアが現れた。

「罨カード、ガードブロック!! 戦闘ダメージを無効にしてカードを一枚ドロ―!!」

「…ターンエンド」

紫苑

手札0枚 LP2200

GreatTORNADO(ATK2800) ノヴァマスター)

ATK2600)

伏せカード無し

ヴィータのターン

「あたしのターン! カードを伏せてターンエンド!!」

ヴィータ

LP1500 手札1枚

伏せカード1枚

大進化薬が先程のターンでなくなったが、ほど先程と同じ状況だった。いきなり2600を超えるモンスターを出すのは流石に不可能だった。その為には準備が必要だった。

なのはのターン

「私のターン!!! 手札から光の判定を発動!! 私の場のヴァルハラを墓地に送ることでコート・オブ・ジャスティスをデッキから発動する!!!」

光の判定

通常魔法

自分フィールド上に「神の居城 ヴァルハラ」もしくは「コート・オブ・ジャステイス」が存在する場合発動することができる。

フィールド上の永続魔法を一枚墓地に送りデッキから永続魔法を一枚選択し、  
発動することができる。

コート・オブ・ジャステイス

永続魔法

自分フィールド上にレベル1の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、

手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「コート・オブ・ジャステイス」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

なのはの背後の居城が消えると天井近くに光りのリングが現れた。  
その周りに小さな天使が飛びまわっていた。

「私の場にレベル1の天使、フレイヤが存在するから手札から光神ライトニン  
グキア機 - 月光げっこうを特殊召喚する！！そして、異次元の精霊を召喚！！」

ライトニングキアげっこう  
光神機 - 月光

効果モンスター

星6 / 光属性 / 天使族 / 攻2000 / 守1800

このカードは生け贄なしで召喚する事ができる。

この方法で召喚した場合、このカードはエンドフェイズ時に墓地へ送られる。



このカードがフィールドから墓地へ送られた時、カードを一枚ドロ  
ーする。

桜火 / ATK 2400

異次元の精霊

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 天使族 / 攻 0 / 守 1000

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1  
体を

ゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

次のスタンバイフェイズ時、この特殊召喚をするために  
ゲームから除外したモンスターをフィールド上に戻す。

異次元の精霊 / DEF 1000

フィールドに楕円形の光に包まれた妖精と銀色に輝く球体の天使が  
現れた。

「レベル6の月光にレベル1の異次元の精霊をチューニング！  
古より生まれし光よ、悠久の時を得て彼の者を打ち滅ぼせ！！」

6 + 1 = 7

「シンクロ召喚！！エンシエント・ホーリー・ワイバーン！！」

フィールドに長い胴体の光り輝く龍が現れた。その姿が神々しく、  
また明るかった。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン / ATK 2100 2500

DEF2000 2400 (フレイヤ効果)

「2500…ですが、私のモンスターよりは引くですが」

「月光の効果で一枚ドロ、さらにこの子は私とあなたのライフ差だけ攻撃力をアップさせるの!!!差は500!!!」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン

シンクロ・効果モンスター

星7 / 光属性 / 天使族 / 攻2100 / 守2000

光属性チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分のライフポイントが相手より上の場合、

その数値だけこのカードの攻撃力はアップする。

自分のライフポイントが相手より下の場合、

その数値だけこのカードの攻撃力がダウンする。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

1000ライフポイントを払う事でこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン / ATK2500 3000

「攻撃力…3000!!!」

本日2回目の3000との対面に紫苑は苦虫を噛んだ顔になった。いや、さらに状況は最悪だった。

「バトル!!!エンシエント・ホーリー・ワイバーンでGreatTORNADOに攻撃!!!ホーリー・シューター!!!」

エンシエント・ホーリー・ワイバーンの口から光の光線が真っ直ぐとGreatTORNADOに向かって発射された。

「クッ……!!」

守るすべがない紫苑を守るようにGreatTORNADOが光線を受け、消滅した。

それと同時に更にエンシエント・ホーリー・ワイバーンの光が一層強くなった。

紫苑 / LP2200 2000

エンシエント・ホーリー・ワイバーン / ATK3200

そう、紫苑のライフが削られていけば行くほど、エンシエントの攻撃力が上がって行くのだ。しかも既に3000Overのこのモンスターをそう簡単に倒すことはできない。

「カードを伏せてターンエンドなの!!」

なのは

LP2700 手札0枚

エンシエント・ホーリー・ワイバーン (ATK3200) フレイ

ヤ (DEF250)

コート・オブ・ジャスティス 伏せカード1枚

## 紫苑のターン

「私のターン、私はホープ・オブ・フィフスを発動！墓地のフォレストマン、オーシャン、ジ・アース、Great TORNADO、アブソルートZeroをデッキに戻し、カードを2枚ドロー！」

引いたカードと場のノヴァマスターでこの状況を覆せる方法を必死に考えていた。

3200のモンスターにはほぼ毎ターン上級天使を手札から召喚する永続魔法、そして天使のサポートモンスター、その牙城を崩すのは

「未来融合フューチャーフュージョンを発動！！デッキからフリーズ・レディとアイスエッジを墓地に送り、2ターン後のスタンバイフェイズアブソルートZeroを特殊召喚します！」

「2ターンも与えないぜ！！」

ヴィータの言うとおり、このままだと次のなのはのターンで紫苑は終わってしまう。しかし、紫苑は別の狙いがあった。

「ミラクルフュージョンを発動！墓地のフリーズ・レディとアイスエッジをゲームから除外してダイヤモンド・ダストを特殊召喚！」

フィールドに氷で出来た女性が現れた。

ダイヤモンド・ダスト / ATK 2700

「けど、私の場のモンスターのほうが攻撃力が上なの!!」

「ダイヤモンド・ダストの効果、融合召喚成功したターン相手のモンスター効果をすべて無効にする!」

その言葉と共にフレイヤは寒さに身を抱え、エンシエント・ホーリー・ワイバーンはぐったりとしていた。

|                         |      |      |
|-------------------------|------|------|
| エンシエント・ホーリー・ワイバーン / ATK | 3200 | 2100 |
| DEF                     | 2400 | 2000 |
| フレイヤ / ATK              | 2500 | 0    |
| DEF                     | 2500 | 0    |

「そ、そんな…」

「なのは!?!」

ヴィータがなのはに呼び掛けるが、なのはは震えるだけだった。自身の最強カードが破壊されそうなのだ。

「バトルフェイズ、ダイヤモンド・ダストでエンシエント・ホーリー・ワイバーンに攻撃!ダイヤモンドブリザード!」

ダイヤモンド・ダストが生み出した無数の氷の礫が銃弾となりエンシエント・ホーリー・ワイバーンに襲いかかった。

「きゃあああああ!!」

なのは / LP 2700 2100

攻撃を受け切れなかったエンシエント・ホーリー・ワイバーンを狙った氷の弾丸がなのはにも襲いかかった。

なのはの伏せカードは攻撃対象を移し替える2枚目のシフトチェンジだった。

しかし紫苑はさらなる攻撃宣言を行った。

「ノヴァマスターでヴィータに直接攻撃！」

「クツ！リバース罠、化石発掘！！手札のカード一枚を墓地に送って墓地のジュラックティラヌスを特殊召喚！！」

化石発掘

永續罠

手札を1枚捨てて発動する。

自分の墓地に存在する恐竜族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

ジュラック・ティラヌス/DEF1400

再びヴィータのフィールドに巨大なティラノが現れた。そしてノヴァマスターの攻撃を受けてティラノは爆散した。

「ノヴァマスターの効果で1枚ドロウ、今引いたディメンションヒーローを発動、除外されているのは2体！よって2枚ドロウします。サイクロンで、コート・オブ・ジャスティスを破壊し、カードを伏せターンエンドです。」

紫苑

手札0枚 LP2200

ノヴァマスター（ATK2600） ダイヤモンド・ダスト（ATK2700）

未来融合 伏せカード1枚

フレイヤ/ATK0 400 DEF0 400

ダイヤモンド・ダストの効果が無くなったフレイヤが元気になったが、2人の場のモンスターはそれだけだった。

流石に自身のエースを失ったのは痛く、2人から闘志が失いつつあった。

ヴィータのターン

「あたしの…ターン…（ちくしょう…あいつに勝てない…闇の書の残滓は…全て消さなくちゃならないのに…）…ジュラック・デイノを守備表示で召喚してターンエンド」

ジュラック・デイノ

チューナー（効果モンスター）

星3/炎属性/恐竜族/攻1700/守 800

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

そのターンのエンドフェイズ時に自分フィールド上に存在する

「ジュラック」と名のついたモンスター1体をリリースする事で、自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ヴィータ

手札0枚 LP1500

ジュラック・デイノ（DEF800）

伏せカード無し

もうヴィータに打つ手はなかった。たった1体のチューナーで乗り切れるほど紫苑は甘くはなかった。

なのはのターン

「私のターン！うっ…（神の警告……来るのが遅すぎた…）」

引いたカードはライフを2000支払って発動するカウンター罠だった。

しかしもうなのはのライフは2100と、使用すれば確実に敗北が待っていた。

「……カードを伏せてターンエンド」

なのは

LP2100 手札0枚

フレイヤ（DEF400）

伏せカード2枚

紫苑のターン

既に戦いを投げ出していると言っても良い2人だったが、紫苑は今後



の 全ての展開を考えていた。

「（…もし此処で2人をこのまま逃がせば確実にまたやってくる。なら、いまここでケリを付ける）ドロロー！E・HEROボルテックを召喚！」

雷を纏ったHEROが現れた。しかもボルテックはダメージを与えると除外されているHEROを特殊召喚する効果もあるため、ほぼこのターンで終わる。

「バトルフェイズ、ノヴァマスターでジュラック・デイノに攻撃！」  
「うっ…!!！」

最後の壁が破壊され、ヴィータの場はなにも無くなった。そして、ノヴァマスターの効果で一枚ドロローした。

「ボルテックでヴィータに攻撃、ボルテック・サンダー!!！」

「うわああああ!!！」

降り注いだ雷に当たり、ヴィータは感電した。しかし攻撃力が低かったためかヴィータが気絶することはなかった。

ヴィータ/LP1500 500

「ボルテックの効果で除外されているフリーズ・レディを「トラップカード発動なの!!！」っ…神の警告…!!！」

なのはの発動した神の警告　だが代償は余りにも大きく、発動と共にライフを失ったなのはの呼吸がほぼ過去吸みたいに「コヒュー、コヒュー」といつている。

だがまず目標がヴィータの撃破だと判断した紫苑はさらなる攻撃を行った。

「ダイヤモンド・ダストでヴィータに攻撃、ダイヤモンドブリザードー！」

無数の氷の弾丸がヴィータに向かっていった。ヴィータは既に打つ手なしと判断し、諦め、衝撃に身を固めていた。

「リ…バース…ト…ラップ…発動…!!」

なのはの伏せカード発動宣言。それと同時にダイヤモンド・ダストの攻撃が曲がり、フレイヤに向かっていった。

「シフ…トチェン…ジ…攻撃をフレイヤに…うつしかえるの…」

「なのは……!!」

息も途切れ途切れでヴィータを守ったなのは。しかし先程から紫苑自身が言っている様に、敵なら排除するまでだ

「リバース罠、異次元からの帰還を発動!!現れる、フリーズ・レディ!アイスエッジ!」

紫苑 / LP 2000 1000

フリーズ・レディ / ATK 1200

アイスエッジ / ATK 800

まだ攻撃権の残っている2体のモンスター

「そんな……!!」

「ま……だ……!!」

「フリーズ・レディでなのはに、アイスエッジでヴィータへ直接攻撃!これで終わりです!アイススライサー!!コールドガン!!」

フリーズ・レディの右腕が氷の刃へ変わり、アイスエッジの周囲に氷の弾丸が漂った。

「きゃああああああああああああああああ！！！！！！」

「うわああああああああああああああああ！！！！！！」

なのは / LP 1000

ヴィータ / LP 5000

同時に2人のライフが0になった。それと同時に紫苑の場のモンスターも消えた。

「はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…」

だが同時に2人と精霊界で戦った紫苑の精神力も底を尽きかけていた。

だが、それでも2人を拘束しようとしていた。

そしてそこで意識途切れた

## 研究室

「……………う……………っ！…ここは…？」

先程までコンソールを叩いていた研究室のテーブルの上で目を覚ま

した紫苑。

近くには同じように椅子に座って寝ていたルキと

「ん？目が覚めたのか」

コンソールを叩いて作業をしていたダークがいた。

実は紫苑が2人と戦う前にダークにミッドチルダ語の翻訳表を作っていたのだ。

紫苑が戦っている間もダークとルキで例のデータの翻訳を進めていたのだが…

「私は一体…」

「ふむ…君がああの2人に勝った後、私とルキであの場所に向かったのだが…」

## 回想

「紫苑、大丈夫か！」

倒れている紫苑に駆け寄ったダークは急いで容体を確認した。幸い疲労で寝ているだけだと分かり2人は安堵のため息をついた。

「ルキ、紫苑を研究室の机の上に寝かしてくれないか？研究者の寝室は此処から遠いから研究室の方がいいんだが…」

「分かった」

紫苑を抱えてルキが研究室へと戻って行った。その間にダークはライフがゼロになって倒れていた2人を拘束するために魔法でロープを具現化していた。

「…此処まで追ってくるとはな…（このままでは…本格的に精霊界が管理局と戦争を起こすことになる…）」

ダークが今後の事態に頭を悩ませながら気を取り直して2人を拘束しようと2人の元へ歩いて行った。

「なのは！！」

「ヴェイター！！」

だが、そこにフェイトとはやてが現れるのにもっとダークは頭を悩ませた。

まさかこうも早く2人の救出が来るとは思いもしなかったのだ。

「はあ…仕方が無いか」

「っ！時空管理局のフェイト・T・ハラオンです！！動かないでください！！」

フェイトがダークに気付き、持っていた斧の様な物を向けた。一方はやてはなのはとヴィータの怪我の様子を見ていた。何度も直接攻撃を喰らいボロボロだったが命に別条はないと判断しホツとしていた。

「管理局か…それで、どうする気だ？また精霊を捕えて実験動物にする気か？」

「なっ！？」

「そんなことはしません！！」

ダークの言葉にフェイトは驚き、はやては否定した。しかしダークは持っていたロープを消すと、三日月の様な頭の杖を取り出した。

「生憎…私の部下は何人もこの研究所で管理局に体を弄られたそうだ。その者にも家族が、愛する人がいた」

「う、嘘だ！！」

フェイトがダークの言葉を否定し、雷を纏った槍をダークに向けてはなった。

しかしダークはその槍を軽くかわすと杖を2人に向けた。

「ツバキの友人となつてくれる人がいると思ひ喜んだが…君達はその気持ちも踏みにじつた」

「っ…！」

その言葉にはやては言葉を失つた。はやてが管理局員としてツバキと戦つた時間こえた「信じていたのに」という言葉。

その意味は理解しているはずだつた

「…ここで君達を殺しても目覚めが悪い…その2人を連れて二度とこの街に来ないというのなら追撃はしない。さつさと立ち去れ」

「……………」

「……………バルディッシュ」

フェイトが何かを呟くと4人の姿が消えた

回想終了

「…という訳なんだ。すまなかつたね…街を守るために君の頑張りを無駄にして」

「いえ、ただ返り討ちにしただけなので…所で、解読は？」



「既に完了しているが……これは一体、何の冗談なんだろうな……」

そう言っただークが紫苑が解読した文章と自身で解読した文章の纏めたレポートを紫苑に見せた。

それを見た紫苑の反応は

「……………」

困惑していた。

第三十九話 friend or enemy(後書き)

紫苑「私の圧勝でしたね…」

たまにはギリギリではなく圧倒するのも良いかと思った。

剣都「で、人間界ならカイザーの戦いが終わったくらいか…」

次は回想で少し前に戻るけどね。その次は原作介入だね。

ユウ「じゃあ次回は？」

予想外の2人の勝負

オリジナルカード

ディノクライシス

ソニック・マジック

光の判定

ライトニングキアげっこう

光神機 - 月光

次回予告 : sideツバキ

紫苑が精霊界に向かって6時間ほど…一先ず今日の授業を終え私達は其々の事をしていた。

けどそこに現れたのは…!!

そしてある賭けが始まった。ハンデは…私のデッキ？

次回第四十話魔法使いVS盾の守護獣

最強カードは『死者蘇生』

ツバキ「って、待って。次に戦うの私？」

ん？いや違うで

シゲル「だがツバキのデッキが関係あるんだろ？」

お楽しみ〜

剣都「逃げたな…」

## 第四十話 魔法使いVS盾の守護獣（前書き）

さて、色々とイベントなどで開いてしまいましたが…今回で裏話は一区切りです…長かった。

## 第四十話 魔法使いVS盾の守護獣

紫苑が2人とデュエルしている頃

「なのはちゃん達の足取りはまだ分からへんのですか…?」

「ええ…」

アースラのブリッジは混乱状態だった。ほんの6時間ほど前に次元震の反応があつた地点の捜査をしていたなのはとヴィータが消えたのだ。

ただ死亡や消滅したわけではなく何処かに転移した可能性もあつたため必死にありとあらゆる世界を調べているのだがその痕跡すらないのだ。

「…一度あの学園を捜査する必要があるかもしれないね…」

リンディはそう呟いたが問題は誰を行かせるかだ。

クロノとシャマルは今だデュエルを行えるほど回復していない。シグナムは全校生徒に顔が割れてしまっている。リンディ自身行くとするとアースラの指示は誰が行うことになるのか。

「…はやてさん、フェイトさんとザフィーラさんを連れて来てくれ

「ませんか？」

一部生徒にしか顔が割れていないはやとフェイト、それと動物形態となれるザフィーラが護衛として選出された。

レッド寮・ユウの部屋

「え？時間の流れが？」

精霊界で起こっている『時間変化の異変』についてクロックとスピットとじゃれていた神楽がユウと剣都に説明していた。ちなみに何気にこの2人は仲が良かった。

「まあ、いまのそこそれは問題ないんだろ？別に困る事もあるまいし…」

『そうなんだけどね、今までならちよこつとだけ戻ってもそれほど時間が流れてなかったのに、今回は6時間いたからね』

地球での時差の様にいつもなれていた流れの変化に神楽は不満を隠せないでいた。

『それに…紫苑が向こうで作業する時間も少なくなるってことだしね』

「そうか…確かに向こうの1日がこっちの30分なら…少なくとも

「12日間の作業時間が消えたってことだな」

イエロー寮

「しかし珍しいな、お前が尋ねるなんて」

「デッキ改造するには此処がいいと思ってな。デュエル博士の理論も参考にしたいし」

三沢の部屋を訪ねたのはシゲルだった。剣闘獣は獣・獣戦士・鳥獣といったサポートカードも十分使えるデッキだ。現に防衛本能は三沢から借りたカードだった。

「それにしても…何かあったのか？急に改造したいなんて…」

「……なあ、三沢」

三沢の問いに答えるようにシゲルがデッキから取り出したのはソウル・ブラック・ドラゴンだ。それを見た三沢と、シゲルの横にいる三沢からは見えないソウル。

「出来る限りこのカードに頼らない戦法は無いか？」

「このカードって…お前のエースじゃなかったのか？」

三沢の言うとおり、ソウルはシゲルのエースだった。ダークやホー

リー、他にもモンスターを喰らうことで相手のモンスターを破壊する龍　だが…

「ソウルばかりに頼っていると、いざという時ソウルがやられたらそこで俺はおしまいだ」

先日のVSディラの時、序盤ですでにソウルを出す事が出来た。しかしあえてしなかったのは序盤で破壊された場合の終盤の攻めの手が全く無くなるからだった。

「攻め手は多いに越したことはないんだが…全てにソウルを関わるとなると…」

そう、VSアナトの神の試練の時も神を倒す手段がソウルからのコンボしかなかった。確実に毎回ソウルを召喚できるという保証もない。

「剣闘獣でまだ行える手があるはずなんだ…」

「なるほどな…だったら俺は手伝わないぞ」

三沢の言葉にシゲルが一瞬止まった。

「……………はあ？」

「いや、俺は剣闘獣にそれほど詳しくないんだ。最近シンクロの剣



闘獣が出回ってるし…興味があるが、どうも俺には合わなくてな…  
…シンクロなら俺よりもユウヤツバキが詳しいし、獣族だとブルー  
女子の枕田が専用デッキだったはずだったからそっちが詳しいだろ  
う」

知ってか知らずか、この空気男はシゲルにフラグを建設してしまっ  
た。

ブルー女子寮・ツバキの部屋前

「ここか…」

青い狼とフェイト、はやてがツバキの部屋の前で何かを調べていた。  
おそらくリンディからの指令で消えたなのはとヴィータの事だろう。

「たしかに微かに魔力反応がある…」

「けど、問題は此処からどう移動したかだよ」

フェイトの言うとおり2人は此処を調べていた。それからの足取り  
がまず第一だった。

「ツバキの部屋の前…ツバキが何か知ってるかも」

「もしかして…2人ともツバキ達と戦って…!？」

はやての言葉にフェイトがはっとした顔になる。今現在は自分達の敵である世界の矛盾のホームと言っても過言ではない。ツバキと紫苑がいるこの建物で遭遇する確率も低くはない。

「……主、一先ずあの者達に聞くのがいいかと思えます」

「せやけど……」

「ザフィーラ…そうだね、友達の頼みなら聞いてくれるかもね」

ザフィーラの提案にはやては躊躇っていた。敵に情報を与えて問題無いと言えない。だが、フェイトは笑顔で世界の矛盾の事を『友達』と言った。

それにはやての顔が一瞬曇ったのに1人と1匹は気付かない。

### レッド寮・食堂

「……ねえ、所で気になっただけけど……」

昼時でツバキの手作り料理を食べているユウと剣都。ちなみに少なからずツバキが来ると聞いたレッド生徒はユウと甘い空気になると危惧して逃げ出した。

しかし残念ながら今回は普通の食事をしているだけだった。

「どうした？」

「最近食堂で話し合っただけじゃわかりくない？なんか此処が本拠地みたいになってるような…」

ユウの言うとおり最近メンバーの集合場所が食堂だった。しかしいずれ一般生徒に話を聞かれる事も考えられている。

「こりゃ、本格的に本拠地決めた方がいいな」

「でもアカデミアだと何処でも同じじゃ…」

確かにツバキの言うとおりアカデミア全域だと何処でも生徒が現れる可能性があった。

「…まあ、その内良いところ見つかるだろ」

剣都がめんどくさそうにそう言った。というか若干甘くなりだしてきた空気に逃げ出したいと思っているのだ。

「（けどな…確かに同じとこ…しかも目につくこの寮の食堂ならその内盗み聞き……………！！）」

盗み聞きされる気がするかもしれないと思っていたら食堂の出入口から誰かが覗いていた。ただ雰囲気何か違った。レッドの生徒や教師とは違う何か

「行け、マシンナーズ・ピースキーパー!!!」

剣都は三輪の小型機械を呼びだすとその場所に向かって突っ込ませた。

「っ！バルディッシュュ!!!」

その場所にいた誰かが何かに呼び掛けるとピースキーパーが見えない壁に押されて吹き飛んだ。突然の状況にユウとツバキが呆然としていると扉が横にスライドした。

「…久しぶり…かな？」

そこにいたのは

「フェイト・T・ハラオン…!!!」

「八神はやて…!!!」

管理局だった。その横には見知らぬ青い狼がいた。

「ツバキ、聞きたい事が「帰って!!!」っ…!!?」

ツバキの拒絶　それは普通の反応だった。裏切られ、騙されたツバキからして、その反応が普通だった。いや、普通の裏切られた少女の反応は誰だってこうなる。

「ツバ…キ…？」

だが、フェイトは拒絶されるとは思って無かったのか驚いた表情をしているだけだった。こうなる事が分かり切っていたはやてとザフィーラは呆然としてるフェイトの前に立った。

「単刀直入に聞くで、なのはちゃんとヴィータはどこや!？」  
「知らない」

はやての言葉に剣都が即答で答えた。実質剣都が管理局で名を知っていたのはシグナムとシャマルだけだった。

「ヴィータ…？あの赤ゴスのこの事かな…」

ぼそりと言ったユウの言葉をザフィーラは聞き逃さなかった。

「小僧、知ってるのか？」

「え？お、狼が喋った？」

ずっと黙っていたザフィーラが喋った事にユウとツバキが驚いていた。しかし剣都だけは平然としていた。

「（いや、俺からすると喋る犬より精霊の龍の方が驚きなんだが…）」

いつの間にか剣都に上級の冷静クールスキルが備わっていた。

「てか、ユウ知ってんのか？」

「2日ぐらい前にシゲルがディラってのと戦う前に見たよ……そう言えばあの後どうしたんだろう？」

今更になって2人が消えていると思いだしたユウとツバキに剣都が呆れていた。人質がいたとしても目の前の敵を置いて救出に向かうのはどうかと思っていた。

「ディラ？もしか…ヘッドハントのディラ執務官…！！」

ザフィーラはディラという名に聞き覚えがあった。管理局ではそこそこ有名な前だったので知っていても不思議ではない。

「執務官って確かに言ってたね。まあ、貴方達と変わりなかったですけどね」

そう言いながらユウが冷たい目で3人を見た。それによろやく復活したフェイトが聞いた。

「変わりないってどういうこと？」

「ジュンコさんを攫って何かしようとした」

「「「!!!??」」」

ツバキのそつけない答えに更に3人は驚いた。ザフィーラの言葉に他の2人も誰なのか思い出していたのだが、そのディラがジュンコを攫おうとした？何かの冗談のか？

「まあ、そんなの今となってはどうでもいい。で？お前達はその消えた2人を探しに来たってどこか」

「本当に何も知らないのか？」

ザフィーラの言葉にヤレヤレという感じで剣都が首を横に振った。

「あら？彼女達なら精霊界にいるわ」

刹那、食堂の空気が変わった。

明らかにただただモノではない雰囲気、そしてこの場にはいない第三者  
7人目の声。

「この声…あの時の！」

ユウとツバキが顔を見合わせ頷いた。間違いなかった、精霊界でユ  
ウに勝利したあの女性だった

「ふふ、面白い顔ぶれね…世界の矛盾に管理局」

ハッキリとした声 厨房の前から聞こえた声に全員が振り向くと  
そこにはあの時と同じ様に いや、あの女性が今度は吹雪がダー  
クネスの時の様なコートを着ていた。

「あなたは…!!」

「精霊界の…!!」

ユウとツバキが警戒するようにその女性を見た。が、何かが違う気  
がした。

「精霊界？あ、それ私の姉のアラエルね」



「「え？」」

姉？ということとは妹？確かに髪の色が若干濃い気がするし雰囲気も何かが違った。

するとガシガシと頭を掻きながら申し訳なさそうに剣都が一言言った。

「突っ込みどころが多いんだが……」

そう、まずアラエルの事、次に消えた2人、さらにどうしてここにいるのか、そして誰なのか。

「？……………」

「っ！？」

そのことに気付かない目の前の女性　するとその女性がツバキを見てにやりと笑った。そのことに反応したユウは自分の体でツバキを守るように間に入った。

「へえ…確かにアラエルの言う通りね……」

「な、なんですか！？」

舐めるように見られるツバキは若干顔を赤くして聞いた。すると次にその視線はユウに向けられた。

「…ふふ、確かに頼もしい騎士ナイトだわ」

「……………は？」

最早何が言いたいのかわからない6人。するとその女性は思い出したように手をたたいた。

「そう言えば私の名前言って無かったわね。私は「ルヒエ！」  
ふおえ？」

女性　ルヒエが自己紹介をしようとすると背後に誰かが現れた。

袖の無い青い中国服に青い髪、間違いなくアラエルだった。いざ比べてみると確かに2人は凄く似ていた。

「ア、アラエル…」

「ルヒエ、勝手に何してたの？まさか…？」

アラエルは精霊界の時の笑顔　で目が笑って無い。そのままアラエルはルヒエに詰め寄っていた。

「し、してない！！きよ、今日は遊びに来ただけなの！！」  
「…そう、ならいいわ。けどね？ザフキがカンカンだったわ、今日の見張りあなただったってね？」

「え、あ、ザフキごめええええん！！！！」

ルヒエはそういいながら空間に穴を開け、何処かに飛んで行った。それを見届けたアラエルは一つため息をつくと6人に向き直った。

「また会ったわね、聖牙タ」

「あなたが…アラエル…」

挨拶もそこそこにアラエルは状況について行けないフェイト達の方を向いた。もちろんあの時の笑顔で。

「あなた達のお仲間は私の妹が精霊界という世界に飛ばしたわ」

「その精霊界って…なんや？」

はやての質問は最もだった。精霊界からしたらただの一般人とも言えるはやて達に精霊界の事を知ってるはずはなかった。

「まあ、平たく言えば異世界ね。詳しく言う必要もない事ですから…で、どうしますか？あの2人の後を追いますか？」

「当たり前です！！」

「そっや！！」

アラエルの出した質問、それにフェイトとはやてはすぐに頷いた。それにアラエルは何か面白い事を思いついたように笑った。

「じゃあ誰か、デッキを貸してくれないかしら？それとディスクも」  
そう言つてアラエルはユウ達を見た。どうやらデュエルで決めるそ  
うだがデッキが無いらしい。説明を続けるように管理局の3人の方  
を見た。

「代表の一人と戦つてる間に精霊界のゲートを開くわ。戦つてる間  
開きっぱなしだけど代表が負けたら閉じる……そして二度と帰つて  
来れない事になるわ」

「……!?」「」

「そして代表が私に勝つか、長引かせてその2人を連れて帰ればあ  
なた達の勝利。あ、その時は帰ってくるまでゲートは開いたままよ」  
説明を終えたアラエルだったが管理局の3人は苛立ったようにピク  
ピクと震えていた。

「ふざけないで！なのはちゃんとヴィータがその精霊界に取り残さ  
れても」

「いいわ。だったら私は帰る。それで2人は戻って来ない事になる  
わよ」

アラエルの冷めた返答にフェイトが目を見開いた。  
もし賭けに乗らなかつたらなのは達は行方不明のままだ。だが乗つたら自分達が二の舞になる可能性も

「…分かった。ザフィーラ、相手頼むで」

「はやて!？」

賭けに乗ることにしたはやて。確かにそうしないと救出なんてできないがそれにしてもリスクが大きすぎる。

「ふふ、じゃあそうね…ツバキのデッキを借りるわ」

「…分かった」

「だがなんでツバキのデッキなんだ？」

紅いディスクごとデッキをアラエルに渡したツバキ。受け取り自分の腕に合うように調整して食堂の外で何かをしているアラエルに剣賭が聞いた。

「別に深い意味はないわ…強いて言うなら私の知り合いがツバキが最近デュエルしてる気がしないかと思っっているらしいから」

メタ発言乙。

そうしているうちに地面にブラックホールの様な真つ黒な穴が開いた。

「さて、準備はいい？」

ディスクを起動させたアラエルは目の前の青い狼を見た。

「いつでもよい」

「「「……は？」」」

と、青い狼が褐色の男性へと変わった。それに初めて見る3人が目を丸くして理解不能とばかりに見ていた。

「え？なにこれ？」

「狼が人に？え？」

「…あ、そう言えば前アナトとカルマもこうなってたような…？」

そう聞いてユウは納得したが、それを知らない剣都は頭を傾げていた。

「主、テストロッサ、此処は我に任せて早く…」

「うん、頼んだでザフィーラ」  
「……………」

2人がアラエルの開けた黒い穴に飛び込んだ。それを見届けたアラエルはニヤリと笑っている。

「さあ、時間が惜しいからさっさと始めましょう…盾の守護獣」

「デュエル!!」

アラエルのターン

「私のターン！テラ・フォーミングを発動!!デッキのエンディミオンを手札に加えて発動!!」

フィールドがツバキのホームへと変わった。だが今そのデッキを使ってるのはアラエルだ

「見習い魔術師を守備表示で召喚!!」

見習い魔術師 / DEF 800

フィールドにお馴染の魔導師が現れた。それと同時にエンディミオンに光がもった。

「見習い魔術師が召喚された時、エンディミオンにカウンターを置く、ターンエンド!!」

エンディミオン / M0 1

アラエル

手札4枚 LP4000

見習い魔術師 (DEF800)

伏せカード0枚

エンディミオン (M1)

アラエルの出だしは上々だった。自分のデッキでもないツバキのデッキをしかも正確に使いこなしているアラエルの腕がうかがえる。ターン目だった。

「おいおい…どんな状況だこれ」

「え?」

「あ、シゲル」

「ジュンコもいるんじゃないか」

そうこうしているうちにシゲルがジュンコと共にやってきた。

シゲルは、三沢の所で必要なカードをかき集めた後ジュンコと合流した。

急な呼び出しに心臓バクバクで現れたジュンコはその後事情を聞いたが心臓バクバクのままデッキ調整を行うためレッド寮に向かった。



ていた。

「剣都、あいつら誰なのよ。確実に生徒や教師じゃないし…」

「俺に聞くな…ユウの方が詳しい」

「うん…何というか…女の人はアラエルって言う…多分味方で、男の人はザフィーラっていう管理局」

「「っ!?!」」

ユウの説明に2人は驚いていた。そしてツバキは少し離れたところにある黒い穴を指さした。

「それで賭けみたいなのをしてる、って感じかな…」

ザフィーラのターン

「私のターン!!マジック・リアクター・AIDを召喚!!」

「なんだ…あれ」

フィールドに龍のような機械が現れた。その腹には多くのミサイルを積んでいる。

しかし剣都は名前に何か引っかかりを覚えた。

「魔法を…防御?一体どんな効果なんだ?」

マジック・リアクター・A I D / A T K 1 2 0 0

「そして手札から魔法カードリアクターブーストを発動！！フィールドにマジック・リアクターが存在する時、デッキのトラップ・リアクター・R R を特殊召喚！！」

リアクター・ブースト

通常魔法

自分フィールド上に「リアクター」と名のついたモンスターが存在する時発動することができる。  
デッキの「リアクター」と名のついたモンスターを1体特殊召喚することができる。

トラップ・リアクター・R R / D E F 1 8 0 0

エンディミオン / M 1 2

今度は人型の兵器が現れた。それを見たジュンコは軽く引いているが他4人は平然としていた。それに気づいたジュンコが小声でシゲルに聞いた。

「どうしてあんなの見たも平気なの？」

「なぜってな…以前もつとひどい機械を見たからな…」

そう、剣都の持つバーサーカーにデストロイヤーと結構ひどい機械なら今まで何度も見てきた。

「バトルフェイズ！！マジック・リアクター・A I D で見習い魔術師に攻撃！！」

「ただで見習い魔術師の効果発動！！効果により2体目の見習い魔術師をセツトする！！」

それぐらい予想通りだったザフィーラは手札のカード1枚を引きぬいた。

「カードを伏せ、ターンエンドだ」

ザフィーラ

LP4000 手札3枚

マジック・リアクター・AID(ATK1200) トラップ・リ

アクター・RR(DEF1800)

伏せカード1枚

一方

「此処が精霊界…」

無事エンディミオン近くに転移できたフェイトとはやて。ちなみに2人の背後には通ってきた黒い穴があった。

「ザフィーラが足止めしてるってもそう時間が無いからな…早く2人を探そうや！！」

「…うん」

フェイトが頷くがなぜか落ち込んでいた。はやてはその理由が分かっていた。

「フェイトちゃん、早めに言っとくけど……もう、私達はツバキちゃん達とは『友達』になることはできひんので」

「はやて……でも……」

フェイトの諦めきれない気持ちがさらにはやてに苛立てさせた。

「私達が管理局にいる限り……いや、もう壊れた関係を治すことはできひんので……」

その言葉にフェイトは何も言えなくなった。

人間界・アラエルのターン

「私のターン！おろかな埋葬を発動……！」

そう宣言して発動した魔法カード、しかし

「っ!？」

アラエル / LP 4000 3200

魔力掌握が破壊され更にアラエルにダメージが降りかかった。

「マジック・リアクター・AIDは相手が魔法カードを使った時、その発動を無効にし相手に800ダメージを与える!！」

マジック・リアクター・AID

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 機械族 / 攻1200 / 守 900

相手が魔法カードを発動した時に発動する事ができる。

その魔法カードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

それを聞いたアラエルは気付いた。

「なるほどね…じゃあそのトラップ・リアクター・RRはトラップを無効にするっ感じかしら?そしてモンスターの効果もしくは召喚を無効にするリアクターもいるってとこね」

「ほう…もうそこまで気付いたのか。その通りだ、このモンスターはトラップを、そして残りのサモン・リアクターはモンスターの召喚を封じる」

トラップ・リアクター・RR

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 1800

相手が罠カードを発動した時に発動する事ができる。

その罠カードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

サモン・リアクター・AI

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 機械族 / 攻 2000 / 守 1400

このカードが自分フィールド上に存在する限り、

相手フィールド上にモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、

相手ライフに800ポイントダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用する事ができない。

この効果を使用したターンのバトルフェイズ時、

相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

自分フィールド上に表側表示で存在する、

このカードと「トラップ・リアクター・RR」「マジック・リアクター・AID」を

それぞれ1体ずつ墓地へ送る事で、自分の手札・デッキ・墓地から

「ジャイアント・ボマー・エアレイド」1体を特殊召喚する。

「そう…でも、1ターンのみ、でしょ？手札から魔法族の結界を発動！！そしてエンディミオンにカウンターが乗る！！そして墓地の魔力掌握を除外してマジック・ストライカーを召喚！！」

エンディミオン / M2 3

フィールドに現れた魔力石が砕けるとその中から子供の戦士が現れた。ツバキ得意の展開の一つだ。

マジック・ストライカー / ATK600

「さてと、反転召喚、見習い魔術師！！さらにリリースし闇紅の魔導師をアドバンス召喚！！」

フィールドにツバキのフェイバリットカードが召喚された。しかし今現在ダークは精霊界にいるため場にいるのはダークの分身だ。

闇紅の魔導師 / ATK1700 2300 / M0 2

エンデイミオン / M3 4

「バトルフェイズ！！闇紅の魔導師でマジック・リアクター・AI Dに攻撃！！闇紅衝撃波！！」

「リバース暴発動！！フェイク・エクスプロージョン・ペンタ！！」

マジック・リアクターに向かっていた赤黒い衝撃波が何かの爆発で阻まれてしまった。

「フェイク・エクスプロージョン・ペンタは相手の攻撃宣言時発動できる。効果によりサモン・リアクター・AIを特殊召喚し、モンスターとの戦闘破壊を無効にする！！」

フェイク・エクスポージョン・ペンタ  
通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。  
モンスターはその戦闘では破壊されず、  
ダメージ計算後自分の手札または墓地から

「サモン・リアクター・A I」1体を特殊召喚する。

今度は爆撃機のような恰好をした人型の機会が現れた。これでアラエルは毎ターン1度魔法・罠・モンスターの召喚を封じられた。

しかし予想してたようにアラエルの反応は薄かった。まるでこうなる事を予測していたように。

「マジック・ストライカーで直接攻撃!!」

「クッ!!!」

ザフィーラ / LP 4000 3400

ザフィーラのライフが減ると同時に異次元の穴が大きく揺れた。おそらく時間制限 というかザフィーラがライフが0になった瞬間穴が閉じるように細工してあるのだろう。

「カードを1枚伏せ、私はこれでターンエンドよ」

アラエル

LP 3200 手札0枚

マジック・ストライカー (ATK 600) 闇紅の魔導師 (ATK



2300)

魔法族の結界 伏せカード1枚

ザフィーラのターン

「私のターン！！フィールドのサモン・リアクター・AIの効果！  
！フィールドのトラップ・リアクターとマジック・リアクター、そ  
してこのカード自身を墓地へ送りジャイアント・ボマー・エアレイ  
ドを特殊召喚する！！」

フィールドの3体の機械がバラバラになると合体し、更に巨大な人  
型の爆撃機が現れた。

ジャイアント・ボマー・エアレイド / ATK 3000

「ジャイアント・ボマー・エアレイドがフィールドに存在する時、  
手札のカードを1枚墓地に送ることで相手のカード1枚を破壊する  
！！デス・ドロップ！！」

ジャイアント・ボマー・エアレイド

効果モンスター

星8 / 風属性 / 機械族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

「サモン・リアクター・AI」の効果でのみ特殊召喚する事ができ  
る。

1ターンに1度、手札を1枚墓地へ送る事で

相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

また、相手のターンに1度、次の効果から1つを選択して発動する  
事ができる。

相手がモンスターの召喚・特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。  
そのモンスターを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

相手がカードをセットした時に発動する事ができる。  
そのカードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

ジャイアント・ボマー・エアレイドから無数のミサイルがマジック・ストライカーに向かって放たれた。伏せカードを使う気が無いのかアラエルは腕を組んだままその光景を眺めていた。

すると魔法族の結界が魔力カウンターが乗った。

魔法族の結界 / M0 1

「そして我はブラック・ボンバーを召喚！」

ブラック・ボンバー / DEF1100

フィールドに巨大な爆弾の様なモンスターが現れた。するとブラック・ボンバーがはいた炎からトラップ・リアクターが現れた。

「ブラック・ボンバーは召喚成功時墓地のレベル4の闇属性・機械族モンスターを特殊召喚することができる!!!」

ブラック・ボンバー

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 機械族 / 攻 1000 / 守 1100

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する

機械族・闇属性のレベル4モンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

トラップ・リアクター・RR / DEF 1800

「フィールドのモンスター1を手札に戻すことでA・ジエネクス・バードマンを特殊召喚することができる！！」

巨大な爆弾が消えると今度は鳥の様な姿の機械が滑空してきた。

A・ジエネクス・バードマン

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 機械族 / 攻 1400 / 守 400

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1を手札に戻して発動する。

このカードを手札から特殊召喚する。

この効果を発動するために手札に戻したモンスターが風属性モンスターだった場合、

このカードの攻撃力は500ポイントアップする。

この効果で特殊召喚したこのカードは、

フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「レベル4のトラップ・リアクター・RRにレベル3のA・ジエネクス・バードマンをチューニング！！守りしある時の為に三種の力を持ちし兵器よ、動きだせ！！」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚！！A・ジエネクス・トライフォース！！」

トライフォース / ATK 2500

フィールドに3つの銃口があるショットガンの様な兵器を持った機械が現れた。

「やばい、この攻撃全部通ればアラエルの負けだ」

「バトルフェイズ！！ジャイアント・ボマー・エアレイドで闇紅の魔導師に攻撃！！デス・エアレイド！！」

ジャイアント・ボマー・エアレイドが自身の体の中央の巨大なプロペラでダークを切り刻もうと特攻をしてきた。

「別に通しても良いんだけどあの子の大切な家族を死なせるわけにはいかないからね」

そう呟いたアラエル。すると闇紅の魔導師に攻撃が当たる寸前にジヤイアント・ボマー・エアレイドの動きが止まった。

「なに！？どうして攻撃が！！」

「攻撃宣言前に威嚇する咆哮を発動したわ。このターンあなたの攻撃宣言はすべて無効となる」

そう言ったアラエル。しかし剣都はどこか気になる事があった。アラエルは「通しても良い」と言った。つまり威嚇する咆哮を発動しなくても勝てる自信があったそうだ。

「ターンエンド！！（状況は我が有利…だが、あの女は油断したら負ける…！！）」

ザフィーラ

LP3400 手札1枚

マジック・リアクター・AID（ATK1200） トラップ・リ

アクター・RR（DEF1800）

伏せカード0枚

アラエルのターン

「私のターン、…このターンで終わりよ」

「何をバカな…!?!」

引いたカードを見てアラエルが笑いながらそう宣言した。

しかし昔から相手の出方を窺っていたザフィーラにしたらアラエルの言葉に自信があると感じていた　いや、自信ではない。

確信だ

「手札から魔力掌握を発動!!魔法族の結界にカウンターを乗せる!!更にデッキから魔力掌握を手札に加える!!」

魔法族の結界 / M 1 2  
闇紅の魔導師 / ATK 2300 2600 / M 2 3  
エンディミオン / M 4 5

「闇紅の魔導師の効果発動！！このカードのカウンター2つ取り除き相手の手札一枚を墓地へ送る！！」

そしてザフィーラの最後の手札のA・ジエネクス・バードマンで戻したブラック・ボンバーが墓地へ送られた。

「そして魔法族の結界の効果発動！！このカードと闇紅の魔導師を墓地に送ることに乗ってるカウンターの数だけドローできる！！」

### 魔法族の結界

#### 永続魔法

フィールド上に存在する魔法使い族モンスターが破壊される度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大4つまで）。

自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスター1体とこのカードを墓地へ送る事で、このカードに乗っている

魔力カウンターの数だけ自分のデッキからカードをドローする。

「ふふふ…」

引いたカードを見てアラエルが笑った。それを見てユウの背筋に寒さが走った。

精霊界でもそうだった 笑っているアラエルはエースカードを破壊した。

「手札のトラップ・アクセスを発動！！手札の魔法カード、魔力掌握を墓地に送りデッキの一番上のカードが罠カードだった場合そのカードを発動することができる！！」

「バカな…運にすぎたって勝てると思ってるのか！？」

トラップ・アクセス

速攻魔法

手札の魔法カードを墓地に送り、デッキの一番上のカードをドロ―する。

そのカードが罠カードだった場合発動することができる。

それ以外のカードなら墓地に送り、自分は800ポイントのダメージを受ける。

ザフィーラの言うとおりアラエルのデッキに罠カードが少ないのはツバキが知っている。ではなぜトラップ・アクセスというコンセプトに合わないカードがあるのか。

「あのカード…私のじゃない」

「え！？」

ツバキは自分のデッキに入れた覚えが無かった。なら入れたのは

「ふふふ…ドロー！魔力昇華！！フィールドの4つの魔力カウンターを取り除きカードを2枚ドローする！！」

「引き当てただと！？」



エンディミオン / M 5 6

確率変動をしている彼女だ。<sup>アラエル</sup>おそらく穴を開いている時にデッキに加えたのだろう。そしてこれでアラエルの手札は3枚だ。

「死者蘇生を発動！！墓地の闇紅の魔導師を特殊召喚！！」

「ジャイアント・ボマー・エアレイドの効果！！モンスターの特殊召喚を無効にし、相手に800ダメージを与える！！」

アラエル / LP 3200 2400

「それぐらい予想済みよ。場のエンディミオンのカウンターを6つ取り除き、神聖魔導王エンディミオンを特殊召喚！！」

「クツ…死者蘇生はブラフか！！」

そう。死者蘇生はエアレイドの効果を使わせるブラフだった。

エンディミオン / M 6 0

エンディミオン / ATK 2700

「効果により墓地の死者蘇生を手札に加える！！そしてチューナーモンスター、マジカル・サポーターを召喚！！」

マジカル・サポーター / ATK 100

真っ赤な魔法族の服に身を包んだ女性が現れた。チューナーという  
ことは

「レベル7のエンディミオンにレベル1のマジカル・サポーターを  
チューニング!!  
借りるわねツバキ。」

魔導師達の祈りを元に、今ここに混沌の赤き力を呼び覚ませ!!」

7 + 1 = 8

この口上はツバキのエースカードだ。そしてツバキの横の赤いチビ  
龍がアラエルのフィールドゾーンの一角に飛んで行った。

「シンクロ召喚!!カオス・レッド・ドラゴン!!」

『キュアアアアアアアアア!!!!』

カオス・レッド・ドラゴン / ATK 3000

「さらにマジカル・サポーターはシンクロ素材として墓地に送られ  
た時、墓地の魔法カードを3枚除外することでカードを1枚ドロー  
する!!」

マジカル・サポーター

効果モンスター（チューナー）

このカードがシンクロ素材として墓地に送られた時、  
墓地の魔法カードを3枚除外することでカードを1枚ドローするこ  
とができる。

このカードがシンクロ召喚の素材となる時、他のカードは魔法使い  
族でなければならない。

「クツ…だが攻撃力は3000で同じだ!!」

「更に死者蘇生を発動!!墓地の閻紅の魔導師を特殊召喚!!」

閻紅の魔導師 / ATK 1700 2300 / MO 2

エンディミオン / MO 1

そう、効果を使わしてもジャイアント・ボマー・エアレイドの攻撃力3000は上級モンスターでも上の方だった。アラエルの使ってるツバキのデッキでその攻撃力を越えるモンスターはあまりいない。

「手札から魔法カード

ミラクル・シンクロ・フュージョナーを発動!!」

そう 先程のトラップ・アクセスといい、厳密にはこのデッキはツバキのデッキではない。

「フィールドのカオス・レッド・ドラゴンと2体の見習い魔術師を除外!!」

「3体融合!？」

「あのカードは精霊界のカード…?」

「やっぱり…あのカードは私のじゃない!!」

そう言ってるうちにフィールドに現れた闇紅の魔導師とカオスが一体となった。

「融合召喚、波動竜術師　ドラゴフォルテス！」

ドラゴフォルテス / ATK 3000

エンディミオン / M 1 2

闇紅の魔導師 / ATK 2300　2600 / M 2 3

フィールドにドラゴンの被り物を被った美しい魔法使いが現れた。  
もちろんツバキはそのカードに覚えはなかった。

「ドラゴフォルテスは召喚成功時、墓地の魔法カードを1枚手札に加える！！そして今加えた死者蘇生を発動！！墓地のエンディミオンを特殊召喚！！」

エンディミオン / M 2 3

闇紅の魔導師 / ATK 2600　2900 / M 3 4

エンディミオン / ATK 2700

こうしてアラエルは見知らぬ効果を持つ魔法使いとツバキのデッキのフェイバリットカードと上級モンスターを一気に並べた。しかし

それでもザフィーラのライフを削りきれない。

「流石と言いたいが、先程このターンで終わらせるとぬかしたな？」

「ええ、そうよ。ドラゴフォルテスの効果！！フィールドの魔力カウンターを全て1枚のカードへ移す！！」

波動竜術師 ドラゴフォルテス

融合モンスター

星10 / 闇属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DEF 2800

ドラゴン族シンクロモンスター + 魔法使い族モンスター × 2

このカードは上記のモンスターを素材とした融合召喚でしか特殊召喚できない。

特殊召喚成功時墓地の魔法カード1枚を選択し手札に加えることができる。

1ターンに一度フィールドに存在するカード1枚を選択することができる。

その後、フィールドの魔力カウンターを全て選択したカードに乗せる事が出来る。

闇紅の魔導師 / 2900 3800 / M 4 7

エンデイミオン / M 3 0

「攻撃力3800だと!？」

「バトルフェイズ!!闇紅の魔導師でジャイアント・ボマー・エア

レイドに攻撃！！闇紅の衝撃波！！」

闇紅の魔導師の振りかざした杖から伸びた赤黒い光線がザフィーラのモンスターに直撃した。それと同時にバターの様にジャイアント・ボマー・エアレイドが解けていく。

ザフィーラ/LP3400 2400

「バカな…私の最強カードが…！！」

「まだだわ！！エンディミオンでライフフォースに攻撃！！マジック・デーク！！」

エンディミオンの持つ不思議な形の杖から青白い光線がライフフォースの体を通り抜けた。そして刹那　ライフフォースの体がバラバラになった。

ザフィーラ/LP2400 2100

たった1ターンでザフィーラの場合はから空きになった。手札も無く、伏せカードもない文字道理丸腰になったザフィーラ。

「これで終わらザフィーラ！！」あら？」

アラエルが攻撃宣言をしようとした瞬間聞き慣れた声が響いた。

「っ！八神はやて！！」

シゲルがすぐに殴れるように構えた先になのはとヴィータを抱えたはやてとフェイトがいた。忘れていたかもしれないがこれは賭けなのだ。

「あらあら…ちょっと時間かけ過ぎたかしら…：まあいいわ。ドラゴフォルテス！！スペルビート！！！！」

そう宣言と同時にドラゴフォルテスは何処からかフルートの様な笛を取り出した。

その音が響くと同時にザフィーラの周囲の空気が変わった。

「グッ…うおおおおおおおお！！！！！！」

ザフィーラ / LP 21000

ザフィーラのライフがゼロになった。だが、あれほどの衝撃を喰らったのにザフィーラは立っていた。



「はあ…はあ…」

「へえ、見た目通りタフなのね？」

アラエルはディスクを片づけると笑顔でザフィーラを見た。ザフィーラは威嚇するような眼でアラエルを見た。

「盾の守護獣は…主の壁となる…これしきの事…!!」

だが満身創痍だったザフィーラに戦う力は残されていなかった。するとなのはを背負っていたフェイトは急いで声を張り上げた。

「エイミイさん!!すぐに帰還を!!」

「っ!!逃がすか!!」

シゲルが消えかけているはやてを掴もうとしたがその手は空を切った。

「…逃げられたか」

剣都が残念そうにそう呟いた。するとアラエルも消えていた。

「アラエルも…だね」

敵か、味方が分からないアラエル。彼女の居た場所にはツバキのデュエルディスクが置いてあった。ふと思いつ出したユウはそのデッキの中を抜き取って見た。

「……やっぱり入ってるよ。あのカード」

波動竜術師ドラゴフォルテスとミラクルシンクロフュージョンとアクセス・トラップ。

ツバキのカードではないカードがそのまま残されていたのだ。

「うん…けど、多分これはあの人の贈り物だと思う」

そう言ったツバキ。するとユウはデッキのちょうど真ん中に真っ白の紙になにか書いてあるメモを見つけた。

「なんだろう…これ？外国語？」

「ああ、英語だ」

そう言ったのは剣都だった。そのメモを奪い取った剣都は声に出して内容を言った。

「『そのカード達は借りたお礼ね』だとよ」

その頃とある場所

「ただいま……」

帰還したアラエルはとある部屋の前で立ち止まった。そこはザフキの部屋なのだが

この口か!!この口が悪いのか!?

ヤッ!!そこは止めて!!あ、いやああああ!!

「……………」

ザフキと自らの妹の声が聞こえた気がしたが気のせいだと願っていたアラエルだった。

#### 第四十話 魔法使いVS盾の守護獣（後書き）

剣都「まず色々突っ込ませる。最後のなんだ？」

ああ、簡潔に言つとザフキとルヒエが交わっていました

シゲル「簡潔すぎだ」

いや〜タグに『微エロ（予定）』とあるのにその要素が皆無で我らが主人公がそんな行為に行くタイミングが全然ないからいつそやっちゃえ！と

ユウ「え？僕の所為？」

紫苑「それでは今回はツバキのデッキ使用アラエルVSザフィーラと？」

そう、それとミラクルシンクロをメインキャラにも使わせたくて…でもフラグが…あ、このザフィーラ戦弄って…

とな感じです。そのおかげで剣都はまだ2回しかデュエルをしていないという状況だ。

剣都「おい」

まあ、次の次ぐらいでAW関係でデュエルする話を考えている。

ツバキ「AWで？所でAWって言っても忘れてる人がいるんじゃない？」

ああ、明日『AW』やこの世界での『管理局』や『世界の矛盾』などのオリジナル設定や用語集を番外で乗せるつもり。

分からなくなつたら感想で言つかそつちを見てね、ってことになる

オリジナルカード

リアクター・ブースト

トラップ・アクセス

マジカル・サポーター

波動竜術師 ドラゴフォルテス

次回予告：sideツバキ

紫苑が精霊界に向かって2日目。十代が病み上がりでボロボロなのにセブンスターズの一人のカミューラに挑もうとしていた。カイザーやクロノス先生を倒す実力なのに…それに十代はそのことで頭に血が上ってる…

けど、止めれる事も出来ずに始まったバトル。

初ターンから攻める十代 だけど……

次回第41話 英雄の危機 VSカミューラ 前編  
最強カードは『幻魔の扉』

あ、ちなみに次回も言いますがいくつかアニメやOCGでのカードは原作通りになる事もあります。

第四十一話 英雄の危機 VS カミューラ 前編（前書き）

前話でリアクターは破壊するだけで無効にはしないという指摘を頂きましたが、リアクターが無効にしたカードの展開を変更する時間はないので後に修復します。

第四十一話 英雄の危機 VS カミューラ 前編

カイザーが人形にされた翌日の夜。

アカデミア海岸：カミューラの城

「カミューラ！！俺が相手だ！！」

そう叫んだのは 昼間まで保健室のベットで横になっているほどのダメージを負っている十代だった。

1時間前：保健室

「十代…本当にするの？」

明日香が心配そうに十代に聞いた。その十代の首には自信の持つ闇のペンダントと吹雪の持っていたペンダントがぶら下がっていた。

そして十代の手には明日香の鍵が握られていた。

さらに遡る事10分前

「十代、本気なの!？」

「ああ。吹雪さんの言ってたように…カミューラの闇のゲームに対抗できるのは俺だけなんだ」

そう言っただけで十代が握っていたのは吹雪が身に付けていたペンダントだ。

闇のゲームに対抗するには闇のアイテムが無いといけないと吹雪が言っていたのだ。

「…ん?明日香、俺の鍵は?」

「あ、そういえば知らなかったわね……」

そう言っただけで明日香は紫苑の今の状況と鍵を持っている事と今現在精霊界にいる事、そしてシゲルとディラの勝負を説明した。

「俺の鍵ないのか……」

「…はあ。いいわ。私の鍵を貸してあげる…けど、絶対に勝ちなさいよね」

回想終了

だが十代の体はボロボロで立つのがやっとといったような状況だ。それで闇のゲームを行うのは無理がある。



「おやおや、結城十代…ダークネスを倒した男か…いいだろう!!  
貴様も知ってる様にこのデュエルに負けたらこの人形に魂を吸い込  
まれる!!」

そう言つてカミューラの取り出したのは先日のクロノスやカイザー  
が人形にされた時と同じ人形だった。

その光景を下から見ている他のメンバーは心配そうだった。

「たく…これじゃあ紫苑に鍵渡した意味無いだろうが…」  
「え？ミスじゃなかったんっすか!？」

シゲルの言葉に翔が反応した。本当は確実に当分動けない十代が無  
茶をしない様にシゲルが紫苑に持たせていたのだ。

その意図を知つてか知らずか紫苑が精霊界に行ったのだが十代が明  
日香の鍵を借りると思つていなかったのだ。

「デュエル!!」

十代のターン

「俺のターン！！ドロー！！闇のデュエルを操って仲間の命をもてあそぶ、俺はお前を許さない！！」

「どう許さないのか…楽しみね」

クロノス、そしてカイザーを人形にされた十代の頭に血が上っていた。

何よりも仲間を大切にする十代にとって闇のデュエル事態が嫌いなのだ。

「魔法カード融合発動！！」

そう宣言した瞬間十代の場に3体のモンスターが現れた。

十代のデッキの3体融合と言えば

「手札のフェザーマン、バブルマン、スパークマンを融合！！E・HEROテンペスターを融合召喚！！」

テンペスター / ATK 2800

十代の場に3体のモンスターを合わせたような青年のHEROが現れた。

十代のデッキの最強カードと言っても過言でもないテンペスターを1ターンで召喚したのだ。

「兄貴いきなりすごい！！」

「テンペスターの攻撃力は2800…」

「初っ端から勝負に出たな…」

観客として見ていた各々はその勝負に驚いている。だが剣都だけは苛立っていたようだ。

「あのバカ…」

剣都の言葉に全員が剣都の顔を見た。若干勝負をあきらめている様な感じの雰囲気だった。

「頭に血が上ってやがる。負けんぞあいつ」

「ちよつと剣賭君！」

剣都の言葉に明日香が反論しようとしたがやれやれと言わんばかりにため息をついて説明を始めた。

「テンペスターは融合を含め4枚のカードを消費する。初っ端から出せば確かに流れをつかめる可能性が高いがその分手札が無くなるぞ」

手札融合の弱点であるハンドアドバンテージ　その上テンペスターは通常と違い4枚も消費するのだ。

「確かにそうだが、テンペスターの攻撃力以上のモンスターを…」  
「バカ。デュエルは攻撃だけじゃない。ライトニングボルテクスやブラックホール…それに例のカード…カード破壊も戦術だ。この状況…テンペスターを破壊されれば十代の負けだ」

今いる中で一番大会の出場経験のある剣都は様々な相手と戦った経験がある。その中には効果破壊に特化したデッキもあるのだ。

「一枚カードを伏せ、ターンエンド!!」

十代

LP4000 手札1枚

テンペスター(ATK2800)

伏せカード1枚

「ふうん…いいわ、元気があるのね」

カミューラのターン

「私のターン、カード…ドロー!!」

引いたカードを見たカミューラはにやりと笑った。その顔を見たツバキは直感で気付いた。あのカードだと。だがそのカードをカミューラは手札に加えた。

「永続魔法、ミイラの呼び声を発動!!」

「ミイラの呼び声…?」

「場にモンスターがない時手札のアンデットを召喚する…アンデット版ヴァルハラみたいなカードだ」

聞き慣れないカード名にユウが首を傾げた。それに補足を入れるように三沢が説明を始めた。

ミイラの呼び声

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札からアンデット族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「そつよ！！効果により闇より出し絶望を特殊召喚！！」

フィールドに最上級アンデットモンスターが召喚された。その攻撃力はテンペスターと同じだった。

闇より出し絶望 / ATK 2800

「最悪だな、向こうはわずか2枚のカードでテンペスターに並んだぞ」

シゲルの言葉通りハンドアドバンテージはカミューラが上だった。

「そしてヴァンパイア・バッツを通常召喚！！」

フィールドに無数の蝙蝠が現れた。その効果により闇より出し絶望とバッツ自身の攻撃力が上がっていた。

バンパイア・バッツ

効果モンスター

星2 / 闇属性 / アンデット族 / ATK 800 / DEF 800

このカードが戦闘で破壊される時、デッキに存在する「バンパイア・バッツ」を

一枚墓地に送ることで破壊を無効にする。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する時、自分フィールドのアンデット族モンスターの攻撃力を200ポイントアップする。

闇より出し絶望 / ATK 2800 3000

バンパイア・バッツ / ATK 800 1000

等々テンペスターを越えてしまった。しかし十代のフィールドのカードを墓地に送ることでテンペスターを守る事ができる効果がある。

「ふふふ…テンペスターは自身の場のカードを墓地に送ることで破壊をまぬがれる効果があるわね…」

「!?!?」

どうしてカミューラは知りもしないテンペスターの効果を知っているのか気付いた十代。思い返せばクロノスの時も知るはずの無い古<sup>ア</sup>代<sup>ンテイクギア</sup>の機械の効果を知っていた。

「大嵐を発動！！フィールドの魔法・罫を全て破壊する！！」

「クロノス先生の時も気になったが…どうして俺のカード知っているのか気になっていたが…！！」

その言葉にカミューラはニヤリと笑うとその眼が赤くなった。だが世界の矛盾の時とは違い目全体が赤く輝いていた。

「私のこの紅い目を通して蝙蝠達が見せてくれたのよ。卑怯とか言わないわよね…戦いは始まる前から既に始まっているのだから！！」

そう言ってるうちに十代の伏せていたカードが破壊された。

「だが！！破壊されたフェイク・ミッションを発動！！伏せていたこのカードが相手のカード効果で破壊された時、手札のE・HEROを守備表示で特殊召喚する！！」

フェイク・ミッション

通常罠

相手の攻撃宣言時、発動することができる。

そのモンスターの攻撃を無効にして墓地の「E・HERO」と名のついた

融合モンスターをエクストラデッキに戻す。

伏せられているこのカードが相手のカード効果で破壊された時、

手札のレベル4以下の「E・HERO」と名のついたモンスターを  
守備表示で特殊召喚する事が出来る。

バースト・レディ/DEF800

炎の女戦士が現れた。しかしただの壁だというのは一目瞭然だった。

「バトルフェイズ!!ヴァンパイア・バツツでバーストレディに攻撃!!ブラッティ・スパイラル!!」

「くう……!!」

無数の蝙蝠がバースト・レディに襲いかかった。

これでテンペスターの効果コストのカードが全て無くなってしまった。

「闇より出し絶望でテンペスターに攻撃!!ナイトメアシャドウズ  
!!」

「うっ……うわあああああ!!!!!!」



「十代!!」

十代 / LP 4000 3800

たった200のダメージを受けた十代。たった200なのに一気にライフを半分ダメージを受けたような激痛が十代を襲った。

「うっ…」

少ないダメージで片膝をついた十代。それは観戦していたメンバーの危惧していた事だった。

「やっぱり…」

「無茶だったんだ…!!」

ユウと万丈目の言葉の通り、無理にデュエルをしていたのだ。たったこれだけのダメージという事…そして手札が無い。

「アーハッハッハッハ!!! おやおや…早くもそちらはもう限界の様ね!!!」

「十代!!!」

「兄貴!!!」

立ち上がれない十代を心配そうにユウと翔が声を張り上げた。その時カミューラは面白そうな事を思いついたように呟いた。

「一人減ったら元気になるのかしらね」

「っ！！ユウ、翔、危ない！！」

その声が聞こえた十代はカミューラの目標ターゲットとなっていた2人に叫んだ。

しかし

「遅い！！行きなさい！！」

カミューラの放った蝙蝠が2人へ迫っていた。まさかこの様な手段に及ぶとは思っていなかった観戦メンバーは驚いていた。

「！！ルス（間に合わない！！）」

急いで聖霊魔ルシアを召喚し様としたユウだったが蝙蝠の攻撃の方が早い。

「ユウ！！」

「翔!!」

急いで2人の援護を行おうとしたツバキとシゲル。だが

「瞬間氷結（Freezing at moment）」

無数の蝙蝠が凍りつき、落下していった。この攻撃名は

「紫苑!？」

天井からファントム・ブルースに乗った紫苑がゆっくりと滑空してきた。

1371

「お姉ちゃん、ただいま」

「あ、おかえり…じゃない!?!」

このツバキと紫苑のやり取りを見て明日香は、ツバキの性格が結構変わっている気がしていた。

「色々言いたい事はあるけど…その前に」

「何かしら?いきなり人の家に土足に入り込んで…っ!?!」

カミューラは邪魔されたのにいら立っているようだった。しかし紫苑の首に十代の鍵がかかっているのを見つけて驚いた。

「貴女…なぜそのカギを…」

「このデュエルは私が引き継ぐ」

カミューラの言葉に重ねて紫苑がそう言った。その言葉に一番驚いていたのは十代だった。

「紫苑…！！これは俺の戦いだ…！！」

「そのボロボロの貴方に何ができるの？初ターンからハンドレスになって勝ち目が貴方にあると思ってる？邪魔です」

「うっ…（グサグサグサ）」

ズバズバと十代に向けられた言葉に十代はorzとなっていた。というよりも

「紫苑ってあんな性格だったか？」

シゲルの言葉に全員が首を横に振った。少なくとも相手の状態を確認して引き継ぐのを提案しているはずだった。しかも口調が結構変わってる気もする。

だが今は有無を言わさず引き継ぎを行おうとしていた。

「待ちなさい！！私はいいとは「ハンデとしてフィールドはこのまま、そしてあなたが勝てば十代と私の鍵をあなたに渡す」…いいわ」

「おい待て！！なんでお前が決めるんだ！！」

紫苑とそんなに面識がない万丈目が紫苑にそう言った。しかしそれに小声で答えたのは剣都だった。

「よく考えてみる。もう十代は戦うのは難しい。ここで鍵を確実に失い、十代を見殺しにするのか鍵2本かけて紫苑が勝つのに賭けるのか…それに賭けるしかないだろ」

「だが、あの女、強いのか？」

十代と紫苑の戦いの後に学園に戻った万丈目は紫苑の腕前を知らない。

〈確認〉

紫苑

LP3800 手札5枚

モンスター無し

伏せカード無し

カミューラ

LP4000 手札2枚

闇より出し絶望(ATK3000) ヴァンパイア・バッツ(AT

K1000)

伏せカード無し

圧倒的不利な状況でのスタート。しかし紫苑にはそんな事関係なかった。

「私のターン!!!」

そう、自分のデュエルを行う事が紫苑にとって大事だった。先程の十代は焦り過ぎて自分のデュエルを見失っていた。

「手札から融合回収を発動、墓地のスパークマンと融合を手札に加え融合を発動!!!」

「ほう…だが、私の僕を越えるモンスターなんて、出せるのかしら？」

カミューラの言うとおり融合モンスターで初手で3000を超える  
モンスターはなかなかいない。

「手札のアイスエッジとフリーズレディを融合！！現れる、E・H  
EROダイヤモンド・ダスト！！」

ダイヤモンド・ダスト / ATK 2700

融合召喚されたのは氷の女性　ダイヤモンド・ダストだった。す  
ると突然ヴァンパイア・バッツの動きが止まった。

「なに！？」

「ダイヤモンド・ダストは融合召喚成功時、相手のカード効果をこ  
のターン無効する効果を持っている！！」

よってヴァンパイア・バッツの効果が無効にされ、2体のモンスタ  
ーの攻撃力が下がった。

ヴァンパイア・バッツ / ATK 1000　800

闇より出し絶望 / 3000　2800

「バトルフェイズ！！ダイヤモンド・ダストでヴァンパイア・バツ  
ツに攻撃！！ダイヤモンドブリザード！！」



大気に潜む無数の水滴が氷の弾丸となって身動きの取れない蝙蝠に向かって飛ばされた。それによつて蝙蝠が碎け散った。

カミューラ / LP 4000 2100

「ヴァンパイア・バツツは戦闘破壊を無効にする効果…ダイヤモンド・ダストで無効にされては発動できない!!」

三沢の言葉の通りリクルーターではないヴァンパイア・バツツはそのまま破壊された。しかも1900もの大ダメージを与える事が出来た。

「カードを2枚伏せ、ターンエンド!!」

紫苑

手札2枚 LP 3800

ダイヤモンド・ダスト (ATK 2700)

伏せカード2枚

カミューラのターン

「私のターン!! ふふふ…ただの女子生徒だと思っていたら…あなた、案外強いわね。所で一つ聞いても良いかしら?」

引いたカードを手札に加えながら紫苑を見た後、カミューラの動き

を見ていたユウと翔を見た。

「さっきの私の僕を凍らせた…あの攻撃はなんなのかしら？」

「それは…私の希少能力レアスキルみたいなものと言っとくわ」

希少能力レアスキル　その言葉はユウ達も以前管理局の説明を紫苑から受けた時教えてもらった。

普通の人のごく稀に持っている特殊能力。その力は例えば異世界の魔物である龍や獣などと心を通わせる力、他人の思考を読む力、未来を見る力など様々だ。

「もう一つ。あなたは時空管理局を知ってるかしら？」

「!?!なぜその名を…!!!」

紫苑　　だけでなく例の件に関わったメンバーは驚いていた。一方何も知らない万丈目達は一体何の事なのか気になっていた。

「なぜ…あなたがその名を知っているの?この世界でその名を知ってる者はいないはずよ」

「…私に勝てたら教えてあげるわ。手札から魔法カード幻魔の扉を発動!!!」

その言葉と共にカミューラの背後に巨大な扉が現れた。すると透明な腕の様なものが無数に現れ辺りを彷徨っている。

「このカードは使用者の魂と引き換えに相手のフィールド上のモンスターを全て破壊し相手の墓地のモンスターを1体、特殊召喚する!!!」

「自分の魂を…!?!」

幻魔の扉

通常魔法

相手フィールド上のモンスター全てを破壊し、相手の墓地のモンスター1体選択する。

選択したモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する。

このカードに対して相手は魔法・畏・モンスター効果を発動する事が出来ない。

このカードを使用したプレイヤーは敗北した時、幻魔に魂を引き渡される。

そうしているうちに透明な腕がダイヤモンド・ダストに絡みつくと苦しそうに光となった。

「けどね…私が生け贄になるのは心苦しいわ。そこで別の誰かにその役目を与え闘と思うの」

「!?!」

その言葉に紫苑は血の気が引いた。先日のカイザーの勝負での出来事を知らない紫苑、するとカミューラの時から透明なカミューラが飛び出して一人の元へと飛んだ。

それは

「お姉ちゃん!?!」

「えっ…!?!」

ツバキだった。カミューラは先日の翔と同じように家族で姉妹であるツバキを人質にすれば紫苑は手出しできなくなると思っていた。

「やめる!！」

たった一つの予想外<sup>イレギュラー</sup> 十代の闇のアイテムさえなかったらの話だが。

「クツ!？」

十代の首からぶら下げた半円のペンダントが見事に合わせり、光り輝いた。するとその光に押されるように透明なカミューラが元に戻った。

「クツ…闇のアイテムを持つ者がいるなんて…!！」

「これでイカサマは無しだ!！紫苑、思いっきりやれ!！」

「十代…。まだ、あなたのターンだよ!！」

僅かに見えた光明 これで対等だった。

第四十一話 英雄の危機 VSカミューラ 前編（後書き）

ユウ「今回久々の本編だね」

だが紫苑VSカミューラ…これを一度やってみたかった。

ツバキ「え？どうして？」

以前十代が紫苑のカード…まあ、漫画HEROを使う事があつたけど逆のパターンが無いから。

剣都「…あれか」

シゲル「所でなんでカミューラは幻魔の扉を使わなかったんだ？使つてたらほぼ決まり立ったじゃねーか」

頭に血が上っている十代はまともなブレイングができるとは限らない。そう思つてカミューラは幻魔の扉を使うに値しないと考えていたんだ。

紫苑「ところで…幻魔の扉の効果は一体…」

ああ、TFのオリジナル効果にするのはなんかね〜できる限りアニメ効果にした結果があれ

ユウ「なってるの…？」

まあ、その内SinWorldとかも使うと思うから…もちろん選択式ではなくてデッキからカードが飛び出す感じで。

オリジナルカード

フェイクミッション

次回予告：紫苑

カミューラの発動した幻魔の扉…あまりに強力なカードに私は追い詰められてしまう。

ですが、私は負けるつもりは無い 十代のカードと共に

やがて追い詰められた私は一か八かあのカードを発動した。

そして

次回第四十二話 英雄の光 VS カミューラ 後編

最強カードは「ウルクリボー」

追記：感想が欲しい…

第四十二話 英雄の光 VS カミューラ 後編(前書き)

中間考査終わった…けどまだ学園祭やらがある…

……感想が欲しい、メンタル的な意味で。



第四十二話 英雄の光 VS カミューラ 後編

状況

紫苑

手札2枚 LP3800

モンスター無し

伏せカード2枚

カミューラ

LP2100 手札2枚

闇より出し絶望(ATK2800)

幻魔の扉(発動)

身代わりをかわされたカミューラだが、まだ自分が圧倒的有利なのに気付いて笑った。

「たとえ私が生け贄になろうとも勝てば問題無い!! 幻魔の扉の効果でテンペスターを特殊召喚する!!」

先程の十代の時に召喚されたテンペスターがフィールドに現れた。十代の墓地はそのまま紫苑に引き継がれているのでルール上は問題ない。

テンペスター / ATK2800

「バトル!!! テンペスターよ、哀れな女を攻撃せよ!!! カオステン

ペスト!!」

「クウ……!!!!」

紫苑 / LP 3800 1000

「紫苑!!」

ダメージの受けた紫苑は紙の様に吹き飛ばされ、壁に激突した。その衝撃で紫苑の肺の中の酸素が圧迫され一気に口から外に抜けだした。

「ゲホッ!!ゴホッ!!ゴホッ!!」

「苦しみはもう終わりよ、闇より出し絶望で」

カミューラが攻撃宣言を行おうとした手を止めた。それは

「リバース罠……交差する……心……!!」

紫苑の場に現れたテンペスターだった。

「なぜテンペスターが!?!」

「…交差する心は元々の持ち主が私のカードが私に直接攻撃した時、そのコントロールを元々の持ち主に返すカード…!?!」

交差する心

通常罠

自分フィールド上にモンスターが存在せず、

元々の持ち主が自分のモンスターの攻撃を受けた時発動することができる。

そのモンスターのコントロールを得る。

何とか息を整えた紫苑はそう言っただけで頼りそうにテンペスターを見ていた。十代のデッキで上級エースのモンスターを取り返せたのだ。

「クッ…裏切り者め…!?!ピラミッド・タートルを守備表示で召喚してターンエンド…!?!」

フィールドにピラミッドの様な錐体を背負った亀が現れた。

ピラミッド・タートル / DEF 1400

コミュニケーション

LP 2100 手札1枚

闇より出し絶望 ( ATK 2800 )    ピラミッド・タートル ( DEF 1400 )

伏せカード無し

紫苑のターン

「私のターン！！（手札に2800を超えるモンスターを出す術はない…そして、ピラミット・タートルはリクルーター…ここは、守りを固めるべき…いや）」

場の状況と手札と場のカードで一番確実な手を考えていた紫苑。

「（十代のこのモンスターを信じないわけにはいかない！！）バトルフェイズ！！テンペスターで闇より出し絶望へ攻撃！！カオステンペスト！！」

「クツ…迎え撃て、ナイトメアシャドウズ！！」

テンペスターの発射した青い光線と闇より出し絶望の紅い光線がぶつかり合った。

「テンペスターの効果発動！！セットされているヒーローシグナルを墓地に送り、戦闘破壊を無効！！」

テンペスターの周囲に薄い膜が出ると差し違いに2体のモンスターの光線が交差した。しかし、テンペスターは膜のおかげで破壊を免れた。

「カードを伏せ、ターンエンド!!」

紫苑

LP1000 手札2枚

テンペスター(ATK2800)

伏せカード1枚

カミューラのターン

「私のターン!!っ!!」

引いたカードを見てカミューラがにやりと笑った。しかし幻魔の扉は既に使っており場には2800のテンペスターがいる。そんな時余裕が出来る展開と言えば

「私はピラミッド・タートルをリリースし、ヴァンパイア・ロードをアドバンス召喚!!」

ヴァンパイア・ロード/ATK2000

フィールドに吸血鬼の美青年が現れた。ヴァンパイア・ロードは出るや否や、何故かものすごい形相で紫苑を睨んでいた。しかしそのモンスターは

「ヴァンパイア・ロードを除外しヴァンパイア・ジェネシスを特殊召喚!!」

ヴァンパイア・ジェネシス / ATK 3000

フィールドの美青年が消えると何処からともなく巨大なヴァンパイアの主が現れた。その姿はまさしく

「狂気……!!」

「バトルフェイズ!!ヴァンパイア・ジェネシスでテンペスターに攻撃!!ヘルヴィシヤスプラスト!!」

ヴァンパイア・ジェネシスが血のような液体になると無数のトゲと なってテンペスターへ襲いかかった。

「くっ……!!」

紫苑 / LP 1000 800

テンペスターがヴァンパイア・ジェネシスの血に呑みこまれ消滅した。紫苑は伏せていたカードをコストにテンペスターを残す事も出来た。

「あいつ……テンペスターを手放してどうするつもりだ!？」

「紫苑なりに考えがあるのよ」

どう見てもプレミスに万丈目は悪態をついた。しかし、明日香の言うとおりに考えがあるのだ。

カミューラ

LP2100 手札0枚

ヴァンパイア・ジエネシス（ATK3000）

伏せカード無し

紫苑のターン

「私のターン！！（手札のスパークマンとボルテックだけで逆転するのは不可能…場のカードは使えない…このドローにかかっている…！！）ドロー！！！」

勢い良く引いたカードを見た紫苑。しかし

「っ…！！（テイクオーバー・ファイブ…次のターン発動する効果のカード…けどモンスター1体なら伏せカードも…）…手札からテイクオーバー・ファイブを発動！！デッキの一番上から5枚墓地に送り、発動する！！！」

これで次のターンから好きなタイミングで一度だけ、カードを1枚ドローできる。

しかしそれでは遅いのだ。いまどうにかできる手は残されていない

かどうか考えていた。

「（クツ…！！）スパークマンを守備表示で召喚！！ターンエンド  
！！」

紫苑

LP800 手札1枚

スパークマン（DEF1400）

伏せカード1枚

カミューラのターン

「ふふふ…どうやら打つ手なしの様な、私のターン！！私は手札のレベル10のヴァンパイア・クローズを墓地に送ってヴァンパイア・ジエネシスの効果発動！！墓地に存在する闇より出し絶望をフィールドに特殊召喚する！！」

ヴァンパイア・ジエネシス

効果モンスター

星8 / 闇属性 / アンデット族 / 攻3000 / 守2100

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「ヴァンパイア・ロード」1体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、手札からアンデット族モンスター1体を墓地に捨てる事で、

捨てたアンデット族モンスターよりレベルの低い

アンデット族モンスター1体を自分の墓地から選択して特殊召喚す



る。

闇より出し絶望 / ATK 2800

「バトル！！闇より出し絶望でスパークマンにヴァンパイア・ジェネシスで直接攻撃！！」

カミュの宣言通り闇より出し絶望がスパークマンに、ヴァンパイア・ジェネシスが紫苑へ向かっていった。

「……紫苑！！！！」

「終わりだ！！」

血になったヴァンパイア・ジェネシスが紫苑を包み込み、彼女は姿を消した。

「墓地の 発動!!」

その声が響くと同時にヴァンパイア・ジエネシスがはじけ飛んだ。

「なんだと！なぜ生きている！？お前はモンスターを失い、直接攻撃を受けたはずだ!!」

「まだ、私の希望は潰えた訳じゃない。私が手に入れた『心』は」

そう言った時、紫苑の墓地から1体の野球ボール並の大きさの青い毛玉が飛び出した。

「墓地のウルクリボーの効果発動！！このカードをゲームから除外することで私のモンスターは破壊されない！！」

『クリクリ〜！』

ウルクリボー

星1 / 水属性 / 海竜族 / ATK 300 / DEF 200

墓地に存在するこのモンスターをゲームから除外することで、このターン自分フィールド上のモンスター1体はこのターンのバトルフェイズ破壊されない。

ウルクリボーの効果はデュエル中に1度しか発動できない。

そう宣言すると十代のハネクリボーやデュエルキングの武藤遊戯のクリボーの様なモンスターが紫苑周りを飛び回っていた。

「……………！！そうか、テイク・オーバー・ファイブの効果の時に墓地に送られていたのか！！」

そう、一か八かの賭けに紫苑は勝ったのだ。効果でスパークマンは最強の壁としてフィールドに残り続けていたのだ。

カミューラ

LP2100 手札0枚

ヴァンパイア・ジェネシス 闇より出し絶望

伏せカード無し

紫苑のターン

「だが、私の場にはヴァンパイア・ジェネシスがいる！！次のターンで全てを消し去ってやるわ！！」

「……………」

カミューラの言葉の通り、紫苑の劣勢は変わらない。テイク・オーバー・ファイブの効果でドローしようともそれで勝てなければ紫苑は間違いなく終わる。

「…次のターンなんて」

目を閉じた紫苑は静かに言葉を紡ぎだした。そしてデッキの一番上に指を置いた。

「 回って来ない。私のターン、ドロー！！！！」

引いたカードを見た紫苑 その眼は赤かった。

「墓地のテイクオーバー・ファイブの効果発動！！このカードを除外し、カードをドロロー！！十代、あなたのカード、借りるよ！！」

「……………！！おう！！」

何が言いたいのかわかった十代。紫苑のエクストラデッキには十代のカードも入っているのだ。そして今の現状を　紫苑のデッキで勝てる十代のカードはただ一つだった。

「ミラクルフュージョンを発動！！墓地のフェザーマンとバーストレディを融合！！融合召喚、E・HEROフレイムウィングマン融合召喚！！」

フレイムウィングマン／ATK2100

十代のフェイバリットカードであるフレイムウィングマンがフィールドに現れた。しかし、それでも攻撃力が

「E・HEROボルテックを召喚！！」

ボルテック／ATK1000

雷のHEROが現れたが、明らか紫苑には別の狙いがあった。

「リバーズカード、ヒーロー・チェンジ英雄変化を発動！！フィールドのボルテックをデッキに戻し、シンクロンを特殊召喚する！！」

ヒーロー・チェンジ  
英雄変化

速攻魔法

自分フィールド上の「E・HERO」と名のついたモンスター1体を選択する。

選択したモンスターをデッキに戻し、戻したカード以外の「E・HERO」と名のついたレベル4以下のモンスターを特殊召喚することができる。

シンクロン/ATK0

「レベル6のフレイムウィングマンにレベル1のシンクロンをチューニング！！」

闇を切り裂く光の心…その全てを具現化せよ！！シンクロ召喚！！」

6 + 1 = 7

「光と共に舞え！！ファントム・ブルース・ドラゴン！！」

『ピュアアアアアアアアッア！！！！！！！！』

ファントム・ブルース・ドラゴン/ATK2800

紫苑のフィールドに青い体の龍が現れた。紫苑のエースとも言えるモンスターの登場に紫苑の動きにリズムが現れてきた。

「フロントム・ブルースの効果！！手札の融合解除を墓地に送り、墓地の魔法カードを1枚手札に加える！！そして今加えたミラクルフュージョンを発動！！フィールドのスパークマンと墓地のフレイムウイングマンを除外する！！」

「スパークマンとフレイムウイングマン…シャイニング？」

ツバキの呟き。しかしそれなら別にフレイムウイングマンを召喚せずともよかったのだ。それならば

「これが新たなヒーロー…融合召喚！！シャイニング・フレア・ウイングマン！！」

「シャイニング・フレア・ウイングマンだと…！？」

シャイニング・フレア・ウイングマン / ATK 2500

だが、攻撃力はこのモンスターよりも低い。しかしこれが十代の希望だった

「シャイニング・フレア・ウイングマンは墓地のE・HERO1体

につき、300ポイントアップする！！墓地には7体のヒーローが存在する　よって攻撃力は！！」

シャイニング・フレア・ウイングマン / ATK 2500　4600

「攻撃力4600だと！！！？？」

「バトルフェイズ！！シャイニング・フレア・ウイングマンでヴァンパイア・ジエネシスへ攻撃！！シャイニング・シュート！！」

シャイニング・フレア・ウイングマンがヴァンパイアジエネシスに炎の特攻を喰らわせた。

「キヤアアアアアア！！！」

カミューラ / LP 2100　500

カミューラのライフが一気に削れた。さらにシャイニング・フレア・ウイングマンの右腕がカミューラに向けられた。

「シャイニング・フレア・ウイングマンの効果発動！！戦闘で相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！！！」



「なっ、あああああああああああああ……！！！！！！！！！！」

カミューラ / LP5000

カミューラに向けられた右腕から炎が噴き出し、カミューラのライフを削りきった。

「紫苑が勝ったんだな……！」

「流石だニヤ。ん？」

勝った事に喜んでいるアカデミアサイドの面々だったが、カミューラの背後に幻魔の扉が再び現れた。

「ふ、ふふ……ヴァンパイア一族の血もこれで終わり……あの『管理局』に復讐も……」

「「「「「！？」」「」「」「」

管理局に復讐　確かにそう言った。すると幻魔の扉が再び開き、あの透明な腕が飛び出した。その腕がカミューラをからめ捕ると扉へ引きずり込もうとする。

「「「「戦乱の審判！！」

／風神烈火！！

／ライトニング・エクスペロージョン！！

／バーサークラッシュ！！

／オプティカル・ス

トーム！！」「」「」

ヴァルキリー  
戦いの精霊が、オクタビウスが、エクスペロージブ・マジシャンが、  
マシンナーズ・バーサーカーが、シャイニングがその幻魔の扉を攻  
撃した。

「な!？」

「お前達!？なにを」

万丈目が突然の行動をしている5人に驚いていると城が揺れ始めた。それと同時に攻撃を受けた幻魔の扉が再びしまった。

「…やばくない？」

ユウの言葉通り、地震とは違う

「!!来い、ゲオルディアス!!」

シゲルが瞬時にモンスターを呼びだした。その場所に巨大ながれきが落ちてきていたのだが、その下に隼人と三沢がいた。

「チツ…皆、外に出ろ!!紫苑、十代に手を貸せ!!シゲル、行くぞ!!」

剣都の指示を聞いた各々が動き出した。

海岸

「なんとかだな」

そう言ったシゲルの目線の先には崩れ落ちるカミューラの城があった。ギリギリで剣都と共にカミューラを救出できたのだ。ちなみに脱出途中でクロノスとカイザーが元に戻っていた。

「ところーで、なんでシニョールカミューラを助けたノーネ？」

「そうだー！！こいつの所為でお兄さんも……！！」

クロノスと翔はそう言うがそれを宥めたのはユウだった。

「この人も同じなんだ……多分ボク達と同じ様に管理局に酷い事されたんだと思う」

「……………」

だがユウの弁解にカミューラは何も言わなかった。崩れ落ちていく自分の城を何も言わず眺めているだけだった。

「まあ、これでセブンスターは残り5人だろ。お前達　特に十代はしっかり体休めろよ。またフラフラで来るんならぶん殴って寝

かせるぞ」

「お、おう」

剣都の言葉に何処か納得しないが其々寮へ戻って行った。残ったのは5人にカミューラ、クロノスだけだった。

「それで？シニョールカミューラをこれからどうする気なノーネ？」

「まあ、その前に事情を聞きたい。なぜ管理局がお前の復讐の対象なんだ？」

シゲルの言葉にポツポツとカミューラが話し始めた。

~~~~~

かつてカミューラの生まれる少し前、フランスやイギリスなどのヨーロッパ諸国では魔女狩りと呼ばれる行為が行われていた。

魔女、それと魔女とおもわしき人物を次々に処刑していく聖戦だが、殺される側としてはただの虐殺だった。そして吸血鬼も魔女として処刑されていく。

少なからずその行為に危惧したまだ無事だった魔女と吸血鬼は人知れず山奥の森　さらに奥の樹海とも言える場所に里を作った。

その場所でひっそりと、幸せに暮らしていたのだが現代より百年ほ

ど前事件が起こった。

『時空管理局』と名乗る集団がその里へ訪れたのだ。初めはただの警察組織だと思っていた里の者達はそれほど危惧していなかった。

だが管理局は吸血鬼、そして魔女のこの里を『時空犯罪者』という指名手配の集団が拠点を置く危険な場所だと言い張り、里の人たちを襲い始めたのだ。しかも数千年前の方法とは違い謎の力を使って。そして里を逃げ出したヴァンパイアは捕えられ、姿を消していった。

~~~~~

「それで…私だけが生き残った。私の家族も、友人も、里の人も…全員死んだわ。それから世界を転々として管理局の復讐…それとヴァンパイアの一族が差別を受けない世界を作りたかった…そんな時、セブンスターズを名乗る集団が声をかけてきたのは」

カミューラの言葉に全員が耳を傾けて聞いていた。そんなカミューラの手から一枚のカード　ヴァンパイア・ロードが滑り落ちた。

「このカードはね…私の弟なのよ。セブンスターズのアムナエルが

弟の魂をカードと融合させたの」

「そうか…だから…」

紫苑に思い当たる節があった。ヴァンパイア・ジェネシス召喚前に何故かヴァンパイア・ロードが紫苑を睨んでいたのだ。

恐らく精霊に近い存在がヴァンパイア・ロードに憑依しているのだろうだ。

「けど…これで終わりね。戦いは私の負け。もう」

「諦めるの？」

カミューラの言葉に紫苑がそう言った。その眼は先程までの敵意ではなく、包み込むような優しくそうな眼だった。

「たった一度の敗北…失敗…それであなたは諦めて、終わりにする気？」

「…けど、私にはどうする事も出来ないのよ。幻魔を失った私には管理局と戦う力なんて…」

先程5人が幻魔の扉へ攻撃したためか、幻魔の扉のカードが消失したのだ。

しかし、大事なのはそこではないというように剣都がカミューラの横に腰を下ろした。

「俺達も戦ってたよ、管理局とな。それに紫苑は少なからず因縁もある」

剣都の言葉に倒れていたカミューラはそのまま紫苑を見た。紫苑はカミューラの目をしっかりと見て頷いた。

「つ・ま・り。僕達とあなたのやろうとしている事は同じなんだ。管理局を倒す。管理局さえいなければヴァンパイアだって普通の社会で生きていけるんだよ！！」

「無理よ…第一どうやって奴らと戦うのかしら？ヴァンパイアのが効かないのに一般のあなた達にどうして…」  
「これだ」

そう言つてシゲルが取り出したのは『アナト』のカードと『剣闘獣ベストロウリイ』だ。そしてウリイをディスクにセットした。

「来い、ウリイ」

『なんか久々じゃの』

「モンスターが…実体化した…！？」

カミューラが いや、モンスターの実体化を初めて見たクロノスもウリイの姿を見て驚いていた。



「そして奴らの狙いは僕達の持つこのカード」

「それだけの材料があれば十分戦えるよ」

「現に何度か奴らと殺りあったからな」

「あ、ついでに俺はAW社を動かす事もできるからいざとなったら奴らと戦争を起こせるぜ」

「あ、私はある程度管理局の情報持つてる」

予想外の展開にカミューラもクロノスもあんどりと口を開けていた。

「まあ、今すぐには言わない。しばらくうちの会社にも身を置いて考えろ」

### ツバキの部屋

その後カミューラは明日の定期便が来るまでレッド寮の剣都の部屋にいる事となった。今現在剣都はイエローにいるためちよつど開いていたのだ。

「それで…一体どうしたの？」

明らかに二日前に精霊界に行く前と後では紫苑はなにかが変わっていた。しかし外見的なモノではなく、内面の何かだった。

「…お姉ちゃん、今日は一緒に寝てくれない？」

「え？」

まさか紫苑がそんな事を言うなんて思いもしなかった。気丈にふるまっていた紫苑が誰かに甘えるなんて今まで（ほんの数週間だが）一度もなかったのだ。

「少し…怖い…」

「怖い…？（紫苑が恐怖を感じる…？確か紫苑は感情を持っていなかったはず…それなのに…）…いいよ。けど明日、精霊界で何があったのかちゃんと説明してね」

ツバキの言葉にペアアと顔が笑顔になった紫苑。その笑顔に何処か違和感を覚えたツバキだった。

## 第四十二話 英雄の光 VS カミューラ 後編（後書き）

ユウ「カミューラさんは助けるの？」

他作品の作者のゼクスユイさんがこの話のアイデアを送ってくれて

…で、思い切って仲間になろうと

ツバキ「管理局の復讐…」

管理局がカミューラの故郷を襲ったとしたら確かに面白い展開がで  
きると思っただからね。

ヴァンパイア・ロードに関しては作者のアイデア。まあロードには  
少し思い入れがあるからね。

紫苑「私の心って？それとどうしてお姉ちゃん…」

それは次回…ちょっとしたキャラチェンジが起こる。

オリジナルカード

ウルクリボー

投稿カード：ゼクスユイさん

英雄変化

剣都「で、次回は何かAWで勝負って聞いたが？」

ああ、剣賭メインで行くからそうしようと思った…デュエルはその  
次に持ち越したけど、尺の問題で。

シゲル「聞いた話によると凄く短いんだって？」

長さ的には今回の前後編に比べたら短い

次回予告：side 剣都

カミューラを連れてAWに戻った俺はカミューラにこれからの選択

肢を与えた。

それについての準備が必要になるんだが…

一方学園では紫苑が精霊界での出来事を話していた。

そしてあいつが手に入れたという感情も。

そして俺は予期せぬ客人に頭を悩ませている…

次回第四十三話 手に入れた感情と選択肢

今回の最強カードはないぜ

**第四十三話 手に入れた感情と選択肢（前書き）**

今回はデュエル無しで大幅にストーリーが進みます。

## 第四十三話 手に入れた感情と選択肢

アースラ

「…ヴィータさんとザフィーラさんまでも…」

そう呟いたリンディは自室で治療員からなのはとヴィータ、そしてザフィーラの状態を聞いていた。しかし3人とも 特にヴィータは受けたダメージが激しく、しばらくの間安静にしてなくちゃいけないのだ。

ザフィーラも数日絶対安静を言い渡された。

『提督………』

「…御苦労様、あなたも休んでください」

そう言われた治療員は敬礼をすると通信画面を閉じた。リンディは制服のままベットに寝ころび、これからの事を考えていた。世界の矛盾への対策 とくにデュエルで勝って戦闘不能にする方法を

しかし考えがまとまるはずもない。

まず教員として潜入していたシャマルは最後の攻撃の当たり所が悪かったのか脳震盪を起こしてしまった。若干の後遺症があり、無理はできない。

次に単独行動を取ったなのはを追い、シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者を捕縛しようとしたクロノはカイザーのOverKillerにより今だ意識不明。ちなみに時折発狂したように魘されている。

そしてなのはとヴィータ。運良くなのはは数日すれば戦えるがヴィータは数週間安静にしなくてはいけない。ちなみに聞いた話によると戦意の無いなのはの代わりにヴィータが戦い、瀕死になった様だ。

最後にザフィーラ。一人で謎の人物と戦っていたが、アラエルできる限り時間稼ぎをした結果、瀕死の状況だ。

あまりにも怪我人が多すぎる。クロノとヴィータに関しては死んでもおかしくなかったのだ。

そして戦えるのはなのは・フェイト・はやて・シグナム・リンディ自身のわずか5人だった。リンディを除いて4人は一度彼らに負けていた。再び勝てる可能性は低かったので先日、シンクロモンスターを渡したのだ。

しかし、それを使ったなのは負けていた。

「駄目ね、あまりにも」

そう呟いたリンディ。今まで受けた仕事でも此処まで危機的状況になった事は一度もない。そう思ったリンディはある場所へ通信を開始した。

アカデミア：灯台の下

放課後紫苑が話があると言っていたので剣都以外の世界の矛盾＋十代達を呼びだしたのだ。精霊界で何があったのか話すということだったのだがそれよりも気になるのが

「紫苑、なんだそれ」

「ん？これ？これはウルクリボーだよ」

紫苑の周囲を飛び回る青毛むくじらの物体、すると十代のデッキからハネクリボーが飛び出し

『クリクリ〜！！』

『クリ〜！！』

『クリリ〜！！』



何故か仲良くなっていた。しかし精霊が見えない面子は一体何の事なのか分からずにいた。

「ウルクリボーは向こうで見つけた私の心です」

「心…?」

心とは一体どういうことなのか、それに以前紫苑は自分自身に感情と呼べるものは無いと言っていた。

「向こうの世界での事を話す」

回想：精霊界

「ダーク、この翻訳は間違いないのですね…?」

「ああ、私もルキも一言一句全く同じ結果になった」

紫苑が渡された翻訳したデータ。そこには色々書かれていたのだがファイル名を付けるのなら一言で言うところ書かれるだろう。

「…闇の書の残滓専用感情追加プログラム」

喜怒哀楽のレベル 例えば宝くじがほんの千円当たる喜びと大好きな人と一緒になる喜び、悪戯をされた怒りと大切な物を壊された

怒り、家族を失う哀しみと映画で哀しくなる、好きな番組で笑う楽しさと誰かという楽しさ。

全部同じだということは無い。しかし紫苑にとっては喜怒哀楽があるだけでそれがどれが最も怒るのか、最も楽しいのか分からないのだ。

「…これを私にインストールすれば…」

「さて、これが本当にそうなのか分からないぞ。ダミーという可能性もある」

ダークの言うとおり敵の残したデータでもしもの時の場合に偽のデータを作った可能性もある。しかし紫苑はそれは無いと思っていた。闇の書の事を知っているのはほんのわずかです。その中で残滓の事を知ってるのは事件に関わった人だけ…わざわざ偽のデータを作る意味は無いはずですよ」

「…では」

数分後

研究所に残されていたプログラム体にデータをインストールする装置の中に紫苑は浮かんでいた。

「紫苑、最後に聞く。本当にいいんだな？」

「……………（コク）」

培養液で声が出せないため頷いた紫苑。ダークはそれを見届けるとコンソールを操作し、インストールを開始した。

Install 2% . . . 6% . . . 9% . . . 10% . . .  
14%

コンソールに表示される数値が徐々に上がっていた。問題が無ければものの数分で終わるはずだった。ダークはコンソールから目を話して紫苑の様子を見た。

特にこれと言って嫌がっていたり、苦しんでいる様子もなく、死んでいる様に浮かんでいる紫苑。しかしバイタルサインは正常に動き、生存している事を証明している。

「…私の考えすぎか」

そうダークが呟いた時、コンソールのランプが緑から赤へと変わった。完了するにはまだ時間がかかるはずだった。

Abnormal situation occurs (異常事態発生)

「なに!?!」

その言葉に驚くダークにコンソールは更に文字を表示した。

There was an installation problem with the data.

(インストールデータに不具合が発生しました。)

May cause adverse effects to the subject and leave you installed this.

(このままインストールすると被検体に悪影響を起す可能性があります。)

Continue with the installation anyway? (このままインストールを続行しますか?)

yes

no

「不具合だと…クッ、終了するしか…」

そう言ってnoの方にカーソルを持っていくとした。しかし紫苑はそうなる事を分かってインストールしようとしているのだ。

「……………いいのか?」

「……………」

紫苑は何も答えない。しかし「そのままやって」と言ってる気がした。ダークはyesにカーソルを持っていった。

Consent(了解) 41% . . . 45% . . .

「頼むぞ」

祈るように呟いたダーク。そして1分が1時間にも感じる時が流れた。

84% . . . 87% . . . 90%

やっと90%を越えた。そのことにホツとしていると異変に気付いた。

「……………い……………」

「…何の声だ？」

何処からか細かい声が聞こえた。しかし、コンソールが発する音声が大きくか細い声が聞こえないのだ。

94% . . . 97% . . . 99%

「……!!」

残り1%となった時、ダークは気付いたのだ。  
そのか細い声は何処から出ていたのか。

「紫苑!!?」

紫苑の入っている培養液の中　　なにか青い物体が動いていた。間  
違いなくそれが声を発生していたのだ。

100% . . . complete

そしてコンソールがその文字を映し出した瞬間、その青い物体が

「!!?」

「クリッ!!!!」

装置のガラスを突き破ってダークに突っ込んできたのだ。

「っ……!!」

だが、何とか受け止めたダークはその顔を見て驚いた。十代も持つ

「ハネクリボー…？いや、これはクリボーか？」  
「クリ？」

羽根の無い青いクリボーだった。その時クリボーがダークに掴まれている事にようやく気付いたのか可愛らしい目でダークを見ていた。

「……お前はなにクリボーだ」  
「クリ？」

クリボーにもハネクリボーとクリボンと様々な種類がいる。しかし青いクリボーなんて聞いた事が無いのだ。

「…ケホ、ケホ！」  
「！紫苑、大丈夫か！？」

壊れた装置の中から紫苑が這いずり出してきた。

「ケホ、ダーク……インストール…成功かな…」  
「分かんが今は休め。調べるのは後だ」

回想終了

「それじゃあ…」

「そうよ。喜怒哀楽：人と同じ様に感じる様にできたの」

そう言った紫苑は嬉しそうに笑ってた。

「それじゃあそのクリボーは？」

「それは私にインストールする過程で生まれたモンスターよ。インストールデータの不具合で起こったバグの集まりで…けど、そのバグの元は私の心プログラムなので私の心から生まれたのと同じなの」

その説明を聞いていた十代が一つ気になった事がある。

「なあ紫苑、お前そんな口調だったけか？」

「ああ、心が手に入れたから『私』という人格ができて…それが口調に出てるんだと思う」

そう聞いてシゲル以外は首を傾げていた。説明は的確なのだが意味が分かりにくいのだ。

「簡潔に言うと、これが本当の紫苑の口調ってことだ」

「うん、それで間違いないはずだよ…所で剣都は？」



「剣都は…」

A W社：応接室

「こちらが今まで採取したデータでございます」

そう言つて山本がコミュニラに渡したのはA W社が調べ上げた管理局の情報、世界の矛盾との戦いで使われたカードの効果・コンボ。分かつている管理局の顔写真とプロフィールと偽の経歴。

「すごいわね…今のところ管理局と争つて負け無しって…」

「それは俺じゃなくてあいつらに言いな。俺はたった一回だけ勝つたんだぞ」

ほとんどの戦いはユウとシゲルが戦っていたのだがそれでも負けが無いというのは凄かった。

「で、これからあなたの事だが…いくつかの選択肢を出そう。

一つ目はセブンスターズ、アカデミア、管理局…全てから離れて過  
ごす。

二つ目はセブンスターズと共に残り、俺達の敵となる

三つ目は単独で奴らと戦う

そして最後は…」

そう言つて剣都が4本目の指を上げようとしたが、それをカミューラは止めた。

「4つ目の『あなた達の仲間になる』を選ぶわ」

「…驚いたな。この選択を一番渋ると思つたが…」

剣都の言葉通りカミューラが誰かとするむとか考えてれなかつたからだ。

「今までだつてそうだわ。セブンスターズでも利用するためいた。だから利用さしてもらつわ」

「…あんたとウマが合いそうだな」

剣都はニヤリと笑つた。

アースラ

「お待ちしていました」

「ああ…こんな事件は類をみないからな」

リンディの言葉に返したのは物すごい風格の持った老人だった。その背後には部下と思わしき2人の青年がいた。

「世界の矛盾にロストロギアにレアスキル…そして次元犯罪者か」

「ええ…私の艇の戦闘員も大半やられてしまったので援軍を要請したので…」

リンディはそう言って老人の背後にいる2人の青年を見た。普通のレベルは一個中隊以上の戦力がいるはずだからだ。

「上からの判断は『たった5人の子供に負けて一個中隊を動かすのは馬鹿げている』と」

「そ、それは…」

リンディはその老人の言葉に何も言えなかった。確かに他の部隊がらしたらおかしいと思われることだが現実にリンディ達は彼らに勝てないのだ。

「ふむ…小人数精鋭の敵の対処は、こういう場合一人ずつ消していくのが定石だ」

## 再びアカデミア

「で、だ。ダーク、俺達を集めてどうする気なんだ？」

今現在世界の矛盾4人が剣都の部屋にいた。空き部屋となった今は自由に入りができるため話し合いを行う場合も此処で行っている。

『つい先日、アラエルという女性が現れたというのは本当なのか？』

「そうだよ。ついでにツバキに置き土産をして行ったけど…」

ユウの言葉にツバキが3枚のカードを並べた。しかしアクセス・トランプだけは腰のデッキホルダーに入れており、デッキから抜いているのだ。

「あいつが何者なのか知ってるのか？」

『全て説明するには時間がかかるが…良いか？』

その言葉に全員が頷いた。そしてダークはあるお伽話を始めた。

昔々ある所に、『天界』と呼ばれる場所が存在した。

その場所は非常に豊かで常に日の光を浴び、植物は育ち精霊は伸び伸びと育っていた。

しかしある日その天界に魔の手が伸びました。

その光を求めた悪が天界を襲い、乗っ取るうとしました。瞬く間に天界は悪に乗っ取られ、天界に住む精霊は生まれ故郷を捨てました。残ったのは母なる神たった一人です。

そしてその神は自らと天界もろとも悪と共に精霊界より姿を消しました。

残されたのは僅かな天界の欠片のみ。精霊達はその欠片の上に聖域を作りました。

『それが後の「天空の聖域」と言われているものだ』

「それとあのアラエルヤルヒエってのにどういう関係があるんだ？」

シゲルの言葉通り、その話とあの2人は関係ないと思われる。しかし今度はウリイがまだ話があるように引き継いだ。

『実はワシらの世界で600年ほど前からとある組織がその存在を噂されていてな…その名は

アンゲロス』

「アンゲロス？」

ウリイの言葉にユウが聞き返した。あまりにも聞き慣れない名前だったからだ。

『相当な腕を持った集団だ。人数やリーダーは不明…だが分かってる中でその組織の中に人間が精霊界に作った研究所などを破壊するアラエルと呼ばれる女性の目撃情報があった』

「…そういえばアラエルに初めて会ったのも研究所だったね」

ツバキの言葉通り紫苑がいた違法研究所にアラエルは現れた。そしてその時の研究員は何処かアラエルに怯えた様子だった。

「って、ちょっと待って。600年前って…精霊の基本的な寿命っていくつなの？」

『む？前に言わなかったか？基本的に2000年から4000年くらいだぞ』

紫苑の言葉にウリイがサラッと答えた。しかし2000年って…ほぼ西暦と同じという事だ…寿命が一番低くて。

「で、そのアンゲロスとアラエルの繋がりは分かった。だが初めに話した天界の昔話と何の関係があるんだ？」

『おっと、話しそびれたな。奴らの目的や戦力は分からん…が何処の出身は判明している』

シゲルの言葉にダークがそう言った。しかしシゲルの疑問にその言

葉で返すとなると

「まさか：天界の出身!？」

「そうじゃ。アンゲロスは天界を追い出された者たちの集まりじゃ。目的は分からんが様々な場所に出没し人間や精霊にも被害が出ているのじゃ。そのため今から数十年前に対アンゲロスの部隊が組織されたのじゃ。そのリーダーがお主たちも知っているアーカナイトじゃ」

A W 社

「じゃあ問題はこれからの事だな」

協力するにあたって、コミュニーラはどうして行くのか考えなくてれば行けない。管理局が5人に接触するとしたらやはりアカデミアにいた方がいいのだが

「名目上はどうする気なのかしら?」

「そこが問題だ」

女医や教員の免許なんてコミュニーラが持っている訳は無い。かと言って取得するには時間がかかり、その間に事件が起こらないとも限らない。

免許がいらず、時間もかからず、なおかつアカデミアに留まる仕事

「ん？そういえば…一つだけあったな」

そう呟いた時、部屋に呼び出し音が響いた。剣都は近くにあった青いボタンを押した。

「なんだ？」

『海馬コーポレーションの海馬瀬戸様がお見えになりました』

海馬瀬戸 高校生でありながら言わずと知れた海馬コーポレーションの社長で現デュエルキングの武藤遊戯と唯一対等に渡り合えるライバルだ。

少なからず会社関係や大会などで顔見知りの2人だが海馬が訪ねてくるのは初めてだった。

「応接室に通せ」

『畏まりました』

ほどなく女性受付に連れてこられた海馬が現れた。

「ふうん…久しいなとも言うっておこう」

「ガラじゃない言葉だな。どうかしたのか？」



何度か戦った事もあり互いの性格などはよく知っていた。そのため世間話の始まりの様な事を海馬が言うなんてまずありえなかった。

すると海馬はチラリとカミューラを見た。

「この女は何だ？」

「訳ありだ。しばらくあの島で働く事になると思うがな」

「なに？」

あの島とはデュエルアカデミアの事だ。しかし海馬コーポレーションはアカデミアに深くかかわりがある。そのため剣都の言葉にピクリと海馬の眉が反応した。

「それは一体どういうことだ？」

「その前に、だ。要件を済ませる。わざわざこの件が本題じゃないんだろ？」

それに海馬が一瞬渋い顔をしたが、持っていたアタッシュケースから一枚の資料を取り出した。

「最近、うちのメインサーバーから検出された反応だ。普段のデュエルでは必要のないほどのエネルギーが消費されている……これについて何か知っているか？」

「なにになに…？日付は3日前と昨日？」

3日前はシゲルがデイラと、先日は紫苑がカミューラと戦った時だ。そしてちょうど2人の目が赤くなった瞬間の時刻

「……………（どうすっかな…海馬はオカルト嫌いだしな……………精霊界や管理局の事を言っても信じないだろうし…かと言って嘘を並べてもすくばれちまうしな…）」

「で、貴様は昨日はちょうどこの時近くにいたはずだ」

一応紫苑が5人のデュエルディスクの中の根本的な海馬コーポレーションのサーバーへのアクセス端末を取り付けたのがあだになったのか、剣都のデュエルディスクの反応があったのだ。

「どうすっかな……………っ！！？」

最早途方に暮れた剣都だが、部屋に違和感を感じた。一番この部屋にいる事が多かった剣都だから気付いた。室内の人の気配が多かったのに。

「……………（一人…いや、二人…だが、姿が見えない…いや…）来い、マシナーズブレード…！」

「……………！！！？……………」

他の3人と見えない敵は突如として現れたモンスターに驚いた。あまりにも目立つ巨大な大剣を持つ機械兵士だ。

「バカな…立体映像ではない!？」

「(だ、だが俺の場所までは…)」

そう侵入者は思っていた。しかし剣都は正確に潜んでいる2人組へ指を向けた。

「マシーンズシュラツシュ!!」

『『!!?!?!?』』

微妙にだが室内の電灯の辺りがおかしなところがあった、その確かな場所に侵入者は驚きながらも攻撃を避けた。が、しかし

「誰だ!!」

海馬達に姿が見えてしまった。どうやら魔法で姿を消していたみただが動いたことによりばれた様だ。青い髪的青年と黒髪の少年の2人を睨んだ海馬と剣都。

「クツ…ターゲットにばれてしまうとは…!!」

「こうなったら、やるぞ!!!!」

「海馬、訳は後で話す。先にこいつらボコボコにするの手伝ってくれないか？」

「ふうん…いいだろう。我がブルーアイズの前にひれ伏すがいい！」

## 第四十三話 手に入れた感情と選択肢（後書き）

剣賭「俺と海馬？」

一応大会出てる時にKCの大会も参加して顔見知りになりたまに戦ったりしたという設定。

シゲル「管理局はどこなところでも来るな……」

「ばれなきゃいい」「仕方がない」「問題無い」……なにか法律や決めごとを破ってしまう時の不正の三原則と呼ばれる内の正当化というものだ。奴らに罪悪感なんてないよ。

紫苑「それと私の事……」

いくらなんでもずつと感情無しなら恋愛話なんて無理だから追加した。その際今後重要な場面が出てくる「ウルクリボー」も作った。

ツバキ「凄い様変わりね……一緒に寝てなんて……」

若干以前大人びていたのが退化した感じ。ハッキリと物を言うが何処か子供っぽいみたいだな感じだね。

ユウ「それとカミューラさんはどうするの？」

カイザーよりは出番がない感じのサブキャラとなる。ちょうど剣都のセリフを考えていたら良い設定が思いついたんで。

剣賭「……それって行き当たりばったりってことか？」

想像図なんてない！！全てはノリと勢いだ！！

シゲル「それとアングロスってなんだ？」

アラエル、ザフキ、ルヒエの組織の名前。多分第二期……光の結社らへんで関係してくる。

次回予告 side：剣賭

今回も俺か……

A Wに潜入した管理局員と戦うことになった俺と海馬。それぞれが目の前の敵に対峙していた。

海馬は……まあ、相変わらずのあのカードを使ってる。だが『特別室執務官』……？一体何の事だ？

まあ、俺の方は……しまったあああああああ！！！！！！！！！！

デュエリストあるまじき失敗をしでかした俺は目の前のガキをどうする考えることにした。この手札で

次回第四十四話 青眼と機械 そして疲労

今回の最強カードは「青眼の白龍」

次回も見てくださいな

第四十四話 青眼と機械 そして疲労（前書き）

今回は短いです

## 第四十四話 青眼と機械 そして疲労

青年VS海馬

「俺のターン!!」

まずは海馬のターンだ。海馬のデッキは相変わらずのブルーアイズデッキでシンクロ系統と共に開発されたドラゴンのサポートカードも導入されている。

「俺は手札からX-ヘッド・キャノンを召喚!!」

フィールドに両肩にキャノン砲を携えた機械が現れた。万丈目もよく使うユニオン系統のモンスターの1体だ。

X-ヘッド・キャノン/ATK1800

「そしてカードを伏せ、ターンエンド!!」

海馬

LP4000 手札4枚

X-ヘッド・キャノン(ATK1800)

伏せカード1枚



青年のターン

「私のターン!!!A・O・Jコアデストロイを召喚!!!」

コアデストロイ / ATK 1200

フィールドにカタストルによく似たモンスターが現れた。しかし海馬の場のモンスターよりも攻撃力が低い。

「……（攻撃力の低いモンスターを出した……ということは、あのモンスターはカード効果で俺のモンスターを破壊しにかかるはず……）」  
「バトル!!!コアデストロイでそのモンスターへ攻撃!!!」

コアデストロイの目玉?からレーザーが伸びるとそのままX・ヘッド・キャノンが破壊された。

「コアデストロイは光属性モンスターと戦闘を行う時、ダメージ計算を行わず破壊する!!!」  
「……………」

W・ヘッドキャノンが破壊されても海馬は眉一つ動かさなかった。  
だが

「グッ!?（なんだ……?俺のモンスターが破壊された時、実際のダメージが……まあいい）」

一方ほぼ無反応の海馬の顔を見て青年は怪訝そうな顔をしていた。

「…なぜ自分のモンスターを破壊されて余裕なんだ」

「ふうん…たったこれしきの事でいちいち驚いてられるほど俺は甘くないんでな…」

「クツ…!!」

青年はその答えに苛立ちながらカードを2枚伏せた。それはリミッター解除　機械族モンスターの攻撃力を2倍にするカードだ。

「そして死者蘇生を発動!!お前の墓地のモンスターを頂く!!」

X - ヘッドキャノン / ATK 1800

海馬の墓地からモンスターが奪われた。しかし海馬は既にこの勝負で熱くなる事はもう無い。

青年

LP 4000 手札 2枚

コアデストロイ (ATK 1200) X - ヘッドキャノン (ATK 1800)

伏せカード 2枚

海馬のターン

「俺のターン。生憎俺は忙しいのでな…さつさとケリを付けさしてもらっ」

「何をバカな…フィールドは俺の方が有利だ!!」

確かにフィールドのモンスター、そして彼の伏せカードを見れば逆に不利なのは海馬の方だった。それが並のデュエリストの場合だが――

「俺は伏せて魔法カード、調和の宝札を発動。攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーである伝説の白石を墓地に送り、カードを2枚ドロー。そして伝説の白石の効果発動。我がデッキの僕を手札に加える」

調和の宝札

通常魔法

手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

ホワイト・オブ・レジェンド

伝説の白石

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻 300 / 守 250

このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

手札に加えたカードを何なのか青年が確認する前に海馬が手札から

更にモンスターを召喚した。

「デブリ・ドラゴンを通常召喚。効果により墓地の伝説の白石を特殊召喚する」

デブリ・ドラゴン

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星4 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1000 / 守2000

このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を

攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

このカードをシンクロ素材とする場合、

ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならぬ。

デブリ・ドラゴン / ATK1000

伝説の白石 / ATK300

「だが攻撃力は俺の方が上だ！！それにチューナー同士シンクロを行うことなんてできない！！」

「ふうん…シンクロだと？そんなもの…俺のデッキに必要無い！

！見せてやろう、シンクロの先の戦術を！！手札からドラゴニック・タクティクスを発動！！」

そう宣言した瞬間海馬の場のモンスター2体が光に包まれた。そし

てその光が一つとなった。

「このカードは、俺の場のドラゴン族モンスター2体をリリースし、デッキよりレベル8のドラゴンを召喚するカード!!」

ドラゴニック・タクティクス

通常魔法

自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター2体をリリースして発動する。

自分のデッキからレベル8のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する。

「現れる、我がデッキ最強にして無敵…」

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン  
青眼の白龍!!」

青眼の白龍 / ATK 3000

フィールドに現れた青い目の龍を見た瞬間青年は怯え出した。

「ぶ、ぶぶブルーアイズだと！？バカな！？なぜ特別執務官のカードを…！？」

「特別執務官…？一体何の事だ？」

一体何の事なのか分からない海馬。しかし青年の言葉を見殺して海馬はさらにデッキを回した。

「さらにもう一体の青眼の白龍を手札に加える！」

「クツ…（だが俺のセットカードはリミッター解除とトラップスター…そして場には光属性には最強のコアデストロイがいる…そして次のターンシンクロを行い…私の勝ちに揺るぎは無い…！）」

そう思っていた青年。しかし言うとおこつ

説明は死亡フラグだと

「手札から魔法カード、滅びの爆裂疾風弾バーストストリームを発動！！俺の場にブルーアイスが存在する時、相手モンスターを全て破壊する！！」

「なんだと！？」

滅びの爆裂疾風弾

通常魔法

自分フィールド上に「青眼の白龍」が表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

このカードを発動するターン「青眼の白龍」は攻撃する事ができない。

ブルーアイスから放たれた青白いエネルギー弾は2体のモンスターを包み込んだ。

しかし、このカードを発動したターン、ブルーアイズは攻撃する事が出来なくなる。

「クッ……！！（だが俺の手札には2体目のコアデストロイがいる！！これでブルーアイズを破壊すれば……！！）」

「更に融合を発動！！フィールドと手札の3体のブルーアイズを融合……！！」

そう宣言した瞬間手札の2体のブルーアイズがフィールドに現れた。  
海馬お得意のブルーアイズ戦法だ。

そして3体のブルーアイズは交わり、三つ首のドラゴンがフィールドに現れた。

「来るがいい…ブルーアイズルティメット青眼の（・）ドラゴン究極龍!!」

青眼の究極龍 / ATK 4500

「こ、攻撃力4500だと!?!?バカな!?!」

side Out : 剣都

剣都VS少年 剣都のターン

海馬の1ターン目が終了した頃、剣都和少年の勝負も始まっていた  
が

「（しまったあああああ!?!?!?!）」

引いた5枚のカードを見て剣都が心の中で叫んでいた。その理由は

「（デッキ違うううううう!?!?!?!?!）」



そう、カミューラへの説明のため、かつてユウが倒した讐都のデッキを持ってきていたのだが、間違えてそのデッキをセットしていたのだ。

しかも見た事のないシリーズのカードばかり。

「俺のターン！！（…手札のカード効果から見る限りこのシリーズは破壊することで効果を得るカード…）魔法カード、スクラップ・エリアを発動！！デッキからスクラップ・ビーストを手札に加える！！」

スクラップ・エリア

通常魔法

自分のデッキから「スクラップ」と名のついたチューナー1体を手札に加える。

そのカードを見た少年が眉をひそめた。

「スクラップ…まさかお前が讐都か！！」

「いや、ちげーよ。俺は「騙されないぞ！！時空犯罪者め！！」…はあ…」

剣都はそう言ったが少年はどうも信じていないようだ。仕方がないので剣都はそのままつづけた。

「スクラップ・リサイクラーを守備表示で召喚！！ターンエンドだ

「!!」

スクラップ・リサイクラー / DEF 1200

フィールドにマシンナーズ・リサイクラーによく似たモンスターが現れた。

「スクラップ・リサイクラーの効果発動!! デッキのスクラップ・サーチャーを墓地へ送る!!」

スクラップ・リサイクラー

効果モンスター

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻 900 / 守 1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

自分のデッキから機械族モンスター1体を選択して墓地へ送る事ができる。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する

機械族・地属性・レベル4モンスター2体をデッキに戻す事で、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

そう宣言した瞬間ポロポロなサーチライトが墓地に送られた。一見無意味に見える　だが、このデッキは廃棄処分スクラップなのだ。

「俺は更にカードを3枚伏せてターンエンド!!」

剣都

LP4000 手札2枚

スクラップ・リサイクラー / DEF1200

伏せカード3枚

少年のターン

「俺のターン！！ヘルウェイ・パトロールを召喚！！」

「え？」

昔シゲルがリアルファイトで伸したのと同じ悪魔がフィールドに現れた。ちなみにそのことは剣都は聞いた事があるだけだ。だが剣都が気になったのはそこではない。

「…A・O・Jじゃねーのかよ」

「ふん！！A・O・Jは一般支給されるカードだ！！俺のはその上のチェイスデッキ…一緒にするな！！」

つまり簡潔に説明するとA・O・Jシリーズは一般局員、その上の局員 仮に精鋭局員とでもいおう が使うのはチェイスと呼ばれるデッキだった。

「バトル！！ヘルウェイ・パトロールでスクラップ・リサイクラーに攻撃！！」

「速攻魔法スクラップ・スコールを発動！！デッキのスクラップとフィールドのスクラップ・リサイクラーを破壊し、カードを一枚ドロウする！！更にスクラップ・サーチャーの効果発動！！このカードを特殊召喚する！！」

スクラップ・スコール

速攻魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

自分のデッキから「スクラップ」と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、カードを1枚ドローする。

その後、選択したモンスターを破壊する。

スクラップ・サーチャー

効果モンスター

星1/地属性/鳥獣族/攻 100/守 300

このカードが墓地に存在し、自分フィールド上に存在する

「スクラップ・サーチャー」以外の「スクラップ」と名のついたモンスターが破壊され、墓地へ送られた時、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが特殊召喚に成功した時、「スクラップ」と名のついたモンスター以外の

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「クツ…だが、対象を貴様に変更だ!!」

そう宣言した時、サーチャーに襲いかかっていたヘルウェイの目の前に巨大な鉄の塊が現れた。

「リバーズ罨、スクラップ・バリケード!!手札のスクラップ・ゴレムを墓地に送ることでバトルフェイズを終了する!!」

スクラップ・バリケード

通常罠

相手のバトルフェイズ中、自分のフィールドの「スクラップ」と名のついたモンスターが攻撃対象時、手札の「スクラップ」と名のついたモンスターを捨てることで発動することができる。  
そのターンのバトルフェイズを終了する。

そう、バリケードとなった鉄の塊はスクラップ・ゴーレムの残骸だった。

「クソ…カードを伏せてターンエンド！！（伏せたのはヘイト・バスター、手札には上級で守備力が低い悪魔が多数いる…！！）」

少年

LP4000 手札4枚

ヘルウェイ・パトロール

伏せカード1枚

剣都のターン

「俺のターン！！スクラップ・キマイラを召喚！！効果により墓地のスクラップ・ビーストを特殊召喚する！！」

スクラップ・キマイラ

効果モンスター

星4/地属性/獣族/攻1700/守 500

このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついた  
チューナー1体を選択して特殊召喚する事ができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、

「スクラップ」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用  
できず、

他のシンクロ素材モンスターは全て

「スクラップ」と名のついたモンスターでなければならない。

スクラップ・キマイラ / ATK 1700

スクラップ・ビースト / ATK 1600

フィールドに2体のくず鉄で出来た獣が現れた。そして剣都が取り  
出したシンクロモンスター

「（まさかこれを使う時が来るとはな…）レベル4のスクラップ・  
キマイラにレベル4のスクラップ・ビーストをチューニング！！  
棄鉄の海に眠りし怨嗟の鼓動！今瓦礫を突き破りて、壮悲の叫びを  
上げよ！」

4 + 4 = 8

「シンクロ召喚！！再動せよ、スクラップ・ドラゴン！！」

スクラップ・ドラゴン / ATK 2800

フィールドにくず鉄の塊の龍が現れた。しかし少年は内心ほくそ笑  
んでいた。このまま剣都が攻撃を仕掛ければヘイトバスターの餌食  
でほぼ勝利が決定していたからだ。だが、それは死亡フラグだ

「スクラップ・ドラゴンの効果発動！俺とお前の場のカードを其々選択し、その選択したカードを破壊する！！俺の場のサージャールとお前の場のそのセットカードだ！！」

「なに！！？」

スクラップ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8/地属性/ドラゴン族/攻2800/守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して発動する事ができる。

選択したカードを破壊する。

このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、

シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する

「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

スクラップ・ドラゴンの体に纏わりついたスクラップ・サージャールの残骸が鉄の弾丸としてセットカードを破壊した。

「リバーズ罫、DNA改造手術を発動！！フィールドのモンスターは全て機械族に変更する！！そしてこれで終わりだ！！速攻魔法リミッター解除！！！」

スクラップ・ドラゴン/ATK2800 5600

「バカな！！ジャストキルだと！！？」

そう、5600 - 1600 = 4000だ。そしてちょうど少年のライフも4000だ。

「「ば、バカな…特別執務官の私/俺が…!!」」

「我が最強の僕の攻撃を受けることを誇りに思う事がいい…」

「思いのほかこのデッキもじっくり来るな…まあ、そんな事はどうでもいいか」

驚きを隠せない2人とは対照的に冷めた目でその2人を見ていた剣都と海馬。そして3つ首竜の口に光が、屑鉄龍の周囲に墓地に眠るモンスターの残骸が

「アルティメット・バースト!!」

「スクラップ・バースト!!」

「「うわああああああああああああああ!!!!!!!!」」

青年 / LP 4000 0

少年 / LP 4000 0

「「つああああああああああ!!!!!!!!」」

「「「「なっ!?!」」」



ライフが0になった管理局員の2人は苦しみだした。そのことに剣都は一つだけ心当たりがあった。

先日のシゲルVSディラで負けたディラが消滅した状況　それが今と酷似しているのだ。

「うがああああああああ　　！！！」

「バカな……！！」  
「消えた……！？」

その光景を見て海馬とカミューラが驚きを隠せないでいた。

その後

「で、先日は紫苑つてのと、このカミューラが戦った時だ」  
「……ふうん。なるほど。だがその管理局とやらが本当にあるのか  
どうかも疑わしいな……」

腕を組んだ海馬はそう言った。あの後剣都は全部海馬から吐かされ

ていた。

しかし剣都の話もユウや紫苑からの又聞きだったため所々説明できない部分もあった。

「あゝもう！！ユウか紫苑がいれば説明できんに！！」

苛立った剣都はそう言った、てか叫んだ。最初の方は剣都がまだアカデミアに来る前だったため説明できないのだ。

「む？ユウ…もうしかして聖牙夕の事か？」

「あ？そうだが知ってるのか？」

海馬の言葉に剣都がそう反応した。ちなみにアカデミアでユウの過去はツバキとシゲル、そしてイナしか知らない事だ。

「昔からの馴染だ。あいつが関わるといことは……まあいい。それならば嘘では無かるう」

「…ずいぶん信用してるんだな」

剣都の言葉の通り海馬は自らのライバルである遊戯とその親友である城野内、自身の家族であるモクバと秘書である磯野以外の言葉をあまり信用しようとするしない。

「言ったはずだ、昔からの馴染だと。あいつがどういう性格なのか知っている…それだけだ」

アースラ

「ば、バカな……2人のバイタルが消えただと!!?」

老人はあまりにも信じられない光景に驚きを隠せないでいた。絶対に失敗しないという自信があつたため生体反応が消えたのが信じられないようだ。

「…これでお分かりでしょう。彼らの実力は本物です」

「ク、クソ!!なんたる失態だ!!アルカンシエルを用意しろ!!」  
『!!!???』

老人の言ったアルカンシエル それはその世界すらも破壊することができる殺戮兵器だ。それを使用すると言い出したのだ。

「な、何を言っているんですか!?!あの世界には無関係の人たちが大勢」

「ワシの失態を知る者など生かしておけんわ!!さつさと用意せんか!!!」

この時アースラ局員は いや、なのはの報告にあつた『紫苑の過去』である管理局の黒い部分 その実態を身にかけていた。だがそんな事なんぞどこ吹く風なのか老人は速く用意するようにか言わない。

「…できません」

「なんじゃと！？速く用意しろといつとるのが分からのか！！」

エイミイの言葉に老人の怒りが頂点に達したのか彼女を突き飛ばし、見下し、そして罵倒しながら命令していた。だが

「そこまでにしていただけませんか」

リンディがそれを止めた。それに老人はまだ怒り心頭という顔でリンディを睨んだ。エイミイの次はリンディを罵倒しようとしたのだが

「私の部下に手を出して無事でいられると思いますの？」

「っ！？」

リンディの気迫　提督という年月が見た目とは裏腹に（作者「殺気！？」）長い彼女は有無を言わず相手を黙らせるほどの気迫を持っていた。

「もしもこれ以上私の船で勝手な事をするというのであれば、それ相応の処置をとらしていただけですが」

「っ！！お、おい誰かこいつを拘束しろ！！」

老人はアースラの局員クルーに命令するが、彼らはリンディの部下　そして彼女を敬愛している。さらには自己中心的な老人の言葉に耳を貸す者などいなかった。

「この駄目局員共め！！こ、こつなったらワシ自らが奴らを拘束してやる！！」

そう言つて転送ポートに向かつた老人　それを止める者はいなかつた。正確には『止める気がある』者はいなかつた。

#### 第四十四話 青眼と機械 そして疲労（後書き）

剣賭「なんで俺スクラップを…」

剣賭のマシンナーズは机の上に置いていたんだけど、マシンナーズ・ブレードを出してあの2人をおびき出した後、取るデッキを間違えたんだ。

ツバキ「けど凄いわね…」

シゲル「特別執務官って何だ？」

警察で言う警部補と警部の違いみたいなの、まあ精鋭みたいなもの。一般執務官や局員はA・O・Jを、その上の精鋭局員はヘルウェイ等の所為すデッキ。

そしてなのは達民間協力者や特別な執務官などは自分オリジナルデッキを持っている。

特別執務官は実質提督並の権力を持っている。ただし使うカードはそれほど知られていないし、姿を見た人もそれほどいない。

ユウ「海馬さん…相変わらずだ」

ちなみに調和の宝札からの一連のコンボはニコ動のある動画から頂きました。ついでにその動画からいくつかのシンク口の口上も頂いています。

紫苑「流石伝説の決闘者だね」

ユウ「それであのお爺さんは？」

……次回予告しますね

ツバキ「え？」

次回予告：シゲル

カミューラとの戦いから時間が流れた。最近時間の流れが速い様な気がするのは気の所為か…？

レッド寮の耐震強化工事の為、暇を持て余していた俺とユウだったが、戻ってきた剣賭のアイデアで勝負することにした。

剣闘獣の展開で剣賭を追い詰める俺に対し、剣都は効果破壊や攻撃力で攻めてくる。

一進一退の攻防　久々の強敵だ！！

次回第四十五話　剣闘VS機甲　その前に全弾発射？前編  
最強カードは『剣闘獣ガイア・ヘッド』

シゲル「タイトルのその前につて何だ？」  
短い話を入れた、それに関して。

第四十五話 剣闘VS機甲 その前に全弾発射？前編（前書き）

祝PV300、000突破！！

……実を言うと200、000の時は見逃していたんだよね。

ついでにユニークも30、000人超えそうだからな…なんか記念話作るか



## 第四十五話 剣闘VS機甲 その前に全弾発射？前編

紫苑VSカミューラから9日後。

紫苑が感情を手に入れた事に関して更に学園内の紫苑の人气が上がっていた。しかし紫苑はそんな事はどこ吹く風で十代達とよく過ごしていた。

その間に管理局の介入は特になかった。紫苑に聞いたところによるとアースラの通常戦力としては恐らく世界の矛盾と同じ人数しか残っていないようだ。

え？時間が飛びすぎ？その間のセブンスターズ戦やイベントは？

……………ダイジエストでどうぞ。

VS正司

簡単に言うと万丈目が勝った事に納得しない万丈目のもう一人の兄である正司が他の奴と勝負する様に言った。

そしてその相手が何故かシゲルだった。

シゲル（ATK0の通常モンスター）VS正司

「デュエル!!!」

シゲルのハンデはモンスターは攻撃力0の通常モンスターのみ。ちなみにモノの20分で完成させた。

シゲルのターン

「俺のターン!!!俺は凡骨の意地を発動!!!更にカードを伏せ、<sup>ソウル</sup>魂虎<sup>タイガー</sup>を守備表示で召喚!!!ターンエンド!!!」

魂虎 / DEF 2100

シゲル

LP 4000 手札 3枚

魂虎（DEF 2100）

凡骨の意地 伏せカード 1枚

正司のターン

「俺のターン!!!フハハハハハ!!!俺は融合を発動!!!手札のロード・オブ・ドラゴンとラグナロクを融合!!!」

やはり初心者とは思えないドローだ。初ターンで正司はデッキのエースを特殊召喚した。

「融合召喚！！竜魔人キングドラグーン！！」

キングドラグーン / ATK 2400

フィールドにドラゴン族サポートモンスターとしては上級なモンスターが現れた。

すると正司は手札のドラゴンを次々に出した。

「キングドラグーンの効果で手札のダイヤモンド・ドラゴンを特殊召喚！！そして神龍ラグナロクを通常召喚！！」

ダイヤモンド・ドラゴン / ATK 2100

ラグナロク / ATK 1500

一気に3体のモンスターを並べた。それに観客席の十代達は驚いているがシゲルは平然としている。

「バトルフェイズ！！キングドラグーンで魂虎に攻撃！！」

「……………」

シゲルの場の壁モンスターが破壊された。しかしシゲルはそれに無反応だった。そのことに気付かないのか、ご機嫌に正司は更に二体のモンスターで攻撃宣言を行った。

「フハハハハハハハハ！！2体のモンスターの攻撃！！」  
「……………はぁ」

シゲル / LP 4000 400

3000越えのダメージを喰らってもシゲルはため息一つしかして無かった。  
それに流石に正司も違和感を感じていたが手札のカードを見てほくそ笑んだ。

「カードを一枚伏せてターンエンド！！（伏せたのは聖なるバリア……これで俺の勝ちに揺るぎは無い！！）」

正司

LP 4000 手札 0枚

キングドラゴン (ATK 2400) ダイヤモンド・ドラゴン)

ATK 2100) ラグナロク (ATK 1500)

伏せカード 1枚

シゲルのターン

「俺のターン！！凡骨の意地の効果発動！！ドローしたのは通常モンスター、よって更にドロー！！引いたのは通常モンスター！！ドロー！！ドロー」



フルバースト  
全弾発射

通常罨

このカードの発動後、手札を全て墓地へ送る。

墓地に送ったカードの枚数×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

シゲルの攻撃力0のモンスターしかいないデッキで考えたハンドバ  
ーン。

それにより終了したのだが　あまりにも短かったのでカット。

他にも無敗と言われた伝説のデュエリストやアマゾネスと言われて  
いるデュエリストと鍵をかけて闘ったり、偽物の探偵団なども現れ  
た。

え？なんで出さないのかって？

……セブンスターズ  
原作以外全部ワンキルだからだ。

そんなこんなで残り2人となったセブンスターズ。

だが他にも数日後に控えた学園祭も忙しい状況だった。それぞれが  
夏祭りの時みたいに準備を始めようとしていたのだが

「え？工事？」

レッド寮食堂で食事をしていた生徒は大徳寺の言葉に顔を見合わせていた。

「レッド寮の白アリ検査の時に耐震強度に問題があると分かったのニヤ。荷物はそのまま置いといて構わないのですが、聖牙君と獣斬君、それと今イエロー寮にいる剣賭君の部屋は一階に移ってもらうことになったのニヤ」

「ん？」

「俺達が？」

その言葉に部屋主である2人が反応した。すると分かるように大徳寺が説明を始めた。

「部屋から白アリの巣が見つかったので、修繕するのにも時間がかかるからいつそのこと完全に移ってもらうことにしたのニヤ。後で荷物をまとめとくように」

翌日

カンカンカン！！

ドドドドドドドド！！！

そんな音がレッド寮に響いていた。朝の8時から工事会社の人が来て足場を組んでから  
大徳寺の言うように全体的にレッド寮の補強工事が始まった。

「こいつは本格的だな……」

「だね。夕方まで入れないって言うからどうする？」

ほとんどの生徒は学園祭の準備の手伝いなどに向かっていた。あまりに人数が多すぎるのでこれ以上来なくていいといわれるほどだ。そんな時はぶられた2人だった。

「なあゝにしてんだ？」

「あ、剣都」

そうこうしているうちにカミューラを連れて剣都がやってきた。連絡で戸籍を作るのに手間取っていたから帰るのが遅れると言っていたのだがやっと戻ってきたようだ。



「見ての通りレッド寮の補強工事だな…暇を持て余してんだ」  
「……………」

シゲルの言葉を聞いて剣都は何かを思いついたようにニヤリとした。  
傍から見ればただの悪い顔だ。

「シゲル、なら一戦交えるか？」  
「ほう…いいな」

そして始った

「デュエル!!」

シゲルVS剣都

シゲルのターン

「俺のターン!!俺は剣闘獣ホプロムスを捨てバウンドを特殊召喚  
!!更にシンクローンリゾネーターを召喚!!行くぜ、シンクロ!  
!」

「!!速い!!」

手札消費3枚で初手にレベル5のシンクロを行った。

「レベル4のバウンドにレベル1のシンクロンリゾネーターをチューニング！―獣の魂を守りし者よ、今を生きる者達を滅びから守りたまえ！―」

4 + 1 = 5

「シンクロ召喚！！剣闘獣ガイア・ヘッド！！」

ガイア・ヘッド / DEF 2100

フィールドに恐竜のパキケファロの様なモンスターが現れた。今までに使った事のないカードだ。

「ターンエンド！」

シゲル

LP 4000 手札3枚

ガイア・ヘッド (DEF 2100)

剣都のターン

「俺のターン！！（…口上から察するに戦闘で守る様なカード…おもしれえ…！！）手札のマシナーズ・エアロイドは相手の場のみモンスターが存在する場合手札から特殊召喚することができる

「!!」

マシンナーズ・エアロイド

星3 / 地属性 / 機械族 / ATK 1200 / DEF 1000

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

フィールドに巨大な飛行船が襲来して来た。そしてその上に細長い刀の様なモノを持った機械兵がたたずんでいた。

「更に手札のマシンナーズ・カーネルはマシンナーズと名のついたモンスターが特殊召喚に成功した時、特殊召喚することができる!!」

マシンナーズ・カーネル

星2 / 地属性 / 機械族 / ATK 800 / DEF 100

「マシンナーズ」と名のついたモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚することができる。

「マシンナーズ・カーネル」はフィールドに1体しか存在できない。

「そしてマシンナーズ・リサイクラーを召喚!! 行くぜ!!」

レベル3のマシンナーズ・エアロイドとレベル2のマシンナーズ・エアロイドにレベル2のマシンナーズ・リサイクラーをチューニング!!

無音を尽き破り轟音よ、全てを貪り喰らい尽くせ!!」

3 + 2 + 2 = 7

「シンクロ召喚！！マシンナーズ・グールイーター！！」

マシンナーズ・グールイーター / ATK 2400

フィールドに大きな口を持った鱐ワニのようなモンスターが現れた。  
すると剣賭の墓地のカードが2枚飛び出した。

「マシンナーズ・リサイクラーの効果！！墓地のカーネルとエアロイドを除外しカードを2枚ドローする！！」

僅か手札消費1枚でシンクロを行った剣都と手札3枚を消費してシンクロを行ったシゲル。しかし、剣都は明らかにある事が気になっていた。

それは

「おかしいわね」

「え？」

観戦していたユウとカミューラ。カミューラが口走った言葉にユウが首を傾けたのだが、今まででどこかおかしい所なんてなかった気がするのだ。

「あのシゲルって言う奴は少なくとも剣賭や紫苑と同じぐらいかそれ以上の腕前なんでしょ？」

「うん、そうだけど…」

「そんな男が、手札消費3枚でモンスター1体を出すと思う？」

そう、先日の十代VSカミューラ戦の時に十代は手札消費4枚でテンペスターを召喚した。その時剣都は手札消費の激しいモンスターを序盤で出して破壊された時のダメージは計り知れないという事を言っていたのだ。

「カードを一枚伏せ、バトル！！マシンナーズ・グールイーターでガイア・ヘッドに攻撃！！グリードイート！！」

大きな口を開けたグールイーターに飲み込まれるようにガイア・ヘッドが食われてしまった。しかし、その時グールイーターの腹の部分が光り出した。

「ガイア・ヘッドの効果発動！！このカードが相手によって破壊された場合、デッキから剣闘獣と名のついたモンスターを2体特殊召喚する！！来い、ベストロウリイ！！エクイテ！！」

ベストロウリイ / ATK 1500

エクイテ / ATK 1600

フィールドに2体の鳥獣族モンスターが現れた。するとその2体の鳥獣が生み出した突風が剣都に襲いかかった。

「ベストロウイイの効果！！特殊召喚成功時、そのセットカードを破壊し、さらにエクイテの効果で墓地のバウンドを手札に加える！」

そして破壊された剣都の伏せカードはツイン・ボルテクスだった。しかしそんな事は剣都の許容範囲だった。

「シゲル、残念だったな！グールイーターはその名の通り食い意地が汚いんでな！！このカードが相手モンスターを戦闘で相手モンスターを破壊した時、更に攻撃することができる！！これに回数制限は無い！！」

マシンナーズ・グールイーター

シンクロモンスター

星7/地属性/機械族/ATK2400/DEF1500

チューナーモンスター+「マシンナーズ」と名のついたチューナー以外のモンスター2体以上

このモンスターは相手モンスターを戦闘で破壊した時、更に攻撃することができる。

このモンスターが破壊された時、墓地に存在するレベル4以下の地属性・機械族モンスターを1体特殊召喚することができる。

「追撃のグリードイート!!」

「剣賭、残念だったな! ガイア・ヘッドが破壊されたターン一度だけ相手の攻撃を無効にする効果を持っている!! 追撃が成功しない場合グールイーターの効果も発動しない!!」

剣闘獣ガイア・ヘッド

シンクロモンスター

星5/地属性/恐竜族/ATK1200/DEF2100

チューナー+「剣闘獣」と名のついたチューナー以外のモンスター1体以上

このモンスターはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このモンスターが相手によって破壊された場合デッキからレベル4以下の「剣闘獣」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚することができる。

このモンスターが破壊されたターン、相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする事ができる。

「チツ、口上の守りつてそっちか…俺はターンエンドだ!!」

剣賭

LP4000 手札4枚

マシンナーズ・グールイーター(ATK2400)

伏せカード無し

シゲルのターン

先程カミューラはシゲルのハンドアドバンテージが大きいと言ったが、場に2体のモンスターが残されている今の状況ではそうでもない。

「俺のターン！！（伏せカードがない…やっぱりガイザレスの効果破壊警戒だろうな。分かっている伏せるような真似はしないでだろうし…が、なら今攻めるしかないな）俺はラクエルを通常召喚！！」

ラクエル / ATK 1800

フィールドに緑の鳥人、青い鳥人、そして赤い炎の獣人がそろった。流れはシゲルに来ていた。

「そして場のベストロウリィとエクイテをデッキに戻し、ガイザレスを召喚！！」

『ふむ…一気に決めるかけるかの』

ガイザレス / ATK 2400

「まあ、そうだな。ガイザレスの効果発動！！グールイーターを破壊する！！」

「クツ…！！だが、グールイーターの効果発動！！墓地のリサイクラーを召喚！！」

フィールドに再びマシンナーズ・リサイクラーが現れた。これで攻撃で4000を超える事は無くなった。

「バトル！！ラクエルでリサイクラーに攻撃！！そしてガイザレスで直接攻撃！！」



「グッ……!!」

剣賭 / 4000 1600

一気にライフの半分を削ったシゲル。しかも序盤の手札アドバンテージも既になくなっていった。その上剣闘獣特有の効果もある。

「そしてガイザレス、ラクエルをデッキに戻す!!ラクエルの効果でダリウスを、ガイザレスの効果でラクエル、ダーツを召喚!!ダリウスの効果!!墓地のホプロムスを特殊召喚!!さらにラクエルは自身の効果で攻撃がアップし、ダーツの効果でデッキからダーク・リゾネーターを召喚!!」

ラクエル / ATK 1800 2100

ダーツ / ATK 1500

ダリウス / ATK 1700

ホプロムス / DEF 2100

ダーク・リゾネーター / DEF 300

流石としか言えないような展開でモンスターゾーンを全て埋めてしまった。

「……………」

その光景に先程ハンドアドバンテージが酷いと言っていたカミューラムもユウも絶句していた。しかしこれで終わりではない。『剣闘獣』が『ラクエル』を含めて『3体』存在している。

「ラクエル、ダーツ、ホプロムスをデッキに戻し剣闘獣ヘラクレイノスを攻撃表示で特殊召喚する!!」

ヘラクレイノス / ATK 3000

フィールドに巨大な剣と楯を持った炎を身に纏った巨大なモンスターが現れた。さらに残された馬の獣人と音叉を持った悪魔が飛び上がった。

「レベル4のダリウスにレベル3のダークリゾネーターをチューニング!! 獣の魂を受け継ぐものよ、雷鳴とともにその怒れる尾を振り上げる!!」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚!! 来い、ヴォルテック・テール!!」

ヴォルテック・テール / ATK 2200

「ターンエンド!!」

シゲル

LP 4000 手札 5枚

ヘラクレイノス（ATK3000） ヴォルテック・テール（ATK2200）  
伏せカード無し

### 剣都のターン

「（おいおい……あいつが味方でよかつたぞ……）俺のターン！！」  
剣都はシゲルの僅かな手札消費とその速さに心の中で引き攣りながらカードを引いた。流石に此処までされると普通なら戦意を失ってしまう。

「マシンナーズ・ソルジャーを攻撃表示で召喚！！効果で手札のマシンナーズ・バックアップを特殊召喚する！！」

マシンナーズ・ソルジャー / DEF1500  
マシンナーズ・バックアップ / DEF800

フィールドに片腕が剣の機械兵士と固定砲台の様なモンスターが現れた。しかしそれではヘラクレイノスどころかヴォルテック・テールに勝てない。

「そして手札のマシンナーズ・ブルースとマシンナーズ・フォートレスを墓地に送り、フォートレスを特殊召喚する！！」

フォートレス / ATK2500

今度は軽戦車の様なモンスターが現れた。このモンスターは戦闘破壊されればカードを破壊する効果を持っている。そしてこの攻撃力

「バトル！！フォートレスでヴォルテックテールに攻撃！！」  
「クッ……！！」

シゲル / LP 4000    3700

「ターンエンドだ！！」

剣賭

LP 1600    手札 0枚  
マシンナーズ・ソルジャー (DEF 1500)    マシンナーズ・バ  
ックアップ (DEF 800)    マシンナーズ・フォートレス (AT  
K 2500)  
伏せカード無し

シゲルのターン

「俺のターン！！（伏せカードは無し、向こうで注意すべきはフォ  
ートレスの破壊効果……が、こいつあ……）俺は剣闘獣バウンドを召喚  
し効果発動！！墓地のヴォルテック・テールを除外し、バウンドが  
フィールドから離れた時特殊召喚する！！」

フィールドにボール状の獣が現れた。それと同時に墓地の雷の獣が  
消えた。

「手札のスレイブタイガーは自分の場に剣闘獣と名のついたモンスターが存在する時、特殊召喚することができる！！そしてこのモンスターはリリースすることで場の剣闘獣をデッキに戻し、剣闘獣を特殊召喚することができる！！バウンドを戻し、ベストロウリイを特殊召喚！！」

『シゲルよ、何度出す気なのだ？』

ベストロウリイ（ATK1500）

ウリイが最近過労過ぎではないのかとダークに話していたのはシゲルは知らない。

しかしシゲルは気にせず進めた。

「あれ？剣賭帰ってきたんだ」

「けどなんで2人が戦ってるの…」

「レッド寮の修繕で部屋に入れないから暇つぶしにだってさ」

ブルー寮からレッド寮に向かっていたツバキと紫苑、それとジュンコに準備を終えたのか学園祭の手伝いをしていたはずの十代達もやってきた。

「結構接戦なんだな。二人とも慎重に行ってるみたいなんだな」

隼人が先程の剣闘獣の大量展開を見ていないため、その言葉を聞いたユウとカミューラは

「……………」

「ど、どうしたんすつか？」

遠い目をしていた。

「バウンドがフィールドから離れたため、ゲームから除外されてるヴォルテック・テールを召喚！！そしてフィールドのヴォルテック・テールとベストロウリイをデッキに戻し再びガイザレスを召喚！！」

「……………もういいわい」

ガイザレス / ATK 2400

最早何度も行われた展開にウリイはため息をついた。それと同時にこの状況を諦めた。

するとガイザレスの起こした旋風が剣賭の場のモンスターを

「墓地のマシナーズ・ブルースの効果発動！！」

「グオ！？」

「ガイザレス！？」

巻き起こした旋風をも切り裂く機械の武士が現れた。それによりガイザレスは真つ二つに切られてしまった。すると剣都は墓地のモンスターを一体取り出した。

「こいつは自分フィールド上のカードが破壊される効果が発動した時、自分のフィールドのモンスター1体破壊し特殊召喚する！！」

マシンナーズ・ブルース

効果モンスター・チューナー

1 / 地属性 / 機械族 / ATK100 / DEF100

このカードが墓地に存在する時、自分フィールド上のカードを破壊する効果が発動した場合、そのカードを無効にし破壊することができる。

その後自分フィールド上のモンスターを破壊し、このカードをフィールド上に守備表示で特殊召喚することができる。

「マシンナーズ・ブルース」の効果はデュエル中に1度しか発動できない。

マシンナーズ・ソルジャーが消えると、マシンナーズ・カーネルの様な刀を持った侍が現れた。





ドを一枚ドロ―する!!」

マシンナーズ・バツクアップ

効果モンスター

星4/地属性/機械族/ATK400/DEF800

「マシンナーズ・バツクアップ」以外の「マシンナーズ」と名の付くモンスターがいる場合、相手の攻撃宣言時攻撃対象を表側守備表示のこのカードに移す事ができる。

このカードが戦闘で破壊された場合カードを一枚ドロ―できる。

マシンナーズ・ブルースに向かっていた炎が直角に曲がり隣にあったマシンナーズ・バツクアップに直撃して爆散した。

「チツ…まんまと乗せられた訳か…カードを伏せターンエンド!!」

シゲル

LP3700 手札3枚

ヘラクレイノス(ATK3000)

伏せカード1枚

第四十五話 剣闘VS機甲 その前に全弾発射？前編（後書き）

ユウ「シゲルが万丈目の後で戦ったってこと？」

そう言う事。実を言うと凡骨&全弾発射のイメージは湧いていたが、入れるタイミングが無くて…このままこのデッキをシゲルの第二デッキにする気だった

シゲル「使いたくないぞ、あんなデッキ」

大丈夫、却下したから。実を言うとユウの異次元デッキを作った時になんとなく其々第二デッキ…まあ当時だから3人の第二デッキを考え、ツバキのも考えていたツバキ「どんなの？」

そっちはオリカオリーのデッキで本編で採用してるから言わないけど、すつごく中二病だった。

ツバキ「……………」

まあ、まだ制作段階だから。よければそのネタも応募しようかな…

剣賭「応募者いるのか？」

……………最近一人の方しか感想書いてくれないから止めよう。

剣賭「で、俺とシゲルか…」

ちよくちよく世界の矛盾のメンバーで戦いを入れてみる。この勝負以外でまだ戦った事のない組み合わせは…

ユウ×ツバキ シゲル×ツバキ シゲル×紫苑 ツバキ×剣賭 剣賭×紫苑

結構少なかった（。・。・）てかツバキが多い

5通り…そのうちいくつかもう決まってるから、残りはちよくちよく今回みたいな感じで入れていくか

剣賭「で、何体精霊を出す気なんだ？」

多分最低で残り一体。正直言つと精霊を作り過ぎた感が否めないが  
…まあ何とかするしかないね

紫苑「しっかりして…」

ユウ「ねえ、前書きの記念話ってどうするの？」

次のうちのどれかか選ばうと思う

- ・ユウとツバキの喧嘩
- ・シゲルとジユンコデート？
- ・紫苑と十代のお泊まり会
- ・シゲルの過去
- ・墓参り

剣賭「俺の名前が選択肢にない件について」

一応出番はある。けどこの中か…もしくは新たなネタで記念話作る  
多分この中から書きやすいのを選んで書きますね

オリジナルカード

マシンナース・エアレイド

マシンナース・カーネル

マシンナース・グールイーター

剣闘獣ガイア・ヘッド

マシンナース・ブルース

マシンナース・バックアップ

次回予告：剣賭

また俺か…

暇つぶしで始まったシゲルとのデュエル。だがその二介入してくる

バカが

勝負を邪魔されて俺は黙っていられるほどお人よしじゃない…

まあ、色々あって勝負の後にいつの間にか工事が終わっているにユウが気付いたが 残念だ、それはただの工事じゃないんだぜ

次回第四十六話 剣闘VS機甲 この空間はプライストレス 後編  
最強カードは『マシンナーズ・ブルース』

第四十六話 剣闘VS機甲 この空間はプライスレス 後編(前書き)

安西先生…感想が…欲しいです

第四十六話 剣闘VS機甲 この空間はプライスレス 後編

さてと、今回はシゲルが序盤のアドバンテージを逆転した所で終わったけどどうなるかな…って、ボクは誰に話しかけてるんだ？（byユウ）

シゲル

LP3700 手札3枚

ヘラクレイノス（ATK3000）

伏せカード1枚

剣賭

LP1600 手札1枚

マシンナイズ・ブルース（DEF100） マシンナイズ・フォー

トレス（ATK2500）

伏せカード無し

剣都のターン

「俺のターン！！俺はマシンナイズ・ジェットを攻撃表示で召喚！そしてレベル7のマシンナイズ・フォートレスとレベル3のマシンナイズ・ジェットにレベル1のマシンナイズ・ブルースをチェーンング！！」

全ての駆動音を狩りし  
「そこまでだ!!」

剣賭がシンク口を行おうと口上を上げていたのを割り込んできたのはアースラから飛び出してきた老人だった。その背後に少なくとも30人はいるだろう成年女性少年少女様々な年齢の男女がいた。

あの後老人は管理局本部から選りすぐりの局員を連れて来たのだ。

彼の権力からすればそれぐらいどうってことないのだ。

「だ、誰っすか!?!」

「誰なのか言わなくても分かるじゃない!?!」

翔の言葉にジュンコが突っ込みを入れた。空中に浮かんでいる人間ということとはもうあれしかない。

「チツ…管理局か…」

「2人とも、一時中断ね」

「そうだよ、皆は下がってて」

「いくよ!」

各々が管理局に挑もうとしていた　ただ一人、剣賭を除いて

「死神よ、生きとし生ける者に死の団歌を歌え!?!」

「「「「え?」「「「「」」」」」

シンク口の口上を続けていた剣賭に4人　いや、その場にいた全員が驚きながら剣賭を見た。

「シンク口召喚!?!マシンナーズ・リニアパー!?!」



彼の背後にはボロボロの黒いマントに身を包んで巨大な鎌を持った機械の死神が漂っていた。見た感じが天刑王ブラック・ハイランダ―を機械化したような感じだった。

「テメエ等…勝負の邪魔するなああああああ！！！！！！」  
「っ！！があああああああ！！！！！！」

剣賭の怒声と共にマシンナーズ・リアパーが持っていた巨大な鎌で近くの局員を切りかかった。それに反応が遅れた局員は切りつかれた。

ギリギリで身を引いたおかげか切り口は浅いが、切り裂かれた所から赤黒い血が流れ出した。それに局員たちは青い顔をしだしたのをシゲルは見逃さなかった。

「（血をビビってる…？いや、血を流すほどの怪我に恐れてる…まさか…いや、よく考えるとそうだ。『奴らと戦っても怪我をしてない』）」

そう、今までアースラの局員達と戦ってもユウ達は怪我をしてない。精神的に参った間隔があっただけで流血を伴う怪我は無かった。だがデイラ執務官の戦いは死と隣り合わせと言っても過言ではなかった。

それに一つの結論に辿り着いた。

「（なるほど…奴らは訓練や戦闘では怪我をしないなにか仕掛けがあるということか。だから怪我をするのにビビってる…なら）ヘラクレイノス！！バーストブレイカー！！」

「『『『なあ！！？』『』『』」

マシンナーズ・リイバーの事に気をとられていた局員達は突然の火炎攻撃に対応ができなかった。

そして炎が止むとそこには火傷を負った局員と、それを見て更に青くなる周囲の局員達がいた。

「く、クソ！！貴様ら何をしている！！速く」

老人が『なにもせず』、部下に指示をしていた。それを見たユウはため息を尽きながら剣都の方を見た。

「剣賭、ここはどう攻めるが最適？」

「各個撃破だな、まずは向かってくるのはツバキと紫苑でカウンタ―で潰し、次はバックアップを俺が倒す、で最後はうるうるしてるのはシゲル、ユウはあのジジイだ」

剣都は効率的かつ的確な指示を飛ばした。AWで戦局を左右する決断も何度もしてきたためこの中では戦略・決断力に優れていたのだ。

剣都の指示通りまず向かって来た局員をツバキと紫苑で倒し、後方から魔法を使おうとしていたのを剣賭が打ち落とし、その光景にあたふたしている局員をシゲルが沈めた。

「クソ！クソオ！！役立たず共め！！たった5人に何してる！！」  
「ですが！思いのほか手強く」

「今だ！イナ！！」  
『餅つきアタック！！』

老人が説得するように説明していた若い局員に気をとられてる隙にユウがイナを召喚し、老人の背後から攻撃させた。気付かなかった老人は背中を「ボキッ」という嫌な音を立てて吹っ飛んだ。

「ひ、ヒイイ！！！！」  
「ウワアアアア！！！！」

最早パニック状態の局員達は各々怪我人を背負い魔法で転移して行った。

「なんだっただんだ？あれ」  
「さあな、まあ続きだ」

十代の言葉に剣都は素っ気なくそう言つとシゲルと向き合った。そしてフィールドは以下の様だ。

シゲル

LP3700 手札3枚

ヘラクレイノス(ATK3000)

伏せカード1枚

剣賭

LP1600手札1枚

マシンナーズ・リイアバー(ATK3300)

伏せカード無し

「おいおい…攻撃力3300って…」

「俺のデッキで純粋な攻撃力のシンクロモンスターと言えばこいつだ。リイアバーは召喚成功時、相手のフィールド上のモンスター1体を破壊することができる!!!デス・カーヴアル!!!」

マシンナーズ・リイアバー

シンクロモンスター

星11/地属性/機械族/ATK3300/DEF2500

チューナーモンスター+「マシンナーズ」と名のついたチューナー以外のモンスター2体以上

このモンスターはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚はできず、シンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター1体を破壊する事ができる。

このモンスターがフィールドに存在する限り、自分は他のモンスターで攻撃を行う事ができない。

リアバーが持っていた大鎌を振りかざし、そのままヘラクレイノスを真っ二つに断斬した。魔法・畏を使わずに攻撃力3000を誇るヘラクレイノスを破壊した剣賭は流石としかいようがない。

「バトル！！マシンナーズ・リアバーで直接攻撃！！デスサイズ・ガルシユ！！」

「グッ……！！！」

シゲル/LP3700 400

一気に2000ものライフポイント差を縮めた剣賭は残っていた手札を場に伏せた。しかしシゲルのデッキで純粋に3000を超えるモンスターは無く、シルフィやダーク・ガブリアスなどの効果でどうにかするしかないと思われた

剣賭

LP1600 手札0枚

マシンナーズ・リアバー(ATK3300)

伏せカード1枚

シゲルのターン

「俺のターン！！パワー・リゾネーターを召喚！！」

フィールドにいつもの悪魔が白い感じで現れた。以前に一回だけ現れた事のあるチューナーだ。だが、チューナーモンスターだけではどうしようもない。

「手札から剣闘訓練所を発動！！デッキの剣闘獣と名のついたモンスターを1体手札に加える！！バウンドを手札に加え、手札のスパルディクスを墓地に送りバウンドを特殊召喚！！そしてスター・チエンジャーを発動！！フィールドのモンスターのレベルを1つあげるか、下げる事ができる！！パワー・リゾネーターをレベル3にする！！」

スター・チエンジャー

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、以下の効果から1つを選択して発動する。

そのモンスターのレベルを1つ上げる。

そのモンスターのレベルを1つ下げる。

パワー・リゾネーター / 2 3

「レベル4のバウンドにレベル3のパワー・リゾネーターをチューニング！！」

獣の命を喰らいし者よ、今ここに全ての魂を喰らい尽くせ！！」

4 + 3 = 7

「奏でろ、ソウル・ブラック・ドラゴン！！」



「リバース罠、マシンナイズ機甲部隊の回復所発動！！自分フィールドのシンクロモンスターが破壊された時、そのモンスターの守備力分ライフを回復する！！」

マシンナイズ  
キュアエリア  
機甲部隊の回復所

通常罠

相手フィールド上にシンクロモンスターが存在し、自分フィールド上の機械族シンクロモンスターが戦闘で破壊された時発動することができる。  
そのモンスターの守備力分自分のライフを回復する事ができる。

「チツ…その後、ソウルの効果！！攻撃力分のダメージを受ける！！」

剣賭 / LP 1500    4000    700

シゲル

LP 400    手札 1枚

ソウル・ブラック・ドラゴン（ATK 2400）

伏せカード 1枚

剣都のターン

何とかライフを保った剣賭だが、手札・フィールドに何も残ってお



らず次のドローで全て決まる。

「俺のターン…ドロー…！（これは…）」

引いたカード　それは引き金だった。

「カードを伏せてターンエンド…！」

剣賭

LP700　手札0枚

モンスター無し

伏せカード1枚

シゲルのターン

「俺のターン…！（伏せカード…可能性としてはミラーフォースや炸裂装甲…ウリイもヘラクレイノスも出す手が無い…）俺は剣闘獣アन्दルを攻撃表示で召喚…！」

剣闘獣アन्दル / ATK1900

何の効果も無いバニラモンスターだが、アヌビスの呪いやジャステイブレイク等の効果モンスター対象のカードにひっからないため入れてあったのだ。



シゲルの場のモンスターが全ていなくなり、剣賭の手札が2枚になつていた。

各々全く状況が読めていない。それに剣賭が説明をした。

「逆転への引き金は俺の墓地に機械族モンスターしかおらず、ライフが700以下で直接攻撃を宣言された時発動する。相手の攻撃表示モンスターを全て破壊し2枚ドロウするカードだ！」

ラスト・トリガー  
逆転への引き金

通常罨（準制限）

墓地に存在するモンスターが機械族モンスターのみで、

自分フィールド上にモンスターが存在せず、

自分のライフが700以下で相手が攻撃宣言したとき発動することができる。

攻撃表示で存在する相手モンスターをすべて破壊し

自分はデッキからカードを2枚ドロウする。

「おいおい…俺は手札からグラディアル・リターンを発動！！墓地のバウンド、アングル、スパルディクスをデッキに戻し、カードを1枚ドロウ！！」

引いたカード　それはデュエルモンスターズではメジャーと言われ一時期禁止にさえなつた死者蘇生だった。

「死者蘇生発動！！墓地のヘラクレイノスを特殊召喚！！」

ヘラクレイノス（ATK3000）

そしてフィールドに巨大な焔のトカゲが現れた。しかしメインフェイズ2の為もうバトルを行うことはできない。

シゲル

LP400 手札0枚

ヘラクレイノス(ATK3000)

伏せカード1枚

剣都のターン

「俺のターン！！（ヘラクレイノスにパワーで挑むならリアバー並のモンスターを呼ばなくては勝てない…が、あいつを呼べば…）墓地のマシナーズ・ジェットの効果発動！！このカードを除外し俺はマシナーズ・ゼロを攻撃表示で特殊召喚！！」

マシナーズ・ジェット

効果モンスター（制限）

星3/地属性/機械族/ATK1000/DEF1200

墓地に存在するこのカードを除外することで自分の手札の「マシナーズ」と名のついたモンスターを1体特殊召喚することができる。

マシナーズ・ゼロ/ATK0

剣賭の場に現れたのは

……？

「なにも来ないけど…」

召喚されたはずなのにモンスターが現れないのにジュンコが首を傾げていた。すると剣都はあざ笑うかのように辺りを見回した。

「何処見てんだ？そんなとこ見てもいないぜ」

「え？どこにいるんだ？」

十代が聞くと剣都は苦笑いをし、指を突き上げた。その先は　空。  
しかし、そこにもなにもなかった。

「マシナーズ・ゼロは……宇宙にいるんだぜ」  
「宇宙……宇宙……宇宙……」  
「宇宙……！！？」  
「」「」「」「」

そう、マシンナーズ・ゼロは宇宙に浮かぶ衛星　地上から目視なんてできるわけがなかった。

「そしてマシンナーズ・ゼロが召喚に成功した時、墓地のマシンナーズを効果を無効にし、攻撃力を0にして特殊召喚する事が出来る  
！！」

マシンナーズ・ゼロ

効果モンスター

星5/地属性/機械族/ATK0/DEF0

このモンスターが手札から召喚・特殊召喚に成功した時墓地に存在する

「マシンナーズ」と名のついたモンスターを2体まで選択し、フィールドに攻撃表示で特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃力は0になり、効果は無効化される。

また、そのモンスターがフィールドから離れた時、そのモンスターは除外される。

「効果により墓地からマシンナーズ・フォートレスとマシンナーズ・ブルースを特殊召喚！！そして手札からマシンナーズ・ソルジャーを通常召喚！！」

マシンナーズ・フォートレス/ATK2500

マシンナーズ・ブルース/ATK1000

マシンナーズ・ソルジャー/ATK1600

フィールドに戦車と侍、そして機械兵が現れた。ブルースがいるということはシンクロ召喚でヘラクレイノスを破壊してくるだろうが

「（俺の伏せカードは剣闘の咆哮…まだ何とかなる）」

融合剣闘が破壊された場合デッキから剣闘獣を呼びだす罫カードだ。それを使えればまだ生き残れる可能性があった

「レベル7のマシナーズ・フォートレスにレベル1のマシナーズ・ブルースをチューニング！」

そう、使えばだ。

『行ってまいりますぞ！！我が主！！わが魂を礎に勝利の道を切り開くぞよ！！』

「行って来い！！」

マシナーズ・ブルースが切り裂くように刀を振うとそこから一輪のリングが現れ、それがマシナーズフォートレスを包んだ。

「機械の魂を持つ翼竜よ、その鋼鉄の翼で仲間を敵の脅威から守りたまえ！！」

「シンクロ召喚！！クロック・ゴールド・ドラゴン！！」

『グルアアアアアアアアアア！！！！！』

「クロック！？」

リアバーの様な効果破壊系や攻撃で攻めるタイプだと思っていたのだが、来たのはあまり意味を成さない相手の表側の魔法・罠を破壊するモンスターだ。

「あまり見せてないが、クロックには第二の効果があるんだよ！！自分フィールド上のマシンナーズ・ソルジャーとマシンナーズ・ゼロをリリースしクロックは直接攻撃ができる！！」

「なあ！！！？」

そうしてるうちにマシンナーズ・ソルジャーがバラバラになると、部品がクロックへと飛んで行った。

「バトル！！クロック・ゴールド・ドラゴンでプレイヤーに直接攻撃！！ジェノサイドイグニッション！！」



「……………はあ、負けだ」

シゲル / LP4000

「危なかったぜ…最後のターンにゼロ引けなかったら負けてたぞ」  
「それよりも、クロックの直接攻撃の代償大き過ぎじゃない」

紫苑の言うとおり自分のフィールド上のモンスターを2体支払つての直接攻撃だからボードアドバンテージはおおきい。  
「けどな」と苦笑いしなら剣賭がクロックのカードを取り出した。

「案外俺のデッキだとフィールドにモンスターが溜まるんだ。フィールドのモンスターを取り除いて発小津するカードが十分生かされるから入れてんだよ」

「そうなんだ…ところで、このモンスターは…」

そう言ったユウの目線の先

全員が見るとマシナーズ・ブルー

スが主と共にいる従者の様に片膝をついていた。

『拙者はブルースと申す。我が主の為に推参されたし』

「……やっぱ主って言うのは俺の事か…まあいいや。これから頼むぜ、ブルース」

『ハッ！！』

返事をしたブルースは剣賭の持っていたカードに戻って行った。なぜか嵐の様な精霊だった気がするが

「あ、いつの間にか工事終わってんだな」

「ん？ああ、あれな。実を言うと」

何処かの路地

イナの攻撃によって腰の骨が砕けたあの老人が壁に寄り掛かって何とか立っていた。

「クソオ…あの餓鬼ども……こうなればあの世界を……！！」  
『見つけた』

ぶつぶつと苛々しながらなにかを言っていた老人の背後から少女の声で誰かが声をかけた。

「っ！！？」

老人が振り返るもそこには誰もいない。幻聴だと思った老人は急いで管理局の本部へ連絡を入れ救難を要請しようとしていた。

ただ老人はあまり魔力が無いため通信機器で通信する必要があった。だから懐から携帯の様な通信機器を取りだ

「！？」

『あなたにこれはもう必要ない』

手に持っていたはずの通信機器が消えたのに驚いていると目の前の路地の影から誰かがそう言った。さつき背後で聞こえた声と同じだった。

「貴様何者だ！？」

『知る必要はない。来て』

その少女の声は左腕のディスクに一枚のカードを置いた。その時西日が差しこみ少女の姿が

「……き、貴様がなぜここに！？こんな辺境で貴様が」

『さようなら』

少女がそう言い残し、路地の闇の中へと消えていった。そこに残さ

れていたのは

ん？なんだこれ…う、うわあああああ！！！！

おい、どうしたんだ？こんな夜中に…

ひ、人が死んでる！！そ、それも　　！

な、なんだと！？警察！！警察だ！！

バラバラ 頭胴脚腕分断された老人が　　いや、老人だったモノが残されていた。

再び戻ってレッド寮　　の地下

「おいおい…金かけ過ぎだろ」

そう言ったシゲル。彼が今いるのは一階に移された剣賭そしてユウ・シゲルから繋がってる地下に存在する周囲が無機質な金属に囲まれた『箱庭』とも言える空間だった。

しかしその大きさは半端無く、小学校の体育館以上　　少なくともレッド寮の範囲より広い空間だ。

「わあ…すごい…！」

「かつこいいぜー!!」

十代とユウは目を輝かせ部屋を見回していた。他にも剣賭や翔、隼人、明日香、ジュンコ、ももえ、ツバキ、紫苑、カミューラがいる。

ちなみに剣都と紫苑は部屋にあったコンソールを叩き、AWのデータベースと接続していた。そうすればいろいろと便利なのだ。

ちなみになぜレッド寮の地下にこんな空間が『あった』のか

「おし、これでいいはずだ」

『あった』のではない、『作った』のだ。

先程まで行っていた耐震強化の工事は実はAWがこの秘密の空間を作るための艱装工事だったのだ。

数分前：剣都の部屋

「俺かユウの部屋のパソコンにはカードを読み取るソフトがインストールされているんだ。そこでユウならスピット、シゲルならソウル、ツバキはカオス、紫苑はファンのカードを読み取ればいいんだ。こんなふうに」

そう言つて剣都は持つていたクロックのカードをUSBで繋いだカード読み取りの装置にセットした。すると

「あら？此処の畳…」

ももえが部屋の端つこの畳が音もなく壁の中に吸い込まれていくのを目撃した。若干だが2つの部屋の高さが畳が数センチ低いのだ。そのスペースに畳が吸い込まれていくのだ。

「で、中に入ってみる」

剣都の言つとおり中に入って行く各々。そこは2〜3メートルほどの螺旋階段で途中も一つの部屋と繋がっている分岐を曲がった。そして

「で、この扉は自動で開く」

左右に分かれた扉の中にこの空間があった。

回想終了

一同は一面に表示されている巨大なディスプレイを見ていた。 剣賭

の言葉と同時にぐらにディスプレイに砂嵐が走りはじめていたのだが、徐々に無くなり

『おや、繋がった様ですね』

「山本さん！」

AWの社長室にいる山本と繋がった。すると席から立った剣都はディスプレイの前にあるいて行った。

「山本、変わりは無いか？」

『ええ、ちょうど紫苑様から要求されたデータの雛型もお送りした所です。他の必要なデータは明日の朝までにはすべて送信できるはずです』

山本の言葉に剣都は満足そうに頷いた。AWが保管していた管理局のデータ、紫苑が要求したデバイス代わりのディスクのメンテナンスデータ、他に必要なデータなどを送ってもらえれば

「おっし、じゃあそれで完成だ」

そう、此処が

「俺達の基地が」

第四十六話 剣闘VS機甲 この空間はプライスレス 後編（後書き）

シゲル「AWってすげえな」

ちなみにこのアジトの伏線はアラエルVSザファイラ戦の時の剣闘の言葉がフラグでした。

ユウ「ボクは剣闘に勝ったけど、剣都はシゲルに勝って…で、シゲルは僕に勝ったけど、力関係ってどうなってるの？」

一番強いのは剣闘、順にシゲル、ツバキ、ユウ、紫苑

ツバキ「え？私の方が強いのか？」

設定上はそうなる。けどその時の運や状況で色々変わるからね。ユウは剣都に勝てたのはシンクロモンスターを剣闘が使えてなかったから。

そしてツバキの展開力にユウが対応できないからこの図。

あ、それと記念話は以下の内容に決定しました。

題名 第三章終幕 チーム・ノーバディ

紫苑「なにこれ？」

いや、5D'sのチーム名の様な物を考えて、学園祭の時に入れるつもりがトーナメント形式で何話か入れたら話数が恐ろしい事になる…

ツバキ「そういえば何でこれを三章に…？」

旧二章のこれと、旧一章の長さがおかしいから…まあ、特にこれと言っても重要な事じゃないから放つというて大丈夫。

オリジナルカード

マシンナーズ・リイアバー



機甲部隊の回復所

マシンナース・ジェット

マシンナース・ゼロ

投稿カード

逆転への引き金：ゼクスユイさん

逆転への引き金のルビが物足りなかったので追加させてもらいました。

次回予告：sideユウ

今回はボクだね。

剣賭がサプライズで作ったアジトに驚いてばかりのボク達。だけどいつまでもそこに留まるわけにもいかないから其々やる事を始めた。

だけど保健室に吹雪さんの見舞いに行った明日香さんと、女子寮に戻ったはずのツバキが行方不明になった。

ボクと紫苑は手分けして女子寮の近くを探していたら目の前に新たな敵が現れた。

けど使うカードが

次回第四十六話 拠点準備 仮面の魔物

最強カードは「砂塵の悪霊」

**第四十七話 拠点準備 仮面の魔物（前書き）**

今回のオリキャラが使うシリーズはOCG・アニメ共に違う効果を持っていますがご了承ください。

## 第四十七話 拠点準備 仮面の魔物

レッド寮地下：アジト

「剣賭、結局このアジトにどれぐらいの金かかってんだよ…」  
「プライスレス」

シゲルの言葉も尤もだった。まず周囲の鉄の壁も特注品で圧力でつぶれない強度で地震にも強い優れモノだ。

さらにこの箱庭の周囲には振動緩和の特殊素材が撒かれているため、ここで『闇のゲーム』をしても外には響かない。

そして世界でもそれほど数が無いスーパーコンピューターにその他必要なソファ、テーブル、電話などの家具 e t c . . .

「けど、ここに来るためには私達はどっちかの部屋に行く必要があるの?」

「ん?いや、秘密裏にブルー女子の一階から行ける通路が通ってるぞ」

「……………」 女子生徒組

「あ、向こうサイドにもこのこと同じ暗証機器があるし、通過記録も残るぞ」

剣賭の言葉にホツとした女子メンバー。すると次は十代が手を上げ

た。いつの間にかアジトについての質問コーナーが始まっていた。

「5人はカードがあるから楽に来れるけど…俺達が入る事ができないのか？」

「ああ、それな。一応ブルー女子寮と同じ様にPDAをUSBで接続すれば出入りできる…が、お前ら非常時以外ここに来ること無いだろ」

「剣賭、サーバーとカメラの接続もうすぐ終わるよ」

コンソールを操作していた紫苑がそう言った。すると先程までAWの社長室を映していたディスプレイがなにかのグラフを表示していた。

見たところなにかの消費量とかそういう様な感じがするのだが

「サーバーって言ってたんだが、何のサーバーなんだな？」

「ああ、海馬コーポレーションのデュエルリンクサーバーだ。俺達のデュエルディスクやデュエルリングでの対戦成績やそのデッキの持ち主、決闘者をサーチするためのサーバーだ。これを使えば…」

「そうか！あいつらがデュエルすれば居場所が分かる！！」

そう、海馬の持ってきた資料にディラとの戦いで検出されたエネルギー よく調べてみれば今までの戦いでも同じような現象が起っていたのだ。

それを追えば出現した場合足が分かる。

「カメラって何なのよ？」

「学園校舎の更衣室・トイレ以外の監視カメラだ。一応プライベートな事は立ち入る気は無いから録画映像は数分で消去されるがリアルタイムで表示されるぜ」

「……そんなことしていいのかしら？」

ももえが心配してもおかしくない。学校サイドが許可を出すにしても鮫島校長と交渉するにしても無理があると思ったからだ。まさかハッキングなわけ

「安心しろ、海馬コーポレーション社長からの許可がある」

「瀬戸さんから!？」

「ああ。お前によるしくだとよ」

一応ユウが海馬と関係があるという事を簡潔に説明した。そしてサーバーへのアクセスも海馬が許可をしたという事をつけ足した。

「それとここで紫苑がデュエルディスクのメンテナンスをやる事もできる。一応今戦場を監視するためのAW社の静止衛星をアカデミア上空に移動中だし…それが完了すれば完成だな」

「……………」

最早やる事がでかいAW社。そのことに9人がポカーンとしていた。

……前回より紫苑と剣賭を除いて一人足りない。その理由は

購買

「ここはこうすればいいのね？」

「そうだよ。呑み込みが早いね。じゃあ明日からローテーションに組んでも問題無いわね」

購買でトメさんに購買でのレジ打ちのやり方や売り物の並べ方などならっていた。

そう、剣賭の思いついたアカデミアにいるための名目は 売店の店員だ。

これなら免許や経験がなくてもできる。そして海馬オウマからの許可も出ていた。

再び戻ってアジト

「さてと、三沢が鍵取られたんなら俺がイエローに留まる理由もないからな、今日からレッドへ戻ることになる」

「剣賭、その通路の先はどこに繋がってるの？」

そう言いながら剣都はレッド・ブルー女子とも違う3つ目の通路へ向かった。それに明日香が剣賭に聞いた。方向的には校舎と思われるが

「学園の教室の教壇の裏だ。まあそこはどちらかが施錠されてたら空かない様になってるがな」

「……………いつからこのアジト用意してたの……………」

ユウの呆れている様に、確実に一日二日で出来様な規模ではないのだ。ちなみに距離の離れてるブルー女子と教壇したまで、エレベーターの様な箱で運ばれるのだ。

そして電力は小型自家発電装置がいたる所に配置されている。そしてその発電で余った電力は学園で使用されるという条件で海馬も黙認している。

というよりも余った発電機の使用用途がこうなると本人も満足していた。

「あ、じゃあ私も行くわ。兄さんの様子をね……………」

そう言っつて明日香と剣都は学園行きのエレベーターに乗った。

『頼りになるといつか、やはり剣都はすごいね』：イナ

『剣都は昔からああなのか？』：ウリイ

『ああ、思いついて即実行というタイプだ…父親が亡くなり、多少は考えるようになったのだが…………』：ダーク

『……………』：ルキ

『流石我が主』：ブルース

の精霊の様に呆れたり、感心したり、呆然したりと様々だ。ちなみにチビ龍5匹と2匹のクリボーは神楽と遊んでいる。なぜかこの面子で人語を話せる精霊で神楽が一番子供っぽかったのは内緒だ。

保健室

「……………はあ……………」

明日香は保健室でため息をついていた。それはセブンスターズの初戦として現れたダークネスが彼女の兄である天上院吹雪だったからだ。

闇のゲームの影響で意識を失ってもう二週間が経過している。そんな兄の容体が心配でならないのだ。

「にいさ……………」

明日香が兄を呼ぼうとした瞬間　　いつかのカイザーの様に目から光が消えた。

その背後に　　仮面を付けた大柄の男が

ブルー女子寮前

「剣賭のやる事は大きいわね……………」  
「そつだね……………」



ツバキと紫苑は女子寮のターミナル（出入り口）　　というか、女子寮の少し外れの茂みの中から現れた。アジトから女子寮のターミナルへ行くためにはこの茂みへ入る必要があるのだ。

「……………」

「お姉ちゃん？どうかしたの？」

急に黙ったツバキに紫苑が心配そうに振り返った。ツバキは通り抜けた森の中を眺めていたがなんでも無いように紫苑に微笑みかけた。

「ごめん、ちょっと忘れ物しちゃった。先に戻ってて」

「…うん……………」

何か嫌な予感がしたが紫苑はツバキは単独で無茶をする事はしないと思っていた。その為、ツバキを一人にしてしまった。

「……………そこにいるのは誰？」

アジト

「さてと、そろそろ私達も戻りましょうか」

「そうね、もうこんな時間だし」

ももえとジュンコがそう言って立ち上がった。既に時間はブルー女子寮の門限30分前だった。ギリギリに戻るわけにもいかないので余裕を持って戻ろうとした。

- p i p i p i p i -

その時、アジトのコンソールが電子音を発した。全員が見るとあるボタンが、メルしており、『通話』と書いてあった。

「通話？誰からか通信が？」

「あ、おいバカ」

そう言いながら十代がボタンを押してしまった。もしかしたら罠かもしれないのに押したのをシゲルが咎めたが、既に遅くディスプレイの画面が暗闇から剣賭の顔へと変わった。

「剣賭？」

『やっと繋がったか！』

PDAのテレビ通信だ。だが剣都はどこか急いでいるようだった。周囲の風景を見る限り保健室の様だった。

「どうかしたんっすか？」

『ツバキと明日香が行方不明だ！！保健室にも自室にもいないし繋がらないんだ！！』

「なに!？」

『紫苑が言うには女子寮のターミナルの近くの森で別れたきりらしい。アジトから向かった方が早いから何人かはそっちを探してくれ!! 残りは手分けして探すぞ!!』

## 保健室

「ツバキはユウ達に任せて…俺は校舎を調べるか」  
「う…う…」

剣都が保健室を出ようとしたら吹雪がゆっくりと目を開けた。そしてゆっくり辺りを見渡してギリギリ焦点の合った目で剣賭を見た。

「あ…すかは……とく…たいせい…りょうに…」  
「特待生寮…分かった、あんたは寝て」

剣都はそう言って扉を開こうとした。が、振り返った。剣賭の袖を吹雪が握っていたからだ。

「僕…も…」  
「…ボロボロのあんたを連れて行って危険が増す。悪いが」  
「妹の…場所に…」…チツ、しっかり掴まってる!!」

妹を守る兄　その姿が自分と重なってしまった剣賭。いつか幼い

彼女を守る自分と

森

「ツバキ〜!!」

其々手分けして島中を探していた。ユウはターミナルからツバキが紫苑と別れた森の中を探していた。

ツバキは女子寮の中を、シゲルはアジトで待機、ジュンコとももえはイエロー寮の周辺、十代と翔、隼人は剣都からの連絡で先に特待生寮へ向かった。

「紫苑の話だと…確かこつち… !？」

走り回って疲れてきたユウは前方に何かを見つけた。それは人影だ。

「ツバ…!!」

こんな時間で出歩いているとしたらツバキと思っていた。だが違う

『聖牙夕』

それどころか

学園の生徒ですらない

『あなたを拘束する』

黒い管理局の服に身を包んだ 少女？がそう言った。だがフードを深く被っており顔が見えず、更に声も編成期で変えたように何処か不自然だった。

「管理局：！！（まさかツバキも：！？）」

局員がいるということはツバキまで捕まった可能性がある。そう考えたユウはPDAをとり出した

『無駄。この周囲一帯に結界を貼った。内側から救援を呼ぶ事はもうできない』

「っ……！！けど捕まるわけにはいかない！！抵抗さしてもらおうよ！！」

そう言ってデバイス代わりに自身のデュエルディスクを起動させた。それを見た局員も真っ黒のデュエルディスクを展開させた。

『時空管理局特別執務官アイリス・イヴ・バラスティラ』

「デュエルアカデミア一年レッド生、聖牙タ!!!」

『「デュエル!!!」』

ユウVSアイリス

「僕のターン!!!僕はスピリット・ディフェンダーを守備表示で召喚!!!」

スピリット・ディフェンダー / DEF1000

明らかに相手は相当な腕前　もしかするとなのは達以上なのかも  
しれない。

その相手にまず初手としては守りから入るのが定石だ。

「更にカードを伏せターンエンド!!!」

ユウ

LP4000　手札3枚

スピリット・ディフェンダー (DEF1000)

伏せカード2枚

アイリスのターン

『私のターン…私は、フィールド魔法　SinWorldを発動』  
「シンワールド…？」

聞いた事のないフィールド魔法が発動されると同時に周囲の光景が変わった。ただの森だったのが機械的な都市へと変わっていく。

『そして私はデッキに存在する青眼の白龍をゲームから除外する』  
「！？ブルーアイズ！！？」

ユウの頭の中がさらに混乱して来た。青眼の白龍はユウもよく知ってる海馬瀬戸しか持っていないはずだ。

あまりに強力なカードとして製造中止になり、4枚しか存在せず残り一枚も使用不可になるほどの破損状況に陥り、海馬瀬戸以外に持つ者はいないとされているカードだ。しかも、そのカードをデッキから除外したのだ。

『罪深き世界から現れよ…Sin青眼の白龍！！』  
「っ！？」

SinWorldのビルの上　そこに一体の見覚えのある龍が襲来して来た。

だが顔には仮面の様な物を嵌め、体や翼に似たような装備をしている

「ブルーアイズ……！！なんで……なんで、海馬さんのカードを持っているんだ……！」

『あなたは何か勘違いしてるようですが、これは別の世界にはブルーアイズのカード。この世界に一人しか持っていないカードでも他の世界にも存在する』

そう聞いた時確かにA O Jは聞かないシリーズだったが、逆に向こうもユウやシゲルが持つカードで知らないカードがあった。

『更にデツキの真紅眼の黒竜をゲームから除外し、Sin真紅眼の黒竜を特殊召喚……！』

今度はダークネスのエースである真紅眼の黒竜がSin青眼の白龍と同じ仮面を嵌めた状態で現れた。青眼の白龍と同じように異世界の真紅眼の黒竜だろう。

『バトルフェイズ、Sin青眼の白龍で攻撃……！破滅のバーストストリーム……！』

「クッ……！！けどスピリット・ディフェンダーは一度だけ戦闘では破壊されない……！」

そう言ったが内心ユウは焦っていた。想像以上にアイリスの戦術が奇抜　さらにSinという一期に強力なモンスターを呼べるカード　油断する隙もなかった。

『Sin真紅眼の黒竜で攻撃……！闇炎弾……！』



「リバーズ罫、くず鉄のかかし！！戦闘を一度だけ無効にする！！」  
ポロポロのかかしが闇の様に黒い火球を受け止めた。しかしアイリスは予想通りの様に手札からカードを抜いた。

『カードを伏せ、ターンエンド』

アイリス

LP4000 3枚

Sin青眼の白龍（ATK3000） Sin真紅眼の黒竜（ATK2400）

伏せカード1枚

SinWorld

ユウのターン

「僕のターン！！（手札の雷帝神と組み合わせてスピットを呼べる…けど、それじゃあ勝てない…）フィールドのスピリット・ディフェンダーをリリース！！手札から砂塵の悪霊をアドバンス召喚！！」  
フィールドに赤い体の悪霊が現れた。それと同時に周囲に砂煙が立ち込めて 辺りを包み込んだ。

「砂塵の悪霊の効果発動！！アドバンス召喚成功時、このカード以外フィールドの表側表示モンスターを破壊する！！」

そしてフィールドに砂塵の悪霊しか残っていない。

「バトルフェイズ!!! 砂塵の悪霊で直接攻撃!!!」  
「クッ!!!」

アイリス / LP 4000 1800

一気にアイリスのライフを半分以上削ることに成功した。スピリット・フィールドも伊弉風も来ていないため、フィールドをがら空きにしてしまいが問題無かった。

「ターンエンド!!!」

ユウ

LP 4000 手札 4枚

モンスター無し

伏せカード 2枚

アイリスのターン

「私のターン、ドローフェイズSinWorldの効果発動!!!」  
「ドローフェイズに...?」

ユウが一体どういう効果なのか気になっているとアイリスのデッキの間ほどから一枚のカードが飛び出した。

そのカードを指で挟んだアイリスはカードの説明に移った。

『Sin Worldはドロをスキップする代わりにデッキのSinと名のついたカード1枚をランダムに手札に加える効果、そしてSin streamを発動！フィールドにSin Worldが存在する時、Sin World以外の魔法・罫を破壊する！！』  
「っ！！！」

アイリスのフィールドに巨大な竜巻が現れた。その竜巻がゆっくりとユウの場へと向かって行った。が

「リバーズ罫発動！！！」

ユウが伏せていたカードを発動させたと同時にSin streamが四方に千切れ、中から一体のドラゴンが現れた。

「スピット・スピリット！！相手のフィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、手札のスピリットモンスター砂塵の悪霊と雷帝神を除外してエクストラデッキからスピット・シルバー・ドラゴンを特殊召喚する！！！」

『ガアアアアアアアアアア！！！！！！』

スピット・シルバー / ATK 2500

スピット・スピリット

通常罾

相手が魔法・罾を破壊する魔法・罾・効果モンスターの効果を発動した場合のみ発動することができる。

手札のスピリットモンスター2体をゲームから除外してエクストラデッキから

「スピット・シルバー・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

しかし、スピット・スピリットは破壊を無効にする効果ではないのもう一枚の伏せカードのくず鉄のかかしが破壊されてしまった。

「私はエクストラデッキのスターダストドラゴンを除外し、Sinスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する！！」

「エクストラからも…！！」

今度はエクストラデッキのシンクロモンスターが除外され、フィールドにそのシンクロモンスターが現れた。何処となくスピットに似てる気がした。

Sinスターダスト・ドラゴン / ATK 2500

「攻撃力は同じ…！！」

「Sinパラレルギアを守備表示で召喚し、カードを伏せターンエンド」

アイリス

LP 1800 手札 3枚

S i n s t a r ダスト・ドラゴン（ATK2500） S i n パラレ  
ルギア（DEF0）  
伏せカード1枚

ユウのターン

「僕のターン！！（同じ攻撃力…手札のスピリット・バードがある  
から破壊効果が無効にできる…なら…）バトルフェイズ！！スピッ  
ト・シルバー・ドラゴンでS i n パラレルギアに攻撃！！」

白銀の炎が小さな歯車のモンスターへ向かって放たれた

『リバーズカードSindummyguardを発動!!相手  
モンスターの攻撃を他のモンスターへ移し替える!!』

「なっ!!(破壊カードじゃない!?!?)」

予想していた効果と違うカードが発動されたのにユウは驚きを隠せ  
なかった。しかも攻撃力は同じ このままでは

『ガアアアアアアアアア!!!!!!!!』

「スピット!!」

なにもできないユウは自身のエースモンスターが破壊されるのを眺

めることしかできなかった。それとアイリスのSinスターダストも破壊された。

だがアイリスにはまだ手札も多く、ユウには哀しむ余裕すらない。

「クツ…手札からモンスターを裏側守備で召喚!!」

ユウ

LP4000 手札4枚

モンスター1体

伏せカード無し

アイリスのターン

「私のターン、SinWorldの効果でカードを1枚手札に加える!そしていま手札に加えたSin<sup>シン</sup> Selector<sup>セレクトター</sup>発動!!墓地のSin青眼の白龍とSin真紅眼の黒竜を除外し、デッキからSinと名のついたモンスター2体を手札に加える!!」

「ヤバイ…!!」

見る限りSinは召喚条件が特定のモンスター除外というだけだ。ならばこのまま大量展開される可能性があった。それは手札にSinモンスターがいる場合だった。が、手札に加えられた。

「そしてエクストラデッキに存在するサイバー・エンド・ドラゴンを除外し手札のSinサイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚!!」

「亮さんのサイバーエンドも…!!」

見覚えのある三つ首の機械龍が異次元へと消えて行った。そしてフィールドには仮面を嵌めたサイバー・エンド・ドラゴンがユウを敵視するように現れた。

「更にデッキのレインボー・ドラゴンを除外し、Sinレインボー・ドラゴンを特殊召喚!!」

「っ…!!」

Sinレインボー・ドラゴン / ATK 4000

今度はサイバー・エンド並の大きさの仮面の白い龍が現れた。そしてそのモンスターの攻撃力は両方共に4000

「バトルフェイズ!! Sinサイバー・エンド・ドラゴンで伏せモンスターを攻撃!! プログラス・エヴオリューション・バースト!!」

三つ首の機械龍の口に赤黒い光線が集まり、ユウのセットモンスター目掛けて発射された。

「神楽!!」

『ごめん、ユウ!!』



くず鉄のかかしが破壊されては守りに徹する事も出来ない。そして壁となっていた神楽が破壊された。

「っ…あああああああああああ！?!？」

ユウ / LP4000 450

神楽に襲いかかった赤黒い光線がそのままユウにのしかかった。

『Sinサイバー・エンド・ドラゴンには貫通能力がある!!そしてこれで最後だ!!Sinレインボー・ドラゴンで直接攻撃!!プルトゥル・ザ・レインボー!!』

仮面の白龍が虹色の光線をユウに向けて放つ

「っあ…神…楽の…効果発…動…!!このカードが…破壊された時バトルフェイズを終了する…!!」

『これ以上は…!!』

虹の光線を自身の力で明後日の方向へ反射した神楽はそのまま墓地へ送られた。

アイリス

LP1800 手札4枚

Sinnサイバー・エンド・ドラゴン(ATK4000) Sinn  
インボー・ドラゴン(ATK4000) Sinn  
パラレルギア(DEF0)

ユウのターン

「…ボクのターン…!!(攻撃力4000が…2体…!!)」  
スピットも、しかもフィールドのモンスターも無しとなると既に打  
つ手がなかった。  
そして引いたカードを見たが逆転できるカードではなかった。

「うつ…カードを伏せ、モンスターをセット…ターンエンド…  
!!」

ユウ

LP4000 手札3枚

モンスター1体

伏せカード1枚

アイリスのターン

「私のターン、SinWorldの効果で一枚手札に加える…そし  
て」

既に勝ち目は残されていない。その事に打ちひしがれるように眼を伏せていたユウだったを尻目にカードを手札に加え、次なる動きを宣言しようとして 止めていたのだ。

「…？」

不審に思い眼を開けたユウが見た光景は、デッキからモンスターを除外しようとしたアイリス。だがその手を止めていた。

すると

「　　ウ　　!!!」

『仲間か…これ以上は無理か』

「なっ!?!逃げるのか!?!」

今日の前にいる管理局員は自信の目標がいて、更には勝てる状況で撤退すると言い出したのだ。そのことにユウは驚いていると近くの茂みが揺れた。

「ユウ!?!」

「ツバキ!?!無事だったの!?!」

アイリスに捕まっているかと思っていたツバキが無事だった　いや、もしかするとユウの勘違いのだけなのかもしれない。

するとツバキはアイリスに気付いた。

「管理局!」

『姫野椿　今あなたと勝負するつもりはない。特に獣斬繁と戦う訳にはいかない…ここは引かせてもらおう』

そう言い残すとアイリスはその場から消えた。以前紫苑に教えてもらった転移という魔法だろう。

「ツバキ、大丈夫だったの？」

「うん…さっきの人、何者…？」

ツバキの言葉にユウは何も答えなかった。見た事のない、見覚えのあるはずのモンスターに並ではないプレイング　終わりを考えただけでゾツとした。しかし

「あの人、なんで……」

なぜシゲルと戦う訳にはいかなかったのか。ただ単にシゲルが強いから　それだけの理由ならそれで終わりだ。だがそれ以外になにか重要な理由があるとしたら

アジト

「そうか…こっちのコンピューターはまだ完全にサーバーにアクセス出来ないからな…無事でよかったぞ」

『うん…ねえシゲル』

PDAでユウと通話していたシゲルはその片手間にコンソールを叩いていた。ある程度のやり方は紫苑に習っていたので閲覧ぐらいはできていた。

だがインストール率はいまだに63%ほどなので上手く作動していないのだ。心配だったがツバキと明日香を発見し、ユウも戦闘を行っていたが無事というのを聞いてほっとしていたのだ。

「どうした？なんかあったのか？」

『アイリス・イヴ・バラストイラって名前に聞き覚えがある？』

「っ！！？」

その言葉を聞いた時シゲルの目が見開いた。画面の向こうのユウがその光景に納得している様な顔をしているのにシゲルは少し冷静になつた。

「…何て名前だつて？」

『アイリス・イヴ・バラストイラ』

もう一度聞いてその言葉を頭の中で復唱して、高まる鼓動を抑え一言一言ハッキリと言った。

「…ユウ、ツバキに明日…世界の矛盾全員アジトに来るように言っ

「といてくれ」

『分かった…』

通信を切ったシゲルの背後にウリイが佇んでいた。シゲルがアイリスの本名を聞いた辺りからいたのだが、そのシゲルの意図に気付いていた。

## 第四十七話 拠点準備 仮面の魔物（後書き）

剣賭「何もんだよ…あのアイリスってのは…」

ユウ「シゲルが知ってるみたいだったけど…」

まあ、それがシゲルでやりたい事なんだよね

ツバキ「やりたい事？」

其々のキャラで設定上「これ!!」って言うような設定があるんだ。

例えば剣賭のアジト制作、ユウの過去、紫苑とツバキもね、シゲルは次回話すけど…

シゲル「……………」

紫苑「それで、Sinモンスターは本来あのような効果はない…はずじゃあ…」

アイリスってキャラとSin設定は初めからあったんだけど、効果無しのモンスターじゃあ…かと言ってアニメ効果もあまり…じゃあ作ろうと

ツバキ「そういうふうには？」

今度アイリスが現れた時に纏めて出すと思うけど以下の効果が共通だね

- ・「Sin World」がなければ破壊される。
- ・一部を除き特定のモンスターを除外し召喚。
- ・一部オリジナル効果あり

剣賭「Sinサイバー・エンドは貫通か？」

そう、もともとサイバー・エンドは貫通があったから…レインボーも一応は考えて、レッドアイズとブルーアイズは後々考える。

ユウ「それと表では明日香さんが…」



タイタンを元々ツバキが倒すってアイデア…ツバキの記憶をどうの  
ここのつて感じで考えてたが、同時進行は難しいと判断して止めた。

今回のオリジナルカードはユウが使用したカードのみです。

オリジナルカード

スピット・スピリット

シゲル「ちなみに最後のユウのカードはなんだったんだ？」

雷帝神と八汰鏡、もうブラフにしか使えなかったが…

次回予告：sideツバキ

ユウがアイリスに敗北して一夜明けた。他の皆は最後のセブンス  
ターズと思われる大徳寺先生を探しているけど、私達はアジトに集ま  
った。

シゲルが打ち明けた過去…あまりに悲しく、厳しい出来事。そして  
アナトとウリイ

シゲルは怖がっていた、あの事を喋って私達が恐れるのが  
するのが 軽蔑

そして突如として私達の前に現れた青年 アイオーン。

彼の目的は 『一年？』

次回第四十八話 獣の過去 新たな芽

最強カードは「剣闘獣ベストロウリイ」

## 第四十八話 獣の過去 新たな芽（前書き）

来週からテストでその勉強などを行っていたため全く執筆できません。

そのため、しばらく本編は更新できません。また感想を変えるのが遅れてしまいますので…

今回はデュエルは無しで、シゲルの過去です。

## 第四十八話 獣の過去 新たな芽

剣都が秘密裏に作ったアジトが完成間近

それを待ち遠しく思っていた世界の矛盾だが、6人目のセブンスターのタイタンが明日香を攫い特待生寮で闇のゲームを行っていた。

一方同時刻、連絡が取れなくなったツバキを心配し世界の矛盾は捜索を開始した。

しかしユウの前に管理局の特別執務官の『アイリス・イヴ・バラス ティラ』が立ち塞がった。

彼女は合流した仲間を見て『特にシゲルとは戦う訳にはいかない』  
と語っていた。

そして彼は自らの

アジト

世界の矛盾であるユウ、ツバキ、シゲル、剣賭、紫苑の5人。そして其々の精霊であるイナ、神楽、ウリイ、ダーク、ブルースの計10人が集まっていた。

ちなみにスピット達チビ龍とグリ、ウルクリボーは部屋の隅でおとなしくしている。

「どうしたの？昨日は…急に明日集まれなんて」

「悪いな、色々確かめることと話す事があるんだ…ユウ、お前が

昨日戦った相手の特徴とか名前とか教えてくれないか」

紫苑の言葉を尻目にシゲルがユウに聞いた。一先ずそのことについての確認が必要だった。

「うん。戦った相手の名前は確かアイリス・イヴ・バラストイラだったはず。使ってたのはSinnっていう特定のカードを除外して召喚するシリーズのモンスターだった…けど、正直あの時ツバキが来なかったらボクは負けてた」

「つまり…そいつはユウ以上の腕前ってことが」

剣都が重々しく言った。この中での強さなんて全員平均的だった。つまりユウが負けるかもしれないと言う事は自分でも勝てるかどうか分からないと言う事だ。

「カードとかは後で説明するとして…その時アイリスが言ってたんだ…」

『特に獣斬繁と戦う訳にはいかない』

つて。ただ危険視してるだけならよかったんだけど…何かあったんでしょ」

「……………ああ、もう何年も前だけだな。それに俺はアイリス何て名前は知らない…だが俺がこの学園に来たのも…俺がアナトを持っていたのも…そして、俺の闇も…」

『シゲル、話す時が気の出は無いのかのう…』

ウリイの言葉にシゲルは静かに少し頷いた。その日聞いた話をユウ達は一生忘れることは無いだろう

10年前ー

何処かの道場で黒髪の少年と緑の鳥人が互いに向かい合っていた。少年の場には巨大な恐竜のみ、一方鳥人は伏せカードが1枚と炎の獣人だけだった。そして互いにライフを1000切っていた。

「いつくよ!!ゲオルディアスで先生のラクエルに攻撃!!」

「甘い!!リバーズカード、眠る魂の咆哮を発動!!場のラクエルと墓地の儂をゲームから除外しガイザレスを特殊召喚!!効果によりフィールドのカードを破壊する!!」

「あ!!」

黒髪の少年が攻撃を宣言した恐竜の前に鳥人が召喚した鎧を着た鳥人が立ち塞がり、巻き起こした風邪で少年の場のカードが破壊された。そして少年の手札と場のカードが全て無くなってしまった。

「抜かりおつたな、先程破壊するカードを儂のベストロウリイではなく、このカードにしておれば勝っていたものを…」

「うっ…」

鳥人に指摘され、痛いところをつかれたように少年が俯いた。それを宥めるように同じ黒髪の男性が少年の頭を撫でた。その横には小

さな女の子もいた。

「まあ、強くなったじゃねえか。『シゲル』」

そう 黒髪の少年とは子供の時のシゲルの事だ。そしてこの男性が シゲルの父親『じゅうざんきりや 獣斬霧矢』だ。そして女の子はシゲルの妹 『じゅうざんひびき 獣斬響』だ。だが2人の母親はいない。

霧矢が言うには響を生んですぐに亡くなっただらしい。2人とも幼く顔も覚えていないのだ。

そしてシゲルと戦った鳥人は言うまでもなくウリイだ。

そして此処は

アジト



「俺とウリイはこことは違う異世界『ニズ』から来た」

重々しく口を開き紡いだシゲルの言葉　それにアジトの空気が一瞬固まった。

「シゲルが…異世界人…!？」

驚きを隠せないでいるようにユウがその言葉に反応した。同様にツバキも剣都も紫苑



も驚いていた。するとシゲルは近くのコンソールのあるボタンを押した。

ディスプレイには数秒間砂嵐が流れて何かと繋がった。

『どうかしたのか…そうか、等々話す気になったのか』

男性口調の長い黒髪の女性が映し出されていた。その背後はどこかのログハウスの様な雰囲気の様映っていた。

「シゲル、この別嬪<sup>べっぴん</sup>さん誰だ？」

『マリア…僕の伴侶じゃ』

ウリイが何処か恥ずかしそうにそう言った。それに剣賭と紫苑にイナ以外の精霊陣は驚いている。

え？ユウとツバキとイナ？伴侶って意味を理解していない。

『お前…結婚してたのか？』

「俺の生まれるだいぶ前にな…マリア、今から俺の過去をみんなに説明するが構わないか…あの事件の事も」

『構わない。あの事件で苦しんでいるとしたら…私ではなくてあなたの方だろ』

そう言うと今度はシゲルはウリイを見た。が、ウリイもマリアと同じするように首を縦に振った。

再び回想：

シゲルと響、そして霧矢は小さな村で暮らしていた。またウリイとマリアは近所で家族ぐるみで交流があった。

ニズの事を簡単に説明すると地球の様に発展した世界ではなく、ゲームの中の様な長閑な世界だった。

デュエルモンスターのモンスターが実際に人間達と生活していたが、自我を持たないアンデットや悪魔等のモンスターは忌み嫌われていた。

「シゲルよ、今日の修行は休みだ。明日はあの日じゃからの」  
「分かった」

そしてシゲルの家系は代々剣闘獣を使う一族で、またその多くは村の自警団として所属していた。

だが自警団に誰でもなれる訳ではない。一年に一度村の守り神であるアナトの前で行う武闘大会で成績を残さないといけない。またその参加試験も厳しいモノだった。

翌日

「ではこれより武闘大会の参加試験を行う」

武闘大会は自警団の団員が取り仕切っているが、今年はなんと霧矢だったのだ。そして霧矢の説明が始まると周囲が静寂に包まれた。

武闘大会の勝者には未来永劫語り継がれると言われる名誉が与えられるのだ。その為に試験内容を頭の中に叩きこんで少しでも事を優位に運ぼうとするのだ。

また参加資格が5歳以上だが、一度参加すると20年間は武闘大会に参加できない。

その為俺の様にギリギリで参加しない限り2度目、3度目の参加は無かった。

「ルールはいたって簡単だ。この村の外れにある妖精の森 中の光の泉・千年樹・三日月の岩のいずれかに向かい、大会の参加証をとってくるのだ。だがその途中様々なモンスターの妨害がある…下手をすれば命を落とすほどこともある。だがそれでもこの試練を越えし者だけが大会の参加を許される!! さあ、開始だ!!」

霧矢の言葉と共に参加者達は一斉に妖精の森へと向かった。妖精の森へは歩いて30分と言ったところにある。しかしその先の4つの要所は其々道が別れており、恐らくその最中のイベントはどの道を選ぶのが重要になってくる。

「…まあ、まずは森へ向かおう」

妖精の森

「さて…どうするかな。見た感じ綺麗に参加者も4つに分かれてるし…」

あれこれ考えてタイムアップなんてシャレにならないし、近場を責めることにしたシゲル。だが運がいいのか、モンスター達の妨害なんて無かった。

だが それはなぜなのか……どうして悪戯好きなモンスターすら出てこなかったのか

そして、妖精の森にシゲル以外の生命がないのに気付かなかったのか。

村

「…おかしい」

「どうしたのじゃ?」

急に口を開いたマリアにウリイが語りかけた。ちなみにマリアとウリイは武闘大会中の村の警備を行っている。自警団のメンバーも結構な数が参加しているため警備が手薄になってしまうので毎年ウリイとマリアが警備をしているのだ。

「北の警備の人の未来が見えない……」

「なんじゃと?」

「マリアは先祖にそう言う人がいたのか、『未来が見える』のだ。だが過去を変えれば未来も変わる。それに「趣味じゃない」ということで人の未来をあまり見ない様にしていたマリアが急にそう言い出したのだ。さらに」

「…！？村の人の未来が…消えていく…！！？」

「未来が消える…ということは何者か！？」

未来が消える　それはその人の未来が無くなるのだ。

未来が無くなるという事は『死』を意味している。だが村人全員の未来が

「何…この人…！！霧矢…！！」

「いったい…なにを…なにを見ているのだ！！マリアー！！」

ウリイがマリアの肩を強く揺さぶった。それにハツとしたマリアは急いである場所に走り出した。

「マリアー！！」

それに続いてウリイも続いた。

その先は

### 三日月の岩

「これかな…それにしても…」

シゲルは三日月の岩の前に置いてあつた真つ白のカードを腰のデッキホルダーに入れた。だが周囲　それどころか妖精の森に入ってから誰も見かけていない。

「…嫌な予感がする…」

そう呟いたシゲルは来た時よりも速足で村へ戻つた。

来るときは25分来ていたが、帰りは走って15分で着いた

燃え盛る自分の村に

「な、なんで…燃えて…！！父さん！！響！！ウリイ！！マリア！！」

自らの生まれ育った村が燃えてるのに驚きを隠せないでいたシゲルは泣き叫ぶように家族と家族と呼べる者の名前を叫び走った。

そして先程の武闘大会で霧矢がルール説明をしていた広場まで戻ってきた。そこには一人も人影が見えない　いや、人ならいた。

「ッ！？ウツ　　！！！！」

燃え尽きて　髪も　肌も　体が炭化した、誰なのかもわからない死体が転がっていた。それを人と呼べるのか分からないがそれが転がっていた。

その光景を見て、その死体から発する焼け焦げた肉体の匂いが原因で5歳だったシゲルは朝口にした物を吐きだした。だがすぐに家族を探しに戻ろうとした。

「（父さんは次に武闘大会を行うために……神の祭壇に行くはず…）」

「先ず居場所の分かる父親きしやの元へ行こうとした。が、先程の死体を見たトラウマで足が震えてしまい動かなかった。

「シゲル!!」

「ウリイ…マリア……」

そこへ霧矢の未来を見たマリアと、それを追って来たウリイが広場に入った。

「父さんは…!!」

「分かってる、霧矢の未来はもうすぐ消えるかもしれない…だが、まだ生きてる。神の祭壇に行くぞ!!」

ウリイが背負い、マリアの先導で神の祭壇へと向かった。

ちなみに神の祭壇とは守り神のアナトを祀っている社の事だ。武闘大会本戦は社の前で行われるため自警団のメンバーはその準備の為に神の祭壇へ集まるはずだった。

## 神の祭壇

『ふん…この程度か』

「クツ…!!」



霧矢と黒いローブ状の衣類を着た人物が互いに向かい合って構えていた。

しかし

???

LP4000 手札4枚

???) ( ATK4000 (

???) ( ATK3000 (

???) )

ATK3800)  
伏せカード2枚

霧矢

LP600 手札2枚

剣闘獣ダリウス(ATK1700) 剣闘獣ヴォルテックテール(ATK2200)  
伏せカード1枚

あまりにも状況は最悪だった。村の中では指折りの実力であるはずの霧矢でこの状況だ

2人の周囲に転がっている人だったモノが勝てるはずがなかった。

『さあ、教えてもらおうか。神のカードはどこだ!!』  
「…俺は神に使える身…教えるわけにはいかない。たとえ命に代えても!!!リバースカード「父さん!!!」っ!!!」

霧矢が決意を固めたようにうつすらと笑い、伏せてあるカードを使おうとした瞬間霧矢を父と呼ぶ声がした。霧矢をそう呼ぶのは

「繁!!」

「そんな…!!みんな!!」

霧矢は驚いたようにシゲルを見ていた。こんなに早く試験を終えるとは思っていなかったからだ。しかし「クッククク」と目の前の人物は笑っているので気付いた。

全て仕組まれた事だと

『さあて、どうするつもりだ？貴様はその伏せカードで私諸共死ぬ

つもりだったみたいだが…『闇のゲーム』が働いてるこのフィールドで使えば貴様の大事な子もただでは済まん!!』

「父さん…響は…!!響はどこ…!!」

ここに来るまでに見つける事の出来なかった響の所在をシゲルは聞いた。どうも急に未来が無くなっているため、マリアは上手く未来を見る事ができないみたいだ。

『響?ああ、あの少女か…』

「っ!!!?お前、響を知ってるのか!!」

謎の人物がそう呟いたのを聞き逃さなかったマリアはそう怒鳴った。しかしその人物は相変わらず「クッククク」と笑い、懐から何かをとりだした。

「それは…母さんの形見…!!」

常に響が身につけているはずの霧矢とシゲル、響の写真が入っているロケットがそこにあった。そう、『何があっても』『身につけている』『響の』

「……………リバース罠、破壊輪発動ウウ！！」  
『何イ！？』

沈黙を破ったのは霧矢の伏せカードだ。10年前までは禁止カードではないこの罠カード。そして対象は、『最大攻撃力』を持つ

「貴様の場の攻撃力4000のモンスターを破壊し互いにそのダメージを受ける！！」

『馬鹿な！！貴様は自らの手で家族を』

「アナト様！！後は頼みましたぞ！！」

霧矢がシゲルの方を見てそう叫んだ。すると

『仕方ないな』

「アナト様！！？」

シゲルの腰のデッキホルダー三日月の岩で手に入れた参加証が光り出した。それと同時に3人の周囲に光の膜が現れ、包み込んだ。

『クソオ、クソオオオ！！おのれえ！！霧矢アアアア！！！！』

「父さん!!?」

「シゲル、こんな父親ですまなかったな。何一つお前にしてやれなくて……」

徐々に迫ってくる霧矢自信で発動した破壊輪の衝撃波の中、霧矢は優しくシゲルに話しかけていた。

「だが、お前ならできる…必ずアカデミアでバラスティラを止め

」

「父さん!!」

そして辺りが光に包まれた

回想終了

「そして、気付いたらウリイはカードとなり、俺と MARIA はペガサスのコテージにいた…結局バラスティラってなんなのかそんときには分からなかったが…」

「…ユウが戦った相手って何か」

シゲルの過去、そして彼の目的があまりにもでか過ぎた。父親の最後の望みに、復讐　そして孤独。

「…俺が奴らと同じ異世界人で軽蔑しても良い。拒絶しても良い。」

だが俺は奴らと戦う…一人でもな」

重々しい空気の中シゲルはそう言った。こうなるかもしれない分かっていて過去を話したのだ。しかしシゲルは

「なあにバカなこと言ってるんだ？」

「…剣賭」

重い空気の中口を開いたのは剣都だった。その顔は先日のシゲルVS剣賭を提案した時の様に軽いモノだった。あまりに場違いな雰囲気<sup>雰囲気</sup>にユウが驚き半分で見えていた。

「たとえばそれが事実だとしてもなんだ？ハッ、軽蔑？そんなのする訳ねえよ。テメエは俺らの仲間<sup>タチ</sup>で、親友<sup>タチ</sup>だろ？それ以外に何かあるんだ？」

「それにそれだけで軽蔑するなら、私はもっとひどい事になってるよ」

そう言ったのは紫苑だ。紫苑の言うとおり彼女も異世界の出身の身



だ。しかも毛色が違うが彼女もシゲルと同じく孤独だったのだ。

「…管理局でのひと悶着の時に、シゲルは言ったよね？『カードがあるのが無かるうが、俺は俺、お前達はお前たちだ』って」  
「そうだよ！そんな事があってもシゲルはシゲルだよ！！」

そう、そんな心配はいらなかったのだ。彼らは誰かを軽蔑したり、差別したり、孤独にさせたりすることは無いのだ。

「そのバラスティラって言う人は強いのか？」

「瀬戸さんの持つブルーアイズや、ダークネスの使ってたレッドアイズと言ったモンスターの上位種を出してたよ」

「デッキから元となるモンスターを除外することで手札からそのモンスターをほぼノーコストで召喚して…パワーで攻めるのは厳しいな」

「第一そんな戦い方なら私やユウは結構しんどいから…」

4人はアイリスの持つSinモンスターの対策を話し合っていた。

その光景を見たシゲルは静かに涙を流していた。彼は実を言つと怖かったのだ。

本当の事を言つて拒絶されるのが。

だが 受け入れてくれた事が今、何よりも嬉しいのだ。シゲルは静かに流れていた涙を拭くと4人の輪に入った。

「（…ありがとうな）パワーじゃなくて戦術で攻めるのはどうだ？破壊効果や特殊召喚無効…」

「無効は駄目かも…ボク達もそう言っデッキだから、封じられるとなにも出来なくなる」

『なら、修行してみたらいいと思うよ』

「なるほど、それはいい、アイデ、アだ…！！??」

誰かが言った言葉に剣賭も賛同していた。だがよくよく考えるとさっきの口調で精霊ならイナや神楽だが声が違う

「「「「誰だ!!?」」」」

5人が振り返った所にいたのは紫のショートカットの髪の優しそうな男性だった。が、アカデミアの生徒でもなければ教師でもない。

そして着ている服がアナトやカルマの様な雰囲気醸し出していた。

『ああごめんごめん。私はアイオンという名前だよ』

「アイオン…時の神…なのか？」

シゲルの言葉にアイオンは頷いた。パッと見は気前の良い青年の様な感じがしており、一瞬警戒したが、あまりにも敵意がなさすぎるので剣都と紫苑は身構えるのを止めた。

「で、その時の神がなんでここに…」

『アナトに頼まれてね…聖牙夕の戦いを眺めていたらここらで立ち止まるだろうって。思った通り、君はあの少女に負けた。だが君達には時間がない…だから時間を歪めて、修行できる時を与えてほしいって』

そう言った時、アイオンの背後の空き部屋の扉が、音もなく横にスライドした。

『この扉を潜れば時が止まる部屋だよ。君達にちよつどの相手も用意してるが…それで新たな力を手に入れるかは君立ち次第だね』

「新たな力？」

アイオンの言葉に紫苑が気になった様に聞いた。その言い方だと既に自分達に何かしらの力を持っていると聞こえるが、そんなものに心当たりはなかった。

『ちよつと言い方が分かりにくかったね、君達の中には新たな力が芽生え始めてるんだ。けど、それが花開くのはものすごく先なんだ。この空間で修行をして、その力を開花させるのが、私の役目なんだ』

「成功する見込みはあるのか？」  
『それは人の頑張りというものだよ』

剣賭の言葉に人懐っこい笑みを浮かべたアイオン。だが、迷う理由なんて無かったんだ。

敵が強くなる、自分たちでは勝てなくなる、新たな力へのヒントが目の中にある。

それで手を伸ばさない理由なんてなかった。

『決意は固まったみたいだね』

アイオンの言葉に全員が頷いた。

### 修行室

地下に作ったはずの空間は精々中学校の教室並のはずだった。そしてそこも他の所と同じ様に鉄の箱があるはずだった。

「「「広！！！！」」」  
「「「てか凄！！！！」」」

そう、教室並の大きさのはずの空間がまるで外にいるように広々し

ていた。て言うか外だった。青空も見え、背後には山、遠くの方には海も見える

その反応に満足したのか、アイオーンは美青年の様な感じだの笑顔をしている。

「で、私達にちょうどいい相手って誰？」

紫苑はニコニコしているアイオーンに聞いた。確かに修行にはちょうどいいような環境だが

『もうすでに目の前にいるよ?』

「……え?」「……」

アイオーンの言葉に全員がその方向を向いた。そこには　みたところ5人誰かいるが逆光でよく見えない。

「誰d　　ええ…!!!???」

試しにユウが近づいてその中の一人を見たのだが驚きながら後ずさりをしていた。

それを見た紫苑が同じように近づき

「……………」



ユウ、シゲル、ツバキ、剣賭、紫苑の5人だったからだ。説明を求めむと言うように紫苑がアイオンを睨んだ。いきなり自分が目の前にいたらそりゃあ混乱するが

『彼らなら私よりも彼の方が詳しいよ』

『という訳じゃ』

「「「「「なんでカルマがいるんだ!!?」「」「」」

精霊界でカルマに会った4人は一斉に突っ込んだ。アナトがアイオンにこの空間の事を頼んだのならカルマがいてもおかしくないが、それとそっくりが何の関係があるのだろうか。

『そりゃ俺が作ったからじゃ』

地の文に反応しないでください。

「作ったって…人間をか？」

『そうじゃ、経験に戦術、思考と癖…更には息使いまでも完璧に再現した人間を作ったのじゃ、この者と共にな』

『こんなことでわらわを呼びだすではない』

そう言ったのは着物を着た老婆が杖をついて佇んでいた。心なしがカルマを睨んでいる気もするが

「なあ、その婆さんは？」

『婆さんではない。わらわは阿曇磯良あつみのいそらぞよ』

その婆さん 阿曇磯良の名を聞いて紫苑が「確か…」と思い出していた。

「阿曇磯良…日本の神話に出てくる海の神…」

『博識じゃな、その通りじゃ。そのコピーはわらわが作り、そこカルマの小童が魂を入れたのじゃ。ほぼオリジナルと同じじゃ』

「それが…修行？」

阿曇磯良の言葉に引っかかりを覚えたツバキが聞いた。

どうも自分と戦うのはやりにくいが、それだけで修業とは思えない。どうせなら自身のデッキのメタデッキの方がやりにくい気もする。



『自分が相手だと思って油断するもんじゃないぞ、試しにほれ、剣賭戦ってみるがよい』

「俺？まあいいが……」

sideユウ

ボクの目の前で目の前で驚く事が起こってる

説明しようにも状況が今の僕にも理解できてないんだ

「なんだよ…これ…!!」

驚きを隠せないのは剣賭も一緒だったみたい。自分と同じなら同じような戦いをするのかと思っていたのだけど

剣賭<sup>カード</sup>のメインフェイズ1

剣賭

LP1000 手札3枚

クロック・ゴールド・ドラゴン(ATK2300)

伏せカード無し

「バトルフェイズ」

剣都のコピーは無表情にそう宣言した。カルマ曰く本人の癖や特徴といったもの以外は真似ていないからこうなっているらしい。

剣賭<sup>コピー</sup>

LP1500 手札2枚

マシンナーズ・バーサーカー(ATK3500) マシンナーズ・

フォートレス(ATK2500)

伏せカード無し

「マシンナーズ・フォートレスでクロック・ゴールド・ドラゴンに攻撃」

「グルアアアアアアアアアア!!!」

「クロック!!!」

剣賭 / LP1000 800

戦車の砲撃でクロックが打ち抜かれてしまった。自らのライフが無くなる事よりもその 自分のモンスターが自分のモンスターを破壊することに違和感を感じていた。

「マシンナーズ・バーサーカーで直接攻撃、バーサーカークラッシュ」

「グッ…ああああああ!!!!!!」

「剣賭！！」

剣賭 / LP 8000

この修行部屋では死んだり怪我をすることはないが、擬似的に実際のダメージを受けるようになっていく。

『分かったじゃろ？ただ自分のコピーだからと言っても自らより劣るとは限らん。自らを越える事じゃの』

カルマの言葉に全員が口を閉じた。自分自身との戦いとはよく言っただけだが

「…へッ…おもしろえ…!!!!」

そう言ったのは、吹き飛ばされて倒れていた剣都だった。倒れたまま、面白い玩具でも見つけたように笑った。

「自分自身の戦い…ちょうどこのデッキで出来る事もいっぱいっばいになってきたんだよ。自分に何が足りないか、何が必要なのかわりたかったんだよ」

『…面白いね、君』

その剣賭を見て同じように面白いものを見つけたようにアイオーンが笑っているのに誰も気づかなかった。

「…うん、やるよ。カルマ。ボク達はボク達を越えて見せる!!」



そして各々戦う事になったんだが  
なぜあいつの姿が見えないんだ？

次回第四十九話 古の魔法 剣賭VSはやて  
最強カードは「時の対価」

では……前書きにもありましたがしばらく更新できません。  
次回もお楽しみに

第四十九話 古の魔法 剣賭VSはやて(前書き)

久々に上げました〜!!感想お願いします〜!!



## 第四十九話 古の魔法 剣賭VSはやて

### 修行室

「あれから一年近くか」

そう言ったのは剣都だ。寝起きの様に体の間接を伸ばしながら4人にいった。いや、その周囲に浮かんでいる各々の精霊達にもだ。

ユウがアイリスに敗れてから、アイオンの作りだした空間で修行すること1年の月日が流れた。だがそれは修行室の中で、実際は数日過ぎたぐらいだ。

『すまないね。これだけの人数を時間流から外すのは無理だったんだ…外の情報だとセブンスターズの戦いも、最後のアムナエルを十代が倒したらしいよ。そしてその正体は案の定大徳寺と言う人だったらしい』

「やっぱり先生が…」

ダークネスこと、天上院吹雪がかつての出来事で大徳寺に嵌められていた事を明かした。それにより行方不明になった大徳寺を探しているうちに最後のセブンスターズ アムナエルと十代が戦い、勝利したのだ。

『その出来事が今から約20時間前、今は朝のの10時。何だから知らんがブルー女子寮の森が騒がしいのだ。おそらく…』  
「管理局の可能性が高い…ですね」

紫苑の言葉に全員が顔を見合し…そしてニヤリと笑った。  
5人が修行で手に入れた新たな力　それを試す良い機会だ。

森

「大徳寺先生…ありがとうございます!」

十代が大徳寺の残したカード「賢者の石　サバティエル」を身に宿したエリクシーラーで幻魔皇ラビエルを戦闘破壊した。だが「賢者の石　サバティエル」は光の粒子となって空へ舞い上がった。

そして首謀者の影山理事長はその後の成り行きで腰を痛めてしまい、へりで本島の病院に運ばれた。

「さて、校長。この三幻魔のカードをお願いします」

そう言って三沢は影山が残したデュエルディスクから3枚の幻魔のカードを引き抜いた　のだが

「ラグナロクブレイカー!!」

『つ!!!!!!???』

「危ない!!」

三沢に襲いかかった灰色のビーム状の攻撃。

それに間一髪気付いたジュンコが三沢を突き飛ばしその攻撃から身を守る事が出来た。だがその衝撃で3枚のカードが宙を舞った。その先に赤髪の女性が浮かんでいた。

「貰った!!」

「危ないっす!!」

が、寸前で翔がそのカードをキャッチした。そしてようやく十代達は周囲に4人の少女、女性が浮かんでいた。

「な、なんだこいつら!？」

「ま、不味いんだな…ユウ達もいないんだな…!!」

唯一彼女達に対抗できる力を持っている5人は何故か此処で、3日アジトから出てこないのだ。そんな状況で管理局の介入があれば彼らが間に合わない。

「翔、こっちに来い!!」

「兄k!!!!?」

十代の呼びかけに翔は全員の前へ走っていた が、

「逃さん!!」

シグナムが翔の首根っこを掴んだ。そして持っていた剣を翔の首元へ持っていく。

「さて、そのカードを「兄貴!!」っ!?!」

翔は自信が捕まっているのにもかかわらず三幻魔を十代に向けて投げた。若干狙いが逸れたが、それを受け取ったのは明日香だ。

「シグナム先生!?!どうして…!!」

事情を知らない三沢は驚きを隠せなかった。ちなみに学園を去った後に潜入し、戻ってくる前に逃亡してたため万丈目はシグナムを知らなかった。

「こいつらは人の物を奪う強盗だ!!」

「十代：人聞きが悪いな」

十代の言葉に低いトーンではやてが反論した、が、問題はそこではないと言つようにフェイトとはやては持っていた杖を十代達に向けた。

ちなみに何故か此処にいるのはなのではなく、リンディだった。彼女はまだ紫苑との戦いのダメージを抜けずに待機を命じられているのだ。

しかしそれではユウ達を抑えられる可能性が低いので、リンディ自身がやってきたという訳だ。

「翔を離せ！！」

「ならばそのカードをこちらに渡してもらおうか」

シグナムの言葉に其々苦虫を嚙んだ顔になっている。奴らの狙いはそのカード、そして渡すと言つ事はユウ達の敗北を意味していた。

もしもこのカードを奴らが使用したら 十代でさえ賢者の石がなければ勝てなかった相手に勝てる確率は低い。

「クッ…どうすれば…!!」

「こっつするよ、スピット!!」

『ガアアアアアアアアア!!!!』

『!!!!??.?』

突如として白銀の龍が襲来した。そしてそのまま翔を抱えているシグナムに向かってスピットが突進した。

「クツ…レヴァンティン!!」

シグナムは翔を投げ捨て、持っていた剣でスピットの突撃を受けとめようとした。

「スピット、今だ!!」

『ガア!!』

「!!」

が、スピットはシグナムではなく翔を啜えるとそのまま十代達の元へと飛んで行った。そう、『翔を啜えたまま空を飛んで』



最早ジェットコースター状態。

そんな翔を尻目に森の中から4人の男女が現れた。が

「さて」

「4人が…」

「つてか、大将まで居るとなると…」  
「総力戦だね」

上から順に紫苑、剣賭、シゲル、ツバキが現れた。しかし スピットを召喚したはずのユウがいない。

しかし4人は其々別れて局員  
シゲルはリンディ、ツバキはフェイト、紫苑はシグナム、剣都ははやと向かい合うように立った。

「皆〜がんばって〜!!」

「あ、ユウ」

そしてユウはスピットの背中に乗っていたのだ。奇襲が失敗した場合、さらなる奇襲として隠れていたのだ。

「ひ、ひどいっすよユウ君…あんな動きするなんて…」  
「うめん。けどああするしかなかったんだ…それより」



そう言つてユウは4VS4が始まるうとしてる場所とは違う場所を睨んでいた。その姿を見て十代がふと思った。

「（ユウ…なんか頼もしくなつた？）」

一年間の修行は新たな力だけではなく、心身ともに強くなっているのだ。だがそれを知らない十代は首を傾げていた。

「そこにいるの、出てきたら」

「……………」

ユウの言葉に従うように出てきたのは

剣賭VSはやて

「テメエが八神はやてか」

「…AWの総帥…そしてツバキの兄…羽黒剣賭…！！」

互いに互いの情報を持っていた。剣都は捕えた夜神志度と紫苑から情報を手に入れていた。

そしてはやては管理局のデータベースからAW社の事を調べ上げていたのだ。

「一つ聞きたい、なぜユウ達を…俺の妹を裏切った？」  
「…それがわたしの仕事だから。そしてツバキちゃん達が敵だったから」

淡々と会話してデュエルディスクを起動している2人。だが、その眼には目の前の相手の喉元に食いつく闘志。その様なモノが見え隠れしていた。

「あれこれ言うのは趣味じゃねえんだよ…」  
「そうやな、うちも言うよりもこうしたほうが楽やからな…」

そしてディスクを構え、シャッフルしたデッキをセットした。それと同時に例のドームが2人を包み込んだ。これで　もう『逃げられない』

「デュエル!!」

はやてのターン

「うちのターン!!」(データによるとパワーと展開を兼ね備えたマシナーズデッキ…やけど、うちもなのはちゃんに負けないパワーデッキや!)うちはダーク・クリエーターを手札から捨ててダーク・グレファアーを特殊召喚!!」

フィールドに暗黒に身を染めたダイ・グレファーが現れた。それを見て剣賭の頭の中の本にある言葉が浮かび上がった。

『八神はやては元闇の書の主』

『闇関係のカードを使ってパワーで攻めてくる』

紫苑とツバキが言っていた情報だ。しかし紫苑はともかくツバキはアカデミアの月一試験でのデッキの情報だ。それから既に半年近くの月日が流れているため、デッキの内容を変更した可能性もあったが

「（恐らく聞いた通りの闇デッキ…なら、あのカードのお披露目にちょうどいい！！）」

思惑通りに事が運んで不意に剣賭の口に笑みが浮かんだ。それに嫌な予感したはやては念の為に手札のカードを一枚墓地に送った。

「手札の闇属性の黒耀岩竜を墓地に送り、デッキからネクロガードナーを墓地に送る！！」

「（ネクロガードナー…おっと、顔に出ちまってたか…）」

急な防御策に剣都は不意に笑ってしまった事に気がついた。しかしはやてはカードを一枚伏せた。予想ならあれも攻撃反応系や防御型の罠だろう。

「そしてダークフレイムを守備表示で召喚!!!ターンエンドや!!!」  
「(ダークフレイム…手札に上級モンスターがいるつつうことだな)」  
「

フィールドに四角いブロックの塊のようなモンスターが現れた。ダークフレイムの効果はジェルエンデュオのようなダブルコストモンスターだ。

はやて

LP4000 手札2枚

ダークグレフアー(ATK1700) ダークフレイム(DEF0)  
伏せカード1枚

剣賭のターン

「俺のターン!!! (まあ、ちょうど良いつつても、『あのカード』  
が来てないなら今まで道理だな)」

相手フィールド上のみモンスターが存在する時、手札のマシナ  
ーズ・エアレイドを特殊召喚!!!

そして手札のカーネルはマシナーズと名のついたモンスターが特  
殊召喚に成功した時、こいつも特殊召喚することができる!!!」

一気に手札から2体のモンスターを並べた。しかしまだまだ剣都は  
止まらない。

「手札からマシナーズ・キッズを召喚する!!!」

マシンナーズ・キッズ / ATK 400

今度は野球帽の様な物を被り、双眼鏡と虫網、虫籠を持った機械少年が現れた。

「!!!」

ブルースの横に似たような恰好の機械武士が現れた。

すると突然はやての伏せカード　炸裂装甲が表になった。

「なんや!?!」

だが攻撃を行った訳でもなく、また効果が発動する様子もなかった。すると勿体ぶるように剣都は手札のあるカードを見せた。

「マシンナーズ・キッズは相手のフィールドの魔法・罠を一枚このターンのエンドフェイズまで表側にすることができる!!!そしてそのカードはこのターン発動する事が出来ない!!!」

マシンナーズ・キッズ

効果モンスター・チューナー

星3 / 地属性 / 機械族 / ATK 400 / DEF 200

このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罠カード一枚を選択することができる。

そのカードをこのターンのエンドフェイズまで表側表示にし、効果を発動する事が出来ない。

表になった罫に合計レベル8のチューナーとチューナー以外のモンスター

「マシンナーズ・エアレイドとマシンナーズ・カーネルにマシンナーズ・キッズをチューニング！」

そうならば剣賭の独壇場だった。

「機械の魂を持つ翼竜よ、その鋼鉄の翼で仲間を敵の脅威から守りたまえ！」

3 + 2 + 3 = 8

「シンクロ召喚！！来い、クロック・ゴールド・ドラゴン！！」  
『グルウウアアアアアア！！！！！！！！』

クロック・ゴールド・ドラゴン / ATK 2300

フィールドに機械の銃身を体に生やした巨大な龍　クロックが現れた。

それと同時にその銃身が表になっている炸裂装甲に向いた。

「クロックの効果発動！！シンクロ召喚成功時相手フィールド上の表側表示の魔法・罫を全て破壊する！！オートファイア！！」

「クツ…！！（シャマルはこの効果でやられたんや…！！それに僅か1ターンでフィールドをそろえる技術…！！嘗めていたら勝てへん…！！）」

「バトルフェイズ！！クロックでダーク・グレファアに攻撃！！ジエノサイド・イグニッション！！」

クロックの全身の銃身から放たれた弾丸がダーク・グレファアではなく、墓地にいたネクロガードナーを打ち抜いた。

「ネクロガードナーの効果！！墓地のこのカードを除外することで相手の攻撃を一度だけ無効にする！！」

「予想通りなんだよ！！手札のダブル・アップ・チャンスを発動！！自分のモンスターが戦闘を無効にされた時、そのモンスターの攻撃力を倍にして再び攻撃できる！！」

「なんやて…！？」

発動したカードで再びクロックに弾丸が装填され、ダーク・グレファアを照準に入れた。

クロック / ATK 2300 4600

「ジエノサイド・イグニッション・セカンド…！！」

「ぎゃあああああああ…！！…！！…！！」

はやて / LP 4000 1100

「カードを伏せ、ターンエンド！」

クロック / ATK 4600 2300

剣賭

LP 4000 手札1枚

クロック・ゴルド・ドラゴン (ATK 2300)

伏せカード1枚

はやてのターン

「うちのターン！！（一気にライフを半分以上削られてもうた…これ以上は危険やな…）魔法カード闇の誘惑発動！！カードを2枚ドロ―し、その後闇属性モンスターを除外する！！」

デッキの上から2枚カードを引いた。闇<sup>ダーク</sup>デッキではこのカードのコストに困ることはなかった。

「うちは手札のダーク・パーシアスを除外！！そしてフィールドのダークフレームを2体分のリリースとして手札からダーク・ネオ・パーシアスをアドバンス召喚！！」



フィールドに彼女のエースモンスターが現れた。本来ならダーク・パーシアスをリリースすることで召喚するモンスターだが、ダーク・フレイムが場にいるとそれは意味がなかった。

ダーク・ネオ・パーシアス / ATK 2300 4500

「攻撃力が上がった!？」

「ダーク・ネオ・パーシアスは墓地の闇属性モンスター1体につき、攻撃力が300アップ! 墓地には4体の闇属性モンスターがあるから1200アップするんや!! バトルフェイズ!!」

ダーク・ネオ・パーシアスでクロック・ゴールド・ドラゴンに攻撃!! ！！ダークネスパーシア!!」

ダーク・ネオ・パーシアスが持っていた剣でクロックの首元目掛けて真つ二つにしようと振り下げた

「リバーズ罨!! タイムレスポンス!! 自分フィールド上のクロック・ゴールド・ドラゴンが存在する時、デッキから通常魔法を一枚手札に加えてバトルフェイズを終了させる!! 俺は古の対価を加える!!」

タイムレスポンス  
通常罨

自分フィールド上に「クロック・ゴールド・ドラゴン」が存在する場合、

相手の攻撃宣言時発動する事が出来る。

自分のデッキから通常魔法を一枚手札に加え、バトルフェイズを終了する。

「(タイムレスポンスに古の対価…?今までに使った事のないカード…)ならうちはカードを伏せてターンエンドや!」

はやて

LP1100 0枚

ダーク・ネオ・パーシアス(ATK4500)  
伏せカード2枚

### 剣賭のターン

「俺のターン!!(さてと…攻撃力4500…俺のデッキの最大攻撃力は通常ならバーサーカーの3500…破壊するにしてもリリアバー並じゃねーと……っと、前なら考えるがちょうど手札にあるし…)さてと、俺の新たな力を見せてやるぜ!!」  
「!!!(来る!!)」

剣都はそう言うお手札のカードを一枚フィールドに出した。

「手札からマシンナーズ・キャンセラーを召喚!!効果により自分フィールド上のシンクロモンスターをゲームから除外し、そのモンスターのレベルと同じになる様に墓地のモンスターを召喚する!!」

マシンナーズ・キャンセラー

効果モンスター

星3/地属性/機械族/ATK1000/DEF500

1ターンに1度分フィールド上のレベル8以上のシンクロモンスターを選択する事が出来る。

選択したモンスターをゲームから除外し、そのモンスターと同じレベルになる様に墓地からモンスターを特殊召喚する事が出来る。

この効果を発動した場合次の自分のターンのエンドフェイズまで、自分はシンクロ召喚を行う事ができない。

マシンナーズ・キャンセラー / DEF 500

フィールドのクロックが異次元に消えるとフィールドに3体のモンスターが並んだ。

マシンナーズ・エアレイド / DEF 1000 / 3

マシンナーズ・カーネル / DEF 1000 / 2

マシンナーズ・キッズ / DEF 2000 / 3

「やけどシンクロを行わない…ならどうしてシンクロモンスターを除外して…」

そう、既に召喚権も行使してたとえマシンナーズ・バーサーカーを召喚したとしてもダーク・ネオ・パーシアスに勝つ事が出来ない。

「これが俺の新たな力だ！！ライフを半分払い、魔法カード古の対価！！！」

「古の…対価？」

剣賭 / LP4000 2000

見知らぬカードが発動した剣賭にはやては首を傾げた。

「フィールド上のマシンナーズエアレイド、カーネル、キャンセラ  
ーを生け贄に捧げる！！」

すると剣都のフィールドのモンスターが次々に消えてゆく。だが古  
の対価は儀式でもなく、どうやら手札のカードも違うようだった。

「古の対価の効果で出でよ！！エンシエント・ベルゼ！！」

「な、なんや…そのモンスターは…！！」

そう宣言した時、フィールドに赤い体の悪魔が現れた。だが剣賭の  
手札が減っておらず、デッキからカードを出した様子もない。

また、シンクロを行った様子もなかった。

エンシエント・ベルゼ / ATK1000 / 8

「エンシエント・ベルゼの効果発動！！召喚成功時、自分フィール

ド上のモンスター1体と相手フィールド上のモンスターを1体破壊する！！カード・バツク！！」

剣賭の場のマシンナーズ・キッズと共にダーク・ネオ・パーシアスが炎に包まれた。

「クツ……！！エンシエント・ベルゼなんてモンスター…聞いたことあらへん…！！一体どうやって…！！」

攻撃力1000にリアバーの下位互換の様なモンスター破壊効果

それに召喚に使用した魔法「古の対価」  
明らかに普通のモンスターではない。

「クツクツク…そろそろ種明かししてやろう。古の対価は自分のエクストラデッキのエンシエントモンスターを特殊召喚する為のカードだ！！また、この召喚はシンクロ召喚として扱う！！」

古の対価

通常魔法

このカードは自分のライフを半分支払い、自分のエクストラデッキのエンシエントモンスターを1体選択し、発動する事が出来る。

そのモンスターとレベルが同じになる様に記されている素材をリリースし、選択したモンスターを特殊召喚する。

墓地に存在するエンシエントモンスターを除外することでこのカードを手札に加える事ができる。  
この効果は1ターンに1度しか発動できない。

「チューナーを使用しないシンクロ召喚……！そんな方法聞いたことあらへん……！」

「ああ、これは俺が作り上げた戦い方だ！！エンシエント・ベルゼのもう一つの効果……！このモンスターの効果で破壊したモンスターの攻撃力分、ベルゼの攻撃力をアップさせる……！カースド・チャージ……！」

エンシエント・ベルゼ

シンクロモンスター・エンシエント

星8 / 炎属性 / 悪魔族 / ATK1000 / DEF1000

モンスター×3体以上

このモンスターは「古の対価」の効果で特殊召喚する。

このモンスターの特殊召喚成功時、自分と相手のフィールドのモンスターを1体ずつ選択する事が出来る。

選択したモンスターを破壊して、そのモンスターの元々の攻撃力分攻撃力がアップする。

このモンスターが破壊された場合、デッキからカードを1枚ドロウできる。

エンシエント・ベルゼ / ATK1000 3700

「そんな……うちのエースが……」

「バトル……！エンシエント・ベルゼで直接攻撃……！カースド・バー

スト!!」

エンシエント・ベルゼの右腕から放たれた炎が真っ直ぐはやてに向かって放たれた

「リ、リバースカード!!ガード・ブロック!!戦闘ダメージを0にしてカードを一枚ドロウする!!」

炎がはやてを避けるように真っ二つに分かれた。

「チツ…かわしたか…カードを伏せてターンエンド!!」

剣賭

LP2000 手札0枚

エンシエント・ベルゼ(ATK3700)

伏せカード1枚

はやてのターン

はやては目の前の悪魔に震えながらデッキの一番上に指を置いた。

「う、うちのターン!!(ダーク・ネオがやられてもった…もううちのデッキに…)」

震えている指ではデッキからカードを引きぬきことは いや、もうはやてに戦う意思はなかった。もうこのままデッキの上に手を置いて戦いをおこうとも考えていた。

『はやてちゃん！！』

『主！！！！』

「っ！！！！リイン！！？」



「なに!？」

突如として響いた幼い少女の声と凜とした女性の声が響いた。よく見るとはやての右に人形ぐらいの大きさの少女が、背後にその少女を成長させたような女性が立っていた。

「精霊…なのか…？」

『いえ、あの者達に精霊の力は感じられません。おそらく…カミューラ殿の持つヴァンパイア・ロードの様な別の力かと』

剣賭の言葉にブルースがそう応えた。するとその2人の少女女性が消えると、はやての手の震えが無くなった。

「…負けられてへんねや、うちは。管理局員、八神はやては負けれへんのや!!うちのターン!!ドロー!!」

「(目つきが変わった…来るか!!)」

引いたカードを見たはやて、そして手札・墓地・フィールド状況を冷静に分析して最良かつ、最善の方法

「リバーズカード闇次元の解放を発動!!除外されている闇属性モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する!!来てや、ダーク・パシアス!!さらに手札からリインフォース・ツヴァイを召喚!!」

『はいです!!!!』

フィールドに闇の天使と先程の人形のような少女が元気いっぱいに現れた。見た感じがなんとなく以前ツバキが使ったサニートピックシーに似ている気がした。

ダーク・パーシアス / ATK 1900 2400  
リインフォース・ツヴァイ / ATK 1200

「そしてレベル5のダーク・パーシアスにレベル3のリインフォース・ツヴァイをチューニング!!  
夜天の主の名において、新たな名を送る 強く支える者に吹き荒れる幸運の追い風となれ!!」

『いきますよ!!』

5 + 3 = 8

「シンクロ召喚!! 祝福の風 リインフォース!!」  
『行きますぞ、我が主』

リインフォース / ATK 2700

フィールドに先程の女性が現れた。どうやらこの女性 リインフォースが

「デメエの切り札か…!!」

「そうや、リインフォースの効果発動!!シンクロ召喚成功時、相手モンスターの効果が無効にし、その効果を得る!!それにチェインしてリインフォース・ツヴァイの効果発動!!」

『はい、はやてちゃん!!』

するとはやての場に再びリインフォース・ツヴァイが現れた。

「ツヴァイはリインフォースのシンクロ素材になった時、墓地から特殊召喚してカードを1枚ドローできる!!」

リインフォース・ツヴァイ

効果モンスター・チューナー

星3 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK1200 / DEF1000

このモンスターが「祝福の風ーリインフォース」のシンクロ召喚の素材として墓地に送られた場合、墓地からこのカードを特殊召喚することができる。

その後自分はカードを1枚ドローできる。

「リインフォース・ツヴァイ」はフィールドに1体しか存在できない。

「祝福の風ーリインフォース」が戦闘で破壊される時、代わりにこのカードを破壊する事が出来る。

「ドロー!!そして、リインフォースの効果でエンシェント・ベルゼの効果が無効にする!!」

祝福の風 リインフォース

シンクロモンスター

星8 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK2700 / DEF1800

「リインフォース・ツヴァイ」+チューナー以外のモンスター1体以上

このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターを選択する。

選択したモンスターの効果を無効にし、その効果を得る。

このカードが破壊された場合、

自分の墓地のシンクロモンスター以外のモンスターを1体特殊召喚する。

このカードが表側表示で存在する限り、自分フィールド上の「リインフォース・ツヴァイ」は攻撃対象に選ばれない。

「チツ… まだに扱いきれてないか…」

エンシエント・ベルゼ / ATK3700 1000

剣都は古の対価とエンシエントモンスターを完全には使い切れてなかった。

しかもタイミングを逃して効果が発動できないとしても、攻撃力1000となったベルゼに相手のリインフォースとツヴァイの2体のモンスターの攻撃を喰らえば

「バトル!!! リインフォース・ツヴァイでエンシエント・ベルゼに攻撃!!! 終焉の笛、ラグナロク!!!」

「クツ……！！エンシエント・ベルゼの効果でカードを1枚ドロ……！」

剣賭 / LP 2000 1800

先程三沢を襲ったのに似た攻撃によってベルゼが破壊されてしまった。

このままはやての切り札の攻撃を受ければ負けてしまう。

「リバースカード時の解放を発動……！！エンシエントモンスターが戦闘で破壊された時、ゲームから除外されているモンスターを特殊召喚することができる……！！来い、クロツク……！！」

『グルアアアアアアアアアア……！！』

クロツク / DEF 2500

「構わへん……！！リインフォースでクロツク・ゴールド・ドラゴンに攻撃……！！デアポリック・エミッション……！！」

『闇に染まるがいい……！！』

女性の伸ばした両手から漆黒の球体が放たれた。

しかし、消えたはずのエンシエント・ベルゼがその間に割って入った。

「クロックはやらせねえよ！！時の解放で特殊召喚したモンスターはこのターン戦闘で破壊されない！！！」

時の解放

通常罨

エンシエントモンスターが戦闘で破壊された時、ゲームから除外されているモンスターを1体選択して特殊召喚する。この効果で召喚されたモンスターはこのターンのバトルフェイズ中は戦闘では破壊されない。

「うちはターンエンド！！（クロックは確か直接攻撃ができる…やけど、うちの手札はバトルフェーダー！！直接攻撃を仕掛けたらうちの勝ちや！！）」

はやて

LP1100 手札2枚

リンフォース（ATK2700） ツヴァイ（ATK1200）

闇次元の解放（対象無し）

剣賭のターン

「俺のターン！！ドロー！！（…これは…よし！！）クロックを攻撃表示に変更！！！」

『グルウアアアアアアア！！！！！！』

「攻撃表示に…やけど…！リインフォースがいる限りツヴァイに攻撃することはできひん…！クロックやとリインに勝てへんで…！」

そう、はやての言うとおりでただのクロックならリインフォースに勝つ事なんて無理だ

「手札からマシンナーズ・リサイクラーを召喚し、効果発動…！墓地のマシンナーズエアレイドとマシンナーズ・カーネルをデッキに戻し、カードを一枚ドロ…！」

魔法カード、死者蘇生発動…！墓地に存在するマシンナーズ・キャンセラーを守備表示で召喚…！」

「チューナーとチューナー以外のモンスター…シンクロ…？」

はやては驚いたように声を上げる。しかしレベル3のキャンセラーにレベル2のリサイクラーをチューニングしてレベル5のモンスターを呼び出せても、はやてに勝てない。

「墓地の古の対価の効果発動…！墓地に存在するエンシエントと名のついたモンスターを除外するとこのカードを手札に加える…！」

「古の対価…！？またエンシエントモンスターを…！」

そう、ただのシンクロモンスターでは勝てない、だが

「ライフを半分払い古の対価を発動…！フィールドのキャンセラー

トリサイクラーをリリースし、エクストラデッキから 飛べ、エ  
ンシエント・ルシファー!!!」

「不死鳥:!!!」

そこには紫色の炎を身に纏った鳥が羽ばたいていた。

剣賭 / LP 1800 900

「エンシエント・ルシファーはフィールドのモンスター1体を選択し、そのモンスターの効果と攻撃力を得る!!!お前の場のリインフォースを選択する!!!」

エンシエント・ルシファー

シンクロモンスター・エンシエント

星5 / 闇属性 / 鳥獣族 / ATK 0 / DEF 0

モンスター×1体以上

このモンスターは「古の対価」の効果で特殊召喚する。

1ターンに1度、自分、または相手のメインフェイズ時相手フィールド上のモンスターを1体選択し、選択したモンスターの効果と攻撃力・守備力を得る。

このモンスターが破壊された時、自分の手札を1枚捨ててもよい。

エンシエント・ルシファー / ATK 2700 / DEF 1800

「やけどツヴァイは、リインフォースは破壊される時代わりに自信を破壊する効果があるんや!!!」



「ならそれを止めるまでだ！！時の禁忌を発動！！自分フィールド上にエンシエントモンスターが存在する時、相手のモンスター効果を無効にする！！こいつでテメエのツヴァイの効果を無効にする！！」

時の禁忌

通常魔法

自分フィールド上にエンシエントモンスターが存在する時発動する事が出来る。

相手フィールド上のモンスター1体の効果をこのターンエンドフェイズまで無効にする。  
選択したモンスターは戦闘では破壊されない。

「そんな……！！」

『は、はやてちゃん……苦しい……です……！！！！』

赤黒い鎖に縛られたツヴァイは苦しそうにはやてに助けを求めた。  
しかし、もう

「バトルフェイズ！！エンシエント・ルシファーでリインフォースに攻撃！！」

『グッ……あ……るじ……！！！！』

「リインフォース！！」

銀髪の女性は体に火を灯した鳥と共に燃え上がった。その姿を涙を

流しそうになっていた。カミューラと同じ様に何か思い入れがあるのだろう。

「最後だ！！クロック・ゴールド・ドラゴンでツヴァイに攻撃！！  
ジエノサイド・イグニッション！！」

「リイン！！」

『は……や……』

クロックが全身の銃身でツヴァイを総攻撃した。  
その光景にはやてが静かに涙を流した

「リイン……リインフォース……うわああああああああ……！！！！！！！！」

「おいおい…殺してねーぞ」

剣賭の言葉に一瞬だけはやてがきよんとした。すると剣都は自分のデュエルディスクから一枚のカードをとりだした。

「時の禁忌で効果を無効にしたモンスターは戦闘では破壊されねーよ。今はダメージで寝てるだけだろうな」  
「グス…どうして……うちはあんたと…」

そう、はやては分からなかった。今まで世界の矛盾と敵対していて、実質リーダー格だった剣都は完膚なきまでにはやてを責めてもおかしくなかったはずだ。

「俺とテメエの戦いにその2体のモンスターは関係ないからな。う

ちのメンツには大切なもん無くした奴が多いからな…そいつみたい  
になつてほしくねエんだよ…」

「剣賭…」

「が、次はねえからな。その時はテメエの大切なものでもぶつ壊さ

…!!?」

「……………?」

剣都はディスクを片づけながらはやての方を向いて固まった。い  
や、はやての後方を見て固まった。

「……………??? (なんや?うちの後ろになんかあるんやr…!!!?!?  
?)」

はやても振り返って固まった。

#### 第四十九話 古の魔法 剣賭VSはやて（後書き）

シゲル「遅かったな」

次の話の区切りができるまであれこれ試行錯誤して作ったら遅くなつた…

剣賭「で、エンシエントモンスターと古の対価って何だ？」

エンシエントモンスターはスピリットモンスターの様な種類のカードと考えてもらったらいい。

全部古の対価で特殊召喚するモンスターでシンクロモンスターだからエクストラデッキ。

イメージとしては融合召喚するシンクロモンスターみたいなものだね。

ツバキ「剣都が作り上げたって修行で？」

そう、5人全員にこんな感じの…5D・sでいうクリアマインドやバーニングソウルみたいな物を付ける気だ。

それと其々の新たな切り札も…ぬふふふ

ユウ「凄い楽しそうだね…」

紫苑「剣都とはやて…では他にも？」

作中にもあつたけど、勝負の順に言つと剣賭VSはやて、ツバキV

Sフェイト、紫苑VSシグナム、シゲルVSリンディ

ユウ「ボクは？」

それはお楽しみ

次回予告：sideツバキ

剣都とはやてが戦っている頃、私はフェイトと対峙していた。

フェイト…あの子は戦いたくないと私に訴えかけた。だけど、私達

がしてる事はそんな甘い言葉が通る訳は無い。

かつてシンクロを持っていないシゲルと同等に渡り合ったフェイトに何処まで行けるか…いや、絶対に勝たなくちゃいけない。新たなデッキと共に…

次回第50話 ダブル ツバキVSフェイト  
最強カードは「魔導龍パイルドラグーン」

感想待ってます！！

第50話 ダブル ツバキVSフェイト(前書き)

等々50話k t k r!!

…記念話は無しで行きまーす……チーム戦もまだ書いてないし

## 第50話 ダブル ツバキVSフェイト

アイオーンの造り出した空間で修行を行った世界の矛盾。それによって新たな力を手にした5人は三幻魔を狙う管理局との戦いに挑む

「ツバキ……」

「さっさと構えなさい」

剣都とはやてがデュエルを始めた同時刻、世界の矛盾との戦いを望んでいないフェイトの前にツバキがやってきた。

「今度は……もう二度と私達の前に現れない様にしてあげるわ」

「ツバキ……！！私はツバキとは戦いたくないんだよ……！！」

フェイトは泣きそうにそう叫んだ。だがツバキはそれを無視するよ  
うに赤いデュエルディスクを起動させ、デッキをセットした。

「……『戦いたくない』。だからなに？」

「え……？」

ツバキの言葉にフェイトは聞き返した。



「戦いたくない…じゃあ戦わないで！！私達と関わらないで！！こ  
う望んでいるのはあなたなのよ！！私達はただ平穩に暮らす事を望  
んでるわ！！それを邪魔してるのは管理局じゃない！！それなのに  
自分が被害者みたいに振舞うな！！」

「ッ……」

そう、戦いを望んでいたのはフェイト自身だった。  
だが彼女はそれに気付かなかった。だから

「…私が勝ったら、話をしてもらおうよ」

「…いいわ、勝つのは私だから」

「デュエル！！」

フェイトのターン

「私のターン！！手札から強欲で謙虚な壺を発動！！デッキの上か  
ら3枚めくり、その中の1枚を手札に加える！！」

そう宣言した時、フィールドに其々分かるように3枚のカードが浮  
かび上がった。

・エンド・オブ・ザ・ワールド

・マンジュゴット

・破滅の魔王 ガーランドルフ

「ガーランドルフを手札に加えソニックバードを通常召喚、効果発動！！召喚成功時デッキの儀式魔法を手札に加える」

フィールドの鷹の様なモンスターはフェイトのデッキの一枚を引っ張り出してきた。

「デッキから高等儀式術を手札に加え、カードを伏せる！！ターンエンド！！」

フェイト

LP4000 手札5枚

ソニックバード（ATK1400）

伏せカード1枚

ツバキのターン

「私のターン！！手札の闇紅の魔導師をコストにワンフォーワンを発動！！デッキからエフェクト・ヴェーラーを特殊召喚！！」

エフェクト・ヴェーラー/ATK0

フィールドに青い髪の少女が現れた。チューナーモンスターであるこのモンスターだけでは終わるはずはなかった。

「墓地のワンフォーワンを除外してマジック・ストライカーを特殊召喚！！」

マジック・ストライカー / ATK 600

今度は星の様なステッキを持った少年が現れた。レベル合計は4

「手札からナイトエンド・ソーサラーを召喚！！」

ナイトエンド・ソーサラー / DEF 400

レベル合計6　しかしナイトエンド・ソーサラーとエフェクト・ヴェーラーは共にチューナーであるためレベル4か5のシンクロモンスターを呼ばなければならなかった。

「…あなたのデッキにレベルのあったシンクロモンスターは入って無い。召喚権もすでに行使してなにを狙っているの…!？」

「新たな力　それを見せてあげるわ」

ツバキはそう言った。一年間の修行で剣都が生み出したのがシンク

口を行わないシンクロモンスター

そしてツバキは

「レベル3のマジック・ストライカーにレベル1のエフェクト・ヴェーラーとレベル2のナイトエンド・ソーサラーをダブルチューニングー！」

「ダブル…チューニング…???」

ツバキの言葉と共に3体のモンスターが飛び上がった。そして2体のチューナーから光色に染まったリングが現れた。

「煉獄に咲きし花よ、現世うつしよに咲きて魔の者を導け！」

3 + 1 + 2 || 6

「シンクロ召喚！！煉獄花ラフレシア・メテオール！！」

フィールドに真つ赤に咲き誇った巨大な花の木が現れた。その蕾の中には花卉のドレスに身を包んだ可憐な少女がいた。

ラフレシア・メテオール / ATK 2600

「ラフレシア・メテオールは召喚成功時、手札の魔法カードを任意の枚数墓地に送り魔力カウンターを乗せる！！手札のテラフォーミングを墓地へ！！」

ラフレシア・メテオール / M0 2

花の前に現れた魔法カードが光の粒子となって吸収された。

「バトル！！ラフレシア・メテオールでソニックバードに攻撃！！  
テンタクルス・ドール！！」

「きゃあ！！」

ソニックバードはラフレシア・メテオールの根が絡みつき、消滅した。

フェイト / LP 4000 2800

「さらにラフレシア・メテオールは戦闘で相手モンスターを破壊した時、乗っている魔力カウンター以下のレベルのモンスターを墓地から特殊召喚することができる！！ナイトエンド・ソーサラーを特殊召喚！！」

れんごくか  
煉獄花ラフレシア・メテオール  
シンクロモンスター

星6 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK 2600 / DEF 2400  
魔法使い族チューナー2体 + チューナー以外のモンスター1体以上  
このモンスターの特殊召喚成功時、手札の任意の枚数の魔法カードを墓地に送ることで

このモンスターに魔力カウンターを墓地に送った枚数×2個乗せる。戦闘で相手モンスターを破壊した場合、このカードに乗っている魔力カウンター以下のレベルの魔法使い族モンスターを特殊召喚することができる。

この効果を発動した場合、特殊召喚したモンスターのレベル分このモンスターに乗った魔力カウンターを取り除く。

ナイトエンド・ソーサラー / ATK 1300  
ラフレシア・メテオール / M 2 0

「ナイトエンド・ソーサラーは特殊召喚成功時相手の墓地のカードを2枚まで除外する、強欲で謙虚な壺とソニック・バードを除外！  
デイモンションサイス！！  
そしてナイトエンド・ソーサラーの直接攻撃！！」

「クッ……！！」



自分フィールド上に「カオス・レッド・ドラゴン」がいる場合のみ発動する事が出来る。

カードを3枚ドロワーして、その後一枚デッキの一番下へ戻す。

このカードを発動するターン自分の「カオス・レッド・ドラゴン」は攻撃を行えない。

「カードを1枚伏せてターンエンド!!」

ツバキ

LP4000 手札1枚

カオス・レッド・ドラゴン（ATK3000）

伏せカード1枚

フェイトのターン

「私のターン!!（カオス・レッド…それにしてもさっきの専用カード…もしかしたら同じ様なカードがまだ残ってるのかも…けど）手札からマンジュゴットを召喚しデッキの救世の美神ノースウエムコを手札に加える!!」

フェイトの場に無数の腕を持つ観音が現れた。そして手札には高等儀式術とガーランドルフがいるため攻撃力アップの生け贄としても使える。

「リバースカード、ナイトメア・デーモンズを発動!!自分の場のモンスター、マンジュゴットをリリースしあなたの場にナイトメア・デーモンズ・トークンを3体特殊召喚する!!」



「私の場のモンスターを増やした…?」

ナイトメア・デーモンズ・トークン / ATK 2000 / DEF 2000

ナイトメア・デーモンズ・トークン / ATK 2000 / DEF 2000

ナイトメア・デーモンズ・トークン / ATK 2000 / DEF 2000

フィールドにひよろひよろの棒人間の様なモンスターが3体現れた。しかしガーランドルフの為だけにこのカードを入れるとは考えられない。

「手札から高等儀式術を発動!! デッキのデュミナス・ヴァルキュリアとハウンド・ドラゴンを墓地に送り手札のガーランドルフを特殊召喚する!!」

ガーランドルフ / ATK 2500

フィールドに狼と人を合わせたような悪魔が現れた。それと同時にガーランドルフは咆哮を上げた。

「ガーランドルフは召喚成功時、フィールドのこのカードの攻撃力以下の守備力のモンスターを全て破壊する!!」

「リバーズカード、紅翼の魂を発動!! 自分フィールド上のレベル8以上のシンクロモンスターの攻撃力を半分にすることで、このターンそのモンスターは破壊されない!!」

## 紅翼の魂

### 通常罠

自分フィールド上の攻撃表示で存在する

レベル8以上のシンクロモンスターを選択し発動する。

そのモンスターの攻撃力を半分にし、このターン戦闘・効果で破壊されない。

この効果で攻撃力が下がったモンスターが戦闘を行った場合、カードを1枚ドロウする。

カオス・レッド・ドラゴン / ATK 3000 1500

「だけどナイトメア・デーモンズ・トークンは破壊される!!そしてナイトメア・デーモンズ・トークンは破壊されると800ダメージを与える!!」  
「キヤアア!!!」

ツバキ / LP 4000 1600

ガイランドルフ / ATK 2500 2800

「バトルフェイズ、ガイランドルフでカオス・レッド・ドラゴンに攻撃!!!」

「っ!!!けど紅翼の魂の効果でカードを1枚ドロウ!!!」

ツバキ / LP 1600 300

ガールランドルフの放った闇の球体を喰らい傷付いたカオスとツバキ。それに心配そうな表情をしてフェイトはカードを1枚伏せた。

「カードを伏せ、ターンエンド!!」

フェイト

LP1500 手札3枚

ガールランドルフ(ATK2800)

伏せカード1枚

ツバキのターン

「私のターン!!」

ドロウしたカードを見たツバキはそのカード、手札のカード、場のカオスで行える最善の手を考えていた。

「ツバキ!!」

「…なに?まだ私のターンだよ」

考えが纏まりかけた時、フェイトが泣きそうにツバキの名を呼んだ。

「ツバキは本当の世界に帰りたくないの!?!」

「…どうしていいの？」

唐突に言った言葉にツバキは呆然としていた。自分はこの世界で育っている。それなのに本当の世界というのは

「ツバキは本当は別の世界にいたんでしょ！！だからこの世界でツバキの戸籍とかないんだよね!？」

「っ…!!」

確かにツバキは記憶を失い、羽黒竜也に引き取られて住民票を作った。しかし戸籍はどうしても用意ができず竜也が自身の妻のを改竄して表向きには『姫野椿』という人物がいるようにしているだけだった。

だから戸籍のデータベースから検索してもツバキの名前は無いのだ。

「調べたのね…私の戸籍」

「うん…それでツバキが本当は「手札からサニー・ピクシー召喚！

！…!!?」

今まで経験していた次元遭難者　フェイトの言っている別の世界にいる人たちは本当は自分の世界に戻りたい人が多かった。

だからツバキもそうだと思っていたフェイトはツバキの言葉に殴られたような衝撃を受けた。まだ戦意を持っているツバキ　　そうな

れば確実に自分の世界に帰れなくなるから

「ツ、ツバキ… どうして…！？ 帰れるのになんで戦うの…！」

「私はこの世界の住人よ…！ 勝手に人の過去に土足で踏み込んでこないで…！ 魔法カード、コールリゾネーターを発動…！」

コールリゾネーター　デッキからリゾネーターを呼ぶカードだ。  
そしてツバキのデッキでリゾネーターは1体しか入っていない。

「クリエイト・リゾネーターを手札に加え特殊召喚…！ レベル8のカオス・レッド・ドラゴンにレベル3のクリエイト・リゾネーターとレベル1のサニークウーニング…！」

「キュアアアアアアアアアア…！」

ラフレッシュ・メテオールの時の様に緑のリングが光に染まっていく。そしてその4つのリングの中央にいるカルマが8つの光となった

「現世に生ける魔導師が祈りがささげる時、魔の扉は開かれる…！ 冥界の龍よ、飛び立て…！」

8 + 3 + 1 = 12

「シンクロ召喚…！ 魔導龍パイルドラゴン…！」

パイルドラグーン / ATK 3400

額に紫色のクリスタルを嵌めこんで体中に七色の結晶が散りばめられた赤い体の巨大な竜が生み出された。その姿はユウのスピットの様な美しさや剣賭のクロツクの様な禍々しさがあった。

「サニーピクシーの効果でライフを回復！！パイルドラグーンはシンクロ召喚成功時、墓地に存在する魔力カウンターに乗せれるモンスターを可能な限り特殊召喚する！！ラフレシア・メテオール！！闇紅の魔導師！！」

『久々の出番だな』

ツバキ / LP 300 1300

ダークがどこか嬉しそうにそう言った。すると現れた2体のモンスターに2つずつ光が舞い降りた。

「そして特殊召喚したモンスターに魔力カウンターを2個乗せる！！」

魔導龍パイルドラグーン

シンクロモンスター

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 3400 / DEF 3000

チューナーモンスター2体 + チューナー以外のドラゴン族モンスター

このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、  
墓地に存在する魔力カウンターを乗せる事が出来るモンスターを可  
能な限り特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターに魔力カウンターを2つ乗せる。  
このカードが破壊され墓地に送られた時デッキから魔法カードを1  
枚選択し、  
手札に加える。

闇紅の魔導師 / M0 2 / ATK1700 2300  
ラフレシア・メテオール / M0 2 / ATK2600

「上級モンスターを一気に3体も…!!?」

「バトルフェイズ!!パイロドラゴンでガーランドルフに攻撃!  
!エターナルマジック!!」

赤黒い光線がパイロドラゴンの口に溜まり、放たれた。そしてそ  
のままガーランドルフを呑みこんだ。

「きゃあああああ!!」

フェイト / LP1500 900

「うう…リバーズ罫!魔鏡の祈り!!攻撃力2500以上の儀式モ  
ンスターが破壊された時、手札の儀式モンスターを儀式召喚するこ

とができる!!」

魔境の祈り

通常罫

自分フィールド上に存在する攻撃力2500以上のモンスターが戦闘で破壊され、

墓地に送られた時発動する事が出来る。

手札の儀式モンスターを1体選択し、そのモンスターと同じレベルになる様に手札・フィールドのモンスターをリリースする。

その後選択したモンスターを1体を特殊召喚する。

(この特殊召喚は儀式召喚として扱う)

フィールドに巨大な鏡が現れ、その中に女神の様なモンスターが映し出された。

「手札の救世の美神ノースウエムコを選択し手札の伝説の爆炎使いを墓地に送る!!儀式召喚、ノースウエムコ!!」

救世の美神ノースウエムコ

儀式・効果モンスター

星7 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻2700 / 守1200

「救世の儀式」により降臨

このカードが儀式召喚に成功した時、

このカードの儀式召喚に使用したモンスターの数まで、

このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するカードを選択して発動する。

選択したカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

このカードはカードの効果では破壊されない。



長い金髪で太陽をモチーフにした杖を握った女性が鏡の中から現れた。

ノースウエムコ / ATK 2700

「ノースウエムコは儀式召喚成功時儀式召喚に使用したモンスターの数までフィールドのカードを選択し、そのカードが存在する限りカード効果では破壊されない！！私は闇紅の魔導師を選択する！！」

「…カードを伏せ、ターンエンド」

ツバキ

LP 1300 手札 0枚

闇紅の魔導師 (ATK 2300) ラフレッシュ・メテオール (ATK 2600) パイルドラグーン (ATK 3400)  
伏せカード 1枚

フェイトのターン

「…(手札はエンド・オブ・ザ・ワールド…たとえデミスが引けても効果使えないから…もう…)」

『フェイト!!』

「アルフ…?」

諦めかけたフェイトに呼び掛ける様にして現れたのは赤い髪の少女だった。

その姿を見たツバキはようやくさっきから感じていた視線に気づいた。

『しっかりして！！あたしのご主人様はこんなところで諦めないよ！！カードも引かず諦めるなんてらしくないよ！！』  
「…うん、私のターン…（！！）」

引いたカードを見てフェイトの顔が笑顔になった。どうやら逆転で  
きる手があるようだ。

「私は手札から儀式魔人アリスを召喚！！」

フィールドに長い金髪の可愛らしい少女が現れた。

アリス / ATK 200

1649

「レベル7のノースウエムコにレベル1のアリスをチューニング！！  
私の言葉を聞きし従者よ、我を守り我と生き続ける！！」

7 + 1 = 8

「シンクロ召喚！！来て、アルフ！！」  
『あいよ…！！』

アルフ / ATK 3000

フィールドにさっきの少女と同じ声の赤い狼が現れた。だが攻撃力

がパイルドラグーンに届かない。

「アルフの効果発動、手札の魔法カードを一枚墓地に送ることでフィールド上のモンスターを1枚破壊する！エンド・オブ・ザ・ワールドを墓地に送りパイルドラグーンを破壊！！」

「くっ…！！けどパイルドラグーンは破壊される時、デッキの魔法カードを1枚手札に加える事ができる！！」

アルフの周囲に無数の橙の鎖が現れ、それがパイルドラグーンに纏わりつくと思わぬように消滅した。

「この効果でモンスターを破壊した時、相手に600ポイントのダメージを与える！！」

ツバキ / LP 1300 700

「バトル！！アルフでラフレシア・メテオールへ攻撃！！ストラゲルバインド！！」

「きゃああ！！」

ツバキ / LP 700 300

さきほどパイルドラグーンを破壊したような鎖がラフレシア・メテオールの根に巻きついた。そしてパイルドラグーンと同じ様に破壊された。

「ターンエンド！！」

フェイト

LP900 手札0枚

アルフ(ATK3000)

伏せカード無し

ツバキのターン

「私のターン！！（あのアルフつての…まだ何か効果を備えているはず…一か八かこのカードをブラフにして…）魔法カードミラクル・シンクロ・フュージョンを発動！！フィールド及び墓地のシンクロモンスターを素材とした融合モンスターの素材を除外して融合を行う！！」

「甘いよ！！アルフは相手ターンで1度だけ魔法カードの発動を無効にして破壊する事が出来る！！発動を無効にしたから魔力カウンターも乗らない！！」

フェイトはアラエルとザフィーラの戦いで残されたデータにあったドラゴフォルテスを危険視していた。この状況であの高レベルモンスターが現れるのなら自身は負けてしまうからだ。

アルフ

シンクロモンスター

星8/地属性/獣族/ATK3000/DEF2400

チューナーモンスター+チューナー以外の儀式モンスター

手札の魔法カードを墓地に送ることで相手フィールド上のモンスターを1体破壊することができる。この効果で相手モンスターを破壊

し、墓地に送った時600ポイントのダメージを与える。  
1ターンに一度自分のメインフェイズのみ発動する事が出来る。  
相手ターンに1度魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊するこ  
とができる。

「…(勝った…)バトルフェイズ！闇紅の魔導師でアルフに攻撃  
！！」  
「！？700ポイント差のダメージを受ければあなたの負けだよ  
！！」

そう、700ポイント差のライフでモンスターの攻撃力を受ければ  
ツバキは終わる。

「速攻魔法アタックダメージ&アタックを発動！！自分のライフ  
が1000以下の時相手の攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う時、  
そのモンスターと攻撃力を同じにする！！」

「それは…ユウのカード!?」

以前讐都との戦いでユウの活路を開いた魔法カードだ。これでモン  
スターの攻撃力を底上げして相打ちを狙うのだが

同時に自分のモンスターを見捨てることになる。

「どうして…!?その闇紅<sup>カード</sup>の魔導師はあなたの大切な…!!」  
「大切だから…そのカードを守って負けるのなら…私はそのモンス

「ターも踏み台にして勝ちを奪いに行く!!」

そう宣言した時には既にダークの持つ三日月の杖に赤黒いエネルギーが溜まっていた。ダーク自身ツバキの勝利の為に自らのダメージなんて考えてはいなかった。

「ごめん…ダーク…ダークレッド・ショックウェイク闇紅の衝撃波!!」

「構わん…ハアアアアアアアアア!!!!」

闇紅の魔導師 / M 2      3 / A T K 2 3 0 0      2 6 0 0      3 0 0 0

「アルフ!!」

「ぐっ…!!不味い…!!!!うわあああああ!!!!」

赤黒い光線によってアルフが消滅した。だが強力な魔法に体が持たなかったのか、ダークもその光線の影響で消滅した。

「アルフ…!!けど、エンドフェイスに上げた攻撃力分のダメージを受けるはず!!どっちにしろあなたには攻撃を行うモンスターはもういない!!」

そう、これで終わるはずだったのだ。

「アタックダメージ&アタックにチェインしてリバース罠、マジシャンズサークルを発動してる！！互いにデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族を特殊召喚できる！！」

「そんな…！！」

ツバキのデッキの魔法使い族は全て儀式モンスターだ。この効果で特殊召喚できるモンスターはいない。

「マジシャンズ・ヴァルキュリアを召喚！！これで終わり…マジック・イリュージョン！！」

「きゃあああああああ！！！！」

フェイト/LP9000

マジシャンズ・ヴァルキュリアの杖の先から光線がフェイトに向かって放たれた。そしてその攻撃を受けたフェイトは吹き飛ばされた。

「フェイト！！」

するとさっきの赤髪の少女が倒れたフェイトに駆け寄った。それを見たツバキはため息を尽きながらその2人に近づいた。

「っ！！フェイトに何をやる気だ！！」

「なにもする気はないよ。けど一つ警告…フェイトが起きたのなら伝えといて」

「…なんだい？」

警戒しながらアルフが聞いた。だが危害を加えるつもりはないと分かったので少し安心していった。

「『あなたに戦いは向いてない。これが最後、次に立ち塞がるのなら容赦はしない』ってね」

ツバキの言葉にアルフはきょとんとしていた。あそこまで毛嫌いしていたツバキがフェイトを見逃すと言ったのだ。

「…どういうつもりだい？」

「あなたを召喚できると分かった時のフェイトの顔…笑っていたから。だから大切なモノを壊したお詫びね。ただそれだけ」

そう言ってツバキは十代達の元へ向かっていた。その後ろ姿を見て居たアルフは、彼女の背後に佇む銀髪ダークの男性がいる様に見えた。



## 第50話 ダブル ツバキVSフェイト（後書き）

今回の話でツバキの力と大切なものを切り捨てる強さを出してみたぜ。

ツバキ「ダブルチューニング…これが私の力…」

剣賭のエンシエントモンスター同様、あまり数が無いけどね。多くて7体と言ったところ。ラフレシア・メテオールは結構出ると思うけど…

剣賭「それにしても圧倒してるな…」

そして残念なお知らせ…紫苑の力が思いつかなかった…

紫苑「え…？」

一応新たな切り札はある、がシンクロモンスターはフロントムとその切り札以外に出す気は無いから…まあ一応ネタはあるけど

シゲル「所で前回もそうだったが…リインやアルフと言ったキャラがカードになってるのはなぜだ？」

デュエリストとして出すのは難しいと考えて…リインフォース姉妹はツヴァイだけだと物足りないからゲスト。一応設定は以下の感じ  
リインフォース及び闇の書の残滓消滅後に生まれたツヴァイ。だが彼女の中には初代リインフォースのバックアップデータが埋め込まれていた。それをもとにはやてが再び復活させた…

という設定を作中にいれなかった…

オリジナルカード紹介…と行きたいですが、あまり番外編でカードを書くのがしんどくなったので今度からは無いです。

ですが、カード効果を書く場合はそれがオリジナルカードです。

ユウ「次は紫苑VSシグナムだね」

次回予告：side紫苑

私の前にはシグナムが立っている。

彼女は話し合うより戦い合う方が楽だと言っていました。

それなら…私も応えるだけです。

シグナムの新たなモンスターと召喚された総大将に私は追い詰められました。

残された手は デッキの20枚ほどの中のあのカードを引くしかない…！！

次回第51話 英雄集結 紫苑VSシグナム  
最強カードは『E・HEROシャイニング』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8336q/>

---

遊戯王GX～ノーバディ・レコード～

2011年12月25日23時56分発行